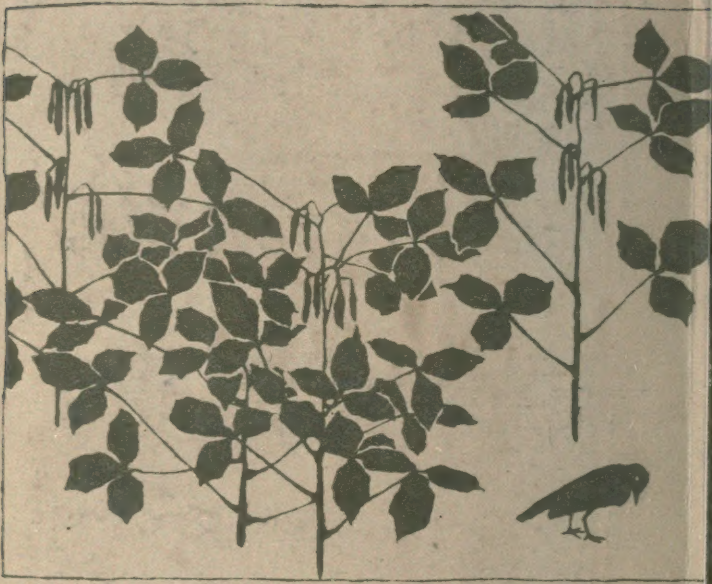
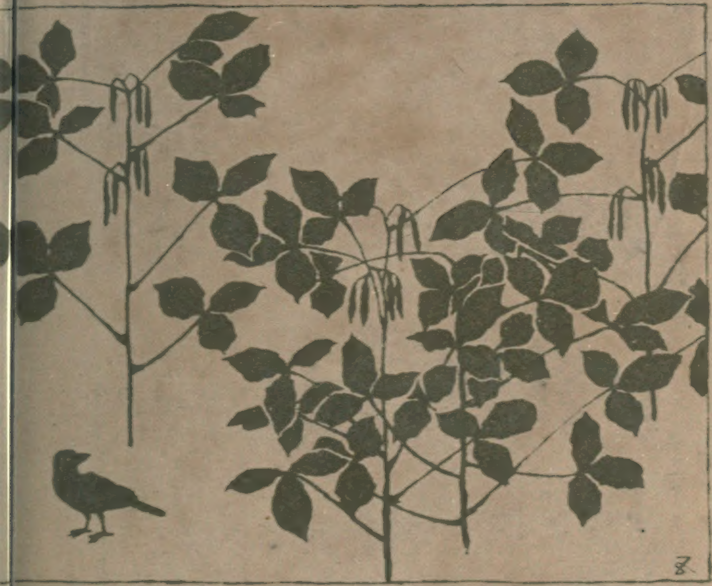
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03033 8644





㋕

明治四十五年五月二十日印刷
明治四十五年五月廿三日發行

太平記上卷
定價金八拾五錢

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　野村宗十郎
印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店
大賣捌所　東京市神田區裏神保町一番地　三省堂書店
同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

自殺　五三〇ノ一一
○和田孫三郎——正成に建策　一五〇ノ一二
○亙理新左衞門
三井寺攻めの活動　四七六ノ一三
綸旨の使　六二三ノ　三

太平記上卷索引　終

數ならぬ（帥宮）　五〇二ノ一四
歸るべき（具行）　八八ノ七
木津川の（落首）　六四ノ一四
君が住（道眞）　三五五ノ一三
君が代は（周防内侍）　五一三ノ二
草も木も（朝雄）　五五三ノ二
黒髪の（藤房）　九三ノ四
けふのみと（具行）　八八ノ九
賢王の（狂歌）　四四九ノ一三
東風吹かば（道眞）　三五五ノ一
此上の（中宮）　一〇〇ノ一
さして行（後醍醐帝）　七五ノ四
知せばや（一の宮）　六四六ノ三
住捨る（藤房）　三九二ノ五
住なれぬ（後醍醐帝）　七八ノ三
せき留る（一の宮）　九六ノ五
立ぬべき（御匣殿）　六四六ノ六
誰見よと（貞俊の妻）　三四〇ノ一二
契あれば（國夏）　二四ノ九
つくづくと（八歳の宮）　九五ノ一一
造るとも（蝕）　三六〇ノ一一
長かれと（宣房）　八八ノ一
流行く（道眞）　三五四ノ七
涙ゆゑ（後醍醐帝）　七八ノ五
馴々て（雅經）　九五ノ五
花咲かぬ（人見四郎）　一六五ノ一
波母山や（傳教大師）　六六二ノ一一
二筋の（落首）　五〇〇ノ五
故郷に（寂阿）　三二六ノ一一
將門は（落首）　五五三ノ一三
まてしばし（本間資貞）　一六五ノ四
まてしばし（信忍）　二九七ノ九
廻り來て（夢中に現じたる翁）　一四五ノ五
皆人の（貞俊）　三四〇ノ八
都をば（能因）　九四ノ一〇
陸奥の（圓觀上人）　三〇ノ一一
山がらが（落首）　六〇一ノ一
山を我（落首）　四七八ノ九
よそにのみ（顯案）　一八一ノ一
我袖の（義貞）　七二二ノ一
忘ずば（三位局）　一四四ノ一二
渡邊の（落首）　一四九ノ七
○脇屋義助
擧兵の建議　二七五ノ八
竹の下の奮戰　四三八ノ七
足利軍を防ぐ　四五一ノ一三
任官　五〇〇ノ七
義貞を諫む　五一六ノ七
長子義治を預く　六〇六ノ二
光氏に敎はる　六〇六ノ一四
三峯に出陣　六七〇ノ七
鯖江に戰ふ　六七一ノ六
府に歸る　七二〇ノ四
○和田近江守―八幡に戰ふ　六九四ノ六
○和田範家―重氏に敎はる　五三一ノ七
○和田範長
其子高德を勵ます　五一九ノ一三
奮戰　五二九ノ九

○良忠（殿法印）
六波羅にて辯疏 九〇ノ一
尊氏を讒す 三七六ノ八
○驪姫—讒言 三七九ノ一〇

ロ

○六波羅
齋藤利行の密告 一五ノ二
土岐、山本を討つ 一五ノ一二
小串、多治見を討つ 一六ノ一〇
比叡山を攻む 五二ノ三
持明院御幸 五六ノ三
笠置山を攻む 六四ノ五
急使來る 六八ノ一〇
天皇幽閉 七六ノ一二
四人の所刑 八七ノ五
當局者の交迭 一四五ノ一二
降人を斬る 一六八ノ九
急使來る 一八七ノ三
摩耶城を攻む 一九九ノ四
赤松圓心來襲 二〇四ノ三
赤松を追ふ 二一三ノ七
山徒來襲 二一六ノ七
山崎八幡軍の來襲 二一九ノ一二
忠顯來襲 二二七ノ五
神社佛閣を燒く 二三二ノ七
籠城 二四七ノ八
聯合軍を襲ふ 二五一ノ一
宮々女房落つ 二五七ノ一
炎上 二六〇ノ一
仲時以下自殺 二六七ノ六
○六波羅の戰
第一回 赤松圓心來襲 二〇三—二一一
第二回 赤松圓心來襲 二一九—二二六
第三回 千種忠顯來襲 二二七—二三一
第四回 聯合軍來襲 二四七—二六〇

ワ

○和歌及落首
明日よりは（一の宮） 九六ノ一四、
東路の（長者の女） 三三ノ六
東路の（國夏） 九五ノ三
哀なり（公宗） 三九八ノ一二
いかにせん（藤房） 七五ノ六
僞を（春日局） 四〇一ノ一〇
古も（後基） 三四ノ四
祈る共（一の宮） 六四二ノ五
今までは（妙法院二品親王） 九六ノ一二
疑は（落首） 五五五ノ三
うたゝねの（基久） 五〇四ノ五
大かたの（祐覺） 六〇一ノ九
多く共（高駿河守） 五八二ノ四
思ひかれ（伏見宮） 五〇二ノ一一
思ひきや（爲明） 二七ノ三
思ひやれ（中宮） 七八ノ五
書置し（左衞門佐局） 一九三ノ九
かくばかり（落首） 四五一ノ四
懸も得ぬ（落首） 六五ノ三

モ

○孟津の白魚　六一一ノ一一
○木工頭孝重―公宗の哭
　を知る　四〇二ノ二
○基久の女―戀物語　五〇一ノ五
○文觀僧正
　逮捕　二六ノ二
　略傳　二八ノ一
　上洛　三四六ノ九
　奢侈　三六四ノ一〇
○桃井塚　六九四ノ五
○桃井直常、直信
　青野原に戰ふ　六八七ノ五
　般若坂に戰ふ　六九二ノ一一
○師賢
　天子の身代り　五一ノ二
　身代り露顯　五七ノ三
　流罪及出家　九一ノ六

ヤ

○野木與一頼玄―橋桁渡　四五五ノ八
○矢矧の戰　四二九―四三〇
　義貞、義助―長濱六郎―吉良、
　土岐、佐々木―鎌倉勢引退
○八幡山の戰
　顯家、顯信―桃井兄弟―師直―　{六九三―六九四
　顯家最後―師家火を放つ―高　　七〇五―七〇七
　木、松山―官軍退去
○山崎の戰
　第一回　赤松　二一三―二一四
　第二回　名越　二三九―二四〇
　第三回　新田　四五七―四五九

ユ

○湯淺孫六―降服　一四六ノ一四
○結城道忠
　南朝の建議　七二六ノ四
　末期の惡念　七二八ノ九
　平素の擧動　七二九ノ四
　地獄の苛責　七三〇ノ六
○結城親光―詭計、戰死　四六三ノ八
○由良光氏
　義助を救ふ　六〇八ノ二
　最後の奮戰　六三七ノ一一

ヨ

○吉野
　大塔宮、城を構ふ　一四二ノ七
　主上の臨幸　六二〇ノ四
○吉野城の合戰　一六八―一七四
　道蘊來襲―岩菊丸の夜討―大塔
　宮奮鬪―木寺相摸戰中の舞―大
　塔宮退去―村上戰死―義隆戰死
○義治
　義鑑房に預けらる　六〇六ノ二
　大將となる　六二五ノ四
　不興　六二七ノ六
○淀の戰―義顯の苦戰　四五九ノ四

リ

○劉備、曹操、孫權　七一〇ノ二

ハ

○箱根竹下の戰　四三五—四四〇
尊氏、直義の出陣—道場坊祐覺等の奮戰—十六騎の蕪—官軍色めく—脇屋義助奮戰—義助の二度の斷—大友、鹽冶降伏—官軍退敗

○畠山修理大夫—正成と戰ふ　四九一ノ二

○秦武文—御匣殿を護り奮戰　六四九ノ六

○畑六郎左衛門—三井寺攻の活動　四七六ノ一三

○般若寺—大塔宮忍び給ふ　一二八ノ六

○頓宮又次郎—子息孫三郎等と奮戰　二二二ノ六

○范蠡　一〇三ノ一四

ヒ

○比叡山、大衆
後醍醐帝の行幸　二三ノ一〇
大講堂の緣起　二三ノ一〇
師賢の登山　五一ノ二
六波羅との合戰　五二ノ三
身代りの露顯　五七ノ三
常燈の由來　一二三ノ一一
六波羅を攻む　二一六ノ二
衆徒二派に分る　二一九ノ八
後醍醐帝の行幸　四六一ノ三
衆徒の天皇守護　四六六ノ三
後醍醐帝の臨幸　五四八ノ一〇
足利軍の來襲　五九七ノ四
京都を攻む　五七三ノ一〇
後醍醐帝の恩賞　五七六ノ三
南都興福寺に移牒　五七七ノ五
志を寄する者多し　五八〇ノ一〇
諸將引退　五九〇ノ五
天皇還御、諸將落つ　五九八ノ五
開闢の由來　六六〇ノ三
武家の寄進　六六五ノ八
義貞の牒狀及返書　七〇一ノ一一

○人見四郎—戰死　一六〇ノ三

○兵庫の大會戰　五三六—五四五
尊氏軍來襲—官軍の部署—本間孫四郎の遠矢—經島の合戰—正成の戰死—義貞の敗北

フ

○普恩寺入道（信忍を見よ）

○福嚴寺—後醍醐帝行幸　三二二ノ二

○福山の戰　五二五—五二七
大江田の意見—直義來攻—大江田の奮戰—大江田三石に落つ

○藤島の戰　七一六—七一七
義貞の來襲—義貞の戰死

○藤房
南都北嶺行幸の議　二三ノ二
南都行幸の議　四九ノ九
天皇に侍し笠置落　七四ノ四
左衛門佐局との戀　九二ノ五
上洛　三四六ノ六

大渡の防戦　四五二ノ五
大渡を棄て歸洛　四五九ノ三
三井寺を攻む　四八二ノ一〇
尊氏を破る　四八四ノ一
細川定禪に破らる　四八七ノ七
尊氏を逸す　四九二ノ四
凱旋　四九九ノ六
兄弟の任官　五〇〇ノ六
愛に溺れ出征遲る　五一三ノ七
征西　五一五ノ一
赤松圓心に欺かる　五一五ノ五
船坂を攻む　五一七ノ二
杉坂、船坂、三石の大勝　五二〇ノ九
美濃權介佐重の降伏　五二一ノ一一
尊氏東上の報　五二八ノ一
兵庫に著す　五三二ノ六
正成に對面　五三五ノ二
尊氏と會戰　五四五ノ九
足利軍と四明に戰ふ　五六二ノ一〇
京都の苦戰　五七五ノ七
後醍醐帝に謁す　五八二ノ八
京都に押寄す　五八六ノ一
敗北　五八九ノ一三
佐々木入道道譽に欺かる　五九二ノ九
參內　五九六ノ六
日吉大權現に詣づ　五九七ノ一二
春宮を奉じ北國に落つ　五九八ノ六
雪中の艱苦　六〇二ノ四
金崎城に入る　六〇三ノ七
雪中の船遊　六一一ノ四
杣山に落つ　六三四ノ二
府城を落す　六七四ノ一
足羽城を攻む　六九九ノ八
越後勢の亂暴　六九九ノ七
宸筆の勅書　七〇〇ノ六
山門に牒狀　七〇一ノ一一
夢想及齋藤道猷の判斷　七〇九ノ七
乘馬狂ふ　七一五ノ一
藤島城に向ふ　七一六ノ四
自殺　七一七ノ二
諸將の離散　七一九ノ一〇
勾當內侍との戀　七二一ノ七
○二萬の里—由來　五一二ノ一四

ヌ

○奴可八郞—六波羅に歸る　二四三ノ一

ノ

○野中貞國—中村六郞を助く　六一五ノ一
○野長瀨六郞、七郞—大塔宮を助く　一四一ノ二
○宣房(萬里小路大納言)
勅使として關東に下向　二一ノ一
囚人となる　八七ノ六
光嚴帝に仕ふ　一二二ノ四
夢想　三九二ノ一三

○中院中將定平—南都に出陣　三三六ノ一一
○中山光能—瀬河宿に戰ふ　二〇二ノ一
○長濱—最後の奮戰　六三七ノ一一
○中村六郎—野中の救ひ　六一四ノ一三
○名越越前守—千劍破攻の失敗　一七七ノ二
○名越越中守護時有
弟、甥と共に妻子を海に沈む　三三四ノ三
三人の燒死　三三五ノ七
怨靈　三三五ノ七
○名越尾張守高家
大將として上洛　二三五ノ三
山崎攻を議す　二三九ノ八
戰死　二四一ノ一四
○名越時兼
北國大將となる　三九四ノ一四
戰死　四一四ノ一四
○南都（興福寺を見よ）
○南都の戰
金剛山の寄手—定平、正成—敵將降伏　三三六—三三八
○名和長年
船上山に擧兵　一九三ノ九
船上山に戰ふ　一九五ノ一四
西園寺公宗を斬る　三九九ノ七
尊氏の軍を防ぐ　四五一ノ五
歸洛　四六一ノ一二
戰死の覺悟　五八二ノ一三
戰死　五八九ノ一二

ニ

○二階堂出羽入道（道蘊を見よ）
○錦織判官代—戰死　七三ノ一一
○新田德壽丸
擧兵　六八二ノ四
青野原に戰ふ　六八七ノ一
○新田義顯
苦戰　四五九ノ五
最後　六三六ノ三
○新田義貞
綸旨　一八三ノ九
鎌倉の使者を斬る　二七四ノ一一
生品明神に擧兵　二七六ノ五
越後勢來る　二七六ノ一一
久米河分陪に戰ふ　二七九ノ一一
三浦義勝來歸　二八一ノ五
鎌倉を攻む　二八五ノ八
龍神に祈る　二九〇ノ六
鎌倉平定　三一五ノ一
上洛　三六三ノ一
尊氏と確執　四一七ノ七
尊氏等誅伐を乞ふ上表　四二〇ノ七
尊氏追討の命　四二三ノ一二
都を立つ　四二四ノ一〇
伊豆の府に著す　四三一ノ一四
箱根を退く　四四一ノ一一
天龍河の浮橋　四四四ノ七
歸洛　四五〇ノ五
防禦軍の部署　四五一ノ五

○時政—示現　一二七ノ四
○時行（亀壽及中前代の亂參照）
　關東の將となる　三九四ノ一三
　鎌倉に戰ふ　四〇四ノ八
　南都の勅免　六七九ノ二
　鎌倉攻　六八三ノ一〇
○土岐賴員—密謀の漏洩　一三ノ六
○土岐賴遠
　官軍を追ふ　五八八ノ一二
　顯家と戰ふ　六八七ノ五
○土岐賴直（惡源太を見よ）
○後基
　籠居　九ノ九
　第一次關東下向　一九ノ一〇
　關東の赦免　二二ノ二
　第二次關東下向　三二ノ三
　後藤助光尋ね下る　四五ノ四
　最後　四六ノ一三
○十津川—大塔宮來る　一三一ノ一三
○利根河の戰　六七九—六八一
　顯家—義詮—齋藤實永—鎌倉勢引退
○具行—最後　八八ノ四

ナ

○長井齋藤別當（齋藤實永を見よ）
○長岡六郎—小貳に使す　三二七ノ一〇
○中吉十郎—六波羅に歸る　二四三ノ一
○中吉彌八—主上（光嚴院）を落す　二六一ノ六
○長崎圓喜
　子息新左衞門の對朝廷政策　三五ノ一三
　足利尊氏の異心看破　二三六ノ六
　最後　三一三ノ三
○長崎勘解由左衞門—父との訣別　二九四ノ三
○長崎左衞門（惡四郎）
　西上の行粧　一五九ノ三
　千劒破を攻む　一七六ノ五
　尊氏長男竹若を刺殺す　二七四ノ一
　誅せらる　三三八ノ一二
○長崎三郎思元—奮鬪　二九三ノ一〇
○長崎二郎高重
　久米河の殊勳　二八四ノ一
　最後の奮戰　三〇七ノ一二
　自害　三一二ノ七
○中前代（時行）の亂
　第一回　四〇四—四一四
　時行來攻—直義敗走—尊氏出征—直義引返す—名越式部大輔—佐夜の中山—本軍退敗—諸將の最後
　第二回　六八二—六八四
　時行、德壽丸等蜂起—義詮訓言—時行等來攻—鎌倉落城
○仲時
　妻との訣別　二五八ノ一
　六波羅落　二五九ノ一一
　篠原宿の雜戰　二六四ノ九
　自害　二六七ノ六

く戰ふ
○持明院
六波羅御幸 五六ノ三
內裏に入る 七九ノ一
卽位 一二一ノ一
六波羅行幸 二〇七ノ六
六波羅落 二五七ノ一〇
流矢に中る 二六一ノ一
囚はる 二七〇ノ一
尊氏に院宣 五二三ノ一二
東寺へ潛幸 五五〇ノ七
卽位 六六七ノ一
○忠圓僧正
逮捕 二六ノ二
上洛 三四六ノ九
○朝敵沿革 五五一ノ五
○趙盾智伯 六三〇ノ一四

ツ

○月毛の馬―進獻 三八三ノ三
○筑紫の戰 三二四―三二八
小貳、大伴、菊池の密謀―殿中
の大蛇―英時戰死

テ

○程嬰杵臼 六三一ノ二
○手越河原の戰 四三一―四三二
新田軍の夜討
○豐島河原の戰 四九六―四九九
顯家、義貞―直義―正成―直義
退却―尊氏退却
○天台座主―伊勢に落つ 二六三ノ四
○天王寺
正成隅田の戰 一四九ノ一
上宮太子の未來記 一五四ノ一一
○天王寺の戰 一五〇―一五三
宇都宮―和田孫三郎―正成引退
―宇都宮引退
○天龍川―浮橋 四四四ノ九

ト

○道蘊
高時苦諫 六一ノ三
朝廷征討に反對 三六ノ四
大塔宮を討つ 一六九ノ一
高野及千劔破城に轉
戰 一七五ノ二
降服、出家 三三七ノ八
所刑 三三九ノ一
○春宮
氣比太郎に救はる 六三六ノ一〇
島津忠治に迎へらる 六三八ノ一一
薨去 六七六ノ三
○東寺―尊氏居城 五五四ノ一一
○道場坊祐覺―同宿の奮
戰 四三六ノ六
○東大寺―緣起 二三ノ五
○土岐十郎―戰死 一六ノ三
○時知(常陸前司)―摩耶
城を攻む 一九九ノ四
○時直(長門探題)
敗戰 一八七ノ六
降服 三二九ノ一二

戰ふ 六九二ノ一四
○尊良親王（一の宮中務卿）
生立 七ノ一
配流 九五ノ一二
竹の下に戰ふ 四三七ノ八
北國落 五九八ノ一二
御最後 六三五ノ一四

タ

○大塔宮（オの部に出づ）
○大佛貞直—最後 二九六ノ五
○內裏—失火の沿革 三五〇ノ一二
○高木三郎—先陣 六八〇ノ一二
○高木十郎—八幡の功名 七〇六ノ四
○高時
虐政 三ノ六
告文の返進 二一ノ一二
僧侶召捕 二五ノ八
天皇讓位の議 三五ノ一〇
討手西上 六九ノ七
淫樂（田樂と鬪犬） 一二四ノ六
大擧上洛せしむ 一五七ノ五
再び大擧上洛せしむ 二三五ノ二
義貞征討 二七五ノ四
島津四郎に名馬を與ふ 二九一ノ一二
自害 三一三ノ一四
○高橋又四郎
笠置の拔懸 六四ノ六
天王寺の敗北 一四九ノ一
敵の贄首 二一二ノ二
○高松賴重—急使 四四六ノ七
○竹原八郎—忠節 一三五ノ五
○玉置庄司—大塔宮を討つ 一三九ノ二
○多々良濱の戰 五〇八—五一二
菊池出陣—直義諫言—白矢の奇端—松浦、神田降伏—菊池敗死—高駿河守の引例
○多治見四郎—戰死 一八ノ一二
○田中盛兼—弟盛泰等と奮戰 二二二ノ七
○谷堂—由來 二三二ノ一〇
○俵藤太秀鄉—傳說 四七八ノ一一
○爲明—六波羅の敷問 二六ノ一〇

チ

○千種忠顯
主上と隱岐遁走 一九〇ノ六
六波羅を攻む 二二六ノ七
奢侈 三六四ノ四
山門に戰ふ 五六一ノ一
○千葉貞胤
三浦義勝と確執 三六二ノ一〇
高經に降る 六〇三ノ四
○千葉新介—戰死 四七五ノ一
○千劍破城の合戰 一七五—一八三、一八五—一八六、二七一—二七二
敵軍來襲—水攻の議—名越越前守の失策—曠日彌久の計—人形の計—名越一族の同士打—梯攻の計—退却、醍醐—紀清兩黨能

○鹽田道祐、俊時—自害　二九八ノ一
○設樂、齋藤—一騎打　二五一ノ五
○篠塚
　義貞を救ふ　四四二ノ一〇
　三井寺攻の活動　四七六ノ一
○島村安藝前司—奮戰　二二二ノ二
○島津四郎—名馬白波、
　降伏　二九一ノ八
○申生、重耳、夷吾　三七九ノ七
○神泉苑—由來　三七一ノ一
○信忍—自害　二九七ノ四
○周穆王　三八四ノ六
○十六騎の黨　四三七ノ三
○後明極—後醍醐帝と問
　答　九八ノ四
○承久の亂　二ノ四
○小貳、大伴
　叛服　三二四ノ五
　小貳菊池と戰ふ　五〇七ノ二
　小貳の死　五〇七ノ一〇
○諸葛孔明　七一〇ノ八
○書寫山
　後醍醐帝行幸　三二〇ノ八
　寶物　三二〇ノ九
　赤松圓心來攻　五一四ノ九
○白波(名馬)　二九一ノ一三

ス

○菅原道眞　三五一ノ七
○佐重—降服　五二一ノ一一
○資朝
　無禮講　一〇ノ五
　關東下向　一九ノ一〇
　佐渡流謫　二三ノ三
　其子阿新尋ね下る　三八ノ六
　最後　三九ノ一一
○資名卿—出家　二七〇ノ四
○隅田、高橋
　天王寺の敗戰　一四七ノ一三
　六波羅に戰ふ　二〇八ノ二
　敵の質首　二一二ノ二
○諏方盛高—龜壽を具し
　遁る　三〇四ノ四
○住吉天王寺の戰
　楠出陣—隅田高橋退敗　一四七—一四九
○陶山次郎
　六波羅戰爭の活動　二〇八ノ四
　任備中守　二一一ノ一三
　山崎八幡軍と戰ふ　二二一ノ四
　名和、兒島と戰ふ　二二九ノ一〇

セ

○瀨河の戰　二〇一—二〇三
　七騎の奮戰—六波羅勢退却—赤
　松追擊

ソ

○僧侶間の確執
　大乘院と六方の大衆　四八ノ一
　山門と寺門　四六七ノ五
　高野と根來　六二〇ノ一〇
○楚王と眉間尺　四〇八ノ二
○曾我左衛門尉—八幡に

○小見山次郎—笠置の夜討　七〇ノ七

サ

○西園寺公宗
陰謀　三九四ノ一二
露顯　三九六ノ七
弟俊季逐電　三〃六ノ九
妻との訣別　三九七ノ一四
長年に斬らる　三九九ノ四
若君誕生　四〇〇ノ五
孝重、公宗の災禍を前知　四〇二ノ二
○齋藤玄基—奮戰　二五一ノ一二
○齋藤實永—先陣、最後　六八〇ノ六
○齋藤道獻—義貞の夢を占ふ　七〇九ノ一二
○齋藤利行—關東征討の計密告　一五ノ二
○佐介貞俊
流落及死　三三九ノ九
妻の死　三四〇ノ一〇
○相摸次郎時行（時行を見よ）
○相摸太郎邦時—宗繁の反忠、最後　三一六ノ六
○櫻井驛の訣別　五三四ノ三
○左近大夫入道
盛高に其子龜壽を托す　三〇三ノ七
奥州落　三〇六ノ一二
○佐々木彈正左衞門尉—西園寺殿に賴る　三九三ノ一〇
船上來攻、戰死　一九四ノ一一
○佐々木時信
摩耶城を攻む　一九九ノ四
六波羅落　二六四ノ一一
降服　二六六ノ一三
○佐々木道譽
相摸川に戰ふ　四一四ノ三
詭計官軍を退く　五九二ノ四
○佐々木義綱—後醍醐帝を救はんとす　一八八ノ六
○佐渡前司—降服　一九五ノ一〇
○里見伊賀守—金崎の後攻、戰死　六二八ノ三
○三位局
天皇の寵　六ノ三
憂愁及北野參籠　一四三ノ五
夢想　一四四ノ一三
○山門の戰　五五七—五七二
足利軍來襲—寄手の躊躇—高豐前守の下知—三面攻擊—秦氏、定範—大講堂の鐘合圖—吉直、石堂—義貞大勝—熊野の八庄司—本馬、相馬の弓勢—山徒の使者—隆賢斬らる—童の物狂—猿鐘を搗く—寄手敗北—高豐前守斬らる
○佐用範家—名越高家を射る　二四一ノ一〇

シ

○鹽飽忠賴—自害　二九九ノ九

卽位及夏政　三ノ一一
關所停止及仁政　四ノ三
裁斷　四ノ一一
立后　五ノ五
三位局の寵愛　六ノ三
各皇子　七ノ二
立太子　七ノ一〇
關東調伏の祈禱　八ノ七
關東へ告文を賜ふ　二〇ノ一一
東大寺、興福寺及比叡山行幸　二三ノ一
都落　四九ノ一三
笠置の靈夢　六一ノ五
笠置落　七四ノ一
深須、松井に捕はる　七五ノ八
神器相傳を拒む　七七ノ一
六波羅に囚はる　七七ノ八
出家を拒む　九七ノ一三
俊明極との問答　九八ノ五
中宮の惜別　九九ノ五
隱岐へ還幸　一〇〇ノ五
隱岐の幽閉　一一八ノ一三
隱岐を遁出づ　一八九ノ一一
名和長年をたよる　一九三ノ六
金輪法を修す　二二六ノ四
光守の諫言　三一九ノ一
船上より還御　三一九ノ一二
書寫山行幸　三二〇ノ八
福嚴寺御滯在　三二二ノ一
赤松圓心來る　三二二ノ二
義貞の捷報　三二二ノ六
還幸　三二三ノ四
足利兄弟任官　三二三ノ一〇
大塔宮の武備を責む　三四三ノ九
中宮東宮薨去　三四八ノ七
大裏造營　三四九ノ一
神泉苑修造　三七〇ノ一二
大塔宮を流す　三七九ノ一
龍馬進獻　三八三ノ三
公宗叛意の夢想　三九五ノ七
尊氏に片諱を賜ふ　四一二ノ三
時行征討　四一二ノ五
尊氏征討　四二三ノ一二
山門に遁る　四六〇ノ三
願書を大宮に捧ぐ　四六五ノ三
定宗來歸　四六五ノ六
還御　四九九ノ一二
基久の女　五〇一ノ五
東坂本へ臨幸　五四八ノ一〇
東坂本へ賞典　五七六ノ三
御袴の切を兵卒に賜ふ　五八二ノ七
尊氏の密使　五九三ノ六
義貞へ勅使　五九六ノ七
儲君を立つ　五九七ノ七
還幸　五九八ノ五
僞物の神器を授く　六〇〇ノ五
花山院にての御憂悶　六一七ノ二
景繁の密奏　六一七ノ一二
都を遁る　六一八ノ一〇
吉野に入り給ふ　六二〇ノ四
第八の宮を奧州へ下す　七二六ノ一

忠顯等の奢侈　三六四ノ四
改元　三六八ノ五
大塔宮流謫　三七九ノ一
藤房苦諫、惡政指摘　三八六ノ九
藤房致仕　三九一ノ四
西園寺公宗の叛　三九四ノ一二
中前代の亂　四〇四ノ四
尊氏義貞の確執　四一七ノ五
尊氏征討　四二三ノ一二
義貞敗軍　四四一ノ一一
朝敵蜂起の急使　四四六ノ七
後醍醐帝山門に遁る　四六〇ノ三
帝都の頽廢　四六二ノ六
後醍醐帝再び山門に遁る　五四八ノ九

コ

○項羽　五八ノ一〇、二五八ノ一四
○豪鑁、豪仙—戰死　二一八ノ二
○厚東駿河守—八幡の戰　六九四ノ五
○勾當の內侍
義貞の寵　五一三ノ七
生立及義貞との戀　七二〇ノ一〇
出家　七二五ノ八
○河野九郎
六波羅戰の活動　二〇八ノ八
任對馬守　二一一ノ一三
山崎八幡の軍と戰ふ　二二一ノ四
名和、兒島と戰ふ　二二九ノ一〇
猶子七郎討たる　二五二ノ一一
○高駿河守—引例　五一二ノ三
○高豐前守
山門戰の下知　五六〇ノ四
斬らる　五七二ノ一一
○高師直(武藏守)
大渡に兵を戒む　四五四ノ六
京都の戰に敗走　五八四ノ一
八幡山に戰ふ　六九三ノ一二
八幡を燒く　七〇五ノ九
○高師泰(越後守)
金崎を攻む　六三四ノ八
黑地川に出陣　六八八ノ一一
○興福寺
緣起　二三ノ五
後醍醐帝の行幸　二三ノ七
延曆寺へ返牒　五七九ノ三
延曆寺との違約　五九〇ノ一一
○吳越の戰　一〇三ノ六
○越生四郎—顯家を討つ　六九四ノ一四
○兒島高德
鳳輦を奪はんとす　一〇二ノ七
櫻樹に題詩　一〇三ノ三
六波羅を攻む　二二九ノ九
大將の臆病を憤慨す　二三一ノ九
苦戰の上奏　四四七ノ五
熊山に擧兵　五一八ノ一四
負傷、父の訓戒　五一九ノ九
僧寺に預けらる　五二九ノ七
父和田範長の奮戰及自殺　五二九ノ九
義貞に建議、牒狀　七〇一ノ一
○五大院宗繁—反忠　三一六ノ六
○後醍醐天皇

○清忠
大塔宮へ勅使 三四三ノ八
尊氏義貞奏狀につき論議 四二二ノ一三
正成の議に反對す 五三三ノ九

ク

○空海と守敏 三七一ノ四
○久々知酒部の戰 二〇〇—二〇一
赤松入道出陣—苦戰
○久下彌三郎時重
足利氏に降る 二四四ノ四
弟長重の戰死 四五三ノ八
○楠正成
生立 六二ノ八
笠置の勅諚 六三ノ一
赤坂城に楯籠る 七九ノ九
赤坂城を落つ 八四ノ一三
湯淺孫六を攻む 一四六ノ五
隅田高橋と戰ふ 一四七ノ八
宇都宮と戰ふ 一五一ノ一一
未來記披見 一五四ノ一一
千劍破城を守る 一七五ノ九
後醍醐天皇奉迎 三二二ノ一二
南都の平軍を攻む 三三六ノ一二
尊氏の軍を防ぐ 四五一ノ八
上杉、畠山を退く 四九一ノ二
義貞に退却をすゝむ 四九二ノ一〇
尊氏を逐ふ 四九三ノ一〇
尊氏征討の建議 五三三ノ一一
櫻井驛の訣別 五三四ノ三
義貞と對面 五三五ノ二
戰死 五四三ノ三
○熊野—大塔宮來る 一三〇ノ五
○阿新
父資朝を尋ね下る 三八ノ二
本間三郎を殺す 四一ノ七
山伏に助けらる 四三ノ三
○栗生—三井寺攻活動 四七六ノ一
○栗生左衛門
金崎の奇計 六〇九ノ五
奮戰 六一四ノ一
○黒地川の戰 六八九—六九一
足利軍出陣—顯家退去

ケ

○解脫上人—夢想 三六五ノ七
○氣比太郎—春宮を救ひ
自害 六三六ノ一四
○玄慧法印
無禮講の談義 一一ノ二
比叡山開闢の談義 六六〇ノ一
○建武中興
大塔宮の武備 三四三ノ六
人々の上洛 三四六ノ四
論功行賞
第一次上卿實世卿 三四七ノ一
第二次上卿藤房卿 三四七ノ五
第三次上卿光經卿 三四七ノ八
決斷所設定 三四八ノ二
大裏造營 三四九ノ一
天下安鎭の法 三六二ノ一
諸將任官 三六三ノ三

〇干將鏌鎁—由來　四〇六ノ一四
〇韓退之、韓湘　一一ノ五
〇關東征討の計畫
　調伏の祈禱　九ノ一
　俊基の籠居　九ノ一〇
　無禮講　一〇ノ五
　計畫の露顯　一四ノ八
〇海東—戰死と其子幸若　五三ノ一
〇快賢—奮鬪　五三ノ八
〇漢の文帝　三八六ノ一二
〇龜壽（中前代の亂及時行參照）
　諏方盛高に救はる　三〇四ノ四
　二位局及乳母の愁歎　三〇四ノ九

キ

〇義鑑房
　義治を預る　六〇四ノ一三
　義治を慰む　六二七ノ六
　戰死　六二九ノ三
〇菊池寂阿
　探題英時を攻む　三二五ノ七
　戰死　三二六ノ四
　其子武重　三二六ノ一二
〇菊池武俊
　小貳太郎を遮る　五〇六ノ七
　妙慧を破る　五〇七ノ二
　尊氏と戰ふ　五〇八ノ二
〇紀信—身代となる　五八ノ一四
〇紀清兩黨
　楠氏と戰ふ　一五二ノ四
　楠氏を攻む　一八五ノ八
　神樂岡に陣す　四八九ノ八
　湯尾宿に戰ふ　二六六ノ六
〇北野天滿宮
　三位局の參籠　一四四ノ三
　利驗　一四五ノ七
〇北畠顯家
　上洛　四七二ノ六
　三井寺に戰ふ　四七四ノ九
　奥州に下る　五一四ノ六
　利根河に戰ふ　六八〇ノ四
　鎌倉を下し上洛　六八四ノ五
　青野原に戰ふ　六八七ノ七
　吉野に入る　六九一ノ九
　桃井に破らる　六九三ノ一
　戰死　六九四ノ一三
〇吉川八郎—赤坂水攻の議　一六六ノ三
〇木寺相摸
　戰中に舞ふ　一七一ノ一四
　桂川の先陣　二〇五ノ一一
〇京都の戰
　第一囘　四八三—四八七
　尊氏三條河原に出陣—義貞追擊—師泰敗戰—尊氏退却—細川定禪奮戰
　第二囘　五七二—五九〇
　山門勢來攻—山門の謀漏る—尊氏の部署—義貞退却—義貞の拜謁—官軍東寺を討つ—高師直退却—惡源太—官軍退敗—義貞來攻—尊氏出でず—官軍退敗—長年戰死—義貞敗北

―主上の笠置落
○糟谷宗秋
六波羅落の建議　二五七ノ一
最後　二六七ノ一一
○片岡八郎―戰死　一三九ノ一
○金澤貞將―最後　二九六ノ一一
○金崎の戰　六〇九―六三八
栗生左衛門の奇計―足利軍來襲―栗生の奮戰―今川駿河守の船攻―野中、中村を助く―亙理新左衛門―瓜生判官擧兵―里見伊賀守の後攻―里見、瓜生、義鑑房の戰死―義貞以下杣山に落つ―高越後守大擧來攻―義顯及一の宮の最後―由良、長濱
○狩野五郎―不忠　二九八ノ八
○鎌倉の戰
第一回　鎌倉幕府　二八五―三一二
義貞來攻―赤橋相摸守自殺―本間の最後―稲村崎干上る―島津降參―火中の混亂―長崎奮戰―大佛貞直の最後―金澤貞將の最後―信忍自殺―鹽田道祐父子自害―狩野の不忠―鹽飽父子自害―安東聖秀自害―長崎最後―高時以下自殺
第二回　中前代の亂　四〇四―四一四
時行來攻―直義敗走―尊氏出征―佐夜の中山―平軍敗北―諸將最後
第三回　中前代の亂　六八二―六八四
時行、德壽丸等蜂起―義詮訓言―時行等來攻―鎌倉落城
○鎌倉幕府
沿革　一ノ四
北條時政　一二七ノ四
三鱗の紋の由來　一二七ノ一二
滅亡　三一四ノ六、三四一ノ二
○漢詩頌及偈
一封朝奏九重天（韓退之）　一二ノ一四
昔南陽縣菊水（光親）　三三ノ一四
五蘊假形成（資朝）　四〇ノ五
古來一句（俊基）　四六ノ一二
逍遙生死（具行）　八九ノ九
天莫空勾踐（高德）　一〇三ノ三
西伯囚羑里（范蠡）　一一一ノ一〇
力拔山兮（項羽）　二五九ノ四
提持吹毛（聖遠）　三〇〇ノ八
月耀如晴雪（道眞）　三五二ノ二
逐春不用動舟車（道眞）　三五三ノ三
自從勅使駈將去（道眞）　三五五ノ一〇
昨爲北闕蒙悲士（天上の聲）　三五五ノ一〇
白頭望斷萬重山（古頌）　三九二ノ七
歩出齊東門（孔明）　七一〇ノ一〇
○韓信―背水の陣　六八九ノ一三

の勝戰 四五三ノ六
○大高二郎重成―河野と
戰ふ 二五二ノ四
○大館左馬助―三井寺攻
の異見 四七三ノ六
○大塔宮
比叡山の咒願 二四ノ四
武術修練 二四ノ一四
天子を諫む 四八ノ一三
六波羅退去 五七ノ一三
經櫃に匿る 一二九ノ四
熊野落 一三〇ノ五
十津川に向ふ 一三一ノ一三
病人の祈禱 一三二ノ一二
戸野、竹原の忠節 一三五ノ二
高野に向ふ 一三六ノ七
錦旗を與ふ 一三六ノ一三
玉置庄司を語らふ 一三八ノ八
玉置と戰ふ 一四〇ノ四
野長瀨來援 一四一ノ二
吉野の城郭 一四二ノ七
吉野城に戰ふ 一六九ノ一
武備 三四三ノ六
勅使來る 三四三ノ一〇
入洛 三四五ノ四
尊氏を恨む 三七六ノ二
召捕はる 三七七ノ三
上書 三七七ノ一〇
鎌倉に召下さる 三七九ノ一
毒刃に斃る 四〇五ノ九
○大友左近將監―降參 四四〇ノ四
○大平孫太郎―八幡に
戰ふ 六九四ノ六
○近江の戰 五九〇―五九二
諸將坂本に退く―南都衆徒の違
約―三塔の衆徒と小笠原―道譽
の詭計
○王陵の母 三〇二ノ七
○大渡の戰 四五三―四五九
尊氏の躊躇―官軍百騎の嘲笑―
輯支橋桁渡―範貞の來狀―義貞
歸洛
○小笠原孫六―奮戰 一六ノ一三
○隱岐判官―船上來攻、
退散 一九四ノ一一
○荻野彥六
六波羅を攻む 二二九ノ二
高山寺城に陣す 二三二ノ四
○小山田高家
義貞を救ふ 五四六ノ一三
義貞の寛仁 五四七ノ五

カ、クワ

○景繁(刑部大輔)
密奏 六一七ノ一〇
主上を落し奉る 六一八ノ一一
吉水法師を語らふ 六一九ノ一一
○勘解由光守―後醍醐帝
を諫む 三一九ノ一
○笠置山の合戰 六四―七四
高橋又四郎の拔懸―荒尾兄弟の
戰死―本性房の荒業―陶山、小
見山の夜討―錦織判官代の戰死

○安祿山の將崔乾祐　五一二ノ六
○荒尾九郎、彌五郎—戰死　六七ノ二

イ、ヰ

○一の宮(尊良親王を見よ)
○嚴島—尊氏の參籠　五二三ノ一〇
○伊藤大和二郎
　降服　一八六ノ六
　三石に城を構ふ　一八六ノ八
○因幡全村—神樂岡に戰
　ふ　四八九ノ一三
○岩菊丸—吉野城を破る　一七〇ノ二
○今川駿河守—船攻　六一四ノ七
○芋瀨の庄司—錦旗を奪
　ふ　一三六ノ九
○入間久米河の戰　二七八—二八〇

ウ

○上杉伊豆守—正成と戰
　ふ　四九一ノ一
○上杉重能—僞筆の計　四三二ノ一三
○碓井丹波守盛景—急使　四四八ノ八
○內山城の戰　五〇六—五〇七
　菊池來攻—少貳一族の降伏—妙
　慧自害—其子宗應藏主
○宇都宮治部大輔
　天王寺に戰ふ　一五〇ノ八
　正成を攻む　一八五ノ八
　尊氏に降る　四五九ノ三
　神樂岡の不利　四八九ノ八
　瓜生の計に同意す　六二四ノ一一
○宇野國賴—瀨河宿に戰
　ふ　二〇一ノ一四
○瓜生判官保
　義助、義顯を迎ふ　六〇四ノ二
　僞筆の綸旨、變心　六〇四ノ一〇
　宇都宮及天野の異志　六二三ノ一三
　擧兵　六二五ノ五
　師泰の來襲　六二五ノ一二
　高經を破る　六二七ノ二
　戰死　六二九ノ六
　母の健氣　六三〇ノ三

エ、ヱ

○江田泰氏—山門に戰ふ　五六一ノ一〇
○江田行義—大江山に戰
　ふ　四五三ノ七
○圓觀上人
　召捕はる　二六ノ二
　略傳　二八ノ三
　奇瑞　二九ノ一三
　上洛　三四六ノ七
○圓宗院法印定宗—後醍
　醐帝に伺候　四六五ノ六
○鹽冶判官高貞
　龍馬進獻　三八三ノ三
　降服　四四〇ノ五
○延曆寺(比叡山を見よ)

オ、ヲ

○大江田大式部輔—福山
　に戰ふ　五二五ノ二
○大江山の戰—江田行義

長男竹若刺殺さる　二七四ノ一
兄弟任官　三二三ノ一〇
大塔宮を讒す　三七六ノ一一
二ヶ條の所願　四一一ノ六
御諱の一字を賜ふ　四一二ノ三
關東に向ふ　四一二ノ五
中前代時行を平ぐ　四一五ノ二
僭權　四一七ノ一
義貞と確執　四一七ノ五
義貞誅罰を乞ふ上表　四一九ノ三
叛意なきを陳ず　四二六ノ八
叛意を決す　四三四ノ二
竹下に向ふ　四三五ノ九
八幡に陣す　四五二ノ一二
大渡を攻む　四五三ノ一〇
都に入る　四六三ノ四
義貞に破らる　四八六ノ六
身を以て免る　四九一ノ一二
京都に引返す　四九三ノ四
正成に破らる　四九五ノ三
持明院の院宣を乞ふ　四九六ノ一
豐島河原に敗る　四九九ノ二
筑前に於ける窮態　五〇五ノ六
宗像の館に入る　五〇六ノ三
菊池武俊を破る　五〇八ノ二
諸將の服從　五一四ノ四
則祐等の諫言　五二二ノ一二
嚴島に參籠　五二三ノ一〇
持明院の院宣　五二三ノ一一
靈夢　五二四ノ七
義貞と會戰　五四五ノ九
東寺の城郭　五五四ノ一一
山門を攻む　五五七ノ四
士卒の亂暴　五八一ノ八
義貞來襲　五八八ノ七
後醍醐帝の還御を乞ふ　五九三ノ六
任官　六六八ノ一
○足利高經
千葉貞胤を降す　六〇三ノ四
瓜生に破らる　六二七ノ三
籠城　七〇〇ノ一
平泉寺へ密旨　七〇九ノ一
義貞の首實檢　七一八ノ七
○足利直義
尊氏に誓書上進を勸む　二三七ノ六
鎌倉を落つ　四〇四ノ一一
大塔宮を斬る　四〇五ノ一
春倫に迎へらる　四一〇ノ一二
出征　四二八ノ一
尊氏を諫む　五〇八ノ五
福山を拔く　五二七ノ九
任官　六六八ノ三
○足利義詮
利根河に陣す　六八〇ノ二
訓言　六八三ノ一
○足羽城の戰　六九七ノ七
○淡河時治（越前牛原の地頭）
平泉寺の衆徒來襲　三三一ノ四
妻の悲歎　三三一ノ一二
自殺　三三三ノ一
○安東聖秀—自害　三〇三ノ三

太平記上巻索引

（見出しはすべて發音に從ひ五十音順に排列す）

ア

○青野原の戰　六八七—六八八
土岐、桃井—顯家、顯信—土岐、桃井敗戰
○赤坂城合戰
第一回　守將正成　七九—八五
釣塀の計—熱湯の計
第二回　守將平野將監　一六〇—一六八
本間、人見の拔懸—水攻—降者の所刑
○赤橋相摸守—自殺　二八八ノ七
○赤松圓心
大塔宮の令旨、擧兵　一五六ノ一一
山陽山陰の活動　一八六ノ三
摩耶城を守る　一九九ノ七
六波羅を攻む　二〇四ノ三
六波羅退去　二一一ノ八
山崎に陣す　二一三ノ六
再び京を攻む　二二〇ノ三
京都退去　二二六ノ二
東寺を攻む　二五三ノ八
後醍醐帝に謁す　三二二ノ二
白旗峯の叛　五一三ノ一一
書寫坂本の不利　五一四ノ一〇
義貞を欺く　五一五ノ五
○赤松貞範
摩耶城に戰ふ　二〇〇ノ三
大渡に戰ふ　四五七ノ一
○赤松範資
摩耶城に戰ふ　二〇〇ノ三
大渡に戰ふ　四五七ノ三
○赤松則祐
摩耶城を守る　一九九ノ一〇
先驅　二〇四ノ九
退陣　二二〇ノ九
尊氏を諫む　五二二ノ一二
○顯家（北畠顯家を見よ）
○顯信
青野原に戰ふ　六八七ノ七
八幡山に陣す　六九三ノ七
○惡源太（土岐賴直）—羅城門の奮鬪　五八四ノ一四
○飽間光泰—摩耶に戰ふ　一九九ノ一〇
○足利尊氏
高時に叛意　二三五ノ四
高時に誓書　二三七ノ六
上洛　二三八ノ四
綸旨を受く　二三九ノ六
篠村に向ふ　二四二ノ一二
篠村八幡に祈る　二四八ノ六
山鳩の奇瑞　二五〇ノ四
千壽王鎌倉落　二七三ノ二

追孝—追福追善におなじ

に失せ、彼山伏も見えず成て、旦過に坐せる僧ばかり、野原の草の露の上に、惘然として居たりけり。夢幻の境も未覺えね共、夜已に明ければ、此僧現化の不思議に驚て、いそぎ奥州へ下り、結城上野入道が子、大藏權少輔に此事を語に、父の入道が伊勢にて死たる事、未聞及ばざる前なれば、是皆夢中の妄想か、幻の間の怪異かと、眞しからず思へり。其後三四日あつて、伊勢より飛脚下て、父の上野入道が遺言の樣、臨終の惡相共、委く語りけるにこそ、僧の云所一も僞らざりけりと、信を取て、七々の忌日に當る毎に、一日經を書供養して、追孝の作善をぞ致しける。若有聞法者無一不成佛は、如來の金言、此經の大意なれば、八寒八熱の底までも、惡業の猛火忽に消て、淸冷の池水正に湛んと、導師稱揚の舌をのべて、玉を吐給へば、聽衆隨喜の涙を流して、袂を沾しけり。是併地藏菩薩の善巧方便にして、彼有樣を見せしめて、追善を致さしめんが爲也。結緣の多少に依て、利生の厚薄はあり共、佛前佛後の導師、大慈大悲の薩埵に値遇し奉らば、眞諦俗諦善願の望み達せん。今世後世能引導の御誓たのもしかるべき御事也。

太平記上卷 終

臠刀—肉切り庖丁

一日經—多勢相集て一部の經を一日に書くこと

くに推しひらめたる罪人を、鐵の串にさしつらぬき、炎の上に是を立てゝ、打返々々炮る事、唯庖人の肉味を調ずるに不レ異。至極あぶり乾て後、又俎の上に推ひらめて、臠刀に鐵の魚箸を取副て、寸分に是を切割て、銅の箕の中へ投入たるを、牛頭馬頭の鬼共、箕を持て活々と唱へて、是を簸けるに、罪人忽に蘇て、又もとの形になる。時に阿防羅刹鐵の楉を取て、罪人にむかひ、忿れる言を出して、罪人を責て曰、地獄非二地獄一汝が罪責レ汝と、罪人此苦に責られて、泣んとすれども涙落ず、猛火眼を焦す故に、叫ばんとすれ共聲出ず、鐵丸喉を塞故に、若一時の苦患を語るとも、聞人は地に倒れつべし。客位の僧是を見て、魂も浮れ骨髓も砕ぬる心地して、恐しく覺えければ、主人の山伏に向て、是は如何なる罪人を加樣に呵責し候やらんと問ければ、山伏の云、是こそ奥州の住人、結城上野入道と申者、伊勢國にて死して候が、阿鼻地獄へ落て、呵責せらるゝにて候へ。若其方樣の御緣にて御渡候はゞ、跡の妻子共に、一日經を書供養して、此苦患を救ひ候へと仰られ候へ。我は彼入道今度上洛せし時、鎧の袖に名を書て候し六道能化の地藏薩埵にて候也と、委く是を教へけるに、其言未レ終、曉をつぐる野寺の鐘、松吹く風に響て、一聲幽に聞えければ、地獄の鐵城も忽にかきけす樣

の一宿する所

阿防羅刹―獄率

暫有て、前の山伏、内より螺鈿の匣に法華經を入たるを持來て、唯今是に不思議の事あるべきにて候。いかに恐しく思召候共、息をもあらくせず、三業を靜めて、此經を讀誦候べしと云て、己は六の卷の紐を解て、壽量品をよみ、僧には八の卷を與て、普門品をぞ讀せける。僧何事にやとあやしく思ひながら、山伏の云に任て、口には經を誦し、心に妄想を拂て、寂々としてぞ居たりける。夜半過る程に、月俄にかき陰り、雨あらく、電して、牛頭馬頭の阿防羅刹共其數を知らず大庭に群集せり。天地須臾に換盡して、鐵城高く峙ち、鐵網四方に張れり。烈々たる猛火燃て、一由旬が間に盛なるに、毒蛇舌をのべて焰を吐き、鐵の犬牙をといで吠怒る。僧是を見て、あな恐ろし、是は無間地獄にてぞあるらんと、恐怖して見居たる處に、火車に罪人を一人のせて、牛頭馬頭の鬼共轅を引て、虛空より來れり。待て怒れる惡鬼共、鐵の俎の盤石の如くなるを庭に置て、其上に此罪人を取てあふのけにふせ、其上に又鐵の俎を重て、諸々の鬼共膝を屈し肱をのべて、えいや聲を出、えいや〱と推すに、俎のはづれより、血の流るゝ事油をしたゞるが如し。是を受て大なる鐵の桶に入れあつめたれば、程なく十分に湛へて、滔々たる事、夕陽を浸せる江水の如く也。其後二の俎を取のけて、紙の如

追賁―追善とおなじ

蒙氣―ぼんやりして不愉快なること

旦過―旅僧

思はゞ、供佛施僧の作善をも致すべからず、更に稱名讀經の追賁をも成すべからず、唯朝敵の首を取て、我墓の前に懸並て見すべしと云置ける由傳て給り候へと、是を最後の詞にて、刀を拔て逆手に持ち、齒嚙をしてぞ死にける。罪障深重の人多しといへ共、終焉に是程の惡相を現ずる事は、古今未聞の所也。げにも此道忠が平生の振舞をきけば、十惡五逆重障過極の惡人也。鹿をかり鷹を使ふ事は、せめて世俗の態なれば言ふにたらず。咎なき者を毆ち縛り、僧尼を殺す事數を知ず。常に死人の首を目に見ねば、心地の蒙氣するとて、僧俗男女を云ず、日每に二三人が首を切て、態目の前に懸させけり。されば彼が暫も居たるあたりは、死骨滿て屠所の如く、尸骸積で九原の如し。此入道が伊勢にて死たる事、道遠ければ故鄕の妻子未知る事無りけるに、其比所緣なりける律僧、武藏國より下總へ下る事あり。日暮野遠して、留るべき宿を尋ぬる處に、山伏一人出來て、いざさせ給へ。此邊に接待所の候ぞ。其所へつれ進せんと云ける間、行脚の僧悅で、山伏の引導に相從ひ、遙に行て見に、鐵の築地をついて、金銀の樓門を立たり。其額を見れば、大放火寺と書たり。門より入て內を見るに、綺麗にして美を盡せる佛殿あり。其額をば理非斷とぞ書たりける。僧をば旦過に置て、山伏は內へ入ぬ。

○結城入道墮二地獄一事

中にも結城上野入道が乘たる船、惡風に放されて、渺々たる海上にゆられたゞよふ事、七日七夜也。既に大海の底に沈か、羅刹國に墮かと覺しが、風少し靜りて、是も伊勢の安野津へぞ吹著られける。こゝにて十餘日を經て、後猶奥州へ下らんと、渡海に順風を待ける處に、俄に重病を受て、起居も更に叶はず、定業極りぬと見えければ、善知識の聖枕に寄て、此程まではさり共とこそ存候つるに、御勞日に隨て重らせ給候へば、今は御臨終の日遠からじと覺えて候。相構て後生善所の御望懈たる事無して、稱名の聲の内に、三尊の來迎を御待候べし。さても今生には何事をか思召おかれ候。御心に懸る事候はゞ仰置れ候へ、御子息の御方樣へも傳へ申候はんと云ければ、此入道已に目を塞んとしけるが、かつぱと跳起て、から〱と打笑ひ、戰たる聲にて云けるは、我已に齡七旬に及で、榮花身にあまりぬれば、今生に於ては一事も思殘事候はず。唯今度罷上て、遂に朝敵を亡し得ずして、空く黄泉の旅におもむきぬる事、多生曠劫までの妄念となりぬと覺え候。されば愚息にて候大藏權少輔にも、我後生を弔はんと

彌帆―普通の帆の外に舳に張る帆

武藏相摸の間へぞ下されける。陸地は皆敵强して通りがたしとて、此勢皆伊勢の大湊に集て、船をそろへ風を待けるに、九月十三日の宵より、風やみ雲收て、海上殊に靜りたりければ、舟人纜をといて、萬里の雲に帆を飛す。兵船五百餘艘、宮の御座船を中に立て、遠江の天龍灘を過ける時に、海風俄に吹あれて、逆浪忽に天を卷翻す。或は檣を吹折られて、彌帆にて馳る船もあり、或は梶をかき折て、廻流に漂ふ船もあり。暮れば彌風あらく成て、一方に吹も定らざりければ、伊豆の大島、女良湊、かめ河、三浦、由比濱、津々浦々の泊に、舟の吹寄せられぬはなかりけり。宮の召れたる御舟一艘漫々たる大洋に放たれて、已に覆らんとしける處に、光明赫奕たる日輪、御舟の舳前に現じて見えけるが、風俄に取て返し、伊勢國神風濱へ吹もどし奉る。若干の舟共行方もしらず成ぬるに、此御船計日輪の擁護に依て、伊勢國へ吹もどされ給ぬる事たゞ事にあらず、何樣此宮繼體の君として、九五の天位を踐せ給ふべき所を、忝も天照太神の示されける者也とて、忽に奧州の御下向を止られ、則又吉野へ返し入れ進せられけるに、果して先帝崩御の後、南方の天子の御位をつがせ給し吉野の新帝と申奉しは、則此宮の御事也。

第八宮—義良後に後村上帝

へども、新田殿北國より攻上る由奏聞したりけるを御憑あつて、今や〳〵と待給ける處に、此人さへ足羽にて討れぬと聞えければ、蜀の後主の孔明を失ひ、唐の太宗の魏徴に哭せしが如く、叡襟更におだやかならず、諸卒も皆色を失へり。爰に奥州の住人、結城上野入道道忠と申けるもの、參内して奏し申しけるは、國司顯家卿三年の内に兩度まで大軍を動して上洛せられ候し事は、出羽奥州の兩國、みな國司に從て、凶徒其隙を得ざる故也。國人の心未變ぜざるさきに、宮を一人下し進せて、忠功の輩には直に賞を行はれ、不忠不烈の族をば根をきり葉をからして、御沙汰候はんには、などか攻從へでは候べき。國の差圖を見候に、奥州五十四郡恰日本の半國に及べり。若兵數を盡して一方に屬せば、四五十萬騎も候べし、道忠宮を挾み奉て、老年の首に冑を頂く程ならば、重ねて京都に攻上り、會稽の恥を雪めん事、一年の内をば過し候まじと申ければ、君を始奉て、左右の老臣、悉く此議げにも然るべしとぞ同ぜられける。依之第八宮の今年七歳にならせ給ふを、初冠めさせて、春日少將顯信を輔弼とし、結城入道道忠を衛尉として、奥州へぞ下しまゐらせられける。是のみならず、新田左兵衛佐義興、相摸次郎時行二人をば、東八箇國を打平げて、宮に力を副奉れとて、

道場の聖―佛法を修する場の聖僧

都も今は却て旅なれば、住所も定まらず、心うかれ、袖しをれて、何にか身を浮舟のよるべも有べきと、昔見し人の行末を尋て、陽明の傍へ行給ひける路に、人あまた立あひて、あなあはれなんど云音するを、何事にかと立留て見給へば、越路はるかに尋行て、あはで歸し新田左中將義貞の首を、獄門の木に懸られて、眼塞り色變ぜり。内侍の局是を二目とも見給はずして、傍なる築地の陰に、なき倒れ給ひけり。知も知らぬも是を見て、共に涙を流さぬはなかりけり。日已に暮ければども、立歸るべき心地もなければ、蓬が本の露の下に泣しをれておはしけるを、其邊なる道場の聖、餘に御いたはしく見えさせ給ひ候にとて、内へいざなひ入奉れば、其夜やがて翠の髪を剃下し、紅顔を墨染にやつし給ふ。暫が程は、なき面影を身にそへて、泣悲み給しが、會者定離の理に愛別離苦の夢を覺して、厭離穢土の心は日々にすゝみ、欣求淨土の念時々に增りければ、嵯峨の奥往生院のあたりなる柴の扉に明暮を行ひすましてぞおはしける。

○奥州下向勢逢二難風一事

吉野には、奥州の國司安部野にて討れ、春日少將八幡城を落されて、諸卒皆力を失とい

あらまされたる―期待せられたる

給たりとて、此には人も無りければ、杣山より輿の轅を廻して、淺津の橋を渡り給ふ處に、瓜生彈正左衛門尉、百騎ばかりにて行合奉りたるが、馬より飛でおり、輿の前にひれ伏て、是はいづくへとて御渡り候らん。新田殿は、昨日の暮に、足羽と申所にて、討れさせ給て候と申もはてず、涙をはら〳〵とこぼせば、內侍の局、こは如何なる夢のうつゝぞやと、胸ふさがり肝消て、中々泪も落やらず、輿の中にふし沈みて、せめてはあはれ其人の討れ給ひつらん野原の草の露の底にも身をすて置て歸れかし。さのみはおくれさきだたじ。共に消もはてなんと、泣悲み給へ共、早其輿かき返せとて、急で又杣山へぞ返し入れまゐらせける。是ぞ此程中將殿の住給ひし所也とて、色紙押散したる障子の內を見給へば、何となき手ずさみの筆の跡までも、唯都へいつかと、あらまされたる言の葉をのみ書おき、讀すてられたり。かゝる空き形見を見るにつけても、いとゞ悲のみふかくなり行ば、心少も慰べき方ならね共、中將のすみすて給し跡なれば、爰にて中陰の程をも過して、なき跡をも弔はゞやと覺しけるに、頓其邊も騷しく成て、敵の近附くなど聞えしかば、城の麓はあしかるべしとて、頓又京へ上せ奉り、仁和寺のあたり、幽なる宿の、主だにすまずなりぬる蓬生の宿に、送り置奉る。

る戰を事とせす。其弊果して敵の爲に國を奪れたり。誠に一たび笑で能く國を傾くと、古人の是をいましめしも理也とぞ覺えたる。中將坂本より北國へ落給ひし時は、路次の難儀を顧て、此内侍をば今堅田と云所にぞ留め置れたりける。かゝらぬ時の別だに、行には跡を顧て、頭を家山の雲に回らし、留まるは末を思ひやりて、泪を天涯の雨に添ふ。況や中將は行末とても憑なき北狄の國に赴き給へば、生て再び廻りあはん後の契もいさ知らず。又内侍は、都近き海人の磯屋に身をかくし給ひければ、今もやさがし出されて、憂名を人に聞れんずらんと、一方ならずなげき給ふ。翌年の春、父行房朝臣金崎にて討れ給ひぬと聞えしかば、思の上に悲をそへて、明日までの命もよしや何かせんと、歎きしづみ給ひしか共、さすがに消ぬ露の身なれば、起居に袖をほしわびて、二年あまりに成にけり。中將も越前に下著し日より、軈迎をも上せばやと思給ひけれども、道の程も輒からず、又人の云思はんずる所憚あれば、唯時々の音信ばかりを、互に殘る命にて、年月を送り給けるが、其秋の始に、今は道の程も暫靜に成ぬればとて、迎の人を上せられたりければ、内侍は此三年が間暗き夜のやみに迷へるが、俄に夜の明たる心地して、頓先杣山まで下著き給ひぬ。折節中將は足羽と云所へ向ひ

優曇花—三千年に一度花咲くといはるゝ想像上の植物

我袖の泪に宿る影とだに、しらで雲井の月やすむらん。

と讀て遣されたりければ、君の聞召れん事も憚ありとて、よにあはれげなる氣色に見えながら、手にだに取らずと、使歸て語ければ、中將いとゞ思ひしをれて、云べき方なく、有るを憑の命とも覺えずなりぬべきを、何人か奏しけん、君等閑ならずと聞召て、夷心のわく方なさに思そめけるも理也と、哀なる事に思召れければ、御遊の御次に左中將を召れ、御酒たばせ給ひけるに、勾當内侍をば、此盃に附てとぞ仰出されける。左中將限なく忝しと悦で、翌の夜軈牛車さわやかにしたてゝ、角と案内せさせたるに、内侍もはや此年月の志に、さそふ水あらばと思ひけるにや、さのみ深け過ぬ程に、車のきしる音して、中門にながえを指廻せば、侍兒ひとり二人妻戸をさしかくして驚破めきあへり。中將は此幾年を戀忍で、相逢ふ今の心の中、優曇花の春まち得たる心地して、珊瑚の樹の上に陽臺の夢長くさめ、連理の枝の頭に驪山の花自濃也。あやなく迷ふ心の道、諫る人もなかりしかば、去ぬる建武のすゑに、朝敵西海の波に漂し時も、中將此内侍に暫の別を悲て征路に滯り、後に山門臨幸の時、寄手大嶽より追落されて、其まゝ寄せば京をも落さんとせしかども、中將此内侍に迷て勝に乘疲を攻

禁漏の二十五聲―禁中の漏刻の二十五聲、一晝夜の半也

折らば落ちぬべき―源氏物語帚木巻に出づ、あだなる靡き易き女のたとへ

雲半江の月をはき出すに似たり。されば椒房の三十六宮、五雲の漸くに遶る事を听、禁漏の二十五聲、一夜の正に長き事を恨む。去建武の始、天下又亂れんとせし時、新田左中將常に召れて、内裏の御警固にぞ候はれける。或夜月冷く風秋なるに、此勾當の内侍半簾を巻て、琴を彈じ給ひけり。中將其怨聲に心引れて、覺えず禁庭の月に立吟、あやなく心そゞろにあこがれてげれば、唐垣の傍に立紛れて伺けるを、内侍見る人ありと物侘しげにて、琴をば引かずなんぬ。夜痛く深て、在明の月のくまなく差入たるに、類までやはつらからぬと打詠め、しをれ伏たる氣色の、折らばおちぬべき萩の露、拾はゞ消なん玉篠のあられより尙あだなれば、中將行末も知らぬ道にまよひぬる心地して、歸る方もさだかならず、淑景舍の傍にやすらひ兼て立明す。朝より夙に歸りても、幽なりし面影の、なほこゝもとにある心迷に、世の態人の云かはす事も心の外なれば、いつとなく、おきもせず寢もせで夜を明し日を暮して、若しるべする海人だにあらば、忘れ草のおふと云浦のあたりにも、尋ねゆきなましと、そゞろに思しづみ給ふ。あまりにせん方なきまゝに、媒すべき人を尋出して、そよとばかりをしらすべき風の便の下荻の穗に出るまではなくともとて、

緣に屬し—ゆかりの者につき賴みて

呦々—聲の和する貌

入り、或は緣に屬し罪を謝して、黑丸城へ降參す、昨日まで三萬騎にあまりたりし兵共、一夜の程に落失て、今日は僅に二千騎にだにも足ざりけり。かくては北國を蹈へん事叶ふまじとて、三峯城に河島を籠め、杣山城に瓜生を置き、湊城に畑六郎左衞門尉時能を殘されて、閏七月十一日に、義助義治父子共に、禰津、風間、江戸、宇都宮の勢七百餘騎を率して、當國の府へ歸給ふ。

○義貞首懸二獄門一事　附勾當内侍事

新田左中將の首京都に著ければ、是朝敵の最、武敵の雄なりとて、大路を渡して、獄門に懸らる。此人前朝の寵臣にて、武功世に被らしめしかば、天下の倚賴として、其芳情を悅び、其恩顧をまつ人、幾千萬と云數を知ず、京中に相交りたれば、車馬道に橫り、男女岐に立て、是を見に堪へず、泣悲む聲呦々たり。中にも彼の北臺勾當内侍の局の悲を、傳へ聞こそあはれなれ。此女房は頭大夫行房の女にて、金屋の内に粧を閉ぢ、雞障の下に媚を深して、二八の春の比より、内侍に召れて、君王の傍に侍り、羅綺にだも堪ざる貌は、春の風一片の花をふき殘すかと疑はる、紅粉を事とせる顏は、秋の

叡慮所レ向、偏在二義貞武功一、選末レ求レ他。殊可レ運二早速之計略一者也と遊ばされたり。
さては義貞の首相違なかりけりとて、尸骸を輿に乘せ、時衆八人にかゝせて、葬禮の爲に往生院へ送られ、首をば朱の唐櫃に入れ、氏家中務を副て、潛に京都へ上せられけり。

○義助重集二敗軍一事

脇屋右衛門佐義助は、河合の石丸城へ打歸て、義貞の行末をたづね給ふに、始の程は分明に知人もなかりけるが、事の樣次第に顯れて、討れ給ひけりと申合ければ、日を替へず黑丸へ押寄て、大將の討れ給ひつらん所にて、同討死せんと宣ひけれども、いつしか兵皆あきれ迷て、唯茫然たる外は、指たる擬勢もなかりけり。剩へ人の心も頓替りけるにや、野心の者内にありと覺えて、石丸城に火を懸んとする事、一夜の内に三箇度也。是を見て齋藤五郎兵衛尉季基、同七郎入道道猷二人は、他に異なる左中將の近習にて有しかば、門前の左右の脇に、役所を竝べて居たりけるが、幕を捨てゝ夜の間に何地ともなく落にけり。是を始として、或は心も發らぬ出家して、往生院長崎の道場に

將の位に備りしかば、身を愼み命を全してこそ、大義の功を致さるべかりしに、自らさしもなき戰場に赴て、匹夫の鏑に命を止めし事、運の極とは云ながら、うたてかりし事共也。軍散じて後氏家中務丞、尾張守の前に參て、重國こそ新田殿の御一族かとおぼしき敵を討て、首を取て候へ。誰とは名乘候はねば、名字をば知候はねども、馬物具の樣、相從し兵共の死骸を見て、腹をきり討死を仕候つる體、何樣尋常の葉武者にてはあらじと覺て候。これぞ其死人のはだに懸て候つる護にて候とて、血をも未あらはぬ首に、土の著たる金襴の守を副てぞ出したりける。尾張守此首を能々見給て、あな不思議や、よに新田左中將の顏つきに似たる所有ぞや。若それならば、左の眉の上に、矢の創有べしとて自ら鬢櫛を以て、髮をかきあけ血を洗ぎ、土をあらひ落て是を見給ふに、果して左の眉の上に創の跡あり。是に彌心附て、帶れたる二振の太刀をば取寄て見給に、金銀を延て作りたるに、一振には銀を以て金脥纏の上に、鬼切と云文字を沈めたり。一振には金を以て銀脛巾の上に、鬼丸と云文字を入らる。是は共に源氏重代の重寶にて、義貞の方に傳たりと聞ゆれば、末々の一族共の帶くべき太刀には非と見るに、彌怪ければ、膚の守を開て見給ふに、吉野の帝の御宸筆にて、朝敵征伐事、

脥纏—刀身の鍔の兩側にはめて鍔元を固むる金具

眞向のはづれ—冑のまびさしの端

一筋、眞向のはづれ、眉間の眞中にぞ立たりける。急所の痛手なれば、一矢に目くれ心迷ひければ、義貞今は叶はじとや思けん、拔たる太刀を左の手に取渡し、自ら首をかき切て、深泥の中に藏して、其上に横てぞ伏給ひける。越中國の住人氏家中務丞重國、畔を傳て走りより、其首を取て鋒に貫き、鎧、太刀、刀同く取持て、黑丸城へ馳歸る。義貞の前に畷を阻てゝ戰ける結城上野介、中野藤內左衞門尉、金持太郎左衞門尉、此等馬より飛で下り、義貞の死骸の前に跪て、腹かき切て重り伏す。此外四十餘騎の兵、皆堀溝の中に射落されて、敵の一人をも取得ず、犬死してこそ伏たりけれ。此時左中將の兵三萬餘騎、皆猛く勇める者共なれば、身にかはり命に代らんと、思はぬ者は無りけれ共、小雨まじりの夕霧に、誰を誰とも見分ねば、大將の自ら戰ひ打死し給をも知らざりけるこそ悲けれ。唯よそにある郎等が、主の馬に乘替て、河合をさして引けるを、數萬の官軍遙に見て、大將の跡に隨んと、見定めたる事もなく、心々にぞ落行ける。漢の高祖は、自ら淮南の黥布を討し時、流矢に當て、未央宮の裏にして崩じ給ひ、齊の宣王は、自楚の短兵と戰て、干戈に貫れて、修羅場の下に死し給き。されば蛟龍は常に保ニ深淵之中一、若遊ニ淺渚一有ニ漁網釣者之愁一と云り。此人君の股肱として、武

打て出れば、寄手の官軍鋒を調て斬て落す。追つ返つ入れ替る戰に、時刻押移て、日已に西山に沈まんとす。大將義貞は、燈明寺の前にひかへて、手負の實檢しておはしけるが、藤島の戰强して、官軍やゝもすれば追立らるゝ體に見えける間、安からぬ事に思はれけるにや、馬に乘替へ鎧を著かへて、僅に五十餘騎の勢を相從へ、路をかへ畔を傳ひ、藤島城へぞ向はれける。其時分黑丸城より、細川出羽守、鹿草彥太郎兩大將にて、藤島城を攻ける寄手共を追拂はんとて、三百餘騎の勢にて、横畷を廻けるに、義貞覿面に行合ひ給ふ。細川が方には、歩立にて楯をついたる射手共多かりければ、深田に走下り、前に持楯を衝竝て、鏃を支て散々に射る。義貞の方には、射手の一人もなく、楯の一帖をも持せざれば、前なる兵義貞の矢面に立塞て、唯的に成てぞ射られける。中野藤内左衞門は、義貞に目加して、千鈞の弩は爲二鼷鼠一不レ發レ機と申けるを、義貞きゝもあへず、失レ士獨免るゝは非二我意一と云て、尙敵の中へ懸入んと、駿馬に一鞭をすゝめらる。此馬名譽の駿足なりければ、一二丈の堀をも、前々輙く越けるが、五筋まで射立られたる矢によわりけん、小溝一をこえかねて、屛風をたふすが如く、岸の下にぞころびける。義貞弓手の足をしかれて、起あがらんとし給ふ處に、白羽の矢

屬強—馬の進まぬ癖
河伏—河中に伏すること

馬に、手縄打懸て門前にて乗んとし給けるに、此馬俄に屬強をして、騰跳狂ひけるに、左右に附たる舍人二人蹈れて、半死半生に成にけり。是をこそ不思議と見る處に、旗さしすゝんで足羽河を渡すに、乗たる馬俄に河伏をして、旗さし水に漬にけり。加樣の怪共、未然に凶を示しけれ共、已に打臨める戰場を、引返すべきにあらずと思て、人なみなみに向ひける勢共、心中にあやぶまぬはなかりけり。

○義貞自害事

燈明寺の前にて三萬餘騎を七手に分て、七の城を押阻て、先對城をぞ取られける。兼ての配立には、前なる兵は城に向ひ逢うて合戰を致し、後なる足輕は、櫓をかき塀を塗て、對城を取すましたらんずる後、漸々に攻落すべしと議定せられたりけるが、平泉寺の衆徒のこもりたる藤島城、以の外に色めき渡て、軈て落べく見えける間、數萬の寄手是に機を得て、先對城の沙汰をさしおき、塀に著堀につかつて、をめき叫でせめ戰。衆徒も落色に見えけるが、とても遁るべき方のなき程を思ひ知けるにや、身命を捨て是を防ぐ。官軍楯を覆て入んとすれば、衆徒走木を出して突落す。衆徒橋を渡て

○義貞馬屬强事

閏七月二日足羽の合戰と觸れられたりければ、國中の官軍義貞の陣河合庄へ馳集りけり。其勢宛も雲霞の如し。大將新田左中將義貞朝臣は、赤地の錦の直垂に、脇立ばかりして、遠侍の座上に坐し給へば。脇屋右衛門佐は、紺地の錦の直垂に、小具足計にて、左の一の座に著給ふ。此外、山名、大館、里見、鳥山、一井、細屋、中條、大井田、桃井以下の一族三十餘人は、思々の鎧兜に、色々の太刀刀、綺麗を盡して、東西二行に座を列す。外樣の人々には、宇都宮美濃將監を始として、禰津、風間、敷地、上木、山岸、瓜生、河島、太田、金子、伊自良、江戸、紀淸兩黨以下著到の軍勢等三萬餘人、旗竿引そばめ〳〵、膝を屈し手をつかねて、堂上庭前に充滿たれば、由良舟田に大幕をかゝけさせて、大將遙に目禮して、一勢々々座敷を起つ。巍々たるよそほひ、堂々たる禮、誠に尊氏卿の天下を奪んずる人は、必義貞朝臣なるべしと、思はぬ者はなかりけり。其日の軍奉行上木平九郎、人夫六千餘人に、幕、搔楯、埋草、塀柱、櫓の具足共を持はこばせて參りければ、大將中門にて鎧の上帶しめさせ、水練栗毛とて、五尺三寸有ける大

を聞きおぢして、かゝる狂言をば云人也と、掌を拍て笑あへり。或夜兩陣のあはひに、客星落て、其光火よりも赤し。仲達是を見て、七日が中に天下の人傑を失べき星也。孔明必死すべきに當れり。魏必蜀を幷せて取ん事、餘日あるべからずと悅べり。果して其朝より孔明病に臥事七日にして、油幕の裏に死にけり。蜀の副將軍等、魏の兵忽に利を得て前まん事を恐て、孔明が死を隱し、大將の命と相觸て、旗をすゝめ、兵をなびけて、魏の陣へ懸入る。仲達は元來戰を以て蜀に勝事を得じと思ければ、一戰にも及ばず、馬に鞭て走事五十里、嶮岨にして留る。今に世俗の諺に、死せる孔明生る仲達を走しむと云事は、是は欺る詞也。軍散じて後、蜀の兵孔明が死せる事を聞て、皆仲達にぞ降ける。其より蜀先亡び、吳後に亡て、魏の曹操、遂に天下を保ちけり。此故事を以て、今の御夢を料簡するに、事の樣、魏吳蜀三國の爭に似たり。就中龍は陽氣に向ては威を震ひ、陰の時に至ては蟄居を閉づ。時今陰の初也。而も龍の姿にて水邊に伏たりと見給へるも、孔明を臥龍と云しに不ㇾ異。されば面々は皆目出たき御夢なりと合せられつれ共、道獻は强に甘心せずと、眉をひそめて云ければ、諸人げにもと思へる氣色なれども、心にいみ、言に憚て、凶とする人なかりけり。

油幕—雨露を凌ぐ天幕

芻蕘共をとりこにして、孔明か陣中の成敗をたづね問に、芻蕘共答て云けるは、蜀の將軍孔明士卒を撫、禮讓を厚くし給ふ事疎ならず。一豆の食を得ても、衆と共に分て食し、一樽の酒を得ても、流に灑で士と均く飲す。士卒未炊ざれば、大將食せず。官軍雨露にぬるゝ時は、大將油幕を不張。樂は諸侯の後に樂み、愁は萬人の先に愁ふ。加之夜は終夜睡を忘て、自城を廻て懈れるを戒め、晝は終日に面を和て、交を睦まじくす。未須臾の間も心を恣にし身を安ずる事を見ず。依之、其兵三十萬騎、心を一にして死を輕くせり。鼓を打て進むべき時はすゝみ、鐘を敲て退くべき時は退ん事、一歩も大將の命に違事あるべからずと見えたり。其外の事は我等が知べき處に非とぞ語りける。仲達是を聞て、御方の兵は七十萬騎、其心一人も不同、孔明が兵三十萬騎、其志皆同じといへり。されば戰を致して蜀に勝事は努あるべからず。孔明が病る弊に乘て戰はゞ、必勝事を得つべし。其故は、孔明此炎暑に向て、晝夜心身を勞せしむるに、溫氣骨に入て、病にふさずと云事有べからずと云て、士卒の嘲をもかへりみず、彌陣を遠く取て、徒に數月をぞ送りける。士卒ども是を聞て、如何なる良醫と云共、あはひ四十里を阻て、暗に敵の脈を取知る事やあるべき。唯孔明が臥龍の勢

大夫晏子の謀を用ひて三勇士を自殺せしめし事をいふ

を高し、世を治め給ふべき由をぞ奏し申しける。劉備則幣を重し、禮を厚して召れけれ共、孔明敢て勅に應ぜず。唯澗飲岩栖して、生涯を斷送せん事を樂しむ。劉備三度彼の艸庵の中へおはして宣ひけるは、朕不肖の身を以て、天下の太平を求む。全く身を安じ、欲を恣にせんとには非ず。唯道の塗炭におち、民の溝壑に沈ぬる事をすくはん爲のみ也。公若良佐の才を出して朕が中心を輔られば、殘に勝殺を棄ん事、何ぞ必しも百年を待ん。夫石を枕にし泉に嗽で、幽栖を樂むは一身の爲也。國を治め民を利して大化を致さんは、萬人の爲也と、誠を盡し理を究て仰られければ、孔明辭するに詞なくして、遂に蜀の丞相と成にけり。劉備是を貴寵して、朕有孔明如魚有水と喜給ふ。遂に公侯の位を與て、其名を武侯と號せられしかば、天下の人是を臥龍の勢ありと懼あへり。其德已に天下を朝せしむべしと見えければ、魏の曹操是を愁て、司馬仲達と云將軍に、七十萬騎の兵を副て、蜀の劉備を攻んとす。劉備は是を聞て、孔明に三十萬騎の勢を附て、魏と蜀との境、五丈原と云處へ差向らる。魏蜀の兵河を阻て、相支る事五十餘日、仲達會て戰んとせず。依之魏の兵、漸く馬疲れ食盡て、日々に竈を減ぜり。依之魏の兵皆戰んと乞に、仲達不可也と云て是を許さず。或時仲達蜀の

歩出齊東門云々—蒙求に晏子春秋を引いて之を載す

二桃三士—齊の景公が

垣を阻て聞けるが、眉をひそめて潜に云けるは、是全く目出たき御夢にあらず。則天の凶を告るにて有べし。其故は昔異朝に呉の孫權、蜀の劉備、魏の曹操と云し人三人、支那四百州を三に分て、是を保つ。其志皆二を亡して、一にあはせんと思へり。然共曹操は才智世に勝れたりしかば、謀を帷帳の中に運して、敵を方域の外に防ぐ。孫權は弛張時有て士を勞ひ衆を撫でしかば、國を賊し政を掠る者競ひ集て、邪に帝都を侵し奪へり。劉備は王氏を出て遠からざりしかば、其心仁義に近して、利慾を忘るゝ故に、忠臣孝子四方より來て文教をはかり武德を行ふ。此三人智仁勇の三德を以て、天下を分て持ちしかば、呉魏蜀の三都相並で、鼎の如く峙てり。其比諸葛孔明と云賢才の人、世を避け身を捨てゝ、蜀の南陽山に在けるが、寂を釣り閑に耕て、歌ふ歌をきけば、

歩出齊東門。　往到蕩陰里。　里中有三墳。
壘々皆相似。　借問誰家塚。　田彊古冶子。
氣能排南山。　智方絶地理。　一朝見讒言。
二桃殺三士。　誰能爲此謀。　國將齊晏子。

とぞうたひける。蜀の智臣是を聞て、彼が賢なる所を知ければ、是を召て政を任せ官

尼のこと

悦で、今度合戰の雌雄、併借衆徒合力、憑靈神之擁護之上者、先以藤島庄所附平泉寺也。若得勝軍之利者、重可申行恩賞。仍執達如件。

建武四年七月二十七日　尾張守

平泉寺衆徒御中

と嚴密の御敎書をぞ成れける。衆徒是に勇て、若輩五百餘人は藤島へ下て城に楯籠り、宿老五十人は、爐壇の煙にふすぼり返て、怨敵調伏の法をぞ行はれける。

○義貞夢想事附諸葛孔明事

其七日に當りける夜、義貞朝臣不思議の夢をぞ見給ける。所は今の足羽邊と覺たる河の邊にて、義貞と高經と相對して陣を張る。未戰ずして數日を經る處に、義貞俄にたかさ卅丈計なる大蛇に成て、地上に臥給へり。高經是を見て、兵をひき楯を捨て逃る事、數十里にして止と見給て、夢は則覺にけり。義貞夙に起て、此夢を語り給に、龍は是雲雨の氣に乘て天地を動す物也。高經雷霆の響に驚て、葉公が心を失しが如くにて、去る事候べし。目出たき御夢なりとぞ合せける。爰に齋藤七郎入道道獻、

宿老―年功あるもの
總持―陀羅

○義貞重黒丸合戰事 附 平泉寺調伏法事

義貞京都の進發を急れつる事は、八幡の官軍に力をつけ、洛中の隙を伺ん爲也き。而に今其相圖相違しぬる上は、心閑に越前の敵を悉く退治して、重ねて南方に牒合てこそ、京都の合戰をば致さめとて、義貞も義助も河合庄へ打越て、先足羽城を攻らるべき企也。尾張守高經、此事を聞給て、御方僅に三百騎に足ざる勢を以て、義貞が三萬餘騎の兵に圍まれなば、千に一も勝事を得べからず。然といへ共、敵はや諸方の道を差塞ぬと聞ゆれば、落とも何までか落延べき。唯偏に打死と志て、城を堅くするより外の道やあるべきとて、深田に水を懸入て、馬の足も立ぬ樣にこしらへ、路を掘切て穽をかまへ、橋をはづし、溝を深して、其内に七の城を拵へ、敵せめば、互に力を合て、後へまはりあふ樣にぞ構られたりける、此足羽城と申は、藤島庄に相並で、城郭半は彼庄をこめたり。依之平泉寺の衆徒の中より申けるは、藤島庄は、當寺多年山門と相論する下地にて候。若當庄を平泉寺に附らるべく候はゞ、若輩をば城々にこめおきて合戰致させ、宿老は總持の扉を閉て御祈禱を致すべきにて候とぞ云ける。尾張守大に

にあらず。いで一戰して敵に見せんと云儘に、わなゝく〳〵走り立て、傍にありける大石の五六人して持あぐる程なるを、輕々と提て、敵の群て立たる其中へ、十四五程大山の崩るゝが如くに投たりける。寄手數萬の兵共、此大石に打れて、將棊倒をするが如く、一同に谷底へころび落ければ、己が太刀長刀につき貫て、命を墮し創を蒙る者幾千萬と云數を知らず。今夜既に攻落されぬと見えつる八幡城、思の外にこらへてこそ、松山が力は唯高木が身にありけりと、笑はぬ人もなかりけり。去程に、敦賀まで著たりける越前の勢共、遙に八幡山の炎上を聞て、いか樣せめ落されたりと心得て、實否を聞定ん爲に數日逗留して、徒に日數を送る。八幡の官軍は、兵粮を社頭に積で悉燒失しかば、北國の勢を待までのこらへ場もなかりければ、六月廿七日の夜半に、潛に八幡の御山を退落て、又河内國へぞ歸りける。此時若八幡の城今四五日もこらへ、北國の勢逗留もなく上りたらましかば、京都は唯一戰の内に攻落すべかりしを、聖運時未至らざりけるにや、兩陣の相圖相違して、敦賀と八幡との官軍共、互に引て歸りける薄運の程こそあらはれたれ。

覿面ー目の前

方は、嶮岨にして、登がたければ、防に其便あり。西へなだれたる尾崎は、平地につゞきたれば、僅に掘切たる乾堀一重を憑で、春日少將顯信朝臣の手の者共、五百餘騎にて支たりけるが、敵の火を見て攻上りける勢に心を迷して、皆引色にぞ成にける。爰に城中の官軍、多田入道が手の者に、高木十郎、松山九郎とて、名を知られたる兵二人あり。高木は其心剛にして力足らず、松山は力世に勝て心臆病也。二人共に同關を固めて有けるが、一の關を敵にせめ破られて、二の關になほ支てぞ居たりける。敵已に逆茂木を引破て、關を切て落さんとしけれども、例の松山が癖なれば、手足慄戰て、戰はん共せざりけり。高木十郎是を見て、眼を瞋かし、腰の刀に手を懸て云けるは、敵四方を圍て、一人も餘さじと攻戰ふ合戰也。こゝを破られては、宗徒の大將達、乃至我々に至までも、落て殘る者やあるべき。されば爰を先途と戰べき處なるを、御邊以の外に臆して見え給こそ淺猿けれ。平生百人二百人が力ありと自稱せられしは、何の爲の力ぞや。所詮御邊爰にて手を摧きたる合戰をし給はずば、我敵人の手に懸んよりは、御邊と刺違へて死べしと忿て、誠に思切たる體にぞ見えたりける。松山其色を見て、覿面の勝負敵よりも猶怖くや思けん、暫しづまり給へ。公私の大事此時なれば、我命惜むべき

れば、一手に分て、國をも支へ、又京をも攻べしとて、義貞は三千餘騎にて、越前に留り、義助は二萬餘騎を率して、七月二十九日越前の府を立て、翌日には敦賀津に著にけり。

○八幡炎上事

將軍此事を聞召れて、八幡城未攻落さで、兵攻戰疲ぬる處に、脇屋右衛門佐義助山門と成合て、北國より上洛するなるこそ、ゆゝ敷珍事なりけれ。期に臨で引かば、南方の敵勝に乘べし。未事の急にならぬ先に、急ぎ八幡の合戰を閣て、京都へ歸て北國の敵を相待べしと、高武藏守の方へぞ下知し給ひける。師直此由を聞て、此城を攻かゝりながら、落さで引返しなば、南方の敵に利を得られつべし。さて又京都を閣ば、北國の敵に隙を伺れつべし。彼此如何せんと、進退谷て覺えければ、或夜の雨風の紛に、逸物の忍を八幡山へ入れて、神殿に火をぞ懸たりける。此八幡大菩薩と申奉るは、忝も王城鎭護の宗廟にて、殊更源家崇敬の靈神にて御座せば、寄手よも社壇を燒く程の惡行はあらじと、官軍油斷しけるにや、城中周章騷動して、煙の下に迷倒す。是を見て、四方の寄手十萬餘騎谷々より攻上て、既に一二の木戸口までぞ攻入ける。此城三

逸物の忍―忍の術に勝れたるもの

青鳥—故事は漢武故事に出づ、書簡のこと

二年—天正本三年に作るを可とす來牒の日附亦同じ

之妖孽者、吾山所不讓他。途殊歸同、豈其際措一線縷乎。夫尊氏直義等暴惡、千古未聞其類。是匪啻佛法王法之怨敵、兼又爲害國害民之殘賊。孟軻有言、出於己者歸己矣。渠若今不亡、以何待之。雖然逆臣益振威、義士恒有困何乎。取類看之、夫差并越之威、遂爲勾踐所摧、項羽拔山之力、却爲沛公見獲。是則所以吳無義而猛、漢有仁而正也。安危所據無若天命矣。是以山門内重武侯之忠烈期佳運、外忝聖主之尊崇祈皇猷。上下庶幾貪聽之處、儻投青鳥見竭丹心。一山之欣悅底事如之。七社之靈鑒、此時露顯。倩把往昔量吉凶、當山如棄則擧世起而不立。治承之亂、高倉宮聿沒外都之塵。吾寺專與則合衆徼而不得。元曆之初、源義仲忽攀中夏之月。是人情起神慮、捨彼取此之故也。滿山之群議今如斯、凶徒之誅戮何有疑。時節已到、暫勿遲疑。仍牒送如件。竭信以狀。

延元二年七月日

とぞ書たりける。山門の返牒越前に到來しければ、義貞不斜悅で、頓て上洛せんとし給ひけるが、混に北國を打捨なば、高經如何樣跡より起て、北陸道をさし塞ぬと覺

づ

飛火雞—晉書列傳に出づ

虎符—原本虎竹とあり一本に據て改む兵を徵す割符

儻若不損故舊、拉大敵於隻手中必矣。傳聞當山之護持、亙古亙今、卓犖于乾坤。承和修大威德之法、嗣君乃坐玉扆。承平安四天王之像、將門遂傷鐵身。是以賴佳運於七社之冥應、復舊規於一山之懇祈。熟思量之、凡惡在彼與義在我、孰與天下之治亂山上安危。早聞一諾之群議、以遠合虎符、速麾三軍之卒伍、而爲搖龍旗。牒送如件、勸之以狀。

延元二年七月日

とぞ書たりける。山門の大衆は、先年春夏兩度山上へ臨幸成たりし時、粉骨の忠功を致すに依て、若干の所領を得たりしが、官軍北國に落行き、主上京都に還幸成しかば、大望一々に相違して、あはれいかなる不思議も有て、先帝の御代になれかしと祈念する處に、此牒狀到來したりければ、一山擧て悅び合る事限なし。同七月二十三日に一所住の大衆、大講堂の庭に會合して、返牒を送る。其詞云、

延曆寺牒新田左近衞中將家衙

來牒一紙被載朝敵追罰事

右鎭四夷之擾亂、而致國家之太平者、武將所不失節。祈百王之寶祚、而銷天地之

玄風—上古の風

書王—原本君王とあり一本に據て改む中書王は尊良親王をさす

北極—北極星

驪金牛云々—蜀記に出

式竊觀素昔、渉聞玄風、桓武皇帝下詔一基叡山者、以聖化期昌顯密兩宗於億載。傳敎大師上表九鎭王城者、以法威爲護國家太平於無疆而已也。然則聞山門衰微悼之、見朝廷傾廢悲之。不九五之聖位三千之衆徒、爲孰乎。去元弘之始、一天革命、四海歸風之後、有源家餘裔尊氏直義。無忠貪大祿、不材登高官、自誇超涯之皇澤、不顧缺盈之天眞。忽棄君臣之義、猥懷豺狼之心、聿害流于蒸民、禍溢于八極。公議不獲止將行天誅之日、煙塵暗佼九重月、翠花再掃四明之雲。此時貴寺忽輔危、肅臣謀退暴。雖然守死於善道者寡、求黨於利門者多。因玆官軍戰破、而聖主忝遺羑里之囚、鼪城食竭而書王自伏戰場之刃。自爾以降逆徒恣意、逕刑濫行罰。凶戾殘賊、無不惡而悔。自疑天維云絕、日月無所懸、地軸既催、山川不得載。側耳奪目。苟不忍待時。呑炭含刃、徑欲計近敵之處、欻聽鑾輿幸南山、衆星拱北極。於是蘇思發思、徹憤啓憤、起自嶮隘之中、纔得郡縣之衆。然則驪金牛開路、飛火雞刧城。其戰未半、決勝於一擧、退敵於四方訖。嚮昔范蠡鬪黄地、破吳二萬之旅、周郎挑赤壁、虜魏十萬之軍。把來何足比。如今擧國量誅朝敵。天慮以臣爲爪牙之任、肆不遑卜否泰、振臂將發京師。貴山

九重の凶徒—京都にある逆徒

○義貞牒二山門一同返牒事

兒島備後守高德、義貞朝臣に向て申けるは、先年京都の合戰の時、官軍山門を落されて候し事、全く軍の雌雄に非ず、唯北國の敵に道をふさがれて、兵粮につまりし故也。向後も其時の如くに候はゞ、縱山上に御陣を召れ候共、又先年の樣なる事決定たるべく候。然れば越前加賀の宗徒の城々には、皆御勢を殘し置れて、兵粮を運送させさせ、大將一兩人に御勢を六七千騎も差副られ、山門に御陣を召れ、京都を日々夜々攻られば、根を深し蔕を固する謀と成て、八幡の官軍に力を附け、九重の凶徒を亡すべき道たるべく候。但小勢にて山門へ御上候はゞ、衆徒案に相違して、御方を背く者や候はんずらん。先山門へ牒狀を送られて、衆徒の心を伺ひ御覽ぜられ候へかしと申ければ、義貞誠に此議謀濃にして慮遠し。さらば牒狀を山門へ送るべしと宣へば、高德兼て心に草案をやしたりけん、則筆を取て書レ之。其詞云、

正四位上行左近衞中將兼播磨守源朝臣義貞牒二延曆寺衙一

請下早得二山門最屓一諾一、誅二罰逆臣尊氏直義以下黨類一、致中佛法王法光榮上狀。

隻手の中―所謂片手わざにて事の容易なること

超涯―身分に過ぎたる事

ん事、隻手の中にありと、皆掌をさす思をなせり。げにも尾張守高經の義を守る心は奪がたしといへ共、纔なる平城に、三百餘騎にて楯籠り、敵三萬餘騎を四方に受て、籠鳥の雲を戀ひ、涸魚の水を求る如くなれば、何までの命をか、此世の中に殘すらんと、敵は是を欺て勇み、御方は是に弱て悲めり。既に來廿一日には、黒丸城を攻らるべしとて、堀溝をうめん爲に、うめ草三萬餘荷を、國中の人夫に持寄させ、持楯三千餘帖をはぎ立て、樣々の攻支度をせられける處に、吉野殿より勅使を立られて仰られけるは、義興顯信敗軍の勞兵を率して、八幡山に楯籠る處に、洛中の逆徒數を盡して是を圍む。城中已に食乏して、兵皆疲る。然といへ共、北國の上洛近にあるべしと聞て、士卒梅酸の渇を忍ぶ者也。進發若延引せしめば、官軍の沒落疑有べからず。天下の安危唯此一擧にあり。早其境の合戰を閣て、京都の征戰を專にすべしと仰られて、御宸筆の勅書をぞ下されける。義貞朝臣勅書を拜見して、源平兩家の武臣、代々大功ありと云共、直に宸筆の勅書を下されたる例、未聞所也。是當家超涯の面目也。此時命を輕ぜずんば、正に何の時をか期すべきとて、足羽の合戰を閣れて、先京都の進發をぞいそがれける。

兆前に機を見る一事の起らぬ前に豫め其機を看破すること

にて、七月三日越後の府を立て、越中國へ打越けるに、其國の守護普門藏人俊淸、國の境に出合て、是を支んとせしか共、俊淸無勢なりければ、大半討れて松倉城に引籠る。越後勢はこゝを打捨て、やがて加賀國へ打通る。富樫介是を聞て、五百餘騎の勢を以て、阿宅・篠原の邊に出合ふ。然れ共敵に對揚すべき程の勢ならねば、富樫が兵二百餘騎討れて、那多城へ引籠る。越後の勢兩國二箇度の合戰に打勝て、北國所々の敵恐るゝに足らずと思へり。此まゝにて軈て越前へ打越べかりしが、是より京までの道は、多年の兵亂に國つひえ民疲れて、兵粮有べからず。加賀國に暫逗留して、行末の兵粮を用意すべしとて、今湊宿に十餘日まで逗留す。其間に軍勢劍白山以下所々の神社佛閣に打入て、佛物神物を犯し取り、民屋を追捕し、資財を奪取事法に過たり。嗚呼靈神爲レ怒則災害滿レ岐といへり。此軍勢の悪行を見に、其罪若一人に歸せば、大將義貞朝臣、此度の大功を立ん事、如何あるべからんと、兆前に機を見る人は、潛に是を怪めり。

○宸筆勅書被レ下ニ於義貞一事

口を經て越後勢已に越前の河合に著ければ、義貞の勢彌强大に成て、足羽城を拉が

驕に—廣く深き意なる故に甚だの義に用ひたる也

烹鮮—國政の意、老子に治大國若烹小鮮とあるに本づく

高岸の上に相支て、散々に射させける間、漲る浪におぼれて、馬人若干討れにければ、是も又差たる合戰も無して引返す。三番に細屋右馬助千餘騎にて、河合庄より押寄、北の端なる勝虎城を取卷て、卽時に攻落さんと、塀につき堀につかりて攻ける處へ、鹿草兵庫助三百餘騎にて、後攻にまはり、大勢の中へ懸入て、面も振らず攻戰ふ。細屋が勢、城中の敵と後攻の敵とに追立られて、本陣へ引返す。角て早寄手足羽の合戰に打負る事三箇度に及べり。此三人の大將は、皆天下の人傑、武略の名將たりしかども、餘に敵を侮て、驕に大早なりし故に、毎度の軍に負にけり。されば後漢の光武武に臨む每に、大敵を見ては欺き、小敵を見ては恐よと云けるも、理なりと覺たり。

○越後勢越二越前一事

去ば越後國は、其境上野に隣て、新田の一族充滿たる上、元弘以後義貞朝臣重恩の國として、拜任已に多年たりしかば、一國の地頭御家人、其烹鮮に隨事日久し。義貞已に北國を平げて、京都へ攻上らんとし給ふ由を聞て、大井田彈正少弼、同式部大輔、中條入道、鳥山左京亮、風間信濃守、禰津掃部助、太田瀧口を始として、其勢都合二萬餘騎

去二月—延元三年二月

太平記　巻第二十

○黑丸城初度軍事 附足羽度々軍事

新田左中將義貞朝臣、去二月の始に越前府中の合戰に打勝給し刻、國中の敵の城七十餘箇所を暫時に攻落して、勢又強大になりぬ。此時山門の大衆、皆舊好を以て、內々心を通せしかば、先彼比叡山に取上て、南方の官軍に力を合せ、京都を攻られん事は無下に輒かるべかりしを、足利尾張守高經、猶越前の黑丸城に落殘ておはしけるを、攻落さで上洛せん事は無念なるべしと、詮なき小事に目を懸て、大義を次に成されけるこそうたてけれ。五月二日義貞朝臣自ら六千餘騎の勢を率して國府へ打出られ、波羅蜜、安居、河合、春近、江守五箇所へ、五千餘騎の兵をさし向られ、足羽城を攻させらる。先一番に義貞朝臣の小舅、一條少將行實朝臣、五百餘騎にて江守より押寄て、黑龍明神の前にて相戰ふ。行實の軍利あらずして、又本陣へ引返さる。二番に船田長門守政經七百餘騎にて、安居渡より押寄て、兵半河を渡る時、細川出羽守二百餘騎にて河向に馳合せ、

股肱の重臣
—最もたのみとする重要なる臣

奉レ討しかば、首をば丹後國住人、武藤右京進政淸是を取て、冑、太刀、刀まで進覽したりければ、師直是を實檢して、疑ふ所無りしかば、抽賞御感の御教書を兩人にぞ被レ下ける。哀哉、顯家卿は武略智謀其家にあらずといへども、無雙の勇將にして、鎭守府將軍に任じ、奥州の大軍を兩度まで起て、尊氏卿を九州の遠境に追下し、君の宸襟を快く奉レ休られし其譽、天下の官軍に先立て爭ふ輩無りしに、聖運天に不レ叶、武德時至りぬる其謂にや、股肱の重臣、あへなく戰場の草の露と消給しかば、南都侍臣官軍も、聞て力をぞ失ける。

公界―公事といふに同じ、私事とあるに對していふ

を盡し、大家軍兵を起すと云ども、合戰利を失と聞て、餘所には如何見て過べき。述懐は私事、弓矢の道は公界の義、遁れぬ所也とて、偸に都を打立て、手勢計を引率し、御方の大勢にも不㆓牒合㆒、自身山下に推寄せ、一日一夜攻戰ふ。是にして官軍も若干討れ創を被りける。直信直常の兵ども、殘少に手負討れて、御方の軍へ引て加る。此比の京童部が、桃井塚と名づけたるは、兄弟合戰の在所也。是を始として、厚東駿河守、大平孫太郎、和田近江守、自戰て創を被り、數輩の若黨を討せ、日夜旦暮相挑。かゝる處に、執事師直所々の軍兵を招集め、和泉の境河内は、故敵國なれば、さらでだに恐懼する處に、強敵其中に起ぬれば、和田楠も力を合すべし。未微なるに乘て、早速に退治すべしとて、八幡には大勢を差向て、敵の打て出ぬ樣に四方を圍み、師直は天王寺へぞ被㆑向ける。顯家卿の官軍共、疲れて而も小勢なれば、身命を棄て支戰ふといへども、軍無㆑利して諸卒散々に成しかば、顯家卿立足もなく成給て、吉野へ參らんと志、僅に二十餘騎にて、大敵の圍を出んと、自破㆑利碎㆑堅給ふといへども、其戰功徒にして、五月廿二日、和泉の境、安部野にて討死し給ければ、相從ふ兵悉腹切創を被て、一人も不㆑殘失にけり。顯家卿をば、武藏國の越生四郎左衞門尉

百餘騎、身命を捨て切て入る。顯家卿の兵も、爰を先途と支戰しかども、長途の疲武者何かは叶ふべき。一陣二陣あらけ破て、數萬騎の兵ども、思々にぞ成にける。顯家卿も同く在所をしらず成給ぬと聞えしかば、直信、直常兄弟は、大軍を容易追散し、其身は無恙都へ歸上られけり。されば戰功は萬人の上に立、抽賞は諸卒の望を塞がんと、獨ゑみして待居給たりしかども、更に其功其賞に不中しかば、桃井兄弟は萬世間を述懐して、天下の大變を憑にかけてぞ待れける。斯る處に、顯家卿舍弟春日少將顯信朝臣、今度南都を落し敗軍を集め、和泉の境に打出て、近隣を犯奪、頓八幡山に陣を取て、勢京洛を呑。依之京都又騒動して、急ぎ討手の大將を差向べしとて、嚴命を被下しかども、軍忠異于他桃井兄弟だにも、抽賞の儀もなし。增て其已下の者はさこそ有んずらめとて、曾て進む兵更に無りける間、角ては叶まじとて、師直一家を盡して打立給ける間、諸軍勢是に驚て、我も〳〵と馳下る。されば其勢雲霞の如くにて、八幡山の下四方に尺地も不殘充滿たり。されども要害の堀巖して、猛卒悉志を同して楯籠たる事なれば、寄手每度戰に利を失ふと聞えしかば、桃井兄弟の人々、我身を省みて、今度の催促にも不應、都に殘留られたりけるが、高家氏族

眉目―面目

を以て都へ攻上、朝敵を一時に追落す歟、もし不レ然は、尸を王城の土に埋み候はんこそ、本意にて候へと、誠に無二餘儀一申けり。顯家卿も此議げにもと甘心せられしかば、頓て京都へ攻上給はんとの企なり。其聞え京都に無レ隱しかば、將軍大に驚給て、急ぎ南都へ大勢を差下し、顯家卿を遮り留むべしとて、討手の評定ありしかども、我向んと云人無りけり。角ては如何と、兩將其器を選び給ひけるに、師直被レ申けるは、何としても此大敵を拉がん事は、桃井兄弟にまさる事あらじと存候。其故は、自二鎌倉一退て經二長途一、所々にして戰候しに、每度此兵どもに、手痛く當りて、氣を失ひ附たる者共なり。其臆病神の醒めぬ先に、桃井馳向て、南都の陣を追落さん事、案の内に候と被レ申しかば、さらばとて、頓て師直を御使にて、桃井兄弟に此由を被レ仰しかば、直信直常仔細を申に及ばずとて、其日頓て打立、南都へぞ進發せられける。顯家卿是を聞て、般若坂に一陣を張、都よりの敵に相當る。桃井直常兵の先に進んで、今度諸人の辭退する討手を、我等兄弟ならでは不レ可レ叶とて、其選に相當る事、且は弓矢の眉目也。此一戰に利を失はゞ、度々の高名皆泥土にまみれぬべし。志を一に鬪して、一陣を先攻破れやと下知せられしかば、曾我左衛門尉を始として、究竟の兵七

師泰、師冬、頼春が、敵を大勢也と聞て、態水澤を後に成て、關の藤川に陣を取けるも、專士卒心を一にして、再び韓信が謀を示す者なるべし。去程に、國司の勢十萬騎、垂井、赤坂、青野原に充滿して、東西六里南北三里に陣を張る。夜々の篝を見渡せば、一天の星斗落て欄干たるに異ならず。此時越前國に、新田義貞義助北陸道を從て、天を幹らし地を略する勢專昌也。奥勢若黑地の陣を拂ん事難儀ならば、北近江より越前へ打越て、義貞朝臣と一つになり、比叡山に攀上り、洛中を脚下に直下して、南方の官軍と牒じ合せ、東西より是を攻めば、將軍京都には一日も堪忍し給はじと覺しを、顯家卿我大功義貞の忠に成んずる事を猜で、北國へも引合ず、黑地をも破りえず、俄に士卒を引て、伊勢より吉野へぞ廻られける。さてこそ日來は鬼神の如くに聞えし奥勢、黑地をだにも破えず、まして後攻の東國勢、京都に著なば、恐るゝに足ざる敵也とぞ、京勢には思ひ劣されける。顯家卿南都に著て、且く汗馬の足を休て、諸卒に向て合戰の異見を問給ひければ、白河の結城入道進て申けるは、今度於路次度々の合戰に打勝、所々の强敵を追散し、上洛の道を開といへども、青野原の合戰に、聊利を失ふに依て、黑地橋をも渡り得ず、此儘吉野殿へ參らん事、餘に云甲斐なく覺え候。唯此御勢

棄たりける。是は兎ても遁るまじき所を知て、士卒一引も引心なく、皆討死せよと、しめさん爲の謀也。夜明ければ、項羽の兵四十萬騎にて押寄、敵を小勢也と侮て、戰を即時に決せんとす。其勢參然として左右を不顧懸けるを、韓信が兵二千餘騎一足も引ず、死を爭て戰ける程に、項羽忽に討負て、討るゝ兵二十萬人、逃るを追事五十餘里なり。沼を境ひ澤を隔て、こゝまでは敵よも懸る事得じと、橋を引てぞ居りける。漢の兵勝に乘て、今夜軈項羽の陣へ寄んとしけるに、韓信兵共を集て申けるは、我思樣あり。汝等皆持所の兵粮を捨てゝ、其袋に砂を入て持べしとぞ下知しける。兵皆心得ぬ事哉と思ながら、大將の命に隨ひて、士卒皆持所の粮を捨て、其袋に砂を入て、項羽か陣へぞ押寄たる。夜に入て項羽か陣の樣を見るに、四方皆沼を境ひ澤を隔て、馬の足も立ず、渡るべき樣なき所にぞ陣取たりける。此時韓信持たる所の砂嚢を澤に投入投入、是を堤に成て、其上を渡るに、深泥更に平地の如し。項羽の兵二十萬騎、終日の軍には疲れぬ。爰までは敵よすべき道なしと油斷して、帶紐といてねたる處に、高祖の兵七千餘騎、時を咄と作て押寄たれば、一戰にも及ばず、項羽の兵十萬餘騎、皆河水におぼれて討れにけり。是を名附て、韓信が嚢砂背水の謀とは申也。今

甘心—同意する意

相待んなりは、兵勝の利に附て、急ぎ近江美濃邊に馳向ひ、戰を王城の外に決せんには如じと、勇其氣に顯れ、謀其理に協て申されければ、將軍も、師直も、此議然べしとぞ甘心せられける。さらば時刻をうつさず向へとて、大將軍には高越後守師泰、同播磨守師冬、細川刑部大輔賴春、佐々木大夫判官氏賴、佐々木佐渡判官入道道譽、子息近江守秀綱、此外諸國の大名五十三人、都合其勢一萬餘騎、二月四日都を立、同六日の早旦に、近江と美濃との境なる黑地川に著にけり。奥勢も垂井赤坂に著ぬと聞えければ、こゝにて相まつべしとて、前には關の藤川を隔、後には黑地川をあてゝ、其際に陣をぞ取たりける。抑古より今に至まで、勇士猛將の陣を取て敵を待には、後は山により、前は水を境ふ事にてこそあるに、今大河を後に當て、陣を取られける事は、又一の兵法なるべし。昔漢の高祖と楚の項羽と、天下を爭事八箇年が際、戰事休ざりけるに、或時高祖軍に負て逃る事三十里、討殘されたる兵を數るに、三千餘騎にも足ざりけり。項羽四十餘萬騎を以て、是を追けるが、其日既に暮ぬ。夜明ば漢の陣へ押寄て、高祖を一時に亡さん事、隻手の内に在とぞ勇みける。爰に高祖の臣に韓信と云ける兵を大將に成して、陣を取らせけるに、韓信態後に大河を當て、橋を燒落し、舟を打破てぞ

れ共、敵雲霞の如くなれば、こゝに圍れ、彼に取籠られて、勢もつき氣も屈しければ、七百餘騎の勢も僅に二十三騎に打成され、土岐は左の目の下より、右の口脇鼻まで、鋒深に切附られて、長森城へ引籠る。桃井も三十餘箇度の懸合に、七十六騎に打成され、馬の三頭平頸二太刀切られ、草摺のはづれ三所つかれて、餘に戰疲ければ、此軍是に限るまじ、いざや人々馬の足休めんと、洲俣河に馬を追漬て、太刀長刀の血を洗て、日も暮れば野に下居て、終に河より東へは越給はず。京都には奧勢上洛の由、先立て聞えけれ共、土岐美濃國にあれば、さりとも一支は支へんずらんと、憑敷思はれける處に、賴遠既に青野原の合戰に打負て、行方知らずとも聞え、又は討れたり共披露ありければ、洛中の周章斜ならず。さらば宇治勢多の橋を引てや相待つ。不然ば先西國の方へ引退て、四國九州の勢を附て、却て敵をや攻べきと、異議まち〳〵に分て、評定未落居せざりけるに、越後守師泰、且く思案して申されけるは、古より今に至まで、都へ敵寄來る時、宇治勢多の橋を引て戰事度々也。然れ共此河にて敵を支て、都を落されずと云事なし。寄る者は廣く萬國を御方にして威に乘り、防ぐ者は纔に洛中を管領して、氣を失故也。不吉の例を逐て、忝く宇治勢多の橋を引、大敵を帝都の邊にて

毗嵐―佛説に世界の大風をいふ

輔、同宮内少輔、武藏上野の勢一萬餘騎を率して、靑野原に打出たり。爰には新田德壽丸、宇都宮の紀淸兩黨三萬餘騎にて相向ふ。兩陣の旗の紋、皆知りたる兵共なれば、後の嘲をや恥たりけん、互に一足も引ず、命を涯に相戰ふ。毗嵐斷て、大地忽に無間獄に墮、水輪湧て、世界こと〴〵く有頂天に翻へらんも、かくやと覺るばかり也。され共大敵とりひしぐに難ければ、上杉遂に打負て、右往左往に落て行。五番に桃井播磨守直常、土岐彈正少弼賴遠、態鋭卒をすぐつて、一千餘騎渺々たる靑野原に打出て、敵を西北に請てひかへたり。是には奧州の國司鎭守府將軍顯家卿、副將軍春日少將顯信、出羽奧州の勢六萬餘騎を率して相向ふ。敵に御方を見合すれば、千騎に一騎を合すとも、猶當るに足ずと見ける處に、土岐と桃井と、少も機を呑れず、前に恐べき敵なく、後に退くべき心有とも見えざりけり。時の聲を揚る程こそ有けれ、千餘騎唯一手に成て、大勢の中に颯と懸入、半時計戰て、つと懸ぬけて其勢を見れば、三百餘騎は討れにけり。相殘勢七百餘騎を、又一手に束ねて、副將軍春日少將のひかへたる二萬餘騎が中へ懸入て、東へ追靡、南へ懸散し、汗馬の足を休めず、太刀の鐔音止時なく、や聲を出てぞ戰合たる。千騎が一騎に成までも、引なく〳〵と互に氣を勵して、こゝを先途と戰け

馬は牛、蚊は寇の誤なるべし、事は史記秦本紀に出づ

天下の人口云々—天下の毀譽褒貶此一擧にあり

馬を擊ずと云しに似たるべし。天下の人口、唯此一擧に有べし。所詮自餘の御事は知ず、賴遠に於ては、命を際の一合戰して、義にさらせる尸を、九原の苔に留むべしと、又餘儀もなく申されければ、桃井播磨守、某も如此存候。面々はいかにと申されければ、諸大將皆理に服して、悉く此議にぞ同じける。去程に、奧勢の先陣、既に垂井赤坂邊に著たりけるが、跡より上る後攻の勢近づきぬと聞えければ、先其敵を退治せよとて、又三里引返して、美濃尾張兩國の間に陣を取らずと云處なし。後攻の勢は八萬餘騎を五手に分、前後を鬮に取たりければ、先一番に小笠原信濃守、芳賀清兵衞入道禪可、二千餘騎にて自貴渡へ馳向ば、奧勢の伊達信夫の兵共、三千餘騎にて河を渡てかゝりけるに、芳賀、小笠原散々に懸立られて、殘少に討れにけり。二番に高大和守三千餘騎にて洲俣河を渡る所に渡しも立ず、相摸次郎時行五千餘騎にて亂合、互に笠符をしるべにて組で落、落重て頸を取り、半時ばかり戰たるに、大和守が憑切たる兵、三百餘人討れにければ、東西に散靡て、山を便に引退く。三番に今川五郞入道、三浦新介、阿字賀に打出て、横合に懸る所を、南部、下山、結城入道一萬餘騎にて懸合、火出程に戰たり。今川三浦元來小勢なれば、打負て河より東へ引退く。四番に上杉民部大

蟷螂云々―莊子山木篇に出づ、人間世とあるは作者の誤なるべし

蚊を殺す―

元來將軍方に志有ければ、紀清兩黨が國司に屬して上洛しつる時は、虚病して國に留りけるが、清の黨千餘騎を率して馳加る。此勢五萬餘騎國司の跡を追て、先陣已に遠江に著ば、其國の守護今川五郎入道二千餘騎にて馳加る。中一日ありて三河國に著けば、當國守護、高尾張守六千餘騎にて馳加る。又美濃洲俣へ著ば、土岐彈正少弼頼遠七百餘騎にて馳加る。國司の勢六十萬騎前を急て、將軍を討奉らんと上洛すれば、高、上杉、桃井が勢八萬餘騎、國司を討んと跡を附て追て行。蟷螂蟬をうかゞへば、野鳥蟷螂を窺ふと云、莊子が人間世のたとへ、げにもと思ひ知れたり。

○青野原軍事 附 囊沙背水事

坂東よりの後攻の勢、美濃國に著て評定しけるは、將軍は定て宇治勢多の橋を引て、御支あらんずらん。去程ならば、國司の勢河を渡しかねて、徒に日を送べし。其時御方の勢勞兵の弊に乘て、國司の勢を前後より攻んに、勝事を立に得つべしと申合れけるを、土岐頼遠默然として耳を傾けゝるが、抑目の前を打通る敵を、大勢なればとて、矢の一をも射ずして、徒に後日の弊に乘ん事を待ん事は、唯楚の宋義が蚊を殺には、其

て、寄手谷々に亂入る。寄手三方を圍て、御方一處に集しかば、打るゝ者は多して、戰ふ兵は少し。かくては始終叶べしとも見えざりければ、大將左馬頭殿を具足し奉て、高、上杉、桃井以下の人々、皆思々に成てぞ落られける。かゝりし後は、東國の勢宮方に隨附事、雲霞の如し。今は鎌倉に逗留して、何の用かあるべきとて、國司顯家卿以下正月八日鎌倉を立て、夜を日についで上洛し給へば、其勢都合五十萬騎、前後五日路左右四五里を押て通るに、元來無慚無愧の夷共なれば、路次の民屋を追捕し、神社佛閣を燒拂ふ。惣て此勢の打過ける跡、塵を拂て海道二三里が間には在家の一宇も殘らず、草木の一本も無りけり。前陣已に尾張の熱田に著ければ攝津大宮司入道源雄五百餘騎にて馳附、同日美濃の根尾徳山より、堀口美濃守貞滿千餘騎にて馳加る。今は是より京までの道に、誰ありとも此勢を聊も支んとする者は有がたしとぞ見えたりける。爰に鎌倉の軍に打負て、方々へ落られたりける上杉民部大輔舍弟宮内少輔は、相摸國より起り、桃井播磨守直常は、箱根より打出、高駿河守は、安房上總より鎌倉へ押渡り、武藏相摸の勢を催るゝに、所存有て國司の方へは附かざりつる江戸、葛西、三浦、鎌倉、坂東の八平氏、武藏の七黨三萬餘騎にて馳來る。又淸の黨旗頭、芳賀兵衛入道禪可も、

十一歳―足利義詮は元徳二年に生れ貞治六年に薨ぜりされば延元二年には八歳也

大將左馬頭殿は、其比纔に十一歳也。未思慮あるべき程にてもおはせざりけるが、つくづくと此評定を聞給て、抑是は面々の異見共覺ぬ事哉。軍をする程にては一方負ぬ事あるべがらず。そゞろに怖ば軍をせぬ者にてこそあらめ。苟も義詮東國の管領として、たまゝゝ鎌倉にありながら、敵大勢なればとて、爰にて一軍もせざらんは後難遁れがたくして、敵の欺ん事尤當然也。されば縱御方小勢なりとも、敵寄來らば馳向て戰はんに、叶はずば討死すべし。若又遁つべくは、一方打破て、安房上總の方へも引退て、敵の後に隨て上洛し、宇治勢多にて前後より攻たらんに、などか敵を亡さゞらんと、謀濃に義に當て宣ければ、勇將猛卒均く此一言に勵れて、さては討死するより外の事なしと、一偏に思切て、鎌倉中に楯籠る。其勢一萬餘騎には過ざりけり。是を聞て、國司、新田德壽丸、相摸次郎時行、宇都宮の紀清兩黨、彼此都合十萬餘騎、十二月二十八日に、諸方皆牒合て、鎌倉へとぞ寄たりける。鎌倉には敵の樣を聞て、とても勝べき軍ならずと、一筋に皆思切たりければ、城を堅し壘を深くする謀をも事とせず、一萬餘騎を四手に分て、道々に出合、懸合々々一日支て、各身命を惜まず戰ける程に、一方の大將に向はれける志和三郎、杉下にて討れにければ、此陣より軍破

德壽丸―新田義興

る。これに依て國司伊達信夫の兵二萬餘騎を差遣て、宇都宮城を攻らるゝに、禪可三日が中に攻落れて、降參したりけるが、四五日を經て後、又將軍方にぞ馳附ける。此時に先亡の餘類、相摸次郎時行も、已に吉野殿より勅免を蒙てければ、伊豆國より起て、五千餘騎足柄箱根に陣を取て、相共に鎌倉を攻べき由を、國司方へ牒ぜらる。又新田左中將義貞の次男德壽丸、上野國より起て、二萬餘騎武藏國へ打越て、入間河にて著到を附け、國司の合戰若延引せば、自餘の勢を待ずして、鎌倉を攻べしとぞ相謀ける。鎌倉には上杉民部大輔、同中務大輔、志和三郎、桃井播磨守、高大和守以下宗徒の一族大名數十人、大將足利左馬頭義詮の御前に參て、評定ありけるは、利根河の合戰の後、御方は氣を失て大半は落散候。又敵は勢に乘て彌猛勢に成候ぬ。今は重て戰共、勝事を得難し。唯安房上總へ引退て、東八箇國の勢、何方へか附と見て、時の變異に隨ひ、軍の安否を計て戰ふべきかと、延々としたる評定のみ有て、誠に冷しく聞えたる擬勢は、更になかりけり。

○追奥勢跡道々合戰事

竹を撓むる形、斜にと云程の義

兄弟二人是を見て、人の渡したる處を渡ては、何の高名かあるべきと、共に腹を立て、是より三町計上なる瀬を唯二騎渡けるが、岩浪高して逆卷く波に巻入られて、人馬共に見えず、水の底に沈で失にけり。其身は徒に溺て、尸は急流の底に漂といへ共、其名は永く止て、武を九泉の先に耀す。さてこそ鬚髪を染て討死せし實盛が末とは覺えたれと、萬人感ぜし言の下に、先祖の名をぞ揚たりける。是を見て、奥州の勢十萬餘騎、一度に打入て。まつ一文字に渡せば、鎌倉勢八萬餘騎、同時に渡合て、河中にて勝負を決せんとす。され共、先一番に渡つる奥勢の人馬に、東岸の流せかれて、西岸の水の早き事、宛龍門三級の如くなれば、鎌倉の先陣三千餘騎、馬筏を押破られて、浮ぬ沈ぬ流行。後陣の勢は是を見て、叶はじとや思けん、河中より引返て、平野に支て戰けるが、引立ける軍なれば、右往左往に懸ちらされて、皆鎌倉へ引返す。國司利根河の合戰に打勝て、勢漸强大に成と云ども、鎌倉に猶東八箇國の勢馳集て、雲霞の如くなりと聞ければ、武藏の府に五箇日逗留して、竊に鎌倉の樣をぞ伺ひきゝ給ける。かゝる處に、宇都宮左少將公綱、紀清兩黨千餘騎にて國司に馳加る。然共芳賀兵衞入道禪可一人は、國司に屬せず、公綱が子息加賀壽丸を大將として、尚當國宇都宮城に楯籠

箆撓形－矢

らば軈鎌倉を攻落て、上洛すべしとて、八月十九日白川關を立て、下野國へ打越給ふ。鎌倉の管領足利左馬頭義詮、此事を聞給て、上杉民部大輔、細川阿波守、高大和守、其外武藏相摸の勢八萬餘騎を相副て、利根河にて支らる。去程に、兩陣の勢東西の岸に打臨て、互に是を渡さんと、渡るべき瀬やあると見ければ、其時節餘所の時雨に水増て、逆波高く漲落て、淺瀬はさてもありや無やと、事問べき渡守さへなければ、兩陣共に水の干落るほどを相待て、徒に一日一夜は過にけり。爰に國司の兵に長井齋藤別當實永と云者あり。大將の前にすゝみ出て申けるは、古より今に至まで、河を隔たる陣多けれ共、渡して勝ずと云事なし。縱水増て日來より深く共、此川宇治、勢多、藤戸、富士河に增る事はよもあらじ。敵に先づ渡されぬさきに、此方より渡て、氣を扶て戰を決候はんに、などか勝で候べきと申ければ、國司、合戰の道は勇士に任るにしかず、兎も角も計ふべしとぞ宣ける。實永大に悅で、馬の腹帶をかため、冑の緒をしめて、渡さんと打立けるを見て、いつも軍の先を爭ひける部井十郎、高木三郎少も前後を見つくろはず、唯二騎馬を颯と打入て、今日の軍の先懸、後に論ずる人あらば、河伯水神に向て問へと、高聲に呼て、箆撓形に流をせいてぞ渡しける。長井齋藤別當舍弟豐後次郎、

犂牛のたとへ―論語雍也篇に出づ犂牛は雜文の賤牛、賤しき者の子も其人物よくば用ゐられずと云ふことなしの意

其功に感ずるは―一本に其功に因はに作る

たりける。主上能々聞召て、犂牛のたとへ、其理しか也。罸其罪にあたり、賞其功に感ずるは、善政の最たりとて、則恩免の綸旨をぞ下されける。

○奥州國司顯家卿上洛 并新田德壽丸上洛事

奥州國司北畠源中納言顯家卿、去元弘三年正月に、園城寺合戰の時上洛せられて、義貞に力を加へ、尊氏卿を西海に漂はせし無雙の大功也とて、鎭守府將軍に成されて、又奥州へぞ下されける。其翌年官軍戰破れて、君は山門より還幸なりて、花山院の故宮に幽閉せられさせ給ひ、金崎城は攻落されて、義顯朝臣自害したりと聞えし後は、顯家卿に附隨ふ郎從、皆落失て勢微々に成しかば、纔に伊達郡靈山城一を守て、有も無が如くにてぞおはしける。かゝる處に、主上は吉野へ潛幸なり、義貞は北國へ打出たりと披露ありければ、いつしか又人の心替て、催促に隨ふ人多かりけり。顯家卿時を得たりと悦で、廻文を以て便宜の輩を催さるゝに、結城上野入道道忠を始として、伊達、信夫、南部、下山六千餘騎にて馳加る。國司則其勢を幷て、三萬餘騎白川關へ打越給に、奥州五十四郡の勢共、多分はせ附て、程なく十萬餘騎に成にけり。さ

優如の厚恩
—惡なる厚き恩

して、一身を置に安き所なかりしかば、こゝの禪院、彼の律院に、一夜二夜を明て隱ありきけるが、竊に使者を吉野殿へ進て申入けるは、亡親高時法師、臣たる道を辨へずして、遂に滅亡を勅勘の下に得たりき。然といへ共、天誅の理に當る故を存ずるに依て、時行一塵も君を恨申處を存候はず。元弘に義貞は關東を滅し、尊氏は六波羅を攻落す。彼兩人何も勅命に依て、征罰を事とし候し間、憤を公儀に忘れ候し處に、尊氏忽に朝敵となりしかば、威を綸命の下に假て、世を叛逆の中に奪んと企ける心中、事已に露顯し候歟。抑尊氏が其人たる事、偏に當家優如の厚恩に依候き。然に恩を荷て恩を忘れ、天を戴て天を乖けり。其大逆無道の甚き事、世の惡む所、人の指さす所也。是を以當家の氏族等、悉敵を他に取らず、唯尊氏直義等が爲に其恨を散ぜん事を存ず。天鑒明に下情を照されば、枉て勅免を蒙て、朝敵誅罰の計略を運すべき由、綸旨を成下されば、宜く官軍の義戰を扶け、皇統の大化を仰申べきにて候。夫不義の父を誅せられて、忠功の子を召仕はるゝ例あり。異國には趙盾、我朝には義朝、其外泛々たる類、勝て計ふべからず。用捨無偏、弛張有時、明王の選士德也。豈既往の罪を以て、當然の理を棄られ候はんやと、傳奏に屬して委細にぞ奏聞し

喚喁―魚の口の上に向きたる貌

せん事、近き世にはあらじと、世擧て思定ける處に、先帝又三種の神器を帶して、吉野へ潛幸なり、又義貞朝臣已に數萬騎の軍勢を率して、越前國に打出たりと聞えければ、山門より降參したりし大館左馬助氏明、伊豫國へ逃下り、土居得能が子共と引合て、四國を討從へんとす。江田兵部大輔行義も、丹波國に馳來て、足立本庄等を相語て、高山寺にたて籠る。金谷治部大輔經氏、播磨の東條より打出、吉河高田が勢を附て、丹生の山陰に城郭を構へ、山陰の中道を差塞ぐ。遠江井介は、妙法院宮を取立まゐらせて、奥の山に楯籠る。宇都宮治部大輔入道は、紀清兩黨五百餘騎を率して、吉野へ馳參ければ、舊功を捨ざる志を君殊に叡感有て、則是を還俗せさせられ、四位少將にぞなされける。此外四夷八蠻、此彼より起るとのみ聞えしかば、先帝舊勞の功臣、義貞恩顧の軍勢等、病雀花を喰て、飛揚の翅を伸、轍魚雨を得て、喚喁の唇を濕すと、悦び思はぬ人もなし。

○相摸次郎時行勅免事

先亡相摸入道宗鑒の二男、相摸次郎時行は、一家忽に亡し後は、天に跼り地に蹐

尸鳩、鶺鴒云々―共に兄弟の中睦しきに譬ふ出處は詩經にあり

連枝、同根―共に兄弟のこと

誰とても懸る憂き世に、心を留べきにあらず、同くは後生までも御供申さんこそ本意なれとて、諸共に此毒藥を七日までぞ聞召ける。軈春宮は、其翌日より御心地例に違はせ給けるが、御終焉の儀閑にして、四月十三日の暮程に、忽に隱させ給けり。將軍宮は廿日餘まで御座ありけるが、黃疸と云御いたはり出來て、御遍身黃に成せ給て、是も終に墓なくならせ給にけり。哀哉、尸鳩樹頭の花、連枝早く一朝の雨に隨ひ、悲哉、鶺鴒原上の草、同根忽に三秋の霜に枯ぬる事を。去々年は兵部卿親王鎌倉にて失はれさせ給ひ、又去年の春は、中務親王金崎にて御自害あり。此等をこそためしなく哀なる事に、聞人心を傷しめつるに、今又春宮、將軍宮、幾程なくて御隱ありければ、心あるも心なきも、是を聞及ぶ人每に、哀を催さずと云事なし。かくつらくあたり給へる直義朝臣の行末、いかならんと思はぬ人も無りけるが、果して毒害せられ給ふ事こそ不思議なれ。

○諸國宮方蜂起事

主上山門より還幸なり、宮軍金崎にて皆うたれぬと披露有ければ、今は再び皇威に服

涸魚―水の涸れたる處に住む魚

籠て御座候へば、御病氣なんどの萠す御事もや候はんずらんとて、三條殿より調進せられて候。毎朝一七日聞召候へとて、御前にぞ閣ける。氏光罷歸て後、將軍宮此藥を御覽ぜられて宣けるは、病の未見えざるさきに、兼て療治を加る程に我等を思はゞ、此一室の中に押籠て、朝暮物を思はすべしや。是は定て病を治する藥にはあらじ、唯命を縮る毒なるべしとて、庭へ打捨んとせさせ給けるを、春宮御手に取せ給て、抑尊氏直義等其程に情なき所存を挾む者ならば、縱此藥をのまず共、遁べき命かは。是元來所願成就也。此毒を吞世を早うせばやとこそ存候へ。夫れ人間の習、一日一夜を經る間に、八億四千の念あり。一念惡を發せば、一生の惡身を得、十念惡を發せば、十生惡身を受く。乃至千億の念も又爾也といへり。如是一日の惡念の報、受盡さん事猶難し。況や一生の間の惡業をや。悲哉、未來無窮の生死出離何の時ぞ。富貴榮花の人に於て、猶此苦を遁ず。況や我等籠鳥の雲を戀、涸魚の水を求る如くに成て、聞に就見るに隨ふ悲の中に、待事もなき月日を送て、日のつもるをも知らず、惡念に犯されんよりも、命を鴆毒の爲に縮て、後生善處の望を達んにはしかじと仰られて、毎日法華經一部あそばされ、念佛唱させ給て、此鴆毒をぞ聞召ける。將軍宮是を御覽じて、

逗留ー足だまり、足を留めて休息すべき場處

春宮ー恒良親王

第七の宮ー成良親王

を追すがうて、透間もなく攻入ける間、城へ籠らんと逃入勢共、己が拵たる木戸逆茂木に支られて、城へ入べき逗留もなかりければ、新善光寺の前を、府より西へ打過る。伊豫守の勢千餘騎は若狹をさして引ければ、尾張守の兵二千餘騎、織田、大蟲を打過て、足羽城へぞ引れける。都て此日一時の戰に、府の城すでに攻落されぬと聞及で、未敵も寄ざる先に、國中の城の落事、同時に七十三箇所也。

○金崎東宮幷將軍宮御隱事

新田義貞義助杣山より打出て、尾張守伊豫守府中を落、其外所々の城落されぬと聞えければ、尊氏卿直義朝臣大に忿て、此事は偏に春宮の彼等を御扶あらん爲に、金崎にて此等は腹を切たりと宣しを、誠と心得て、杣山へ遲く討手を差下つるによつて也。此宮是程當家を失はんと思召けるを知らで、若唯置奉らば、何樣不思議の御企も有ぬと覺れば、潛に鴆毒を進て失奉れと、粟飯原下總守氏光にぞ下知せられける。春宮は連枝の御兄弟將軍宮とて、直義朝臣先年鎌倉へ申下參せたりし先帝第七宮と、一處に押籠られて御座ありける處へ、氏光藥を一裹持て參り、いつとなく加樣に打

かし鳥威—樫鳥の羽毛の色即ち花田色の威毛也。

かいしのぎの太刀—太刀の鎬が櫂の如く平たく少し肉のあるやうに作りたるもの

案内知ぬ人は、いつも過する河にて候ぞ。いで其瀬ぶみ仕らんと云まゝに、白蘆毛なる馬に、かし鳥威の鎧著て、三尺六寸のかいしのぎの太刀を抜、冑の眞向に差かざし、たぎりて落る瀬枕に、唯一騎馬を打入て、白浪を立てぞ游せける。我先に渡さんと打のぞみたる兵三千餘騎これを見て、一度に颯と打入て、弓の本筈末筈取ちがへ、馬の足の立所をば、手綱をさしくつろげて歩せ、足のたゝぬ所をば、馬の頭をたゝき上て泳せ、眞一文字に流をきつて、向の岸へ懸あげたり。葛新左衞門は、御方の勢に二町ばかり先立て渡しければ、敵の爲に馬のもろ膝ながれて、歩立に成て敵六騎に取籠られて、已に打れぬと見えける處に、宇都宮が郎等に清新左衞門爲直馳合て、敵二騎切て落し、三騎に手負せ、葛新左衞門をば助てけり。寄る勢も三千餘騎、ふせぐ勢も三千餘騎、大將は何も名を惜む源氏一流の棟梁也。而も馬の懸引たやすき在所なれば、敵御方六千餘騎 前後左右に追つ返つ入亂、半時ばかりぞ戰たる。かくては唯命を限の戰にて、いつ勝負あるべしとも見えざりける處に、杣山河原より廻ける三峰の勢と、大鹽より下る山法師と差違て、敵陣の後へ廻り、府中に火を懸たりけるに、尾張守の兵三千餘騎、敵を新善光寺城へ入かはらせじと、府中を指て引返す。義貞朝臣の兵三千餘騎、逃る敵

敵かゝらば、水澤に利を失て、敵却て機に乘べし。今日の合戰は、不慮に出來つる事なれば、遠所の御方是をしらで、左右なく馳來らじと覺るぞ。此邊の在家に火を懸て、合戰ありと知せよと下知せられければ、篠塚五郎左衞門馳廻て、高木、瓜生、眞柄、北村の在家二十餘箇所に火を懸て、狼煙天を焦せり。所々の宮方此煙を見て、すはや鯖江の邊に軍の有けるは。馳合て御方に力を合よとて、宇都宮美濃將監泰藤、天野民部大輔政貞三百餘騎にて、鯖竝宿より馳來。一條少將行實朝臣二百餘騎にて、飽和より打出らる。瓜生越前守重、舍弟加賀守照、五百餘騎にて、妙法寺城より馳下る。山徒三百餘騎は、大鹽城よりおり合ひ、河島左近藏人維頼は、三百餘騎にて、三峯城より馳來り、總大將左中將義貞朝臣は、千餘騎にて杣山よりぞ出られける。合戰の相圖ありと覺えて、所々の宮方鯖江宿へ馳集る由聞えければ、未河ばたに控へたる御方討すなとて、尾張守高經、同伊豫守三千餘騎を率して、國分寺の北へ打出らる。兩陣相去事十餘町、中に一の河を隔つ。此河さしもの大河にてはなけれ共、時節雪消に水増て、漲る浪岸をひたしければ、互に淺瀨を伺見て、いづくをか渡さましと、暫猶豫しける處に、船田長門守が若黨葛新左衞門と云者、川ばたに打寄て、此河は水だに増れば、洲俄に出來て、

あら玉の年立帰て—延元三年となりし也

は未なかりけり。去程に、あら玉の年立歸て、二月中旬にも成ければ、餘寒も漸く退て、士卒弓をひくに手かゞまらず、殘雪半打消て、匹馬地を蹈に蹄を勞せず。今は時分よく成ぬ。次第に府邊へ近附寄て、敵の往反する道々に城をかまへて、四方を差塞で攻戰べし。何か要害によかるべき所あると見試ん爲に、脇屋右衞門佐、僅百四五十騎にて、鯖江宿へ打出られけり。名將小勢にて城の外に打出たるを、能隙なりと、敵にや人の告たりけん、尾張守の副將軍、細川出羽守五百餘騎にて、府の城より打出、鯖江宿へ押寄、三方より相近附て、一人もあまさじとぞ取巻ける。脇屋右衞門佐前後の敵に圍れて、とても遁ぬ所也と思切てければ、中々心を一にして少も機を撓さず、後陣に高木社をあて、左右に瓜生畔を取て、矢種を惜まず散々に射させて、敵に少も馬の足を立させず、七八度が程遣つ啓つ、追立々々攻附たるに、細川鹿草が五百餘騎、僅の勢に懸立られて、鯖江宿の後なる川の淺瀬を打わたり、向の岸へ颯と引。結城上野介、河野七郎、熊谷備中守、伊東大和小次郎、足立新左衞門、小島越後守、中野藤内左衞門、瓜生次郎左衞門尉八騎の兵共、川の瀬頭に打のぞみ、つゞいて渡さんとしけるが、大將右衞門佐馬を打寄て制せられけるは、小勢の大勢に勝事は、暫時の不思議也。若難所に向て

加賀越前境、細呂木の邊に城郭をかまへ、津葉五郎が大聖寺城を攻落て、國中を押領す。此時までは平泉寺の衆徒等皆貳心なき將軍方にてありけるが、是もいかゞ思けん、過半引分て、宮方に與力申し、三峯と云所へ打出、城をかまへて敵を待所に、伊自良次郎左衛門尉、是に與して三百餘騎にて馳加る間、近邊の地頭御家人等、ふせぎ戰に力を失て、皆己が家々に火を懸て、府の陣へ落集る。北國是より動亂して、汗馬の足を休めず。三峯の衆徒の中より、杣山へ使者を立て、大將を一人給て合戰を致すべき由を申ける間、脇屋右衛門佐義助朝臣に五百餘騎を相副て、三峯の陣へ差遣さる。牒使又加賀國に來て、前に相圖を定らるゝ間、敷地、上木、山岸、畑、結城、江戸、深町の者共、細屋右馬助を大將として。其勢三千餘騎越前國へ打こえ、長崎河合川口三箇所に城を構て、漸々に府へぞ攻寄ける。尾張守高經は六千餘騎を隨へて、府中にたて籠られたりけるが、敵に國中を押取れて、一所に籠居ては、兵粮につまりて、つひによかるまじとて、三千餘騎をば府に殘しおき、三千餘騎をば一國に分遣て、山々峯々に城を構へ、兵を二百騎三百騎づゝ、三十餘箇所にぞ置れける。戰場雪深して、馬の足の立ぬ程は、城と城とを合て、晝夜旦暮合戰を致すといへ共、僅に一日雌雄を爭ふ計にて、誠の勝負

に太守の車には五馬を駕す

龍鱗に附き云々―英主に附隨して功を立つること

○新田義貞落二越前府城一事

左中將義貞朝臣、舍弟脇屋右衛門佐義助は、金崎城沒落の後、杣山の麓瓜生が館に、有も無が如くにておはしましけるが、いつまでか右て徒に時を待べき。所々に隱れ居たる敗軍の兵を集て、國中へ打出、吉野に御座ある先帝の宸襟をも休め進せ、金崎にて討れし亡魂の恨をも散ぜばやと思はれければ、國々へ潛に使を通じて、舊功の輩をあつめられけるに、龍鱗に附き、鳳翼を攀て、宿望を達せばやと、蟄居に時を待ける在々所所の兵共、聞傳々々、拔々に馳集りける程に、馬物具なんどこそ、きらく敷はなけれ共、心ばかりは、いかなる樊噲周勃にも劣じと思へる義心金鐵の兵共、三千餘騎に成にけり。此事軈京都に聞えければ、將軍より、足利尾張守高經舍弟伊豫守二人を大將として、北陸道七箇國の勢六千餘騎を差副、越前府へぞ下されける。右て數月をふれ共、府は大勢なり、杣山は要害なれば、城へも寄えず、府へも懸りえず、唯兩陣の境、大鹽松崎邊に兵を出し合て、日々夜々に軍の絕る隙もなし。かゝる所に、加賀國の住人敷地伊豆守、山岸新左衛門、上木平九郎以下の者共、畑六郎左衛門尉時能が語に附て、

上首—上席と同じ、官位のすぐれたるもの

象外の選云云—朗詠に出でたる橘直幹の句、象外は格外の意

五馬—五つの馬、漢制

同年十月三日改元有て、延元にうつる。其十一月五日の除目に、足利宰相尊氏卿、上首十一人を越て、位正三位にあがり、官大納言に遷て、征夷將軍の武將に備り給ふ。舍弟左馬頭直義朝臣は、五人を越て、位四品に敍し、官宰相に任じて、日本の副將軍に成給ふ。夫我朝に將軍を置れし初は、養老四年に多治比眞人縣守、神龜元年に藤原朝臣宇合、寶龜十一年に藤原朝臣繼繩、其後時代遙に隔て、藤原朝臣小里丸、大伴宿禰家持、紀朝臣古古美、大伴宿禰乙丸、坂上宿禰田村丸、文屋宿禰綿丸、藤原朝臣忠文、右大將宗盛、新中納言知盛、右大將源賴朝、木曾左馬頭源義仲、左衞門督賴家、右大臣實朝に至まで、其人十六人、皆功の抽賞に依て、父子其先を追事ありといへども、兄弟一時に相雙で大樹の武將に備事、古今未其例を聞ずと、其方樣の人は皆驕逸の思氣色に顯たり。其外宗徒の一族四十三人、或は象外の選に當り、俗骨忽に蓬萊の雲をふみ、或は亂階の賞に依て、庸才立に臺閣の月を攀。加之其門葉たる者は、諸國の守護吏務を兼て、銀鞍未解、五馬忽策重山之雲、蘭橈未乾、巨船遙棹滄海之浪。總て博陸輔佐の臣も、是に向て上位を臨ん事を憚る。況や名家儒林の輩は、彼仁に列て、下風に立ん事を喜べり。

太平記　巻十九

○光嚴院殿重祚御事

建武三年六月十日、光嚴院太上天皇重祚の御位に即せ給ふ。抑此君は、宗鑒が亡びし時、御位に即進せたりしが、三年の内に天下反覆して、宗鑒ほろびはてしかば、其例いかゞあるべからんと、諸人異議多かりけれ共、此將軍尊氏卿の筑紫より攻上し時、院宣をなされしも此君也、今又東寺へ潛幸なりて、武家に威を加られしも此御事なれば、爭其天恩を報じ申さではあるべきとて尊氏卿平にはからひ申されける上は、末座の意見再往の沙汰に及ばず。其比物にも覺えぬ田舍の者共、茶の會酒宴の砌にて、そゞろなる物語しけるにも、あはれ此持明院殿ほど、大果報の人はおはせざりけり。軍の一度をもし給はずして、將軍より王位を給はらせ給たりと、申沙汰しけるこそをかしけれ。

○本朝將軍補任兄弟無二其例一事

十二願主—
藥師如來

表し建三塔。人は一念三千の義を以て員とす。十二願主廻眸故に、天下の治亂此冥應に不懸と云事なく、七社權現垂跡故に、海内の吉凶其玄鑒に不依と云事なし。されば朝廷に有事日は、祈之除災致福。山門に有訴時は、傷之以非被理。爰に兩度の臨幸を、山門に許容申たりしは、一往衆徒の僻事に似て候へ共、窮鳥入懷時は、猟人も哀之不殺事にて候。況乎十善の君の御恃あらんに、誰か可不與申。譬ば其時の久執の輩少々相殘て、野心を挾み候共、武將忘其恨厚恩被行德候者、敵の運を祈らんずる勤は、却て一家の祈となり、朝敵を贔屓せん心變じて、御方の御爲に無貳心者と成り候べしと、内外の理致明かに、盡言被申たりければ、將軍左兵衞督を奉始、高、上杉、頭人評定衆に至る迄、さては山門なくては、天下を治る事有まじかりけりと信仰して、則舊領安堵の外に、武家增々寄進の地をぞ被添ける。

麓祠露―一本には叢祠露に作る

一乘の教法―法華の妙法

遙に顯麓祠露。各所居の淨土を表せば、是併補陀洛山共申つべし。客人宮は十一面觀音の應作、白山禪定の靈神也。而助山王行化、出北陸之崇峯來東山之靈地、故號客人。現在生の中には得十種勝利、臨命終の時には生九品蓮臺。十禪師宮は無佛世界の化主、地藏薩埵の應化也。忝も受牟尼遺教、懇預忉利附囑。二佛中間の大導師、三聖執務の法體也。彼御託宣に云、三千の衆徒を養て我子とし、一乘の教法を守て我命とすと示し給ふ。設雖微少結緣也、宜蒙莫大利益。三の宮は普賢菩薩の權化、妙法蓮華の正體也。一乘讀誦の窓の前には、影向を垂て、哀愍納受し給ふ。既に是慚愧懺悔の教主たり。六根罪障の我等、何不奉仰之哉。次に中七社、牛の御子は大威德、大行事は毘沙門、早尾は不動、氣比は聖觀音、下八王子は虛空藏、王子の宮は文殊、聖女は如意輪。次に下七社の小禪師は彌勒龍樹、惡王子は愛染明王、新行事は吉祥天女、岩瀧は辨才天、山末は摩利支天、劍宮は不動、大宮の竈殿は大日、聖眞子の竈殿は、金剛界の大日、二宮の竈殿は日光月光各出大悲門、赴利生之道給ふ。其後四所の菩薩化を助けて十方より來至し、三七の靈神光を並べて四邊に圍繞し給ふ。夫濟渡利生の區なる德、百千劫の間に、舌を暢て說共不可盡。山は戒定慧の三學を

鸞鏡－罽賓國の王一鸞を獲、鏡を懸けて之を照せば鸞影を見て悲鳴して舞へりと、この語之より出で明鏡の義となれる也

奈落迦－奈落ともいふ地獄のこと

讃給ふ。大師大に禮敬し給て、願は其御名を聞んと問給ふに、三尊答曰、竪の三點に横の一點を加へ、横の三點に竪の一點を添ふ。我内には圓宗の教法を守り、外には濟度の方便を助けん爲に、此山に來れりと答給ふ。其光天に懸れる事、百錬の鸞鏡の如し。大師此言を以て、文字を成に、竪の三點に横の一點を加へては、山と云字也。横の三點に竪の一點を添ては、王と云字也。山は是高大にして不ㇾ動形、王は天地人の三才に經緯たる德を顯し給へる稱號なるべしとて、其神を山王と崇め奉る。所謂大宮權現は久遠實成の古佛、天照大神の應作、もつぱら護二圓宗教法一久宿二比叡山一。故に法宿大菩薩とも奉ㇾ申。既に是れ三界の慈父、我等が本師也。聖眞子は、九品安養界の化主、八幡大菩薩の分身、光を和二四明麓一速示二三聖形一。雖二十惡一猶引接事は、疾風の雲霧を披よりも甚し。雖二一念一必感應なる事は、喩三之巨海納二涓露一。和光同塵は、既に爲二結緣始一、往生安樂は豈非二得脫終一乎。二の宮は、初大聖釋尊と約をなし給ひし東方淨瑠璃世界の如來、吾國秋津洲の地主也。隨所示顯の誓既に叶ふ。現世安穩の人望、願生西方の願、豈非二後生菩提指南一乎。八王子は千手觀音の垂跡、以二無垢三昧力一、濟二奈落迦重苦一、灌頂大法王子也。故に云二大八王子一。本地淸涼の月は、雖ㇾ處二安養界一、應化隨緣の影は、

像法―像似の法にて正法廢れて纔に存する類似の法をいふ、釋尊入滅後五百年を正法の時とし其後一千年を像法の時とし更に一萬年を末法の時とす

り。角て千八百年を經て後、釋尊は傳教大師と成せ給ふ。延暦廿三年に、始て求法の爲に漢土に渡り給ふ。則顯密戒の三學淵底に玉を拾ひ、同二十四年に歸朝し給ぬ。爰に桓武皇帝、法の檀度と成せ給て、比叡山を被二草創一始、傳教大師承レ勅、根本中堂を建んとて、地を引れけるに、紅蓮の如くなる人の舌一つ、土の底に有て、法華讀誦の聲不レ止。大師怪て其故を問給ふに、此舌答て曰く、我古此山に住して、六萬部の法華經を讀誦せしが、壽命有レ限身已に雖レ壞音聲無レ盡舌は尙存せりとぞ申ける。又中堂造營事終て、爲二本尊一大師御手から藥師の像をつくり給しに、一度斧を下して、像法轉時、利益衆生、故號藥師、瑠璃光佛と唱へて、禮拜し給ける時に、木像の藥師屈レ首諾かせ給ひけり。其後大師は小比叡の峯に杉の庵を卜て、暫獨住し坐ける。或時角ぞ詠じ給ひける。

　波母山や小比叡の杉の獨居は、嵐も寒し問人もなし。

と被レ遊、觀月を澄して御座ける處に、光明赫奕たる三つの日輪、空中より飛下れり。其光の中に釋迦、藥師、彌陀の三尊光を竝べて坐し給。此三尊或は僧形を現じ、或は俗體に變じて、大師を禮し奉て、十方大菩薩、愍衆故行道、應生恭敬心、是則我大師と

結界地—佛の法を以て外道魔物を入らしめざる地
醫王善逝—藥師如來

滅度を抜提河の邊、雙林樹下に唱給ふ。雖㆑然、佛は元來本有常住周遍法界の妙體なれば、爲㆓遺教流布㆒、昔葦の葉の國と成し南閻浮提豐葦原の中津國に到て見給ふに、時は鵜羽不葺合尊の御代なれば、人未佛法の名字をだにも不㆑聞。然共此地大日遍照の本國として、佛法東漸の靈地たるべければ、何の所にか可㆑開㆓應化利生之門㆒、彼方此方を遍歴し給ふ處に、比叡山の麓佐々名美也志賀浦の邊に、垂㆑釣坐せる老翁あり。釋尊向㆑之、翁若此地の主ならば、此山を吾に與よ。成㆓結界地㆒、佛法を弘めんと宣ければ、此翁答曰、我は人壽六千歳の始より、此所の主として、此湖の七度迄桑原と變ぜしを見たり。但此地結界の地と成らば、釣する所を可㆑失。釋尊早去て他國に求め給へとぞ惜みける。此翁は是白鬚明神也。釋尊因㆑茲寂光土に歸らんとし給ひける處に、東方淨瑠璃世界の教主醫王善逝、忽然として來り給へり。釋尊大に歡喜し給て、以前老翁が云つる事を語り給ふに、醫王善逝稱歎して宣はく、善哉釋迦尊、此地に佛法を弘通し給はん事。我人壽二萬歳の始より、此國の地主也。彼老翁未㆑知㆑我、何此山を可㆑奉㆑惜哉。機緣時至て佛法東流せば、釋尊は教を傳る大師と成て、此山を開闢し給へ。我は此山の王と成て、久く後五百歳の佛法を可㆑護と誓約をなし、二佛各東西に去給にけ

迦葉佛―釋尊の前に出づ、過去七佛の一也

淨飯王―釋尊の父、摩竭陀國の主也

候はんとぞ被レ申ける。法印熟々と聞レ之、言語道斷の事なり。閉レ口去塞レ耳歸らばやと思ひけれ共、若一言の下に、翻レ邪歸レ正事もやあらんずらんと思ひければ、中々旨に逆ひ議を犯す言を留めて、長物語をぞ始られける。夫斯國の起は、家々に傳る處各別にして、其說區々也といへ共、暫記する處の一義に、天地已に分れて後、第九の減劫人壽二萬歲の時、迦葉佛西天に出世し給ふ。于レ時大聖釋尊得ニ其授記一、住ニ都率天一給しが、我八相成道之後、遺敎流布地可レ有ニ何所一とて、此南瞻部州を遍く飛行して御覽じけるに、漫々たる大海の上に、一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易と、立浪の音あり。釋尊是を聞召て、此波の流止らんずる所、一の國と成て、吾敎法弘通する靈地たるべしと思召ければ、則此の浪流行に隨て、遙に十萬里の蒼海を凌ぎ給ふ。此波忽に一葉の葦の海中に浮べるにぞ留りにける。此葦の葉果して一の島となる。今の比叡山の麓大宮大權現垂レ跡給ふ波止土濃也。是故に波止て土濃也とは書るなるべし。其後人壽百歲の時、釋尊中天竺摩竭陀國淨飯王宮に降誕し給ふ。御歲十九にて、二月上八の夜半に王宮を遁れ出、六年難行して、雪山に捨レ身、寂場樹下に端坐し給ふ。又六年の後夜に正覺を成し後、頓大三七日、遍小十二年、盡淨虛融の演說三十年、一實無相の開顯八箇年、遂に

將軍の御前に參じて評定しける處に、北小路の玄慧法印出來れり。武藏守師直、此人こそ大智廣學の物知にて候なれば、加樣の事共も存知候はんずれ。是に山門の事、委く尋問候はゞやと被ㇾ申ければ、將軍げにもとて、法印此方へとぞ被ㇾ呼ける。法印席に直て、四海靜謐の事共賀し申して、種々の物語共に及びける時、上杉伊豆守重能、法印に向て被ㇾ申けるは、以前山門兩度の臨幸を許容申て、將軍に敵し奉る事無二他事一。雖ㇾ然武運合二天命一故に、遂に朝敵を一時に亡して、太平を四海に致候き。抑山門毎年の祭禮に、洛中の人民を煩し、三千の聖供、共に國土の庄園を領する事、爲ㇾ世雖ㇾ多ㇾ費、公家武家不ㇾ止ㇾ之事は、唯專二御祈禱一仰二天下靜謐一故也。而に今爲二武家一結ㇾ怨、爲二朝敵一致二懇祈一。是當當の蠹害、釋門の殘賊なるべし。仄に聞、比叡山草創の事、時は延曆の末の年に當れり、君は桓武の治天に始れり。此寺未立ざりし先に、聖主治二國給ふ事相續て五十代、曾て異國にも不ㇾ被ㇾ侵、妖怪にも不ㇾ被ㇾ惱、君巍々の德を播し、民堂々の化に誇る。以ㇾ是憶ㇾ之に、有て無益の者は山門也、無て可ㇾ能山法師也。但山門無ては叶まじき故候哉覽。白河院も朕が心に不ㇾ任は、雙六の賽、賀茂河の水、山法師也と被ㇾ仰候けんなる。其議誠に不審しく覺候。御物語候へ。次での才學に仕

何の憤─異本に憤とあり、可なるが如し。

を、劍の先に觸て、秋の霜の下に消終させ給ぬる御事は、無類悲なれば、想像奉る今はの際の御有樣も、今一入の思を添て、共に東岱前後の煙と立登り、北邙新丘の露共消なばやと、返る車の常盤に、伏沈ませ給ける御心の中こそ哀なれ。行て訪舊跡、竹苑故宮月心を傷しめ、歸臥寒閨、椒房寡居の風夢を吹、就見隨聞、御歎日每に深く成行ければ、聽御息所も御心地煩ひて、御中陰の日數未終先に、無墓成せ給ひければ、聞人每に押拉て、類少き哀さに、皆袂をぞ濡しける。

○比叡山開闢事

金崎城被攻落て後、諸國の宮方失力けるにや、或は降參し、或は退散して、天下將軍の威に隨ふ事、宛如吹風靡草木。在々所々に、宮方の城有て、山門又如何なる事をかし出さんずらんと、危まれし程こそ、衆徒の心を不違と山門の所領共に被成安堵たりしが、今天下已に武威に歸して靜謐しぬる上は、何の憤か可有とて、以前の成敗の事を變じて、山門を三井寺の末寺になす、又若干の所領を塞けたるも無益なれば、唯一圓に九院を沒倒し、衆徒を追出して、其跡を軍勢にや可充行と、高上杉の人々、

王質―晉の王質の故事述異記に出づ

方士―仙術の士

出たかりしか共、一宮は唯御息所の今世に坐さぬ事を、歎思召ける處に、淡路の武島に未生て御座有と聞えければ、急ぎ御迎を被レ下、都へ歸上らせ給ふ。唯王質が仙より出て七世の孫に會ひ、方士が海に入て楊貴妃を見奉りしに不レ異。御息所は心つくしに赴し時の心憂さ、浪に廻りし泡の、消るを爭ふ命の程、堪兼たりし襟は、御推量も淺くやとて、御袖濡る計なり。宮は又戸渡る舟の梶の葉に、書共盡ぬ御歎、無跡問し月日の數、御身に積りし悲は、語るも言は疎也とぞ搔口說せ給ひける。さしも憂かりし世中の、時の間に引替て、人間の榮花、天上の娛樂、不レ極云事なく、不レ盡云御遊もなし。長生殿の裏には、梨花の雨不レ破レ壤、不老門の前には、楊柳の風不レ鳴レ枝、今日を千年の始と、目出たきためしに思召たりしに、樂盡て悲來る人間の習なれば、中一年有て、建武元年の冬頃より、又天下亂て、公家の御世、武家の成敗に成しかば、一宮は終に越前金崎城にて御自害有て、御首京都に上て、禪林寺長老夢窓國師、喪禮被二執行一など聞えしかば、御息所は餘の爲方なさに、御車に被二助載一て、禪林寺の邊まで、浮れ出させ給へば、是ぞ其御事と覺敷て、墨染の夕の空に立煙、松の嵐に打靡き、心細く澄上る。さらぬ別の悲さは、誰とても疎ならぬ涙なれ共、宮などの無二止事一御身

物故―死去
三界―慾界色界無色界
九品の淨刹―極樂淨土

時船の梶に懸たりし衣を取上て見しかば、尋常の人の裝束とも不レ見、嚴かりし事よ。是は如何樣、院内裏の上臈女房なんどの田舍へ下らせ給ふが、難風に逢て海に沈み給けん、其裝束にてぞ有らんと語て、穴哀やなんど申合ければ、宮墻越に被二聞召一、若其行末にてや有らんと、不審多く思召て、聊御覽ぜられたき御事あり。其衣未あらば持て參れと、御使有ければ、色こそ損じて候へ共、未私に候とて、召寄進せけり。宮能々是を御覽ずるに、御息所の御迎に、武文を京へ上せられし時、有井庄司が仕立て進せたりし御衣也。穴不思議やとて、裁餘したる切を召出して、差合せられたるに、あやの文少も不レ違續きたれば、一目共不レ被二御覽一、此の衣を御顏に押當て、御涙を押拭はせ給ふ。有井も御前に候けるが、泪を袖に懸つゝ、罷立にけり。今は御息所の此世に坐す人とは露も不レ被二思召一、此衣の梶に懸りし日を、なき人の忌日と被レ定、自御經を書寫せられ、念佛を唱へさせ給て、過去聖靈藤原氏女并物故秦武文共の三界の苦海を出て、速に九品の淨刹に到れと祈らせ給ふ、御歎の色こそ哀なれ。去程に、其年の春の頃より諸國に軍起て、六波羅鎌倉九國北國の朝敵共、同時に滅びしかば、先帝は隱岐國より還幸成り、一宮は土佐の畑より都へ歸り入らせ給ふ。天下悉公家一統の御世と成て、目

櫓床を洗て云々ー櫓床は和訓楽にも槳牀とありて櫓杙の事なれど之を洗うて口に入るれば蘇生すといふ迷信などにてもあるにや詳かならず

の、憂節滋き栖に入進せたるに、此四五日の波風に、御膽消御心弱りて、軈て絶入せ給ひけり。心なき海人の子共迄も、是は如何にし奉らんと泣悲み、御顔に水を灑ぎ、櫓床を洗て、御口に入なんどしければ、半時計して活出させ給へり。さらでだに涙の懸る御袖は、乾く間も無るべきに、篷漏る滴藻鹽草、可㆓敷忍㆒旅寝ならねば、何迄角ても有佗べき。土佐の畑と云浦へ、送りてもやれかしと、打佗させ給へば、海士共皆同じ心に、是程嚴敷御渡候上臈を、我等が船に乗進せて、遙々と土佐迄送り進せ候はんに、何の泊にてか、人の奪取進せぬ事の候べきと、叶まじき由を申せば、力及ばせ給はずして、波の立居に御袖をしぼりつゝ、今年は此にて暮し給ふ。哀は類も無りけり。さて一宮は、武文を京へ上せられし後は、月日遙に成ぬれ共、何共御左右を申さぬは、如何なる目にも逢ぬる歟と、靜心なく思召て、京より下れる人に御尋有ければ、去年の九月に、御息所は都を御出有て、土佐へ御下り候しとこそ、慥に承りしかと申ければ、さては道にて人に被ㇾ奪ぬるか、又世を浦風に被ㇾ放、千尋の底にも沈ぬる歟と、一方ならず思ひくづをれさせ給けるに、或夜御警固に參たる武士共、中門に宿直申て、四方山の事共物語しける者の中に、さるにても去年の九月、阿波の鳴戸を過て、當國に渡りし

同毛―同色の威毛

早離速離―出所不明、事詳しく源平盛衰記に見ゆ

人して引て通ると見えて打失ぬ。其次に、大物浦にて腹切て死たりし右衛門府生秦武文、赤絲威の鎧同毛の五枚兜の緒を縮、黄鴾毛なる馬に乘て、弓杖にすがり、皆紅の扇を舉げ、松浦が船に向て、其船留まれと招く樣に見えて、浪の底にぞ入にける。梶取是を見て、灘を走る船に、不思議の見ゆる事は常の事にて候へ共、是は如何樣武文が怨靈と覺え候。其驗を御覽ぜん爲に、小舟を一艘下して此上臈を乘進せ、波の上に突流して、龍神の心を如何と御覽候へかしと申せば、此議げにもとて、小舟一艘引下して、水主一人と、御息所とを乘せ奉て、渦の波に漲て卷かへる波の上にぞ浮べける。彼早離速離の海岸山に被放、飢寒の愁深して、淚も盡ぬと云けんも、人住島の中なれば、立寄方も有ぬべし。是は浦にも非ず島にも非ず、如何に鳴戸の浪の上に、身を捨船の浮沈、潮瀬に廻る泡の、消なん事こそ悲けれ。されば龍神も、えならぬ中をや被避けん。風俄に吹分て、松浦が船は西を指して吹れ行と見えけるが、一の谷の澳津より武庫山下風に被放て、行方不知成にけり。其後波靜り風止ければ、御息所の御船に被乘つる水主、甲斐甲斐敷船を漕寄て、淡路の武島と云所へ著奉る。此島の爲體、囘一里に足ぬ所にて、釣する海士の家ならでは、住人もなき島なれば、隙あばらなる葦の屋

法樂—誦經法施して佛神の意を慰むること

を助させ給へとぞ申ける。松浦元來無レ情田舍人なれば、さても命や助かると、屋形の内へ參て、御息所を荒らかに引起し奉り、餘に強顏御氣色をのみ見奉るに、無二本意一存候へば、海に沈め進すべきにて候。御契深くば土佐の畑へ流れよらせ給ひて、其宮とやらん堂とやらん一つ浦に住せ給へとて、無レ情搔抱き進せて、海へ投入奉んとす。是程の事に成ては、何の御詞か可レ有なれば、唯夢の樣に思召して、つや〳〵息をも出させ給はず、御心の中に佛の御名計を念じ思召て、早絶入せ給ぬるかと見えたり。是を見て、僧の一人便船せられたりけるが、松浦が袖を控て、こは如何なる御事にて候ぞや。龍神と申も、南方無垢の成道を遂て、佛の授記を得たる者にて候へば、全く罪業の手向を不レ可レ受。而るを生ながら人を忽に海中に沈められば、彌龍神忿て、一人も助る者や候べき。唯經を讀み陀羅尼を滿て、法樂に備られ候はんずるこそ可レ然覺え候へと、堅く制し宥めければ、松浦理に折て、御息所を篷屋の内に荒らかに投棄奉る。さらば僧の議に附て、祈をせよやとて、船中の上下異口同音に、觀音の名號を唱奉りける時、不思議の者共、波の上に浮出て見えたり。先一番に濃紅著たる仕丁が、長持を昇て通ると見えて打失ぬ。其次に、白葦毛の馬に、白鞍置たるを、舍人八

よとて、弓箭太刀刀鎧腹巻數を盡して投入たれども、渦巻事尚不休。さては若色ある衣裳にや目を見入たるらんとて、御息所の御衣、赤き袴を投入たれば、白波色變じて、紅葉を浸せるが如くなり。是に渦巻き少し閑まりたれ共、船は尚本の所にぞ廻居たる。角て三日三夜に成ければ、船の中の人一人も不起上、皆船底に酔臥て、聲々に呼叫ぶ事無限。御息所は、さらでだに生る御心地もなき上に、此浪の騒になほ御膽消て、更に人心も坐さず。よしや憂目を見んよりは、如何なる淵瀬にも身を沈めばやとは思召つれ共、さすがに今を限と叫ぶ聲を聞召せば、千尋の底の水屑と成、深き罪に沈なん後の世をだに誰かは知て弔はんと思召す泪さへ盡て、今は更に御ぐしをも擡させ給はず。むくつけ男も、早忙然と成て、斯る無止事貴人を取奉り下る故に、龍神の咎もあるやらん。無詮事をもしつる者哉と、誠に後悔の氣色なり。斯る處に梶取一人、船底より這出て、此鳴戸と申は、龍宮城の東門に當て候間、何にても候へ、龍神の欲しがらせ給ふ物を、海へ沈め候はねば、いつも加樣の不思議ある所にて候。是は何樣上臈を龍神の思懸申されたりと覺え候。申も餘に邪見に無情候へ共、此御事一人の故に、若干の者共が、皆非分の死を仕らん事は、不便の次第にて候へば、此上臈を海へ入進せて、百餘人の命

ろしく、むくつけ氣なる髭男の、聲最なまりて、色飽まで黒きが御傍に參て、何をかさのみむつがらせ給ふぞ。面白き道すがら、名所共を御覽じて、御心をも慰ませ給候へ。左樣にては如何なる人も船には醉物にて候ぞと、兎角慰め申せ共、御顏をも更に擡させ給はず、唯鬼を一車に載せて、巫の三峽に棹すらんも是には過じと、御心迷て、消入せ給ぬべければ、むくつけ男も舩に寄懸て、是さへあきれたる體なり。其夜は大物浦に碇を下して、世を浦風に漂ひ給ふ。明れば風能成ぬとて、同泊の船共、帆を引、梶を取り、己が樣々漕行ければ、都は早跡の霞に隔りぬ。九國にいつか行著んずらんと、人の云を聞召すにぞ、さては心つくしに行旅也と、御心細きに附ても、北野天神荒人神に成せ給し其古の御悲、思召知せ給はゞ、我を都へ歸し御座せと、御心の中に祈せ給。其日の暮程に、阿波の鳴戸を通る處に、俄に風替り鹽向うて、此船更に不行遣。船人帆を引て、近邊の磯へ舟を寄んとすれば、澳の潮合に、大なる穴の底も見えぬが出來て、船を海底に沈んとす。水主梶取周章て、帆薦なんどを投入々々渦に卷せて、其間に船を漕通さんとするに、舟曾不去、渦卷くに隨て、浪と共に船の廻る事、茶臼を推よりも尚速也。是は何樣龍神の財寶に目懸られたりと覺えたり。何をも海へ入

鬼を一車に載す云々—朗詠に載鬼一車何足畏、棹巫三峽未爲危とあるに據る

荒人神—人となつて現れたる神

たる船是を聞て、一番に渚へ差寄たれば、武文大に喜で、屋形の内に打置奉り、取落したる御具足御供の女房達をも、舟に乘んとて走歸たれば、宿には早火懸て、我方樣の人もなく成にけり。松浦は適我船に此女房の乘せ給たる事、可レ然契の程哉と無レ限悦て、是までぞ今は皆船に乘れとて、郞等眷屬百餘人取物も不レ取敢一皆此船に取乘て、遙の澳にぞ漕出したる。武文渚に歸來て、其御船被レ寄候へ。先に屋形の內に置進せつる上﨟を陸へ上進せんと喚りけれ共、耳にな聞入そとて、順風に帆を上たれば、船は次第に隔りぬ。又手繰する海士の小舟に打乘て、自櫓を推つゝ、何共して、御船に追著んとしけれ共、順風を得たる大船に、押手の小舟非レ可二追附一。遙の沖に向て、擧レ扇招きけるを、松浦が舟にどつと笑聲を聞て、安からぬ者哉。其儀ならば、唯今の程に海底の龍神と成て、其船をば遣まじき者をと忿て、腹十文字に搔切て、蒼海の底にぞ沈ける。御息所は夜討の入たりつる宵の間の騷より、肝心も御身に不レ副、唯夢の浮橋浮沈み、淵瀨をたどる心地して、何と成行事共知せ給はず。船の中なる者共が、あはれ大剛の者哉。主の女房を人に奪はれて、腹を切つる哀さよと沙汰するを、武文が事やらんとは乍レ聞召一其方をだに見遣せ給はず、唯衣引被て、屋形の内に泣沈ませ給ふ。見るも恐

問ければ、下郎のはかなさは、酒にめで、引出物に耽りて、事の様有の儘にぞ語りける。松浦大に悦で、此比如何なる宮にても御座せよ。謀叛人にて流され給へる人の許へ、忍で下給はんずる女房を奪捕たり共、差ての罪科はよも非じと思ければ、郎等共に彼宿の案内能々見置せて、日の暮るをぞ相待ける。夜既に深て人定る程に成ければ、松浦が郎等三十餘人、物具ひし〳〵と堅めて、續松に火を立て、蔀遣戸を踏破り、前後より打て入る。武文は京家の者と云ながら、心剛にして、日比も度々手柄を顯したる者なりければ、強盗入たりと心得て、枕に立たる太刀をおつ取て、中門に走出で、打入敵三人目の前に切伏せ、縁にあがりたる敵三十餘人大庭へ颯と追出して、武文と云大剛の者此にあり。取れぬ物を取らんとて、二つなき命を失ふな盗人共と哈て、仰たる太刀を押直し、門の脇にぞ立たりける。松浦が郎等共武文一人に被㆓切立㆒て、門より外へばつと迯たりけるが、蓬し敵は唯一人ぞ切て入とて、傍なる在家に火を懸て、又喚てぞ寄たりける。武文心は猛しといへ共、浦風に吹覆はれたる煙に目暮て、可㆑防様も無りければ、先御息所を掻負進せ、向ふ敵を打拂て、澳なる船を招き、如何なる舟にてもあれ、女性暫乗進せてたび候へと申て、汀にぞ立たりける。船しもこそ多かるに、松浦が迎に來

目枯もせず―目を離さず

たる御簾の内より、遙に被御覽、あれやと計の御聲幽に聞えながら、何共被仰出事もなく、女房達數多さゞめき合ひて、先泣聲のみぞ聞えける。武文御使に罷上り、是迄尋參りて候と申も不敢、緣に手を打懸て、さめ〲と泣居たり。良有て、唯此迄と召あれば、武文御簾の前に跪き、雲井の外に想像進らするも、堪忍び難き御事にて候へば、如何にもして田舍へ御下り候へとの御使に參て候とて、御文捧たり。急ぎ披て御覽ぜらるゝに、げにも御思の切なる色さもこそと覺て、言の葉每に置露の、御袖に餘る計なり。よしや如何なる夷の栖居なり共、其憂にこそ責ては堪めとて、既に御門出有ければ、武文甲斐々々敷御輿なんど尋出し、先尼崎まで下し進せて、渡海の順風をぞ相待ける。斯りける折節、筑紫人に松浦五郎と云ける武士、此浦に風を待て居たりけるが、御息所の御形を墻の隙より見進せて、こはそも天人の此土へ天降れる歟と、目枯もせず守り居たりけるが、穴無端や、縦主ある人にてもあれ、又如何なる女院姫宮にても御座ませ、一夜の程の契を、百年の命に代んは、何か惜からん。奪取て下らばやと思ける處に、武文が下部の濱の邊に出で行けるを呼寄て、酒飲せ引出物なんど取せて、さるにても、御邊が主の具足し奉て、船に召せんとする上﨟は、如何なる人にて御渡あるぞと

—涙の玉を玉緒の命につゞけたる也

の悲、一方ならず晴やらぬに、又打添て御息所の御名残、是や限と思召しかば、供御も聞召入られず、道の草葉の露共に、消はてさせ給ぬと見えさせ給ふ。惜共思召ぬ御命長らへて、土佐の畑と云所の、淺猿く此世の中とも覺えぬ浦の邊に流されて、月日を送らせ給へば、晴るゝ間もなき御歎、喩へて云ん方もなし。餘に思くづをれさせ給ふ御有樣の、御痛敷見奉りければ、御警固に候ける有井庄司、何か苦く候べき。御息所を忍で此へ入進せられ候へとて、御衣一重仕立て、道の程の用意迄細々に沙汰し進せければ、宮無ㇾ限嬉しと思召て、唯一人召仕れける右衛門府生秦武文と申隨身を、御迎に京へ上せらる。武文御文を賜て、急ぎ京都へ上り、一條堀川の御所へ參りたれば、葎茂りて門を閉、松の葉積りて道もなし。音信通ふものとては、古き梢の夕嵐、軒もる月の影ならでは、問人もなく荒はてたり。さては何にか立忍ばせ給ぬらんと、彼方此方の御行末を尋行程に、嵯峨の奥深草の里に、松の袖垣隙あらはなるに、蔦はひ懸て池の姿も冷愁く、汀の松の嵐も秋冷く吹しをりて、誰栖ぬらんと、見るも懶げなる宿の内に、琵琶を彈ずる音しけり。怪しやと立留て是を聞ば、紛ふべくもなき御撥音也。武文嬉しく思ひて、中々案内も不ㇾ申、築地の破より内へ入て、中門の縁の前に畏れば、破れ

曉の鴫の羽がき百羽がき君が來ぬ夜は我ぞ數かくとあるを後世曉の榻の端書百夜かきと誤り傳へたる俗説によりて書ける也

涙の玉の緒

聞及、左樣に宮なんどの御心に懸られんを、爭でか便なうさる事可レ有とて、早あらぬ方に通ふ道有と聞えければ、宮も今は無二御憚一重て御文の有しに、何よりも黒み過て、

知せばや鹽やく浦の煙だに、おもはぬ風になびく習を。

女もはや餘り强顔かりし心の程、我ながら憂物に思返す心地になん成にければ、詞は無て、

立ぬべき浮名を兼て思はずば、風に煙のなびかざらめや。

其後よりは、彼方此方に結び置れし心の下紐打解て、小夜の枕を河島の、水の心も淺からぬ御契に成しかば、生ては偕老の契深く、又死ては同苔の下にもと、思召通はして、十月餘に成にけるに、又天下の亂出來て、一宮は土佐の畑へ被レ流させ給しかば、御息所は獨都に留まらせ給て、明るも不レ知歎き沈せ給て、せめてなき世の別なりせば、憂に堪ぬ命にて、生れ逢ん後の契を可レ憑に、同世ながら海山を隔て、互に風の便の音信をだにも書絶て、此日比召仕はれける靑侍官女の一人も參り通はず、萬昔に替る世に成て、人の住荒したる蓬生の宿の露けきに、御袖の乾く隙もなく、思召入せ給ふ御有樣、爭でか涙の玉の緒も存へぬと怪き程の御事也。宮も都を御出有し日より、君の御事御身

八聲の鳥ー夜明方は雞の鳴聲頻なる故にかくいふ、八聲は鳴聲の多きをいふ也

のぼれば下るー拾遺集に最上河上れば下る稻舟の否にはあらず此月ばかりとある歌に拠る

百夜の云々ー古今集に

ず、唯思しをれたる其氣色、誠に匂深して、花薫り月霞む夜の手枕に、見終ぬ夢の面影ある御心迷に、明るも不知語ひ給へ共、尚強顔氣色にて程經ぬれば、己が翅を竝べながら、人の別をも思知ぬ八聲の鳥も告渡り、涙の氷解やらず、衣々も冷やかに成て、類も怨き在明の強顔影に立歸せ給ぬ。其後より度々御消息有て、云ばかりなき御文の數、早千束にも成ぬ覽と覺る程に積りければ、女も哀なる方に心引れて、のぼれば下る稻舟の、否には非ずと思へる氣色になん顯れたりける。され共尚互に人目を中の關守になして、月比過させ給けるに、式部少輔英房と云儒者、御文談に參じて、貞觀政要を讀けるに、昔唐の太宗鄭仁基が女を后に備へ、元和殿に册入んとし給ひしを、魏徵諫て此女已に陸氏に約せりと申せしかば、太宗其諫に隨て、宮中に召るゝ事を休め給きと談じけるを、宮熟々と聞召て、如何なれば古の君は、かく賢人の諫に附て、好色心を棄給けるぞ。如何なる我なれば、已に人の云名附て事定りたる中をさけて、人の心を破るらん。古の樣を恥、世の譏を思召て、唯御心の中には戀悲ませ給ひけれ共、御詞には不被出、御文をだに書絕て、角とも聞えねば、百夜の榻の端書、今は我や數書ましと打侘て、海士の苅藻に、思亂給ふ。角て月日も過ければ、德大寺此事を

こゆるぎのいそぎ―相摸國なるこゆるぎの磯といふ地名を急ぎにかけていへる也

やはら―やをら、靜に

案内申せば、宮爲冬計を御供にて、彼亭へ入せ給ぬ。歌の事は今夜さまでの御本意ならねば、唯披講計にて褒貶はなし。主の大臣こゆるぎのいそぎありきて、土器もて參りたれば、宮常よりも興ぜさせ給て、郢曲絃歌の妙々に、御盃給はせ給たるに、主も痛く醉臥ぬ。宮も御枕を傾させ給へば、人皆定りて夜も已に深にけり。媒の左中將心有て醉ざりければ、其案内せさせて、彼女房の栖ける西の臺へ忍入せ給て、墻の隙より見給へば、燈の幽なるに、花紅葉散亂たる屛風引廻し、起もせず寢もせぬ體に打しをれ、唯今人々の讀たりつる歌の短册取出して、顏打傾たれば、こぼれ懸りたる鬢の端より、匂やかに幽なる容顏、露を含める花の曙の色、風に隨へる柳の夕の景色、繪に書共筆も難ㇾ及、語るに言も無るべし。外ながら幽に見てし形の、世に又類もやあらんと、怪しきまでに思ひしは、尙數ならざりけりと御覽じ居給ふに、御心も早ほれ〴〵と成て、不ㇾ知我魂も其袖の中にや入ぬらんと、ある身共なく覺させ給ふ。時節邊に人も無て、燈さへ幽なれば、妻戸を少し押開て、内へ入せ給たるに、女は驚く貌にも非ず、閑やかにもてなして、やはら衣引被て臥たる假粧、云知らずなよやかに閑麗なり。宮も傍に寄臥給て、有しながらの心盡し、哀なる迄に聞えけれ共、女はいらへも申さ

物侘し氣―つらく苦しと思ふ樣子

ひたすらなる御氣色―一筋に思ひ込みたる樣子

申名―いひなづけとなすこと

ひつる似繪に少しも不ㇾ違、尙あてやかに臈闌て、云はん方なくぞ見えたりける。御心地空に浮れて、たど〱しき程に成せ給へば、御車より下させ給て、築山の松の木陰に立寄せ給へば、女房見る人有と物侘し氣にて、琵琶をば几帳の傍に指寄せて、内へ紛れ入ぬ。引や裳裾の白地なる面影に、又立出る事もやとて、立徘徊はせ給たれば、怪げなる御所侍の、御隔子進する音して、早人定りぬれば、何迄角ても可ㇾ有とて、宮還御成ぬ。繪に書たりし形にだに、御心を惱されし御事也。まして實の色を被ㇾ御覽㆒て、如何にせんと御戀忍ばせ給ふも理哉。其後よりは、ひたすらなる御氣色に見えながら、流石御詞には不ㇾ被ㇾ出けるに、常に御會に參り給ふ二條中將爲冬、何ぞや賀茂の御歸さの幽なりし宵の間の月、又も御覽ぜまほしく被㆓思召㆒にや。其事ならば、最安き事にてこそ侍るめれ。彼の女房の行末を委く尋て候へば、今出川右大臣公顯の女にて候なるを、德大寺左大將に乍㆓申名㆒、未皇太后宮の御匣にて候なる。切に被㆓思召㆒候はゞ、歌の御會に申寄て、彼亭へ入せ給ひて、玉垂の隙にも、自御心露す御事にて候へかしと申せば、宮例ならず御快げに打笑せ給て、軈今夜其亭にて可ㇾ有㆓褒貶御會㆒と、右大臣の方へ被㆓仰出㆒ければ、公顯忝と取りきらめきて、數寄の人數多集て、角と

戀せじと―戀せじと御手洗河にせしみそぎ神は受けずもなりにけるかな

纔碎珊瑚―白氏文集の句也、碎は擊に作れり

は見しにも非ず聞しにも非ず、古の無墓物語、化なる筆の跡に御心を被悩ければ、無爲方思召煩はせ給へば、せめて御心を遣方もやと、御車に被召、賀茂の糺宮へ詣させ給ひ、御手洗河の川水を御手水に掬ばれ、何となく河に消遙せさせ給ふにも、昔業平中將、戀せじと御禊せし事も、哀なる樣に思召出されて、

　祈る共神やはうけん、影をのみ御手洗河の深き思を。

と詠ぜさせ給ふ時しもあれ、一村雨の過行程、木の下露に立濡て、御袖もしをれたるに、日も早暮ぬと申聲して、御車を轟かして、一條を西へ過させ給ふに、誰が栖宿とは不知、墻に苔むし、瓦に松生て、年久く住荒したる宿の物さびし氣なるに、撥音氣高く青海波をぞ調べたる。怪しや、如何なる人なるらんと、通難に御車を駐めさせて、遙に見入させ給ひたれば、見る人有共不知體にて、暮居空の月影の、時雨の雲間より幽々と顯れ出たるに、御簾を高く捲上て、年の程二八計なる女房の、云ばかりなくあてやかなるが、秋の別を慕ふ琵琶を彈ずるにてぞ有ける。纔碎珊瑚一兩曲、氷落玉盤千萬聲、雜錯たる其聲は、庭の落葉に紛つゝ、外には降らぬ急雨に、御袖濡る計にぞ聞えたる。宮御目も文に熟々と御覽ずるに、此程坐に御心を盡して、夢にもせめて逢見ばやと、戀悲み給

臈闌て—上品に優美にて

あやにくなる御心—いぢわろくも懸しと思ふ御心

最あかく指出たれば、扇ならでも招べかりけりとて、撥を揚てさしのぞきたる顔つき、いみじく臈闌て、匂やかなる氣色云ばかりなく、筆を盡してぞ書たりける。一宮此繪を被二御覽一、無レ限御心に懸りければ、此繪を暫被二召置一、見るに慰む方もやとて、巻返巻返御覽ぜらるれ共、御心更に不レ慰。昔漢李夫人甘泉殿の病の床に臥て、無レ墓成給しを、武帝悲に堪兼て、反魂香を燒給しに、李夫人の面影の煙の中に見えたりしを、似繪に書せて被二御覽一しかども、不レ言不レ笑令レ愁二殺人一と、武帝の歎給けんも、實に理と思知せ給ふ。我ながらはかなの心迷やな、誠の色を見てだにも、世は皆夢の中の現とこそ思ひ捨る事なるに、是はそも何事の化心ぞや。遍照僧正の歌の心を貫之が難じて、歌のさまは得たれ共、實少し。譬へば繪に書ける女を見て、徒に心を動すが如しと云し、其類にも成ぬる者哉と思捨給へ共、尚あやにくなる御心胸に充て、無レ限御物思に成ければ、傍の色異なる人を御覽じても、御目をだにも廻されず。増て時々の便につけて、事問通し給ふ御方樣へは、一村雨の過る程の笠宿に可二立寄一心地にも思召さず。世中にさる人ありと傳聞て、御心に懸らば、玉垂の隙求る風の便も有ぬべし。又僅に人を見し計なる御心當ならば、水の泡の消返りても、寄瀨はなどか無るべきに、是

一の人―攝政關白

不吉の例とこそ覺ゆれと、諸人の意見共有けれども、是は朝敵の棟梁、義貞の長男なればとて、終に大路を被レ渡けり。春宮京都へ還御成ければ、軈て牢の御所を拵へて奉二押籠一、一宮の御首をば、禪林寺の長老夢窻國師の方へ被レ送、御喪禮の儀式を引繕ろ。さても御匣殿の御歎中々申も愚也。此御匣殿の一宮に參初め給し古の御心盡、世に類なき事とこそ聞えしか。一宮已に初冠めされて、深宮の内に長せ給し後、御才學もいみじく、容顏も世に勝れて御座しかば、春宮に立せ給なんと、世の人時めきあへりしに、關東の計として、想の外に後二條院の第一の御子春宮に立せ給しかば、一宮に參り仕べき人々も、皆望を失ひ、宮も世中萬打凋たる御心地して、明暮は唯詩歌に御心を寄せ、風月に思を傷しめ給ふ。折節に附たる御遊などあれ共、差て興ぜさせ給ふ事もなし。さるにつけても、如何なる宮腹、一の人の御女などを角と仰られば、御心を盡させ給ふまでもあらじと覺えしに、御心に染む色も無りけるにや、是をと被二思召一たる御氣色もなく、唯獨のみぞ年月を送らせ給ける。或時關白左大臣の家にて、なま上達部殿上人數多集て、繪合の有けるに、洞院の左大將の出されたりける繪に、源氏の優婆塞宮の御女、少し眞木柱に居隱て琵琶を調べ給しに、雲隱れしたる月の、俄に

被がせ—水をくゞらせの意、潜の字を用ふるが妥當也

田の一族には、越後守義顯、里見大炊助義氏の首計有て、義貞義助二人の首は無りけり。さては如何樣其邊の淵の底なんどにぞ沈めたらんと、海人を入て被がせけれ共、曾不レ見ければ、足利尾張守、春宮の御前に參て、義貞義助二人が死骸、何に有とも見え候はぬは、何と成候けるやらんと被二尋申一ければ、春宮幼稚なる御心にも、彼人々杣山に有と敵に知せては、軈て押寄る事もこそあれと被二思召一けるにや、義貞義助二人昨日の暮程に自害したりしを、手の者共が役所の内にして、火葬にするとこそ云沙汰せしかと被レ仰ければ、さては死骸なきも道理也けりとて、是を求るに不レ及。さてこそ、杣山には墓墓敷敵なければ、降人にぞ出んずらんとて、暫が程は閣けれ。我執と慾念とにつかはれて、互に害心を發す人々も、終には皆無常の殺鬼に逢ひ、被二呵責一ことも不レ久。哀に愚なる事共なり。新田越後守義顯竝一族三人、其外宗徒の首七を持せ、春宮をば張輿に乘進せて、京都へ還上せ奉る。諸大將事の體皆美々敷ぞ見えたりける。越後守義顯の首をば、大路を渡して、獄門に被レ懸。新帝御卽位の初より三年の間は、天上の刑を不レ行法也。未河原の御禊、大嘗會も不レ被二遂行一先に、首を被レ渡事は如何あるべからん。先帝重祚の初、規矩掃部助高政、絲田左近將監貞吉が首を被レ渡たりしも、

陳陶―晩唐の詩人

らばとても死なんずる命を、若やと寄手の大將のあたりへ紛れ寄て、よからんずる敵と倶に刺違へて死なんとて、五十餘人の兵共、三の木戸を同時に打出、攻口一方の寄手三千餘人を追卷り、其敵に相交て、高越後守が陣へぞ近附ける。如何に心計は彌武に思へ共、城より打出でたる者共の爲體、枯槁憔悴して尋常の人に可紛も無りければ、皆人是を見知て、押隔ける間、一人も能敵に合者無して、所々にて皆討れにけり。都て城中に籠る處の勢は百六十人、其中に降人に成て助かる者十二人、岩の中に隱れて活たる者四人、其外百五十一人は、一時に自害して、皆戰場の土と成けり。されば今に到迄、其怨靈共此所に留て、月雲り雨暗き夜は、叫喚求食の聲啾々として、人の毛孔を寒からしむ。誓掃匈奴不顧身、五千貂錦喪胡塵、可憐無定河邊骨、猶是春閨夢裏人と、己亥の歳の亂を見て、陳陶が作りし隴西行も、角やと被思知たり。

○春宮還御事　附一宮御息所事

去程に夜明ければ、蕪木浦より春宮御座の由告たりける間、島津駿河守忠治を御迎に進せて、取奉る。去夜金崎にて討死自害の首百五十一取並べて、被實檢けるに、新

の家に預け置進せ、是は日本國の主に成せ給ふべき人にて渡せ給ふぞ。如何にもして杣山城へ入進せてくれよと申含めて、蕪木浦より取て返し、本の海上を游歸て、彌三郎大夫が自害して伏たる其上に、自我首を搔落て、片手に提、大膚脱に成て死にけり。土岐阿波守、栗生左衛門、矢島七郎三人は、一所にて腹切んとて、岩の上に立竝で居たりける處に、船田長門守來て、抑新田殿の御一家の運、爰にて悉極め給はゞ、誰々も不ㇾ殘討死すべけれ共、總大將兄弟杣山に御座あり、公達も三四人迄、此彼に御座ある上は、我等一人も活殘て、御用に立んずるこそ、永代の忠功にて侍らめ。何と云沙汰もなく、自害しつれて、敵に所得せさせての用は何事ぞや。いざさせ給へ、若やと隱れて見んと申ければ、三人の者共、船田が跡に附て、遙の磯へ遠淺の浪を分て、半町計行たれば、磯打波に當りて、大に穿たる岩穴あり、爰こそ究竟の隱所なれとて、四人共に此穴の中に隱れて、三日三夜を過しける心の中こそ悲しけれ。由良、長濱は、是までも猶木戸口に支へて、喉乾けば己が創より流るゝ血を受て飲み、力落疲るれば、前に伏たる死人の肉を切て食て、皆人々の自害しはてん迄と戰けるを、安間六郎左衛門走下て、何を期に合戰をばし給ぞ。大將は早御自害候つるぞやと申ければ、いざやさ

云ー文選に君爲元首臣爲股肱明其一體相待而成有君無臣春秋刺焉とあり

將とし、以レ汝令レ爲二股肱臣一。夫無二股肱一元首持事を得んや。されば吾命を白刃の上に縮めて、怨を黄泉の下に酬いんと思也。抑自害をば、如何樣にしたるがよき物ぞと被レ仰ければ、義顯感涙を押へて、加樣に仕る者にて候と申もはてず、刀を拔て逆手に取直し、左の脇に突立て、右の脇のあばら骨二三枚懸て搔破り、其刀を拔て、宮の御前に差置て、うつぶしに成て死にける。一宮軈て其刀を被レ召御覺ずるに、柄口に血餘すべりければ、御衣の袖にて刀の柄をきりきりと押巻せ給て、如レ雪なる御膚を顯し、御心の邊に突立、義顯が枕の上に伏させ給ふ。頭大夫行房、里見大炊助時義、武田與一、氣比彌三郎大夫氏治、太田帥法眼以下御前に候けるが、いざさらば宮の御供仕らんとて、同音に念佛唱て、一度に皆腹を切る。是を見て、庭上に竝居たる兵三百餘人、互に刺違々々、彌が上に重伏。氣比大宮司太郎は、元來力人に勝て、水練の達者なりければ、春宮を小舟に乘進せて、櫓かいも無れ共、綱手を己が横手綱に結附、海上三十餘町を游で、蕪木浦へぞ著進せける。是を知人更に無りければ、潛に杣山へ入進せん事は、最安かりぬべかりしに、一宮を始進せて、城中の人々不レ殘自害する處に、我一人逃て命を活たらば、諸人の物笑なるべしと思ける間、春宮を怪しげなる浦人

以我元首云

弱りてげれ。日の中に攻落さんとて。亂杙逆茂木を引のけ、塀を打破て、三重に拵たる二の木戸迄ぞ攻入ける。由良長濱二人、新田越後守の前に參じて申けるは、城中の兵共、數日の疲に依て、今は矢一をも墓々敷仕得候はぬ間、敵既に一二の木戸を破て、攻近附て候也。如何に思召共叶べからず。春宮をば小舟にめさせ進せ、何の浦へも落し進せ候べし。自餘の人々は、一所に集て御自害有べしとこそ存候へ。其程は我等攻口へ罷向て、相支候べし。見苦しからん物共をば、皆海へ入させられ候へと申て、御前を立けるが、餘に疲れて足も快く立ざりければ、二の木戸の脇に被射殺て伏たる死人の股の肉を切て、二十餘人の兵共一口づゝ食て、是を力にして戰ける。河野備後守は、搦手より攻入敵を支て、半時計戰けるが、今ははや精力盡て、深手餘多負ければ、攻口を一足も引退かず、三十二人腹切て、同枕にぞ伏たりける。新田越後守義顯は、一宮の御前に參て、合戰の樣今は是までと覺え候。我等無力弓箭の名を惜む家にて候間、自害仕らんずるにて候。上樣の御事は、縱敵の中へ御出候共、失ひ進するまでの事はよも候はじ、唯加樣にて御座有べしとこそ存候へと被申ければ、一宮何よりも御快氣に打笑せ給て、主上帝都へ還幸成し時、以我元首

て新田左中將義貞、脇屋右衛門佐義助、洞院左衛門督實世、河島左近藏人維頼を案内者にて、上下七人、三月五日の夜半計に、城を忍び拔出て、杣山へぞ落著せ給ひける。瓜生宇都宮不レ斜悅て、今一度金崎へ向て、先度の恥を雪め、城中の思を令レ蘇と、樣々思案を運しけれども、東風漸閑に成て、山路の雪も村消ければ、國々の勢も寄手に加て、兵十萬騎に餘れり。義貞の勢は、僅に五百餘人、心計は猛けれ共、馬物具も墓々しからねば、兎やせまし角やせましと身を揉て、二十日餘を過しける程に、金崎には、早、馬共をも皆食盡して、食事を斷つ事十日計に成にければ、軍勢共も今は手足もはたらかず成にけり。爰に大手の攻口に有ける兵共、高越後守が前に來て、此城は如何樣兵粮に迫りて、馬をばし食候やらん。初の比は、城中に馬の四五十匹もあるらんと覺えて、常に湯洗をし水を蹴させなんどし候しが、近來は一匹も引出す事も候はず。哀一攻せめて見候はゞやと申ければ、諸大將可レ然と同じて、三月六日の卯刻に、大手搦手十萬餘騎、同時に切岸の下塀際にぞ附たりける。城中の兵共是を防ん爲に、木戸の邊迄よろめき出たれ共、太刀を仕ふべき力もなく、弓を彎べき樣も無れば、唯徒に櫓の上に登り、塀の陰に集て、息つき居たる計也。寄手共此有樣を見て、さればこそ城は

被レ立たる —宗としたる、肝要としたる

し、遂に智伯が孤に趙國を保たせり。此大功併程嬰が謀より出しかば、趙王是を賞して、大祿を與へんとせらる。程嬰是を不レ請、我官に昇り祿を得て、卑くも生を貪らば、杵臼と倶に計し道に非ずとて、杵臼が尸を埋し古き墳の前にて、自劔の上に伏て、同苦にぞ埋れける。されば今の保と義鑑房との討死、古の程嬰杵臼が振舞にも劣るべからずとぞ云べき、

○金崎城落事

金崎城には、瓜生が後攻をこそ、命に懸て待れしに、判官打負て、軍勢若干討れぬと聞えければ、憑方なく成はて、心細ぞ覺ける。日々に隨て兵粮乏く成ければ、或は江魚を釣て飢を資け、或は磯菜を取て日を過す。暫が程こそ加樣の物に命を續で軍をもしけれ、餘に事迫りければ、寮の御馬を始として、諸大將の被レ立たる秘藏の名馬共を、毎日二匹づゝ刺殺して、各是をぞ朝夕の食には當たりける。是に附ても後攻する者なくては、此城今十日とも堪がたし。總大將御兄弟竊に城を御出候て、杣山に入せ給ひ、與力の軍勢を被レ催て、寄手を被二追拂一候へかしと、面々に被二勸申一ければ、現にもと

りと披露して、是を抱きかゝへ、程嬰は主の孤三になるを我子なりと云て、朝夕是を養育しけり、角て杵臼は山深き栖に隱れ、程嬰は趙盾が許に行て、可㆓降參㆒由を申に、趙盾猶も心を置て是を不㆑許。程嬰重て申けるは、臣は元智伯が左右に仕へて、其行跡を見しに、遂に趙國を失はんずる人なりと知れり。遙に君の德惠を聞に、智伯に勝れ給へる事千里を隔たり。故に臣苟も趙盾に仕へん事を乞。豈亡國の先人の爲に、有德の賢君を謀らんや。君若我をして臣たる道を許されば、亡君智伯が孤三歳になる此にあり。杵臼が養育し深く隱置たる所、我具にしれり。君是を失せ給ひて、趙國を永く令㆑安給へとぞ申たりける。趙盾是を聞給て、さては程嬰不㆑僞吾が臣とならんと思けると信じて、程嬰に武官を授て、あたり近く被㆓召仕㆒けり。さては杵臼が隱したる所を委尋聞て、數千騎の兵を差遣して、是を召捕らんとす。杵臼兼て相謀し事なれば、未膝の上なる三歳の孤を刺殺して、亡君智伯の孤運命拙して、謀已に顯れぬと喚て、杵臼も腹搔切て死にけり。趙盾今より後は吾子孫の代を傾けんとする者は非じと悅で、彌程嬰に心を不㆑置、剰大祿を與へ、高官を授て、國の政を令㆑司。爰に智伯が孤程嬰が家に長りしかば、程嬰忽に兵を發して、三年が内に趙盾を亡

八年即ち晉の景公襦元年の事にて事實少く違へり史記の趙世家を參照すべし

云ける二人、趙の國を爭ふ事年久し。或時智伯已に趙盾がために被取卷、夜明なば討死せんとしける時、智伯が臣程嬰杵臼と云ける二人の兵を呼寄て、我已に運命極迄趙盾に圍まれぬ。夜明ば必討死すべし。汝等我に眞實の志深くば、今夜潛に城を迯出て、我三歳の孤を隱置て、長らば趙盾を亡して、我生前の恥を雪むべしとぞ宣しける。程嬰杵臼是を聞て、臣等主君と共に討死仕ん事は、近して易し。三歳の孤を隱して命を全せん事は、遠して難し。雖然、爲臣道豈易を取て難を捨ん哉。必君の仰に可隨とて、程嬰杵臼は、潛に其夜紛れて城を落にけり。夜明ければ、智伯忽に討死して殘る兵も無りしかば、多年爭ひし趙國終に趙盾に隨ひけり。爰に程嬰杵臼二人は、智伯が孤を隱さんとするに、趙盾是を聞附て、討んとする事頻也。程嬰是を恐れて、杵臼に向て云く、舊君三歳の孤を以て、此二人の臣に託たり。されば死して敵を欺かんと、暫命を生て孤を取立んと、何か難かるべき。杵臼が云く、死は一心の義に向ふ處に定り、生は百慮の智を盡す中に全し。然ば吾生を以て難しとす。程嬰、さらば吾は難に附て、命を全すべし。御邊は易に附て、討死せらるべしと云に、杵臼悅で許諾す。さらば謀を運すべしとて、杵臼、我子の三歳に成けるを舊主の孤な

無念に—此語原本に無し異本に依て補ふ

晉の世云々—周の定王

去程に、敗軍の兵共杣山へ歸ければ、手負死人の數を註すに、里見伊賀守、瓜生兄弟、甥の七郎が外、討死する者五十三人、被ㇾ創者五百餘人也。子は父に別れ、弟は兄に後て、啼哭する聲家々に充滿たり。去共瓜生判官が老母の尼公有けるが、敢て悲める氣色もなし。此尼公大將義治の前に參て、此度敦賀へ向て候者共が不覺にてこそ、里見殿を討せ進せて候へ。さこそ無念に被㆓思召㆒候らめと、御心中推量り進せて候。但是を見ながら、判官兄弟何も無ㇾ恙してばし歸り參りて候はゞ、如何に今一入うたてしさも無㆓遣方㆒候べきに、判官が伯父甥三人の者、里見殿の御供申し、殘の弟三人は、大將の御爲に活殘て候へば、歎の中の悅とこそ覺て候へ。元來上の御爲に、此一大事を思立候ぬる上は、百千の甥子共が被ㇾ討候共、可ㇾ歎にては候はずと、淚を流して申つゝ、自酌を取て、一獻を進め奉りければ、機を失へる軍勢も、別を歎く者共も、愁を忘れて勇をなす。抑義鑑房が討死しける時、弟三人が續て返しけるを、堅く制し止めける謂を如何にと尋ぬれば、此義鑑房合戰に出ける度每に、若此軍難儀に及ばゝ、我等兄弟の中に一兩人は討死をすべし。殘の兄弟は命を全して、式部大輔殿を取立進すべしとぞ申ける。是も古の義を守りし人を規とせし故也。昔晉の世に趙盾、智伯と

一旦の負云云―此の所十三字原本に無し異本に依て補ふ

にて討死せでは、御方の勢は助るまじき處ぞと自嘆して、唯二人打懸り、敵の中へ破て入んとするを、判官が弟林次郎入道源琳、同舍弟兵庫助重、彈正左衛門照三人是を見て、遙に落延たりけるが、共に討死せんと取て返しけるを、義鑑房尻目に睨で、日來再三謂し事をば、何の程に忘けるぞ。我等二人討死したらんは一旦の負、兄弟殘なく死たらば永代の負にて有んずるを、思籠る心の無りける事の云甲斐なさよと、あらゝかに申止ける間、三人の者共、現にもと思返して、少し猶豫しける間、大勢の敵に中を被押隔、里見、瓜生、義鑑房三人は、一所にて被討にけり。葉原より深雪を分て重鎧に肩をひける者共、數刻の合戰に入替る勢もなく戰疲ければ、返さんとするに力盡き、引んとするに足たゆみぬ。されば此彼に引延て、腹を切者數を不知。適落延る兵も、弓矢物具を棄ぬはなし。さてこそ先日府鯖竝の軍に多く捨たりし物具共をば、今皆取返たれと、敦賀の寄手共は笑ける。是程に不定の人間、仇なる身命を資んとて、互に罪業を造り、長き世の苦を受ん事こそ淺猿けれ。

○瓜生判官老母事　附程嬰杵臼事

遍地芽已百囀、頻伽在殻聲勝衆鳥とあり、頻伽羅は鳥の名

椀飯―料理を振舞ふこと

はして、加樣に思ひ給けるこそ憑しけれ。さらば軈て金崎の後攻をすべしとて、兵を集め楯を作せて、さ程雪の降ぬ日を門出にしてぞ相待ける。正月七日椀飯事終て、同十一日雪晴風止て、天氣少し長閑なりければ、里見伊賀守を大將として、義治五千餘人を金崎の後攻の爲に、敦賀へ被ニ差向一。其勢皆吹雪の用意をして、物具の上に簑笠を著、踏組の上に檋を履で、山路八里が間の雪踏分て、其日葉原迄ぞ寄たりける。高越後守も兼て用意したる事なれば。敦賀津より二十餘町東に當て、究竟の用害の有ける處へ、今川駿河守を大將として、二萬餘騎を差向て、所々に搔楯搔せて、今や寄ると待懸たり。夜明くれば先一番に、宇都宮紀淸兩黨三百餘人押寄て、坂中なる敵千餘人を遙の峯へ卷上て、軈二陣の敵に懸らんとしけるが、兩方の峯なる大勢に被ニ射立一、北なる峯へ引退く。二番に瓜生、天野、齋藤、小野寺七百餘騎、鋒を調へて上けるに、駿河守の固めたる陣を三箇所被ニ追破一、ぱつと引ける處へ、越後守が勢三千餘騎、新手に代て相戰ふ處に、瓜生小野寺が勢又追立られて、宇都宮と一に成んと、傍なる峯へ引上けるを、里見伊賀守僅の勢にて、穢し返せとて、橫合に進まれたり。敵是を大將よと見てければ、自餘の葉武者には懸らず、おつ取籠て討んとしけるを、瓜生と義鑑房と屹と見て、我等爰

よに無興げなる體—まことに不機嫌なる樣子

好堅樹、頻伽羅—法華文句に好堅

卒して、十一月廿八日に蕪木浦より越前の府へ歸給ふ。瓜生是事を聞て、敵に少しも足をためさせては惡かるべしとて、同二十九日に、三千餘騎にて押寄せ、一日一夜攻戰て、遂に高經が楯籠たる新善光寺城を攻落す。此時又被ㇾ討者二百餘人、生虜百三十人が首を刎て、帆山河原に懸竝ぶ。夫より式部大輔義治、勢漸近國に振ひければ、平泉寺豐原の衆徒、當國他國の地頭御家人、引出物を捧げ、酒肴を舁せて、日々に群集しけれども、義治よに無興げなる體にのみ見え給ければ、義鑑房御前に近附て、是程目出たき砌にて候に、などや勇げなる御氣色も候はぬやらんと申ければ、義治袖搔收め給て、御方兩度の軍に討勝て、敵を多く亡したる事、尤可ㇾ悅處なれ共、春宮を始進せて、當家の人々金崎城に被ㇾ取籠ㇾ御座あれば、さこそ兵粮にも詰り、戰にも苦みて、心安き隙もなく御座すらめと想像奉る間、酒宴に臨め共、樂む心も候はずと宣へば、義鑑房畏て申けるは、其事にて候はゞ、御心安く被ㇾ思召ㇾ候へ。此間は餘に吹雪烈くして、長途の步立難儀に候間、天氣の少し晴るゝ程を相待にて候とて、感涙を押へながら、御前をぞ立にける。宇都宮と小野寺と墻越に是を聞て、好堅樹は地の底に有て、芽百圍をなし、頻伽羅は卵の中に有て、聲衆鳥に勝れたりといへり。此人丈夫の心根お

て、山路八里を一日に越て、湯尾宿にぞ着たりける。此より杣山へは五十町を隔て、其際に大河あり。日暮て路に歩疲れぬ。明日こそ相近て、矢合をもせめとて、僅なる在家に詰居て、火を燒、身を温めて、前後も不ㇾ知寢たりけり。瓜生は兼て案の圖に、敵を谷底へおびき入て、今はかうと思ければ、其夜の夜半計に、野伏三千人を後の山へあげ、足輕の兵七百餘人、左右へ差廻して、鬨をぞ揚たりける。寢おびれたる寄手共、時の聲に驚て、周章ふためく處へ、宇都宮紀清兩黨亂入て、家々に火を懸たれば、物具したる者は太刀を不ㇾ取、弓を持たる者は矢を不ㇾ矯、五尺餘降積たる雪の上に、檋も不ㇾ懸して走出たれば、胸の邊迄落入て、足を拔んとすれ共不ㇾ叶、唯泥に粘たる魚の如くにて、被二生虜一者三百餘人、被ㇾ討者は數を不ㇾ知、希有にして迯延たる人も、皆物具を捨て、弓箭を失はぬ者は無りけり。

○越前府軍附金崎後攻事

北國の道塞て、後に敵あらば、金崎を攻ん事難儀なるべし。如何にしても、杣山の勢を國中へはびこらぬ樣にせでは叶まじとて、尾張守高經、北陸道四箇國の勢三千餘騎を

橇―此字は元來そりの義なれどかんじきの事に用ゐたり雪の上を歩する時足に穿つもの

候へと云ければ、師泰が執事山口入道、杉板を札に作て、此人夫百五十可レ通と書て、判を居てぞ出しける。瓜生此札を請取て、下なる判形計を殘置て、上なる文字を皆押削て、上下三百人可レ通と書直し、宇都宮、天野、相共に、深山寺の關所を無二事故一通てけり。瓜生判官杣山に歸りければ、三人の弟共大に悅で、軈式部大輔義治を大將として、十一月八日飽和社の前にて、中黑の旗を擧ける程に、去ぬる十月坂本より落下ける軍勢、此彼に隱居たりけるが、此事を聞て、何の間にか馳來りけん、無レ程千餘騎に成にけり。則其勢を五百餘騎差分て、鯖竝宿湯尾峠に關を居て、北國の道を差塞。昔の火打城の巽に當る山の水木足て嶮く峙たる峯を、詰の城に拵て、兵粮七千餘石積籠たり。是は千萬懸合の軍に打負る事あらば、楯籠らん爲の用意也。越後守師泰は、此由を聞て、若遲く退治せば、劒白山の衆徒等成合て、由々敷大事なるべし。時を不レ替杣山を打落して、金崎城を心安く可レ攻とて、能登、加賀、越中三箇國の勢六千餘騎を、杣山城へぞ差向ける。瓜生是を聞て、敵の陣を要害に取せじとて、新道、今庄、葉原、宅良、三尾、河内、四五里が間の在家を、一字も不レ殘燒拂て、杣山城の麓なる湯尾宿計をば、態燒殘してぞ置たりける。去程に、十一月廿三日、寄手六千餘騎深雪に橇を懸

談の次に、家々の旗の紋共を云沙汰しける處に、誰とは不レ知、末座なる者、二引兩と大中黑と、何か勝れたる紋にて候覽と問ければ、美濃將監、紋の善惡をば暫置、吉凶を云者、大中黑程目出度紋は非じと覺ゆ。其故は、前代の紋に三鱗形をせられしが滅びて、今の世二引兩に成ぬ。是を又亡さんずる紋は、一引兩にてこそあらんずらめと申ければ、天野民部大輔、勿論に候。周易と申文には、一文字をばかたきなしと讀て候なる。されば此御紋は、如何樣天下を治めて、五畿七道を悉敵無き世に成ぬと覺て候と、文字に附て才覺を吐ければ、又傍なる者の、天に口なし以レ人云しむと、無二憚所一笑戲れければ、瓜生判官是を聞て、さては此人々も野心を挾む所存有けりと、嬉く思て、常に酒を送り茶を進て、連々に昵近附て後、大義を思立候由を語りければ、宇都宮も天野も、仔細非じとぞ同じける。さらば聽て杣山へ歸て、旗を擧んと評定しける處に、諸國の軍勢共、暇をも不レ乞、己が所領へ拔々に歸りけるを押留めん爲に、高越後守、四方の口々に堅く兵士を居て、人を不レ通。若は所用ありて此道を通る人は、師泰が判形を取てぞ通ける。瓜生判官、さらば此關を謀て通らんと思て、越後守の許に行て、御馬の大豆を召進せん爲に、杣山へ人夫を百五十人可レ遣候。關所の御札を賜り

金崎城には、出入絶たるに依て、知人も無りける處に、十一月二日の朝なぎに、櫛川の島崎より、金崎を指て游者あり。海松和布を被く海士人か、浪に漂ふ水鳥かと、目を注て是をみれば、其には非して、亙理新左衞門と云ける者、吉野の帝より被レ成たる綸旨を髻に結附て游ぐにてぞ有ける。城中の人々驚て、急ぎ開て見るに、先帝潛に吉野へ臨幸成て、近國の士卒悉馳參る間、不日に京都を可レ被レ攻由被レ載たり。寄手は是を聞て、此際隱しつる事を、城中に早知れぬと不レ安思へば、城の内には、援の兵共國々に出來て、今に寄手を追掃んと、悅の心身に餘れり。中にも瓜生判官保、足利尾張守高經の手に屬して、金崎の攻口にあり。其弟兵庫助重、彈正左衞門照、義鑑房三人は、未金崎へは向はで、杣山城に有けるが、去月十一日に、新田の人々此國へ被レ落たりし時、義鑑房が隱置たりし脇屋右衞門佐の子息、式部大輔義治を大將として、義兵を擧んと、日々夜々にぞ巧ける。兄の判官此事を聞て、此者共若楚忽に謀叛を發さば、我必存知せぬ事は非じとて、金崎にて討れぬと思ければ、兄弟一に成てこそ、兎も角も成めと思返して、哀同心する人あれかしと、壁に耳を附、心を人の腹に置て、兎角伺ひ聞ける折節、陣屋を竝て居たりける宇都宮美濃將監と、天野民部大輔と寄合て、四方山の雜

那羅延―天上の力士也
金剛の杵―七寶の一にて能く修羅を滅すといふ

樓羅炎の内に坐し給へり、或若大衆一人走寄て、是を引立んとするに、其身磐石の如くにして、那羅延が力にても動し難く、金剛の杵も碎き難ぞ見えたりける。惡僧等猶是にも不レ恐、穴こと〴〵し、如何なる古狸古狐なりとも、妖る程ならば、是にや劣るべき。よし〳〵眞の不動か、覺鑁が妖たる形か、打て見よとて、大なる石を拾懸て、十方より是を打に、投る飛礫の聲、大日の眞言に聞えて、曾て其身に不レ中、あらけて微塵に碎去る。是時覺鑁、去ばこそ汝等が打處の飛礫、全く我身に中る事不レ可レ有と、少し憍慢の心を被レ起ければ、一の飛礫上人の御額に中て、血の色漸にして見えたりけり。さればこそとて大衆共同音にどつと笑ひ、各院々谷々へぞ歸りける。是より覺鑁上人の門徒五百坊、心憂事に思て、傳法院の御廟を根來へ移して、眞言祕密の道場を建立す。其時の宿意相殘て、高野根來の兩寺、動すれば確執の心を挾めり。

○瓜生擧レ旗事

去程に、先帝は吉野に御座有て、近國の兵馳參る由聞えければ、京都の周章は申に不レ及、諸國の武士も、又天下不レ穩と、安き心も無りけり。此事已に一兩月に及けれ共、

四曼不離—四種の曼荼羅の常に身に離れざること

有漏の身—煩惱の身

一印一明—印とは印契とて手を以て行ふ所謂身密也、明とは佛菩薩の神呪といひ所謂口密也

高野の傳法院に、覺鑁とて一人の上人御座けり。一度三密瑜伽の道場に入しより、永く四曼不離の行業に不レ懈、觀法座闌にして、薰修年久しかりけるが、卽身成佛と乍レ談、猶有漏の身を不レ替事を歎て、求聞持の法を七座迄行ふ。され共三品成就の内、何を得たりとも覺ざりければ、覺洞院の淸憲僧正の室に入、一印一明を受て、又百日行ひ給ひければ、其法忽に成就して、自然智を得給て、淺略深祕の奥義、不レ習底を極め、不聞旨を開けり。爰に我慢邪慢の大天狗共、如何にして此人の心中に依託して、不退の行學を妨んとしけれ共、上人定力堅固なりければ、隙を伺事を不レ得。されども或時上人溫室に入て、瘡をたでられけるが、心身快して、纔の樂に婬著す。是時天狗共力を得、造作魔の心をぞ附たりける。是より覺鑁傳法院を建立して、我門徒を昌にせばやと思ふ心懇に成ければ、鳥羽禪定法皇に奏聞を經て、堂舍を立、僧坊を作らる。されば一院の草創、不日に事成りし後、覺鑁上人忽に入定の扉を閉て、慈尊の出世五十六億七千萬歳の曉を待給ふ。高野の衆徒等是を聞て、何條其御房我慢の心にて被レ掘埋、高祖大師の御入定に同じからんとすべき樣やある。其儀ならば一院を破却せよとて、傳法院へ押寄せ、堂舍を燒拂ひ、御廟を掘破て是を見に、上人は不動明王の形像にて、伽

春雷―呂氏春秋に開春始雷則蟄蟲動矣とあり

明神、三種の神器を擁護し、萬乘の聖主を鎭衞し給ふ瑞光也。暫も不レ可レ有二猶豫一とて、若大衆三百餘人皆甲冑を帶して、御迎にぞ參りける。此外楠帶刀正行、和田次郎、眞木定觀、三輪西阿、紀伊國には、恩地、牲河、貴志、湯淺、五百騎三百騎引も切らず、面々馳參ける間、雲霞の勢を腰輿の前後に圍ませて、無レ程吉野へ臨幸なる。春雷一たび動く時、蟄蟲萌蘇する心地して、聖運忽に開けて、功臣既に顯れぬと、人皆歡喜の思をなす。

○高野與二根來一不和事

先帝花山院を忍出させ給て、吉野に潛幸成りしかば、近國の軍勢は申に不レ及、諸寺諸社の衆徒神官に至まで、皆王化に隨て、或は軍用を支へ、或は御禱を致しけるに、根來の大衆は、一人も吉野へ參らず。是は必しも武家を贔屓して、公家を背き申には非ず、此君高野山を御崇敬有て、方々の所領を被レ寄、樣々の御立願有と聞て、偏執の心を挾ける故也。抑爲二釋門徒一者は、以二柔和一宗とし、以二忍辱一衣とする事にてこそあるに、根來と高野と、依二何事一是程迄に確執の心をば結ぶぞと、事の起を尋ぬれば、中比

行器—食物を入れて持ちはこぶ器
夫—人夫

を輿舁になし、三種の神器をば足附たる行器に入て、物詣する人の破籠なんど入て持せたる様に見せて、景繁夫に成て是を持つ。何も皆習はぬ業なれば、急ぐとすれども行やらで、其日の暮程に内山までぞ著せ給ける。此までも、若敵の追蒐進する事もや有んずらんと、安き心も無りければ、今夜如何にもして、吉野邊まで成進せんとて、此より寮の御馬を進せたれ共、八月二十八日の夜の事なれば、道最暗して可レ行様も無りける處に、俄に春日山の上より金峯山の嶺まで、光物飛渡る勢に見えて、松明の如くなる光、終夜天を耀し、地を照しける間、行路分明に見えて、程なく夜の曙に、大和國賀名生と云所へぞ落著せ給ける。此所の有様、里遠して人煙幽に、山深して鳥の聲も稀也。柴と云物をかこひて家とし、芋野老を掘て渡レ世計なれば、皇居に可レ成所もなく、供御に備べき其儲も難レ尋。角ては如何可レ有なれば、吉野の大衆を語ひて、君を入進せんと思て、景繁則吉野へ行向ひ、當寺の宿老吉水法印に此由を申ければ、滿山の衆徒を語ひ、藏王堂に集會して僉議しけるは、古清見原天皇大友皇子に被レ襲、此所に御幸成しも、無レ程天下太平を被レ致。其先蹤に附て、今仙蹕を被レ促事衆徒何ぞ異議に可レ及乎。就レ中昨夜の光物臨幸の道を照す、是併當山の鎭守藏王權現、小守勝手大

謳歌の說
世の風說

侍を以て、潛に奏聞申けるは、越前の金崎の合戰に、寄手每度打負候なる間、加賀國、劔、白山の衆徒等御方に參り、富樫介が籠て候那多城を攻落して、金崎の後攻を仕らんと企候なる。是を聞て、還幸の時供奉仕て京都へ罷上候し菊池掃部助武俊、日吉加賀法眼以下、皆己が國々へ迯下て、義兵を擧、國中を打從へて候なる間、天下の反覆遠からじと、謳歌の說滿耳候。急ぎ近日の間に、夜に紛れて大和の方へ臨幸成候て、吉野十津川の邊に皇居を被定、諸國へ綸旨を被成下、義貞が忠心をも助られ、皇統の聖化を被耀候へかしと、委細にぞ申入たりける。主上事の樣を具に被聞召、さては天下の武士猶帝德を慕ふ者多かりけり。是天照太神の景繁が心に入替せ給て、被示者也と被思召ければ、明夜必寮の御馬を用意して、東の小門の邊に相待べしとぞ被仰出ける。相圖の刻限にも成ければ、三種の神器をば、新勾當内侍に被持て、童部の蹈開たる築地の崩より、女房の姿にて忍出させ給ふ。景繁兼てより用意したる事なれば、主上をば寮の御馬に昇乘せ進せ、三種の神器を自荷擔して、未夜の中に大和路に懸て、梨間宿までぞ落し進せける。白晝に南都を如此にて通らせ給はゞ、人の怪め申事もこそあれとて、主上をば怪げなる張輿に召替させ進せて、供奉の上北面共

楓橋の夜の泊—かの唐の張繼の有名なる月落烏啼の詩を引く

梁園—梁の孝王の兎園の遊を好みし故事を引く

○先帝潜二幸吉野一事

主上は重祚の御事相違候はじと、尊氏卿様々被レ申たりし僞の詞を御憑有て、自二山門一還幸成しか共、元来謀進せん爲なりしかば、花山院の故宮に被二押籠一させ給、宸襟を蕭颯たる寂寞の中に惱さる。霜に響く遠寺の鐘に御枕を欹て、楓橋の夜の泊に御哀を副られ、梢に餘る北山の雪に御簾を撥ては、梁園の昔の御遊に御涙を催さる。紅顔花の如くなりし三千の宮女も、一朝の嵐に誘引れて、何地ともなく成しかば、夜のおとゞに入せ給ても、夢より外の昔もなし。紫宸に星を列し百司の老臣も、滿天の雲に被レ掩、參仕る人一人もなければ、天下の事如何に成ぬ覽と、可レ被二尋聞召一便もなし。抑朕が不德何事なれば、か程に佛神にも放たれ奉て、逆臣の爲に被レ犯覽と、舊業の程も淺猿く、此世中も憑少く被二思召一ければ、寛平の遠き跡をも尋ね、花山の近き例をも追ばやと、思召立せ給ける處に、刑部大輔景繁武家の許を得て、唯一人伺候したりけるが、勾當内

石づき—柄の端をいふ

播磨國の住人野中八郎貞國と云ける者是を見て、知らで有んは無㆑力、御方の兵の舟に乘後て、敵に討れんとするを、親り見ながら助ずと云事や有べき。此船漕戻せ。中村助んと云けれ共、人敢て耳にも不㆓聞入㆒。貞國大に忿て、人の棹す櫓を引奪て、逆櫓に立、自船を押返し、遠淺より下立て、唯一人中村が前へ歩行。城の兵共是を見て、手負て引兼たる者は何樣宗徒の人なれば社、是を討せじと、遙に引たる敵共は又返合すらめ。下合て首を取れとて、十二三人が程、中村が後へ走懸りけるを、貞國些も不㆑騷、長刀の石づき取伸て、向敵一人諸膝薙で切居、其首を取て鋒に貫き、中村を肩に引懸て、閑に船に乘ければ、敵も御方も是を見て、哀剛の者哉と、譽ぬ人こそ無りけれ。其後よりは、寄手大勢也といへ共、敵手痛く防ければ、攻屈して、唯歸り逆茂木引、向櫓を掻て、徒に矢軍計にてぞ日を暮しける。

る。敵さすがに小勢なれば、戰疲れて見えける處に、例の栗生左衞門、緋威の鎧に、龍頭の冑を夕日に耀かし、五尺三寸の太刀に、樫の棒の八角に削たるが、長さ一丈二三尺も有らんと覺えたるを打振て、大勢の中へ走懸り、片手打に二三十、重ね打にぞ打たりける。寄手の兵四五十人、犬居にどうと打居られ、中天にづんと被打擧、沙の上に倒れ伏。後陣の勢是を見て、しどろに成て浪打際に叢立所へ、氣比大宮司太郎、大學助、矢島七郎、赤松太田帥法眼、四人無透間打て懸りける間、叶はじとや思けん、小笠原が八百餘人の兵一度にぱつと引て、本の陣へぞ歸りける。今川駿河守此日の合戰を見て、推量するに、此が如何樣被破ぬべき所なればこそ、城より此を先途と出ては戰らめ。陸地より寄ればこそ、足立惡て、輒く敵には被拂つれ。船にて一攻攻て見よと、小舟百餘艘に取乘て、昨日小笠原が攻たりし濱際よりぞ上ける。寄と均く、切岸の下なる鹿垣一重引破て、艤て出塀の下へ著んとしける處へ、又城より裹つれたる兵二百餘人、拔連て打出たりけり。寄手五百餘人眞逆に被卷落、我先にと舟にぞ込乘ける。遥に舟を押して跡を顧に、中村六郎と云者痛手を負て舟に乘後れ、礒陰なる小松の陰に、太刀を倒について、其舟寄よと招共、あれ〳〵と云計にて、助んとする者も無けり。爰に

裹つれたる―甲冑に身を裹みて連立たちる

家禮―家人と同じ普通は家來と書く

新道より向ふ。佐々木鹽冶判官高貞は、出雲伯耆の勢三千餘騎を率して、兵船五百餘艘に取乘て、海上よりぞ向ひける。其勢都合六萬餘騎、山には役所を作並べ、海には舟筏を組で、城の四方を圍ぬる事、隙透間も無りけり。彼城の有樣、三方は海に依て岸高く巖滑也。巽の方に當れる山一つ、城より少し高うして、寄手城中を目の下に直下すといへ共、岸絶地僻にして、近附て寄れば、城郭一片の雲の上に峙ち、遠して射れば、其矢萬仭の谷の底に落つ。されば如何なる巧を出して攻る共、切岸の邊までも可㆓近附㆒樣は無りけれ共、小勢にて而も新田の名將一族を盡して被㆑籠たり。寄手大勢にて而も將軍の家禮、威を振て向はれたれば、兩家の爭、唯此城の勝負に有べしと、各機を張、心を專にして、攻戰ふ事片時もたゆまず。矢に當て創を病、石に打れて骨を碎く者、毎日千人二千人に及べ共、逆茂木一本をだにも破られず。是を見て小笠原信濃守、究竟の兵八百人を勝て、東の山の麓より、巽角の尾を直違に、かづき連てぞ上たりける。城には此や被㆑破べき所なりけん、城中の兵三百餘人、二の關を開て、同時に打て出たり。兩方相近に成ければ、矢を止て打物になる。防ぐ兵は、此を引ば繼て攻入られぬと危みて、一足も不㆑退戰。寄手は無㆓云甲斐㆒引て、敵御方に不㆑被㆑笑と、命を捨てぞ攻たりけ

といふ也
屠人—料理人
胙—祭肉

胙を保てり。今の奇瑞古に同じ。早く是を天に祭て壽をなすべしと、屠人是を調て、其胙を東宮に奉。東宮御盃を傾させ給ける時、島寺の袖と云ける遊君、御酌に立たりけるが、拍子を打て、翠帳紅閨、萬事之禮法雖異。舟中波上、一生之歡會是同と、時の調子の眞中を、三重にしほり歌ひたりければ、儲君儲王忝も叡感の御心を被傾、武將官軍も齊く嗚咽の袖をぞぬらされける。

○金崎城攻事　附野中八郎事

杣山より引返す十六騎の勢に被出抜、金崎の寄手四方に退散しぬる由、京都へ聞えければ、將軍大に忿を成して、軈て大勢をぞ被下ける。當國の守護尾張守高經は、北陸道の勢五千餘騎を率して、蕪木より向はる。仁木伊賀守頼章は、丹波美作の勢千餘騎を率して、鹽津より向はる。今川駿河守は、但馬若狹の勢七百餘騎を率して、小濱より向はる。荒川參河守は、丹後の勢八百餘騎を率して、匹壇より向はる。細川源藏人は、四國の勢二萬餘騎を率して、東近江より向はる。高越後守師泰は、美濃尾張遠江の勢六千餘騎を率して、荒血中山より向はる。小笠原信濃守、信濃國の勢五千餘騎を率して、

猶不レ留、誰が追としもなきに遠引して、皆己が國々へぞ歸りける。

○金崎船遊事 附白魚入レ船事

去程に、百重千重に城を圍みたりつる敵共、一時の謀に被レ破て、近邊に今は敵と云者一人も無りければ、是唯事に非ずとて、城中の人々の悅合る事限なし。十月二十日の曙に、江山雪晴て、漁舟一篷の月を載せ、帷幕風捲て、貞松千株の花を敷けり。此興都にて未レ被二御覽一風流なれば、逆旅の御心をも慰められん爲に、浦々の船を點ぜられ、龍頭鷁首に準て、雪中の景をぞ興ぜさせ給ける。春宮一宮は御琵琶、洞院左衛門督實世卿は琴の役、義貞は横笛、義助は笙の笛、維頼は打物にて、蘇合香の三帖、萬壽樂の破、繁絃急管の聲、一唱三嘆の調融々洩々として、正始の音に叶ひしかば、天衆も爰に天降り、龍神も納受する程也。簫韶九奏すれば、鳳舞ひ魚跳る感有。誠に心なき鱗までも是を感ずる事や有けん、水中に魚跳、御舟の中へ飛入ける。實世卿是を見給て、昔周の武王八百の諸侯を率し、殷の紂を討ん爲に孟津を渡りし時、白魚跳て武王の舟に入けり。武王是を取て天に祭る。果して戰に勝事を得しかば、殷の世を遂に亡して、周八百の

打物―太鼓鼓の類

正始の音―毛詩に關雎小雅大雅魯頌を四始といひ其正德を表したるを正始の音

金雞三たび唱—淮南子に桃都山大樹曰桃都、日出有天雞即鳴、天下雞皆鳴とあり、祖苑事庭には天上金雞とも見ゆ

雪より白む—雪のある所より明け始む

たび唱て、雪より白む山の端に、横雲漸引渡りければ、十六騎の人々、中黒の旗一旒差擧、深山寺の小陰より、敵陣の後へ懸出て、瓜生、富樫、野尻、井口、豐原、平泉寺並に劔、白山の衆徒等二萬餘騎にて後攻仕候ぞ。城中の人々被二出向一候て、先懸者共の剛臆の振舞、委く御覽じて、後の證據に立られ候へと、聲々に喚て鬨をぞ揚たりける。其眞前に前みける武田五郎は、京都の合戰に切れたりし右の指未レ痊して、太刀のつかを拳るべき樣も無りければ、杉の板を以て木太刀を作て、右の腕にぞ結附たりける。二番に前みける栗生左衞門は、帶副の太刀無りける間、深山柏の園一尺計なるを、一丈餘に打切て、金才棒の如くに見せ、右の小脇にかい挾て、大勢の中へ破て入。是を見て、金崎を取卷たる寄手三萬餘騎、すはや杣山より後攻の勢懸けるはとて、馬よ物具よと周章騷ぐ。案の如く深山寺に立竝たる旗共の、木々の嵐に翻るを見て、後攻の勢げにも大勢なりけりと心得て、攻口に有ける若狹越前の勢共、楯を捨て弓矢を忘れてばつと引。城中の勢八百餘人是に利を得て、濱面の西大鳥居の前へ打出たりける間、雲霞の如くに充滿したる大勢共、度を失て十方へ逃散。或は跡に引を敵の追と心得て、返合せて同士打をし、或は要て逃を敵と見て、立留て腹を切もあり。二里三里か外にも

篠目―あけに冠する枕詞

始浄慶が問答の難儀なりしを聞て、金崎へ通らん事叶はじとや思けん、唯今まで二百五十騎有つる軍勢、いづちともなく落失て、僅十六騎に成にけり。深山寺の邊にて樵の行合たるに、金崎の様を問給へば、昨日の朝より國々の勢二三萬騎にて、城を百重千重に取巻て攻候也とぞ申ける。さてはいかゞすべき、是より東山道を經て、忍で越後へや下る、唯爰にて腹をや切ると、異議區々なりけるを、栗生左衛門進出で申けるは、何の道を經ても、越後まで遙々と落させ給はん事、叶はじとこそ存候へ。下人の一人をもつれぬ旅人の、疲て道を通り候はんを、誰か落人よと見ぬ事の候べき。又面々爰にて腹を切候はんずる事も、楚忽に覺え候へば、今夜は此山中に忍て夜を明して、まだ篠目の明はてざらん比ほひ、杣山城より後攻するぞと呼はりて、敵の中へ懸入て戰んに、敵若騒で、攻口を引退事あらば、差違うて城へ入候べし。騒で路を遮り候はゞ、思ふ程太刀打して、惣大將の被二御覽一御目の前にて、討死仕て候はんこそ、後までの名も九原の骨にも留り候はんずれと申ければ、十六人の人々皆此議にぞ被レ同ける。去ば大勢なる體を敵に見する様に謀れとて、十六人が鉢巻と上帶とを解て、青竹の末に結附て旗の様にみせて、此の木の梢彼の陰に立置て、明るを遲しとぞ待れける。金鷄三

一家―新田氏の一族

射向の袖に―射向の袖に加へて

を移しける間、光氏馬より下て、鎧の上帶切て投捨、天下の爲に重かるべき大將の御身としてだにも、軍勢の命に替らんとし給ぞかし、況や義に依て命を輕ずべき郎從の身として、主の御命に替らぬ事や有べき。さらば早光氏が首を取て、大將を通し進らせよと云もはてず、腰の刀を拔て、自腹を切んとす。其忠義を見に、淨慶さすがに肝に銘じけるにや、走寄て光氏が刀に取附、御自害の事努々候べからず。げにも大將の仰も、士卒の所存も、皆理に覺え候へば、淨慶こそいかなる罪科に當られ候共、爭でか情なき振舞をば仕り候べき。早御通り候へと申て、弓を伏逆茂木を引のけて、泣々道の傍に畏る。兩大將大に感ぜられて、我等はたとひ戰場の塵に沒すとも、若一家の内に世を保つ者出來ば、是をしるしに出して、今の忠義を顯さるべしとて、射向の袖に、さしたる金作の太刀を拔て、淨慶にぞ被與ける。光氏は主の危を見て命に替ん事を請、淨慶は敵の義を感じて後の罪科を不顧、何れも理の中なれば、是を聞見る人ごとに、稱嘆せぬは無りけり。

○十六騎勢入金崎事

名字さりぬべからん―然るべき身分ある人

屋右衛門佐殿の、合戦評定の爲に、杣山城より金崎へ、かりそめに御越候を、旁存知候はでばし、加樣に道を被塞候やらん。若矢一筋をも被射出候なば、何に身を置て罪科を遁れんと思はれ候ぞ。早く弓を伏せ冑を脱で、通申され候へと、高らかに申ければ、今庄入道馬より下て、親にて候卿法眼久經御手に屬して、軍忠を致し候しかば、御恩の末も忝存候へ共、淨慶父子各別の身と成て、尾張守殿に屬し申たる事にて候間、此所をば支申さで通し進せん事は、其罪科難遁存候程に、態矢一仕り候はんずるにて候。是全く身の本意にて候はねば、あはれ御供仕候人々の中に、名字さりぬべからんずる人を、一兩人出し賜り候へかし。其首を取て合戦仕たる支證に備へて、身の咎を扶り候はんとぞ申ける。光氏打歸て此由を申せば、右衛門佐殿進退谷りたる體にて、兎角の言も出されざりければ、越後守見給て、淨慶が申所も其謂ありと覺ゆれ共、今まで附纒たる士卒の志親子よりも重かるべし。されば彼等が命に義顯は替るとも、我命に士卒を替がたし。光氏今一度打向て、此旨を問答して見よ。猶難儀の由のみ申さば、力なく我等も士卒と共に討死して、將の士を重ずる義を後世に傳んとぞ宣ひける。光氏又打向て此由を申に、淨慶猶心とけずして、數刻

鹿垣—鹿の來襲を防ぐ爲の逆茂木

彼が生涯の樣、兎も角も御計候へと宣て、脇屋右衛門佐殿の子息に式部大輔義治とて、今年十三に成給ひけるを、義鑑房にぞ預けらるゝ。此人鍾愛他に異なる幼少の一子にて坐すれば、一日片時も傍を離し給はず、荒き風にもあてじとこそ勞り哀み給ひしに、身近き若黨一人をも附ず、心も知ぬ人に預て、敵の中に留置き給へば、恩愛の別も悲くて、再會の其期知がたし。夜明れば右衛門佐は金崎へ打歸り、越後守は越後國へ下らんとて、宿中にて勢をそろへ給ふに、瓜生が心替を聞て、いつの間にか落行けん、昨日までは三千五百餘騎と註したりし軍勢、僅二百五十騎に成にけり。此勢にては、何として越後國まで遙々と敵陣を經ては下べき。さらば共に金崎へ引返てこそ、舟に乘て下らめとて、義助も義顯も、鯖並宿より打連て、又敦賀へぞ打歸り給ける。爰に當國の住人今庄九郎入道淨慶、此道より落人の多く下る由を聞て、打留めん爲に、近邊の野伏共を催集て、嶮岨に鹿垣をゆひ、要害逆茂木を引て、鏃を調へてぞ待かけたる。義助朝臣是を見給て、是は何樣今庄法眼久經と云し者の、當手に屬して坂本まで有しが一族共にてぞ有らん。其者共ならば、さすが舊功を忘じと覺るぞ。誰かある、近附て事の樣を尋きけと宣ひければ、由良越前守光氏、畏て承候とて、唯一騎馬を控て、脇

承り開き―承りて了解する

一人兄弟の議を變じ―其方一人兄弟の議に與せず

違反の志を挾み候。義鑑房弓箭を取身にてだに候はゞ、刺違て共に死ぬべく候へ共、僧體に恥ぢ、佛見に憚て、默止候事こそ口惜覺候へ。但倩愚案を運し候に、保、事の樣を承り開き候程ならば、遂には御方に參じ候ぬと存候。若御幼稚の公達數多御座候はゞ、一人是に被二留置進一候へ。義鑑懷の中衣の下にも隱し置進せて、時を得候はゞ、御旗を擧て、金崎の御後詰を仕候はんと申も敢ず、涙をはらはらとこぼしければ、兩大將是が氣色を見給て、僞てはよも申さじと、疑の心をなし給はず、則席を近て潛に被ㇾ仰けるは、主上坂本を御出有し時、尊氏若强て申事あらば、休事を得ずして、義貞追罰の綸旨をなしつと覺るぞ。汝かりにも朝敵の名を取んずる事不ㇾ可ㇾ然。春宮に位を讓奉て、萬乘の政を任せ進らすべし。義貞股肱の臣として、王業再び本に復する大功を致せと被二仰下一、三種の神器を春宮に渡し進ぜられし上は、縱先帝の綸旨とて、尊氏申成たり共、思慮あらん人は用るに足ぬ所也と思べし。然れ共、判官この是非に迷へる上は、重て仔細を盡すに及ばず、急で兵を引て、又金崎へ可二打歸一事、已に難儀に及時分、一人兄弟の議を變じて、忠義を顯さるゝ條、殊に有難くこそ覺て候へ。御心中憑もしく覺れば、幼稚の息男義治をば僧に預申候べし。

鯖竝―今鯖波に作る、越前南條郡杣山城の西の川向に在り

同十四日、義助、義顯三千餘騎にて、敦賀津を立て、杣山へ打越給ふ。瓜生判官保、舍弟兵庫助重、彈正左衞門照、兄弟三人種々の酒肴昇せて、鯖竝宿へ參向す。此外人夫五六百人に兵粮を持せて、諸軍勢に下向し、毎事是を一大事と取沙汰したる樣、誠に他事もなげに見えければ、大將も士卒も、皆たのもしの思をなし給ふ。獻酬順に下て後、右衞門佐殿の飲給ひたる盃を、瓜生判官席を去て、三度傾ける時、白幅輪の紺絲の鎧一領引給ふ。面目身に餘てぞ見えたりける。其後判官己が館に歸て、兩大將へ色色の小袖二十重調進す。此外御內外樣の軍勢共の、餘に薄衣なるがいたはしければ、先小袖一充仕立て送るべしとて、倉の內より絹綿數千取出して、俄に是をぞ裁縫せける。斯る處に、足利尾張守の方より潛に使者を通じ、前帝より成れたりとて、義貞が一類可二追罰一由の綸旨をぞ被レ送ける。瓜生判官是を見て、元より心遠慮なき者なりければ、將軍より謀て被二申成一たる綸旨とは思も寄ず、さては勅勘武敵の人々を許容して、大軍を動さん事、天の恐も有べしと、忽に心を變じて、杣山城へ取上り、關を閉てぞ居たりける。爰に、判官が弟に義鑑房と云禪僧の有けるが、鯖竝宿へ參じて申けるは、兄にて候保は、愚癡なる者にて候間、將軍より押へて被二申成一候綸旨を誠と存て、忽に

國高嶋郡今の劔熊をいふ西近江路の要害也天正本には天を劔に作る

此の間の儀―敵となり居たる間の事

墜して弓を不ニ控得一、太刀のつかをも挙得ざりける間、腰の刀を土につかへ、うつぶしに貫かれてこそ死にけれ。千葉介貞胤は、五百餘騎にて打けるが、東西くれて降雪に、道を踏迷て、敵の陣へぞ迷出たりける。進退歩を失ひ、前後の御方に離れければ、一所に集て自害をせんとしけるを、尾張守高經の許より使を立て、弓矢の道今は是までにてこそ候へ。枉て御方へ出られ候へ。此間の儀をば、身に替ても可ニ申宥一と、慇懃に宣ひ遣されければ、貞胤心ならず降參して、高經の手にぞ屬しける。同十三日、義貞朝臣敦賀津に著給へば、氣比彌三郎大夫三百餘騎にて御迎に參じ、春宮一宮惣大將父子兄弟を先金崎城へ入奉り、自餘の軍勢をば、津の在家に宿を點じて、長途の窮屈を相助く。爰に一日逗留有て後、此勢一所に集り居ては叶じと、大將を國々の城へぞ被レ分ける。大將義貞は、東宮に附進せて、金崎城に止り給ふ。子息越後守義顯には、北國の勢二千餘騎を副て、越後國へ下さる。脇屋右衛門佐義助には、千餘騎を副て、瓜生が杣山の城へ遣はさる。是は皆國々の勢を相附て、金崎の後攻をせよとの爲也。

○瓜生判官心替事 附 義鑑房藏ニ義治一事

相如なり貧極れる狀をいふ

大梵—大梵天王とて初禪天の王也

寒谷—寒氣甚しき谷

暮山—日沒後の山中

紅蓮大紅蓮—八寒の中也、身寒赤色似紅蓮華故也とぞ

天曲—近江

大梵高臺の昔の樂を思出し給ふにも、世の憂事は數添て、淚の盡る時はなし。

○北國下向勢凍死事

同十一日に、義貞朝臣七千餘騎にて、鹽津海津に著給ふ。七里半の山中をば、越前の守護尾張守高經、大勢にて差塞たりと聞えしかば、是より道を替て、木目峠をぞ越給ひける。北國の習に、十月の初より高き峯々に雪降て、麓の時雨止時なし。今年は例よりも陰寒早くして、風紛に降る山路の雪は甲冑に洒ぎ、鎧の袖を翻して、面を撲こと烈しかりければ、士卒寒谷に道を失ひ、暮山に宿無して、木の下岩の陰にしゞまりふす。適火を求得たる人は、弓矢を折燒て薪とし、未友を不離者は、互に抱附て身を暖む。元より薄衣なる人、飼事無りし馬共、此や彼に凍死で、行人道を不去敢。彼叫喚大叫喚の聲耳に滿て、紅蓮大紅蓮の苦眼に遮る。今だにかゝりけり、後の世を思遣るこそ悲しけれ。河野、土居、得能は、三百騎にて後陣に打けるが、天曲にて前陣の勢に追後れ、行べき道を失て、鹽津の北におり居たり。佐々木の一族と、熊谷と、取籠て討んとしける間、相がゝりに懸て、皆刺違へんとしけれども、馬は雪に凍えてはたらかず、兵は指を

大衣―袈裟の一種
犬羊―賊徒
相如―司馬

山がらがさのみもどりをうつのみや、都に入て出もやらぬは。

本間孫四郎は、元より將軍家來の者なりしが、去正月十六日の合戰より、新田左中將義貞に屬して、兵庫の合戰の時は、遠矢を射て弓勢の程をあらはし、雲母坂の軍の時は、扇を射て手垂の程を見せたりし度々の振舞惡ければとて、六條河原へ引出して、首を被」刎けり。山徒の道場坊助註記祐覺は、元は法勝寺の律僧にて有しが、先帝船上に御座ありし時、大衣を脱で山徒の貌に替へ、弓箭に携て一時の榮花を開けり。山門兩度の臨幸に、軍用を支し事、偏に祐覺が爲處也しかば、山徒の中の張本也とて、十二月二十九日、阿彌陀峯にて切られけるが、一首の歌を法勝寺の上人の方へぞ送りける、

大方の年の暮ぞと思しに、我身のはても今夜成けり。

此外山門より供奉して被」出たる三公九卿、纔に死罪一等を被」宥たれ共、解官停任せられて、有も無が如くの身に成給ければ、傍人の光彩に向て、面を泥沙の塵に低、後生の榮耀を望て、泪を犬羊の天に淋ぐ。住にし跡に歸り給けれ共、庭には秋草茂て、通し道露深く、閨には夜の月のみさし入て、塵打拂ふ人もなし。顏子が一瓢水淸して、獨道ある事を知るといへ共、相如が四壁風冷して、衣なきに堪ず。五衰退沒の今の悲に

南翔云々―朗詠下卷に出づ、江相公大江音人の作也

放囚人―つながずして閉ぢ込めおく囚人。

るも敵の陣なれば、誰か先に討れて、哀と聞れんずらん、誰か後に死て、なき數を添んずらんと、詞に出ては云はね共、心に思はぬ人はなし。南翔北嚮難レ附ニ寒温於秋雁一、東出西流唯寄ニ瞻望於暁月一と　江相公の書たりし、別に送る筆の跡、今の涙と成にけり。

○還幸供奉人々被レ禁ニ殺一事

還幸已に法勝寺邊まで近附ければ、左馬頭直義五百餘騎にて參向し、先三種の神器を當今の御方へ可レ被レ渡由を被レ申ければ、主上兼より御用意有ける似せ物を取替て、内侍の方へぞ被レ渡ける。其後主上をば花山院へ入進せて、四門を閉て警固を居る、降參の武士をば大名共の方へ一人づゝ預て、囚人の體にてぞ被レ置ける。可レ斯とだに知たらば、義貞朝臣と諸共に北國へ落て、兎も角も成べかりける者をと、後悔すれ共甲斐ぞなき。十餘日を經て後、菊池肥後守は、警固の宥くありける隙を得て、本國へ迯下りぬ、又宇都宮は、放囚人の如くにて、迯ぬべき隙も多かりけれ共、出家の體に成て徒に向居たりけるを、惡しと思ふ者や爲たりけん、門の扉に山雀を縮に書、其下に一首の歌をぞ書たりける。

及皇太子の出入ないふ

錦を著て云々—漢書に富貴不歸故鄕如衣錦夜行とあるに本づく

御子左少將爲次、頭大夫行房、子息少將行尹。武士には新田左中將義貞、子息越後守義顯、脇屋右衛門佐義助、子息式部大輔義治、堀口美濃守貞滿、一井兵部大輔義時、額田左馬助爲綱、里見大膳亮義益、大江田式部大輔義政、鳥山修理亮義俊、桃井駿河守義繁、山名兵庫助忠家、千葉介貞胤、宇都宮信濃將監泰藤、同狩野將監泰氏、河野備後守通治、同備中守通綱、土岐出羽守頼直、一條駿河守爲治。其外山徒少々相雜て、都合其勢七千餘騎、案内者を前に打せて、龍駕の前後に打圍む。此外妙法院宮は、御舟に被レ召て、遠江國へ落させ給ふ。阿曾宮は山伏の姿に成て、吉野の奥へ忍ばせ給ふ。四條中納言隆資卿は紀伊國へ下り、中院少將定平は河内國へ隱れ給ふ。其有樣、偏に唯歌舒翰安祿山に打負て、玄宗蜀國へ落させ給し時、公子、内官、悉、或は玉趾を跣にして劔閣の雲に踏迷ひ、或は衣冠を汚して野徑の草に逃隱れし昔の悲に相似たり。昨日までも、聖運遂に開けば、錦を著て古鄕へ歸り、知らぬ里、みぬ浦山の旅宿をも語出さば、中々にうかりし節も悲さも、忘形見と成ぬべしと、心々の有樣に、身を慰めて有つるに、君臣父子萬里に隔り、兄弟夫婦十方に別行けば、或は再會の期なき事を悲み、或は一身の措處なき事を思へり。今も逆旅の中にして、重て逆旅の中に行。行も敵の陣、歸

檀度―施主

龍蹄―駿馬

重氏―原本資氏に作る異本に依て改む

行啓―皇后

望を不レ達と云共、祈念冥慮に不レ達は、子孫の中に必大軍を起者有て、父祖の尸を淸めん事を請ふ。此二の内一も達する事を得ば、末葉永く當社の檀度と成て、靈神の威光を耀し奉るべしと、信心を凝して祈誓し、當家累代の重寶に、鬼切と云太刀を社壇にぞ被レ籠ける。

○義貞北國落事

明れば十月十日の巳刻に、主上は腰輿にめされて、今路を西へ還幸なれば、春宮は龍蹄にめされて、戸津を北へ行啓なる。還幸の供奉にて京都へ出ける人々には、吉田内大臣定房、萬里小路大納言宣房、御子左中納言爲定、侍從中納言公明、坊門宰相淸忠、勸修寺中納言經顯、民部卿光經、左中將藤長、頭辨範國、武家の人々には、大館左馬頭氏明、江田兵部少輔行義、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武俊、仁科信濃守重貞、春日部左近藏人家縄、南部甲斐守爲重、伊達藏人家貞、江戸民部丞景氏、本間孫四郎重氏、山徒の道場坊助註記祐覺、都合其勢七百餘騎、腰輿の前後に相從ふ。行啓の御供にて、北國へ落ける人々には、一宮中務卿親王、洞院左衞門督實世、同少將定世、三條侍從泰季、

氣比社—敦賀に在り今官幣大社也

春宮—恒良親王

受禪—皇太子の位を受くること

到して兵疲れ勢廢れぬれば、尊氏に一旦和睦の儀を謀て、且く時を待ん爲に、還幸の由をば被仰出也。此事兼ても内々知せ度は有つれ共、事遠聞に達せば、却て難儀なる事も有ぬべければ、期に臨でこそ被仰めと打置つるを、貞滿が恨中に附て、朕が謬を知れり。越前國へは、河島維頼先立て下されつれば、國の事定て仔細あらじと覺る上、氣比社の神官等敦賀津に城を拵へて、御方を仕由聞ゆれば、先彼へ下て、且く兵の機を助け、北國を打隨へ、重て大軍を起して、天下の藩屏となるべし。但朕京都へ出なば、義貞却て朝敵の名を得つと覺る間、春宮に天子の位を讓て、同北國へ下し奉べし。天下の事小大となく、義貞が成敗として、朕に不替此君を取立進すべし。朕已に汝が爲に勾踐の恥を忘る。汝早く朕が爲に范蠡が謀を運らせと、御涙を押へて被仰ければ、さしも忿れる貞滿も、理を知らぬ夷共も、頭を低れ涙を流して、皆鎧の袖をぞぬらしける。九日は事騷がしき受禪の儀、還幸の粧に日暮ぬ。夜更る程に成て、新田左中將、潛に日吉の大宮權現に參社し給ひて、閑に啓白し給けるは、臣苟も和光の御願を憑て、日を送り、逆縁を結事、日已に久し、願は征路萬里の末迄も、擁護の御眸を廻されて、再大軍を起し朝敵を亡す力を加へ給へ。我縱不幸にして、命の中に此

當家―新田家
一儀―一應
超涯―過分

事、全戰の咎に非ず。唯帝德の缺る處に候歟。仍御方に參る勢の少き故にて候はずや。詮ずる處、當家累年の忠義を被ㇾ捨て、京都へ臨幸可ㇾ成にて候はゞ、唯義貞を始として、當家の氏族五十餘人を御前へ被ニ召出一、首を刎て伍子胥が罪に比し、胸を割て比干が刑に被ㇾ處候べしと、忿る面に泪を流し、理を碎て申ければ、君も御誤を悔させ給へる御氣色になり、供奉の人々も、皆理に服し義を感じて、首を低てぞ坐られける。

○立ニ儲君一被ㇾ著ニ于義貞一事　附鬼切被ㇾ進ニ日吉一事

暫有て、義貞朝臣父子兄弟三人、兵三千餘騎を召具して、被ニ參內一たり。其氣色皆忿れる心有といへ共、而も禮儀みだりならず、階下の庭上に袖を連ねて並居たり。主上例よりも殊に玉顏を和げさせ給て、義貞義助を御前近く召れ、御涙を浮べて被ㇾ仰けるは、貞滿が朕を恨申つる處、一儀其謂あるに似たりといへ共、猶遠慮の不ㇾ足に當れり。尊氏超涯の皇澤に誇て、朝家を傾んとせし刻、義貞も其一家なれば、定て逆黨にぞ與せんと覺しに、氏族を離れて志を義におき、傾廢を助て命を天に懸しかば、叡感更に不ㇾ淺、唯汝が一類を四海の鎭衞として、天下を治めん事をこそ思召つるに、天運時未

しく覺候。貞滿先内裏へ參て、事の樣を見奉り候はんとて、郎等に被著たる鎧取て肩に投懸け、馬の上にて上帶を締、諸鐙合せて參ぜらる。皇居近く成ければ、馬より下、冑を脱で中間に持せ、四方を屹と見渡すに、臨幸唯今の程と見えて、供奉の月卿雲客、衣冠を帶せるもあり、未戎衣なるもあり。鳳輦を大床に差寄て、新典侍、内侍所の櫃を取出し奉れば、頭辨範國、劔璽の役に隨て、御簾の前に跪く。貞滿左右に少し揖して、御前に參り、鳳輦の轅に取附、泪を流して被申けるは、還幸の事、兒女の説幽に耳に觸候つれ共、義貞存知仕らぬ由を申候つる間、傳説の誤かと存て候へば、事の儀式、早誠にて候けり。抑義貞が不義何事にて候へば、多年の粉骨忠功を被思召捨て、大逆無道の尊氏に叡慮を被移候けるぞや。去元弘の始、義貞不肖の身也といへ共、忝も綸旨を蒙て、關東の大敵を數日の内に亡し、西海の宸襟を三年の間に休め進せ候し事、恐は上古の忠臣にも類少く、近日の義卒も皆功を讓る處にて候き。其後尊氏が反逆顯しより以來、大軍を靡して其師を虜にし、萬死を出て一生に逢こと、勝て計るに不遑。されば義を重じて命を隕す一族百三十二人、節に臨で尸を曝す郎從八千餘人也。然共今洛中數箇度の戰に、朝敵勢盛にして、官軍頻に利を失候

大師—傳教
大師

と、且は條々御不審を散ぜん爲に、一紙別に進覧候也とて、大師勸請の起請文を副て、淨土寺の忠圓僧正の方へぞ被進ける。主上是を叡覧有て、告文を進する上は、僞てはよも申されじと被思召ければ、傍の元老智臣にも不被仰合、軈還幸成べき由を被仰出けり。將軍勅答の趣を聞て、さては叡智不淺と申せ共、欺くに安かりけりと喜て、さも有ぬべき大名の許へ、縁に觸れ趣を伺て、潛に狀を通じてぞ被語ける。去程に、還幸の儀事潛に定ければ、降參の志ある者共、兼てより今路西坂本の邊まで、拔々に行設けて、還幸の時分をぞ相待ける。中にも江田兵部少輔行義、大館左馬助氏明は、新田の一族にて、何も一方の大將たりしかば、安否を當家の存亡にこそ被任べかりしが、いかなる深き所存か有けん、二人共に降參せんとて、九日曉より、先山上に登てぞ居たりける。義貞朝臣斯る事とは不知給、參仕の軍勢に對面して、事なき樣にておはしける處へ、洞院左衞門督實世卿の方より、唯今主上京都へ還幸可成とて、供奉の人を召候、御存知候やらんと被告たりければ、義貞さる事や可有。御使の聞誤にてぞ有らんとて、最騒がれたる氣色も無りけるを、堀口美濃守貞滿、聞も敢ず、江田、大館が、何の用ともなきに、此曉中堂へ參るとて、登山仕つるが怪

志那の渡—今は常盤村といふ、坂本の對岸に在り

鳳曆—君の御代

を江州へ被二差向一。此勢志那の渡をして、舟より下ける處へ、三千餘騎にて推寄せ、褰も立ず戰ひける程に、或は遠淺に舟を乘する處、褰場に馬を下兼て、被二射落一被二切伏一兵數を不レ知。此日の軍も、官軍又打負て、纔に坂本へ漕返る。此後よりは、山上坂本に彌兵粮盡て、始百騎二百騎有し者、五騎十騎になり、五騎十騎有し人は、馬にも不レ乘成にけり。

○自二山門一還幸事

斯る處に、將軍より內々使者を主上へ進じて被レ申けるは、去年の冬、近臣の讒に依て、勅勘を蒙り候し時、身を法體に替て、死を無レ罪賜らんと存候し處に、義貞、義助等、事を逆鱗に寄て、日來の鬱憤を散ぜんと仕候し間、止事を不レ得して、此亂天下に及候。是全く君に向奉て反逆を企しに候はず。唯義貞が一類を亡して、向後の讒臣をこらさんと存ずる計也。若天鑒誠を照されば、臣が讒におちし罪を哀み思召て、龍駕を九重の月に被レ廻、鳳曆を萬歲の春に被レ復候へ。供奉の諸卿竝降參の輩に至まで、罪科の輕重を不レ云、悉本官本領に復し、天下の成敗を公家に任せ進せ候べし

みける。此大勢を敵に受て、落留る程の者共なれば、なじかは些も氣を可屈。小笠原が三百餘騎、山徒の向陣を取たりける四十九院の宿へ、未卯刻に推寄て、懸立懸立戰ひけるに、宗徒の山徒、理教坊の阿闍梨を始として、三千餘人まで討れにければ、湖上の船に棹て、堅田を指て漕もどる。斯る處に、佐々木佐渡判官入道道譽、京より潜に若狹路を廻て、東坂本へ降參して申けるは、江州は代々當家守護の國にて候を、小笠原上洛の路に滯て、不慮に兩度の合戰を致し、其功を以て、軈て管領仕候事、道譽面目を失ふ所にて候。若當國の守護職を被恩補候はゞ、則彼國へ罷向ひ、小笠原を追落し、國中を打平げて、官軍に力を著ん事、時日を移すまじきにて候とぞ申ける。主上も義貞も、出抜て申とは不知給、事誠に可然とて、道譽が申請る旨に任せて、當國の守護職、竝に便宜の闕所數十箇所、道譽が恩賞に被行て、江州へぞ被遣ける。元來詐て申つる事なれば、道譽江州へ推渡て後、當國をば將軍より給りたる由を申す間、小笠原軈て國を捨て上洛しぬ。道譽忽に國を管領して、彌坂本を遠攻に攻ければ、山徒の遠類親類、宮方の被官所緣の者までも、近江國中には跡を可留樣ぞ無りける。さては道譽出抜けり。時刻を不移退治せよとて、脇屋右衞門佐を大將にて、二千餘騎

首陽に臨まん—饑餓に迫らん、伯夷叔齊の首陽山に餓死したる故事に出づ

聖供—佛への供物

兵船を汰て、近日上洛の由申けると、伊勢の愛曾が、當國の敵を退治して、江州へ發向すべしと註進したりし計也。山門の衆徒財産を盡して、士卒の兵粮を出すといへ共、公家武家の從類、上下二十萬人に餘りたる人數を、六月の始より、九月の中旬まで養ければ、家財悉盡て、共に首陽に臨んとす。剰北國の道をば、足利尾張守高經差塞で人を不通。近江の國も、小笠原信濃守、野路篠原に陣を取て、湖上往返の舟を留めける間、唯官軍朝暮の飢を嗜むのみに非ず、三千の聖供の運送の道塞て、谷々の講演も絶はて、社々の祭禮も無りけり。山門角ては叶まじとて、先江州の敵を退治して、美濃、尾張の通路を開くべしとて、九月十七日に、三塔の衆徒五千餘人、志那濱より襄て、野路篠原へ押寄る。小笠原山門の大勢を見て、さしもなき平城に籠て、取卷れなば叶まじとて、逆よせに平野に懸合せて戰ける程に、道場坊助註記祐覺一軍に打負て、立足もなく引ければ、成願坊律師入替て、一人も不殘討れにけり。山門彌憤を深して、同二十三日、三塔の衆徒の中より、五百房の惡僧を勝て、二萬餘人兵船を連て推渡る。小笠原が勢共重て寄る山門の大勢に聞懼して、大半落失ければ、勢僅三百騎にも不足けり。是を聞て、例の大早の極なき大衆共なれば、後陣の勢をも待調へず、我前にとぞ進

給ける處に、主上の恩賜の御衣を切て、笠符に附たる兵共、所々より馳集り、二千餘騎戰ひ疲たる大敵を、懸立々々揉だりけるに、雲霞の如くなる敵共、馬の足を立兼て、京中へぱつと引ければ、義貞、義助、江田、大館、萬死を出て一生に逢ひ、又坂本へ被二引返一。

○江州軍事

京都を中に籠て、四方より寄せば、今度はさりともと憑しく覺えしに、諸方の相圖相違して、寄手又打負しかば、四條中納言も、八幡を落て坂本へ被レ參ぬ。阿彌陀峯に陣を取し阿波淡路の兵共も、細川卿律師に打負て、坂本へ歸ぬ。長坂を堅めたりし額田も落て、山上へ歸參しければ、京勢は籠の中を出たる鳥の如く悦、宮方は穴に籠りたる獸の如く縮れり。南都の大衆も、山門に可二與力一由、返牒を送しかば、定て力を合せんずらんと待れしかども、將軍より數箇所の庄園を寄附して被レ語ける程に、目前の欲に身後の恥を忘ければ、山門與力の合戰を飜して、武家合體の約諾をぞなしける。今は君の御憑有ける方とては、備後の櫻山、備中の那須五郎、備前の兒島、今木、大富が

にて戰へと云程こそ有けれ、一戰も不レ戰、五條川原へぱつと追出されて、些も足を不ニ踏留一、西坂本を差てぞ迯たりける。土岐頼遠五條大宮の合戰に打勝て、勝時を揚ければ、此彼より勢共數千騎馳集て、大宮を下りに、義貞の後へ攻よする。神祇官に扣へたる仁木、細川、吉良、石堂が勢二萬餘騎は、朱雀を直違に西八條へ推寄る。東よりは小貳、大友、厚東、大内、四國中國の兵共三萬餘騎、七條川原を下りに、針、唐橋へ引廻して、敵を一人も不ニ討泄一引裹。三方は如レ此百重千重に取卷て、天を翔り地に潜て出るより外は、漏ても可レ迯方はなし。前には城郭堅く守て、數萬の兵鏃をそろへて散々に射る。義貞今日を限の運命也と思定給ければ、二萬餘騎を唯一手に成て、八條九條に扣へたる敵十萬餘騎を四角八方に懸散し、三條河原へ颯引て出たれば、千葉、宇都宮も、はや所々に引別れ、名和伯耆守長年も、被ニ懸阻一ぬと見えたり。仁科、高梨、春日部、丹兒王三千餘騎一手に成て、一條を東へ引けるが、三百餘騎被レ討て、鷺森へ懸拔たり。長年は二百餘騎にて、大宮にて返合せ、我と後の鬪をさして、一人も不レ殘死してけり。其後所々の軍に、勝ほこりたる敵三十萬騎、纔に打殘されたる義貞の勢を眞中に又取籠る。義貞も思切たる體にて、一引も引んとはし給ず、馬を皆西頭に立て、討死せんとし

處は戰場なればかくいふ也

くつまき―矢の箆の本にて鐵の上の卷きたる處

ふてゝ―不平にてやけになる意

の所にあり。纔に一身の大功を立ん爲に、多くの人を苦しめんより、獨身にして戰を決せんと思故に、義貞自此軍門に罷向て候也。それかあらぬか、矢一受て知給へとて、二人張に十三束二伏、飽まで堅めて引しぼり、絃音高く切て放つ。其矢二重に掻たる高櫓の上を越て、將軍の坐し給る帷幕の中、本堂の艮の柱に、一ゆりゆりて、くつまき過てぞ立たりける。將軍是を見給、我此軍を起して、鎌倉を立しより、全君を傾け奉んと思ふに非、唯義貞に逢ひて、憤を散ぜん爲也き。然れば彼と我と獨身にして戰を決せん事、元來悅ぶ所也。其門開け打て出んと宣ひけるを、上杉伊豆守、是はいかなる御事にて候ぞ。楚の項羽が漢の高祖に向ひ、獨身にして戰んと申しゝをば、高祖あざ笑て、汝を討に刑徒を以てすべしと欺き候はずや。義貞そゞろに深入して、引方のなさに、能敵にや遭と、ふてゝ仕候を、輕々しく御出ある事や候べき。思も寄ぬ御事に候とて、鎧の御袖に取附ければ、將軍無力義者の諫に從うて、忿を押へて坐し給ふ。斯る處に、土岐彈正少弼頼遠、三百餘騎にて、上加茂に控へて有けるが、五條大宮に控へたる旌を見てければ、大將は皆公家の人々よと見てければ、後より時をどつと作て、喚き叫でぞ懸たりける。すはや敵後より取廻しけるは。川原へ引て廣み

兩統―南北朝

一的場―一處、的場は弓を射る場所なれど此

を咀名を恥づと聞えぬれば、御治世兩統の聖運も、新田足利多年の憤も、唯今日の軍に定りぬと、氣をつめぬ人は無りけり。去程に、六條大宮より軍始て、將軍の二十萬騎と、義貞の二萬騎と入亂て戰たり。射違る矢は、夕立の軒端を過る音よりも猶滋く、打合ふ太刀の鍔音は、空に應る山彦の鳴り止む隙も無りけり。京勢は小路々々を立塞で、敵を東西より取籠、進まば先を遮り、左右へ分れば中をわらんと、變化機に應じて戰ければ、義貞の兵少も散らで、中をも不レ破、退て跡よりも揉れず、向ふ敵に懸立懸立、大宮を下りにましぐらに懸りける程に、仁木、細川、今川、荒川、土岐、佐々木、逸見、武田、小早川、此を被二打散一、彼に被二追立一、所々に控へたれば、義貞の兵二萬餘騎、東寺の小門の前に推寄て、一度に時をどつと作る。義貞坂本を打出し時、先皇居に參て、天下の落居は、聖運に任せ候へば、心とする處に候はず。何樣今度の軍に於ては、尊氏が籠て候東寺の中へ矢一射入候はでは、歸參るまじきにて候と申て出たりし其言に不レ違、敵を一的場の內に攻寄せたれば、今はかうと大に悅で、旗の陰に馬を打すゑ城を睨み、弓杖にすがつて、高らかに宣ひけるは、天下の亂休事無して、無レ罪人民身を安くせざる事年久し。是國主兩統の御爭とは申ながら、唯義貞と尊氏卿と

團扇の旗—團扇を竿頭に結附けたる旗

○義貞軍事 附長年討死事

一方の寄手の破れたるをも不レ知、相圖の刻限よく成ぬとて、追手の大將新田義貞、脇屋義助、二萬餘騎を率して、今路西坂本より下て、三手に分れて押寄る。一手は義貞義助、江田、大館、千葉、宇都宮、其勢一萬餘騎、大中黑、月に星、左巴、右巴、丹兒玉の團扇の旗、三十餘旒連りて、糺を西へ打通り、大宮を下りに被二押寄一。一手には伯耆守長年、仁科、高梨、土居、得能、春日部、以下の國々の勢集て五千餘騎、大將義貞の旗を守て、鶴翼魚鱗の陣をなし、猪熊を下りに押寄る。一手は二條大納言、洞院左衞門督、兩大將にて五千餘騎、牡丹の旗、扇の旗、唯二旒差揚て、敵に跡を切られじと、四條を東へ引渡して、さきへは態進まれず。兼てより阿彌陀峯に陣を取たりし阿波淡路の勢千餘騎は、未京中へは入らず、泉涌寺の前今熊野邊迄おり下て、相圖の煙を上たれば、長坂に陣を取たる額田が勢八百餘騎、嵯峨仁和寺の邊に打散り、所々に火を懸たり。京方は大勢なれ共、人疲れ馬疲れ、而も今朝の軍に矢種は皆射盡したり。寄手は小勢なれ共、さしも名將の義貞、先日度々の軍に討負て、此度會稽の恥を雪んと、牙

洗革ー薄紅に染めたる革

せき弦ー常の弦の上を更に絲にて卷き漆を塗りたるもの

氣色ばうたるー氣色ばみたる

賜りたる金作の太刀の上に、三尺八寸の黒塗の太刀帶副、三十六差たる山鳥の引尾の征矢、森の如くにときみだし、三人張の弓に、せき絃かけて噛しめし、熊膽當をばせざりけり。時々は馬より飛下りて、深田を歩まんが爲也けり。北の小門より打出て、羅城門の西へ打廻り、馬をば畔の陰に乘放て、三町餘が外に叢立たる敵をさしつめ、引つめ、散々にぞ射たりける。一矢に二人三人をば射落せども、あだ矢は一も無りければ、南大門の前に攻寄たる寄手の兵千餘人、一度にばつと引退く。悪源太是に利を得て、かけ足逸物の馬に打乘、さしも深き鳥羽田中を眞平地に懸立て、敵六騎切て落し、十一騎に手負せて、仰たる太刀を押直し、東寺の方を屹と見て、氣色ばうたる有樣は、いかなる和泉小次郎、朝夷奈三郎も、是には過じとぞ見えたりける。悪源太一人に被懸立て、數萬の寄手皆しどろに成ぬと見えければ、高武藏守師直千餘騎にて、又作道を下りに追かくる。越後守師泰は七百餘騎にて竹田を下りに要合せんとす。已に引立たる大勢なれば、なじかは足を留むべき。討るゝをも顧ず、手負をも不助、我先にと迯散て、元の八幡へ引返しけり。

ひしぎ楯―本朝軍器考にひしぎ竹にて作りし楯にやといへり
惡源太―土岐頼直
御所作―後鳥羽院の作らせ給ひしをいふ

作道まで打出たりける高武藏守師直が五百餘騎、被射立て引退く。敵彌勝に乘て、持楯ひしぎ楯を突寄々々、かづき入て攻ける程に、坤の角なる出塀の上の高櫓一つ、念なく被攻破て燒にけり。城中是に躁で、聲々にひしめき合けれ共、將軍は些共不驚給、鎭守の御寶前に看經しておはしける。其前に問注所の信濃入道道大と、土岐伯耆入道存孝と二人倶して候けるが、存孝傍を屹と見て、あはれ愚息にて候惡源太を上の手へ向候はで、是に留て候はゞ、此敵をば輒く追拂はせ候はんずる者をと申ける處に、惡源太つと參りたり。存孝うれしげに打見て、いかに上の手の軍は未始らぬか。いやそれは未存知仕候。三條河原まで罷向て候つるが、東寺の坤に當て、煙の見え候間、取て返して馳參じて候。御方の御合戰は、何と候やらんと申ければ、武藏守唯今作道の軍に討負て、引退くといへ共、此御陣の兵多からねば、入替事叶はず、已に坤の角の出塀を被打破て、櫓を被燒落上は、將軍の御大事此時也。一騎なりとも御邊打出て、此敵を拂へかし。畏て承り候とて、惡源太御前を立けるを、將軍暫とて、いつも帶副にし給ける御所造り兵庫鎖の御太刀を引出物にぞせられける。惡源太此太刀を賜て、などか心の勇まざらん。洗革の鎧に、白星の冑の緒を縮て、唯今

ゆふき、ははき、くすのきのきを木に通じて三木といひ、ちぐさのくさを草に通じて一草といへる也

はれて、飽まで朝恩に誇たる人々なりしが、三人は討死して、伯耆守一人殘たる事よと申けるを、長年遙に聞て、さては長年が今まで討死せぬ事を、人皆云甲斐なしと云沙汰すればこそ、女童部までも斯樣には云らめ。今日の合戰に、御方若討負ば、一人なり共引留て、討死せん者をと獨言して、是を最後の合戰と思定てぞ向ける。

○隆資卿自二八幡一被レ寄事

京都の合戰は、十三日巳刻と兼て諸方へ觸送たりければ、東坂本より寄る勢、關山今路の邊に控へて、時刻を待ける處に、敵や謀て火を懸たりけん、北白河に燒亡出來て、煙蒼天に充滿したり。八幡より寄んずる宮方の勢共是を見て、すはや山門より寄て、京中に火を懸たるは。今日の軍に爲おくれば、何の面目か有べきとて、相圖の刻限をも不レ相待、其勢僅に三千餘騎にて、鳥羽の作道より、東寺の南大門の前へぞ寄たりける。東寺の勢は、山門より寄る敵を防んとて、河合、北白河の邊へ、皆向たりければ、卿相雲客、或は將軍近習の老者兒なんど計集り居て、此敵を可レ防兵は更に無りけり。寄手の足輕共、鳥羽の田の面の畔をつたひ、四塚羅城門のくろの上に立渡り、散々に射ける間、

三木一草

四國の勢が阿彌陀峯へ差向て、夜々篝をぞ燒せられける。其光二三里が間に續て、一天の星斗落て欄干たるに不レ異。或夜東寺の軍勢ども、樓門に上て是を見けるが、あらおびたゞしの阿彌陀峯の篝やと申ければ、高駿河守とりも敢ず、

多く共四十八にはよも過じ、阿彌陀峯にともす篝火。

と一首の狂歌に取成して戲ければ、滿座皆ゑつぼに入てぞ笑ける。今一度京都に寄せて、先途の合戰あるべしと、諸方の相圖定りにければ、士卒の志を勇めんが爲に、忝も十善の天子、紅の御袴をぬがせ給ひ、三寸づゝ切て、所望の兵共にぞ被レ下ける。七月十三日、大將新田左中將義貞、度々の軍に、打殘されたる一族四十三人引具して、先皇居へ參ぜらる。主上龍顏麗しく群下を照臨有て、今日の合戰何よりも忠を盡すべしと被二仰下一ければ、義貞士卒の意に代て、合戰の雌雄は時の運による事にて候へば、兼て勝負を定めがたく候。但今日の軍に於ては、尊氏が籠て候東寺の中へ箭一つ射入候はでは、罷歸るまじきにて候なりと申て、御前をぞ被二退出一ける。諸軍勢大將の前後に馬を早めて、白鳥の前を打過ける時、見物しける女童部、名和伯耆守長年が引さがりて打けるを見て、此比天下に、結城、伯耆、楠、千種頭中將、三木一草とい

唐居敷—門の下の石疊
つよる—強くなる

渡の橋より西に陣を取て、川尻の道を差塞。宇治へは中院中將定平を被」遣。宇治、田原、醍醐、小栗栖、木津、梨間、市野邊山、城脇の者共馳集て、二千餘騎宇治橋二三間引落て、橘小島が崎に陣を取る。北丹波道へは、大覺寺宮を大將とし奉て、額田左馬助を被」遣。其勢三百餘騎、白晝に京中を打通て、長坂に打上る。嵯峨、仁和寺、高雄、栂尾、志宇知、山内、芋毛、村雲の者共馳集て、千餘騎京中を足の下に直下して、京見峠、嵐山、高雄、栂尾に陣を取る。此外、鞍馬道をば、西塔より塞で、勢多をば愛智、信樂より指塞ぐ。今は四方七つの道、纔に唐櫃越計あきたれば、國々の運送道絶て、洛中の士卒兵粮に疲たり。暫は馬を賣、物具を沽、口中の食を繼けるが、後には京白川の在家寺々へ打入て、衣裳を剝取、食物を奪食ふ。卿相雲客も兵火の爲に燒出されて、此の辻堂、彼の拜殿に身を側め、僧俗男女は道路に食を乞て、築地の陰、唐居敷の上に飢伏す。開闢以來、兵革の起る事多しといへ共、是程の無道は未」記處也。京勢は疲れて、山門又つよる由聞えければ、國々の勢百騎二百騎、東坂本へと馳參る事引もきらず。中にも阿波、淡路より、阿間、志宇知、小笠原の人々三千餘騎にて參ければ、諸卿皆憑しき事に被」思けるにや、今はいつをか可」期、四方より牒じ合せて、

風馬之蹄不及—其位置の懸隔甚しきをいふ、左傳僖公四年に見ゆ

廻皇輿於花洛之外、張軍幕於楢溪之邊。三千群侶、定合懇祈之掌、七社靈神、鎭廻擁護之眸者歟。彼代宗之屯長安也、觀師於香積寺之中。勾踐之在會稽也、陣兵天台山之北。事叶先蹤。寧非佳模乎。爰當寺衆徒等、自翠花北幸、抽丹棘於中庭。專祈寶祚之長久、唯期妖孽之滅亡。精誠無貳、冥助豈空乎。就中寺邊之若輩、國中之勇士、頻有加官軍之志、屢運退凶賊之策。然而南北境阻、風馬之蹄不及、山川地殊、雲鳥之勢難接矣。矧亦賊徒構謀、寇迫松墻之下。人心未和、禍在蕭墻之中。前對燕然之虜、後有宛城之軍、攻守之間進退失度。但綸命屢降、牒送難默止。速率銳師、早征凶黨。今以狀牒。牒到准狀。故牒。

延元元年六月日　　興福寺六方大衆徒等

とぞ書ける。南都已に山門に與力しぬと聞えければ、畿内近國に軍の勝負を計かねて、何方へか著べきと案じ煩ひける兵共、皆山門に志を通し、力を合せんとす。雖然、境敵陣を隔てければ、坂本へ馳參事不可叶、大將を賜て、陣を取て、京都を攻落し候べしとぞ申ける。去ばとて、八幡へは四條中納言隆資卿を被差遣。眞木、葛葉、禁野、片野、宇殿、賀島、神崎、天王寺、賀茂、三日原の者共馳集て、三千餘騎大

被載ー以下十字原本之を缺く、異本に據て補へり

了義ー大乘經をいふ

濫吹ー虚言

延元元年六月日　　延暦寺三千衆徒等

とぞ被書たる。牒狀披閲の後、南都大衆則山門に同心して、返牒を送る。其狀云、

興福寺衆徒牒延暦寺衙

來牒一紙、被載尊氏直義等征伐事

牒、夫觀行五品之居勝位也、學圓頓於河淮之流、等覺無垢之因上果也、敷了義於印度之境。是以隋高祖之崇玄文、玉泉水淸。唐文皇舊神藻、瑤花風芳。遂使一夏敷揚之奧賾遙傳于叡山。三國相承之眞宗、獨留于吾寺以降、時及于千祀、軌垂百王。寔是弘佛法之宏規、護皇基之洪緒者也。彼尊氏直義等、遠蠻之亡虜、東夷之降卒也。雖非鷹犬之才、屢忝爪牙之任。乍忘朝奬還挿野心。討揚氏兮爲辭、在藩溪兮作逆。劫略州縣、掠虜吏民。帝都悉燒殘、佛閣多魔滅。軼赤眉之入咸陽、超黃巾寇河北。濫吹之甚、自古未聞。天誅之所覃、冥譴何得逃。因玆去春之初、鋤耰棘矜一擺關中、匹馬隻輪纔遁海西矣。今聚其敗軍、擁彼餘衆、不恐雷霆之威、重侍斧鉞之罪。六軍徘徊、群兇益振。是則孟津再駕之役、獨夫所亡也。城濮三舍之謀、侍臣所敗也。夫違天者有大咎、失道者其助寡。積暴之勢豈又能久乎。方今

權敎實敎—華嚴天台

告犯—晉文公の舅のこと、此引例は誤にて須らく介子推とあるべき也

晉之祈八公—事は通鑑綱目二十一卷に見ゆ

唐之感四王—事は編年通論十六卷に見ゆ

稱其敵、貪天功而爲己力、咎犯之所耻也。假晁錯而擧逆謀、劉濞之所亡也。爲臣犯君、忘恩背義、開闢以來未聞其跡。遂乃孟春之初、猛火共於燎原、九重之城闕成灰燼。暴風扇于區宇、無辜之黎民墮塗炭。論其積惡、誰不歎息。且爲避當時之災孽、且爲仰和光之神助、廻仙蹕於七社之瑞籬、任安全於四明之懇府。衆徒之心、此時豈敢乎。爰三千一揆、忘身命扶義兵、老少同心、代冥威伏異賊。王道未衰、神感潛通之故、逆黨卷旗而奔西、凶徒倒戈而敗北。喩猶紅爐之消雪、相似團石之壓卵。昔晉之祈八公也、早覆苻堅之兵、唐之感四王也、乍卻吐蕃之陣、蓋乃斯謂歟。遂使儼鸞輿之威儀、促鳳城之還幸。天掃攙搶、上下同見慶雲之色。海剪鯨鯢、遠近盡歇逆浪之聲。併是學侶敎侶之精誠也。豈非醫王山王之加護哉。而今賊黨再窺覦帝城、官軍暫彷徨征途。仍慣先度之朝儀、重及當社臨幸。山上山下興廢、唯在此時。佛法王法盛衰豈非今日乎。天台之敎法、七社之靈鑒、偏共安危於朝廷。法相之護持、四所之冥應、盍加最屓於國家。貴寺若存報國之忠貞者、衆徒須運輔君之計略矣。滿山之愁訴、猶通音問而成合體。一朝之治亂、何隨群議而無與力。仍勒事由、牒送如件。敢勿猶豫、故牒。

不王土。縱雖爲釋門之徒、此時盍盡致命之忠義。故北嶺天子本命之伽藍也。仍運朝廷輔危計略。南都博陸股肱之氏寺也。須救藤氏累家之淹屈。然早牒送東大興福兩寺、可被結義戰勠力之一諾と、三千一同に僉議して、則南都へ牒狀を送ける。其詞に云、

延曆寺牒興福寺衙

請早運兩寺一味籌策、追罰朝敵源尊氏直義以下逆徒、彌致佛法王法昌榮狀、

牒、佛法傳吾邦兮七百餘歲、祝皇統益蒼生者、法相圓頓之祕賾最勝。神明垂權跡兮七千餘座、鎭寶祚輝威光者、四所三聖之靈驗異他。是以先者淡海公建興福寺、以瑩八識五重之明鏡、後者桓武帝開比叡山、以挑四教三觀之法燈。爾以降南都北嶺共掌護國護王之精祈。天台法相互究權教實教之奧旨。寔是以佛法守王法、濫觴以王法弘佛法根源也。因玆當山有愁之時、通白疏而談懇情、朝家有故之日、同丹心而祈安靜。五六年以來天下大亂民間不靜、就中尊氏直義等、起自邊鄙之酋長、飽浴超涯之皇澤、未知君臣之道、忽有豺狼之心、樹黨而誘引戎虜、矯詔而賊害藩籬。倩思王業再興之聖運、更非尊氏一人之武功、企叛逆無其辭。以義貞

るを云ふ、

大品般若經に出づ

博陸—攝關の異名

四教三觀—四教は三藏教通教別教圓教をいひ、三觀は空假中をいふ

一色一香の花―六根六塵の境界にふるゝ當體も自ら中道實相の悟なりと見立つ

○山門牒送南都事

官軍兩度の軍に打負て、氣疲れ勢薄く成てければ、山上坂本に如何なる野心の者か出來て、不慮の儀あらんずらんと、主上玉扆を安くし給はず、叡襟を傾させ給ければ、先衆徒の心を勇しめん爲に、七社の靈神、九院の佛閣へ、各大庄二三箇所づゝ寄附せらる。其外一所住とて、衆徒八百餘人早尾に群集して、軍勢の兵粮已下の事取沙汰しける衆の中へ江州の闕所分三百餘箇所を被行て、當國の國衙を山門永代管領すべき由、永宣旨を成て被補任。若今官軍勝事を得ば、山門の繁昌、此時に有ぬと見えけれ共、三千の衆徒悉此抽賞に誇らば、誰か稽古の窓に向て、三諦止觀の月を弄び、讃仰の嶺に攀て、一色一香の花を折らん。富貴の季には、却て法滅の基たるべければ、神慮も如何有らんと、智ある人は是を不悅。同十七日、三千の衆徒大講堂の大庭に三塔會合して僉議しけるは、夫我山者當王城之鬼門、爲神德之靈地。是以保百王之寶祚、依一山之懇誠、鎭四夷之擾亂、唯任七社之擁護。爰有源家餘裔尊氏直義者。將傾王化亡佛法。訪大逆於異國、祿山比不堪。尋積惡於本朝、守屋却可淺。抑普天之下無

己が物と得—己の手足の如く自由自在なること

軍無利—三略には軍無勢に作る

て被懸散ば、新手に替らん爲也。去程に、明れば十八日卯刻に、山門の勢北白河、八瀬、藪里、下松、修學院の前に押寄て、東西二陣の手を分つ。新田の一族五萬餘騎は、紀社を南に見て、紫野を内野へ懸通る。二條師基卿、千葉介、宇都宮、仁科、高梨、眞如堂を西へ打過て、河原を下に押寄る。其手の足輕共走散り、京中の在家數百箇所に火を懸たりければ、猛火天に滿ち翻て、黑煙四方に吹覆ふ。五條河原より軍始て、射る矢は雨の如く、劍戟電の如し。軈て内野にも合戰始て、右近の馬場の東西、神祇官の南北に、汗馬の馳違音閧に相交て、唯百千の雷の大地に振ふが如く也。暫有て、五條河原の寄手、一戰に討負て引たりける程に、内野の大勢彌重て、新田左中將兄弟の勢を十重二十重に取卷て、をめき叫で攻戰ふ。され共、義貞の兵共、元來機變磬控百鍛千鍊して、己が物と得たる所なれば、一擧に百重の圍を解て、左副右衞一人も討れず、返合々々戰て、又山へ引歸す。夫武の七書に有言、將謀泄則軍無利、外闚內則禍不制とて、此度の洛中の合戰に、官軍即打負ぬる事、たゞ敵に内通の者共の御方に有ける故也とて、互に心を置あへり。

機變の陣—臨機應變の陣

午角—互角也優劣なき意

高梨が勢、勝に乘て、京中へ追懸て攻入る。飽まで敵を近附て後、東寺より用意の兵五十萬騎を出して、竪小路横小路に機變の陣をはり、敵を東西南北より押隔て、四方に當り八方に圍で、餘さじと戰。寄手片時が間に五百餘人被討て、西坂を差て引返す。さてこそ京勢は又勢に乘り、山門方は力を落して、午角の戰に成にけり。角て暫は合戰も無りけるに、二條の大納言師基卿、北國より、敷地、上木、山岸、瓜生、河島、深町以下の者三千餘騎を率して、七月五日東坂本へ著給ふ。山門是に又力を得て、同十八日京都へぞ被寄ける。前には京中を經て、遙々と東寺まで寄ればこそ、小路ぎりに前後左右の敵を防かねて、其圍をば破かねつれ。此度の一勢は、二條を西へ内野へ懸出て、大宮を下に押寄せ、一勢は、河原を下に押寄せ、東西より京を中に挿て、燒攻にすべしとぞ被議ける。此謀いかなる野心の者か京都へ告たりけん、將軍是を聞すましてければ、六十萬騎の勢を三手に分、二十萬騎をば、東山と七條河原に被置たり。是は河原より寄んずる敵を、東西より却て中に取籠ん爲なり。二十萬騎をば船岡山の麓、神祇官の南に被隱置たり。是は内野より寄んずる敵を、南北より引裹まん爲也、殘二十萬騎をば、西八條東寺の邊に控させて、軍門の前に被置たり。是は諸方の陣強し

藏守師直が猶子の弟にて、一方の大將を承る程の者なれば、身に替らんと思者共、幾千萬と云數を不知しか共、若黨の一人も無して、無云甲斐敵に被生捕けるは、偏に醫王山王の御罰也けりと、今日は昨日の神託によりけるにやと被思合て、身の毛も彌立つ計也。

○京都兩度軍事

六月五日より同二十日まで、山門數日の合戰に討るゝ者、創を被る者、幾千萬と云數を不知。結句寄手東西の坂より被追立、引退たる兵共は、京中にも猶足を留めず、十方へ落行ける間、洛中以外に無勢に成て、如何はせんと仰天す。此時しも山門より時日を囘らさず寄たらましかば、敵重て都にはよも怺へじと見えけるを、山門に樣々の異議有て、空く十餘日を過されける程に、邊土洛外に逃隱たる兵共、機を直して又立歸ける間、洛中の勢又大勢に成にけり。是をば不知、山門には、京中無勢也と聞て、六月晦日十萬餘騎を二手に分て、今路西坂よりぞ寄たりける。將軍始は態小勢を河原へ出して、矢一筋射違て、引んとせられける間、千葉、宇都宮、土居、得能、仁科、

向城―敵の城に對して構へたる城

くりからが谷―越中礪波郡に在り

て、すはや相圖の鐘を鳴す。さらば攻口へ馳向て防がんとて、我劣らじと渡合ふ。東西の寄手此形勢を見て、山より逆寄に寄するぞと心得て、水飲、今路、八瀨、藪里、志賀、唐崎、大津、松本の寄手共、楯よ物具よと周章色めきける間、官軍是に利を得て、山上坂本の勢十萬餘騎、木戶を開、逆茂木を引のけて打て出たりけり。寄手の大將蹈留て、敵は小勢ぞ、引て討るな。きたなし返せと下知して、暫支たりけれ共、引立たる大勢なれば、一足も不留、脇屋右衛門佐義助の兵五千餘騎、志賀の閻魔堂の邊に在ける敵の向城、五百箇所の東西に火を懸て、をめき叫で揉だりける。敵陣こゝより破て、寄手の百八十萬騎、さしも嶮しき今路、古道、音無瀧、白鳥、三石、大嶽より、人雪頽をつかせてぞ逃たりける。谷深して行さきつまりたる所なれば、人馬上が上に落重て死ける有樣は、傳聞治承の古、平家十萬餘騎の兵、木曾が夜討に被懸立て、くりからが谷に埋けるも、是には過じと覺えたり。大將高豐前守は、太股を我太刀に突貫て、引兼たりけるを、舟田長門守が手者、是を生虜り、白晝に東坂本を渡し、大將新田左中將の前に面縛す。是は佛敵神敵の最たれば、重衡卿の例に任べしとて、山門の大衆是を申請て、則唐崎の濱に首を刎てぞ被懸ける。此豐前守は、將軍の執事高武

四所三聖―四所は不詳、三聖は比叡大宮と二宮と聖眞子とをいふ

早尾大行事―早尾は不動明王大行事は毘沙門天を祀る

民治世の政に非ず、衆徒の願心も、皆驕奢放逸の基にして、佛法紹隆の爲に非ざる間、諸天善神も擁護の手を休め、四所三聖も加被の力を不被運。悲哉、今より後朝儀久く塗炭に落て、公卿大臣蠻夷の奴となり、國主はるかに帝都を去て、臣は君を殺し、子は父を殺す世にならんずる事の淺猿さよ。大逆の積、却て其身を譴る事なれば、逆臣猛威を振はん事も、又久しからじ。嗚呼恨乎、師重が吾山を攻落して、堂舍佛閣を燒拂はんと議する事。看々人々、明日の午刻に、早尾大行事を差遣して、逆徒を四方に退けんずる者を。此上は我山に何の怖畏か可有。其材木皆元の如く運返せと託宣して、此童四五人して持程なる大木を一つ打かつぎ、御廟の前に打捨、手足を縮めて震ひけるが、明日の午刻に、敵を追拂ふべしと云神託、餘に事遠からで誠共覺えず、一事も若相違せば申處皆虛說になるべし。暫明日の樣を見て、思合する事あらば、後日にこそ奏聞を經めと申て、其日の奏事を止めければ、神託空く衆徒の胸中に藏れて、知人更に無りけり。山門には西坂に軍あらば、本院の鐘をつき、東坂本に合戰あらば、生源寺の鐘を鳴すべしと、方々の約束を定たりける。爰に六月廿日の早旦に、早尾社の猿共、數多群來て、生源寺の鐘を、東西兩塔に響渡る程こそ撞たりけれ。諸方の官軍九院の衆徒是を聞

大八王子―山王二十社の内の八王子の權現をいふ

圓宗―天台宗をいふ

護尾張守高經北陸道の勢を率して、仰木より押寄て、横川を可レ攻と聞えければ、楞嚴院九谷の衆徒、處々のつまり〱に關を拵へ、逆茂木を引て要害を構ける。其比大師の御廟修造の爲とて、材木を多く山上に引のぼせたりけるを、櫓の柱矢間の板にせんとて、坂中へぞ運ける。其日、般若院の法印が許に召仕ける童、俄に物に狂て、樣々の事を口走けるが、我に大八王子の權現つかせ給たりと名乘て、此御廟の材木、急ぎ本の處へ返運ぶべしとぞ申ける。大衆是を不審して、誠に八王子權現のつかせ給たる物ならば、本地の內證朗にして、諸教の通義明かなるべしとて、古來碩學の相承し來る一念三千の法門、唯受一人の口訣共を、樣々にぞ問たりける。此童からく〱と打笑て、我和光の塵に交る事久して、三世了達の智も淺く成ぬといへ共、如來出世の御時、會座に列て聞し事なれば、あら〱云て聞せんとて、大衆の立つる處の不審、一々に言に花をさかせ、理に玉を聯ねて答ける。大衆皆是に信を取て、重て山門の安否軍の勝負を問ふに、此物つき、涙をはら〱と流して申けるは、我內には圓宗の教法を守り、外には百王の鎭護を致さん爲に、當山開基の初より、跡を垂し事なれば、如何にも吾山の繁昌、朝廷の靜謐をこそ、心に懸て思ふ事なれ共、叡慮の向所も、富貴榮耀の爲にして、理

山徒の號に宥恕して―山門の衆徒といふ名に對して宥恕して

一腹一生の弟―同母弟

百餘人を勝て、六月十八日の夕闇に、四明の嶺へぞ上せける。隆賢多年の案内者なる上、敵の有所無所委見置たる事なれば、少も道に迷べきにては無りけるが、天罰にてや有けん、俄に目くれ心迷て、終夜四明の麓を北南へ迷ありきける程に、夜已に明ければ、紀清兩黨に見附られて、中に被取籠ける間、後なる武者共百餘人討れて、谷底へ皆ころび落ぬ。隆賢一人は、深手數箇所負て、腹を切んとしけるが、上帶を解隙に被組て、生虜れにけり。大逆の張本なれば、軈こそ斬らるべかりしを、大將山徒の號に宥恕して、御方にある一族の中へ遣はされ、生て置ん共殺されんとも、意に可任と被仰ければ、今木中務丞範顯、畏て承候とて、則使者の見ける前にて、其首を刎てぞ捨たりける。忝も萬乘の聖主、醫王山王の擁護を御憑有て、臨幸成たる故に、三千の衆徒、悉佛法と王法と可相比理を存て、貳心なく忠戰を致す處に、金輪院一人山徒の身として我山を背き、武士の家に非して將軍に屬し、剰弟子同宿を出立て、山門を亡さんと企ける心の程こそ淺猿けれ。されば惡逆忽に顯て、手引しつる同宿共、或は討れ或は生虜れぬ。光澄は無幾程して、最愛の子に殺されぬ。其子は又一腹一生の弟に討れて、世に類なき不思議を顯ける神罰の程こそ怖しけれ。去程に、越前の守

寸引―素引也、矢を番はずして弦のみ引くこと

重氏―原本貞氏に作る、異本によりて改む

物具の札の程―鎧の札の堅さ、札は鐵又は革の小き板

は後に立て、月を射ば天の恐も有ぬべし。兩方のはづれを射んとするぞと約束して、本間はたと射れば、相馬もはたと射る。矢所約束に不違。中なる月をぞ殘しける。其後百矢二腰取寄て、張がへの弓の寸引して、相摸國の住人本間孫四郎重氏、下總國の住人相馬四郎左衛門尉忠重二人、此陣を堅て候ぞ。矢少々うけて物具の札の程御覽候へと、高らかに名乘ければ、後なる寄手二十萬騎、誰追としも無れ共、我先にとふためきて、又本の陣へ引返す。如今矢軍計にて日を暮し夜を明さば、何年攻る共、山落る事やはか可有と、諸人攻あぐんで思ける處に、山徒金輪院の律師光澄が許より、今木少納言隆賢と申ける同宿を使にて、高豐前守に申けるは、新田殿の被支候四明山の下は、山上第一の難所にて候へば、輒く攻破られん事難叶とこそ存候へ。能物馴て候はんずる西國方の兵を四五百人、此隆賢に被相副、無動寺の方より忍入り、文珠樓の邊四王院の傍にて、鬨聲を被揚候はゞ、光澄與力の衆徒、東西兩塔の間に、旗を擧鬨を合て、山門をば時の間に攻落し候べしとぞ申ける。あはれ山徒の中に御方する者一人なり共出來あれかしと、念願しける處に、降賢忍やかに來、夜討すべき樣を申ければ、高豐前守大に喜で、播磨、美作、備前、備中四箇國の勢の中より、夜討に馴たる兵五

矢だうなに―矢づひえなるに
すがひ拍子―つゞけ拍子
ならし―手ならし

走より、總角附の板まで、裏面五重を懸ず射徹して、矢さき三寸計ちしほに染て出たりければ、鬼歟神歟と見えつる熊野人、持ける鉞を打捨て、小篠の上にどうと伏す。其次に、是も熊野人歟と覺えて、先の男に一かさ倍て、二王を作損じたる如くなる武者の、眼さかさまに裂、鬚左右へ分れたるが、緋威の鎧に、龍頭の冑の緒を縮、六尺三寸の長刀に、四尺餘の大刀帶て、射向の袖をさしかざし、後を屹と見て、遠矢な射そ。矢だうなにと云儘に、鎧づきして上ける處を、相馬四郎左衞門、五人張に十四束三伏の金磁頭、くつ卷を殘さず引つめて、弦音高く切て放つ。手答とすがひ拍子に聞えて、冑の眞向より眉間の腦を碎て、鉢著の板の横縫きれて、矢じりの見ゆる計に射籠たりければ、あつと云聲と共に倒て、矢庭に二人死にけり。跡に繼ける熊野勢五百餘人、此矢二筋を見て、前へも不レ進、後へも不レ歸、皆背をくゞめてぞ立たりける。本間と相馬と二人ながら、是をば少しも見ぬ由にて、御方の兵の二町計隔たりける向の尾に陣を取て居たりけるに向て、例ならず敵共のはたらき候は、軍の候はんずるやらん。ならしに一づゝ射て見候はん。何にても的に立させ給へと云ければ、是遊ばし候へとて、みな紅の扇に、月出したるを矢に挾み、遠的場だてにぞ立たりける。本間は前に立、相馬

白鳥―白鷺

篦撓―篦の曲りたるを直す具

笑ひ、今日の軍に、御方の兵に太刀をも拔せ候まじ。矢一をも射させ候まじ。我等二人罷向て、一矢仕て奴原に肝をつぶさせ候はんと申、最閑に座席をぞ立たりける。猶も弓を強く引ん爲に、著たる鎧を脱置て、脇立計に大童になり、白木の弓のほこ短には見えけれ共、尋常の弓に立竝たりければ、今二尺餘ほこ長にて、曲高なるを大木共に押撓、ゆら／＼と押張、白鳥の羽にてはぎたる矢の、十五束三伏有けるを、百矢の中より唯二筋拔て弓に取副、そゞろ歌うたうて閑々と向の尾へ渡れば、後に立たる相馬、銀のつく打たる弓の、普通の弓四五人張合たる程なるを、左の肩に打かたげて、金磁頭二つ篦撓に取添て、道々撓直し爪よりて、一村茂る松陰に、人交もなく唯二人、弓杖突てぞ立たりける。爰に是ぞ聞えたる八庄司が内の大力よと覺えて、長八尺計なる男の、一荒荒たるが、鏁の上に黑皮の鎧を著、五枚冑の緒を縮、半頬の面に朱をさして、九尺計に見えたる樫木の棒を左の手に拳り、猪の目透したる鉞の、歯の徑一尺計あるを、右の肩に振かたげて、少もためらふ氣色なく、小跳して登る形勢は、摩醯脩羅王、夜叉、羅刹の怒れる姿に不異。あはひ二町計近附て、本間小松の陰より立顯れ、件の弓に十五束三伏、忘るゝ計引しぼり、ひやうと射渡す。志す處の矢所を少も不違、鎧の弦

筑紫の八郎—鎮西八郎爲朝のこと、强弓の達者なれば例に引きたる也

共の出立たる體には事替て、物の用に立ぬと見えければ、高豊前守悦思事不レ斜、軈て對面して合戰の意見を問ければ、湯河庄司殊更進出て申けるは、紀伊國そだちの者共は、少きより悪處岩石に馴て、鷹をつかひ、狩を仕る者にて候間、馬の通ひ候はぬ程の嶮岨をも、平地の如くに存ずるにて候。ましてや申さん、此山なんどを見て、難所なりと思事は、露計も候まじ。威毛こそ能も候はね共、我等が手づから撓拵て候物具をば、如何なる筑紫の八郎殿も、左右なく裏かゝする程の事はよも候はじ。將軍の御大事此時にて候へば、我等武士の矢面に立て、敵矢を射ば物具に請留め、斬らば其太刀長刀に取附、敵の中へわり入程ならば、如何なる新田殿なり共、やはか怺へ候べきと、傍若無人に申せば、聞人見人何れも偏執の思を成にけり。さらば軈是をさき武者として攻よとて、六月十七日の辰刻に、二十萬騎の大勢、熊野の八庄司が五百餘人を先に立て、松尾坂の尾崎より、かづきつれてぞ上りたりける。官軍の方に綿貫五郎左衞門、池田五郎、本間孫四郎、相馬四郎左衞門とて、十萬騎が中より勝出されたる强弓の手垂あり。池田と綿貫とは、時節東阪本へ遣はされて不二居合一ば、本間と相馬と二人、義貞の御前に候けるが、熊野の人共の眞黑に裏つれて攻上けるを遙に直下し、から〳〵と打

かづき寄せ—楯を被つて近づき
さし矢—卷藁矢の如き一種の矢にて矢數を多く射るに用ふるもの
半頬—頬と腮ばかりを覆ふ鐵製の面

矢間の板を鳴し、舷をたゝいて鬨を合す。大地も爲レ之裂、大山も此時に崩やすらんとおびたゞし。寄手已に堀の前までかづき寄せ、埋草を以て堀をうめ、燒草を積で櫓を落さんとしける時、三百餘箇所の櫓、土さま出塀の内より、雨の降如く射出しける矢、更に浮矢一つも無りければ、楯のはづれ旗下に射臥られて、死生の境を不レ知者三千人に餘れり。寄手餘に射殺されける間、持楯の陰に隱んと、少色めきたる處を、城中より見澄して、脇屋、堀口、江田、大館の人々六千餘騎、三の關を開せて、簇直に敵の中へ懸入る。土居、得能、仁科、伯耆が勢二千餘騎、白鳥より懸下て、横合にあふ。湖水に浮べる國々の兵共、唐崎の一松の邊へ漕寄て、さし矢遠矢すぢかひ矢に、矢種を不レ惜射たりける。寄手大勢なりといへ共、山と海と横矢に射白まされ、田中白鳥の官軍に被二懸立一、叶はじとや思けん、又本陣へ引返す。其後よりは、日夜朝暮に兵を出し、矢軍計をばしけれ共、寄手は遠攻に爲たる計を業にし、官軍は城を不レ被レ落を勝にして、はか〴〵しき軍は無りけり。同十六日熊野の八庄司共、五百餘騎にて上洛したりけるが、新手なれば一軍せんとて、軈て西坂へぞ向ひたりける。黒絲の鎧兜に、指のさきまで鍊たる籠手、臑當、半頬、膝鎧、無二透處一一樣に裹つれたる事がら、誠に尋常の兵

手足を汰へて―熟練なるを汰へて

旦暮に戰て、互に陣を不レ被レ破、西坂の合戰此儘にて休ぬ。其翌日高豐前守大津へ使を立て、宗徒の敵共は、皆大嶽へ向たりと見えて候。急ぎ追手の合戰を被レ始て、東坂本を攻破り、神社佛閣僧坊民屋に至るまで、一宇も不レ殘燒拂て、敵を山上に追上、東西兩塔の間に打上て、煙を被レ揚候はゞ、大嶽の敵ども前後に心を迷はして、進退定て度を失つと覺え候。其時此方より同く攻上、戰の雌雄を一時に可レ決とぞ牒ぜられける。吉良、石堂、仁木、細川の人々是を聞て、昨日は已に追手の勸に依て、高家の一族共、手詰の合戰を致しつ。今日は又搦手より、此陣の合戰を被レ勸事、誠に理に當れり。非レ可二默止一とて、十八萬騎を三手に分て、田中、濱道、山傍より、態夕日に敵を向て、東坂本へぞ寄たりける。城中の大將には、義貞の舍弟脇屋右衞門佐義助を被レ置たりければ、東國西國の强弓、手足を汰へて、土矢間櫓の上におき、土居、得能、仁科、春日部、伯耆守以下の四國北國の懸武者共、二萬餘騎白鳥岳に控させ、船軍に馴たる國々の兵に、和仁、堅田の地下人共を差添て、五千餘人兵船七百餘艘に搔楯を搔て、湖水の澳に被レ浮たり。敵陣の構密くして、人の近附べき樣なしといへども、軍をせでは敵の落べき樣やあるとて、三方の寄手十八萬騎相近附て、時を作りければ、城中の勢六萬餘騎、

忍辱の衣―外來の所辱を能く安忍する事を表示する衣

源八が冑の鉢を、破よ碎よと、重打にぞ打たりける。源八冑の吹返を目の上へ切さげられて、著直さんと推仰きける處を、定範長刀をからりと打棄て、走懸てむづと組。二人が蹈ける力足に、山の片岸崩て、足もたまらざりければ、二人引組ながら、數千丈高き小篠原を、上になり下になり轉けるが、中程より別々に成て、兩方の谷の底へぞ落たりける。此外十四の禪侶、法華堂の衆に至るまで、忍辱の衣の袖を結て肩にかけ、降魔の利劍を提て、向ふ敵に走懸走懸、命を風塵よりも輕して防ぎ戰ける程に、寄手の大勢進兼て、四明の巓西谷口、今三町計に向上て、一氣休てぞ支ける。爰に何者か爲たりけん、大講堂の鐘を鳴して、事の急を告たりける間、篠峰を固めんとて、昨日横川へ被向たりける宇都宮五百餘騎、鞭に鐙を拜て、西谷口へ馳來る。皇居を守護して東坂本に被坐ける新田左中將義貞、六千餘騎を率して、四明の上へ馳上て、紀淸兩黨を虎韜にすゝませ、江田大館を魚鱗に連ねて、眞倒に懸立られけるに、寄手二十萬騎の兵共、水飲の南北の谷へ被懸落て、人馬上が上に落重りしかば、さしも深き谷二つ、死人に埋て平地になる。寄手日比の合戰に討負て、相圖の支度相違しければ、水飲より下に陣を取て、敵の隙を伺ふ。義貞は東坂本を閣て、大嶽に陣を取り、晝夜

中書王―中務卿恒良親王のこと

鳩の杖―鳩を刻みたる杖、鳩の食に咽ばざるより古昔老人の杖には鳩を刻みたりとぞ

書王の副將軍に被㆑憑たりける千種宰相中將忠顯卿、坊門少將正忠、三百餘騎にて被㆑防けるが、松尾より攻上る敵に後を被㆑裹て、一人も不㆑殘討れてげり。是を見て、後陣に支へて防ぎける正護院、禪智坊、道場坊以下の衆徒七千餘人、一太刀打ては引上、暫支ては引退、次第次第に引ける間、寄手彌勝に乘て、追立追立一息をも續せず、さしも嶮き雲母坂、蛇池を弓手に見成て、大嶽までぞ攻上りける。去程に、院々に早鐘撞て、西坂已に被㆓攻破㆒ぬと、本院の谷々に騷ぎ喚りければ、行歩も叶はぬ老僧は、鳩の杖に携て、中堂、常行堂なんどへ參て、本尊と共に燒死なんと悲み、稽古讚仰をのみ事とする修學者などは、經論聖敎を腹に當て、落行惡僧の太刀長刀を奪取て、四郎谷の南、箸塚の上に走上り、命を捨て戰ける。爰に數萬人の中より、唯一人、備後國住人江田源八泰氏と名乘て、洗革の大鎧、五枚冑の緒を縮、四尺餘の太刀所々さびたるに血を附て、ましぐらにぞ上たりける。是を見て、杉本山神の大夫定範と云ける惡僧、黑絲の鎧に、龍頭の冑の緒を縮、大立擧の臑當に、三尺八寸の長刀、莖短に取て、亂足を踏み、人交もせず唯二人、火を散してぞ斬合ける。源八遙の坂を上て、數箇度の戰に腕緩く、機疲れけるにや、動すればうけ太刀に成けるを、定範得たり賢しと、長刀の柄を取延、

思圖に―思ひどほりに

無に處して―功無き者と處分して

てはは山法師共を差向て候なる。一軍手痛く攻て御覽候へ。はか〳〵しき合戰はよも候はじ。思圖に大嶽の敵を追落されて候はゞ、大講堂文珠樓の邊に引へて、火を被レ擧候へ。同時に攻合せて、東坂本の敵を一人も餘さず、湖水に追ばめて亡し候べしとぞ牒ぜられける。西坂の大將高豐前守是を聞て、諸軍勢に向て法を出しけるは、山門を攻落すべき諸方の相圖明日にあり。此合戰に一足も退たらん者は、縱先々拔群の忠ありと云共、無に處して本領を沒收し、其身を可二追出一。一太刀も敵に打違へて、陣を破り、分捕をもしたらんずる者をば、凡下ならば侍になし、御家人ならば、直に恩賞を可二申與一。さればとて獨高名せんとて、拔懸すべからず。又傍輩の忠を猜で、危き處を見放つべからず。互に力を合せ、共に志を一にして、斬共射共不レ用、乘越乘越進べし。敵引退かば、立歸ざるさきに攻立て、山上に攻上り、堂舍佛閣に火を懸て、一宇も不レ殘燒拂ひ、三千の衆徒の首を、一々に大講堂の庭に斬懸て、將軍の御感に預り給へかしと、諸人を勵して下知しける、惡逆の程こそ淺猿けれ。諸國の軍勢等此命を聞て、勇み前まぬ者なし。夜已に明ければ、三石、松尾、水飲より、三手に分れて二十萬騎、太刀長刀の鋒を竝べ、射向の袖を差かざして、えいや聲を出してぞ上たりける。先一番に、中

賀郡坂本村の大字也

潮ならぬ海ー琵琶湖

して、渡櫓高櫓三百餘箇所搔竝べたり。塀の上より見越せば、是こそ大將の陣と覺えて、中黑の旗三十餘旒、山下風に吹れて、龍蛇の如くに飜りたる其下に、陣屋を竝て油幕を引、爽に鎧たる兵二三萬騎、馬を後に引立させて、一勢々々竝居たり。無動寺の麓白鳥の方を向上たりければ、千葉、宇都宮、土居、得能、四國、中國の兵こゝを堅たりと覺えて、左巴、右巴、月に星、片引兩、傍折敷に三文字書たる旗共、六十餘旒、木々の梢に飜て、片々たる其陰に、冑の緒を縮たる兵三萬餘騎、敵近附かば橫合にかさより落さんと、轡を竝て控たり。又湖上の方を直下たれば、西國北國東海道の船軍に馴たる兵共と覺て、龜甲下濃の瓜の紋、連錢、三星、四目結、赤幡、水色、三洲濱、家々の紋畫たる旗三百餘旒、潮ならぬ海に影見えて、漕竝べたる舩に、射手と覺えたる兵數萬人、搔楯の陰に弓杖を突て、橫矢を射んと構たり。寄手誠に大勢なりと云共、敵の勢に機を被呑て、矢懸までも進み得ず、大津、唐崎、志賀の里、三百餘箇所に陣を取て、遠攻にこそしたりけれ。六月六日、追手の大將の中より、西坂の寄手の中へ使者を立て、此方の敵陣を伺見候へば、新田、宇都宮、千葉、河野を始として、宗徒の武士共大略皆東坂本を堅たりと見えて候。西坂をば嶮きを憑て、公家の人々、さ

山王大師―山王權現と傳教大師とをいふ

三塔―東塔西塔横川

穴生―諸本かくあれど穴太に作るべきか、穴太は近江滋

けるにや、道々をも警固せず、關、逆茂木の構もせざりければ、さしも嶮しき道なれ共、岩石に馴たる馬共なれば、上らぬ所も無りけり。其時しも、新田左兵衛督を始として、千葉、宇都宮、土居、得能に至るまで、東坂本に集居て、山上には行歩も叶はぬ宿老、稽古の窓を閉たる修學者の外は、兵一人も無りけり、此時若西坂より寄る大勢共、暫も滞なく四明嶽まで打上りたらましかば、山上も、坂本も、防に便無して一時に落べかりしを、猶も山王大師の御加護や有けん、俄に朝霧深立隱して、咫尺の内をも見わかぬ程なりければ、前陣に作る御方の時の音を、敵の防ぐ矢叫の聲ぞと聞誤て、後陣の大勢續ねば、そゞろに時をぞ移しける。斯る處に、大宮へおり下て、三塔會合しける大衆上下歸山して、將門の童堂の邊に相支て、こゝを先途と防ける間、面に進みける寄手三百人被レ討、前陣敢て懸らねば、後陣は彌不レ得レ進、唯水飲の木陰に陣をとり、堀切を境て、搔楯を搔、互に遠矢を射違て、其日は徒に暮にけり。西坂に軍始りぬと覺えて、時の聲山に響て聞えければ、志賀唐崎の寄手十萬餘騎、東坂本の西の穴生の前へ押寄て、鬨の聲をぞ揚たりける。爰にて敵の陣を見渡せば、無動寺の麓より、湖の波打際まで、から堀を二丈餘に掘通して、處々に橋を懸、岸の上に塀を塗、關逆茂木を密く

六月二日―金勝院本四日に作る

修學院、音無瀧―共に山城國愛宕郡に在り

○山門攻事 附日吉神託事

主上二度山門へ臨幸なりしかば、三千の衆徒去ぬる春の勝軍に習て、貳心なく君を擁護し奉り、北國、奥州の勢を待由聞えければ、將軍左馬頭、高、上杉の人々、東寺に會合して合戰の評定あり。事延引して、義貞に勢附なば叶まじ。勢未微なるに乘て、山門を可レ攻とて、六月二日、四方の手分を定て、追手搦手五十萬騎の勢を山門へ差向らる。追手には、吉良、石堂、澁河、畠山を大將として、其勢五萬餘騎、大津、松本の東西の宿、園城寺の燒跡、志賀、唐崎、如意嶽まで充滿したり。搦手には、仁木、細川、今川、荒川を大將として、四國中國勢八萬餘騎、今道越に三石の麓を經て、無動寺へ寄んと志す。西坂本へは、高豐前守師重、高土佐守、高伊豫守、南部遠江守、岩松桃井等を大將として、三十萬騎、八瀬、藪里、靜原、松崎、赤山、下松、修學院、北白河まで支て、音無瀧、不動堂、白鳥よりぞ寄たりける。山門には、敵是まで可レ寄とは思も寄らざり

栴檀は二葉より芳し―偉人となるものは幼少より他に異なる所あるに譬ふ

禮盤―佛前の禮拜の臺

んとぞ仕居たりける。母急ぎ走寄て、正行が小腕に取附て、泪を流して申けるは、栴檀は二葉より芳といへり。汝をさなく共父が子ならば、是程の理に迷ふべしや。小心にも能々事の樣を思うてみよかし。故判官が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井宿より返し留めし事は、全く跡を弔はれん爲に非ず、腹を切れとて殘し置しにも非ず。我縱運命盡て戰場に命を失ふ共、君何にも御座有と承らば、死殘たらん一族若黨共をも扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅して、君を御代にも立進らせよと云置し處なり。其遺言具に聞て、我にも語りし者が、何の程に忘れけるぞや。角ては父が名を失はて、君の御川に合進らせん事有べし共不覺と、泣々諫留て、拔たる刀を奪とれば、正行腹を不切得、禮盤の上より泣倒れ、母と共にぞ歎ける。其後よりは、正行、父の遺言、母の教訓、心に染、肝に銘じつゝ、或時は童部共を打倒し、首を取眞似をして、是は朝敵の首を取也と云、或時は竹馬に鞭を當て、是は將軍を追懸奉るなんど云て、はかなき手ずさみに至までも、唯此事をのみ業とせる、心の中こそ恐しけれ。

まさしげ｜正しき樣子といふに正成の意を兼れ云へる也 遺跡｜河内をさす 其ながら｜如何にもそれに相違なけれど	

○正成首送二故郷一事

湊川にて討れし楠判官が首をば、六條河原に懸られたり。去ぬる春もあらぬ首をかけたりしかば、是も又さこそ有らめと云者多かりけり。

　疑は人によりてぞ残りける、まさしげなるは楠が首。

と狂歌を札に書てぞ立たりける。其後尊氏卿楠が首を召れて、朝家私日久相馴し舊好の程も不便也。跡の妻子共、今一度空しき貌をも、さこそ見度思らめとて、遺跡へ被レ送ける情の程こそ有難けれ。楠が後室、子息正行是を見て、判官今度兵庫へ立し時、樣樣申置し事共多かる上、今度の合戰に必ず討死すべしとて、正行を留置しかば、出しを限の別也とは、兼てより思ひ儲たる事なれども、貌をみれば其ながら、目塞り、色變じて、替はてたる首をみるに、悲の心胸に滿て、歎の泪せき敢ず。今年十一歳に成ける帶刀、父が首の生たりし時にも似ぬ有樣、母が歎のせん方もなげなる樣を見て、流るゝ泪を袖に押へて、持佛堂の方へ行けるを、母怪しく思て、則妻戸の方より行て見れば、父が兵庫へ向ふとき、形見に留めし菊水の刀を右の手に拔持て、袴の腰を押さげて、自害をせ

外大石山丸、大山王子、大友眞鳥、守屋大臣、蘇我入鹿、豐浦大臣、山田石川左大臣、長屋右大臣、豐成、伊豫親王、氷上川繼、橘逸勢、文屋宮田、江美押勝、井上皇后、早良太子、大友皇子、藤原仲成、相馬將門、天慶純友、康和義親、宇治惡左府、六條判官爲義、惡右衛門督信頼、安部貞任、宗任、清原武衡、家衡、平相國清盛、木曾冠者義仲、阿佐原八郎爲頼、時政九代の後胤高時法師に至迄、朝敵と成て叡慮を悩し、仁義を亂る者、皆身を刑戮の下に苦しめ、尸を獄門の前に曝さずと云事なし。去ば尊氏卿も、此春東八箇國の大勢を率して上洛し給ひしかども、一向朝敵たりしかば、數箇度の合戰に打負て、九州を指て落たりしが、此度は其先非を悔て、一方の皇統を立申て、征罰を院宣に任られしかば、威勢の上に一の理出來て、大功乍に成んずらんと、人皆色代申しけり。去程に、東寺已に院の御所と成しかば、四壁城郭に構へて、上皇を警固し奉る由にて、將軍も左馬頭も同く是に籠られける。是は敵山門より遙々と寄來らば、小路々々を遮て、縱横に合戰をせんずる便よかるべしとて、此寺を城郭にはせられけるなり。

四天—多聞天、持國天、增長天、廣目天

蒙て、彼國に下、一首の歌を讀て、鬼の中へぞ送ける。

草も木も我大君の國なれば、いづくか鬼の栖なるべき。

四の鬼此歌を見て、さては我等惡逆無道の臣に隨て、善政有德の君を背奉りける事、天罰遁るゝ處無りけりとて、忽に四方に去て失にければ、千方勢を失て、軈て朝雄に討れにけり。是のみならず、朱雀院の御宇承平五年に、將門と云ける者、東國に下て、相馬郡に都を立、百官を召仕て、自平親王と號す。官軍擧て是を討んとせしかども、其身皆鐵身にて、矢石にも傷られず、劒戟にも痛ざりしかば、諸卿僉議有て、俄に鐵の四天を鑄奉て比叡山に安置し、四天合行の法を行せらる。故に天より白羽の矢一筋降て、將門が眉間に立ければ、遂に俵藤太秀鄉に首を捕られてけり。其首獄門に懸て曝すに、三月迄色不レ變、眼をも不レ塞、常に牙を嚼て、斬られし我五體、何の處にか有らん。此に來れ。頭續て今一軍せんと、夜な〳〵呼りける間、聞人是を不レ恐と云事なし。時に道過る人是を聞て、

將門は米かみよりぞ斬られける俵藤太が謀にて

と讀たりければ、此頭から〳〵と笑ひけるが、眼忽に塞て、其尸遂に枯にけり。此

するをいふ
三寶—佛法僧の三つを稱す

出し、盡未來際に至る迄天照太神の苗裔たらん人を以て、此國の主とすべし。若王命に違ふ者有て、國を亂り民を苦めば、十萬八千の眷屬、朝にかけり夕に來て、其罰を行ひ、其命を奪べしと、堅く誓約を書て、天照太神に奉る、今の神璽の異說是也。誠に內外の宮の在樣、自餘の社壇には事替て、錦帳に本地を顯はせる鏡をも不懸、念佛讀經の聲を留て、僧尼の參詣を許されず。是併當社の神約を不違して、化屬結緣の方便を下に祕せる者なるべし。されば天照太神より以來、繼體の君九十六代、其間に朝敵と成て滅し者を數ふれば、神日本磐余彥天皇御宇天平四年に、紀伊國名草郡に長二丈餘の蜘蛛あり。足手長して力人に超たり。網を張る事數里に及で、往來の人を殘害す。然共官軍勅命を蒙て、鐵の網を張り、鐵湯を沸して、四方より攻しかば、此蜘蛛遂に殺されて、其身分々に爛にき。又天智天皇の御宇に、藤原千方と云者有て、金鬼、風鬼、水鬼、隱形鬼と云、四の鬼を使へり。金鬼は其身堅固にして、矢を射るに立ず。風鬼は大風を吹せて、敵城を吹破る。水鬼は洪水を流して、敵を陸地に溺す。隱形鬼は其形を隱して、俄に敵を拉。如斯の神變、凡夫の智力を以て可防非ざれば、伊賀、伊勢の兩國、是が爲に妨られて、王化に從ふ者なし。爰に紀朝雄と云ける者、宣旨を

二儀―天地
三才―天地人
跡高本下―佛の高上の內證より神と垂跡示現

れければ、日野中納言資名、殿上人には、三條中將實繼計を供奉人として、急ぎ東寺へぞ奉成ける。將軍不斜悦で、東寺の本堂を皇居と定めらる。久我內大臣を始として、落留給へる卿相雲客參られしかば、則皇統を立らる。是ぞはや尊氏運を開かるべき瑞なりける。

○日本朝敵事

夫日本開闢の始を尋れば、二儀已に分れ、三才漸顯れて、人壽二萬歲の時、伊弉諾伊弉册の二尊、遂に妻神夫神と成て、天の下にあまくだり、一女三男を生給ふ。一女と申は、天照太神、三男と申は、月神、蛭子、素盞烏尊なり。第一の御子天照太神、此國の主と成て、伊勢國御裳濯川の邊、神瀨下津岩根に跡を垂れ給ふ。或時は垂跡の佛と成て、番々出世の化儀を調へ、或時は本地の神に歸て、塵々刹土の利生をなし給ふ。是則跡高本下の成道也。爰に第六天の魔王集て、此國の佛法弘らば、魔障弱くして其力を失べしとて、彼應化利生を妨んとす。時に天照太神彼が障礙を休めん爲に、我三寶に近附じと云誓をぞなし給ける。依之第六天の魔王忿を休めて、五體より血を

持明院法皇―後伏見院
本院―花園院
新院―光嚴院
春宮―豐仁親王、後に光明帝
不豫―天子の病をいふ

大膳亮義益、田中修理亮氏政、千葉介貞胤、宇都宮治部大輔公綱、同美濃將監泰藤、狩野將監貞綱、熱田大宮司昌能、河野備後守通治、得能備中守通益、武田甲斐守盛正、小笠原藏人政道、仁科信濃守氏重、春日部治部少輔時賢、名和伯耆守長年、同太郎判官長生、今木新藏人範家、頓宮六郎忠氏、是等を宗徒の侍とし、其勢都合六萬餘騎、鳳輦の前後に打圍て、今路越にぞ落行給ける。

○持明院本院潜二幸東寺一事

持明院法皇、本院、新院、春宮に至まで、悉く皆山門へ御幸成進すべき由、太田判官全職、路次の奉行として、供奉仕たるに、本院は、兼てより尊氏に院宣を被二成下一たりしかば、二度御治世の事やあらんずらんと思召て、北白河の邊より、俄に御不豫の事有とて、御輿を法勝寺の塔前に舁居させて、態時をぞ移されける。去程に、敵已に京中に入亂ぬと見えて、兵火四方に盛也。全職是を見て、さのみはいつまでか暗然として可二待申一なれば、供奉の人々に、急ぎ山門へ成進らすべしと申置て、新院、法皇、春宮計を、先東坂本へぞ御幸成進せける。本院は全職が立歸る事もやあらんずらんと、恐しく思召

攝籙―攝政
關白

ひしかば、是聖德の顯るゝ處なり。今はよも上を犯さんと好み、亂を起さんとする者はあらじとこそ覺えつるに、西戎忽に襲來て、一年の内に二度まで天子都を移させ給へば、今は日月も晝夜を照す事なく、君臣も上下を知ぬ世に成て、佛法、王法、共に可レ滅時分にや成ぬらんと、人々心を迷はせり。されども此春も山門へ臨幸成て、無レ程朝敵を退治せられしかば、又さる事やあらんと、定なき憑に積習して、此度は、公家にも、武家にも、供奉仕る者多かりけり。攝籙の臣は申に及ず、公卿には吉田内大臣定房、萬里小路大納言宣房、竹林院大納言公重、御子左大納言爲定、四條中納言隆資、坊城中納言經顯、洞院左衞門督實世、千種宰相中將忠顯、葉室中納言長光、中御門宰相宣明、殿上人には、中院左中將定平、坊門左大辨淸忠、四條中將隆光、園中將基隆、甘露寺左大辨藤長、岡崎右中辨範國、一條頭大夫行房。此外衞府諸司、外記、史、官人、北面、有官、無官、瀧口、諸家の侍、官僧、官女、醫陰兩道に至まで、我も〳〵と供奉仕る。武家の輩には、新田左中將義貞、子息越後守義顯、脇屋右衞門佐義助、子息式部大輔義治、堀口美濃守貞滿、大館左馬助義氏、江田兵部少輔行義、額田掃部助正忠、大江田式部大輔氏經、岩松兵衞藏人義正、鳥山左京亮氏頼、羽川越中守時房、桃井兵庫助顯氏、里見

色代―挨拶

物具爽に有て、食物の類は一粒も無りけり。使者歸て此由を申ければ、義貞大に恥たる氣色にて、高家が犯レ法事は、戰の爲に罪を忘たるべし。何樣士卒先じて疲たるは、大將の恥也。勇士をば不レ可レ失、法をば勿レ亂事とて、田の主には小袖二重與て、高家には兵粮十石相副て、色代してぞ歸されける。高家此情を感じて、忠義彌染レ心ければ、此時大將の替レ命忽に打死をばしたる也。自レ昔至レ今迄、流石に侍たる程の者は、利をも不レ思、威にも不レ恐、唯依二其大將一捨レ身替レ命者也。今武將たる人是を愼で、不レ思之乎。

○聖主又臨二幸山門一事

官軍の惣大將義貞朝臣、僅に六千餘騎に打成されて、歸洛せられければ、京中の貴賤上下色を損じて、周章騷事限なし。官軍若戰に利を失はゞ、如レ前東坂本へ臨幸成べきに、兼てより議定ありければ、五月十九日主上三種の神器を先に立て、龍駕をぞ廻らされける。淺猿や元弘の初に、公家天下を一統せられて、三年を過ざるに、此亂又出來て、四海の民安からず。然ども去ぬる正月の合戰に、朝敵忽に打負て、西海の浪に漂

持國天、南方に增長天、西方に廣目天住すといふ

を防けるが、敵數多に取籠られて、遂に討れにけり。其間に、義貞朝臣御方の勢の中へ馳入て、虎口に害を遁給ふ。

○小山田太郎高家刈青麥事

抑官軍の中に、知義輕命者雖多、事の急なるに臨で大將の替命とする兵無りけるに、遙に隔たる小山田一人馬を引返して、義貞を奉乘、剩我身跡に下て討死しける、其志を尋れば、僅の情に憑て、百年の身を捨ける也。去年義貞西國の討手を承て、播磨に下著し給時、兵多して粮乏、若軍に法を置ずば、諸卒の狼藉不可絕とて、一粒をも刈採、民屋の一をも追捕したらんずるものをば、速可被誅之由を、大札に書て、道の辻々にぞ被立ける。依之農民耕作を棄ず、商人賣買を快しける處に、此高家敵陣の近隣に行て青麥を打刈せて、乘鞍に負せてぞ歸ける。時の侍所長濱六郎左衛門尉是を見、直に高家を召寄、無力法の下なれば是を誅せんとす。義貞是を聞給て、推量するに、此者青麥に替身と思んや。此所敵陣なればと思誤けるか、然ずば兵粮に術盡て法の重を忘たるかの間也。何樣彼の役所を見よとて、使者を遣して被點撿ければ、馬

求塚―攝津國武庫郡に在り

須彌の四方―須彌山の北方に多聞天、東方に

限とぞ見えたりける。官軍は元來小勢なれば、命を輕じて戰といへども、遂には大敵に懸負て、殘る勢僅五千餘騎、生田森の東より、丹波路を指てぞ落行ける。數萬の敵勝に乘て、是を追事甚急なり。され共何もの習なれば、義貞朝臣、御方の軍勢を落延させん爲に、後陣に引さがりて、返合せ〳〵戰れける程に、義貞の被乘たりける馬に、矢七筋まで立ける間、小膝を折て倒けり。義貞求塚の上に下立て、乘替の馬を待給へ共、敢て御方是を知ざりけるにや、下て乘せんとする人も無りけり。敵や是を見知たりけん、卽取籠て是を討んとしけるが、其勢に僻易して、近くは更に寄らざりけれども、十方より遠矢に射ける矢、雨や霰の降よりも猶繁し。義貞は薄金と云甲に、鬼切鬼丸とて、多田滿仲より傳はりたる源氏重代の太刀を二振帶れたりけるを、左右の手に拔持て、さがる矢をば飛越、あがる矢にはさしうつぶき、眞中を指て射る矢をば、二振の太刀を相交へて、十六までぞ切て落されける。其有樣、譬へば、多聞、持國、増長、廣目の四天、須彌の四方にすんで、同時に放つ矢を、捷疾鬼と云鬼走廻て、未其矢の大海に不㆓落著㆒前に、四の矢を取て返るらんも、角やと覺る計也。小山田太郎高家、遙の山の上より是を見て、諸鐙を合て馳參て、己が馬に義貞を乘奉て、我身は徒立に成て、追懸る敵

兩虎二龍の闘—争闘の烈しきたとい ふ

修羅—阿修羅の略

しざりたる—退きたる

に中院中將定平、大江田、里見、鳥山、五千餘騎にて、高、上杉が八萬騎に懸合て、半時計黑煙を立て揉合たり。其勢共戰疲れて、兩方へ颯と引退けば、三番の脇屋右衛門佐、宇都宮治部大輔、菊池次郎、河野、土居、得能一萬騎にて、左馬頭、吉良、石堂が十萬騎に懸合せ、天を響かし地を動して攻戰ふ。或は引組で落重て首を取もあり、取らるゝもあり。或は敵と打違て同く馬より落もあり。兩虎二龍の闘に、何れも討るる者多かりければ、兩方東西へ引のきて、人馬の息をぞ休めける。新田左中將是を見給て、新手の兵已に盡て、戰未決せず、是義貞が自當べき處也とて、二萬三千餘騎を左右に立て、將軍の三十萬騎に懸合せ、兵刃を交へて、命を鴻毛よりも輕せり。官軍の惣大將と武家の上將軍と、自戰ふ軍なれば、射落さるれども矢を拔に隙なく、組で下になれ共、落合て助くる者なし。唯子は親を棄て切合、郎等は主に離れて戰へば、馬の馳違ふ聲、太刀の鐔音、いかなる修羅の闘諍も、是には過じとおびたゞし。先に一軍して引しざりたる兩方の勢共、今はいつをか可期なれば、四隊の陣一處に聚て、敵と敵と相交り、中黑の旗と二引兩と、巴の旗と輪違と、東へ靡き、西へ靡き、磯山風に翩翻して、入違たる計にて、何れを御方の勢とは見え分かず。新田、足利の國の爭、今を

聖主—後醍醐帝をさす

るべきと思けるにや、同自害をして、炎の中に伏にけり。抑元弘以來、忝も此君に憑れ進せて、忠を致し功にほこる者、幾千萬ぞや。然共此亂又出來て後、仁を知らぬ者は、朝恩を捨て敵に屬し、勇なき者は、苟も死を免れんとて、刑戮にあひ、智なき者は時の變を辨ぜずして、道に違ふ事のみ有しに、智仁勇の三德を兼て、死を善道に守るは、古より今に至る迄、正成程の者は未無りつるに、兄弟共に自害しけるこそ、聖主再び國を失て、逆臣横に威を振ふべき、其前表の驗なれ。

○新田殿湊河合戰事

楠已に討れにければ、將軍と左馬頭と一處に合て、新田左中將に打て懸り給ふ。義貞是を見て、西宮よりあがる敵は、旗の紋を見るに、末々の朝敵共なり。湊河より懸る勢は、尊氏直義と覺る。是こそ願ふ所の敵なれとて、西宮より取て返し、生田森を後に當て、四萬餘騎を三手に分て、敵を三方にぞ受られける。去程に、兩陣互に勢を振て、時を作り聲を合す。先一番に大館左馬助氏明、江田兵部大輔行義三千餘騎にて、仁木細川が六萬餘騎に懸合て、火を散して相戰ふ。其勢互に討れて、兩方へ颯と引のけば、二番

九界―地獄餓鬼畜生修羅人間天上聲聞緣覺菩薩の諸界をいふ

るに、其勢次第次第に滅て、後は僅に七十三騎にぞ成にける。此勢にても、打破て落ば落つべかりけるを、楠京を出しより、世の中の事、今は是迄と思所存有ければ、一足も引ず戰て、機已に疲れければ、湊河の北に當て、在家の一村有ける中へ走入て、腹を切ん爲に、鎧を脱で我身を見るに、斬創十一箇所までぞ負たりける。此外七十二人の者共も、皆五箇所三箇所の創を被らぬ者は無りけり。楠が一族十三人、手の者六十餘人、六間の客殿に二行に竝居て、念佛十返計同音に唱て、一度に腹をぞ切たりける。正成座上に居つゝ、舍弟の正季に向て、抑最期の一念に依て、善惡の生を引といへり。九界の間に何か御邊の願なると問ければ、正季から〳〵と打笑て、七生まで唯同人間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存候へと申ければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれ共、我も斯樣に思ふ也。いざさらば同く生を替て、此本懷を達せんと契て、兄弟共に刺違て、同枕に伏にけり。橋本八郎正員、宇佐美河內守正安、神宮寺太郎兵衛正師、和田五郎正隆を始として、宗徒の一族十六人、相隨兵五十餘人、思々に竝居て、一度に腹をぞ切たりける。菊池七郎武朝は、兄の肥前守が使にて、須磨口の合戰の體を見に來けるが、正成が腹を切る所へ行合て、をめ〳〵しく見捨ては、いかゞ歸

馬の平頸―馬の頭の横の平なる邊

遁ぬ處と覺るぞ。いざや先前なる敵を一散し追捲て、後なる敵に戰はんと申ければ、正季可レ然覺候と同じて、七百餘騎を前後に立て、大勢の中へ懸入ける。左馬頭の兵共、菊水の旗を見て、よき敵也と思ければ、取籠て是を討んとしけれども、正成正季東より西へ破て通り、北より南へ追靡け、よき敵とみるをば馳並て、組で落ては首をとり、合ぬ敵と思ふをば、一太刀打て懸ちらす。正成と正季と、七度合て七度分る。其心偏に左馬頭に近附、組で討んと思にあり。遂に左馬頭の五十萬騎、楠が七百餘騎に懸靡けられて、又須磨の上野の方へぞ引返しける。直義朝臣の乘られたりける馬、矢尻を蹄に蹈立て、右の足を引ける間、楠が勢に追攻られて、已に討れ給ぬと見えける處に、薬師寺十郎次郎唯一騎、蓮池の堤にて返合せて、馬より飛でおり、二尺五寸の小長刀の石づきを取延て、懸る敵の馬の平頸、むながひの引廻、切ては刎倒々々、七八騎が程切て落しける其間に、直義は馬を乘替て、遙々落延給けり。左馬頭、楠に追立られて引退を、將軍見給て、新手を入替て、直義討すなと被レ下知ければ、吉良、石堂、高、上杉の人々六千餘騎にて、湊河の東へ懸出て、跡を切らんとぞ取巻ける。正成正季又取て返て此勢にかゝり、懸ては打違て死し、懸入ては組で落、三時が間に十六度迄闘ひけ

縄手を廻し―畷より軍兵を廻して

紺部濱―今の神戸

の兵ども、五百餘騎にて中に是を取籠、弓手馬手に相附て、縄手を廻してぞ射たりける。二百餘騎の者共、心は勇といへ共、射手も少く、徒立なれば、馬武者に懸惱されて、遂に一人も殘らず討れにければ、乘捨つる船は、徒に岸打浪に漂へり。細川卿律師是を見給て、つゞく者の無りつる故にこそ、若干の御方をば故なく討せつれ。いつを期すべき合戰ぞや。下場のよからんずる所へ船を著て、馬を追下々々、打て上れと被下知。四國の兵共、大船七百餘艘紺部濱より上らんとて、磯に傍てぞ上りける。兵庫島三箇所に控たる官軍五萬餘騎、船の敵をあげ立じと、漕行船に隨て、汀を東へ打ける間、船路の勢は、自進で懸る勢にみえ、陸の官軍は、偏に迯て引樣にぞ見えたりける。海と陸との兩陣互に相窺て、遙の汀に著て上りければ、新田左中將と楠と、其間遠く隔て、兵庫島の船著には、支たる勢も無かりけり。依之九國中國の兵船六十餘艘、和田御崎に漕寄て、同時に陸へぞあがりける。

○正成兄弟討死事

楠判官正成、舍弟帶刀正季に向て申けるは、敵前後を遮て、御方は陣を隔たり。今は

銀のつく―銀の折釘をいふ、矢の外れざる用意に弓の矢を番ふ邊に打つものなり

げにもとて佐々木をぞ被呼ける。顯信召に隨て將軍の御前に參たり。將軍本間が矢を取出して、此矢本の矢所へ射返され候へと被仰ければ、顯信畏て、難叶由をぞ再三辭し申ける。將軍強て被仰ける間、辭するに無處して、己が船に立歸り、緋威鎧に鍬形打たる冑の緒を縮、銀のつく打たる弓の反高なるを、帆柱に當てきりきりと推張、船の舳さきに立顯て、弓の弦くひしめしたる有樣、誠に射つべくぞ見えたりける。かかる處に、如何なる推參の馬鹿者にてか有けん、讃岐勢の中より、此矢一受て弓勢の程御覽ぜよと、高らかに呼はる聲して、鏑をぞ一つ射たりける。胸板に弦をや打たりけん、元來小兵にや有けん、其矢二町迄も射附ず、波の上にぞ落たりける。本間が後に控へたる軍兵五萬餘騎、同音にあ射たりやと欺て、しばし笑も止ざりけり。此後は中々射てもよしなしとて、佐々木は遠矢を止てげり。

○經島合戰事

遠矢射損じて、敵御方に笑れ憎まれける者、恥を洗がんとや思けん、船一艘に二百餘人取乘て、經島へ差寄せ、同時に礒へ飛下て、敵の中へぞ打て懸りける。脇屋右衛門佐

けれぱ、小早河七郎、舟の舳に立出て、類少く、見所有ても遊されつる者哉。さても御名字をば、何と申候やらん。承候ばやと問たりければ、本間弓杖にすがりて、其身人數ならぬ者にて候へば、名乘申共誰か御存知候べき。但弓箭を取ては、坂東八箇國の兵の中には、名を知たる者も御座候らん。此矢にて名字をば御覽候へと云て、三人張に十五束三伏、ゆら〱と引渡し、二引兩の旗立たる船を指て、遠矢にぞ射たりける。其矢六町餘を越て、將軍の船に竝たる佐々木筑前守が船を、篦中過通り、屋形に乘たる兵の鎧の草摺に、裏をかゝせてぞ立たりける。將軍此矢を取寄せ見給ふに、相摸國住人本間孫四郎重氏と、小刀のさきにて書たりける。諸人此矢を取傳見て、穴恐、如何なる不運の者が、此矢さきに廻て死なんずらんと、兼て胸をぞ冷しける。本間孫四郎扇を擧て、澳の方をさし招て、合戰の最中にて候へば、矢一も惜く存候。其矢此方へ射返してたび候へとぞ申ける。將軍是を聞給て、御方に誰か此矢射返しつべき者有と、高武藏守に尋給ければ、師直畏て本間が射て候はんずる遠矢を、同じ所に射返候はんずる者、坂東勢の中には有べしとも存候はず。誠にて候やらん、佐々木筑前守顯信こそ、西國一の精兵にて候なれ。彼を被召仰附られ候へかしと申ければ、

上差の流鏑矢―箙の上方に挿す鳴鏑なり

鞍の前輪―鞍の前方の山形なる所

主人のひれ―魚の腮の下の第一のひれ

かけ鳥―翔り行く鳥

の鎧著て、唯一騎和田御崎の波打際に馬打寄せて、澳なる船に向て、大音聲を揚て申けるは、將軍筑紫より御上洛候へば、定て鞆、尾道の傾城共、多く被召具候覧。其爲に珍しき御肴一つ推て進せ候はん。暫御待候へと云儘に、上差の流鏑矢を拔て、羽の少し廣がりけるを、鞍の前輪に當てかき直し、二所籐の弓の握太なるに取副、小松陰に馬を打寄て、浪の上なる鶚の、己が影にて魚を驚し、飛さがる程をぞ待たりける。敵は是を見て、射放たらんは希代の笑哉と、目を放たず。御方は是を見て、射當たらんは時に取ての名譽哉と、機を詰てぞ守ける。遙に高く飛揚りたる鶚、浪の上に落さがりて、二尺計なる魚を、主人のひれを摑で、澳の方へ飛行ける處を、本間、小松原の中より馬を懸出し、追樣に成て、かけ鳥にぞ射たりける。態生ながら射て落さんと、片羽がひを射切て、直中をば射ざりける間、鏑は鳴響て、大内介が舟の帆柱に立、みさごは魚を摑ながら、大友が舟の屋形の上へぞ落たりける。射手誰とは知ねども、敵の船七千餘艘には、舷を踏で立並、御方の官軍五萬餘騎は、汀に馬を扣へて、あ射たり〳〵と感ずる聲、天地を響して靜り得ず。將軍是を見給て、敵我弓の程を見せんと、此鳥を射つるが、此方の船の中へ鳥の落たるは、御方の吉事と覺るなり。何樣射手の名字を聞ばやと被仰

相近―雙方相接近すること

天維―天の成立するおほづな

坤軸―地軸

色無して、先和田御崎の小松原に打出て、閑に手分をぞし給ひける。一方には、脇屋右衛門佐義助を大將として、末々の一族二十三人、其勢五千餘騎、經島にぞ控へたる。一方には、大館左馬助氏明を大將として、相從ふ一族十六人、其勢三千餘騎にて、燈爐堂の南の濱に扣らる。一方には、楠判官正成、態他の勢を不交して、七百餘騎湊川の西の宿に控へて、陸路の敵に相向ふ。左中將義貞は、惣大將にておはすれば、諸將の命を司て、其勢三萬五千餘騎、和田御崎に帷幕を引せて控へらる。去程に、海上の船共、帆を下して磯近く漕寄すれば、陸地の勢も旗を進て、相近にぞ成にける。兩陣互に攻寄て、先澳の船より太鼓を鳴し、時の聲を揚れば、陸路の搦手五十萬騎、請取て聲をぞ合せける、其聲三度畢れば、官軍又五萬餘騎、楯の端を鳴し、胡簶を敲て時を作る。敵御方の時聲、南は淡路、繪島崎、鳴戸澳、西は播磨路須磨浦、東は攝津國生田森、四方三百餘里に響渡て、苟に天維も斷て落、坤軸も傾く計なり。

○本間孫四郎遠矢事

新田足利相挑で未戰處に、本間孫四郎重氏、黄瓦毛なる馬の太く逞きに、紅下濃

いさりに歸ろ—漁獵果てゝ浦へ歸る、いさりは漁獵のこと

四目結—桝形の模樣を四箇四角に竝べたる紋

世祖光武—後漢の光武帝

色解て、通夜の物語に、數盃の興をぞ添られける。後に思合すれば、是を正成が最期なりけりと、哀なりしこと共也。

○兵庫海陸寄手事

去程に、明れば五月二十五日辰刻に、澳の霞の晴間より、幽に見えたる船あり。いさりに歸る海人か、淡路の迫戸を渡船歟と、海邊の眺望を詠て、鹽路遙に見渡せば、取梶面梶に搔楯搔て、艫舳に旗を立たる數萬の兵船、順風に帆をぞ擧たりける。煙波渺々たる海の面、十四五里が程に漕連て、舷を輾り、艫舳を竝たれば、海上俄に陸地に成て、帆影に見ゆる山もなし。あな夥し、吳魏天下を爭し赤壁の戰、大元宋朝を滅せし黃河の兵も、是には過じと目を驚かして見る處に、又須磨の上野と、鹿松岡、鵯越の方より、二引兩、四目結、直違、左巴、倚かゝりの輪違の旗、五六百旒差連て、雲霞の如くに寄懸たり。海上の兵船、陸地の大勢、思しよりも夥くして、聞しにも猶過たれば、官軍御方を顧て、退屈してぞ覺えける。され共義貞朝臣も正成も、大敵を見ては欺き、小敵を見ては侮ざる、世祖光武の心根を寫して得たる勇者なれば、少も機を失たる氣

前聖後聖一揆—孟子に出でたる語一揆は趣の一なるをいふ

衆愚之諤々云々—衆愚之唯々不如一賢之諤々とあるべく、諤々は直言也

平太守—北條高時

誰か褊し申すべき—誰か輕蔑申さん、輕蔑申すものなし

の忠臣、時千載を隔つといへ共、前聖後聖一揆にして、有難かりし賢佐なり。正成兵庫に著ければ、新田左中將廳對面し給て、叡慮の趣をぞ尋問れける。正成畏て、所存の通と、勅定の樣とを、委く語り申ければ、誠に敗軍の小勢を以て、機を得たる大敵に戰はん事叶ふべきにてはなけれ共、去年關東の合戰に打負て上洛せし時、路にて猶支ざりし事、人口の嘲遁るゝ所を得ず。其こそあらめ、今度西國へ下されて、數箇所の城郭一も不㆓落得㆒して、結句敵の大勢なるを聞て、一支もせず京都まで遠引したらんは、餘に無㆓云甲斐㆒存る間、戰の勝負をば見ずして、唯一戰に義を勸ばやと存る計也と宣ひければ、正成重て申けるは、衆愚之諤々は、不ㇾ如㆓一賢之唯々㆒と申候へば、道を不ㇾ知人の譏をば、必しも御心に懸らるまじきにて候。唯可ㇾ戰所を見て進み、叶ふまじき時を知て退くをこそ、良將とは申候なれ。さてこそ暴虎憑河死而無ㇾ悔者不ㇾ與と、孔子も子路を被ㇾ誡事の候へ。其上元弘の初には、平太守の威猛を一時にくだかれ、此年の春は、尊氏の逆徒を九州へ退られ候し事、聖運とは申ながら、偏に御計略の武德に依し事にて候へば、合戰の方に於ては、誰か褊し申候べき。殊更今度西國より御上洛の事、御沙汰の次第、一々に道に當てこそ存候へと申ければ、義貞朝臣誠に顏

養由—養由基とて楚の將にて弓の名人

紀信—漢の高祖の臣にて高祖の命に代つて死したる人

鉞の下に滅さん事、何の仔細か可レ有なれば、唯時を替へず、楠罷下るべしとぞ被レ仰出ける。正成此上はさのみ異議を申に不レ及とて、五月十六日に都を立て、五百餘騎にて兵庫へぞ下ける。正成此を最期の合戰と思ければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ樣有とて、櫻井宿より河内へ返遣すとて、庭訓を殘しけるは、獅子子を産で三日を經る時、數千丈の石壁より是を擲。其子獅子の機分あれば、教ざるに中より跳返りて、死する事を得ずといへり。況や汝已に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば、我教誡に違ふ事なかれ。今度の合戰、天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見ん事、是を限と思ふ也。正成已に討死すと聞なば、天下は必ず將軍の代に成ぬと心得べし。然りと云共、一旦の身命を助らん爲に、多年の忠烈を失て、降人に出る事有べからず。一族若黨の一人も死殘てあらん程は、金剛山の邊に引籠て、敵寄來らば命を養由が矢さきに懸て、義を紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずると、泣々申含めて、各東西へ別にけり。昔の百里奚は、穆公晉の國を伐し時、戰の利無からん事を鑒て、其將孟明視に向て、今を限の別を悲み、今の楠判官は、敵軍都の西に近附と聞しより、國必滅ん事を愁て、其子正行を留て、無跡迄の義を勸む、彼は異國の良弼、是は吾朝

節度使——一方面の軍旅を都督するもの

如くに合戰を致候はゞ、御方決定打負候ぬと覺え候なれば、新田殿をも唯京都へ召候て、如レ前山門へ臨幸成候べし。正成も河内に罷下候て、畿内の勢を以て河尻を差塞、兩方より京都を攻て兵粮をつからかし候程ならば、敵は次第に疲て落下御方は日々に隨て馳集候べし。其時に當て、新田殿は山門より押寄られ、正成は搦手にて攻上候はゞ、朝敵を一戰に滅す事有ぬと覺候。新田殿も定て此料簡候共、路次にて一軍もせざらんは、無下に無二云甲斐一人の思はんずる所を恥て、兵庫に支られたりと覺候。合戰は、兎ても角ても始終の勝こそ肝要にて候へ。能々遠慮を被レ運て、公議を可レ被レ定にて候と申ければ、誠に軍旅の事は兵に讓られよと、諸卿僉議有けるに、重て坊門宰相清忠申されけるは、正成が申所も、其謂有といへども、征罰の爲に差下されたる節度使、未戰を成ざる前に、帝都を捨て、一年の内に二度まで、山門へ臨幸ならん事、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失處也。縱尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を從へて上し時の勢にはよも過じ。凡戰の始より敵軍敗北の時に至迄、御方小勢也といへ共、每度大敵を不二攻靡一と云事なし。是全く武略の勝たる所には非ず、唯聖運の天に叶へる故也。然れば唯戰を帝都の外に決して、敵を鈇

中々—却て

機に乘たる—はづみにつけ込みたる

申けれども、義貞さる事や有べき。渡さぬ先に敵懸りたらば、中々可ㇾ引方無して、死を輕んぜんに便あり。されば韓信が水を背にして陣を張しは此なり。軍勢を渡しはてて、義貞後に渡る共、何の痛か可ㇾ有とて、先馬弱なる軍勢、手負たる者共を、漸々にぞ被ㇾ渡ける。去程に、水一夜に落て、備前美作の勢馳進りければ、馬筏を組で、六萬餘騎同時に川をぞ渡されける。是までは西國勢共馳參て、十萬騎に餘たりしが、將軍兄弟上洛し給ふ由を聞て、何の間にか落失けん、五月十三日左中將兵庫に著給ける時は、其勢僅に二萬騎にも不ㇾ足けり。

○正成下㆓向兵庫㆒事

尊氏卿、直義朝臣大勢を率して上洛の間、要害の地に於て、防ぎ戰はん爲に、兵庫に引退ぬる由、義貞朝臣早馬を進せて、內裏に奏聞ありければ、主上大に御騷有て、楠判官正成を被ㇾ召て、急ぎ兵庫へ罷下、義貞に力を合せて合戰を可ㇾ致と被ㇾ仰ければ、正成畏て奏しけるは、尊氏卿已に筑紫九國の勢を率して上洛候なれば、定て勢は雲霞の如くにぞ候覽。御方の疲たる小勢を以て、敵の機に乘たる大勢に懸合て、尋常の

まさしきに―まつしぐらに

て、刀を拔て逆手に挙り、甲を枕にして自害したる體に見えてぞ伏たりける。此へ追手に懸りける赤松が勢の大將には、宇彌左衛門次郎重氏とて、和田が親類なりけり。まさしきに辻堂の庭へ馳來て、自害したる敵の首をとらんとて、是を見るに袖に著たる笠符皆下黑の紋也。重氏拔たる太刀を拋て、あら淺猿や、誰やらんと思たれば、兒島、和田、今木の人々にて有けるぞや。此人達と遍知ならば、命に替ても助べかりつる物をと悲て、泪を流して立たりける。和田四郎此聲を聞て、範家此に有とて、かばと起たれば、重氏肝をつぶしながら立寄て、こはいかにとぞ悅ける。軈て和田四郎をば、同道して助おき、備後守をば、葬禮懇に取沙汰して、遺骨を故鄉へぞ送りける。さても八十三騎は討れて、範家一人助りける、運命の程こそ不思議なれ。

○新田殿被レ引二兵庫一事

新田左中將義貞は、備前美作の勢共を待調へん爲に、賀古川の西なる岡に陣を取て、二日までぞ逗留し給ひける。時節五月雨の降つゞいて、河の水増りければ、跡より敵の懸事もこそ候へ。先惣大將又宗徒の人々計は、舟にて向へ御渡候へかしと、諸人口々に

阿彌陀宿―播磨國印南郡に在り、今阿彌陀村といふ其邊に六騎武者塚といふもの範長の古跡なりとぞ

一騎切て落し、二十三騎に手負せ、大勢の圍を破て、濱路を東へぞ落行ける。赤松が勢案内者なりければ、被懸散ながら、前々へ馳過て、落人の通るぞ。打留め物具はげと、近隣傍庄にぞ觸たりける。依之其邊二三里が間の野伏共、二三千人出合て、此の山の陰、彼の田の畔に立渡りて、散々に射ける間、備後守が若黨共、主を落さんが爲に、進では懸破り、引下ては討死し、那波より阿彌陀宿の邊迄、十八度まで戰て落ける間、打殘されたる者、今は僅に主從六騎に成にけり。備後守或辻堂の前にて馬を扣へて、若黨共に向て申けるは、あはれ一族共だに打連たりせば、播磨の國中をば、安く蹴散して通るべかりつる物を、方々の手分に向られて、一族一所に不居つれば、無力範長討るべき時刻の到來しける也。今は可遁共覺ねば、最後の念佛心閑に唱へて、腹を切んと思ぞ。其程敵の近附かぬ樣に防げとて、馬より飛でおり、辻堂の中へ走入、本尊に向ひ手を合せ、念佛高聲に二三百返か程唱て、腹一文字に搔切て、其刀を口に加て、うつぶしに成てぞ伏たりける。其後若黨四人つゞきて自害をしけるに、備後守がいとこに、和田四郎範家と云ける者、暫思案しけるは、敵をば一人も滅したるこそ後までの忠なれ。追手の敵若赤松が一族子共にてや有らん、さもあらば引組で差違へんずる物をと思

福山已に落されぬと聞えければ、三石の勢と成合んが爲に、九日の夜に入て、三石へぞ馳著ける。爰にて人に尋れば、脇屋殿は早宵に播磨へ引せ給て候也と申ける間、さては船坂をば通り得じとて、先日搦手の廻たりし三石の南の山路をたどるたどる終夜越て、さごしの浦へぞ出たりける。夜未深かりければ、此儘少しの逗留もなくて、打て通らば、新田殿には安く追著奉るべかりけるを、子息高德が先の軍に負たりける創未愈けるが、馬に振れけるに依て、目昏肝消て、馬にもたまらざりける間、さごしの邊に相知たる僧の有けるを尋出して、預置ける程に、時刻押遷りければ、五月の短夜明にけり。去程に、此道より落人の通りけると聞て、赤松入道三百餘騎を差遣して、那波邊にてぞ待せける。備後守僅に八十三騎にて、大道へと志て打ける處に、赤松が勢、とある山陰に寄せ合て、落人と見るは誰人ぞ。命惜くば弓をはづし、物具脫で降人に參れと詞をぞかけたりける。備後守是を聞て、からからと打笑ひ、聞も習ぬ言哉。降人に可ㇾ成は、筑紫より將軍の樣々の御敎書を成してすかされし時こそ成んずれ。其をだに引さきて火にくべたりし範長が、御邊達に向て、降人にならんと、えこそ申まじけれ。敵十物具ほしくばいでとらせんと云儘、八十三騎の者共、三百餘騎の中へ喚て懸入り、

さごしの浦—佐越浦、播磨國赤穗郡に在り

大道—播磨國揖保郡大市郷をいふか

其よりも―貴殿の方よりも

打物―刀、太刀、長刀

直義大勢にて、船路と陸路とより上ると云に、若陸の敵を支ん爲に、當國にて相待たば、舟路の敵差違て、帝都を侵さん事疑なし。唯速に西國の合戰を打捨て、攝津國邊まで引退、水陸の敵を一處に待請、帝都を後に當て、合戰を致すべく候、急ぎ其よりも山里邊へ出合れ候へ。美作へも此旨を申遣し候つる也とぞ、被仰たりける。依之五月十八日の夜半計に、官軍皆三石を打捨て、船坂をぞ引れける。城中の勢共是に機を得て、船坂山に出合ひ、道を塞で散々に射る、宵の間の月山に隱れて、前後さだかに見えぬ事なれば、親討れ子討るれども、唯一足も前へこそ行延んとしける處に、菊池が若黨に、原源五源六とて、名を得たる大剛の者有りけるが、態跡に引さがりて、御方の勢を落さんと、防矢をぞ射たりける。矢種皆射盡ければ、打物の鞘をばはづして、傍輩共あらば返せとぞ呼ける。菊池が若黨共是を聞て、遙に落延たりける者共、某此に有と名乘懸て、返合せける間、城よりおり合せける敵共、さすがに近附得ずして、唯餘所の峯々に立渡て、時の聲をぞ作りける。其間に數萬の官軍共、一人も討るゝ事なくして、大江田式部大輔、其夜の曙には、山里へ著にけり。和田備後守範長、子息三郎高徳、佐々木の一黨が舟よりあがる由を聞て、是を防がん爲に、西川尻に陣を取て居たりけるが、

觸穢―身の穢に値ひたるをいふ

て入り、時移るまでぞ闘れける。是も左馬頭にては無りけりとて、大勢の中を颯と懸抜て、御方の勢を見給へば、五百餘騎討れて、僅に四百騎に成にけり。爰にて城の方を遙に觀れば、敵早入替りぬと見えて、櫓搔楯に火を懸たり。式部大輔其兵を一處に集めて、今日の合戰今は是迄ぞ、いざや一方打破て、備前へ歸り、播磨三石の勢と一にならんとて、板倉橋を東へ向て落給へば、敵二千騎三千騎、此彼に道を塞で打留んとす。四百餘騎の者共も、遁ぬ處ぞと思ひ切たる事なれば、近附敵の中へ破て入り、懸散し、板倉河の邊より唐皮迄、十餘度までこそ戰ひけれ。され共兵もさのみ討れず、大將も無レ恙りければ、虎口の難を遁て、五月十八日の早旦に、三石宿にぞ落著ける。左馬頭直義は、福山の敵を追落して、事始よしと悅給事不レ斜。其日一日唐皮宿に逗留有て、首の實檢有けるに、生捕討死の首千三百五十三と註せり。當國の吉備津宮に參詣の志おはしけれ共、合戰の最中なれば、觸穢の憚有とて、唯願書計を被レ籠て、翌日唐皮を立給へば、將軍も舟を出されて、順風に帆をぞあげられける。五月十八日の晩景に、脇屋右衞門佐、三石より使者を以て、新田左中將の方へ立て、福山の合戰の次第、委細に註進せられければ、其使者軈馳返て、白旗、三石、菩提寺城未攻落ざる處に、尊氏

請取て―引受けて
浮矢―中らざる矢
北の尾―北方の麓

城中鳴を靜めて音もせず。さればこそ落たれと覺るぞ。時の聲を擧て、敵の有無を知れとて、三千餘騎の兵共、楯の板を敲き、時を作る事三聲、近附て上んとする處に、城中の東西の木戶口に、太鼓を打て、時の聲をぞ合せたりける。外所に控たる寄手の大勢是を聞て、源氏の大將の籠りたらんずる城の、小勢なればとて、聞落にはよもせじと思つるが、果して未懲たりけるぞ。侮て手合の軍し損ずな。四方を取卷て、同時に攻よとて、國々の勢一方々々を請取て、谷々峯々より攻上りける。城中の者共は、兼てより思儲たる事なれば、雲霞の勢に圍まれぬれ共、少も不騷、此彼の木隱に立隱れて、矢種を不惜散々に射ける間、寄手稻麻の如くに立竝びたれば、浮矢は一も無りけり。敵に矢種を盡させんと、寄手は態射ざりければ、城の勢は未だ一人も不手負。大江田式部大輔是を見給て、さのみ精力の盡ぬさきに、いざや打出て、左馬頭が陣一散し懸散さんとて、城中には徒立なる兵五百餘人を留て、馬强なる兵千餘騎引率し、木戶を開かせ、逆茂木を引のけて、北の尾の殊に嶮き方より、喚てぞ懸出られける。一方の寄手二萬餘騎是に被懸落、谷底に馬を馳こみ、いやが上に重り伏す。式部大輔是をば打捨、東のはなれ尾に、二引兩の旗の見ゆるは、左馬頭にてぞ有らんとて、二萬餘騎控へたる勢の中へ破

一業所感｜同一なる業報を感ぜらるゝこと卽ち同一因果といふに同じ

○備中福山合戰事

福山に楯籠る處の官軍共、此由を聞て、此城未拵るに不レ及、彼に附、此に附、大敵を支ん事は、可レ叶共覺えずと申けるを、大江田式部大輔、且思案して宣ひけるは、合戰の習、勝負は時の運に依といへども、御方の小勢を以て、敵の大勢に鬪はんに、不レ負云事は千に一も有べからず。乍レ去、國を越て足利殿の上洛を支んとて、向ひたる者が、大勢の寄ればとて、聞逃には如何すべき。よしや唯一業所感の者共が、此所にて皆可レ死果報にてこそ有らめ。輕レ死重レ名者をこそ人とは申せ。誰々も爰にて討死して、名を子孫に殘さんと被二思定一候へと、諫められければ、紀伊常陸合田以下は、申にや及候と領掌して、討死を一偏に思儲てげれば、中々心中涼くぞ覺えける。去程に、明れば五月十五日の宵より、左馬頭直義、三十萬騎の勢にて、勢山を打越え、福山の麓四五里が間、數百箇所を陣に取て、篝を燒てぞ居たりける。此勢を見ては、如何なる鬼神ともいへ、今夜落ぬ事はよも非じと覺けるに、城の篝も不二燒止一、猶怺たりと見えければ、夜已に明て後、先備前備中の勢共、三千餘騎にて押寄せ、淺原峠よりぞ懸たりける。是迄も、

徒路―陸路

圓通大士―觀世音のこと

杉原―杉原紙にて奉書紙の類

の奉幣事終て、同五日嚴島を立給へば、伊豫、讃岐、安藝、周防、長門の勢五百餘艘にて馳參る。同七日備後、備中、出雲、石見、伯耆の勢六千餘騎にて馳參る。其外國々の軍勢不レ招に集り、不レ攻に從屬事、唯吹風の草木を靡すに異ならず。新田左中將の勢已に備中、備前、播磨、美作に充滿して、國々の城を攻る由聞えければ、鞆浦より左馬頭直義を大將にて、二十萬騎を差分て、徒路を上せられ、將軍は一族四十餘人、高家一黨五十餘人、上杉の一類三十餘人、外樣の大名百六十人、兵船七千五百餘艘を漕並て、海上をぞ上られける。同五日備後の鞆を立給ひける時、一つ不思議あり。將軍の、屋形の中に少目眠給たりける夢に、南方より光明赫奕たる觀世音菩薩一尊飛來りまし〳〵て、船の舳に立給へば、眷屬の二十八部衆、各弓箭兵仗を帶して、擁護し奉る體にぞ見給ける。將軍夢覺て見給へば、山鳩一つ船の屋形の上にあり。彼此偏に圓通大士の擁護の威を加へて、勝軍の義を可レ得夢想の告也と思召ければ、杉原を三帖、短册の廣さに切せて、自觀世音菩薩と書せ給て、舟の帆柱毎にぞ推させられける。角て舟路の勢、已に備前の吹上に著ければ、歩路の勢は、備中の草壁庄にぞ著にける。

函蓋相應じ ―函と蓋と相應ずる事にて、彼是同一體となる事をいふ

參て申けるは、京都より下されたる敵軍、備中、備前、播磨、美作に充滿して候といへ共、是皆城々を攻兼て、氣疲れ、粮盡たる時節にて候間、將軍こそ大勢にて御上洛候へとだに承及候はゞ、一たまりも怺じと存候。若御進發延引候て、白旗城攻落されなば、自餘の城一日も怺候まじ。四箇國の要害、皆敵の城に成て候はんずる後は、何百萬騎の勢にても御上洛叶まじく候。是則趙王が秦の兵に圍れて、楚の項羽船筏を沈め、釜甑を燒て、戰負けば、士卒一人も生て返らじとせし戰にて候はずや。天下の成功唯此一擧に可ㇾ有にや候者をと、詞を殘さで申ければ、將軍是を聞給て、げにも此議さもありと覺るぞ。さらば夜を日に繼で、上洛を急ぐべし。但九州を一向打捨ては叶まじとて、仁木四郎次郎義長を大將として、大友小貳兩人を留置き、四月廿六日に、太宰府を打立て、同廿八日に順風に纜解て、五月一日安藝の嚴島へ舟を寄られて、三日參籠し給ふ。其結願の日、三寶院の僧正賢俊京より下て、持明院殿より被ㇾ成ける院宣をぞ奉ける。將軍是を拜覽し給て、函蓋相應じて、心中の所願已に叶へり。向後の合戰に於ては、不ㇾ勝と云事有べからずとぞ悅給ける。去四月六日に、法皇は持明院殿にて崩御なりしかば、後伏見院とぞ申ける。彼崩御已前に下し院宣なり。將軍は嚴島

疑勢―見かけの勢

へ申入候也と答ければ、打合ふ數萬の勢共、目出度候と感じて、道を開てぞ通しける。佐重惣大將の侍所長濱が前に跪て、備前國の住人に、美濃權介佐重、三石城より降人に參て候と申ければ、惣大將より、神妙に候と被仰、則著到にぞ被著ける。佐重若干の人を出拔て、其日の命を助かりける、是も暫時の智謀也。船坂已に破れたれば、江田兵部大輔は、三千餘騎にて美作國へ打入て、奈義能仙菩提寺三箇所の城を取卷給ふ。彼城もすべき樣なければ、馬武具を捨て、城に續たる上の山へぞ迯上りける。脇屋右衞門佐義助は、五千餘騎にて、三石城を攻らる。大江田式部大輔は、一千餘騎にて備中國へ打越、福山城にぞ陣を被取ける。

○將軍自筑紫御上洛事　附瑞夢事

多多良濱の合戰の後、筑紫九國の勢、一人として將軍に不從靡と云者無りけり。然共中國に敵陣充滿して道を塞ぎ、東國王化に順て、御方に通ずる者少なかりければ、左右なく京都へ攻上らん事は、如何有べからんと、此春の敗北にこり懼て、諸卒敢て進む擬勢無りける處に、赤松入道が三男則祐律師、竝に得平因幡守秀光、播磨より筑紫へ馳

是を知らざりけるにや、堀切たる處もなく、逆茂木の一本をも引ざりけり。此道餘に木茂て、枝の支へたる處をば、下て馬を引く。山殊に嶮して足もたまらぬ所をば、中々乘て懸下す。兎角して三時計に嶮岨を凌で、三石宿の西へ打出たれば、城中の者も船坂の勢も、遙に是を顧て、思も寄ぬ方なれば、熊山の寄手共が歸たるよと心得て、更に仰天もせざりけり。三百餘騎の勢共、宿の東なる夷社の前へ打寄り、中黑の旗を差上て、東西の宿に火をかけ、鬨をぞ揚たりける。城中の兵は、大略船坂へ差向けぬ。三石に有し勢は、皆熊山へ向ひたる時分なれば、鬪はんとするに勢なく、防がんとするに便なし。船坂へ向ひたる勢、前後の敵に取卷れて、すべき樣もなかりければ、唯馬物具を捨て、城へ續たる山の上へ、はふ〳〵迯上らんとぞ騷ぎける。是を見て、大手搦手差合せて、餘すな漏すなと追懸ける間、迯方を失ける敵共、此彼に行迫て、自害をする者百餘人、生捕らるゝ者五十餘人也。是に備前國一宮の在聽に、美濃權介佐重と云ける者、可引方なくして、已に腹を切らんとしけるが、屹と思返す事有て、脫たる鎧を取て著、捨たる馬に打乘て、向ふ敵の中を推分て、播磨の方へぞ通りける。船坂より打入る大勢共、是は何者ぞと尋ければ、是は搦手の案內者仕る者にて候が、合戰の樣を委く新田殿

一所に弱りて、死ると云事や可有。其程無云甲斐心を以て、此一大事をば思立けるかと、荒らかに恥しめける間、高徳忽に生出て、我を馬に舁乗よ、今一軍して敵を追拂はんとぞ申ける。父大に悦で、今は此者よも死なじ。いざや殿原、爰らに有つる敵共追散さんとて、今木太郎範秀、舍弟次郎範仲、中西四郎範顯、和田五郎範氏、松崎彦五郎範家、主従十七騎にて、敵二百騎が中へ、まつしぐらに懸入ける間、石戸是を小勢とは知ざりけるにや、一立合せも立合せず、南面の長阪を、福岡までこそ引たりけれ。其儘兩陣相支て、互に軍もせざりけり。相圖の日にも成ければ、脇屋右衞門佐を大將として、梨原へ打莅み、二萬騎の勢を三手に分たり。一手には江田兵部大輔を大將として、二千餘騎杉阪へ向らる。是は菅家南三郷の者共が固たる所を追破て、美作へ入ん爲也。一手には大江田式部大輔氏經を大將として、菊池宇都宮が勢五千餘騎を、船坂へ差向らる。是は敵を爰に遮留て、搦手の勢を潛に後より廻さん爲也。一手には伊東大和守を案内者として、頓宮六郎、畑六郎左衞門、當國の目代少納言範猷、由良新左衞門、小寺六郎、三津澤山城權守以下、態小勢を勝て、三百餘騎向らる。其勢皆轡の七寸を紙を以て巻て、馬の舌根を結たりける。杉坂越の北、三石の南に當て、鹿の渡る道一あり。敵

轡の七寸—手綱の端を受くる轡の孔をいふ

萬方―凡ての方面

そ取上りけれ。如レ案三石船坂の勢共是を聞て、國中に敵出來なば、ゆゝしき大事なるべし。萬方を閣て、先熊山を攻よとて、船坂三石の勢三千餘騎を引分て、熊山へぞ向たりける。彼熊山と申は、高さは比叡山の如くにして、四方に七の道あり。其路何も麓は少し嶮して、峯は平なり。高徳僅の勢を七の道へ差分て、四方の敵をぞ防ぎける。追下せば攻上り、攻上れば追下し、終日戰暮して、態時をぞ移しける。夜に入ける時、寄手の中に、石戸彦三郎とて、此山の案内者有けるが、思も寄ぬ方より拔入て、本堂の後なる峯にて、鬨をぞ揚たりける。高徳四方の麓へ勢を皆分て遣ぬ。僅に十四五騎にて、本堂の庭に控たりけるが、石戸が二百騎の中へ喚て懸入り、火を散てぞ戰ひける。深山の木隱れ月暗して、敵の打太刀分明にも見えざりければ、高徳が内冑を突れて、馬より倒に落にけり。敵二騎落合て首を取んとしける處へ、高徳が甥松崎彦四郎、和田四郎馳合て、二人の敵を追拂ひ、高徳を馬に引乘せて、本堂の縁にぞ下しける。高徳は内冑の創痛手也ける上、馬より落ける時、胸板を馬に強く蹈れて、目昏魂消ければ、暫絶入たりけるを、父備後守範長、枕の下に差寄て、昔鎌倉權五郎景政は、左の眼を射拔れ、三日三夜まで其矢を拔かで、當の矢を射たりとこそ云傳へたれ。是程の小創

案内を通ずる―事情を告げ越す

歟。高德來十八日當國於二熊山一可レ擧二義兵一候。さる程ならば、船坂を固たる凶徒等、定て熊山へ寄來候はん歟。敵の勢のすきたる隙を得て、御勢を二手に分られ一手をば船坂へ差向て、可レ攻勢を見せ、一手をば、三石山の南に當て、樵の通ふ路一つ候なる、潛に廻せて、三石宿より西へ被レ出候はゞ、船坂の敵前後を被レ裹、定て引方を失候はんか。高德國中に旗を擧、船坂を先破り候はゞ、西國の軍勢御方に參ずと云者候べからず。急ぎ此相圖を以て、御合戰有べく候也とぞ申送ける。其比播磨より西長門國に至まで、悉く敵陣にて、案内を通ずる者もなきに、高德が使者來て、企の樣を申ければ、新田殿悅給ふ事不レ斜。則相圖の日を定て、其使をぞ被レ返ける。使者備前に歸て、相圖の樣を申ければ、四月十七日の夜半計に、兒島三郞高德己が館に火をかけて、僅に二十五騎にてぞ打出ける。國を阻、境を隔たる一族共は、事急なるに依て不レ及二相催一、近邊の親類共に、事の仔細を告たりければ、今木、大富、和田、射越、原、松崎の者共、取物も不レ取敢一、馳著ける間、其勢二百餘騎に成にけり。兼ては夜中に熊山へ取上り、四方に篝火を燒て、大勢籠りたる勢を敵にみせんと巧たりけるが、馬よ物具よとひしめく間に、夏の夜程なく明けれども、無レ力相圖の時刻を違じとて、熊山へこ

羊腸－坂路の曲折したるをいふ

窈溟－深く遠く朦々としたる貌

著け、推て筑紫へ御下候へかしと被レ申ければ、左中將此議尤宜覺候とて、頓て宇都宮と、菊池が勢を差副、伊東大和守、頓宮六郎を案内者として、二萬餘騎船坂山へぞ向られける。彼山と申は、山陽道第一の難處也。兩方は嶺峨々として、中に一の細道あり。谷深石滑にして、路羊腸を踐で上る事二十餘町、雲霧窈溟たり。若一夫怒臨レ關、萬侶も難レ得レ通。況や岩石を穿て細橋を渡し、大木を倒して逆茂木に引たれば、如何なる百萬騎の勢にても、攻破るべしとは見えざりけり。去ば指も勇める菊池宇都宮が勢も、麓に控へて不二進得一。案内者に憑れたる伊東頓宮の兵共も、山をのみ向上て、徒に日をぞ送ける。

○兒島三郎熊山擧レ旗事　附船坂合戰事

斯りける處に、備前國の住人兒島三郎高德、去年の冬細川卿律師、四國より攻上し時、備前、備中數箇度の合戰に打負て、山林に身を隱し、會稽の恥を雪がんと、義貞朝臣の下向を待て居たりけるが、船坂山を官軍の越かねたりと聞て、潛に使を新田殿の方へ立て申けるは、船坂より御勢を可レ被二越一由承及候。事實に候はゞ、彼要害輒く難レ被レ破候

手の裏返す―容易に反覆する
王事毋盬―王事は大切のもの也故に王事につとめて私なきをいふ

國の守護國司をば、將軍より給て候間、手の裏を返す樣なる綸旨をば、何かは仕候べきと、嘲哢してこそ返されけれ。新田左中將是を聞給て、王事毋盬、縱ひ恨を以て朝敵の身になる共、藏天欺天命哉。其儀ならば、爰にて數月を送る共、彼が城を攻落さでは通るまじとて、六萬餘騎の勢を以て、白旗城を百重千重に取圍て、夜晝五十餘日、息をも不繼攻たりけり。斯りけれ共、此城四方皆嶮岨にして、人の上るべき樣もなく、水も兵粮も卓山なる上、播磨美作に名を得たる射手共、八百餘人迄籠りたりける間、攻れども〳〵、唯寄手手負討るゝ計にて、城中恙なかりけり。脇屋右衞門佐是を見給て、左中將に向て被申けるは、先年正成が籠りたりし金剛山城を、日本國の勢共が攻兼て、結句天下を覆されし事は、先代の後悔にて候はずや。纔の小城一に取懸りて、そゞろに日數を送り候はゞ、御方の軍勢は、皆兵粮に疲、敵陣の城は、彌強り候はんか。其上尊氏已に筑紫九國を平げて、上洛する由聞え候へば、彼が近附ぬ前に、備前、備中を退治して、安藝、周防、長門の勢を被著候はでは、ゆゝしき大事に及候んとこそ覺候へ。乍去今迄攻懸たる城を落さで引は、天下の嘲共成べく候へば、御勢を少々被殘、自餘の勢を船坂へ差向られ、先山陽道の路を開て、中國の勢を

○新田左中將被レ攻二赤松一事

去程に、左中將義貞の病氣能成てげれば、五萬餘騎の勢を率して、西國へ下給ふ。後陣の勢を待調へん爲に、播磨國賀古河に四五日逗留有ける程に、宇都宮治部大輔公綱、紀伊常陸守、菊池次郎武季三千餘騎にて下著す。其外攝津國、播磨、丹波、丹後の勢共、思々に馳參じける間、無レ程六萬餘騎に成にけり。さらば軈赤松が城へ寄て可レ攻とて、斑鳩宿迄打寄せ給たりける時、赤松入道圓心、小寺藤兵衛尉を以て、新田殿へ被レ申けるは、圓心不肖の身を以て、元弘の初大敵に當り、逆徒を攻却候し事、恐は第一の忠節とこそ存候しに、恩賞の地、降參不義の者よりも猶賤く候し間、一旦の恨に依て、多日の大功を捨候き。乍レ去兵部卿親王の御恩、生々世々難レ忘存候へば、全く御敵に屬し候事、本意とは不レ存候。所詮當國の守護職をだに、綸旨に御辭狀を副て下し給り候はゞ、如レ元御方に參て、忠節を可レ致にて候と申たりければ、義貞是を聞給て、此事ならば仔細あらじと被レ仰て、頓て京都へ飛脚を立、守護職補任の綸旨をぞ申成れける。其使節往反の間、已に十餘日を過ける間に、圓心城を拵すまして、當

の國を傾くといふことより美人をいふ

瘧病—おこりの病

羽書—羽檄ともいひ急の書状

内藤、頓宮、松田、福林寺の者共、石橋左衛門佐を大將として、甲斐河、三石、二箇處の城を構て、船路陸路を支んとす。備中には、庄、眞壁、陶山、成合、新見、多地部の者共、勢山を切塞で、鳥も翔らぬ樣に構へたり。是より西、備後、安藝、周防、長門は申に不レ及、四國九州も、悉著では叶まじかりければ、將軍方に無レ志も、皆從ひ不レ靡と云事なし。處々の城郭、國々の蜂起、夥く京都へ聞えければ、先東國を敵に成ては叶まじとて、北畠源中納言顯家卿を、鎭守府將軍になして、奥州へ下さる。新田左中將義貞には、十六箇國の管領を被レ許、尊氏追討の宣旨をぞ被レ成ける。義貞綸命を蒙て、已に西國へ立んとし給ける刻、瘧病の心地煩しかりければ、先江田兵部大輔行義、大館左馬助氏明二人を、播磨國へ被二差下一。其勢二千餘騎、三月四日京を立て、同六日書寫坂本に著にけり。赤松入道是を聞て、敵に足をためさせては叶まじとて、備前播磨兩國の勢を合て、書寫坂本へ押寄ける間、江田、大館、室山に出向て相戰ふ。赤松軍利無して、官軍勝に乘しかば、江田、大館勢を得て、西國の退治輒かるべき由、頻に羽書を飛せて京都へ注進す。

勾當内侍—首席の内侍

傾城傾國—漢武帝の事李夫人一顧すれば人の城を傾け再顧すれば人

名附らる。

君が代は二萬の里人數添て、絶ず備る御貢物哉。

と周防内侍が讀たりしも、此心にて候也と、和漢兩朝の例を引て、武運の天に叶へる由を申ければ、將軍を始まゐらせて、當坐の人々も皆歡喜の笑をぞ含まれける。

○西國蜂起官軍進發事

去程に、將軍筑紫へ沒落し給し刻、四國西國の朝敵共、氣を損じ、度を失て、或は山林に隱れ、或は所緣を尋て、新田殿の御教書を賜らぬ人は無りけり。此時若義貞早速に被下向たらましかば、一人も降參せぬ者は有まじかりしを、其比天下第一の美人と聞えし勾當内侍を内裏より賜りたりけるに、暫が程も別を悲て、三月の末迄、西國下向の事被延引けるこそ、誠に傾城傾國の驗なれ。依之丹波國には、久下、長澤、荻野、波々伯部の者共、仁木左京大夫賴章を大將として、高山寺城に楯籠り、播磨國には赤松入道圓心、白旗峯を城郭に構て、討手の下向を支んとす。美作には、菅家、江見、弘戸の者共、奈義、能仙、菩提寺の城を拵へて、國中を掠領す。備前には、田井、飽浦

き、言を巧にして人を害するをいふ

笑の中に刀を礪—是又表面に笑顔をなして害心を蓄ふるをいふ

宗廟—天子祖先の靈屋

る野心を插でか、一軍もせず降人には出たるらん。信心眞有時は、感應不思議を顯事あり。今御方の小勢を大勢と見し事、不審無に非ず。相構て面々心赦有べからずと仰ければ、遙の末座に候ける高駿河守、進出で申けるは、誠に人の心の測り難事は、天よりも高地よりも厚と申せども、斯樣の大義に於ては、餘に人の心を御不審有ては、爭か早速の大功を成候べき。就中御勢の多見えて候ける事、例無にも有べからず。其故は、昔唐朝に、玄宗皇帝の左將軍に歌舒翰與逆臣安祿山兵崔乾祐、潼關にて戰けるに、黃なる旗を差たる兵十萬餘騎、忽然として官軍の陣に出來れり。崔乾祐此を見て、敵大勢なりと思ひ、兵を引て四方に逃散る。其喜に勅使宗廟に詣けるに、石人とて石にて作並て廟に置たる人形共、兩足泥に觸れ、五體に矢立てり。さてこそ黃旗の兵十萬餘騎は、宗廟の神官軍に化して、逆徒を退け給たりけりと、人皆疑を散じけり。吾朝には、天武天皇與大友王子、天下を爭はせ給ける時、備中國二萬鄕と云所にて、兩方の兵戰を決せんとす。于時天武天皇の御勢は、僅に三百餘騎、大友王子の御勢は、一萬餘騎也。勢の多少更に鬪ふべくも無りける處に、何より來れる共知ぬ爽かなる兵二萬餘騎、天皇の御方に出來て、大友王子の御勢を十方へ懸散す。此よりして其所を二萬里と

言の下に骨を消し—史記に衆口鑠金積毀銷骨とあるに基

はじと思ふ心附て、一軍をもせず、旌を捲冑を脱で、降人に出にけり。菊池此を見て彌、難儀に思ひ、大勢の懸らぬ先にと、急ぎ肥後國へ引返す。將軍則一色太郎入道道猷、仁木四郎次郎義長を差遣し、菊池が城を攻させらるゝに、一日も堪得ず、深山の奥へ逃籠る。是より軈同國八代城を攻て、内河彦三郎を追落す。此のみならず、阿蘇大宮司八郎惟直は、先日多多良濱の合戰に、深手負たりけるが、肥前國小杵山にて自害しぬ。其弟九郎は知ぬ里に行迷て、卑き田夫に生擒れぬ。秋月備前守は、太宰府迄落たりけるが、一族二十餘人一所にて討れにけり。是等は皆一方の大將共なり。又九州の強敵ともなりぬべき者也しが、天運時至されば、斯樣に皆滅されにけり。爾より後は、九國二島悉將軍に附從奉ずと云者なし。此全く菊池が不覺にも非ず、又直義朝臣の謀にも依らず、啻將軍天下の主と成給ふべき過去の善因催して、靈神擁護の威を加へ給しかば、不慮に勝ことを得て、一時に靡從けり。今まで大敵なりし松浦神田の者共、將軍の小勢を大勢也と見て、降人に參たりと其聞有ければ、將軍高上杉の人々に向て宣けるは、言の下に骨を消し、笑の中に刀を礪は、此比の人の心也。されば小貳が一族共は、多年の恩顧なりしか共、正く小貳を討つるも遠からぬ例ぞかし。此を見るにも、松浦神田如何な

仰たる太刀—反つたる太刀
參然として—蔟り立つて

誰が射とも不レ知、白羽の流鏑矢敵の上を鳴響て、落所も見えず。左馬頭の兵共、是は直事に非と憑敷思、勇を不レ成と云者なし。兩陣相挑で、未兵刃を交へざる處に、菊池が兵、黄河原毛なる馬に、緋威の鎧著たる武者唯一騎、御方の勢に三町餘先立て、拔懸にぞしたりける。爰に曾我左衛門、白石彦太郎、八木岡五郎、三人共に馬物具も無て、眞前に進だりけるが、見レ之、白石立向て、馬より引落さんと、手もと近く寄副ければ、敵太刀を捨て、腰刀を拔んと、一そり反りけるが、眞倒に成て落にけり。白石此を起も立ず、抑て首をば搔てけり。馬をば曾我走寄て打乘り、鎧をば八木岡剝取て著たりけり。白石が高名に、二人得レ利、纔三人共に敵の中へ打入れば、仁木、細川以下、御方討すな連やとて大勢の中へ懸入て、亂合てぞ鬭ける。仁木越後守は、近附敵五騎切て落し、六騎に手負せて、猶敵の中に乍レ有、仰たる太刀を蹈直しては切合ひ、命を限とぞ見えたりける。されば百五十騎參然として堅を破れば、菊池が勢誠に百倍せりといへども、僅の小勢に懸立られて、一陣の軍兵三千餘騎、多々良濱の遠干潟を、二十餘町までぞ引退ける。搦手に廻ける松浦神田の者共、將軍の御勢の僅に三百餘騎にも足ざりけるを、二三萬騎に見なし、磯打浪の音をも敵の時の聲に聞なしければ、纔に叶

瑞相—めでたき前表

射向の袖—鎧の左の袖

五尺六寸を云々—太刀を切斷して剃刀となし剃髪出家せよと嘲りたる也

今迄附纏て、我等が前途を見はてんと思へる一人當千の勇士なれば、一人も敵に後を見せ候はじ。此三百騎志を同する程ならば、などか敵を追拂はで候べき。御自害の事曾て有べからず。先直義馳向て、一軍仕て見候はんと申捨て、左馬頭香椎宮を打立給へば、相從人々には、仁木四郎次郎義長、細川陸奥守顯氏、高豐前守師重、大高伊豫守重成、南遠江守宗繼、上杉伊豆守重能、畠山阿波守國淸を始として、大伴、島津、曾我、白石、八木岡、饗庭を宗徒の兵として、都合其勢二百五十騎、三萬餘騎の敵に懸合せんと志して、命を塵芥に思ける心の程こそ優けれ。直義已に旌の手を下し、社壇の前を打過給ひける時、烏一番杉の葉を一枝噬て、冑の上へぞ落しける。左馬頭馬より下て、是は香椎宮の擁護し給ふ瑞相也と敬禮して、射向の袖にぞ差れける。敵御方相近附て、時の音を揚んとしける時、大高伊豫守重成は、將軍の後陣の餘に無勢に候へば、歸參候はんとて引返しけり。直義是を見て、始よりこそ留るべきに、敵を見て引返すは、臆病の至也。あはれ大高が五尺六寸を五尺切てすて、剃刀にせよかしとぞ欺れける。去程に、菊池五千餘騎を率し、濱の西より相近附て、先矢合の流鏑をぞ射たりける。左馬頭の陣よりは、矢の一筋をも射ず、鳴を閑めて、透間あらば切懸んと、伺見給ひけるに、

蚍蜉動大樹云々―力の及ばざる事をいふ。蚍蜉は大なる蟻、螳蜋はかまきり

る。

○多々良濱合戰事 附高駿河守引例事

小貳が城已に攻落されて、一族若黨百六十五人一所にて討れければ、菊池彌大勢に成て、頓て多々良濱へぞ寄懸ける。將軍は香椎宮に取上て、遙に菊池が勢を見給ふに、四五萬騎も有らんと覺敷、御方は僅に三百騎には過ず、而も半は馬にも乘ず、鎧をも著ず、此兵を以て彼大敵に合ん事、蚍蜉動大樹、螳螂遮隆車不異。愁なる軍して、云甲斐なき敵に合んよりは腹を切んと、將軍は被仰けるを、左馬頭直義堅く諫申れけるは、合戰の勝負は必しも大勢小勢に依べからず。異國に漢高祖滎陽の圍を出時は、僅に二十八騎に成しかども、遂に項羽が百萬騎に討勝て、天下を保てり。我朝の近比は、右大將頼朝卿土肥の杉山の合戰に打負て、伏木の中に隱し時は、僅に七騎に成て候しか共、終に平氏の一類を亡して、累葉久く武將の位を續候はずや。二十八騎を以て百萬騎の圍を出、七騎を以て伏木の下に隱れし機分、全く臆病にて命を捨兼しには非ず、唯天運の保べき處を恃し者也。今敵の勢誠に雲霞の如しといへども、御方の三百餘騎は、

手合の合戰—取くみの合戰

悲想悲々想天—三界の最頂、卽ち無色界の第四天處也

下火—火葬の時火をつくる僧の役名

無ぞ無念なる。遂に船共近邊に見えざりければ、忿を推て將軍へぞ參ける。菊池は手合の合戰に打勝て、門出吉と悅で、頓て其勢を率し、小貳入道妙慧が楯籠たる内山城へぞ推寄ける。小貳宗徒の兵をば、皆賴尙に附て、其勢過半水木渡にて討れぬ。城に殘勢僅に三百人にも足ざりければ、菊池が大勢に可レ叶とも覺えず。されども城の要害緊しかりければ、切岸の下に敵を直下して、防戰事數日に及べり。菊池新手を入替入替、夜晝十方より攻けれ共、城中の兵一人も討れず、矢種も未盡ざりければ、いかに攻るとも不レ落物をと思ける處に、小貳が一族等俄に心替して、詰の城に引上り、中黑の旗を擧て、我等聊所存候間、宮方へ參候也。御同心候べしやと、妙慧が方へ云遣しければ、一言の返答にも及ばず、苟も存て義無らんよりは、死して名を殘さんには不レ如と云て、持佛堂へ走入、腹搔切て伏にけり。郞等百餘人も、堂の大床に竝居て、同音に聲を出し、一度に腹をぞ切たりける。其聲天に響て、悲想悲々想天迄も聞えやすらんと夥し。小貳が最末の子に、宗應藏主と云僧、蔀遣戶を蹈破て薪とし、父が死骸を葬して、萬里碧天風高月明。爲問慧公行脚事、蹈二翻白刃一轉レ身行。下火云、猛火重燒一段淸と、閑に下火の佛事をして、其炎の中へ飛入て、同く死にぞ赴け

斯處に、宗像大宮司使者を進せて、御座の邊は餘に分内狹て、軍勢の宿なんども候はねば、恐ながら此弊屋へ御入有て、暫く此間の御窮屈を息られ、國々へ御教書を成れて、勢を召れ候べしと申ければ、將軍軈て宗像が館へ入せ給ふ。次日小貳入道妙慧が方へ、南遠江守宗繼、豐田彌三郎光顯を兩使として、恃べき由を宣遣されければ、小貳入道仔細に及ばず、軈嫡子の太郎頼尙に、若武者三百騎差添て、將軍へぞ進せける。

○小貳與二菊池一合戰事　附宗應藏主事

菊池掃部助武俊は、元來宮方にて、肥後國に有けるが、小貳が將軍方へ參由を聞て、道にて討散さんと、其勢三千餘騎にて、水木渡へぞ馳向ける。小貳太郎は、夢にも是を知ずして、小船七八艘に込乘て、我身は先向の岸に著く。時籠豐前守以下は未レ越、控て船の指し戻す間を相待ける處に、菊池が兵三千餘騎、三方より推寄て、河中へ追ばめんとす。時籠が兵百五十騎、とても遁れぬ所也と、一途に思定て、菊池が大勢の中へ懸入て、一人も不レ殘討死す。小貳太郎は川向より是を見けれ共、大河を中に隔て、舟ならでは渡べき便も無ければ、徒に恃切たる一族若黨共を敵に取籠させける心中、道方

轍魚―車のわだちの跡の少水に住める魚、此の句は甚窮したることを譬ふ

○將軍筑紫御開事

建武三年二月八日尊氏卿兵庫を落給ひし迄は、相從ふ兵僅七千餘騎有しか共、備前の兒島に著給ける時、京都より討手馳下らば、三石邊にて支よとて、尾張左衞門佐氏賴を、田井、飽浦、松田、内藤に附て留められ、細川卿律師定禪、同刑部大輔義敦をば、東國の事無㆓心元㆒とて返さる。其外の勢共は、各暇申て、己が國々に留りける間、今は高、上杉、仁木、畠山、吉良、石堂の人々、武藏相摸勢の外は、相隨兵も無りけり。筑前國多々良濱湊に著給ひける日は、其勢僅に五百人にも足ず、矢種は皆打出瀬川の合戰に射盡し、馬物具は悉兵庫西宮の渡海に脫捨ぬ。氣疲れ、勢盡ぬれば、轍魚の泥に吻き、窮鳥の懷に入し風情して、知らぬ里に宿を問ひ、狎れぬ人に身を寄れば、朝の食飢渴して、夜の寢覺蒼々たり。何の日か誰と云ん敵の手に懸てか、魂浮れ骨空して、天涯望鄕の鬼と成んずらんと、明日の命をも憑れねば、無端思はぬ人も無りけり。

りしかども、勅勘を蒙り、神職を被レ解て、貞久に被レ補。其後天下大に亂て、一君三たび天位を易させ給しかば、基久貞久、僅に三四年が中に、三度被二改補一。夢幻の世の習、今に始ぬ事とは云ながら、殊更身の上に被レ知たる世の哀に、よしや今は兎ても角てもと思ければ、

うたゝねの夢よりも尚化なるは、此比見つる現なりけり。

と、基久一首の歌を書留めて、遂に出家遁世の身とぞ成にける。

瀧口—禁衛の武官

おやしさけずば—親が遠ざけぬならばの意、しは強辭

と、此御歌を見て、女そゞろに心あこがれぬと覺て、手に持ながら詠じ伏たりければ、早何をかと可ㇾ云程もなければ、帥宮の御使、そゞろに獨笑して歸參ぬ。頓て其夜の深過る程に、牛車さわやかに取まかなひて、御迎に參りたり。瀧口なりける人、中門の傍にやすらひかねて、夜もはや丑三に成ぬと急げば、女下簾を褰させて、被㆓扶乘㆒としける處に、父の基久外より歸りまうで來て、是はいづ方へぞと問に、母上帥宮召有てと聞ゆ。父痛く留て、事の外なる態をも計ひ給ひける者哉。伏見宮は春宮に立せ給べき由、御沙汰あれば、其御方へ參てこそ、深山隱の老木迄も、花さく春にも可ㇾ逢に、行末とても憑なき帥宮に參り仕へん事は、誰が爲とても可ㇾ待方や有と云留めければ、母上げにやと思返す心に成にけり。瀧口は角ともしらで、簾の前によりゐて、月の傾きぬる程を申せば、母上出合て、唯今俄に心地の例ならぬ事侍れば、後の夕をこそと申て、御車を返してけり。帥宮かゝる事侍とは、露もおぼしよらず、さのみやと今日の憑に昨日の憂さを替て、度々御使有けるに、思の外なる事候て、伏見宮の御方へ參りぬと申ければ、おやしさけずは、東路の佐野の船橋さのみやは、堪ては人の戀渡るべきと、思ひ沈ませ給にも、御憤の末深かりければ、帥宮御治世の初、基久指たる咎は無

醐天皇
あてやかに艶し—上品に美し
たらちめ—母親
くゆる—燻する
かをり返りたる—色のさめたる

附け、萱の末葉に結ぶ露のかごとに寄せては、いひしらぬ御文の數、千束に餘る程に成にけり。女も最物わびしう哀なる方に覺えけれども、吹も定ぬ浦風に靡きはつべき煙の末も、終にはうき名に立ぬべしと、心强き氣色をのみ關守になして、早三年を過にけり。父は賤して母なん藤原なりければ、無止事御子達の御覺は等閑ならぬを聞て、などや今迄御いらへをも申さではやみにけるぞと、最痛う打侘ぶれば、御消息傳へたる二人の媒、次よしと思て、たらちめの諫も、理にこそ侍るめれ。早一方に御返事をと、かこち顏也ければ、女云ばかりなく打侘て、いさや我とは爭でか分く方可侍。ただ此度の御文に、御歌の最哀に覺え侍らん方へこそ參らめと云て、少し打笑ぬる氣色を、二人の媒嬉しと聞て、急ぎ宮々の御方へ參て、かくと申せば、頓て伏見宮の御方より、取手もくゆる計にこがれたる紅葉重の薄樣に、何よりも言の葉過て、哀なる程なり。

　思ひかね云んとすればかきくれて、泪の外は言の葉もなし。

と被遊たり。此上の哀誰かと思へる處に、帥宮御文あり。是は指も色深からぬ花染のかをり返たるに、言は無て、

　數ならぬみのゝを山の夕時雨、强面松は降かひもなし。

の元首卽ち天子

玉妃—揚貴妃をさす、太眞は楊貴妃の名

優婆塞宮—源氏物語に見えたる八宮の事にて、すさみ給ひしは琵琶也

先帝—後醍

り。中にも賀茂社の神主職は、神職の中の重職として、恩補次第ある事なれば、咎無しては改動の沙汰も難有事なるを、今度尊氏卿貞久を改て、基久に被補任、彼眉を開く事、僅に二十日を不過、天下又反覆せしかば、公家の御沙汰として、貞久に被返附。此事今度の改動のみならず、兩院の御治世替る毎に、轉變する事、掌を反すが如し。其逆鱗何事の起ぞと尋ぬれば、此基久に一人の女あり。被養て深窻に在し時より、若紫の匂殊に、初本結の寢亂髪、末如何ならんと見るに、心も迷ぬべし。齡已に二八にも成しかば、巫山の神女雲と成し夢の面影を留め、玉妃の太眞院を出し春の媚を殘せり。唯容色嬋娟の世に勝たるのみに非ず、小野小町が弄し道を學び、優婆塞宮のすさみ給し跡を追しかば、月の前に琵琶を彈じては、傾く影を招き、花の下に歌を詠じては、うつろふ色を悲めり。されば其情を聞き、其貌を見る人毎に、意を不悩と云事なし。其比先帝は未帥宮にて、幽かなる御棲居也。是は後宇多院第二の皇子後醍醐天皇と申し御事也。今の法皇は、伏見院第一の皇子にて、既に春宮に立せ可給と云、時めき合へり。此宮々、如何なる玉簾の隙にか被御覽たりけん、此女最あてやかに﨟しとぞ被思召ける。されども、一向なる御業は如何と思召煩て、荻の葉に傳ふ風の便に

五刑―笞杖徒流死の刑

除目―任官の式

一元―一人

けり。同八日義貞朝臣、豐島打出の合戰に打勝て、則朝敵を萬里の波に漂せ、同く降人の五刑の難を宥て、京都へ歸給ふ。事の體ゆゝしくぞ見えたりける。其時の降人一萬餘騎、皆元の笠符の紋を書直して著たりけるが、墨の濃き薄き程見えて、あらはにしるかりけるにや、其次の日、五條の辻に高札を立て、一首の歌をぞ書たりける。

二筋の中の白みを塗隱し、新田新田しけな笠符哉。

都鄙數箇度の合戰の體、君殊に叡感不ㇾ淺、則臨時除目を被ㇾ行て、義貞を左近衛中將に被ㇾ任、義助を右衛門佐に被ㇾ任けり。天下の吉凶必しも是にはよらぬ事なれども、今の建武の年號は、公家の爲不吉也けりとて、二月二十五日に改元有て、延元に被ㇾ移。近日朝廷已に逆臣の爲に傾られんとせしか共、無ㇾ程靜謐に屬して、一天下又泰平に歸せしかば、此君の聖德天地に叶へり。如何なる世の末までも、誰かは傾け可ㇾ申と、群臣いつしか危を忘れて、愼む方の無かりける、人の心ぞ愚なる。

○賀茂神主改補事

大凶一元に歸して、萬機の政を新にせられしかば、愁を含み、喜を懷く人多かりけ

のゝめき立て―聲高にさわぎ立て

心づくし―心をつくすといふことに筑紫の意を兼れたる也

京都を被ㇾ攻候はんに、何程の事か候べきと申ければ、將軍げにもとや思召けん、軈て大伴が舟にぞ乘給ひける。諸軍勢是を見て、すはや將軍こそ御舟に被ㇾ召て落させ給へと、のゝめき立て、取物も取不ㇾ敢、乘おくれじとあわて騷ぐ。舟は僅に三百餘艘也。乘んとする人は二十萬騎に餘れり。一艘に二千人計こみ乘ける間、大船一艘乘沈めて、一人も不ㇾ殘失にけり。自餘の舟共是を見て、さのみは人を乘せじと、纜を解て差出す。乘後れたる兵共、物具衣裳を脱捨て、遙の澳に游出て、船に取著んとすれば、太刀長刀にて切殺し、櫓かいにて打落す。乘得ずして渚に歸る者は、徒に自害をして、磯越す波に漂へり。尊氏卿は福原の京をさへ被ㇾ追落て、長汀の月に心を傷しめ、曲浦の波に袖を濡して、心づくしに漂泊し給へば、義貞朝臣は、百戰の功を高して、數萬の降人を召具し、天下の士卒に將として、花の都に歸給ふ。憂喜忽に相替て、うつゝもさながら夢の如くの世に成にけり。

○主上自二山門一還幸事

去月晦日逆徒都を落しかば、二月二日主上自二山門一還幸成て、花山院を皇居に被ㇾ成に

機を礪―氣を引立つる也

葉武者―身分輕き武者

御開き候へ―御立退あるべし

互に兵を進めて、小清水の邊に馳向。將軍方は、目に餘る程の大勢なりけれども、日比の兵、新手にせさせんとて、軍をせず。厚東、大伴は、又强に我等計が大事に非ずと思ければ、さしも勇める氣色もなし。宮軍方は、並べて可レ云程もなき小勢なりけれども、元來の兵は、是人の大事に非ず、我身の上の安否と思ひ、新手の土居、得能は、今日の合戰無云甲斐しては、河野の名を可レ失と、機を礪、心を勵せり。されば兩陣未鬪はざる前に、安危の端、機に顯れて、勝負の色、暗に見たり。されども新手の驗なれば、大伴、厚東、大内が勢三千餘騎、一番に旗を進めたり。土居、得能後へつと懸拔て、左馬頭の控へ給へる打出宿の西の端へ懸通り、葉武者共に目な懸そ。大將に組めと下知して、風の如くに散じ、雲の如くに集て、喚いて懸入、懸入ては戰ひ、戰うては懸拔け、千騎が一騎に成迄も、引なと互に恥めて、面も不レ振鬪ひける間、左馬頭叶はじとや被レ思けん、又兵庫を指して引給ふ。千度百度戰へども、御方の軍勢の軍したる有樣、見るに可レ叶とも覺ざりければ、將軍も早退屈の體見え給ける處へ、大伴參て、今の如くにては、何としても御合戰よかるべしとも覺候はず。幸に船共多數候へば、唯先筑紫へ御開き候へかし。小貳筑後入道も御方にて候なれば、九國の勢多く屬進せ候はゞ、頓て大軍を動て、

旅屯す―軍勢を陣取らす

原にてぞ行合ける。互に旗手を下して、東西に陣を張り、南北に旅屯す。奥州國司まづ先に渡り合て軍利あらず、引退て息を繼ば、宇都宮入替て、一面目に備んと攻戰ふ。其勢二百餘騎被レ討て引退けば、脇屋右衛門佐二千餘騎にて入替たり。敵には仁木、細川、高、畠山、先日の恥を雪めんと命を棄て戰ふ。官軍には江田、大館、里見、鳥山、此を被レ破ては、何へか可レ引と、身を無に成てぞ防ぎける。されば互に死を輕ぜしかども、遂に雌雄を不レ決して、其日は戰暮てけり。爰に楠判官正成後馳にて下りけるが、合戰の體を見て、面よりは不レ懸、神崎より打廻て、濱の南よりぞ寄たりける。左馬頭の兵、終日の軍に戰くたびれたる上、敵に後をつゝまれじと思ければ、一戰もせで、兵庫を指て引退く。義貞頓て追懸て、西宮に著給へば、直義は猶相支て、湊河に陣をぞ被レ取ける。同七日の朝なぎに、遙の澳を見渡せば、大船五百餘艘、順風に帆を揚て、東を指て馳たり。何方に屬勢にかと見る處に、二百餘艘は、檝を直して兵庫の島へ漕入る。三百餘艘は帆をついて、西宮へぞ漕寄せける。是は大伴、厚東、大内介が、將軍方へ上りけると、伊豫の土居、得能が、御所方へ參りけると漕連て、昨日迄は同湊に泊たりしが、今日は兩方へ引分て、心々にぞ著たりける。新手の大勢兩方へ著にければ、

大樹—將軍のこと

其事と無く—別段これと云ふ事もなく

を案ずるに、唯尊氏一向朝敵たる故也。されば如何にもして持明院殿の院宣を申賜て、天下を君與君の御爭に成て、合戰を致さばやと思也。御邊は、日野中納言殿に所緣有と聞及べば、是より京都へ歸上て、院宣を伺ひ申て見よかしと、被仰ければ、藥師丸畏て承り候とて、三草山より暇申て、則京へぞ上ける。

○大樹攝津國豐島河原合戰事

將軍湊河に著給ければ、機を失つる軍勢共、又色を直して、方々より馳參りける間無程其勢二十萬騎に成にけり。此勢にて頓て攻上り給はゞ、又官軍京にはたまるまじかりしを、湊河の宿に、其事となく三日迄逗留有ける間、宇都宮五百餘騎、道より引返して、官軍に屬し、八幡に被置たる武田式部大輔も、堪かねて降人に成りぬ。其外此彼に隱れ居たりし兵共、義貞に屬しける間、官軍彌大勢に成て、龍虎の勢を振へり。二月五日顯家卿、義貞朝臣十萬餘騎にて都を立て、其日攝津國の芥河にぞ被著ける。將軍此由を聞給て、さらば行向て合戰を致せとて、將軍の舍弟左馬頭に、十六萬餘騎を差副て、京都へぞ被下ける。さる程に兩家の軍勢、二月六日の巳刻に、端なく豐島河

跡に引御方—後から引上ぐる御方

法橋—法印に次げる僧位にて僧都位に相當せる位

は皆一手に成て、二十九日の卯刻に、二條河原へ押寄て、在々所々に火をかけ、三所に時をぞ揚たりける。京中の勢は、大勢なりし時だにも、叶はで引し軍也。増て勢をば大略方々へ分ち被レ遣ぬ。敵可レ寄とは夢にも知ぬ事なれば、俄に周章ふためきて、或は丹波路を指て引もあり、或は山崎を志て逃るもあり、心も發らぬ出家して、禪律の僧に成るもあり。官軍はさまで遠く追ざりけるを、跡に引御方を、追懸る敵ぞと心得て、久我畷、桂河邊には、自害したる者も數を不レ知ありけり。況や馬物具を棄たる事は、足の踏所も無りけり。將軍は其日丹波の篠村を通り、曾地の內藤三郎右衞門入道道勝が館に著給へば、四國西國の勢は、山崎を過て、芥河にぞ著にける。親子兄弟骨肉主從、互に行方を不レ知落行ければ、被レ討てぞ死しつらんと悲む。されども將軍は正しく別事無て、尾宅宿を過させ給候也と、分明に云者有ければ、兵庫湊河に落集りたる勢の中より、丹波へ飛脚を立て、急ぎ攝州へ御越候へ。勢を集て、頓て京都へ攻上り候はんと申ければ、二月二日將軍曾地を立て、攝津國へぞ越給ひける。此時熊野山の別當四郎法橋道有が末に、藥師丸とて、童體にて御供したるけるを、將軍呼寄給て、忍やかに宣けるは、今度京都の合戰に、御方每度打負たる事、全く戰の咎に非ず、倩事の心

大路を渡せ—大路を引廻せ
にた首、まさしげ—新田、正成を似た、正しさうの意に取做したる秀句
○秀句—いひかけの巧なる語句
落行げ—落行く様子

給ひ候程に、供養の爲に、其尸骸を求候也とぞ答へける。將軍を始奉て、高、上杉の人々是を聞て、あな不思議や、宗徒の敵共が皆一度に被討たりける。さては勝軍をばしながら官軍京をば引たりける。何にか其首共の有らん。取て獄門に懸、大路を渡せとて、敵御方の尸骸共の中を求させけれ共、是こそとおぼしき首も無りけり。餘にあらまほしさに、此に面影の似たりける首を二つ、獄門の木に懸て、新田左兵衞督義貞、楠河内判官正成と書附をせられたりけるを、如何なるにくさうの者かしたりけん、其札の側に、是はにた首也。まさしげにも書ける虚事哉と、秀句をしてぞ書副て見せたりける。又同日の夜半計に、楠判官下部共に、燒松を二三千燃し連させて、小原鞍馬の方へぞ下しける。京中の勢共是を見て、すはや山門の敵共こそ、大將を被討て、今夜方々へ落行げに候へと申ければ、將軍もげにもとや思ひ給ひけん、さらば落さぬ樣に、方々へ勢を差向よとて、鞍馬路へは三千餘騎、小原口へ五千餘騎、勢多へ一萬餘騎、宇治へ三千餘騎、嵯峨、仁和寺の方迄洩さぬ樣に固めよとて、千騎二千騎差分て、勢を不被置方も無りけり。さてこそ京中の大勢大半減じて、殘る兵も徒に用心するは無りけれ。去程に、官軍宵より西坂をおり下て、八瀬、藪里、鷺森、下松に陣を取る。諸大將

て今日は引返させ給ひ候て、一日馬の足を休め、明後日の程に寄せて、今一あて手痛く戰ふ程ならば、などか敵を十里二十里が外まで、追靡けでは候べきと申ければ、大將誠にげにもとて、坂本へぞ被引返ける。將軍は今度も丹波路へ引給んと、寺戸の邊までおはしたりけるが、京中には敵一人も不殘皆引返したりと聞えければ、又京都へぞ歸り給ひける。此外八幡、山崎、宇治、勢多、嵯峨、仁和寺、鞍馬路へ懸りて、落行ける者共も是を聞て、みな我も〳〵と立歸りけり。入洛の體こそ恥かしけれども、今も敵の勢を見合すれば、百分が一もなきに、每度かく被追立見苦き負をのみするは、非直事、我等朝敵たる故歟、山門に被咒咀故歟と、謀の拙き所をば閣て、人々怪み思はれける心の程こそ愚なれ。

○將軍都落事 附藥師丸歸京事

楠判官山門へ歸て、翌の朝律僧を二三十人作立て京へ下し、此彼の戰場にして、尸骸をぞ求させける。京勢怪て事の由を問ければ、此僧共悲歎の泪を押へて、昨日の合戰に新田左兵衛督殿、北畠源中納言殿、楠判官以下宗徒の人々七人迄、被討させ

そゞろに—無闇に、徒に

治定可有—必あるべし

中を、眞横樣に懸通りて、敵の後を切んと、京中へこそ被ㇾ懸入ㇾけれ。敵是を見て、すはや例の中黑よと云程こそあれ、鴨川、白河、京中に、稻麻竹葦の如く打圍うだる大勢共、馬を馳倒し、弓矢をかなぐり捨て、四角八方へ逃散事、秋の木の葉を山下風の吹立たるに不ㇾ異。義貞朝臣は、態鎧を脫替、馬を乘替て、唯一騎敵の中へ懸入々々、何にか尊氏卿の坐すらん、選打に討んと伺ひ給ひけれども、將軍運強くして、遂に見え給はざりければ、無ㇾ力其勢を十方へ分て、逃る敵をぞ追はせられける。中にも里見、鳥山の人人は、僅に二十六騎の勢にて、丹波路の方へ落ける敵二三萬騎有けるを、將軍にてぞ坐すらんと心得て、桂河の西まで追ける間、大勢に返合せられて、一人も不ㇾ殘被ㇾ討にけり。さてこそ十方に分れて追ける兵も、そゞろに長追なせそとて、皆京中へは引返しける。角て日已に暮ければ、楠判官總大將の前に來て申けるは、今日の御合戰不慮に八方の衆を傾くと申せ共、さして被ㇾ討たる敵も候はず、將軍の落させ給ける方をも不ㇾ知、御方僅の勢にて京中に居候程ならば、兵皆財寶に心を懸て、如何に申すとも、一所に打寄る事不ㇾ可ㇾ有候。去程ならば、前の如く又敵に取て被ㇾ返、度方を失事治定可ㇾ有と覺候。敵に少しも機を附ぬれば、後の合戰しにくき事にて候。唯此儘に

壺─懸金の受壺也

るぞ。山法師ならば馬上の懸合は心にくからず、急ぎ向て懸散せとて、上杉伊豆守、畠山修理大夫、足利尾張守に、五萬餘騎を差副てぞ被向ける。楠は元來勇氣無雙の上、智謀第一也ければ、一枚楯の輕々としたるを、五六百帖はがせて、板の端に懸金と壺とを打て、敵の懸んとする時は、此楯の懸金を懸、城の掻楯の如く、一二町が程につき竝べて、透間より散々に射させ、敵引けば、究竟の懸武者を五百餘騎勝て、同時にばつと懸させける間、防手の上杉、畠山が五百餘騎、楠が五百餘騎に被揉立て、五條河原へ引退く。敵は此計歟と見處に、奧州國司顯家卿、二萬餘騎にて粟田口より押寄て、車大路に火を被懸たり。將軍之を見給て、是は如何樣北畠殿と覺るぞ、敵も敵にこそよれ、尊氏向はでは叶まじとて、自五十萬騎を率し、四條五條の河原へ馳向て、追つ返つ入替々々、時移る迄ぞ被鬪ける。尊氏卿は大勢なれども、軍する勢少くして、大將已に戰ひくたびれ給ぬ。顯家卿は小勢なれば、入替る勢無して、諸卒忽に疲れぬ。兩陣互に戰屈して、忿を抑へ、馬の息つぎ居たる處へ、新田左兵衛督義貞、脇屋右衛門佐義助、堀口美濃守貞滿、大館左馬助氏明、三萬餘騎を三手に分け、雙林寺、將軍塚、法勝寺の前より、中黑の旗五十餘旒差せて、二條河原に雲霞の如くに打圍たる敵の

墓目がら―墓目をすげたる矢がら墓目には太き篦な用ふる也

長船打―備前長船鍛冶の作

沓巻―矢の篦口の細き絲を巻きたる部分

ねた巻―沓巻より先の方をいふ

竹を、もぎつけに押倒て、長船打の鏃の五分鑿程なるを、筈本迄中子を打徹にしてねぢすげ、沓巻の上を、琴の絲を以て、ねた巻に巻て、三十六差たるを森の如くに負成し、態弓をば不持、是は手衝にせんが爲なりけり。切岸の面に二王立に立て名乗けるは、先年三井寺の合戰の張本に被召て、越後國へ被流たりし妙觀院高因幡全村と云は我事也。城中の人々此矢一つ進せ候はん。被遊て御覧候へと云儘に、上差一筋抽出て、櫓の小間を手突にぞ突たりける。此矢不誤、矢間の陰に立たりける鎧武者の、せんだんの板より、後の總角著の金物迄、裏表二重を徹て、矢先二寸計出たりける間、其兵櫓より落て、二言も不云死にけり。是を見ける敵共、あなおびたゞし、凡夫の技に非ずと懼て、色めきける處へ、禪智房護聖院の若者共、千餘人拔連て、攻入ける間、宇都宮神樂岡を落て、二條の手に馳加る。是よりしてぞ、全村を手突因幡とは名附ける。山法師鹿谷より寄て、神樂岡城を攻る由、兩黨の中より申ければ、將軍、頓て後攻をせよとて、今川、細川の一族に、三萬餘騎を差副て被遣けるが、城は早被攻落、敵入替ければ、後攻の勢も、徒に京中へぞ歸ける。去程に、楠判官、結城入道、伯耆守、三千餘騎にて糺の前より押寄て、出雲路の邊に火を懸たり。將軍之を見給て、之は如何樣神樂岡の勢共と覺

しく疲勞して

大荒目の鎧—札大く、とぢめ又大にあらきよりいふ、強力の勇士之を用ふ。

二十七日にぞ被定ける。既に其日に成ぬれば、人馬を休ん爲に、宵より楠、結城、伯耆、三千餘騎にて、西坂を下下て、下松に陣を取る。顯家卿は、三萬餘騎にて、大津を經て、山科に陣を取る。洞院左衛門督、二萬餘騎にて赤山に陣を取る。山徒は一萬餘騎にて、龍花越に廻て、鹿谷に陣を取る。新田左兵衛督兄弟は二萬餘騎の勢を率し、今道より向て、北白河に陣を取る。大手搦手都合十萬三千餘騎、皆宵より陣を取寄たれども、敵に知せじと、態篝火をば燒ざりけり、合戰は明日辰刻と被定けるを、機早なる若大衆共、武士に先をせられじとや思けん、まだ卯刻の始に、神樂岡へぞ寄たりける。此岡には、宇都宮紀清兩黨城郭を構てぞ居たりける。去ば無左右寄著て、人の可攻樣も無りけるを、助註記祐覺が同宿共三百餘人、一番に木戸口に著て、塀を阻て鬪けるが、高櫓より大石數多被投懸て引退處に、南岸圓宗院が同宿共五百餘人、入替てぞ攻たりける。是も城中に名譽の精兵共多かりければ、走廻て射けるに、多く物具を被徹て、叶はじとや思ひけん、皆持楯の陰に隱れて、新手替れとぞ招きける。爰に妙觀院因幡竪者全村とて、三塔名譽の惡僧あり。鑠の上に大荒目の鎧を重て、備前長刀のしのぎさがりに菖蒲形なるを脇に挾み、篦の太さは尋常の人の蟇目がらにする程なる三年

雖で—甚だ

○正月二十七日合戰事

斯る處に、去年十二月に、一宮關東へ御下有し時、搦手にて東山道より鎌倉へ御下有し大智院宮、彈正尹宮、竹下、箱根の合戰には、相圖相違して、逢せ給はざりしかども、甲斐、信濃、上野、下野勢共馳參しかば、御勢雲霞の如くに成て、鎌倉へ入せ給ふ。此にて事の樣を問へば、新田、竹下、箱根の合戰に打負て引返す。尊氏朝臣北を追て被上洛ぬ。其後奧州國司顯家卿、又尊氏朝臣の跡を追て、被攻上候ぬとぞ申ける。さらば如何樣道にても新田踏留らば、合戰有ぬべし。鎌倉に可逗留樣なしとて、公家には洞院左衛門督實世、持明院右衛門督入道、信濃國司堀河中納言、園中將基隆、二條少將爲次、武士には島津上野入道、同筑後前司、大伴、猿子の一黨、落合の一族、饗庭、石谷、纐纈、伊木、津志、中村、村上、信濃源氏、仁科、高梨、志賀、眞壁、是等を宗徒の者として、都合其勢二萬餘騎、正月廿日の晩景に、東坂本にぞ著にける。官軍彌勢を得て、翌日にも頓て京都へ寄んと議しけるが、打續き悪日也ける上、餘に強く乘たる馬共なれば、皆癱で更にはたらき得ざりける間、兎に角に延引して、今度の合戰は、

糺—糺の森をいふ

蓮臺野より北白河へ打廻て、赤松が勢と成合、新田が勢を一あてあてゝ見んと宣へば、藤、橘、伴の者共、仔細候まじとぞ同じける。定禪不レ斜喜で、態將軍にも知らせ不レ奉、伊豫、讃岐の勢の中より、三百餘騎を勝て、北野の後より、上賀茂を經て、潛に北白河へぞ廻りける。糺の前にて、三百餘騎の勢十方に分て、下松、藪里、靜原、松崎、中賀茂、三十餘箇所に火をかけて、此をば打捨て、一條二條の間にて、三所に鬨をぞ揚たりける。げにも定禪律師推量の如く、敵京白河に分散して、一所へ寄る勢少なかりければ、義貞、義助一戰に利を失て、坂本を指して引返しけり。所々に打散たる兵ども、俄に周章て引ける間、北白河、粟田口の邊にて、舟田入道、大館左近藏人、由良三郎左衞門尉。高田七郎左衞門以下宗徒の官軍、數百騎被レ討けり。卿律師頓て早馬を立て、此由を將軍へ被レ申たりければ、山陽、山陰兩道へ落行ける兵共、皆又京へぞ立歸る。義貞朝臣は、僅に二萬騎の勢を以て、將軍の八十萬騎を懸散し、定禪律師は、亦三百餘騎の勢を以て、官軍の二萬餘騎を追落す。彼は項王が勇を心とし、是は張良が謀を宗として、智謀勇力いづれも取々なりし人傑也。

成合て―結託して

梅酸の渴―魏武帝の故事にて前途に梅林あり子を結んで甘酸なりと聞いて士卒渴を醫せしことより此は暫く休息して渴を休めしないふ

右に、中黒の旗を差揚て、亂合てぞ戰ひける。何れを敵、何れを御方共、辨難ければ、東西南北喚叫で、唯同士打をするより外の事ぞ無りける。將軍を始奉りて、吉良、石堂、高、上杉の人々是を見て、御方の者共が敵と成合て、後矢を射るよと被ㇾ思ければ、心を置合て、高、上杉の人々は、山崎を指して引退き、將軍、吉良、石堂、仁木、細川の人々は、丹波路へ向て落給ふ。官軍彌勝に乘て、短兵急に拉ぐ。將軍今は遁る所なしと思召けるにや、梅津、桂河邊にては、鎧の草摺疊み上て、腰の刀を拔んとし給ふ事、三箇度に及けり。されども將軍の御運や强かりけん、日既に暮けるを見て、追手桂河より引返ければ、將軍も且く松尾葉室の間に引へて、梅酸の渴をぞ休められける。爰に細川刑部律師定禪、四國の勢共に向て宣けるは、軍の勝負は、時の運に依事なれば、强に恥ならねども、今日の負は三井寺の合戰より事始りつる間、我等が瑕瑾、人の嘲を不ㇾ遁。されば態他の勢を不ㇾ交して、花やかなる軍一軍して、天下の人口を塞がばやと思也。推量するに、新田が勢は、終日の合戰に草臥て、敵に當り、變に應ずる事自在なるまじ。其外の敵共は、京白河の財寶に目をかけて、一所に不ㇾ可ㇾ在。其上赤松筑前守、僅の勢にて下松に扣へて有つるを、無體に討せたらんも可ㇾ口惜。いざや駿原、

逸物の射手—すぐれたる射手

下三千餘騎にて向たりけるが、其中より逸物の射手六百餘人を勝て、馬より下し、小松の陰を木楯に取て、指詰引詰散々にぞ射させたりける。嶮き山を上かねたりける武藏相摸の勢共、物具を被レ徹て矢場に伏、馬を被レ射てはね落されける間、少猶豫して見えける處を、得たり賢しと、三千餘騎の兵共、拔連て大山の崩るが如く、眞倒に落し懸たりける間、師泰が兵二萬餘騎、一足をもためず、五條河原へ颯と引退。此にて杉本判官、曾我二郎左衛門も被レ討にけり。官軍態長追をばせで、猶東山を後に當て、勢の程をぞ見せざりける。搦手より軍始りければ、大手音を受て時を作る。官軍の二萬餘騎と、將軍の八十萬騎と、入替々々天地を響してぞ戰たる。漢楚八箇年の戰を一時に集め、吳越三十度の軍を百倍になす共、猶是には不レ可レ過。寄手は小勢なれども、皆心を一にして、懸時は一度に颯と懸て敵を追まくり、引時は手負を中に立て靜に引く。京勢は大勢なりけれ共、人の心不レ調して、懸時も不レ揃、引時も助けず、思々心々に闘ける間、午刻より酉の終まで、六十餘度の懸合に、寄手の官軍、度毎に勝に不レ乘と云事なし。されども將軍方大勢なれば、被レ討共勢もすかず、逃れども遠引せず、唯一所にのみこらへ居たりける處に、最初に紛れて敵に交りたる一揆の勢共、將軍の前後左

九牛の一毛—至て少きをいふ

平場の懸—平野にての戦

滴、九牛が一毛也。唯尋常の如くに軍をせば、勝事を得難し。相互に面を識り被レ識たらんずる侍共、五十騎つゝ手を分て、笠符を取捨、旗を巻て、敵の中に紛れ入り、此彼に叩々、暫可二相待一。將軍塚へ上せつる勢、既に軍を始むと見ば、此陣より兵を進めて可レ令レ闘。其時に至て、御邊達、敵の前後左右に旗を差擧て、馬の足を不レ靜、前に在歟とせば後へぬけ、左に在かとせば右へ廻て、七従八横に亂て敵に見する程ならば、敵の大勢は、還て御方の勢に見えて、同士打をする歟、引て退歟、尊氏此二の中を不レ可レ出と、韓信が謀を被レ出しかば、諸大將の中より、逞兵五十騎づゝ勝り出して、一千餘騎各一樣に、中黑の旗を巻て紋を隱し、笠符を取て、袖の下に收め、三井寺より引おくれたる勢の眞似をして、京勢の中へぞ馳加りける。敵斯る謀ありとは、將軍不二思寄給一、宗徒の侍共に向うて被レ下二知一けるは、新田はいつも平場の懸をこそ好と聞しに、山を後に當てゝ、頓ても懸出ぬは、如何樣小勢の程を敵に見せじと思へる者也。將軍塚の上に取あがりたる敵を置ては、いつまでか可レ守レ上。師泰彼に馳向て追散せと宣ければ、越後守畏て承候と申て、武藏相摸の勢二萬餘騎を率して、雙林寺と中靈山とより、二手に成てぞ上たりける。此には脇屋右衛門佐、堀口美濃守、大館左馬助、結城上野入道以

かさより落し―かさは頂上にて、頂上より落すが如く勢鋭く競ひかゝること

三頭―尾本の上左右のつけぎはの邊をいふ

時を作る計にて、靜々と是を追ひ、道迫りて、而も敵の行前難所なる山路にては、かさより落し懸て、透間もなく射落し、切伏せける間、敵一度も返し不ㇾ得、唯我先にとぞ落行ける。されば手を負たる者は、其儘馬人に被二踏殺一、馬離たる者は、引かねて無ㇾ力腹を切けり。其死骸谷をうめ、溝を埋みければ、追手の爲には道平に成て、彌輪寶の山谷を平ぐるに不ㇾ異。將軍三井寺に軍始たりと聞て後、黑煙天に覆て見えければ、御方如何樣負軍したりと覺るぞ。急ぎ勢を遣せとて、三條河原に打出、先勢汰をぞし給ひける。斯る處に、粟田口より馬煙を立て、其勢四五萬騎が程引て出來たり。誰やらんと見給へば、三井寺へ向し四國西國の勢共也。誠に皆軍手痛くしたりと見えて、薄手少々負はぬ者もなく、鎧の袖、冑の吹返に、矢三筋四筋折懸ぬ人も無りけり。さる程に、新田左兵衛督二萬三千餘騎を三手に分て、一手をば將軍塚の上へ上、一手をば眞如堂の前より出し、一手をば法勝寺を後に當て、二條河原へ出して、則相圖の煙をぞ被ㇾ擧ける。自らは花頂山に打上て、敵の陣を見渡し給へば、上は河合森より、下は七條河原まで、馬の三頭に手縄を打懸け、鎧の袖に袖を重て、東西南北四十餘町が間、錐を立る計の地も不ㇾ見、身を峙て打圍たり。義貞朝臣、弓杖にすがり被二下知一けるは、敵の勢に御方を合れば、大海の一

機を扶てー元氣を養つて

いしくもーよくも

三井寺の敵無事故攻落れたりければ、長途に疲たる人馬一兩日機を扶てこそ、又合戰をも致さめとて、顯家卿坂本へ被引返ければ、其勢二萬餘騎は、彼趣に相從ふ。新田左兵衛督も、同く坂本へ歸らんとし給ひけるを、舟田長門守經政、馬を叩て申けるは、軍の利、勝に乘る時、北るを追より外の質は非じと存候。此合戰に被打漏て、馬を棄物具を脱で、命計を助からんと落行候敵を追懸て、京中へ押寄る程ならば、臆病神の附たる大勢に被引立、自餘の敵も定て機を失はん歟、さる程ならば、官軍敵の中へ紛れ入て、勢の分際を敵に不見して、此に火をかけ、彼に時を作り、縱横無礙に懸立る者ならば、などか足利殿御兄弟の間に近附奉て、勝負を仕らでは候べき。落候つる敵、よも幾程も阻り候はじ。何樣一追追懸て見候はゞやと申ければ、義貞、我も此議を思ひつる處に、いしくも申たり。さらば軈て追懸よとて、又旗の手を下して、馬を進め給へば、新田の一族五千餘人、其勢三萬餘騎、走る馬に鞭を進めて、落行敵をぞ追懸たる。敵今は遙に阻たりぬらんと覺る程なれば、逃るは大勢にて遲く、追は小勢にて早かりければ、山階邊にて漸敵にぞ追附ける。由良、長濱、吉江、高橋、眞前に進て追けるが、大敵をば可可欺とて、廣みにて敵の返し合つべき所迄は、さまで不追、遠矢射懸々々

梵砌—寺院

無明—煩惱本性をおほひて邪見妄執を起し事理に暗きこと

なる人多かるべしとぞ示しける。秀郷都に歸て後、此絹を切てつかふに、更に盡る事なし。俵は中なる納物を取れども〳〵盡ざりける間、財寶倉に滿て、衣裳身に餘れり。故に其名を俵藤太とは云ける也。是は產業の財なればとて、是を倉廩に收む。鐘は梵砌の物なればとて、三井寺へ是をたてまつる。文保二年三井寺炎上の時、此鐘を山門へ取寄て、朝夕是を撞けるに、敢てすこしも鳴ざりける間、山法師共、惡し、其儀ならば鳴樣に撞とて、鐘木を大に拵へて、二三十人立懸りて、破よとぞ撞たりける。其時此鐘海鯨の吼る聲を出して、三井寺へゆかうとぞ鳴たりける。山徒彌是を惡みて、無動寺の上よりして、數千丈高き岩の上を、ころばかしたりける間、此鐘微塵に碎にけり。今は何の用にか可立とて、其われを取集て、本寺へぞ送りける。或時一尺計なる小蛇來て、此鐘を尾を以て扣きたりけるが、一夜の内に又本の鐘に成て、疵つける所一も無りけり。されば今に至るまで、三井寺に有て此鐘の聲を聞人、無明長夜の夢を驚かして、慈尊出世の曉を待、末代の不思議、奇特の事共也。

○建武二年正月十六日合戰事

を漆にて塗りたるもの

鏃の中子ー鏃の矢幹の中に入りたる部分をいふ

羽ぶくろー矢羽

今やくとぞ待たりける。夜半過る程に、雨風一通過て、電火の激する事隙なし。暫有て、比良の高峰の方より、燒松二三千がほど二行に燃て、中に島の如くなる物、此龍宮城を指てぞ近附ける。事の體を能々見に、二行にとぼせる燒松は、皆己が右左の手にともしたりと見えたり。あはれ是は百足蚿の化たるよと心得て、矢比近く成ければ、件の五人張に十五束三伏、忘るゝ計引しぼりて、眉間の眞中をぞ射たりける、其手答、鐵を射る樣に聞えて、筈を返してぞ不レ立ける。秀郷一の矢を射損で、不レ安思ひければ、二の矢を番て、一分も不レ違、態前の矢所をぞ射たりける。此矢も又前の如くに躍返て、是も身に不レ立けり。秀郷二つの矢をば皆射損じつ、憑所は矢一筋也。如何せんと思けるが、屹と案じ出したる事有て、此度射んとしける矢さきに、唾を吐懸て、又同矢所をぞ射たりける、此矢に毒を塗たる故にや依けん、又同矢所を三度迄射たる故にや依けん、此矢眉間のたゞ中を徹りて、喉の下迄羽ぶくろ責てぞ立たりける。二三千見えつる燒松も、光忽に消て、島の如くに有つる物、倒るゝ音大地を響かせり。立寄て是を見るに、果して百足の蚿也。龍神は是を悅て、秀郷を樣々にもてなしけるに、太刀一振、卷絹一、鎧一領、頸結たる俵一、赤銅の撞鐘一を與て、御邊の門葉に、必將軍に

る也
九乳の鳧鐘ー鳧氏鐘を鑄しより鐘を鳧鐘といふ九乳は鐘につけたる九つのいぼか

せき弦ー弦を絲にて卷きて其の上

人是を見ば、目もくれ、魂消て、則地にも倒つべし。されども秀郷天下第一の大剛の者也ければ、更に一念も不レ動して、彼大蛇の背の上を荒かに踏で、閑に上をぞ越たりける。然れ共、大蛇も敢て不レ驚、秀郷も後を不レ顧して、遙に行隔たりける處に、怪げなる小男一人、忽然として秀郷が前に來て云けるは、我此橋の下に住事已に二千餘年也。貴賤往來の人を量見るに、今御邊程に剛なる人未レ見。我に年來地を爭ふ敵有て、動すれば彼が爲に被レ惱。可レ然は御邊我敵を討てたび候へと、懇にこそ語ひけれ。秀郷一議も不レ謂、仔細有まじと領狀して、則此男を前に立てゝ、又勢多の方へぞ歸ける。二人共に湖水の波を分て、水中に入事五十餘町有て、一の樓門あり。開て內へ入るに、瑠璃の沙厚く、玉の甃暖にして、落花自繽紛たり。朱樓紫殿玉欄干、金を鐺にし、銀を柱とせり。其壯觀奇麗、未曾て目にも不レ見、耳にも聞ざりし所也。此怪しげなりつる男、先內へ入て、須臾の間に衣冠を正しくして、秀郷を客位に請ず。左右侍衞官前後花の粧、善盡し、美盡せり。酒宴數刻に及で、夜既に深ければ、敵の可レ寄程に成ぬと周章騷ぐ。秀郷は、一生涯が間身を放たで持たりける五人張に、せき弦懸て噛ひ濕し、三年竹の節近なるを十五束三伏に拵へて、鏃の中子を筈本迄打とほしにしたる矢、唯三筋を手挾みて、

三會の曉―彌勒出世して龍華樹下に三會の説法をなす曉、三會は三度衆生を會して説法するによりていふ。

阿逸多―祖庭事苑に此云二無能勝一彌勒姓とあり、此には嗚呼痛しの意を累れた

にて渡せ給へば、角ては如何とて、或衆徒御首計を取て、籔の中に隠し置たりけるが、多く被レ討たる兵の首共の中に交りて、切目に血の附たりけるを見て、山法師や仕たりけん、大札を立て一首の歌に事書を副たりける。建武二年の春の比、何とやらん、事の騒しき様に聞え侍りしかば、早三會の曉に成ぬるやらん。いでさらば八相成道して、説法利生せんと思ひて、金堂の方へ立出たれば、業火盛に燃て、修羅の闘諍四方に聞ゆ。こは何事かと思ひ分く方も無て居たるに、佛地坊某とやらん、堂内へ走入り、所以もなく、鋸を以て我が首を切し間、阿逸多といへ共不レ叶、堪兼たりし悲の中に、思つづけ侍りし。

　山を我敵とはいかで思ひけん、寺法師にぞ首を切るゝ。

前々炎上の時は、寺門の衆徒是を一大事にして隠しける九乳の鳧鐘も取人なければ、空く焼て地に落たり。此鐘と申は、昔龍宮城より傳りたる鐘也。其故は、承平の比俵藤太秀郷と云者有けり。或時此秀郷唯一人勢多橋を渡けるに、長二十丈計なる大蛇、橋の上に横て臥たり。両の眼は耀て、天に二の日を懸たるが如く、並べる角尖にして、冬枯の森の梢に不レ異。鐵の牙上下に生ちがうて、紅の舌炎を吐かと怪まる。若尋常の

主上行幸の時宇治河桂河などをば檢非違使判官浮橋を作りて渡したる故にかくいふ也

鎗—上古直鎗を手鉾といひしを後に鎗といひかへたる也、此名始て見ゆ

聖敎を抱て—佛典を抱いて

二人共に橋の上をさら〳〵と走渡り、堀の上なる逆茂木共取て引除、各木戸の脇にぞ著たりける。是を防ぎける兵共、三方の土矢間より、鎗、長刀を差出して散々に突けるを、亘理新左衛門、十六迄奪てぞ捨たりける。畑六郎左衛門是を見て、のけや亘理殿、其塀引破て、心安く人々に合戰せさせんと云儘に、走懸り、右の足を揚て、木戸の關の木の邊を二蹈三蹈ぞ蹈たりける。餘に強く被蹈て、二筋渡せる七八寸の關の木、中より打て、木戸の扉も、塀柱も、同くどうと倒れければ、防がんとする兵五百餘人、四方に散て颯とひく。一の木戸已に破ければ、新田の三萬餘騎の勢城の中へ懸入て、先合圖の火をぞ揚たりける。是を見て、山門の大衆二萬餘人、如意越より落合て、則院々谷々へ亂入り、堂舍佛閣に火を懸て、喚叫でぞ攻たりける。猛火東西より吹懸て、敵南北に充滿たれば、今は叶じとや思けん、三井寺の衆徒共、或は金堂に走入て、猛火の中に腹を切て伏、或は聖敎を抱て、幽谷に倒轉ぶ。多年止住の案内者だにも、時に取ては行方を失ふ。況乎四國西國の兵共、方角も知ぬ煙の中に、目をも不見上迷ひければ、唯此彼の木の下岩の陰に疲れて、自害をするより外の事は無りけり。されば半日計の合戰に、大津、松本、三井寺の内に被討たる敵を數るに、七千三百餘人也。抑金堂の本尊は、生身の彌勒

無念—譯も無く

烏獲—秦の壯士、力強く鼎を扛ぐといはる

橋渡判官—

なきか。あの木戸取て引破れ。畑、亙理はなきか。切て入れとぞ被二下知一ける。栗生、篠塚是を聞て、馬より飛で下り、木戸を引破らんと走寄て見れば、塀の前に深さ二丈餘の堀をほりて、兩方の岸、屏風を立たるが如くなるに、橋の板をば皆刎迦して、橋桁計ぞ立たりける。二人の者共如何して可レ渡と、左右をきつと見る處に、傍なる塚の上に、面三尺計有て、長さ五六丈もあるらんと覺えたりける大卒都婆一本あり。爰にこそ究竟の橋板は有けれ。卒都婆を立るも、橋を渡すも、功德は同じ事なるべし。いざや是を取て渡さんと云儘に、二人の者共走寄て、小脇に挾で、えいやつと拔く。土の底五六尺掘入たる大木なれば、傍の土一二尺が程くわつと崩て、卒都婆は無念拔にけり。彼等二人、二本の卒都婆を輕々と打かたげ、堀のはたに突立て、先自讃をこそしたりけれ。異國には烏獲、樊噲、吾朝には和泉小次郎、朝夷奈三郎、是皆世に雙なき大力と聞ゆれども、我等が力に幾程かまさるべき。云所傍若無人也と思ん人は、寄合て力根の程を御覽ぜよと云儘に、二本の卒都婆を、同じ樣に向の岸へぞ倒し懸たりける。卒都婆の面平にして、二本相竝たれば、宛四條五條の橋の如し。爰に畑六郎左衞門、亙理新左衞門二人、橋の爪に有けるが、御邊達は橋渡判官に成り給へ。我等は合戰をせんと戯れて、

當の敵—さしあたつての敵

堅を破て—堅固なる陣を破りて

作法—振舞

被取籠て、千葉新介矢庭に被討にければ、其手の兵百餘騎、當の敵を討んと懸入懸入戰て、百五十騎被討にければ、後陣に讓て引退く。二番に顯家卿二萬餘騎にて、入替へ亂合て攻戰ふ。其勢一軍して馬の足を休むれば、三番に結城上野入道、伊達信夫の者共五千餘騎、入替て面も不振攻戰ふ。其勢三百餘騎被討て引退ければ、敵勝に乘て六萬餘騎を二手に分て、濱面へぞ打て出たりける。是を見て、三萬餘騎を一手に合せて、利兵堅を破て被進たり。細川雖大勢、北は大津の在家まで燒る最中なれば、通り不得。東は湖海なれば、水深して廻んとするに便なし。僅に半町にもたらぬ細道を、唯一巡に前まんとすれば、和爾、堅田の者共が、渚に舟を漕並て射ける横矢に被防て、懸引自在にも無りけり。官軍是に力を得て、透間もなく懸りける間、細川が六萬餘騎の勢、五百餘騎被打て、三井寺へぞ引返しける。額田、堀口、江田、大館、七百餘騎にて、逃る敵に追すがうて、城の中へ入んとしける處を、三井寺の衆徒五百餘人、木戸の口に下り塞て、命を捨て鬪ける間、寄手の勢百餘人、堀の際にて被討ければ、後陣を待て不進得。其間に、城中より木戸を下して、堀の橋を引たりけり。義助之を見て、無云甲斐者共の作法哉。僅の木戸一に被支て、是程の小城を攻落さずと云事やある。栗生、篠塚は

如意越—山城愛宕郡如意嶽を越ゆる也

に陣を取。戸津、比叡辻、和爾、堅田の者共は、小舟七百餘艘に取乘て、澳に浮て明るを待。山門の大衆は、二萬餘人大略徒立なりければ、如意越を搦手に廻り、時の聲を揚れば、同時に落合んと、鳴を靜めて待明す。去程に、坂本に大勢の著たる形勢、舟の往反に見えて、夥しかりければ、三井寺の大將細川卿律師定禪、高大和守が方より京都へ使を馳て、東國の勢坂本に著て、明日可レ寄由其聞え候。急御勢を被レ添候へと、二度迄被レ申たりけれ共、關東より何勢か其程迄多くは上るべきぞ。勢は大略宇都宮紀淸の兩黨の者共とこそ聞ゆれ。其勢縱誤て坂本へ著たりとも、宇都宮京に在と聞えなば、頓て主の許へこそ馳來んずらんとて、將軍事ともし給はざりければ、三井寺へは勢の一騎をも不レ被レ添。夜既に明方に成しかば、源中納言顯家卿二萬餘騎、新田左兵衛督義貞三萬餘騎、脇屋、堀口、額田、鳥山の勢一萬五千餘騎、志賀、唐崎の濱路に駒を進て押寄て、後陣遲しとぞ待にける。前陣の勢、先大津の西浦、松本宿に火をかけて、時の聲を揚ぐ。三井寺の勢共、兼てより用意したる事なれば、南院の坂口に下り合て、散々に射る。一番に千葉介千餘騎にて押寄せ、一二の木戸打破り、城の中へ切て入り、三方に敵を受て、半時計鬪たり。細川卿律師定禪か横合に懸りける四國の勢六千餘騎に

聖女―坂本にある稻荷社をいふ

血下て―張りつめたる氣が休息するにつれて落附いて氣ぬけすること

上の船七百餘艘を點じて、志那濱より一日が中にぞ被レ渡ける。爰に宇都宮紀淸兩黨、主の催促に依て、五百餘騎にて打連たりけるが、宇都宮は將軍方に在と聞えければ、面々に暇を請、色代して、志那濱より引分れ、芋洗を廻て、京都へこそ上りけれ。

○三井寺合戰 幷當寺撞鐘事 附俵藤太事

東國の勢既に坂本に著ければ、顯家卿、義貞朝臣、其外宗徒の人々、聖女の彼岸所に會合して、合戰の評定あり。何樣一兩日は馬の足を休てこそ、京都へは寄候はめと、顯家卿宣けるを、大館左馬助被レ申けるは、長途に疲れたる馬を、一日も休候はゞ、中々血下て、四五日は物の川に不レ可レ立。其上此勢坂本へ著たりと、敵縱聞及共、頓て可レ寄とはよも思寄候はじ。軍は起二不意一必敵を拉習也。唯今夜の中に志賀唐崎の邊迄打寄て、未明に三井寺へ押寄せ、四方より時を作て攻入程ならば、御方治定の勝軍とこそ存候へと被レ申ければ、義貞朝臣も、楠判官正成も、此議誠に可レ然候と被レ同て、頓て諸大將へぞ被レ觸ける。今上の千葉勢是を聞て、まだ宵より千餘騎にて、志賀里に陣を取る。大館左馬助、額田、羽川、六千餘騎にて、夜半に坂本を立て、唐崎の濱

手ざす者―敵對するもの

○奥州勢著二坂本一事

去年十一月に、義貞朝臣討手の大將を承て、關東へ被二下向一時、奥州の國司北畠中納言顯家卿の方へ、合圖の時をたがへず可二攻合一由、綸旨を被レ下たりけるが、大軍を起す事不二容易一間、兎角延引す。剰路すがらの軍に日數を送りける間、心許は被レ急けれども、此彼の逗留に依て、箱根の合戰には迦れ給ひにけり。されども、幾程もなく鎌倉に打入給ひたれば、將軍は早箱根、竹下の戰に打勝て、軈て上洛し給ひぬと申ければ、さらば跡より追てこそ上らめとて、夜を日に繼てぞ被二上洛一ける。去程に、越後、上野、常陸、下野に殘りたる新田の一族、竝に千葉、宇都宮が手勢共、是を聞傳て、此彼より馳加りける間、其勢無レ程五萬餘騎に成にけり。鎌倉より西には手ざす者も無りければ、夜晝馬を早めて、正月十二日近江の愛智河宿に被レ著けり。其日大館中務大輔、佐々木判官氏頼其比未幼稚にて楯籠りたる觀音寺の城郭を攻落て、敵を討事都て五百餘人、翌日早馬を先立て、事の由を坂本へ被レ申たりければ、主上を始進せて、敗軍の士卒悉悦をなし、志を不レ令レ蘇と云者なし。則道場坊助註記祐覺に被二仰附一、湖

徹却—取除く

唇を飜す—悪口をす

得失甚き事隠無りければ、且は山門の恥を洗ぎ、又は継體の儲を全せん爲に、延暦寺座主良信大僧正を申請て、皇子御誕生の御祈をぞ被致ける。先御修法の間種々の奇瑞有て、承暦三年七月九日、皇子御誕生あり。山門の護持隙無りければ、頼豪が怨靈も近附奉らざりけるにや、此宮遂に玉體無恙して、天子の位を踐せ給ふ。御在位の後院號有て、堀河院と申しゝは、則此第二宮の御事也。其後頼豪が亡靈忽に鐵の牙、石の身なる八萬四千の鼠と成て、比叡山に登り、佛像經卷を噛破ける間、是を防に無術して、頼豪を一社の神に崇めて、其怨念を鎭む。鼠の禿倉是也。斯りし後は、三井寺も、彌意趣深して、動すれば戒壇の事を申達せんとし、山門も、又以前の嗷議を例として、理不盡に是を欲徹却。去ば始承暦年中より、去文保元年に至迄、此戒壇故に園城寺の燒る事、已に七箇度也。近年は是に依て、其企も無りつれば、中々寺門繁昌して、三寶の住持も全かりつるに、今將軍妄に衆徒の心を取ん爲に、山門の忿をも不顧、楚忽に被成御教書ければ、却天魔の所行、法滅の因緣哉と、聞人毎に唇を飜しけり。

寺門―三井寺

欵狀―願書

仕ん爲に、參內して候也とぞ申されける。夜々の御夢想に、君も臣も恐を被成ければ、遂に寺門の所望被默止、山門に道理をぞ被附ける。角て遙に程經て、白河院の御宇に、江帥匡房の兄に、三井寺の賴豪僧都とて、貴き人有けるを被召、皇子御誕生の御祈をぞ被仰付ける。賴豪勅を承て、肝膽を碎て祈請しけるに、陰德忽に顯れて、承保元年十二月十六日に、皇子御誕生有てけり。帝叡感の餘に、御祈の勸賞宜依請べしと被宣下。賴豪年來の所望也ければ、他の官祿一向是を閣て、園城寺の三摩耶戒壇造立の勅許をぞ申賜ける。山門又是を聽て、欵狀を捧て禁庭に訴へ、先例を引て停廢せられんと奏しけれども、綸言再び不復とて、勅許無りしかば、三塔嗷議を以て、谷々の講演を打止め、社々の門戸を閉て、御願を止ける間、朝議難默止して、無力三摩耶戒壇造立の勅裁をぞ被召返ける。賴豪是を忿て、百日の間髪をも不剃、爪をも不切、爐壇の煙にふすぼり、瞋恚の炎に骨を焦て、我願はくは即身に大魔緣と成て、玉體を惱し奉り、山門の佛法を滅さんと云ふ惡念を發して、遂に三七日が中に、壇上にして死にけり。其怨靈果して邪毒を成ければ、賴豪が祈出し奉りし皇子、未母后の御膝の上を離させ給はで、忽に御逝有けり。叡襟是に依て不堪、山門の嗷訴、園城の效驗、

八埏―地の八際

南都小乗劣戒―奈良の東大寺興福寺の執る所の戒は小乗戒なるより大乗戒に對して劣戒といふ

圓宗―圓頓宗ともいふ天台宗のこと也

俾レ慰二夜須麻呂泣氏人愁吟一。彌爲二天台別院一專祈二天長地久之御願一、可レ致二四海八埏之泰平一云云。仍貞觀八年五月十四日、官符被二成下一曰、以二園城寺一可レ爲二天台別院一云云。加之貞觀九年十月三日、智證大師記文云、圓珍之門弟不レ可レ受二南都小乘劣戒一、必於二大乘戒壇院一、可レ受二菩薩別解脱戒一云云。然ば本末の號歴然たり、師弟の義何ぞ同からんと、證を引き、理を立て支申ける間、君思召煩せ給て、許否共に凡慮の及處に非れば、只可レ任二冥慮一とて、自告文を被レ遊て、叡山根本中堂に被レ籠けり。其詞云、戒壇立、而可レ無二國家之危一者、悟二其旨歸一。戒壇立、而可レ有二王者之懼一者、施二其示現一云云。此告文を被レ籠て、七日に當りける夜、主上不思議の御夢想ありけり。無動寺慶命僧正、一紙の消息を進て云、自二胎内之昔一、至二治天之今一、忝雖レ奉レ祈二請寶祚長久一、三井寺戒壇院若被二宣下一者、可レ失二本懐一云云。又其翌夜の御夢に、彼慶命僧正參内して、紫宸殿に被レ立たりけるが、大に忿れる氣色にて、昨日一紙の狀を雖二進覽一、叡慮更に不二驚給一、所詮三井寺の戒壇有二勅許一者、變二年來之御祈一、忽可レ成二怨心一と宣ふ。又其翌夜の御夢に、一人の老翁弓箭を帶して、殿上に候ず。主上汝は何者ぞと御尋有ければ、圓宗擁護の赤山大明神にて候。三井寺の戒壇院執奏の人に向て、矢一つ

菩薩の大乘戒―菩薩の行を修する人の一般に受持すべき戒律

聲聞の小乘戒―所謂五戒八戒の戒律

移る。于レ時敎待和尙百六十年行て祈出し給し生身の彌勒菩薩を、智證大師に附屬し給へり。大師是を受て、三密瑜伽の道場を構へ、一代說敎の法席を展給けり。其後仁壽三年に、智證大師求法の爲に、御渡唐有けるに、惡風俄に吹來て、海上の御船忽に覆らんとせし時、大師舷に立出て、十方を一禮して、誠精を致させ給ひしかば、佛法護持の不動明王、金色の身相を現じて、船の舳に立給ふ。又新羅大明神親りに、船の艫に化現して、自檝を取給ふ。依レ之、御舟無レ恙明州津に著にけり。角て御在唐七箇年の間、寢食を忘て、顯密の奧義を究め給ひて、天安三年に御歸朝あり。其後法流彌盛にして、一朝の綱領、四海の倚賴たりしかば、此寺四箇の大寺の其一つとして、論場の公請に隨ひ、寶祚の護持を致事、諸寺に卓犖せり。抑山門已に菩薩の大乘戒を建、南都は又聲聞の小乘戒を立つ。園城寺何ぞ眞言の三摩耶戒を建ざらんやとて、御朱雀院の御宇長曆年中に、三井寺の明尊僧正、頻に勅許を蒙らんと、奏聞しけるを、山門堅く支申ければ、彼寺の本主太政大臣大友皇子の後胤、大友夜須麻呂の氏族連署して、官符を申す。貞觀六年十二月五日の狀に曰、望請長爲二延曆寺別院一、以二件圓珍一作二主持之人一、早垂二恩恤一以二園城寺一、如二解狀一可レ爲二延曆寺別院一之由、被レ下二寺牒一將

○園城寺戒壇事

山門貳心なく君を擁護し奉て、北國奥州の勢を相待由聞えければ、義貞に勢の屬ぬ前に、東坂本を急可被攻とて、細川卿律師定禪、同刑部少輔、竝に陸奥守を大將として、六萬餘騎を三井寺へ被差遣。是は何も山門に敵する寺なれば、衆徒の所存よも貳心非じと被憑ける故也。隨而衆徒被致忠節者、戒壇造營の事、武家殊に加力、可成其功之由、被成御教書。抑園城寺の三摩耶戒壇の事は、前々已に公家尊崇の儀を以て、勅裁を被成、又關東贔屓の威を添て取立しか共、山門嗷訴を恣にして、猛威を振ふ間、干戈是より動き、回祿度々に及べり。其故を如何と尋るに、彼寺の開山高祖智證大師と申奉るは、最初叡山傳教大師の御弟子にて、顯密兩宗の碩德、智行兼備の權者にてぞ御座しける。而るに傳教大師御入滅の後、智證大師の御弟子と、慈覺大師の御弟子と、聊法論の事有て、忽に確執に及ける間、智證大師の門徒修禪三百房引て、三井寺に

戒壇—戒を授受する壇場

三摩耶戒壇—三摩耶戒は眞言祕密の戒律

て、二十一箇所の彼岸所、其外坂本、戸津、比叡辻、坊々家々に札を打て、諸軍勢をぞやどしける。其後又南岸坊僧都、道場坊祐覺、同宿千餘人召具して、先内裏に參じ、やがて十禪師に立登て、大衆を起し、僉義の趣を院々谷々へぞ觸送りける間、三千の衆徒、悉く甲冑を帶して馳參。先官軍の兵粮とて、錢貨六萬貫、米穀七千石、波止土濃の前に積だりければ、祐覺是を奉行して、諸軍勢に配分す。さてこそ未醫王山王も我君を捨させ給はざりけりと、敗軍の士卒悉く憑もしき事には思けれ。

彼岸所―中方の衆會合して法談し衆を勸めて涅槃に到らしむる所

高祖大師―傳教大師

伽藍―梵語僧伽藍摩の略にて寺院のこと

點じて―割當てゝの意

主上已に東坂本に臨幸成て、大宮の彼岸所に御座あれ共、未參ずる大衆一人もなし。さては衆徒の心も變じぬるにやと、叡慮を悩されける處に、藤本房英憲僧都參て、申出たる言もなく、泪を流して、大床の上に畏てぞ候ける。主上御簾の内より叡覽ありて、名字を委く尋仰らる。さて其後硯やあると仰られければ、英憲急ぎ硯を召寄て、御前に閣く。自宸筆を染られて、御願書をあそばされ、是を大宮の神殿に籠よと仰せ下されければ、英憲畏て、右方權禰宜行親を以て、是を納め奉る。暫ありて圓宗院法印定宗、同宿五百餘人召具して參りたり。君大に叡感有て、大床へ召る。定宗御前に跪て申けるは、桓武皇帝の御宇に、高祖大師當山を開基して、百王鎭護の伽藍を立られ候しより以來、朝家に悦ある時は、九院擧て掌を合せ、山門に愁ある日は、百司均く心を傾られずと申す事候はず。誠に佛法と王法と相比する故、比叡山と云事、人として知ずと云者候べからず。されば今逆臣朝廷を危んとするに依て、忝も萬乘の聖主、吾山を御憑ありて、臨幸成て候はんずるを、褊し申す衆徒は一人もあるまじきにて候。身不肖に候へ共、定宗一人忠貞を存ずる程ならば、三千の衆徒貳心はあらじと思召し候べし。供奉の官軍、さこそ窮屈に候らめ。先御宿を點じて進せ候べしと

くれ―くらみ

あたら―惜くも

らん。乍レ去事の樣を聞かんとて、大友左近將監をぞ遣されける。去程に、大友と太田判官と、楊梅東洞院にて行合たり。大友は元來少し思慮なき者也ければ、結城に向て、御降參の由を申され候つるに依て、某を御使にて、事の由を能々尋ねよと仰せらるゝにて候。何樣降人の法にて候へば、御物具を解せ給ひ候べしと、あらゝかに言をぞ懸たりける。親光是を聞て、さては將軍はや我心中を推量有て、討手の使に大友を出されたりと心得て、物具を解せよとの御使にて候はゞ、進候はんと云儘に、三尺八寸の太刀を拔て、大友に馳懸り、冑のしころより本頸まで、鋒五寸計ぞ打こみたる。大友も太刀を拔んとしけるが、目やくれけん、一尺計拔懸て、馬より逆に落て死にけり。是を見て大友が若黨二百餘騎、結城が手の者十七騎を中に取籠て、餘さず是を討んとす。結城が郎等共は、元來主と共に討死せんと思切たる者共なれば、中々戰ては何かせんとて、引組では刺違々々、一足も引かず、一所にて十四人まで討れにけり。敵も御方も是を聞て、あたら兵を時の間に失つる事の方見さよと、惜まぬ人こそなかりけれ。

○坂本御皇居幷御願書事

れ、御簾を
かくろ鉤也

事故なく／＼
滞りなくて

門、大廈の構徒に一時の灰燼と成にけり。越王呉を亡して、姑蘇城一片の煙となり、項羽秦を傾て、咸陽宮三月の火を熾にせし、呉越秦楚の古も、是にはよも過じと、淺猿かりし世間なり。

○將軍入洛事 附親光討死事

明れば正月十一日、將軍八十萬騎にて、都へ入給。兼ては合戰事故なくして入洛せば、持明院殿の御方の院宮々の御中に、一人御位に卽奉て、天下の政道をば武家より計申べしと、議定せられたりけるが、持明院の法皇儲王儲君一人も殘せ給ず、皆山門へ御幸成たりける間、將軍自ら萬機の政をし給はん事も叶ふまじ。天下の事如何すべきと、案じ煩うてぞおはしける。結城太田判官親光は、此君に貳心なき者也と、深く憑れ進せて、朝恩に誇る事、傍に人なきが如く也ければ、鳳輦に供奉せんとしけるが、此世の中、とても今は墓々しからじと思ひければ、いかにもして將軍をねらひ奉らん爲に、態都に落止てぞ居たりける。或禪僧を緣に執て、降參仕るべき由を將軍へ申入たりければ、親光が所存、よも誠の降參にてはあらじ。唯尊氏をたばからん爲にてぞある

甲乙人—貴賤上下の人

翡翠の御簾—翡翠は羽の色青し、故に御簾の青きを形容していふ

微月の銀鉤—細き月の形したる銀製のかけが

に、又京都へぞ歸ける。今日は惡日とて、將軍未都へは入給はざりけれ共、四國西國の兵共數萬騎打入て、京白河に充滿たれば、帆掛舟の笠符を見て、此に要彼に遮て打留んとしけれ共、長年懸散ては通り、打破ては圍を出、十七度まで戰けるに、三百餘騎の勢次第々々に打れて、百騎計に成にけり。され共、長年遂に討れざれば、內裏の置石の邊にて、馬より下り冑を脫ぎ、南庭に跪く。主上東坂本へ臨幸成て、數刻の事なれば、四門悉閉て、宮殿正に寂寞たり。然ば早甲乙人共亂入けりと覺て、百官禮儀を調し紫宸殿の上には、賢聖の障子引破られて、雲臺の畫圖此彼に亂たり。佳人晨粧を餝りし弘徽殿の前には、翡翠の御簾半より絕て、微月の銀鉤虛く懸れり。長年つくづくと是を見て、さしも勇める夷心にも、哀の色や增りけん、泪を兩眼に餘て、鎧の袖をぞぬらしける。良且く徘徊て居たりけるが、敵の時の聲聞近く聞えければ、陽明門の前より馬に打乘て、北白河を東へ、今路越に懸て、東坂本へぞ參ける。其後四國西國の兵共洛中に亂入て、行幸供奉の人々の家屋形々々に火を懸たれば、時節辻風はげしく吹布て、龍樓竹苑准后の御所、式部卿親王常盤井殿、聖主御遊の馬場の御所、煙同時に立登りて、炎四方に充滿たれば、猛火內裏に懸て、前殿後宮諸司八省、三十六殿十二

剱閣—蜀の境に在る嶮しき峰

新田左兵衛督、脇屋右衛門佐、竝に江田、大館、堀口美濃守、里見、大井田、田中、籠澤、以下の一族二十餘人、千葉介、宇都宮美濃將監、仁科、高梨、菊池、以下外樣の大名八十餘人、其勢僅に二萬餘騎、鳳輦の跡を守禦して、皆東坂本へと馬を早む。事の騒しかりし有樣、たゞ安祿山が潼關の軍に、官軍忽に打負て、玄宗皇帝自ら蜀の國へ落させ給しに、六軍翠花に隨て、劔閣の雲に迷しに異ならず。爰に信濃國の住人に、勅使河原丹三郎は、大渡の手に向たりけるが、宇治も山崎も破れて、主上早何地共なく東を指て落させ給ひぬと披露有ければ、見危致命臣の義也、我何の顔有てか、亡朝の臣として、不義の逆臣に從はんやと云て、三條河原より父子三騎引返して、鳥羽の造路羅城門の邊にて、腹かき切て死けり。

○長年歸洛事　附内裏炎上事

名和伯耆守長年は、勢多を固めて居たりけるが、山崎の陣破れて、主上早東坂本へ落させ給ぬと聞えければ、是より直に坂本へ馳參らんずる事は安けれども、今一度内裏へ馳まゐらで、直に落行んずる事は、後難あるべしとて、其勢三百餘騎にて、十日の暮程

日の札—日給簡ともいひ殿上人の名を記したる札

玄象牧馬—共に禁中に傳れる琵琶の名

翠花—鳳輦

○主上都落事 附 勅使河原自害事

山崎、大渡の陣破れぬと聞えければ、京中の貴賤上下俄に出來たる事の樣に、周章ふためき倒れ迷て、車馬東西に馳違ふ。藏物財寶を上下へ持運ぶ。義貞義助未馳參らざる前に、主上は山門へ落させ給はんとて、三種の神器を玉體にそへて、鳳輦に召されたれ共、駕輿丁一人もなかりければ、四門を固て候武士共、鎧著ながら徒立に成て、御輿の前後をぞ仕りける。吉田內大臣定房公、車を飛ばせて參せられたりけるが、御所中を走廻て見給ふに、よく近侍の人々も周章たりけりと覺て、明星、日の札、二間の御本尊まで、皆捨置かれたり。內府心閑に靑侍共に執持せて參せられけるが、如何がして見落し給ひけん、玄象、牧馬、達磨の御袈裟、毗須羯磨が作し五大尊、取落されけるこそ淺猿しけれ。公卿殿上人三四人こそ、衣冠正くして供奉せられたりけれ。其外衛府の官は、皆甲冑を著し、弓箭を帶して、翠花の前後に打圍む。此二三年の間、天下僅に一統して、朝恩に誇りし月卿雲客、指たる事もなきに、武具を嗜み、弓馬を好みて、朝義道に違ひ、禮法則に背しも、早かゝる不思議出來るべき前表也と、今こそ思ひ知られたれ。

て戰へとて、討殘されたる官軍三千餘騎、赤井を指て落行ば、山崎の陣は破にけり。角ては敵皇居に亂入りぬと覺るぞ。主上を先山門へ行幸成奉てこそ、心安く合戰をもせめとて、新田左兵衞督、大渡を捨てゝ都へ歸給へば、大友千代松丸、宇都宮治部大輔、降人に成て、將軍の御方に馳加る。義貞義助一手に成て、淀の大明神の前を引時、細川卿律師定禪、六萬餘騎にて追懸たり。新田越後守義顯、後陣に引けるが、三千餘騎にて返合せ、相撲辻を陣に取て、旗を颯と指揚たりけれ共、跡に合戰有とは、義貞には告られず。先山門へ行幸を成奉らん爲也。越後守義顯、矢軍にて且く時を移し、義貞今は内裏へ參られぬらんと覺る程に成て、三千餘騎を二手に分て、東西よりどつとをめいて懸入、大勢に颯と亂合ひ、火を散してぞ鬪たる。唯今まで御方に有て、敵になりぬる大友宇都宮が兵共なれば、越後守を見知て、自餘の勢には目を懸ず、此に取籠め、彼によせ合せて、打留めんとしけるを、義顯打破ては圍り出、取て返ては追退け、七八度まで自戰れけるに、鎧の袖も、冑のしころも、皆切落されて、深手あまた所負ければ、半死半生に切成されて、纔に都へ歸り給ふ。

畠水練—實地に通ぜぬもの

をすべしと、兼て定められたりけるを、播磨の紀氏の者共三百餘騎、拔懸して一番に押寄せたり。官軍敵を小勢と見て、木戸を開き、逆茂木を引除て、五百餘騎拔連て懸出たるに、寄手一たまりもたまらず、追立られて、四方に逃散る。二番に坂東坂西の兵共二千餘騎、櫻井宿の北より、山に副て推寄たり。城中の大將脇屋右衞門佐義助の兵、竝に宇都宮美濃將監泰藤が紀淸兩黨二千餘騎、二の木戸より同時に打出て、東西に開きあひ、南北へ追つ返つ、半時計相戰ふ。汗馬の馳違音、鬨作る聲、山に響き地を動して、雌雄未決、戰半なる時、四國の大將細川卿律師定禪六萬餘騎、赤松信濃守範資二千餘騎、二手に分て押寄たり。官軍敵の大勢を見て、叶はじとや思けん、引返して城の中に引籠る。寄手彌機に乘て、堀に飛漬り、逆茂木引のけて、射れ共痛まず、打て共漂はず、乘越々々攻入ける程に、堀は死人に埋て平地になり、矢間は皆射とぢられて開きえず、城中早色めき立て見えけるが、一番に但馬國の住人長九郎左衞門、同意の兵三百餘騎、旗を卷て降人に出づ。是を見て、洞院按察大納言殿の御勢、文觀僧正の手の者なんど云て、此間畠水練しつる者共、弓を弛し、冑を脫で、我先にと降人に出ける間、城中の官軍力を失て防得ず。さらば淀、鳥羽の邊へ引退て、大渡の勢と一に成

一諾事訖―早速承諾して

一人、竪封したる文を持て、赤松筑前殿の御陣はいづくにて候ぞと、問々走て出來る。筑前守は、八日の宵より、桃井修理亮、土屋三河守、安保丹後守と陣を並て、橋の下に居たりけるが、此使を見附て、急ぎ文を披て見れば、舍兄信濃守範資の自筆にて、義貞以下の逆徒等退治の事、將軍家の御教書到來の間、爲レ擧ニ義兵一播州に罷下る處に、細川卿律師定禪京都に攻上らるゝ間、路次に於て參會す。且は元弘の佳例に任て、範資可レ打ニ先陣一由一諾事訖、今日已に芥河の宿に著候也。明日十日辰刻には山崎の陣へ推寄て、合戰を致すべきにて候。此由を又將軍へ申さしめ給ふべしとぞ書たりける。筑前守此狀を持參して讀上たりければ、將軍を始奉て、吉良、石堂、高、上杉、畠山の人々、今はかうぞと悅合る事不レ斜。此使立歸て後、相圖の程にも成ければ、細川卿律師定禪、二萬餘騎にて櫻井宿の東へ打出、赤松信濃守範資、二千餘騎にて川に副て推寄る。筑前守貞範、川向より旗の紋を見て、小舟三艘に取乘、押渡りて兄弟一所になる。此間東西數百里を隔て、安否更に知らざりしかば、いづくの陣にか討れぬらんと、安き心もなかりつるに、互に恙無りける天運の程の不思議さよと、手に手を取組み、額を合せて、先づ悅泣にぞ泣たりける。山崎の合戰は、元弘の吉例に任せて、赤松先矢合

太刀―いかめしく見ゆる作の太刀
かづき入―被り入り

に違へ、弓手の矢には、右の橋桁に飛移り、馬手の矢には、左の橋桁へ飛移り、直中を指て射る矢をば、矢切但馬にはあらねども、切て落さぬ矢はなかりけり。數萬騎の敵御方立合て見ける處に、又山川判官が郎等二人、橋桁を渡て續たり。頼玄彌力を得て、櫓の下へかづき入、掘立たる柱を、えいや〳〵と引くに、橋の上にかいたる櫓なれば、橋共にゆるぎ渡て、すはやゆり倒しぬとぞ見えたりける。櫓の上なる射手共四五十人、叶はじとや思けん、飛下々々倒れふためいて、二の木戸の内へ逃入ければ、寄手數十萬騎、同音に箙を敲てぞ笑ける。すはや敵は引ぞと云程こそ有りけれ、參河、遠江、美濃、尾張のはやり雄の兵共千餘人、馬を乘放々々、我先にとせき合て渡るに、射落され、せき落されて、水に溺るゝ者數を知ず。其をも不顧、幾程もなき橋の上に、沓の子を打たるが如く立竝で、重々に構たる櫓、かい楯を引破らんと引ける程に、敵や兼て構をしたりけん、橋桁四五間中より折れて、落入る兵千餘人、浮ぬ沈ぬ流行。數萬の官軍同音に、楯を敲てどつと笑ふ。され共野木與一兵衛入道計は、水練さへ達者也ければ、橋の板一枚に乘り、長刀を棹に指て、本の陣へぞ歸りける。是より後は橋桁もつゞかず、筏も叶ず。角てはいつまでか向居べきと、攻あぐんで思ける處に、さも小賢げなる力者

矢切但馬―圓滿院の但馬明禪といふ者能く敵の射る矢を切りて落せる故にかく異名を附せられたる也

裙繩目の大鎧―紺薄青白の三色を竝べて九折の形に染めたる革にて威したる大形の鎧

いか物作の

橋の上なる櫓より、武者一人矢間の板を推開て、治承に高倉宮の御合戰の時、宇治橋を三間引落して、橋桁計殘て候しをだに、筒井淨妙、矢切但馬なんどは、一條二條の大路よりも廣げに、走渡てこそ合戰仕て候ひけるなれ。況や此橋は、かい楯の料に所所板を弛て候へ共、人の渡り得ぬ程の事はあるまじきにて候。坂東より上て京を攻られんに、川を阻たる合戰のあらんずるとは、思ひ設られてこそ候つらめ。舟も筏も事の煩計にて、よも叶候はじ。唯橋の上を渡て、手攻の軍に我等が手なみの程を御覽じ候へと、敵を欺き恥しめて、あざ笑てぞ立たりける。是を聞て、武藏守師直が内に、野木與一兵衛入道頼玄とて、大力の早業、打物取て世に名を知られたる兵有けるが、筒丸の上に裙繩目の大鎧すき間もなく著なし、獅子頭の冑に、目の下の頬當して、四尺三寸のいか物作の太刀をはき、大たて上の臑當、脇楯の下へ引こうで、柄も五尺身も五尺の備前長刀右の小脇にかいこみて、治承の合戰は、音に聞て目に見たる人なし。淨妙にや劣と我を見よ。敵を目に懸る程ならば、天竺の石橋、蜀川の繩橋也とも、渡得ずと云事やあるべきと、高聲に廣言吐て、橋桁の上にぞ進たる。櫓の上、搔楯の陰なる官軍共、是を射て落さんと、差詰引詰散々に射る。面僅に一尺計ある橋桁の上を、歩では矢

討取て候へ。御旗の紋を見候に、宗徒の人々は、大略此陣へ御向有と覺て候。治承には足利又太郎、元暦には佐々木四郎高綱、宇治川を渡して、名を後代に揚候き。此川は、宇治川よりも淺して、而も早からず、爰を渡され候へと、聲々に欺て、箙を敲て咄と笑。武藏相摸の兵共、敵に招れて、如何なる早き淵川なり共、渡さずと云事やあるべき。假令川深して馬人共に沈みなば、後陣の勢其を橋に蹈で渡れかしとて、二千餘騎一度に馬を打入んとしけるを、執事武藏守師直馳廻て、是はそも物に狂ひ給ふか。馬の足もたたぬ大河の、底は早して上は靜なるを、渡さば渡されんずるか。暫閑まり給へ。在家をこぼち筏に組で、渡らんずるぞと、下知せられければ、さしも進みける兵、げにもとや思けん、軈て近邊の在家數百家を壞ち連て、面二三町なる筏をぞ組だりける。武藏相摸の兵共五百餘人こみ乘て、橋より下を渡けるが、河中に打たる亂杭に懸て、棹を差せ共行やらず、敵は雨の降る如く散々に射る。筏はちともはたらかず。兎角しける程に、流れ淀たる浪に、筏の紡を押切られて、竿にも留らず流けるが、組み重ねたる材木共、次第に別々に成ければ、五百餘人乘たる兵、皆水に溺て失にけり。敵は楯を敲て、あれ見よと笑ふ。御方は手をあがいて、如何せんと騒ぎ悲め共叶はず。又此軍散じて後、

欺いて―あざけつて

町―北條家本南都本には丈に作れり

一矢射違―一矢射交すにて僅に矢軍を爲すをいふ

信濃守を先陣にて、其勢都合二萬三千餘騎、正月八日の午刻に、芥河宿に陣を取る。久下彌三郎時重、波々伯部二郎左衛門爲光、酒井六郎貞信、但馬丹後の勢と引合て六千餘騎、二條大納言殿西山の峰堂に陣を取ておはしけるを追落して、正月八日の夜半より、大江山の峠に篝をぞ燒ける。京中には、時に取て弱からん方へ向べしとて、新田の一族三十餘人、國々の勢五千餘騎を貽れたりければ、大江山の敵を追拂ふべしとて、江田兵部大輔行義を大將として、三千餘騎を丹波路へ差向らる。此勢正月八日の曉、桂河を打渡て、朝霞の紛に、大江山へ推寄せ、一矢射違る程こそ有けれ、拔連れて攻上りける間、一陣に進で戰ひける久下彌三郎が舍弟五郎長重、痛手を負て討れにけり。是を見て、後陣の勢一戰も戰ずして、捨鞭を打て引きける間、敵さまでは追ざりけれ共、十里二十里の外まで引かぬ兵はなかりけり。明れば正月九日の辰刻に、將軍八十萬騎の勢にて、大渡の西の橋爪に推寄、橋桁をや渡らまし、川をや渡さましと見給に、橋の上も川の中も、敵の構きびしければ、如何すべきと思案して、時移るまでぞ控たる。時に官軍の陣より、はやりをの者共と見えたる兵百騎計、川端へ進出て、足利殿の搦手に、憑思召て候つる丹波路の御敵どもをこそ、昨日追散して、一人も不レ殘

いふ、三級は三段といふが如し

走—はじき

尉、長九郎左衛門以下、七千餘騎の勢を向らる。寶寺より川端まで塀を塗り、堀を掘て、高櫓出櫓三百餘箇所にかき竝たり。陣の構、何となくゆゝしげには見えたれ共、俄に拵たる事なれば、塀の土も未干、堀も淺し、又防ぐべき兵も、京家の人、僧正の御房の手の者などと號る者共多ければ、此陣の軍、はか〳〵しからじとぞ見えたりける。大渡には、新田左兵衛督義貞を總大將として、里見、鳥山、山名、桃井、額田、田中、籠澤、千葉、宇都宮、菊池、結城、池、風間、小國、河内の兵共、一萬餘騎にて固たり。是も橋板三間まばらに引落して、半より東にかい楯をかき、櫓をかきて、川を渡す敵あらば横矢に射、橋桁を渡る者あらば走を以て推落す樣にぞ構へたる。馬の懸上りに、逆茂木ひしと引懸て、後に究竟の兵共、馬を引立引立竝居たれば、如何なる生喰磨墨に乘る共、こゝを渡すべしとは見えざりけり。去程に、將軍は八十萬騎の勢を率し、正月七日、近江國伊岐洲の社に、山法師成願坊が三百餘騎にて楯籠たりける城を、一日一夜に攻落して、八日に八幡の山下に陣を取る。細川卿律師定禪は、四國中國の勢を率して、正月七日播磨の大藏谷に著たりけるに、赤松信濃守範資、我國に下て旗を擧ん爲に、京より逃下けるに行逢て、互に悅思ふ事限なし。且は元弘の佳例也とて、

壁書—張紙

たらさせ—情欲を勸めて欺く意と汗を垂らす意とを兼ぬ

河伯—河の神

龍門三級—絳州龍門縣にあり河口にて水險にして魚鼈も上り得ずと

入ざりければ、軍勢の心を勇せん爲に、今度の合戰に於て忠あらん者には、不日に恩賞行はるべしと云ふ壁書を、決斷所に押されたり。是を見て、其事書の奥に、例の落書をぞしたりける。

かく計たらさせ給ふ綸言の、汗の如くになどながるらん。

去程に、正月七日に、義貞内裏より退出して、軍勢の手分あり。勢多へは、伯耆守長年に、出雲、伯耆、因幡三箇國の勢二千騎を副て向らる。供御瀬、膳所瀬二箇所に、大木を數千本流懸て、大綱をはり、亂杙を打、引懸々々つなぎたれば、如何なる河伯水神なり共、上をも游がたく、下をも潛難し。宇治へは、楠判官正成に、大和、河内、和泉、紀伊國の勢五千餘騎を副て向らる。橋板四五間はね迦して、河中に大石を疊あげ、逆茂木を繁くえり立て、東の岸を高く屛風の如くに切立たれば、河水二にわかれて、白浪漲落たる事、恰も龍門三級の如く也。敵に心安く陣を取せじとて、橘小島、槇島、平等院のあたりを、一宇も殘さず燒拂ける程に、魔風大厦に吹懸て、宇治の平等院の佛閣寶藏、忽に燒ける事こそ淺猿けれ。山崎へは、脇屋右衛門佐を大將として、洞院按察大納言、文觀僧正、大友千代松丸、宇都宮美濃將監泰藤、海老名五郎左衛門

合せて一果
して其通り

にて敵を支へんとて、尾張國に居られたりけるを、急ぎ先上洛すべしとぞ召れける。匹他九郎龍馬を賜て、早馬に打けるが、此馬にては、四五日の道をも、一日には輒く打歸んずらんと思けるに合せて、げにも十二月十九日の辰刻に京を立て、其日の午刻に近江國愛智川宿にぞ著たりける。彼龍馬俄に病出して、軈て死にけるこそ不思議なれ。匹他乘替に乘替々々、日を經て尾張國に下著し、此仔細を左兵衛督に申ければ、先京都へ引返して、宇治、勢多を支てこそ合戰を致さめとて、勅使に打連てぞ上られける。

○將軍御進發大渡山崎等合戰事

去程に、新玉年立歸れ共、内裏には朝拜もなし。節會も行れず。京白河には家をこぼちて堀に入れ、財寶を積で持運ぶ。唯何と云沙汰もなく、物騒くぞ見えたりける。斯る程に、將軍已に八十萬騎にて、美濃尾張へ著給ぬと云程こそあれ、四國の御敵も近附ぬ、山陰道の朝敵も、唯今大江山へ取あがるなんど聞えしかば、此間召に應じて上り集たる國々の軍勢共、十方へ落行ける程に、洛中には、殘り止る勢、一萬騎までもあらじとぞ見えたりける。其も皆勇る氣色もなくて、何方へ向へと下知せられけれ共、耳にも聞

横言—讒言
四夷八蠻—四方の敵を指していふ

とぞ告たりける。又其日の酉刻に、能登國石動山の衆徒の中より、使者を立て申けるは、去月二十七日、越中の守護普門藏人利淸竝に井上、野尻、長澤、波多野の者共、將軍の御敎書を以て、兩國の勢を集め、叛逆を企る間、國司中院少將定淸、就二要害一被レ楯二籠當山一處、今月十二日、彼逆徒等、以二雲霞勢一押寄間、衆徒等與二義卒一雖レ輕二身命一陣全き事を得ずして、遂に定淸於二戰場一被レ墜レ命、寺院悉兵火の爲に囘祿せしめ畢。是より逆徒彌猛威を振うて、近日已に京都に攻上らんと仕候。急ぎ可レ被レ下二御勢一とぞ申ける。是のみならず、加賀に富樫介、越前に尾張守高經の家人、伊豫に河野對馬入道、長門に厚東の一族、安藝に熊谷、周防に大内介が一類、備後に江田、弘澤、宮、三善、出雲に富田、伯耆に波多野、因幡に矢部、小幡、此外五畿七道四海九州、殘所なく起ると聞しかば、主上を始まゐらせて、公家被官の人々、一人として肝を消さずと云事なし。其比如何なる嗚呼の者かしだりけん、內裏の陽明門の扉に、一首の狂歌をぞ書たりける。

賢王の横言に成る世中は、上を下へぞ返したりける。

四夷八蠻起合て、急を告る事隙なかりければ、匹他九郎を勅使にして、新田義貞猶道

和氣宿—今の和氣郡和氣村

合力を請く—援助を請ふ

手に於て討れ候畢。官軍遂に戰負て、備前國に引退、三石城に楯籠る處に、當國の守護松田十郎盛朝、太田判官全職、高津入道淨源當國に下著して、已に御方に加る間、又三石より國中へ引返、和氣宿に於て合戰を致す刻、松田十郎敵に屬する間、官軍數十人討れて、熊山城に引籠る。其夜當國の住人内藤彌二郎、御方の陣に有ながら、潜に敵を城中へ引入、攻劫間、諸卒悉行方を知らず沒落候畢。高德が一族等、此時纔に死を免る者、身を山林に隱し、討手の下向を相待候。若早速に御勢を下されずば、西國の亂、御大事に及べしとぞ申たりける。兩日の早馬天聽を驚しければ、こは如何すべきと周章ありける處に、又翌日の午刻に、丹波國より碓井丹波守盛景早馬を立て申けるは、去十二月十九日の夜、當國の住人久下彌三郎時重、波々伯部次郎左衞門尉、中澤三郎入道等を相語て、守護の館へ押寄る間、防戰と雖も、劫戰不慮に起に依て、御方戰破れて、遂に攝州へ引退く。雖然、猶他の力を勸て其恥を雪ん爲に、使者を赤松入道に通じて、合力を請る處に、圓心野心を挾む歟、返答にも及ばず、剩將軍の御教書と號し、國中の勢を相催す由、風聞在人口。加之但馬、丹後、丹波の朝敵等、備前、備中の勢を待、同時に山陰山陽の兩道より攻上るべき由承及候。御用心有るべし

目代―昔國司の不在の時代理して事務を扱ひしもの

坂東坂西の者共、殘る所なく定禪に屬する間、其勢已に及三千餘騎、近日宇多津に於て兵船を點じ、備前の兒島に上りて、已に京都に攻上んと仕候。御用心有べしとぞ告申ける。かゝりけれ共、京都には新田越後守義顯を大將として、結城、名和、楠以下宗徒の大名共、大勢にて有しかば、四國の朝敵共、縱數を盡して攻上る共、何程の事か有るべきと、さまでの仰天もなかりけるに、同十一日、備前國住人兒島三郎高德が許より、早馬を立て申けるは、去月二十六日、當國の住人佐々木三郎左衛門尉信胤、同田井新左衛門尉信高等、細川卿律師定禪が語ひを得て、備中國に打越、福山城に楯籠る間、彼國の目代、先手勢計を以て合戰を致と雖も、國中の勢催促に從はず、無勢なるに依て引退く刻、朝敵勝に乘し間、目代が勢數百人討死し畢。其翌日に、小坂、河村、庄、眞壁、陶山、成合、那須、市川以下、悉く朝敵に馳加る間、程なく其勢三千餘騎に及べり。茲に備前國の地頭御家人等、吉備津宮に馳集て、朝敵を相待處に、淺山備後守、備後國の守護職を賜て下向する間、其勢を幷て、同二十八日福山に押寄攻戰し日、高德が一族等、大手を攻破て、已に城中に打入る刻、野心の國人等、忽に翻て御方を射る間、目代淨智が子息、七條辨房、小周防大貳房、藤井六郎、佐井七郎以下三十餘人、搦

あしか、洲俣—あしかは美濃國羽島郡洲俣は同安八郡にありあしかは洲俣川に注ぐ
天龍河—今川家北條家本等には矢矧宿に作る

も陣々まばらに成て、いづくに人あり共見え候はず。爰にてもし數日を送らば、後に敵出來て、路を塞ぐ事有ぬと覺候。哀今少し引退て、あしか、洲俣を前に當てゝ、京近き國々に御陣を召され候へかしと申されければ、諸大將、げにも皇居の事おぼつかなく候へば、さのみ都遠き所の長居は、然るべし共存候はずとぞ同じける。義貞、さらば兎も角も、面々の御意見にこそ從ひ候はめとて、其日天龍河を立てこそ、尾張國まで引れけれ。

○諸國朝敵蜂起事

かゝる處に、十二月十一日、讃岐より高松三郎頼重早馬を立て、京都へ申けるは、足利の一族細川卿律師定禪、去月二十六日當國鷺川庄に於て、旗を擧る處に、詫間香西これに與して、則三百餘騎に及ぶ。是に依て、頼重時刻を廻らさず退治せしめん爲に、先づ屋島の麓に打寄て、國中の勢を催す處に、定禪遮て夜討を致せし間、頼重等身命を捨て防戰ふと雖も、屬する所の國勢忽に翻て、剰御方を射る間、頼重が老父、並に一族十四人、郎等三十餘人、其場に於て討死仕畢。一陣遂に彼が爲に破られし後、藤橘兩家、

よと申ければ、後に渡ける栗生左衞門、鎧著ながら川中へ飛つかり、二町計游附て、馬と舍人とを左右の手に差揚て、肩を越ける水の底を閑に歩で、向の岸へぞ著たりける。此馬の落入ける時、橋二間計落て、渡るべき樣もなかりけるを、舟田入道と大將と、二人手に手を取組で、ゆらりと飛渡り給ふ。其跡に候ける兵二十餘人、飛かねて且し徘徊じけるを、伊賀國住人に名張八郎とて、名譽の大力の有けるが、いで渡して取せんとて、鎧武者の上卷を取て中に提、二十人までこそ投越けれ。今二人殘て有けるを、左右の脇に輕々と挾で、一丈餘落たる橋をゆらりと飛で、向の橋桁を蹈けるに、蹈所少も動かず、誠に輕げに見えければ、諸軍勢遙に是を見て、あないかめし、何も凡夫の技に非ず。大將と云、手の者共と云、何れを捨べし共覺ね共、時の運に引れて、此軍に打負給ひぬるうたてさよと、云はぬ人こそなかりけれ。其後浮橋を切て、つき流されたれば、敵縱寄來る共、左右なく渡すべき樣もなかりけるに、引立たる勢の習なれば、大將と同心に成て今一軍せんと思ふ者無りけるにや。矢矧に一日逗留し給ひければ、昨日まで二萬餘騎有つる勢、十方へ落失て、十分が一もなかりけり。早旦に、宇都宮治部大輔、大將の前に來て申されけるは、今夜官軍共、夜もすがら落候ひけると承が、げに

引立たる勢—引足のついたる兵

今井見附―駿河國富士郡今井の邊

さがる勢―後れ遲さがる軍勢

に成にけり。今はかうと勇て、今井見附を過る處に、又旗九旗差揚て、小山の上に敵二千騎計控たり、降人に出たりつる甲斐源氏に、此敵は誰ぞと問給へば、是は武田小笠原の者共にて候也と答ふ。さては攻よとて、四方より攻上りけるを、高山薩摩守義遠、此敵を餘さず討んとせば、御方も若干亡べし。大敵をば開て攻るにこそ利は候へと申ければ、由良、舟田、げにもとて東一方をば開て、三方より攻上りければ、此敵共遠矢少々射捨て、東を指てぞ落行ける。是より後は、敢て遮る敵もなかりければ、手負を相助、さがる勢を待連て、十二月十四日の暮程に、天龍河の東の宿に著給にけり。時節河上に雨降て、河の水岸を浸せり。長途に疲れたる人馬なれば、渡す事叶まじとて、俄に在家をこぼちて、浮橋をぞ渡されける。此時もし將軍の大勢後より追懸てばし寄たらましかば、京勢は一人もなく亡べかりしを、吉良、上杉の人々、長僉議に三四日逗留有ければ、川の浮橋程なく渡すまして、數萬騎の軍勢殘所なく、一日が中に渡てけり。諸卒を皆渡しはてゝ後、舟田入道と大將義貞朝臣と二人、橋を渡り給ひけるに、如何なる野心の者かしたりけん、浮橋を一間、張綱を切てぞ捨たりける。舍人馬を引て渡りけるが、馬と共に倒に落入て、浮つ沈つ流けるを、舟田入道、誰かある、あの御馬引上げ

二巴—巴の形を二つつけたるをいふ

共、目の前に主を討せて、心うき事に思ければ、篠塚を討んと、馬より飛下々々打て懸れば、篠塚かい違ては蹴倒し、蹴倒しては首を取、足をもためず、一所にて九人迄こそ討たりけれ。是を見て、敵數十萬騎有と云ども、敢て懸合せん共せざりければ、義貞閑々と伊豆の府を打て通り給ふに、宵より落て、其邊にまぎれ居たる官軍共、此彼より馳附ける程に、義貞の勢二千騎計に成にけり。此勢にては、縱百重千重に取籠たり共、などか懸破て通らざるべきと悦て行處に、木瀬川に旗一旒打立て、勢の程二千騎計見えたり。近々と打寄て、旗の紋を見れば、二巴を旗にも笠符にも書たり。さては小山判官にてぞ有らん、一騎も餘さず打取とて、山名、里見の人々、馬の鼻を竝べて、をめいて懸りける程に、小山が勢四角八方に懸散されて、百騎計は討れにけり。かくて浮島原を打過れば、松原の陰に、旗三旒差て、勢の程五百騎計控たり。是は敵か御方歟と、在家の者に問給へば、是は昨日竹下より一宮を追進せて、所々にて合戰し候し甲斐源氏にて候とぞ答申ける。さてはよき敵ぞ、取籠て討とて、二千餘騎の勢を二手に分て、北南より押寄れば、叶はじとや思けん、一矢をも射ずして、降人に成てぞ出たりける。此勢を先に打せて、遙に行けば、中黑の旗を見附て、落隱居たる官軍共、彼方此方より馳附て、七千餘騎

柏の葉の形三つをつけたるをいふ

好程の合手—手頃の合手といふ意

か御方歟と問給へば、熱田の大宮司百騎計にて待奉る。其勢を幷て、野七里に打出給たれば、鷹の羽の旗一旒指揚て、菊池肥後守武重、三百餘騎にて馳參る。爰に散所法師一人西の方より來りけるが、舟田が馬の前に畏て、是はいづくへとて御通り候やらん。昨日の暮程に、脇屋殿竹下の合戰に討負て、落させ給候し後、將軍の御勢八十萬騎、伊豆の府に居餘て、木の下、岩の陰、人ならずと云所候はず。今此御勢計にて御通り候はん事、努々叶まじき事にて候とぞ申ける。是を聞て、栗生と篠塚と打竝べて候けるが、鐙蹈張つとのびあがり、御方の勢を打見て、哀兵共や、一騎當千の武者とは、此人々をぞ申べき。敵八十萬騎に、御方五百餘騎、好程の合手也。いでいで懸破て道開て參せん。續けや人々と勇めて、數萬騎打集つたる敵の中へ懸て入。府中にて、一條次郎三千餘騎にて戰ひけるが、新田左兵衛督を見て、よき敵と思ひけるにや、馳竝で組んとしけるを、篠塚中に隔て、打ける太刀を弓手の袖に受留、大の武者をかい掴で、弓杖二丈計ぞ投たりける。一條も大力の早業成ければ、抛られたれ共倒れず、漂ふ足を蹈直して、猶義貞に走懸らんとしけるを、篠塚馬より飛で下り、兩膝合て倒に蹴倒す。倒るゝと均く、一條を起しも立ず、抑へて首かき切ぞ指揚ける。一條が郎等

催し勢―臨時に催し集めたる兵
旗を側めて―旗を他へ向けて
三つ葉柏―

○官軍引二退箱根一事

追手箱根路の合戰は、官軍戰ふ毎に利を得しかば、纔に控へて支たる足利左馬頭を追落て、鎌倉へ入らんずる事、掌の中に有と、寄手皆勇み勇で、明るを遲しと待ける處に、搦手より軍破れて、寄手皆追散されぬと聞えければ、諸國の催し勢、路次の軍に降人に出たりつる坂東勢、幕を捨、旗を側めて、我先にと落行ける間、さしも廣き箱根山に、すきまも無く充滿したりつる陣に、人あり共見えず成にけり。執事舟田入道は、一の攻口に、敵を攻て居たりけるが、敵陣に、竹下の合戰は將軍打勝せ給て、敵を皆追散して候也と、早馬の參て罵る聲を聞て、誠やらん不審く思ければ、唯一騎御方の陣々を打廻て見るに、幕計殘て、人のある陣は無りけり。さては竹下の合戰に、御方早打負てけり。かくては叶まじと思て、急ぎ大將の陣へ參て、事の仔細を申ければ、義貞且く思案し給けるが、何樣陣を少し引退て、落行勢を留てこそ、合戰をもせめとて、舟田入道を打つれて。箱根山を引て下給ふ、其勢僅に百騎には過ざりけり。且く馬を控へて後を見給へば、例の十六騎の黨馳參たり。又北なる山に添て、三つ葉柏の旗の見えたるは、敵

又も戰はず—再び戰はずの意

合て、つゞいて返しつる二騎の兵を切落し、首を取てぞ指擧たる。義助是を見給て、死たる人の蘇生したる樣に悅て、今一涯の勇を成し、且く人馬を休めよとて、又元の陣へぞ引返されける。一陣餘に鬪ひくたびれしかば、新手を入替て戰はしめんとしける處に、大友左近將監、佐々木鹽冶判官が、千餘騎にて後に控へたるが、如何思けん、一矢射て後旗を卷て將軍方に馳加り、却て官軍を散々に射る。中書王の御勢は、初度の合戰に若干討れて、又も戰はず。右衞門佐の兵は、兩度の懸合に、人馬疲れて無勢也。是ぞ新手にて、一軍もしつべき者と憑れつる大友鹽冶は、忽に翻て、親王に向奉て弓を引、右衞門佐に懸合せて戰しかば、官軍爭か堪ふべき。敵の後を遮らぬ前に、大手の勢と成合んとて、佐野原へ引退く。仁木、細川、今川、荒川、高、上杉、武藏、相摸の兵共、三萬餘騎にて追懸たり。是にて、中書王の股肱の臣下と憑み思召たりける二條中將爲冬討れ給ければ、右衞門佐の兵共、返合々々三百騎所々にて討死す。是をも顧ず、引立たる官軍共、我先にと落行ける程に、佐野原にもたまり得ず、伊豆の府にも支ずして、搦手の寄手三百餘騎は、海道を西へ落て行く。

つ引きたるをいふ

片引兩―一つ引兩の事か

三に成けるが、敵御方引分れける時、如何にして紛れたりけん、郎等三騎相共に、敵の中にぞ殘りける。此人幼稚なれども、心早き人にて、笠符引切て投捨、髮を亂し顏に振懸て、敵に不レ被二見知一と、さわがぬ體にて御座ける。父義助是をば不レ知、義治が見えぬは、討れぬるか、又生捕れぬるか、二の間をば離れじ。彼が死生を見ずば、片時の命生ても何かはすべき。勇士の戰場に命を捨る事、唯是子孫の後榮を思ふ故也。されば未幼き身なれども、片時の別を悲んで、此戰場にも伴ひつる也。其死生を知らでは、如何さて有べきとて、鎧の袖に泪をかけ、大勢の中へ懸入り給けるが、誠に父の子を思ふ志、今に初ぬ事なれども、哀なる御事哉。いざや御供仕らんとて、義助の兵共、轡を並べ、三百餘騎、主を討せじと懸入ける。義助の一度の懸に、指もの大勢戰疲れて、一度にばつとぞ引たりける。是に利を得て、義助尙追レ北進まれける處に、式部大輔義治、我が父と見成して、馬を引返し、主從四騎にて、脇屋殿に馳加はらんと、馬を進められけるを、誰とは不レ知、片引兩の笠符著たる兵二騎、御方が返すぞと心得て、やさしくこそ見えさせ給候へ。御供申て討死し候んとて、連て是も返しけり。式部大輔義治は、父の義助の勢の中へつと懸入り樣に、若黨にきと目くはせせられければ、義治の郎從寄

龍粧―龍の天に昇らんとする狀にて旗の風に靡きたるさまを云ふ也
大中黑―丸の中に横に一文字を巾廣に引きたるをいふ
二引兩―旗の紋に筋二

ぬ者を、云處虛事か實事か、戰て手並の程を見給へとて、一同に鬨を咄と揚げ、喚てこそ懸たりけれ。官軍は敵をかさに受て、麓に控へたる勢なれば、何かは一溜も可ㇾ溜、一戰にも不ㇾ及して、捨鞭を打てぞ引たりける。是を見て、土岐、佐々木、一陣に進で、言にも似ぬ人々哉。蓬し返せと恥しめて、追立追立攻ける間、後れて引兵五百餘騎、或は生捕れ、或は被ㇾ討、殘少に成にけり。手合の合戰をし違へて、官軍漂て見えければ、仁木、細川、高、上杉の人々、勇進で、中書王の御陣へ、會釋もなく打て懸る。されば引漂たる京勢にて、可ㇾ叶樣無りけるを、中書王の副將軍脇屋右衛門佐、云甲斐なき者共が、憖に一陣に進て、御方の力を失こそ遺恨なれ。こゝを散さでは叶まじとて、七千餘騎を一手になして、馬の頭を雁行に連ねて、旗の足を龍粧に進めて、横合に閑々と懸られける。勝誇たる敵なれば、何かは少しも疼むべき。十文字に合て八文字に破る。大中黑と二引兩と、二の旗を入替入替、東西に靡き、南北に分れ、萬卒に面を進め、一身に死をぞ爭ひける。誠に兩方名を被ㇾ知たる兵共なれば、誰かは一人も可ㇾ遁。互に討つ討れつ、馬の蹄を浸す血は、混々として洪河の流るゝが如く也。死骸を積める地は、累々として屠所の肉の如く也。無慙と云も疎也。爰に脇屋右衛門佐子息式部大輔とて、今年十

比叡山の麓にあれば緣を以ていへる也

中書王—中務卿の唐名此は尊良親王を指す

矢だうなに—矢だくなにの音便、だくなは損の義

田三郎左衞門、同四郎左衞門、栗生左衞門、篠塚伊賀守、難波備前守、河越參河守、長濱六郎左衞門、高山遠江守、園田四郎左衞門、靑木五郎左衞門、同七郎左衞門、山上六郎左衞門とて、黨を結たる精兵の射手十六人あり。一樣に笠符を附て、進にも同じく進み、又引時も共に引ける間、世の人之を十六騎が黨とぞ申ける。彼等が射ける矢には、楯も物具もたまらざりければ、向ふ方の敵を射すかさずと云事なし。執事舟田入道は、馳廻て士卒を諫め、大將軍義貞は、一段高き處に諸卒の振舞を被二實驗一ける間、名を重じ、命を輕ずる、千葉、宇都宮、菊池、松浦の者共、勇進で戰ける間、鎌倉勢馬の足を立兼て、引退者數を不レ知けり。斯る處に、竹下へ被レ向たる中書王の御勢、諸庭の侍、北面の輩五百餘騎、憖武士に先を不レ被レ懸とや思けん、錦の御旗を先に進め、竹下へ押寄て、敵未一矢も不レ射先に、一天君に向奉て引レ弓放レ矢者、不レ蒙二天罰一哉。命惜くば脫レ冑降人に參れと、聲々にぞ呼りける。是を見て、尾張右馬頭、舍弟式部大輔、土岐彈正少弼賴遠、舍弟道謙、三浦因幡守、佐々木佐渡判官入道、赤松筑前守貞則、自レ宵一陣に有けるが、敵の馬の立樣、旗の紋、京家の人と覺るぞ。矢だうなに遠矢な射そ。唯拔連れて懸れとて、三百餘騎竝轡、弓馬の家に生れたる者は、名をこそ惜め、命をば惜ま

紅下濃—袖草摺を四段に分けて上より漸次に紅の濃きをいふ

冑の眞額—冑の前立。

坂本樣の袈裟切—袈裟がけの形に切るをいふ、坂本は

重、松浦黨を始として、國々の大名三十餘人、都合其勢七萬餘騎、大手にてぞ被レ向ける。同日午刻に軍始まりしかば、大手搦手敵御方、互に時を作りつゝ、山川を傾け、天地を動し、叫喚で攻戰ふ。去程に、菊池肥後守武重、箱根軍の先懸して、敵三千餘騎を遙の峯へ捲上げ、坂中に楯を突竝て、一息繼で係へたり。是を見て、千葉、宇都宮、河越、高坂、愛曾、熱田の大宮司、一勢一勢陣を取て、曳や聲を出して攻上攻上、叫喚で戰たり。中にも道場坊助註記祐覺は、兒十人、同宿三十餘人、紅下濃の鎧を一樣に著て、兒は紅梅の作花を、一枝づゝ冑の眞額に挿たりけるが、楯に外れて一陣に進みけるを、武藏相摸の荒夷共、兒とも云はず唯射よとて、散々に指詰て射ける間、面に進みたる兒八人、矢庭に倒れて、小篠の上にぞ伏たりける。黨の者共是を見て、首を取らんと拔連て、打て下けるを、道場坊が同宿共、兒を討せて何か可レ恊。三十餘人太刀長刀の鋒を竝べて、手負の上を飛越飛越、坂本樣の袈裟切に成佛せよと云儘に、追詰追詰切て廻りける間、武士散々に被二切立一て、北なる峯へ颯と引て、且し息をぞ繼たりける。此隙に祐覺が同宿共、面々の手負を肩に引懸て、麓の陣へぞ下りける。義貞の兵の中に、杉原下總守、高田薩摩守義遠、葦堀七郎、藤田六郎左衞門、川波新左衞門、藤

七里といひ更に四十二町許を山七里といへり

目くらべ—にらみあひ

照射—夏の頃獵師が鹿を招き寄せんが爲に火串に松をともす火

舍弟道謙、佐々木佐渡判官、赤松雅樂助貞則、斯樣に目くらべして、鎌倉に集居ては叶まじ。人の事はよし兎も角もあれ、いざや先竹下へ馳向て、後陣の勢の著ぬ先に、敵寄せば、一合戰して討死せんとて、十一日まだ宵に、竹下へ馳向ふ。其勢僅なりしかば、物寂しくぞ見えたりける。されども義を守る勇士なれば、强ち多少に不レ可レ依とて　竹下へ打襄て、敵の陣を遙に直下たれば、西は伊豆の府、東は野七里山七里に、燒竝べたる篝火の數、幾千萬とも不レ知けり。唯晴天の星の影、滄海に移る如く也。さらば御方にも篝火を燒せんとて、雪の下草打拂ひ、處々刈集めて、幽に火を吹著たれば、夏山の茂が下に夜を明す照射の影に不レ異。されども武運强ければにや、敵今夜は寄來らず、夜已に明なんとしける時、將軍鎌倉を打立せ給へば、仁木、細川、高、上杉、是等を宗徒の兵として、都合其勢十八萬騎、竹下へ著給へば、左馬頭直義、六萬餘騎にて箱根峠へ著給ふ。去程に、明れば十二日辰刻に、京勢共伊豆の府にて手分して、竹下へは中務卿親王に、卿相雲客十六人、副將軍には、脇屋治部大輔義助、細屋右馬助、堤卿律師、大友左近將監、佐々木鹽冶判官高貞を相副て、已上其勢七千餘騎、搦手にて被レ向けり。箱根路へは、又新田義貞宗徒の一族二十餘人、千葉、宇都宮、大友千代松丸、菊池肥後守武

陸沈―沒落

野七里山七里―伊豆國田方郡本山中の邊箱根山を登るに麓より四十二町許な野

斯樣に候上は、とても遁ぬ一家の勅勘にて候へば、御出家の儀を思召飜されて、氏族の陸沈を御助候へかしと被申ければ、將軍此綸旨を御覽じて、謀書とは思も寄り給はず。誠にさては一門の浮沈此時にて候ける。さらば無力。尊氏も旁と共に弓矢の義を專にして、義貞と死を共にすべしとて、忽に脫道服給て、錦の直垂をぞ被召ける。されば其比、鎌倉中の軍勢共が、一束切とて、髻を短くしけるは、將軍の髮を紛かさんが爲也けり。さてこそ事叶はじとて、京方へ降參せんとしける大名共も、右往左往に落行んとしける軍勢も、俄に氣を直して馳參じければ、一日も過ざるに、將軍の御勢は、三十萬騎に成にけり。

○箱根竹下合戰事

去程に、同十二月十一日兩陣の手分有て、左馬頭直義箱根路を支へ、將軍は竹下へ向べしと被定にけり。此間度々の合戰に打負たる兵共、未氣を直さで不勇、昨日今日馳集たる勢は、大將を待て猶豫しける間、敵已に伊豆の府を打立て、今夜野七里山七里を越ると聞えしかば、足利尾張右馬頭高經、舍弟式部大輔、三浦因幡守、土岐彈正少弼賴遠、

宿紙―山城の神屋川にて製するすきがへしの紙

に綸旨を二三通書て、將軍に見せ進せ候はゞやと被レ申ければ、左馬頭、兎も角も事のよからん樣に計ひ沙汰候へとぞ被レ任たりける。伊豆守、さらばとて、宿紙を俄に染出し、能書を尋て、職事の手に少しも不レ違是を書。其詞云。

足利宰相尊氏、左馬頭直義以下一類等、誇二武威一輕二朝憲一之間、所レ被二征罰一也。彼輩縱雖レ爲二隱遁身一、不レ可レ寛二刑罰一。深尋二彼在所一、不日可レ令二誅戮一。於レ有二戰功一者、可レ被二抽賞一者、綸旨如レ此。悉レ之以レ狀。

建武二年十一月二十三日　　右中辨光守

武田一族中

小笠原一族中

へと、同文章に名字を替て、十餘通書てぞ出したりける。左馬頭直義朝臣是を持て、急ぎ建長寺へ參り給て、將軍に對面有て、泪を押へて宣ひけるは、當家勅勘の事、義貞朝臣が申勸るに依て、則新田を討手に被レ下候間、此一門に於ては、縱遁世降參の者なり共、求尋て可レ誅と議し候なる。叡慮の趣も、又同く遁るゝ所候はざりける。先日、矢矧、手越の合戰に、討れて候し敵の膚の守に入て候し綸旨共、是御覽候へ。

へば、落行勢共、巻レ弦脱レ冑、降人に出る者數を不レ知。宇都宮遠江入道、元來惣領宇都宮京方に有しかば、縁にふれて馳著たり。佐々木佐渡判官入道、太刀打して痛手數多所に負ふ、舍弟五郎左衞門は手越にて討れしかば、世の中さてとや思けん、降參して義貞の前陣に打けるが、後の箱根の合戰の時、又將軍へは參ける。官軍此時若足をもためず、追懸たらましかば、敵鎌倉にも怺ふまじかりけるを、今は何と無くとも、東國の者共御方へぞ參らんずらん、其上東山道より下りし搦手の勢をも可レ待とて、伊豆の府に被二逗留一けるこそ、天運とは云ながら、落情かりし事共なり。去程に、足利左馬頭直義朝臣は、鎌倉に打歸て、合戰の樣を申さん爲に、將軍の御屋形へ被レ參たれば、四門空く閉て人もなし。あらゝかに門を敲て、誰か有と問給へば、須賀左衞門出合て、將軍は矢矧の合戰の事を聞召候しより、建長寺へ御入候て、已に御出家候はんと仰候しを、面々樣々申留めて置進せて候。御本結は切せ給て候へども、未だ御法體には成せ給はずとぞ申ける。左馬頭、高、上杉の人々是を聞て、角ては彌軍勢共憑を失ふべし。如何せんと仰天せられけるを、上杉伊豆守重能且思案して、將軍縱御出家有て、法體に成せ給候共、勅勘遁るまじき樣をだに聞召候はゞ、思召直す事などか無て候べき。謀

伊豆の府—三島の驛

る處に、宇都宮、仁科、愛曾伊勢守、熱田攝津大宮司、後馳にて三千餘騎、義貞の陣に著たりけるが、矢矧の合戰に不ㇾ合事を無念に思て、打寄と侔しく、鷺坂へ推寄せて、矢一をも不ㇾ射、拔連て攻たりける。引立たる鎌倉勢、鷺坂をも又被ㇾ破て、立足もなく引けるが、左馬頭直義朝臣の兵二萬餘騎、新手にて馳著たり。敗軍是に力を得て、手越に陣をぞ取たりける。同十二月五日、新田義貞、矢矧、鷺坂にて降人に出たりける勢を幷て八萬餘騎、手越河原に打莅で敵の勢を見給へば、新手加はりたりと覺て、見しより大勢也。縱何百萬騎の勢加はりたりとも、氣疲れたる敗軍の士卒半交はりて、跡より引かば、敵立直す事不ㇾ可ㇾ有、唯懸て見よとて、脇屋右衞門佐義助、千葉介、宇都宮六千餘騎にて、手越河原に推寄て、東西へ渡つ渡されつ、午刻の始より、酉の下まで十七度までぞ戰たる。夜に入ければ、兩方人馬を休めて、河を隔て篝火を燒、初は月雲に隱れて、夜已に深にければ、義貞の方より、究竟の射手を勝て、藪の陰より敵の陣近く忍び寄り、後陣に控たる勢の中へ、雨の降如く込矢をぞ射たりける。數萬の敵是に周章騷で、跡より引ける間、新手の兵共、命を輕ずる勇士共、是は如何なる事ぞ、返せ〳〵と云ながら、落行勢に被ㇾ引立て、鎌倉までぞ落たりける。されば、新田義貞度々の軍に打勝て、伊豆の府に著給

疊楯―蝶番にて疊むやうに造りたる楯

香象―象の名この象は河を渡るに底を徹して流を截るといはる

軍大島、額田、籠澤、岩松が勢に打懸る。官軍七千餘騎、喚いて眞中に懸入て、東西南北へ懸散し、半時計ぞ揉合ける。高家の兵又五百餘騎被レ討て、又本陣へ引退く。三番に仁木、細川、今川、石堂、一萬餘騎下の瀬を渡て、官軍の總大將新田義貞に打て懸りたり。義貞は、兼てより馬廻に勝れたる兵を七千餘騎圍ませて、栗生、篠塚、名張八郎とて、天下に名を得たる大力を眞先に進ませ、八尺餘の金棒に、疊楯の廣く厚きを突並べ、縱敵懸るとも、謾に不レ可レ懸。敵引とも四度路に不レ可レ追。懸寄せて切て落せ。中を破んとせば、馬を透間もなく打寄せて、轡を並べよ。一足も敵には進むとも、退く心不レ可レ有と、諸軍を諫て被レ下知ける。敵一萬餘騎、陰に閉て圍まんとすれども不レ圍、陽に開て懸亂さんとすれども敢て不レ亂。懸入ては討れ、破て通は切て被レ落、少しも不レ漂戰ける間、人馬共に氣疲れて、左右に分て控たる處に、總大將義貞、副將軍義助、七千餘騎にて香象の浪を蹈で大海を渡らん勢の如く、閑に馬を歩ませ、鋒を並て進みける間、敵一萬餘騎、其勢に辟易して、河より向へ引退き、其勢若干被レ討にけり。日已に暮ければ、合戰は明日にてぞ有んずらんと、鎌倉勢皆河より東に陣を取て居けるが、如何思けん、爰にては不レ叶とて、其夜矢矧を引退、鷺坂に陣をぞ取たりける。斯

相懸に懸て—總攻に攻めて

矢矧河に推寄、敵の陣を見渡せば、其勢二三十萬騎もあるらんと覺敷て、自河東、橋の上下三十餘町に打圍て、雲霞の如くに充滿たり。左兵衞督義貞、長濱六郎左衞門尉を呼て、此河何か渡つべき處ある。委く見て參れと宣ければ、長濱六郎左衞門唯一騎、河の上下を打廻り、軈て馳歸て申けるは、此河の樣を見候に、渡つべき所は三箇所候へ共、向の岸高して、屏風を立たるが如くなるに、敵鏃を汰て支て候。されば此方より渡ては、中々敵に利を被得と存候。唯且河原面に御控候て、敵を被欺ば、定て河を渡てぞ懸り候はんずらん。其時相懸に懸て、河中へ敵を追て、手痛くあつる程ならば、などか勝事を一戰に得では候べきと申ければ、諸卒皆此議に同じて、態と敵に河を渡させんと、河原面に馬の懸場を殘し、西宿の端に、南北二十餘町に控て、射手を河中の洲崎へ出し、遠矢を射させてぞおびきける。案に不違、吉良左兵衞佐、土岐彈正少弼頼遠、佐々木佐渡判官入道、彼此其勢六千餘騎、上の瀬を打渡て、義貞の左將軍、堀口、桃井、山名、里見の人々に打て懸る。官軍五千餘騎、相懸に懸て、互に命を不惜、火を散て攻戰ふ。吉良左兵衞佐の兵三百餘騎被討て、本陣へ引退けば、官軍も二百餘騎ぞ被討ける。二番には高武藏守師直、越後守師泰、二萬餘騎にて、橋より下の瀬を渡して、義貞の右將

相支へ、合戰仕て運の程を見候はんと被申ければ、左馬頭直義朝臣、不斜喜で、軈鎌倉を打立て、夜を日に繼で被急けり。相隨ふ人々には、吉良左兵衛尉、同三河守、子息三河三郎、石堂入道、其子中務大輔、同右馬頭、桃井修理亮、上杉伊豆守、同民部大輔、細川陸奥守顯氏、同刑部大輔頼春、同式部大輔繁氏、畠山左京大夫國淸、同宮内少輔、足利尾張右馬頭高經、舍弟式部大輔時家、仁木太郎頼章、舍弟二郎義長、今川修理亮、岩松禪帥頼有、高武藏守師直、越後守師泰、同豐前守、南部遠江守、同備前守、同駿河守、大高伊豫守、外樣の大名には、小山判官、佐々木佐渡判官入道道譽、舍弟五郎左衛門尉、三浦因幡守、土岐彈正少弼頼遠、舍弟道謙、宇都宮遠江守、佐竹左馬頭義敦、舍弟常陸守義春、小田中務大輔、武田甲斐守、河越三河守、狩野新介、高坂七郎、松田、河村、土肥、土屋、坂東の八平氏、武藏七黨を始として、其勢二十萬七千餘騎、十一月二十日鎌倉を打立て、同二十四日三河國矢矧の東宿に著にけり。

○矢矧鷺坂手越河原鬪事

去程に、十一月二十五日の卯刻に、新田左兵衛督義貞、脇屋右衛門佐義助、六萬餘騎にて、

染衣—黒染の衣

引レ弓放レ矢事不レ可レ有。さても猶罪科無レ所レ遁、剃髪染衣の貌にも成て、君の御爲に不忠を不レ存處を、子孫の爲に可レ殘と、氣色を損じて宣ひもはてず、後の障子を引立て、内へぞ入給ける。斯りしかば、甲冑を帶して參集たる人々、皆興を醒して退出し、思の外なる事哉と、私語かぬ者ぞ無りける。角て一兩日を過ける處に、討手の大將一宮を始め進せて、新田の人々三河遠江まで近ぬと騒ぎければ、上杉兵庫入道道欽、細川阿波守和氏、佐々木佐渡判官入道道譽、左馬頭殿の御方へ參て、此事如何可レ有と評定しけるに、將軍の仰もさる事なれども、如レ今公家一統の御代とならんには、天下の武士は、指たる事もなき京家の人々に附順て、唯奴婢僕從の如くなるべし。是諸國の地頭御家人の心に憤り、望を失といへども、今までは武家の棟梁と成ぬべき人なきに依て、心ならず公家に相從者也。されば此時、御一家の中に思召し立御事ありと聞たらんに、誰か馳參らで候べき。是こそ當家の御運の可レ開初にて候へ。將軍も一往の理の推處を以、斯樣に仰候とも、實に御身の上に禍來らば、よもさては御座候はじ。兎やせまし角や可レ有と長僉議して、敵に難所を越れなば、後悔すとも益あるまじ。將軍をば鎌倉に殘留め奉て、左馬頭殿御向候へ。我等面々に御供仕て、伊豆駿河邊に

猿子、落合、仁科、伊木津志、中村、村上、纐纈、高梨、志賀、眞壁十郎、美濃權介助重、是等を宗徒の侍として、其勢都合五千餘騎、黒田宿より東山道を經て、信濃國へ入ければ、當國の國司堀河中納言二千餘騎にて馳加る、其勢を合せて一萬餘騎、大井城を攻落して、同時に鎌倉へ寄んと、大手の相圖をぞ待たりける。討手の大勢已に京を立ぬと鎌倉へ告ける人多ければ、左馬頭直義、仁木、細川、高、上杉の人々、將軍の御前へ參じて、已に御一家を傾申されん爲に、義貞を大將にて、東海、東山の兩道より攻下候なる。敵に難所を被越なば、防戰ふ共甲斐有まじ。急ぎ矢矧薩埵山の邊に馳向て、御支候へかしと被申ければ、尊氏卿黙然として、暫は物も不宣。良有て、我譜代弓箭の家に生れ、僅に源氏の名を殘すといへ共、承久以來相摸守が顧命に隨て、汚家羞名恨を積だりしを、今度繼絶職達征東將軍宣、興廢位極從上三品。是臣が依微功といへども、豈非君厚恩哉。戴恩忘恩事は、爲人者所不爲也。抑今君の有逆鱗處は、兵部卿親王を奉失たると、諸國へ軍勢催促の御教書を下したると云兩條の御咎也。是一も尊氏が所爲に非ず。此條々謹で事の仔細を陳申さば、虚名遂に消て、逆鱗などか靜ならざらん。旁は兎も角も身の進退を計ひ給へ。於尊氏向君奉

大膳亮、桃井遠江守、鳥山修理亮、細屋右馬助、大井田式部大輔、大島讃岐守、岩松民部大輔、籠守澤入道、額田掃部助、金谷治部少輔、世良田兵庫助、羽川備中守、一井兵部大輔、堤宮内卿律師、田井藏人大夫、是等を宗徒の一族として、末々の源氏三十餘人、其勢都合七千餘騎、大將之前後に打圍だり。他家の大名には、千葉介貞胤、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武重、大友左近將監、厚東駿河守、大内新介、佐々木鹽冶判官高貞、同加治源太左衛門、熱田攝津大宮司、愛曾伊勢三郎、遠山加藤五郎、武田甲斐守、小笠原信濃守、高山遠江守、河越三河守、兒玉庄左衛門、杉原下總守、高田薩摩守義遠、藤田三郎左衛門、難波備前守、田中三郎右衛門、舟田入道、同長門守、由良三郎左衛門、同美作守、長濱六郎左衛門、山上六郎左衛門、波多野三郎、高梨、小國、河内、池、風間、山徒には道場坊、是等を宗徒の兵として、諸國の大名三百二十餘人、其勢都合六萬七千餘騎、前陣已に尾張の熱田に著ければ、後陣は未だ相坂の關、四宮河原に支たり。東山道の勢は搦手なれば、大將に三日引下て都を立けり。其大將には、先大智院宮、彈正尹宮、洞院左衛門督實世、持明院兵衛督入道道應、園中將基隆、二條中將爲冬、侍大將には江田修理亮行義、大館左京大夫氏義、島津上總入道、同筑後前司、饗庭、石谷、

中議の節會—中議は中儀とあるべく、元日の宴新嘗祭等の如き宮中の儀式

節度—節刀

偏執の心—片意地の心

召具し參內せらる。馬物具誠に爽に勢有て、被ㇾ出立たり。內辨、外辨、八座、八省、階下に陣を張り、中議の節會被ㇾ行て、節度を被ㇾ下。治承四年に、權亮三位中將惟盛を、賴朝追罰の爲に被ㇾ下時、鈴許給りたりしは、不吉の例なればとて、今度は天慶、承平の例をぞ被ㇾ追ける。義貞節度を賜て、二條河原へ打出て、先尊氏卿の宿所二條高倉へ、舟田入道を差向て、時の聲を三度擧させ、流鏑三矢射させて、中門の柱を切落す。是は嘉承三年讃岐守正盛が、義親追罰の爲に、出羽國へ下し時の例也とぞ聞えし。其後一宮中務卿親王、五百餘騎にて三條河原へ打出させ給たるに、內裏より被ㇾ下たる錦の御旗を指上たるに、俄に風烈く吹て、金銀にて打て著たる月日の御紋きれて、地に落たりけるこそ不思議なれ。是を見る者、あな淺猿や、今度の御合戰はかゞしからじと、忌思はぬ者は無りけり。去程に、同日の午刻に、大將新田左兵衛督義貞都を立給ふ。元弘の初に、此人さしもの大敵を亡して、忠功人に超たりしかども、尊氏卿君に咫尺し給に依て、抽賞さまでも無りしが、陰德遂に露て、今天下の武將に備り給ければ、當家も他家も推竝て、偏執の心を失ひつゝ、附不ㇾ隨云者無りけり。先當家の一族には、舍弟脇屋右衛門佐義助、式部大輔義治、堀口美濃守貞滿、綿打刑部少輔、里見伊賀守、同

卿親王を奉ニ禁殺一由、初て達ニ上聞一。此一事中處實ならば、尊氏直義等罪責難レ遁。但以ニ片言一獄レ訟事、卒爾に出て、制すとも不レ可レ止。暫待ニ東說實否一、尊氏が罪科を可レ被レ定歟と被レ申ければ、諸卿皆此議に被レ同、其日の議定は終にけり。斯る處に、大塔宮の御介錯に附進せ給ひし南の御方と申女房、鎌倉より歸り上て、事の樣有の儘に奏し申させ給ければ、さては尊氏直義が叛逆無ニ仔細一けりとて、叡慮更に不レ穩。是をこそ不思議の事と思召す處に、又四國西國より足利殿の成るゝ軍勢催促の御敎書とて、數十通進覽す。就レ之諸卿重て僉議有て、此上は非ニ疑處一、急に討手を可レ被レ下とて、一宮中務卿親王を東國の御管領に成し奉り、新田左兵衞督義貞を大將軍に定て、國國の大名共をぞ被レ添ける。元弘の兵亂の後天下一統に歸して、萬民無事に誇といへども、其弊猶殘て、四海未だ安堵の思を不レ成處に、此事出來て、諸國の軍勢共催促に隨へば、こは如何なる世中ぞやとて、安き意も無りけり。

○節度使下向事

斯ける程に、十一月八日新田左兵衞督義貞朝臣、朝敵追罰の宣旨を下し賜て、兵を

囹圄—牢獄

附驥尾—蒼蠅驥尾に附いて千里に行くより、後秀なる者の後について事を爲すをいふ

宮、豈非此謂乎。而尊氏奸假宿意於公議外、奉苦尊體於囹圄中、人面獸心之積惡是可忍也、孰不可忍乎。其罪七。直義朝臣劫相摸次郎時行軍旅、不戰而退鎌倉之時、竊遣使者奉誅兵部卿親王。其意偏在將傾國家之端。此事隱雖未達叡聞、世之所知遍界何藏。大逆無道之甚、千古未聞此類。其罪八。斯八逆者、乾坤且所不容其身也。若刑措不用者、四維方絶八柱再傾、可無益噬臍。抑義貞一擧大軍、百戰破堅、萬卒不顧死、而退逆徒於干戈下、得靜謐於尺寸中。而尊氏附驥尾超險雲、挫彈丸殺籠鳥、大功所建、孰與綸言所最矣。尊氏漸爲奪天下、憂義士在朝、請誅義貞。而義貞傾忠心盡正義、爲朝家輕命、先勾萌奏罰尊氏。國家用捨、孰與理世安民之政矣。望請乾臨明照中正、加斷割於昆吾劍、可令誅罰尊氏直義以下逆黨等之由、下賜宣旨、忽拂浮雲擁蔽、將耀白日之餘光。義貞誠惶誠恐謹言。

建武二年十月日

とぞ被書たりける。則諸卿參列して、此事如何可有と、僉議有けれ共、大臣は重祿閉口、小臣は憚聞不出言處に、坊門宰相清忠進出て被申けるは、今兩方の表奏を披て、倩案一致之道理、義貞が指申處之尊氏が八逆、一々に其罪不輕。就中兵部

―兩者の爭に乘ずること

柳營―將軍の陣營、此には大塔宮をいふ

塞外―都を隔てたる他邦

死者、尊氏猶把鈇鉞當强敵乎。退而憶之、渠儂忠非彼、須羞愧亡卒之遺骸。今以功微爵多、頻猜義貞忠義。剩暢讒口之舌、巧吐浸潤之譖。其怨無不一入邪路。義貞賜朝敵追罰綸旨、初起于上野者、五月八日也。尊氏附官軍殿攻六波羅、同月七日也。都鄙相去八百餘里、豈一日中得傳言哉。而義貞京洛听敵軍破擧旗之由、載于上奏、謀言亂眞、豈不然乎。其罪一。尊氏長男義詮才率百餘騎勢、還入鎌倉者、六月三日也。義貞隨百萬騎士、立亡凶黨者、五月廿二日也。而義詮爲三歲幼稚之大將、致合戰之由、掠上聞之條、雲泥萬里之差違、何足言、其罪二。仲時時益等敗北之後、尊氏未被勅許、自專京都之法禁、誅親王之卒伍、非司行法之咎、太以不淺。其罪三。兵革後蠻夷未心服、本枝猶不堅根之間、奉下竹苑於東國、已令苦柳營于塞外之處、尊氏誇超涯皇澤、欲興家立威。潛上無禮之過、無據遁。其罪四。前亡餘黨纔存、揚蟷蜋忿之日、尊氏申賜東八箇國管領、不敍用以往勅裁、養寇堅恩澤、害民事利欲。違勅悖政之逆行、無甚於焉。其罪五。天運循環、雖無不往還、成敗歸一統、大化傳萬葉、偏出于兵部卿親王智謀。而尊氏構種々讒、遂奉陷流刑、訖。讒臣亂國之暴逆、誰不惡之。其罪六。親王贖刑事、爲押侈歸正而已。古武丁放桐

げ陣を布きたるをいふ

行—位高く官卑き時に先づ位を書きて行字を注する也

三五—三皇五帝

散木—不才

乘鷸蚌之弊

謀レ内、章邯降レ楚之謂レ乎。大逆之基可レ莫レ甚二於是一焉。兆前撥レ亂、武將所レ全レ備也。乾臨早被レ下二勅許一、誅二伐彼逆類一、將レ致二海内之安靜一、不レ堪二懇歎之至一。尊氏誠惶誠恐謹言。

建武二年十月日

とぞ被レ書たりける。此奏狀未だ内覽にも不レ被レ下ければ、遍く知人も無處に、義貞朝臣是を傳聞て、同く奏狀をぞ上ける。其詞曰、

從四位上行左兵衞督兼播磨守源朝臣義貞誠惶誠恐謹言。

請下早誅二伐逆臣尊氏直義等一徇中天下上狀

右謹案二當今聖主經二緯天地一、德光二古今一、化蓋二三五一。所下以神武搖二鋒端一、聖文定中宇宙上也。爰有二源家末流之昆弟尊氏直義一、不レ恥二散木之陋質一、竝蹈二青雲之高官一。聽二其所一レ功、堪レ拍レ掌一笑。太平初山川震動、略レ地拉レ敵。南有二正成一、西有二圓心一。加之四夷蜂起、六軍虎窺。此時尊氏隨二東夷命一盡レ族上洛。潛看二官軍乘一レ勝、有レ意レ免レ死。然猶不レ決二心於一偏一、相二窺運於兩端一之處、名越尾張守高家、於二戰場一墜レ命之後、始與二義卒一軍二丹州一。天誅革レ命之日、忽乘二鷸蚌之弊一、快爲二狼狽之行一。若夫非二義旌約一レ京、高家致二

雞肋—無用のものなれども猶棄て難きに譬ふ

鳥使—鳥は梟とあるべく、走使飛脚

魚麗—陣法の名、此には唯兵を擧

阿波守和氏を使にて、一紙の奏狀を被捧たり。其狀曰

參議從三位兼武藏守源朝臣尊氏誠恐誠惶謹言。

請早誅罰義貞朝臣一類致天下泰平狀

右謹考往代列聖德四海、無不賞顯其忠罰當其罪。若其道違則纔雖建草創遂不得守文。肆君子所愼、庸愚所輕也。去元弘之初、東藩武臣恣振逆威、頻蔑朝憲。禍亂起于玆、國家不獲安。爰尊氏以不肖之身、麾同志之師。自是定死於一途、士、運倒戈之志、卜勝於兩端轟、有與義之誠。聿振臂致一戰之日、得勝於瞬目之中、攘敵於京畿之外。此時義貞朝臣有恣雞肋之貪心、戮鳥使之急課。其罪大而無據運身。不得止、軍起不慮。聞尊氏已於洛陽退逆徒、履虎尾就魚麗。義貞始以誅朝敵爲名。而其實、在窮鼠却嚙猫、鬪雀不辭人。斯日義貞三戰不得勝、屈而欲守城深壁之處、尊氏長男義詮、爲三歲幼稚大將、起下野國。其威動遠、義卒不招馳加。義貞囊沙背水之謀一成、而大得破敵。是則戰雖在他、功隱在我。而義貞掠上聞、貪抽賞、忘下愚、望大官、世殘賊國蠹害也。不可不誡之。今尊氏再爲鎭先亡之餘殃、久苦東征之間。佞臣在朝讒口亂眞。是偏生於義貞阿黨裏。豈非趙高

二引兩—丸の中に二線を引きたる紋

恩賞にも預らんと思ければ、東八箇國の兵共、心替して、大半は千壽王殿の手にぞ附たりける。加之、義貞若宮の拜殿に坐して、首共實檢し、御池にて太刀長刀を洗ひ、結句神殿を打破て、重寶共を披見し給に、錦の袋に入たる二引兩の旗あり。是は養祖八幡殿、後三年の軍の時、願書を添て被レ籠し御旗也。奇特の重寶と云ながら、中黑の旗にあらざれば、當家の用に無レ詮と宣けるを、足利殿方の人是を聞て、彼旗を奉レ乞。義貞此旗不レ出しかば、兩家の確執合戰に及ばんとしけるを、上聞を恐憚て默止けり。斯樣の事共重疊有しかば、果して今新田足利一家の好を忘れ、怨讎の思をなし、互に亡さんと牙を砥の志顯れて、早天下の亂と成にけるこそ淺猿けれ。依レ之讒口傍に有て、亂真事多かりける中に、今度尊氏卿、相摸次郎時行が討手を承て、平二關東一後、今隱謀の企ある由叡聞に達しければ、主上逆鱗有て、縱其忠功莫大なりとも、不義を重ば可レ爲二逆臣一條勿論也。則追伐の宣旨を可レ被レ下と御憤有けるを、諸卿僉議有て、尊氏が不義雖レ達二叡聞一未レ知二其實一、罪の疑しきを以て、功の誠あるを被レ棄事は非二仁政一と、親房、公明頻に諫言を被レ上しかば、さらば法勝寺の慧鎭上人を鎌倉へ奉レ下、事の樣を可二尋窮一に定まりにけり。慧鎭上人奉レ勅、關東へ下らんと欲給ける其日、尊氏卿細川

分國―領分

確執―中違のこと

○新田足利確執奏狀事

去程に、足利宰相尊氏卿は、相摸次郎時行を退治して、東國纔て靜謐しぬれば、勅約の上は何の仔細か可ㇾ有とて、未だ宣旨をも不ㇾ被ㇾ下、押て足利征夷將軍とぞ申ける。東八箇國の管領の事は、勅許有し事なればとて、今度箱根相摸河にて合戰の時、有ㇾ忠輩に被ㇾ行㆓恩賞㆒。先立て新田の一族共拜領したる東國の所領共を、悉く闕所に成して、給人をぞ被ㇾ附ける。義貞朝臣是を聞て、安からぬ事に被ㇾ思ければ、其替に我分國越後、上野、駿河、播磨などに、足利の一族共の知行の庄園を押へて、家人共にぞ被ㇾ行ける。依ㇾ之新田足利中惡成て、國々の確執無㆓休時㆒。其根元を尋ぬれば、去ぬる元弘の初、義貞鎌倉を攻亡して、功諸人に勝れたりしかば、東國の武士共は、皆我下より可ㇾ立と被ㇾ思ける處に、尊氏卿の二男千壽王殿三歳に成給しが、軍散じて六月三日下野國より立歸て、大藏谷に御座ける。又尊氏卿都にて抽賞異ㇾ他なりと聞えて、是を輒く上聞にも達し

にて京都へ攻上けるも、越前と加賀との境、大聖寺と云所にて、敷地、上木、山岸、瓜生、深町の者共が僅の勢に打負て、骨を白刃の下に碎き、恩を黄泉の底に報ぜり。時行は已に關東にして滅び、時兼は又北國にて被討し後は、末々の平氏共、少々身を隱し、貌を替て、此の山の奥、彼の浦の邊にありといへ共、今は平家の立直る事難有とや思けん、其昔を忍びし人も、皆怨敵の心を改て、足利相公に屬し奉らずと云者無りけり。さてこそ、尊氏卿の威勢自然に重く成て、武運忽に開けければ、天下又武家の世とは成にけり。

り。時節秋の急雨一通して、河水岸を浸しければ、源氏よも渡しては懸らじと、平家少し油斷して、手負を扶け、馬を休めて、敗軍の士を集んとしける處に、夜に入て、高越後守二千餘騎にて上の瀬を渡し、赤松筑前守貞範は中の瀬を渡し、佐々木佐渡判官入道道譽と、長井治部少輔は、下の瀬を渡して、平家の陣の後へ廻り、東西に分れて、同時に時をどつと作る。平家の兵、前後の敵に被レ圍て、叶はじとや思けん、一戰にも不レ及、皆鎌倉を指て引けるが、又腰越にて返合せて、葦名判官も被レ討にけり。始遠江の橋本より、佐夜中山、江尻、高橋、箱根山、相摸河、片瀬、腰越、十間坂、此等十七箇度の戰に、平家二萬餘騎の兵共、或は討れ或は創を蒙りて、今僅に三百餘騎に成ければ、諏方三河守を始として、宗徒の大名四十三人、大御堂の内に走入り、同く皆自害して、名を滅亡の跡にぞ留めける。其死骸を見るに、皆面の皮を剝で、何れをそれとも見分ざれば、相摸次郎時行も、定て此内にぞ在らんと、聞人哀を催しけり。三浦介入道一人は、如何して遁たりけん、尾張國へ落て、舟より上りける所を、熱田大宮司是を生捕て、京都へ上せければ、則六條河原にて首を被レ刎けり。是のみならず、平家再興の計略、時や未至らざりけん、又天命にや違ひけん、名越太郎時兼が、北陸道を打從へて、三萬餘騎

かゝる天災に逢ふ。此戰はかぐ〳〵しからじとさゝやきけれ共、さて有べき事ならねば、重て日を取り、名越式部大輔鎌倉を立て、夜を日に繼で路を急ける間、八月七日前陣已に遠江佐夜中山を越けり。足利相公此由を聞給て、六韜の十四變に、敵經二長途一來急可レ擊と云へり。是太公武王に敎る所の兵法也とて、同八日の卯刻に、平家の陣へ押寄て、終日鬪暮されけり。平家も、此を前途と、心を一つにして相當る事三十餘箇度、入替入替戰ひけるが、野心の兵後に在て、跡より引けるに力を失て、橋本の陣を引退き、佐夜中山にて支たり。源氏の眞前には仁木細川の人々、命を義に輕じて進みたり。平家の後陣には、諏方祝部身を恩に報じて、防戰ひけり。兩陣互に勇氣を勵して、終日相戰けるが、平家此をも被レ破て、箱根の水飲峠へ引退く。此山は海道第一の難所なれば、源氏無二左右一懸得じと思處に、赤松筑前守貞範、さしも嶮き山路を、短兵直に進んで、敵の中へ懸入て、前後に當り、左右に激しける勇力に被レ拂て、平家又此山をも支へず、大崩まで引退く。清久山城守返合せて、一足も不レ引鬪けるが、源氏の兵に被レ組て、腹切る間もや無りけん、其身は忽に被レ虜、郎從は皆被レ討にけり。路次數箇度の合戰に打負て、平家やたけに思へ共不レ叶。相摸河を引越て、水を阻て支へた

御諱―天子の御本名後醍醐天皇御諱は尊治

壓にうてゝ―壓にうたれて

請る旨に任て、無二左右一勅許有けるこそ、始終如何とは覺えける。但征夷將軍の事は、關東靜謐の忠に可レ依、東八箇國の管領の事は、先不レ可レ有二仔細一とて、則綸旨を被二成一下ける。是のみならず、忝も天子の御諱の字を被レ下て、高氏と名のられける高の字を改めて、尊の字にぞ被レ成ける。尊氏卿東八箇國を管領して、所望輙く道行て、征夷將軍の事は、今度の忠節に可レ依と勅約有ければ、時日を不レ回、關東へ被二下向一けり。吉良兵衛佐を先立て、我身は五日引さがりて、進發し給けり。都を被レ立ける日は、其勢僅に五百餘騎有しか共、近江、美濃、尾張、三河、遠江の勢馳加て、駿河國に著給ける時は、三萬餘騎に成にけり。左馬頭直義、尊氏卿の勢を并て五萬餘騎、矢矧宿より取て返して、又鎌倉へ發向す。相摸次郎時行是を聞て、源氏は若干の大勢と聞ゆれば、待戰して敵に氣を呑れては不レ叶。先ずる時は人を制するに利有とて、我身は鎌倉に在ながら、名越式部大輔を大將として、東海東山兩道を押て攻上る。其勢三萬餘騎、八月三日鎌倉を立んとしける夜、俄に大風吹て、家々を吹破ける間、天災を遁んとて、大佛殿の中へ逃入り、各身を縮て居たりけるに、大佛殿の棟梁、微塵に折れて倒れける間、其内に集り居たる軍兵共五百餘人、一人も不レ殘壓にうてゝ死にけり。戰場に赴く門出に、

徳宗領―北條氏の領分の稱

相公―宰相卽ち高氏をいふ

唯義の向ふ所を思ふに、入江庄と云ば、本徳宗領にて有しを、朝恩に下し賜り、此二三年が間、一家を顧る事日來に增れり。是天恩の上に猶義を重ねたり。此時爭か傾敗の弊に乘て、不義の振舞を致さんとて、春倫則御迎に參じければ、直義朝臣不斜喜て、頓て彼等を召具し、矢矧宿に陣を取て、是に暫汗馬の足を休め、京都へ早馬をぞ被立ける。依之諸卿議奏有て、急ぎ足利宰相高氏卿を討手に可被下に定けり。則勅使を以て、此由を被仰下ければ、相公勅使に對して被申けるは、去ぬる元弘の亂の始、高氏御方に參ぜしに依て、天下の士卒皆官軍に屬して、勝事を一時に決候き。然れば、今一統の御代、偏に高氏が武功と可云。抑征夷將軍の任は、代々源平の輩功に依て其位に居する例不可勝計。此一事殊に爲朝爲家望深き所也。次には亂を鎭め、治を致す以謀、士卒有功時節に賞を行にしくはなし。若註進を經て、軍勢の忠否を奏聞せば、擧達道遠して、忠戰の輩、勇を不可成。然れば暫東八箇國の管領を被許、直に軍勢の恩賞を執行ふ樣に、勅裁を被成下、夜を日に繼で罷下て、朝敵を退治仕るべきにて候。若此兩條勅許を蒙ずんば、關東征罰の事、可被仰付他人候とぞ被申ける。此兩條は、天下治亂の端なれば、君も能々御思案あるべかりけるを、申

のまゝ劒の名となしたる也、事祖庭事苑第三に出づ

で、天下の妖を示す事あり。張華、雷煥と云ける二人の臣、樓臺に上て此星を見るに、舊き獄門の邊より、劒の光天に上て、惡星と鬪ふ氣あり。張華怪んで光の指す所を掘せて見るに、件の干將鏌鎁の劒、土五尺が下に埋れてぞ殘りける。張華、雷煥是を取て、天子に獻らん爲に、自是を帶し、延平津と云澤の邊を通りける時、劒自拔て、水の中に入けるが、雌雄二の龍と成て、遙の浪にぞ沈みける。淵邊斯樣の前蹤を思ければ、兵部卿親王の刀の鋒を嚙切らせ給て、御口の中に被含たりけるを見て、左馬頭に近附奉らじと、其御首をば藪の傍に棄けるとなり。

○足利殿東國下向事　附時行滅亡事

直義朝臣は鎌倉を落て被上洛けるが、其路次に於て、駿河國入江庄は、海道第一の難所也。相摸次郎が與力の者共、若道をや塞んずらんと、士卒皆是を危く思へり。依之其所の地頭入江左衛門尉春倫が許へ使を被遣て、可憑由を被仰たりければ、春倫が一族共、關東再興の時到りぬと料簡しける者共は、左馬頭を奉討、相摸次郎殿に馳參らんと云けるを、春倫つく〴〵思案して、天下の落居は、愚蒙の我等が可知處に非ず、

干將鏌鋣――刀鍛冶の夫婦の名なそ

客眉間尺が首を取て、則楚王に献る。楚王大に喜で、是を獄門に被レ懸たるに、三月まで其首不レ爛瞪レ目切レ歯、常に歯嚼をしける間、楚王是を恐て、敢て不レ近給、是を鼎の中に入れ、七日七夜までぞ被レ煮ける。餘につよく被レ煮て、此首少し爛て、目を塞ぎたりけるを、今は仔細非じとて、楚王自鼎の蓋を開させて、是を見給ける時、此首、口に含だる劍の鋒を、楚王にはつと奉レ吹懸。劍の鋒不レ誤、楚王の首の骨を切ければ、楚王の頭忽に落て、鼎の中へ入にけり。楚王の首と眉間尺が首と、煎揚る湯の中にして、上になり下に成り嚙合けるが、動ば眉間尺が首は下に成て、嚙負ぬべく見えける間、客自己が首を掻落て、鼎の中へ投入、則眉間尺が首と相共に、楚王の首を嚙破て、眉間尺が首は、死して後父の怨を報じぬと呼り、客の首は泉下に朋友の恩を謝しぬと悦ぶ聲して、共に皆煮爛れて失にけり。此口の中に含だりし三寸の劍、燕の國に留て、太子丹が劍となる。太子丹、荊軻秦舞陽をして秦始皇を伐んとせし時、自差圖の箱の中より飛出て、始皇帝を追奉りしが、藥の袋を被レ投懸ながら、口六尺の銅の柱の半を切て、遂に三に折て失たりし匕首の劍是也。其雌雄二の劍は、干將鏌鋣の劍と被レ云て、代々の天子の寶たりしが、陳の代に至て俄に失にけり。或時天に一の悪星出

知音―知己

面三尺有て、眉間一尺有ければ、世の人其名を眉間尺とぞ名附ける。年十五に成ける時父か書置ける詞を見るに、

日出北戸。南山其松。
松生於石。劍在其中。

と書り。さては此劔北戸の柱の中に在と心得て、柱を破て見るに、果して一の雌劔あり。眉間尺是を得て、哀楚王を奉討、父の仇を報ぜばやと思ふ事骨髄に徹り、楚王ち眉間尺が憤を聞給て、彼世にあらん程は、不心安被思ければ、數萬の官軍を差遣して、之を被攻けるに、眉間尺一人が勇力に被摧、又其雌劔の刃に觸れて、死傷する者幾千萬と云數を不知。斯る處に、父干將が古の知音なりける甑山人來て、眉間尺に向て云けるは、我汝が父干將と交を結ぶ事年久かりき。然れば、其朋友の恩を謝せん爲、汝と共に楚王を可奉討事を可謀。汝若父の仇を報ぜんとならば、持所の劔の鋒を三寸嚙切て、口の中に含で可死。我汝が首を取て楚王に獻ぜば、楚王悅で必汝が首を見給はん時、口に含める劔のさきを楚王に吹懸て、共可死と云ければ、眉間尺大に悅で、則雌劔の鋒三寸嚙切て、口の内に含み、自己が首をかき切て、客い前にぞ指置ける。

楚王の夫人云々―祖庭事苑巻三に詳也

取らん爲に、戰を習はし、劍を好む事年久し。或時楚王の夫人、鐵の柱に倚傍て、涼み給けるが、心地唯ならず覺て、忽懐妊し給けり。十月を過て後、生産の席に苦で、一の鐵丸を産給ふ。楚王之を怪しとし給はず、如何樣是金鐵の精靈なるべしとて、干將と云ける鍛冶を被レ召、此鐵にて寶劍を作て進すべき由を被レ仰。干將此鐵を賜て、其妻の鏌鎁と共に呉山の中に行て、龍泉の水に淬て、三年が内に、雌雄の二劍を打出せり。劍成て未レ奏前に、鏌鎁、干將に向て云けるは、此二の劍、精靈暗に通じて、坐ながら怨敵を可レ滅劍也。我今懐妊せり。産子は必猛く勇める男なるべし。然れば一の劍をば楚王に獻るとも、今一の劍をば隱して、我子に可ニ與給一と云ければ、干將鏌鎁が申に附て、其雄劍一を楚王に獻じて、一の雌劍をば、未だ胎内にある子の爲に、深く隱してぞ置ける。楚王雄劍を開て見給ふに、誠に精靈有と見えければ、箱の中に收て被レ置たるに、此劍箱の中にして、常に悲泣の聲あり。楚王怪て、群臣に其泣故を問給ふに、臣皆申さく、此劍必雄と雌と二つ可レ有。其雌雄一所に不レ在間、是を悲で泣者也とぞ奏しける。楚王大に忿て、則干將を被ニ召出一、典獄の官に仰て、首を被レ刎けり。其後鏌鎁子を生り。面貌尋常の人に替て、長の高事一丈五尺、力は五百人が力を合せたり。

腰の刀―この頃の腰の刀は鞘巻なりとぞ
脇差―鐙の引合に差したる懐劍也

腰の刀を拔て、御頸を掻んとしければ、宮御頸を縮て、刀のさきをしかと呀させ給ふ。淵邊したゝかなる者なりければ、刀を奪はれ進らせじと、引合ひける間、刀の鋒一寸餘折て失にけり。淵邊其刀を投捨、脇差の刀を拔て、先御心もとの邊を二刀刺す。被レ刺て宮少し弱らせ給ふ體に見えける處を、御髪を摑で引上て、則御首を掻落す。牢の前に走出で、明き所にて御首を奉レ見、噬切らせ給ひたりつる刀の鋒、未だ御口の中に留て、御眼猶生たる人の如し。淵邊是を見て、さる事あり、斯樣の首をば、主には見せぬ事ぞとて、側なる藪の中へ投捨てぞ歸りける。去程に、御かいしやくの爲に、御前に候はれける南の御方、此有樣を見奉て、餘の恐しさと悲しさに、御身もすくみ、手足も立たで坐しけるが、暫肝を靜めて、人心附ければ、藪に捨たる御首を取上たるに、御膚も猶不レ冷、御目をも塞せ給はず、唯元の氣色に見えさせ給へば、こは若夢にてや有らん、夢ならばさむるうつゝのあれかしと、泣悲み給ひけり。遙に有て、理致光院の長老、斯る御事と承及候とて、葬禮の御事取營み給へり。南の御方は、軈て御髪被レ落て、泣泣京へ上り給ひけり。抑、淵邊が宮の御首を取ながら、左馬頭殿に見せ奉らで藪の傍に捨ける事、聊思へる所あり。昔周の末の代に、楚王と云ける王、武を以て天下を

不可旋踵―立處なるをいふ

○兵部卿宮薨御事 附干將莫耶事

左馬頭既に山の内を打過給ける時、淵邊伊賀守を近附て宣けるは、御方依二無勢一、一旦鎌倉を雖二引退一、美濃、尾張、三河、遠江の勢を催して、頓て又鎌倉へ寄んずれば、相摸次郎時行を滅さん事は、不レ可レ旋レ踵。猶も唯當家の爲に、始終可レ被レ成レ讎は、兵部卿親王也。此御事死刑に行ひ奉れと云勅許はなけれ共、此次に唯失ひ奉らばやと思ふ也。御邊は急ぎ藥師堂谷へ馳歸て、宮を刺殺し進らせよと被二下知一ければ、淵邊畏て承候とて、山の内より主從七騎引返して、宮の坐ける牢の御所へ參たれば、宮はいつとなく闇の夜の如くなる土牢の中に、朝に成ぬるをも知せ給はず、猶燈を挑て御經あそばして御座有けるが、淵邊が御迎に參て候由を申て、御輿を庭に舁据ゑたりけるを御覽じて、汝は我を失んとの使にてぞ有らん。心得たりと被レ仰て、淵邊が太刀を奪はんと走り懸らせ給けるを、淵邊持たる太刀を取直し、御膝の邊をしたゝかに奉レ打。宮は半年計牢の中に居屈らせ給たりければ、御足も快く立ざりけるにや、御心は八十梟に思召けれ共、覆に被二打倒一、起上らんとし給ひける處を、淵邊御胸の上に乘懸り、

十九卷に第七宮に作れるを可とす

七月十六日ー原本には七月二十三日とあり、金勝院本天正本によりて改む

不レ改。斯る處に、西園寺大納言公宗卿、隱謀露顯して被レ誅給し時、京都にて旗を擧んと企つる平家の餘類共、皆東國北國に逃下て、猶其素懷を達せん事を謀る。名越太郎時兼には、野尻、井口、長澤、倉滿の者共、馳著ける間、越中、能登、加賀の勢共、多く與力して、無レ程六千餘騎に成にけり。相摸次郎時行には、諏方三河守、三浦介入道、同若狹五郎、葦名判官入道、那和左近大夫、淸久山城守、鹽谷民部大輔、工藤四郎左衛門已下宗徒の大名五十餘人與してければ、伊豆、駿河、武藏、相摸、甲斐、信濃の勢共、不二相附一と云事なし。時行其勢を率して、五萬餘騎俄に信濃國に打越て、時日を不レ替則鎌倉へ攻上りけるに、澁河刑部大輔、小山判官秀朝、武藏國に出合、是を支んとしけるが、共に戰利無して、兩人所々にて自害しければ、其郎從三百餘人、皆兩所にて被レ討にけり。又新田四郎、上野國利根川に支て、是を防がんとしけるも、敵目に餘る程の大勢なれば、一戰に勢力を被レ碎、二百餘人被レ討にけり。斯りし後は、時行彌大勢に成て、既に三方より鎌倉へ押寄ると告ければ、直義朝臣は事の急なる時節、用意の兵少かりければ、角ては中々敵に利を附つべしとて、將軍の宮を具足し奉て、七月十六日の曉に、鎌倉を落給けり。

鄭聲—淫靡の聲音

音與政通—禮記に見えたる語にて、樂の聲音は政事の如何と相通じて哀怨淸適あるをいふ

寰中—畿内

第八宮—第

するを、君今新樂に寫して、是を翫び給ふ。鄭聲雅を亂る故に、一唱三歎の曲に非ずと申けるが、果して平公滅びにけり。其後此樂猶止ずして、陳の代に至る。陳の後主是を弄で、隋の爲に被レ滅ぬ。隋の煬帝又是を翫ぶ事甚くして、唐の太宗に被レ滅ぬ。唐の末の世に當て、我朝の樂人掃部頭貞敏、遣唐使にて渡たりしが、大唐の琵琶の博士廉婕夫に逢て、此曲を我朝に傳來せり。然ども、此曲に不吉の聲有とて、一手を略せる所あり。然を、其夜の御法樂に、宗と此手を引給ひしに、然も殊に殺伐の聲の聞えつるこそ、淺増く覺え侍りければ、音與レ政通ずといへり、大納言殿の御身に當て、いかなる煩か出來らんと、孝重歎て申けるが、無二幾程一して、大納言殿此死刑に逢給ふ。不思議也ける前相也。

○中前代峰起事

今天下一統に歸して、寰中雖二無事一、朝敵の餘黨猶東國に在ぬべければ、鎌倉に探題を一人おかでは惡かりぬべしとて、當今第八宮を、征夷將軍になし奉て、鎌倉にぞ置進せられける。足利左馬頭直義其執權として、東國の成敗を司れども、法令皆舊を

法樂—神佛の前に奏する音樂

將軍の代と成しかば、此人朝に仕へて、西園寺の跡を繼給し、北山の右大將實俊卿是也。さても故大納言殿滅び給ふべき前表のありけるを、木工頭孝重が兼て聞たりけるこそ不思議なれ。彼卿謀叛の最初、祈禱の爲に一七日北野に參籠して、每夜琵琶の祕曲を彈じ給けるが、七日に滿じける其夜は、殊更聖廟の法樂に備べき爲とや被レ思けん、月冷く風秋なる小夜深方に、翠簾を高く捲上させて、玉樹三女の序を彈じ給ふ。第一第二絃索々、秋風拂レ松疎韵落。第三第四絃冷々夜鶴憶レ子籠中鳴、絃々掩抑、唯拍子に移る。六反の後の一曲、誠に嬰兒も起て舞計也。時節木工頭孝重社頭に通夜して、心を澄し耳を側て聞けるが、曲終て後、人に向て語りけるは、今夜の御琵琶、祈願の御事有て遊ばさるゝならば、御願不レ可二成就一。其故は、此玉樹と申曲は、昔晉の平公濮水の邊を過給けるに、流るゝ水の聲に、絃管の響あり。平公則師涓と云樂人を召て、琴の曲に移さしむ。其曲殺聲にして、聞人泪を不レ流と云事なし。然共、平公是を愛して、專樂絃に用給ひしを、師曠と云ける令倫此曲を聽て、難じて奏しけるは、君是を弄び給はゞ、天下一たび亂て、宗廟全からじ。如何となれば、古殷の紂王彼婬聲の樂を作て弄び給しが、無レ程周の武王に被レ滅給き。其魂魄猶濮水の底に留て、此曲を奏

えけるにこそ有けれ。歎の中にも此子をそだてゝこそ、故大納言殿の忘形見とも見、若人とならば僧にもなして、無跡をも弔はせんと思つるに、未だ嬭房も離ぬみどり子を、武士の手に懸て、被レ失ぬと聞て、有し別の今の歎、消わびん露の命を、何に懸てか可ニ堪忍一あるを限の命だに、心に叶ふ者ならで、斯る憂事をのみ見聞く身こそ悲しけれと、泣沈み給ければ、春日の局泣々内より御使に出合給て、故大納言殿の忘形見の出來させ給て候しが、母上のたゞならざりし時節、限なき物思に沈給ふ故にや、生れ落給ひし後、無ニ幾程一はかなく成給候。是も咎有し人の行へなれば、如何なる御沙汰にか逢候はんずらんと、上の御咎を怖て、隱し侍るにこそと被ニ思召一事も候ぬべければ、僞ならぬしるしの一言を、佛神に懸て申入候べしとて、泣々消息を書給ひ、其奥に

　僞を糺の森に置露の、消しにつけて濡るゝ袖哉。

使此御文を持て歸り參れば、定平泪を押へて奏覽し給ふ。此一言に、君も哀とや思召れけん、其後は御尋もなかりければ、うれしき中に思有て、燒野の雉の殘る叢を命にて、雛を育らむ風情にて、泣聲をだに人に聞せじと、口を押へ乳を含て、同枕の忍音に、泣明し、泣暮して、三年を過し給し心の中こそ悲しけれ。其後建武の亂出來て、天下

桑の弓蓬の矢—男子出生の祝に桑の弓に蓬の矢六本とりそろへて天地四方を射る、其子成長の後武功を天地四方に顯はすべき事を祝ふ也

はなし。其面影はそれながら、語て慰む方もなし。庭には紅葉散敷て、風の氣色も冷きに、古き梢の梟の聲、けうとげに啼たる晩の物さびしさ、堪ては如何と住わび給へる處に、西園寺の一跡をば、竹林院中納言公重卿賜らせ給たりとて、青侍共數多來て取まかなへば、是さへ別の憂歎に成て、北の御方は、仁和寺なる傍に、幽なる住所尋出して移給ふ。時しもこそあれ、故大納言殿の百箇日に當りける日、御産事故無して、若君生れさせ給へり。あはれ其昔ならば、御祈の貴僧高僧、歡喜の眉を開き、弄璋の御慶天下に聞えて、門前の車馬群を可レ成に、桑の弓引人もなく、蓬の矢射る所もなきあばら屋に、透間の風冷じけれども、防ぎし陰もかれはてぬれば、御乳母なんど被レ附までも不レ叶。唯母上自懐きそだて給へば、漸く故大納言殿に似給へる御顏つきを見給ふにも、形見こそ今はあだなれ是なくば、忘るゝ時もあらまし物をと、古人の讀たりしも、泪の故と成にけり。悲歎の思胸に滿て、生産の筵未乾ざるに、中院中將定平の許より、以レ使、御産の事に附て、內裏より被ニ尋仰一事候。もし若君にても御渡候はゞ、御乳母に懐かせて、是へ先入進られ候へと被レ仰ければ、母上あな心憂や、故大納言の公達をば、腹の中までも開て可レ被ニ御覧一と聞えしかば、若君出來させ給ぬと、漏聞

透垣―竹を竝べて結べる垣

顔をも不レ擡泣給ふ。去程に、追立の官人來て、今夜先伯耆守長年が方へ渡し奉て、曉配所へ可レ奉レ下と申ければ、頓て物騷しく成て、北の方も傍へ立隱給ぬ。さても猶今より後の御有樣、如何と心苦く覺て透垣の中に立紛て見給へば、大納言殿を請取進んとて、長年物具したる者共二三百人召具して、庭上に竝居たり。餘に夜の深候ぬると急ぎければ、大納言殿繩取に引へられて、中門へ出給ふ。其有樣を見給ける北の御方の心の中、譬へて云はん方もなし。既に庭上に舁居たる輿の簾を褰て、乘らんとし給ける時、定平朝臣長年に向て、早と被レ云けるを、殺し奉れとの詞ぞと心得て、長年、大納言殿に走懸て、鬢髮を摑て覆に引伏せ、腰刀を拔て、御首を搔落しけり。下として上を犯んと企る罰の程こそ恐しけれ。北の方は是を見給て、不レ覺あつとをめいて、透垣の中に倒れ伏給ふ。此儘頓て絶入り給ぬと見えければ、女房達車に扶乘奉て、泣々又北山殿へ歸し入れ奉る。さしも堂上堂下雲の如くなりし靑侍官女、何地へか落行けん、人一人不レ見成て、翠簾几帳皆被二引落一たり。常の御方を見給へば、月の夜、雪の朝、興に觸て讀棄給へる短册共の、此彼に散亂たるも、今はなき人の忘見形と成て、そゞろに泪を被レ催給ふ。又夜の御方を見給へば、舊き衾は留て、枕ならべし人

たゞならぬ―懷妊をいふ

闇路の迷―死後の迷

石竹の花―撫子卽ち愛子の意を含む

士をのけさせて、牢の傍を見給へば、一間なる所の蜘手密く結たる中に身を縮めて、起臥もなく、泣沈み給ければ、流るゝ泪袖に餘りて、身も浮く計に成にけり。大納言殿、北の方を一目見給て、いとゞ泪に咽び、云出し給へる言葉もなし。北の方も、こは如何に成ぬる御有樣ぞやと計、涙の中に聞えて、引かづき泣伏給ふ。良暫有て、大納言殿泪を押へて宣けるは、我身かく引人もなき捨小舟の如く、深罪に沈みぬるに附ても、たゞならぬ御事とやらん承りしかば、我故の物思に、如何なる煩はしき御心地かあらんずらんと、それさへ後の闇路の迷と成ぬべう覺てこそ候へ。若それ男子にても候はゞ、行末の事思捨給はで、哀の懐中に人となし給べし。是は我家に傳る所の物なれば、見ざりし親の忘形見ともなし給へとて、上原、石上、流泉、啄木の祕曲を被書たる琵琶の譜を一帖、膚の護より取出し給て、北の方に手づから被渡けるが、側なる硯を引寄て、上巻の紙に、一首の歌を書給ふ。

　哀なり日影待間の露の身に、思おかるゝ石竹の花。

硯の水に泪落て、薄墨の文字さだかならず、見る心地さへ消ぬべきに、是を今はの形見とも、泪と共に留給へば、北の御方は、いとゞ悲を被副て、中々言葉もなければ、唯

逢籠—土藏

詰牢—辛うじて身を容るゝ程の牢

へ、樣々の虛說を成て、當家を失はんと仕る歟とこそ覺て候へ。乍レ去天鑑レ眞、虛名いつまでか可レ掠二上聞一候なれば、先召に隨て陣下に參じ、犯否の御糺明を仰ぎ候べし。但俊季に於ては、今朝已に逐電候ぬる間、召具するに不レ及とぞ宣ける。官軍共是を聞て、さては橋本中將殿を隱し被レ申にてこそあれ。御所中を能々見奉れとて、數千の兵殿中に亂入て、天井塗籠打破、翠簾几帳を引落して、無二殘所一捜けり。依レ之唯今まで可レ有二紅葉御賀一とて、樂絃を調べつる伶人、裝束をも不レ脫、東西に逃迷ひ、見物の爲とて群をなせる僧俗男女、怪き者歟とて多く被二召捕一、不慮に刑戮に逢けり。其邊の山の奧、岩のはざま迄、若やと猶捜けれども、俊季朝臣遂に見え給はざりければ、官軍無レ力、公宗卿と文衡入道とを召捕奉て、夜中に京へぞ歸ける。大納言殿をば、定平朝臣の宿所に、一間なる所を詰牢の如くに拵て、押籠奉る。文衡入道をば、結城判官に被レ預、夜晝三日まで、上つ下つ被二拷問一けるに、無レ所レ殘白狀しければ、則六條河原へ引出して、首を被レ刎けり。公宗をば伯耆守長年に被二仰附一、出雲國へ可レ被レ流と、公議已に定りにけり。明日必配所へ赴き給べしと、治定有ける其夜、中院より北の御方へ被二告申一ければ、北の方忍たる體にて、泣々彼へおはしたり。暫警固の武

北の御方女房達――令室侍女達

卿、馳參じて被申けるは、西園寺大納言公宗、隱謀の企有て、臨幸を勸め申由、唯今或方より告示候。是より急ぎ還幸成て、橋本中將俊季、竝春衡、文衡入道を被召て、仔細を御尋候べしと被申ければ、君去夜の夢の告、今日の池水の變ずる態、げにも樣ありと思召合て、軈て還幸成にけり。則中院中將定平に、結城判官親光、伯耆守長年を差副て、西園寺大納言公宗卿、橋本中將俊季、竝文衡入道を召捕て參れとぞ被仰下ける。勅宣の御使、其勢二千餘騎、追手搦手より押寄て、北山殿の四方を七重八重にぞ取卷ける。大納言殿、早此間の隱謀顯れけりと思給ふ。されば中々騷たる氣色もなし。事の樣をも知ぬ北の御方、女房達、侍共は、こは如何なる事ぞやと、周章ふためき逃倒る。御弟俊季朝臣は、官軍の向けるを見て、心早き人なりければ、唯一人脫て、後の山より何地ともなく落給にけり。定平朝臣、先大納言殿に對面有て、穩に事の仔細を被宣ければ、大納言殿淚を押へて宣けるは、公宗不肖の身なりといへども、故中宮の御好に依て、官祿共に人に不下。是偏に明王慈惠の恩幸なれば、爭か居陰折枝、汲流濯源志可存候。倩事の樣を案ずるに、當家數代の間、官爵人に超え、恩祿身に餘れる間、或は淸花の家是を妬み、或は名家の輩是を猜で、如何樣種々の讒言を構

鈍色の二つ衣―鈍色は薄黒色、二つ衣は襲のこと

として、越中、能登、加賀の勢をぞ被レ集ける。如レ斯諸方の相圖を同時に定て後、西の京より、番匠數多召寄て、俄に湯殿をぞ被レ作ける。其裏場に、板を一間踏めば落る樣に構へて、其下に刀の簇を被レ植たり。是は、主上御遊の爲に臨幸成たらんずる時、華淸宮の溫泉に準へて、浴室の宴を勸め申て、君を此下へ陷入奉らん爲の企也。斯樣に樣々の謀を定め、兵を調て、北山の紅葉御覽の爲に、臨幸成候へと被レ申ければ、則日を被レ定、行幸の儀式をぞ被レ調ける。已に明日午刻に可レ有ニ臨幸ー由、被ニ相觸ーたりける其夜、主上且く御目睡有ける御夢に、赤袴に鈍色の二つ衣著たる女一人來て、前には虎狼の怒れるあり、後には熊羆の猛きあり、明日の行幸をば、思召留らせ給ふべしとぞ申ける。主上御夢の中に、汝は何より來れる者ぞと御尋有ければ、神泉苑の邊に多年住侍る者也と答申て立歸ぬと被ニ御覽ー、御夢は無レ程覺にけり。主上怪き夢の告也と被ニ思召ーながら、是まで事定りぬる臨幸、期に臨では如何可レ被レ停と被ニ思召ーければ、遂に鳳輦を被レ促。乍レ去夢の告怪しければとて、先神泉苑に幸成て、龍神の御手向有けるに、池水俄に變じて、風不レ吹白浪岸を打事頻也。主上是を被ニ御覽ー彌く夢の告怪く被ニ思召ーければ、且鳳輦を留て、御思案有ける處に、竹林院中納言公重

用捨—用ひらるゝと否と

時、西園寺大政大臣公經公、關東へ内通の旨有しに依て、義時其日の合戰に利を得たりし間、子孫七代迄、西園寺殿を可ニ憑申一と云置たりしかば、今に至迄武家異レ他思を成せり。依レ之代々の立后も、多くは此家より出て、國々の拜任も、半は其族にあり。然れば官太政大臣に至り、位一品の極位を不レ極と云事なし。偏に是關東贔屓の厚恩也と被レ思けるにや、如何にもして故相摸入道が一族を取立て、再天下の權を取せ、我身公家の執政として、四海を掌に握らばやと被レ思ければ、此四郎左近大夫入道を還俗せさせ、刑部少輔時興と名を替て、明暮は唯謀叛の計略をぞ被レ運ける。或夜政所の入道、大納言殿の前に來て申けるは、國の興亡を見には、政の善惡を見に不レ如、政の善惡を見には、賢臣の用捨を見に不レ如、されば微子去て殷の代傾き、范增被レ罪楚王滅たり。今の朝家には、唯藤房一人のみにて候つるが、未然に凶を鑑て、隱遁の身と成候事、朝廷の大凶、當家の御運とこそ覺て候へ。急ぎ思召立せ給候はゞ、前代の餘類十方より馳參て、天下を覆さん事、一日を不レ可レ出とぞ勸め申ける。公宗卿げにもと被レ思ければ、時興を京都の大將として、畿内近國の勢を被レ催。其甥相摸次郎時行をば、關東の大將として、甲斐、信濃、武藏、相摸の勢を附らる。名越太郎時兼をば、北國の大將

一品—猶一位といふが如し

中には速證無上大菩提と、金字にぞ書たりける。夢覺て後靜に是を案ずるに、我朝廷に仕へて、位一品に至らんずる條無ㇾ疑。中に見えつる金字の文は、我則此作善を以て、後生善處の望を可ㇾ達者也と、一世の悉地共に成就したる心地して、憑もしく思給けるが、果して元弘の末に、父祖代々絶て久き從一位に成給けり。中に見えし金字の文は、子息藤房卿出家得道し給べき、其善緣有と被ㇾ示ける明神の御告なるべし。誠に百年の榮耀は風前の塵、一念の發心は命後の燈也。一子出家すれば、七世の父母皆佛道を成すと、如來の所說明なれば、此人一人の發心に依て、七世の父母諸共に、成佛得道せん事、歎の中の悅なるべければ、是を誠に第一の利生預りたる人よと、智ある人は聞て感歎せり。

○北山殿謀叛事

故相摸入道の舍弟、四郎左近大夫入道は、元弘の鎌倉合戰の時、自害したる眞似をして、潛に鎌倉を落て、暫は奥州に在けるが、人に見知れじが爲に、還俗して京都に上り、西園寺殿を憑奉て、田舍侍の始て召仕はるゝ體にてぞ居たりける。是も承久の合戰の

行脚—郷里を離れて四方を遍歴し悟法を求むる事

一字三禮に書き—一字書く毎に三度禮して書く也

なく、足に信て出給ひけり。宣房卿彼坊に行給て、左樣の人やあると被レ尋ければ、主の僧、さる人は今朝まで是に御座候つるが、行脚の御志候とて、何地へやらん御出候ぬる也とぞ答へける。宣房卿悲歎の泪を押て、其住捨たる庵室を見給へば、誰見よとてか書置ける、破たる障子の上に、一首の歌を被レ殘たり。

住捨る山を浮世の人とはゞ、嵐や庭の松にこたへん。

棄恩入無爲眞實報恩者と云文の下に、

白頭望斷萬重山。曠劫恩波盡底乾。
不レ是胸中藏二五逆一。出家端的報レ親難。

と、黄蘗の大義渡を題せし古き頌を被レ書たり。さてこそ此人設何の山にありとも、命の中の再會は叶ふまじかりけるよと、宣房卿戀慕の泪に咽んで、空く歸り給ひけり。抑彼宣房卿と申は、吉田大貳資經の孫、藤三位資通の子也。此人、閑官の昔、五部の大乘經を一字三禮に書、供養して、子孫の繁昌を祈らん爲に、春日社にぞ被二奉納一ける。其夜の夢想に、黄衣著たる神人、榊の枝に立文を著けて、宣房卿の前に差置たり。如何なる文やらんと怪て、急ぎ是を披て見給へば、上書に萬里小路一位殿へと書て、

糊をこはく張りたる狩衣

て祝し、其言葉の引替て、今よりは心の垢を雪、憂世の耳を可ㇾ洗便に成ぬと思給ひ、大菩薩の御前にして、潜に自受法樂の法施を獻ても、道心堅固速證菩提と祈給へば、和光同塵の月明かに、心の闇をや照すらんと、神慮も暗に被ㇾ量たり。御神拜一日有て、還幸事散じければ、藤房致仕の爲に被二參內一、龍顏に近附進せん事、今ならでは何事にかと被ㇾ思ければ、其事となく御前に祗候して、龍逢比干が諫に死せし恨、伯夷叔齊が潔を踏にし跡、終夜申出て、未明に退出し給へば、大內山の月影も、涙に陰りて幽なり。陣頭より車をば宿所へ返遣し、侍一人召具して、北山の岩藏と云所へ赴かれける。此にて不二房と云僧を戒師に請じて、遂に多年拜趨の儒冠を解で、十戒持律の法體に成給けり。家貧く、年老ぬる人だにも、難ㇾ離難ㇾ捨恩愛の舊き栖也。況乎官祿共に卑からで、齡未四十に不ㇾ足人の、妻子を離れ、父母を捨て、山川抖擻の身と成りしは、ためしすくなき發心也。此事叡聞に達しければ、君無ㇾ限驚き思召て、其在所を急ぎ尋出し、再び政道輔佐の臣と可ㇾ成と、父宣房卿に被二仰下一ければ、宣房卿泣々車を飛して、岩藏へ尋行給けるに、中納言入道は、其朝まで岩藏の坊におはしけるが、是も尚都近き傍なれば、浮世の人、事問ひかはす事もこそあれと、厭はしくて、何地と云方も

看督長—撿非違使廳に屬せる官、追捕を司る

鵰冠—細纓に老懸したるもの、馬副隨身の裝也

白張—白き布にて作り

幡の行幸にて、諸卿皆路次の行粧を事とし給けり。藤房も時の大理にて御座する上は、今は是を限の供奉と被レ思ければ、御供の官人、悉目を驚す程に出立れたり。看督長十六人、冠の老懸に、袖單白くしたる薄紅の袍に、白袴著し、いちひはゞきに亂れ緒をはいて列をひく。次に走り下部八人、細烏帽子に上下、一色の家の紋の水干著て、二行に歩づゞきたり。其後大理は、巻纓の老懸に、赤裏の表の袴、鞾の沓はいて、蒔繪の平鞘の太刀を佩、あまの面の羽附たる平胡籙の箙を負、甲斐の大黑とて、五尺三寸有ける名馬の、太く逞に、いかけ地の鞍置て、水色の厚總の鞦に、唐絲の手綱ゆるらかに結てかけ、鞍の上閑に乘うけて、町に三處手綱入させ、小路に餘て歩せ出たれば、馬副四人、鵰冠に、猪の皮の尻鞘の太刀佩て、左右にそひ、かい副の侍二人をば、烏帽子の花田のうち絹を重て、袖單を出したる水干著たる舍人の雜色四人、次に白張に香の衣重たる童一人、次に細烏帽子に、袖單白して、海松色の水干著たる調度懸六人、次に細烏帽子に、香の水干著たる舍人八人、其次に直垂著の雜人等百餘人、警蹕の聲高らかに、傍を拂て被二供奉一たり。伏拜に馬を留て、男山を登給ふにも、榮行時も有にし物也と、明日は被レ謂ぬべき身の程も哀に、石淸水を見給にも、可レ澄末の久さを、君が御影に寄

德の流行云云―孟子公孫丑上に出でたる孔子の言

蘭藉桂筵―詩歌管絃の美しき席

當二其罪一則有レ咎之者退と云へり。痛哉今の政道、唯抽賞の功に不レ當讒のみに非ず、兼ては綸言の掌を翻す憚あり。今若武家の棟梁と成ぬべき器用の仁出來て、朝家を褊し申事あらば、恨を含み、政道を猜天下の士、糧を荷て招ざるに集らん事、不レ可レ有レ疑。抑天馬の用所を案ずるに、德の流行する事は、郵を置て命を傳るよりも早ければ、此馬必しも不レ足レ用。唯大逆不慮に出來る日、急を遠國に告る時、聊用るに得あらんか。是靜謐の朝に出で、兼て大亂の備を設く。豈不吉の表示に候はずや。唯奇物の翫を止て、仁政の化を致れんには不レ如と、誠を致し、言を不レ殘被レ申しに、龍顏少し逆鱗の氣色有て、諸臣皆色を變じければ、旨酒高會も無興して、其日の御遊はさて止にけりとぞ聞えし。

○藤房卿遁世事

其後藤房卿、連續して諫言を上りけれども、君遂に御許容無りしかば、大內裏造營の事をも不レ被レ止、蘭藉桂筵の御遊猶頻なりければ、藤房是を諫兼て、臣たる道我に於て致せり、よしや今は身を退んには不レ如と、思定てぞ御座しける。三月十一日は、八

雍齒—漢高祖の封じて什方侯となしゝ也、事史記に出づ
健兒所—中間の居る所
御家人—將軍の臣下

幾千萬と云數を知ず。然共公家被官の外は、未恩賞を賜たる者あらざるに、申狀を捨て訟を止たるは、忠功の不ㇾ立を恨み、政道の不ㇾ正を編して、皆己が本國に歸る者也。諫臣是に驚て、雍齒が功を先として、諸卒の恨を散ずべきに、先大内裏造營可ㇾ有とて、諸國の地頭に、二十分一の得分を割分て被ㇾ召れば、兵革の弊の上に、此功課を悲めり。又國々には、守護威を失ひ、國司權を重くす。依ㇾ之非職凡卑の目代等、貞應以後の新立の庄園を沒倒して、在廳官人、撿非違使、健兒所等、過分の勢を高せり。加之諸國の御家人の稱號は、賴朝卿の時より有て、已に年久しき武名なるを、此御代に、始て其號を被ㇾ止ぬれば、大名高家、いつしか凡民の類に同じ。其憤幾千萬とか知らん。次には天運圖に膺て、朝敵自亡ぬといへども、今度天下を靜めて、君の宸襟を休め奉たる者は、高氏、義貞、正成、圓心、長年なり。彼等が忠を取て、漢の功臣に比せば、韓信、彭越、張良、蕭何、曹參也。又唐の賢佐に譬ば、魏徵、玄齡、世南、如晦、李勣なるべし。其志節に當り、義に向て、忠を立所、何をか前とし、何をか後とせん。其賞皆均、其爵是同かるべき處に、圓心一人、僅に本領一所の安堵を全して、守護恩補の國を被㆓召返㆒事、其咎そも何事ぞや。賞中㆓其功㆒則有ㇾ忠之者進、罰

房星―天馬と成り車駕を主る星

四荒八極―四方の國境及び東西南北乾坤巽艮

百辟―百官

費、而遂被レ返レ之。又後漢の光武の時、千里の馬と寶劍とを獻ずる者あり。光武是を珍とせずして、馬をば鼓車に駕し、劍をば騎士に賜ふ。又周の代已に衰なんとせし時、房星降て八匹の馬と成れり。穆王是を愛して、造父をして御たらしめて、四荒八極の外瑤池に遊び、碧臺に宴し給ひしかば、七廟の祭、年を逐て衰へ、明堂の禮、日に隨て廢れしかば、周室是より傾けり。文帝光武の代には、是を棄て、福祚久く榮え、周穆の時には是を愛して、王業始て衰ふ。拾捨の間、一凶一吉的然として在レ耳。臣愚竊に是を案ずるに、由來尤物是非レ天。唯蕩二君心一則爲レ害といへり。去ば今政道正からざるに依て、房星の精化して此馬と成て、人の心を蕩かさんとする者也。其故は、大亂の後、民弊え人苦で、天下未レ安れば、執政吐レ哺、人の愁を聞、諫臣上レ表て、主の誤を可レ正時なるに、百辟は樂に婬して、世の治否を不レ見、群臣は旨に阿て、國の安危を不レ申。依レ之記錄所決斷所に群集せし訴人、日々に減じて、訴陳徒に閣けり。諸卿是を見て、虞芮の訴止て、諫鼓擊ことなし、無爲の德天下に及で、民皆堂々の化に誇れりと思へり。悲乎、其迷へる事。元弘大亂の始、天下の士卒擧て官軍に屬せし事、更に無レ他。唯一戰の利を以て、勳功の賞に預らんと思へる故也。されば世靜謐の後、忠を立、賞を望む輩、

重陽の宴―九月九日の宴
三國―日本支那天竺

彭祖と名を替て、此術を文帝に授奉る。文帝是を受て、菊花の盃を傳へて、萬年の壽を被レ成、今の重陽の宴是也。其より後、皇太子位を天に受させ給ふ時、必先此文を受持し給ふ。依レ之普門品を當途王經とは申なるべし。此文我朝に傳はり、代々の聖主御即位の日必ず是を受持し給ふ。若幼主の君踐祚ある時は、攝政先是を受て、御治世の始に必君に授奉る。此八句の偈の文三國傳來して、理世安民の治略、除災興樂の要術と成る。是偏に穆王天馬の徳也。されば此龍馬の來れる事、併佛法王法の繁昌、寶祚長久の奇瑞に候べしと被レ申たりければ、主上を始進せて、當座の諸卿悉心に服し、旨を承て、賀し申さぬ人は無りけり。暫有て、萬里小路の中納言藤房卿被レ參。座定まつて後、主上又藤房卿に向て、天馬の遠より來れる事、吉凶の間諸臣の勘例、已に皆先に畢。藤房は如何思へるぞと勅問有ければ、藤房卿被レ申けるは、天馬の本朝に來れる事、古今未だ其例を承候はねば、善惡吉凶勘へ申難しといへども、退きて愚案を運すに、是れ不レ可レ有二吉事一。其故は、昔漢の文帝の時、一日に千里を行馬を獻ずる者あり、公卿大臣皆相見て是を賀す。文帝笑て曰、吾吉に行日は三十里、凶に行日は五十里、鸞輿在レ前、屬車在レ後、吾獨乘二千里駿馬一將安之乎とて、乃償二其道

帝の傍に侍けり。或時彼慈童君の空位を過けるが、誤て帝の御枕の上をぞ越ける。群臣議して曰、其例を考るに、罪科非レ淺、雖レ然事誤より出たれば、死罪一等を宥て、遠流に可レ被レ處とぞ奏しける。群議止事を不レ得して、慈童を酈縣と云深山へぞ被レ流ける。彼酈縣と云所は、帝城を去事三百里、山深して鳥だにも不レ鳴、雲瞑して虎狼充滿せり。されば假にも此山へ入人の、生て歸ると云事なし。穆王猶慈童を哀み思召ければ、彼八句の內を分たれて、普門品にある二句の偈を、潛に慈童に授させ給て、每朝に十方を一禮して、此文を可レ唱と被レ仰けり。慈童遂に酈縣に被レ流、深山幽谷の底に被レ棄けり。爰に慈童君の恩命に任て、每朝に一反此文を唱けるが、若忘もやせんずらんと思ければ、側なる菊の下葉に此文を書附けり。其より此菊の葉における下露、僅に落て、流るゝ谷の水に滴りけるが、其水皆天の靈藥と成る。慈童渇に臨で是を飲に、水の味天の甘露の如くにして、恰も百味の珍に勝れり。加之天人花を捧て來り、鬼神手を束て奉仕しける間、敢て虎狼惡獸の恐無して、却て換骨羽化の仙人と成る。是のみならず、此谷の流の末を汲で飮ける民三百餘家、皆病卽消滅して、不老不死の上壽を保てり。其後時代推移て、八百餘年まで、慈童猶少年の貌有て、更に衰老の姿なし。魏の文帝の時、

震旦—支那

四要品—方便品安樂品壽量品普門品

非ずば、斯る駿足は難レ有とて、叡慮更に類無りけり。或時主上馬場殿に幸成て、又此馬を叡覽有けるに、諸卿皆左右に候ず。時に主上洞院の相國に向て被レ仰けるは、古屈産の乘、項羽が騅、一日に千里を翔る馬有といへども、我朝に天馬の來る事を未だ聞ず。然に朕が代に當て、此馬不レ求出來る、吉凶如何と御尋ありけるに、相國被レ申けるは、是聖明の徳に不レ因ば、天豈此嘉瑞を降候はんや。虞舜の代には鳳凰來、孔子の時は麒麟出といへり。就レ中天馬の聖代に來る事、第一の嘉祥也。其故は昔周の穆王の時、驥、騊、驪、驊、騮、騄、駬、駟とて、八匹の天馬來れり。穆王是に乘て、四荒八極不レ至と云所無りけり。或時西天十萬里の山川を一時に越て、中天竺の舍衞國に至り給ふ。時に釋尊靈鷲山にして、法華を說給ふ。穆王馬より下て、會座に臨で、則佛を禮し奉て、退て一面に坐し給へり。如來問て宣く、汝は何の國の人ぞ。穆王答曰、吾は是震旦國の王也。佛重て宣く、善哉今來二此會場一。我有二治國法一、汝欲二受持一否。穆王曰、願は信受奉行して、理民安國の施二功德一。爾時佛以二漢語一四要品の中の八句の偈を穆王に授給ふ。今の法華の中の經律法門有と云ふ深祕の文是也。穆王震旦に歸て後、深く心底に祕して世に不二被レ傳一。此時慈童と云ける童子を、穆王寵愛し給ふに依て、恒に

三寸許―寸は古はきといひて尺度の名、今も馬の丈を度るに寸といふ、三寸は四尺三寸をいふ

太平記 巻十三

○龍馬進奏事

鳳闕の西二條高倉に、馬場殿とて、俄に離宮を被レ立たり。天子常に幸成て、歌舞蹴鞠の隙には、弓馬の達者を被レ召、競馬を番はせ、笠懸を射させ、御遊の興をぞ被レ添ける。其比佐々木鹽冶判官高貞が許より、龍馬也とて月毛なる馬の三寸計なるを引進す。其相形げにも尋常の馬に異也。骨與り筋太くして、脂肉短し。頸は雞の如にして、須彌の髪膝を過ぎ、背は龍の如にして、四十二の辻毛を卷て、背筋に連れり。兩の耳は竹を剝で、直に天を指し、雙の眼は鈴を懸て、地に向ふ如し。今朝の卯刻に、出雲の富田を立て、酉刻の始に京著す。其道已に七十六里、鞍の上閑にして、徒に坐せるが如し。然共旋風面を撲に不レ堪とぞ奏しける。則左馬寮に被レ預、朝には禁池に水飼、夕には花厩に秣飼。其比天下一の馬乘と聞えし本間孫四郎を被レ召て被レ乘、半漢雕梁甚不二尋常一、四蹄を縮むれば雙六盤の上にも立ち、一鞭を當つれば十丈の堀をも越つべし。誠に天馬に

レ曼瑞相にやと、人々申合けるが、果して大塔宮被レ失させ給し後、忽に天下皆將軍の代と成てけり。牝雞晨するは家の盡る相なりと、古賢の云し言の末、げにもと被二思知一たり。

て思ふに、獻公如何にも成給なん後は、申生よも我と奚齊とをば一日片時も生て置給はじ。願は君我を捨、奚齊を失て、申生の御心を休給へと、泣々獻公にぞ申されける。獻公元來智淺して、讒を信ずる人なりければ、大に忿て、太子申生を可レ討由、典獄の官に被二仰附一。諸群臣皆、申生の無レ罪して死に赴んずる事を悲て、急ぎ他國へ落させ給ふべしとぞ告たりける。申生是を聞給て、我少年の昔は母を失て、長年の今繼母に逢へり。是不幸の上に妖命備れり。抑天地間何の所にか、父子のなき國あらん。今爲レ遁二其死一他國へ行て、是こそ父を殺んとて鴆毒を與へたりし大逆不孝の者よと見る人ごとに惡れて、生ては何の顏かあらん。我不レ誤處をば天知レ之。唯虛名の下に死を賜て、父の忿を休んには不レ如とて、討手の未レ來前に、自劍に貫て、遂に空成にけり。其弟重耳、夷吾此事を聞て、驪姫が讒の又我身の上に成ん事を恐て、二人共に他國へぞ逃給ける。角て奚齊に晉國を讓得たりけるが、天命に背しかば、無二幾程一獻公奚齊父子共に、其臣里剋と云ける者に討れて、晉國忽に滅びけり。抑今兵革一時に定て、廢帝重祚を踐せ給ふ御事、偏に此宮の依二武功一事なれば、縦雖レ有二小過一、誡而可レ被レ宥かりしを、無二是非一被レ渡二敵人手一、被レ處二遠流一事は、朝廷再び傾て、武家又可

三牲―牛羊豕
曲沃―河東の縣名
胙―祭肉

奚齊に晉の國を讓んと思へり。驪姫心には嬉く乍レ思、上に僞て申けるは、奚齊未だ幼くして不レ辨二善惡一、賢愚更に不レ見先に、太子三人を超て、繼二此國一事、是天下の人の可レ惡處と、時々に諫め申ければ、獻公彌驪姫が心に無レ私、世の譏を恥、國の安からん事を思へる處を感じて、唯萬事を被レ任レ之しかば、其威倍々重く成て、天下皆是に歸服せり。或時嫡子の申生、母の追孝の爲に、三牲の備を調へて、齊姜の死して埋れし曲沃の墳墓をぞ被レ祭ける。其胙の餘を、父の獻公の方へ奉レ給ふ。獻公折節狩場に出給ひければ、此ひもろぎを裹で置たるに、驪姫潛に鴆と云毒を被レ入たり。獻公狩場より歸て、軈此ひもろぎを食んとし給ひけるを、驪姫申されけるは、外より贈れる物をば、先づ人に食せて後に、大人には進らする事ぞとて、御前なりける人に食られたるに、其人忽に血を吐て死にけり。こは如何なる事ぞとて、庭前なる雞犬に食せて見給へば、雞犬共に斃て死ぬ。獻公大に驚て、其餘を土に捨給へば、捨たる處の土穿て、あたりの草木皆枯萎む。驪姫僞て泪を流し申けるは、吾太子申生を思ふ事、奚齊に不レ劣。されば奚齊を太子に立んとし給しをも、我こそ諫申て止つるに、さればよ此毒を以て、我と父とを殺して、早く晉國を執んと被レ巧けることそうたてけれ。是を以

巧言令色―言語を巧にし顏色を善くすること

朝臣の方へ被ㇾ渡ければ、以二數百騎軍勢一路次を警固し、鎌倉へ下し奉て、二階堂谷に土牢を塗てぞ置進せける。南の御方と申ける上臈女房一人より外は、附副進する人もなく、月日の光も見えぬ闇室の内に向て、よこぎる雨に御袖を濡し、岩の滴に御枕を干わびて、年の半を過し給ける、御心の内こそ悲しけれ。君一旦の逆鱗に、鎌倉へ下し進せられしかども、是までの沙汰あれとは、叡慮にも不ㇾ赴けるを、直義朝臣日來の宿意を以て、奉二禁籠一けるこそ淺猿けれ。孝子其父に雖ㇾ有ㇾ誠、繼母其子を讒する時は、傾ㇾ國失ㇾ家事、古より其類多し。昔異國に晉の獻公と云人坐しけり。其后齊姜、三人の子を生給ふ。嫡子を申生と云、次男を重耳、三男を夷吾とぞ申ける。三人の子已に長成て後、母の齊姜病に侵されて、忽に無ㇾ墓成にけり。獻公歎ㇾ之不ㇾ淺しかども、別の日數漸遠く成しかば、移れば替る心の花に、昔の契を忘て、驪姫と云ける美人をぞ被ㇾ迎ける。此驪姫唯紅顔翠黛迷ㇾ眼のみに非ず、又巧言令色君の心を令ㇾ悅しかば、獻公寵愛甚して、別れし人の化は、夢にも不ㇾ見成にけり。角て經二年月一程に、驪姫又子を生めり。是を奚齊とぞ名附ける。奚齊未幼といへ共、母の寵愛に依て、父のおぼえ三人の太子に超たりしかば、獻公常に前の后齊姜の子三人を捨て、今の驪姫が腹の子

桑門―僧侶
乾臨―天子
臨鑒

爲根元之間、四海卜法、萬戸以贖、誠是命雖在天、奈何身無措處、晝終日臥深山幽谷、石岩敷苦、夜通宵出荒村遠里、跣足蹈霜。撫龍鬚消魂、踐虎尾冷胸、幾千萬矣。遂運策於帷幄之中、亡敵於鈇鉞之下。龍駕方還都、鳳暦永則天、恐非微臣之忠功、其爲誰乎。而今戰功未立、罪責忽來、風聞其科條、一事非吾所犯、虚說所起、惟悲不被尋究。仰而將訴天、日月不照不孝者、俯而將哭地、山川無載無禮臣。父子義絶、乾坤共棄。何愁如之乎。自今以後勤業爲孰寳。行藏於世輕、綸言儻被緩死刑、永削竹園之名、速爲桑門之容。君不見乎、申生死而晉國亂、扶蘇刑而秦世傾。浸潤之譖膚受之愬、事起于小禍、皆逮於大。乾臨何延古而不鑑今。不堪懇歎之至、伏仰奏達。誠惶誠恐謹言。

三月五日　護良

前左大臣殿

とぞ被遊ける。此御文若達叡聞、宥免の御沙汰も有べかりしを、傳奏諸の憤を恐て、終に不奏聞ければ、上天隔所、中心の訴不啓。此二三年宮に奉附纏、致忠待賞御内の候人三十餘人、潜に被誅之上は、不及兎角申、遂に五月三日宮を直義

兵部卿親王をぞ被レ召ける。宮、斯る事とは更に不レ思召寄一、前駈二人侍十餘人召具して、忍やかに御參內有けるを、結城判官、伯耆守二人、兼てより承レ勅用意したりければ、鈴の間の邊に侍受て奉レ捕レ之、則馬場殿に奉二押籠一。宮は一間なる所の蜘手結たる中に、參通ふ人一人も無して、泪の床に起伏せ給ふにも、こは如何なる我身なれば、元弘の始は、武家のために隱レ身、木の下岩のはざまに露敷袖を乾しかね、歸洛の今は、一生の樂未二一日終一、爲二讒臣一被レ罪、刑戮の中には苦むらんと、知ぬ前世の報までも、思召殘す方もなし。虛名不二久立一と云事あれば、さり共君も可レ被二聞召直一と思召ける處に、公儀已に遠流に定りぬと聞えければ、不レ堪二御悲一、內々御心よせの女房して、委細の御書を遊し、附二傳奏一急可レ經二奏聞一由を被二仰遣一。其消息云、

夫以二勅勘之身一、欲レ奏二無レ罪之由一、涙落心暗、愁結言短。唯以二一令一察レ萬、加レ詞被二恤悲一者、臣愚生前之望、云足而已。夫承久以來武家把レ權、朝廷棄レ政年尚矣。臣苟不レ忍レ看レ之、一解二慈悲忍辱之法衣一、忽被二怨敵降伏之堅甲一。內恐二破戒之罪一、外受二無慙之譏一。雖レ然爲レ君依レ忘レ身、爲レ敵不レ顧レ死。當二斯時一、忠臣孝子雖レ多レ朝、或不レ勵レ志、或徒待レ運。臣獨無二尺鐵之資一、搖二義兵一、隱二嶮隘之中一、窺二敵軍一。肆逆徒專以レ我、

ろ—空に繰ろにて、環に兵器を弄する

中殿—清涼殿

けん程に、路次に行合ふ兒法師女童部、此彼に被二切倒一、逢二横死一者無二休時一。是も唯足利治部卿を討んと被二思召一ける故に、集レ兵被レ習レ武ける御擧動也。抑高氏卿、今までは隨分有レ忠仁にて、有二過分僻事一不レ聞、依二何事一、兵部卿親王は、是程に御憤は深かりけるぞと、根元を尋ぬれば、去年の五月に、官軍六波羅を攻落したりし刻、殿法印の手の者共、京中の土藏共を打破て、財寶共を運び取ける間、爲レ鎭二狼藉一、足利殿の方より是を召捕て、二十餘人六條河原に切ぞ被レ懸ける。其高札に、大塔宮の候人、殿法印良忠が手の者共、於二在々所々一、晝強盗を致す間所レ誅也とぞ被レ書たりける。殿法印此事を聞て、不レ安事に被レ思ければ、樣々の讒を構へ、方便を運して、兵部卿親王にぞ被二訴申一ける。斯樣の事共重疊して、達二上聞一ければ、宮も憤り思召して、志貴に御座有し時より、高氏卿を討ばやと、連々に思召立けれ共、勅許無りしかば、無レ力默止給けるが、尚讒口不レ止けるにや、内々以二隱密議一、諸國へ被レ成二令旨一、兵をぞ被レ召ける。高氏卿、此事を聞て、内々奉レ屬二繼母准后一被二奏聞一けるは、兵部卿親王爲レ奉レ奪二帝位一、諸國の兵を召候也。其證據分明に候とて、國々へ被二成下一處の令旨を取て、被レ備二上覽一けり。君大に逆鱗有て、此宮を可レ處二流罪一とて、中殿の御會に寄レ事、

故武州禪門—平泰時
涼燠—寒暑
貫長—貫主に同じ
そらがらく

ず、猪鹿の害蛇放たれ、流鏑の音驚二護法聽一、飛蹄の響騒二冥衆心一。有レ心人不二恐歎一と云事なし。承久の亂の後、故武州禪門潛に悲二此事一、高二築垣一、堅レ門、被レ止二雜穢一。其後涼燠數改つて、門墻漸不レ全。不淨汚穢之男女出入無二制止一、牛馬水草を求る往來無レ憚。定知龍神不レ快歟。早加二修理一可レ崇重給一。崇二此所一國土可レ治也。

○兵部卿親王流刑事 附驪姫事

兵部卿親王天下の亂に向ふ程は、無レ力爲レ遁二其身難一、雖レ被レ替二御法體一、四海已に靜謐せば、如レ元復二三千貫長位一、致二佛法王法紹隆一給んこそ、佛意にも叶ひ、叡慮にも違はせ給ふまじかりしを、備二征夷將軍位一、可レ守二天下武道一とて、則勅許を被レ申しかば、聖慮不レ穩しか共、任二御望一遂に被レ下二征夷將軍宣旨一。斯りしかば、四海の依賴として、愼レ身可レ被レ重レ位御事なるに、御心の儘に極レ侈、世の譏を忘て、淫樂をのみ事とし給しかば、天下の人皆再び世の危からん事を思へり。大亂の後は弓矢を裹て、干戈を袋にすとこそ申に、何の川ともなきに、强弓射る者、大太刀仕ふ者とだに申せば、無レ忠被レ下二厚恩一、左右前後に仕承す。剩斯樣のそらがらくる者共、毎夜京白河を廻て、辻切をし

俄に御入滅の由を被二披露一ければ、緇素流二悲歎泪一、貴賤呑二哀慟聲一。守敏聞レ之、法威成就しぬと成レ悦、則被レ破レ壇けり。此時守敏俄に目くれ鼻血垂て、心身被二惱亂一けるが、佛壇の前に倒伏て、遂に無レ墓成にけり。呪咀諸毒薬、還二著於本人一と説給ふ金言、誠に驗有て、不思議なりし效驗也。自レ是して東寺は繁昌し、西寺滅亡す。大師茅と云草を結で、龍の形に作て、壇上に立て行はせ給ける。法成就の後、聖衆を奉レ送給けるに、眞の善女龍王をば、驪神泉苑に留奉て、龍華下生三會の曉まで、守二此國一治二我法一給へと、御契約有ければ、今まで跡を留て、彼池に住給ふ。彼茅の龍王は大龍に成て、無熱池へ飛歸給ふとも云、或云、聖衆と共に空に昇て、指レ東飛去、尾張國熱田宮に留り給ふ共云説あり。佛法東漸の先兆、東海鎮護の奇瑞なるにや。大師已、若此龍王他界に移らば、池淺く、水少して、國荒れ、世乏からん。其時は我門徒加二祈請一、龍王を奉レ請留、可レ助レ國と宣へり。今は水淺く池あせたり、恐は龍王移二他界一給へる歟。然共請雨經の法被レ行ごとに、揭焉の靈驗猶不レ絶、未二國捨給一似たり。風雨叶レ時感應奇特の靈池也。代々の御門崇レ之、家々の賢臣敬レ之。若旱魃起る時は、先池を淨む。然を、後鳥羽法皇おり居させ給ひて後、建保の比より此所廢れ、荊棘路を閉るのみならず

入定—不言不食して法相を觀ずること

油然—雲の盛なる貌

爐壇—護摩壇

りける。依之孟夏三月の間、雨降事無して、農民不勤耕作、天下の愁一人の罪にぞ歸しける。君遙に天災の民に害ある事を愁へ思召て、弘法大師を召請じて、雨の祈をぞ被仰附ける。大師承勅先一七日の間入定、明に三千界の中を御覽ずるに、内海外海の龍神共、悉守敏の以呪力、水瓶の中に驅籠て可降雨龍神無りけり。但北天竺の境大雪山の北に、無熱池と云池の善女龍王、獨守敏より上位の薩埵にて御座ける。大師定より出て、此由を奏聞有ければ、俄に大内の前に池を掘せ、清涼の水を湛て、龍王をぞ勸請し給ける。于時彼善女龍王、金色の八寸の龍に現じて、長九尺計の蛇の頂に乘て、此池に來給ふ。則此由を奏す。公家殊に敬嘆せさせ給て、和氣眞綱を勅使として、以御幣種々物供、龍王を祭せらる。其後濕雲油然として、降雨事國土に普し。三日の間をやみ無して、災旱の憂永消ぬ。眞言の道を被崇事、自是彌盛也。守敏尚腹を立て、さらば弘法大師を奉調伏と思て、西寺に引籠り、三角の壇を構へ、本尊を北向に立て、軍荼利夜叉の法をぞ被行ける。大師此由を聞給て。則東寺に爐壇を構へ、大威德明王の法を修し給ふ。兩人何れも德行薫修の尊宿也しかば、二尊の射給ける流鏑矢空中に合て、中に落る事、鳴休隙も無りけり。爰に大師守敏を油斷させんと思召て、

事は西域記第八に出づ

建盞―直立形の盞、唐の建安より製出せられたれば名づく

支提破顯レ尸と申事候へば、空海が有んずる處にて、守敏よもさやうの奇特をば現し候はじとぞ被レ欺ける。帝さらば兩人の效驗を施させて、威德の勝劣を被二御覽一と思召て、或時大師御參内有けるを、傍に奉二隱置一、守敏應レ勅御前に候す。時に帝湯藥を進りけるが、建盞を閣せ給て、餘に此水つめたく覺る。例の樣に加持して、被レ暖候へかしとぞ被レ仰ける。守敏仔細候はじとて、向二建盞一結二火印一被二加持一けれども、水敢て不レ成レ湯。帝こは如何なる不思議ぞやと被レ仰、左右に目くはせ有ければ、内侍典侍なりける者、態熱く沸返たる湯をついで參たり。帝又湯を立させて進らんとし給ひけるが、又建盞を閣せ給ふ。是は餘に熱て、手にも不レ被レ執と被レ仰ければ、守敏先にもこりず、又向二建盞一結二水印一たりけれ共、湯敢てさめず、尚建盞の内にて沸返る。守敏前後の不覺に失レ色、損レ氣給へる處に、大師傍なる障子の内より御出有て、如何に守敏、空海是に有とは被二存知一候はざりける歟。星光は消二朝日一、螢火は隱二曉月一とぞ笑れける。守敏大に恥レ之、挿二鬱陶於心中一、隱二嗔恚於氣上一、被二退出一けり。自レ其守敏君を恨申す憤、入二骨髓一深かりければ、天下に大旱魃をやりて、四海の民を無二一人一飢渴に合せんと思て、一大三千界の中にある所の龍神共を捕へて、僅なる水瓶の内に押籠てぞ置た

胎藏界―大日如來の理德を現したる曼陀羅

金剛界―大日如來の智德を現したる曼陀羅

馬鳴褰帷―

ける。彼神泉苑と申は大内始て成し時、準二周文王靈囿一方八町に被レ築たりし園囿也。其後桓武の御代に、始て朱雀門の東西に被レ建二二寺一。左をば名二東寺一、右をば號二西寺一。東寺には高野大師安二胎藏界七百餘尊一、守二金輪寶祚一。西寺には南都の守敏僧都金剛界五百餘尊を顯して、被レ祈二玉體長久一。斯りし處に、桓武御宇延曆二十三年春比、弘法大師爲二求法一御渡唐有けり。其間、守敏僧都一人奉レ近二龍顏一、被レ致二朝夕加持一ける。或時御門御手水を被レ召けるが、水氷て餘につめたかりける程に、暫とて閣き給ひたりけるを、守敏向二御手水一結二火印一給ける間、氷水忽に解て、如二沸湯一也。御門被二御覽一て、餘に不思議に被二思召一ければ、態火鉢に炭を多くおこさせて、障子を立廻し、火氣を内に被レ籠たれば、臘裏風光宛如二春二月一也。帝御顏の汗を押拭はせ給て、此火滅ばやと被レ仰ければ、守敏又向レ火水の印をぞ結び給ひける。依レ之爐火忽に消て、空く冷灰に成にければ、寒氣侵レ膚、五體に如レ灑レ水。自レ此後、守敏斯樣の顯二奇特不思議一事、如レ得二神變一。斯しかば、帝是を歸依渴仰し給へる事不レ尋二常一。斯りける處に、弘法大師有二御歸朝一、卽參內し給ふ。帝異朝の事共有二御尋一後、守敏僧都の此間樣々なりつる奇特共をぞ御物語有ける。大師聞二召之一、馬鳴褰レ帷鬼神去閉レ口、栴檀禮レ塔

之、待鳥啼聲たりける。此鳥例より飛下、紫宸殿の上に二十丈計が程に鳴ける處を聞澄して、弦音高く兵と放つ。鏑紫宸殿の上を鳴り響し、雲の間に手答して、何とは不知、大盤石の如落懸聞えて、仁壽殿の軒の上より、ふたへに竹臺の前へぞ落たりける。堂上堂下一同に、あ射たり〳〵と感ずる聲、半時計のゝめいて、且は不云休けり。衞士の司に、松明を高く乘せて、是を御覽ずるに、頭は如人して、身は蛇の形也。嘴の前曲て、齒如鋸生違、兩の足に長距有て、利如劍。羽さきを延て見之、長一丈六尺也。さても廣有射ける時、俄に鴈俣を拔て捨つるは何ぞと、御尋有ければ、廣有畏て、此鳥當御殿上鳴候つる間、仕て候はんずる矢の落候はん時、宮殿の上に立候はんずるが禁忌しさに、鴈俣をば拔て捨つるにて候と申ければ、主上彌叡感有て、其夜軈て廣有を被成五位、次の日因幡國に大庄二箇所賜てけり。弓矢取の面目、後代までの名譽也。

○神泉苑事

兵革の後、妖氣猶示禍、銷其殃無如眞言秘密效驗とて、俄に神泉苑をぞ被修造

蜷螟―列子に海上有ㇾ蟲曰ニ焦螟一巢ニ於蚊睫一と見ゆ

大内山―内裏

たらば、生涯の恥辱と思けるにや、我承らんと申者無りけり。さらば上北面諸庭の侍共の中に、誰かさりぬべき者有と御尋有けるに、二條關白左大臣殿の被ニ召仕一候隱岐次郎左衞門廣有と申者こそ、其器に堪たる者にて候へと被ㇾ申ければ、軈て召ㇾ之とて、廣有をぞ被ㇾ召ける。廣有承ニ勅定一、鈴間邊に候けるが、げにも此鳥、蚊の睫に巢くうなる蜷螟の如く小て、不ㇾ及ㇾ矢、虛空の外に翔飛ばゝ叶まじ、目に見ゆる程の鳥にて、矢懸ならんずるに、何事ありとも射はづすまじき物をと思ければ、一議も不ㇾ申、畏て領掌す。則下人に持せたる弓與ㇾ矢を執寄て、孫廂の陰に立隱て、此鳥の有樣を伺見るに、八月十七夜の月殊に晴渡て、虛空淸明たるに、大内山の上に黑雲一群懸て、鳥啼こと荐也。鳴時口より火炎を吐歟と覺て、聲の内より電して、其光御簾の内へ散徹す。廣有此鳥の在所を能々見おほせて、弓押張り、弦くひしめして、流鏑矢を差番て立向へば、主上は南殿に出御成て叡覽あり。關白殿下左右の大將、大中納言、八座、七辨、八省輔、諸家の侍、堂上堂下に連ㇾ袖、文武百官見ㇾ之、如何有んずらんと、かたづを呑で拳ㇾ手。廣有已に立向て、欲ㇾ引ㇾ弓けるが、聊思案する樣有げにて、流鏑にすげたる鴈俣を拔て打捨、二人張に十二束二伏、きりきりと引しぼりて、無ニ左右一不ㇾ放

行儀―振舞

堯の代に云云―事は淮南子に出づ

云し事よと被レ思ければ、遂に不レ隨ニ勅定一、彌行ひ澄してぞ御座しける。智行德開しかば、軈て成ニ此寺開山一、今に殘ニ佛法弘通紹隆一給へり。以レ彼思レ此、うたてかりける文觀上人の行儀哉と、迷ニ愚蒙眼一。遂無ニ幾程一、建武の亂出來しかば、無ニ法流相續門弟一人一、成ニ孤獨衰窮身一、吉野の邊に漂泊して、終給けるとぞ聞えし。

○廣有射ニ怪鳥一事

元弘三年七月に改元有て、建武に被レ移。是は後漢光武治ニ王莽之亂一、再續ニ漢世一佳例也とて、漢朝の年號を被レ模けるとかや。今年天下に疫癘有て、病死する者甚多し。是のみならず、其秋の比より、紫宸殿の上に怪鳥出來て、いつまでいつまでとぞ鳴ける。其聲響レ雲驚レ眠。聞人皆無レ不ニ忌恐一。卽諸卿相議して曰、異國の昔、堯の代に十の日出たりしを、羿と云ける者承て、九の日を射落せり。我朝の古、堀川院の御在位の時、有ニ變化物一、奉レ惱レ君しをば、前陸奥守義家承て、殿上の下口に候じ、三度弦音を鳴して鎭レ之。又近衛院の御在位の時、鵺と云鳥の雲中に翔て鳴しをば、源三位賴政卿蒙レ勅射落したりし例あれば、源氏の中に誰か可ニ射候一者有と被レ尋けれ共、射はづし

廣瀬院—後高倉院諱は守貞、高倉院の皇子

欣求淨土—淨土に往生せんことを欣び求むること

叶ふまじ。如何にもして彼が醒道心、可著憍慢懈怠心と申ければ、冑の眞向に、第六天の魔王と金字に銘を打たる者、座中に進出で、彼醒道心候はん事は、可輒にて候。先後鳥羽院に滅武家と思召心を奉著、被攻六波羅、左京權大夫義時、定て向官軍可致合戰。其時加力義時ば、官軍敗北して、後鳥羽院遠國へ被流給はゞ、義時司天下成敗、治天を計申さんに、必廣瀬院第二宮を可奉即位。さる程ならば、此解脫房彼宮の有御歸依聖なれば、被召官僧、奉近龍顏、可刷出仕儀則。自是行業は日々に怠、憍慢は時々に增て、破戒無慚の比丘と成んずる條、不可有子細。角てぞ我等も若干の眷屬を可設候と申ければ、一行に並居たる惡魔外道共、此議尤可然覺候と同じて、各東西に飛去にけり。上人聞此事給て、是ぞ神明の我に道心を勸させ給ふ御利生よと、歡喜の泪を流し、其より軈て京へは歸給はで、山城國笠置と云深山に、卜一巖屋、攢落葉爲身上衣、拾果爲口食、長發厭離穢土心、鎮專欣求淨土勤し給ひける。角て三四年を過給ひける處に、承久の合戰出來て、義時執天下權しかば、後鳥羽院被流させ給て、廣瀬宮卽天子位給ける。其時解脫上人在笠置窟と聞召て、爲官僧と度々被下勅使被召けれ共、是こそ第六天の魔王共が

南膽部州―佛說に此世を指す

方便をきけば、假に雖レ似レ忌二三寶名一、內證の深心を思へば、其も尙有二化俗結緣理一と覺て、そゞろに感淚袖を濕しければ、日暮けれ共、在家なんどに可二立宿一心地もし給はず、外宮の御前に通夜念誦して、神路山の松風に眠をさまし、御裳濯川の月に心を淸して、御座ける處に、俄に空搔曇、雨風烈吹て、雲の上に車を轟、馬を馳る音して、東西より來れり。あな恐しや此何物やらんと、上人消レ肝見給へば、忽然として虛空に瑩レ玉鏤レ金たる宮殿樓閣出來て、庭上に引レ幔門前に張レ幕。爰に十方より所レ來の車馬の客、二三千も有らんと覺たるが左右に居流て、上座に一人の大人あり。其容甚非二尋常一、長二三十丈も有らんと見上たるに、頭は如二夜叉一、十二の面上に竝べり。四十二の手有て、左右に相連る。或は握二日月一、或は提二劍戟一、八龍にぞ乘たりける。相從處の眷屬共、皆非二常人一、八臂六足にして、鐵の楯を挾み、三面一體にして、金の鎧を著せり。座定て後、上座に居たる大人、左右に向て申けるは、此比帝釋の軍に打勝て、手に握二日月一、身居二須彌頂一、一足に雖レ蹈二大海一、其眷屬每日數萬人亡、故何事ぞと見れば、南膽部州扶桑國洛陽邊に、解脫房と云一人の聖出來て、化導利生する間、法威盛にして天帝得レ力、魔障弱して修羅失レ勢。所詮彼が角て有ん程は、我等向二天帝一合戰する事

六時—六時は晝夜には晨朝日中日沒初夜中夜後夜、一年には漸熱盛熱雨時茂時漸寒盛寒

五濁—一切濁、二煩惱濁、三衆生濁、四見濁、五命濁

三毒霧—貪慾、嗔恚、愚癡

の兵打圍で、路次を横行しければ、法衣忽汚二馬蹄塵一、律儀空落二人口譏一。彼廬山慧遠法師は、一度辭二風塵境一、寂寞の室に坐し給しより、假にも此山を不レ出と誓て、十八賢聖を結で、長日に六時禮讃を勤き。大梅常和尚は、强不レ被二世人知一住處一と、更に茅舍を移して入二深居一、詠二山居風味一得二已熟印可一給へり。有レ心人は、皆古も今も韜レ光消レ跡、暮山の雲に伴ひ、一池の蓮を衣として、行レ道清レ心こそ生涯を盡す事なるに、此僧正は如レ此名利の絆に羈れけるも非二直事一、何樣天魔外道の其心に依託して擧動せけるかと覺たり。以レ何云レ之とならば、文治の比洛陽に有二一沙門一、其名を解脱上人とぞ申ける。其母七歳の時、夢中に鈴を呑と見て設たりける子なりければ、非二直人一とて、三に成ける時より、其身を入二釋門一、遂に貴き聖とは成しける也。されば慈悲深重にして、三衣の破たる事を不レ悲、行業不退にして、一鉢の空き事を不レ愁。大隱は必しも市朝の内を不レ辭。身は雖レ交二五濁塵一、心は不レ犯二三毒霧一。任レ縁歳月を渡り、利レ生山川を抖擻し給けるが、或時伊勢太神宮に參て、内外宮を巡禮して、潛に自受法樂の法施をぞ被レ奉ける。大方自餘の社には樣替て、千木不レ曲、形祖木不レ搽、是正直捨方便の貌を顯せるかと見え、古松垂レ枝、老樹敷レ葉、皆下化衆生の相を表すと覺たり。垂跡の

小鷹狩―秋の鷹狩の稱

亂を事とせられける間、父有忠卿離二父子義一不孝の由にて被レ置ける。され共此朝臣、六一時の榮花を可レ開過去の因緣にや有けん、主上隱岐國へ御遷幸の時供奉仕て、六波羅の討手に上りたりし忠功に依て、大國三箇國、闕所數十箇所被二拜領一たりしかば、朝恩身に餘り、其侈日を驚せり。其重恩を與へたる家人共に、毎日の巡酒を振舞せけるに、堂上に袖を連ぬる諸大夫侍三百人に餘れり。其酒肉珍膳の費、一度に萬錢も尚不レ可レ足。又數十間の厩を作並べて、肉に餘れる馬を五六十匹被レ立たり。宴罷て和レ興時は、數百騎を相隨へて、內野北山邊に打出て、追二出犬一小鷹狩に日を暮し給ふ。其衣裳は豹虎皮を行縢に裁ち、金襴纐纈を直垂に縫へり。賤服二貴服一謂二之僭上一、僭上無禮國凶賊也と、孔安國が誡を不レ恥ける社うたてけれ。是はせめて俗人なれば不レ足レ言、彼文觀僧正の振舞を、傳聞こそ不思議なれ。適一旦名利の境界を離れ、既に三密瑜伽の道場に入給し無二甲斐一、唯利欲名聞にのみ赴て、更に觀念定坐の勤を忘たるに似たり。何の用ともなきに、財寶を積レ倉、不レ扶二貧窮一、傍に集二武具一士卒を逞す。成レ媚結レ交輩には、無レ忠賞を被二申與一ける間、文觀僧正の手の者と號して、建レ黨張レ臂者、洛中に充滿して、及二五六百人一。されば程遠からぬ參內の時も、輿の前後數百騎

被官—附屬の官

船七百餘艘にて參洛す。新田左馬助、舍弟兵庫助七千餘騎にて被二上洛一。此外國々の武士共、一人も不レ殘上集ける間、京白河に充滿して、王城の富貴日來に百倍せり。諸軍勢の恩賞は、暫延引すとも、先大功の輩の抽賞を可レ被レ行とて、足利治部大輔高氏に、武藏、常陸、下總三箇國、舍弟左馬頭直義に遠江國、新田左馬助義貞に上野、播磨兩國、子息義顯に越後國、舍弟兵部少輔義助に駿河國、楠判官正成に攝津國、河内、名和伯耆守長年に因幡、伯耆兩國をぞ被レ行ける。其外公家武家輩、二箇國三箇國を賜けるに、さしもの軍忠有し赤松入道圓心に、佐用庄一所計を被レ行。播磨國の守護職をば、無レ程被二召返一けり。されば建武の亂に、圓心俄に心替して朝敵と成しも、此恨とぞ聞えし。其外五十餘箇國の守護、國司、國々の闕所大庄をば、悉公家被官の人々拜領しける間、誇二陶朱之富貴一飽二鄭白之衣食一矣。

○千種殿竝文觀僧正奢侈事 附解脫上人事

中にも千種頭中將忠顯朝臣は、故六條内府有房公の孫にて御座しかば、文字の道をこそ家業とも嗜まるべかりしに、弱冠の比より我道にもあらぬ笠懸犬追物を好み、博奕淫

内辨外辨―第一の大臣は承明門内にて諸事を辨ず故に内辨といひ第二の大臣は門外にて諸事を辨ず故に外辨といふ

來て、前亡の餘類を集め、所々の逆黨を招で、國を亂らんとす。又河内國の賊徒等、佐目憲法僧正と云ける者を取立て、飯盛山に城郭をぞ構ける。是のみならず、伊豫國には赤橋駿河守が子息、駿河太郎重時と云者有て、立烏帽子峯に城を拵、四邊の庄園を掠領す。此等の凶徒、加二法威於武力一不二退治一者、早速に可レ難二靜謐一とて、俄に紫宸殿の皇居に構レ壇、竹内慈嚴僧正を被レ召て、天下安鎭の法をぞ被レ行ける。此法を行時、甲冑の武士四門を固て、内辨、外辨、近衞、階下に陣を張り、伶人樂を奏する始、武家の輩南庭の左右に立並て、抜レ劔四方を鎭る事あり。四門の警固には、結城七郎左衞門親光、楠河内守正成、鹽冶判官高貞、名和伯耆守長年也。南庭の陣には、右は三浦介、左は千葉大介貞胤をぞ被レ召ける。此兩人、兼ては可レ隨二其役一由を領狀申されけるが、臨二其期一、千葉は三浦が相手に成ん事を嫌、三浦は千葉が右に立ん事を忿て、共に出仕を留ければ、天魔障礙、法會違亂してぞ成にける。後に思合するに、天下久く無爲なるまじき表示也けり。されども、此法の效驗にや、飯盛城は正成に被二攻落一、立烏帽子城は、土居、得能に被二攻破一、筑紫は大友、小貳に打負て、朝敵の首京都に上しかば、共に被レ渡二大路一、鋒被レ懸二獄門一けり。東國西國已に靜謐しければ、自二筑紫一、小貳、大友、菊池、松浦の者共、大

意

弘誓—佛菩薩の廣大なる誓願

不歸馬于花山陽云々—尚書の武成篇の語に基き、天下の未だ靜かならぬをいふ

紙錢—紙幣

生恨死歡其我奈。　今須望足護皇基。

其後よりは、神の嗔も靜り、國土も穩也。偉矣尋本地大慈大悲觀世音、弘誓の海深して、群生濟度の船無不到彼岸。垂跡を申せば、天滿大自在天神の應化の身、利物日新にして、一來結緣の人、所願任心成就す。是を以て上自一人、下至萬民、渴仰の首を不傾と云人はなし。誠に奇特無雙の靈社也。去程に、治曆四年八月十四日内裏造營の事始有て、後三條院の御宇延久四年四月十五日遷幸あり。文人獻詩伶倫奏樂。目出かりしに、無幾程、又安元三年に、日吉山王の依御祟、大内の諸寮一宇も不殘燒にし後は、國の力衰て、代々の聖主も、今に至まで造營の御沙汰も無りつるに、今兵革の後、世未安、國弊民苦て、不歸馬于花山陽、不放牛于桃林野、大内裏可被作とて、自昔至今、我朝には未用作紙錢、諸國の地頭、御家人の所領に、被懸課役條、神慮にも違ひ、驕誇の端とも成ぬと、顰眉智臣も多かりけり。

○安鎭國家法事　附諸大將恩賞事

元弘三年春の比、筑紫には規矩掃部助高政、絲田左近大夫將監貞義と云平氏の一族出

運魯般斧―魯般は魯の巧人公輸子をいふ、孟子離婁上に出づ、こゝは工匠の巧を運したる

阿鼻地獄へ可被落と申しかば、三十餘人並居給へる冥官大に忿て、不移時刻可及其責と同じ給しを、座中第二の冥官、若年號を改て、過を謝する道あらば、如何し候べきと宣しに、座中皆案じ煩たる體に見えて、其後公忠蘇生仕候とぞ被奏ける。君大に驚思召て、軈て延喜の年號を延長に改て、菅丞相流罪の宣旨を燒捨て、官位を元の大臣に歸し、正二位の一階を被贈けり。其後天慶九年近江國比良社の禰宜、壬生良種に託して、大内の北野に千本の松一夜に生たりしかば、此に建社壇奉崇天滿大自在天神けり。御眷屬十六萬八千之神、尚も靜り給ざりけるにや、天德二年より天元五年に至迄、二十五年の間に、諸司八省三度迄燒にけり。角て有べきにあらねば、內裏造營あるべしとて、運魯般斧新に造立たりける柱に、一首の蝕の歌あり。

　造とも又も燒なん菅原や、棟の板間の合ん限りは。

此歌に神慮尚も御納受なかりけりと驚思召て、一條院より正一位太政大臣の官位を賜らせ給ふ。勅使安樂寺に下て、詔書を讀上ける時、天に聲有て、一首の詩聞えたり。

　昨爲北闕蒙悲士。今作西都雪恥尸。

浄藏貴所—三善淸行の第八子、貴所は尊稱

其人—其當事者卽ち時平公

冥官の廳—閻魔の廳

天下の稱讃在レ之とぞ聞えし。其後本院大臣受レ病身心鎭に苦み給ふ。浄藏貴所を奉レ請被二加持一けるに、大臣の左右の耳より、小青蛇頭を差出して、向二浄藏貴所一我無實の讒に沈し恨を爲レ散、此大臣を取殺んと思也。されば祈療共に以て不レ可レ有レ驗。斯樣に云者をば誰とかしる。是こそ菅丞相の變化の神、天滿大自在天神よとぞ示給ける。浄藏貴所示現の不思議に驚て、暫く罷二加持一出給ければ、本院大臣忽に薨じ給ぬ。御息女の女御、御孫の春宮も、軈て隱れさせ給ぬ。二男八條大將保忠同く重病に沈給けるが、驗者藥師經を讀む時、宮毗羅大將と打擧て讀けるを、我が首切らんと云聲に聞成て、則絶入給けり。三男敦忠中納言も早世しぬ。其人こそあらめ、子孫まで一時に亡給ける神罰の程こそおそろしけれ。其比延喜帝の御從父兄弟に、右大辨公忠と申人、惱事も無て頓死しけり。經二三日一蘇生給けるが、大息突出て、可二奏聞一事あり、我を扶起て內裏へ參れと宣ければ、子息信明、信孝二人左右の手を扶て、參內し給ふ。事の故何ぞと御尋有ければ、公忠わな〳〵と戰て、臣冥官の廳とておそろしき所に至り候つるが、長一丈餘なる人の衣冠正しきが、金軸の申文を捧て、粟散邊地の主、延喜帝王、時平大臣が讒を信じ、無レ罪臣を被レ流候き。其誤尤重し。早被レ記二廳御札一、

金輪―金輪王のこと、此には天子を指す

聲、叫喚大叫喚の苦の如し。遂に雷電大内の淸涼殿に落て、大納言淸貴卿の表の衣に火烘附て、伏轉べども不消。右大辨希世朝臣は、心剛なる人なりければ、縱如何なる天雷也とも、王威に不怖哉とて、弓に矢を取副て向給へば、五體すくみて覆に倒にけり。近衞忠包鬢髮に火附燒死ぬ。紀蔭連は煙に咽で絕入にけり。本院大臣あはや我身に懸る神罰よと被思ければ、玉體に立副進せ、太刀を拔懸て、朝に仕へ給し時も、我に禮を亂給はず、縱神と成給ふとも、君臣上下の義を失給はんや。金輪位高して、擁護の神未捨給、暫く靜りて、穩に其德を施し給へと、理に當て宣ひければ、理にやしづまり給けん、時平大臣も蹴殺され給はず、玉體も無恙、雷神天に上り給ぬ。去ども雨風の降續事は尙不休、角ては世界國土皆流失ぬと見えければ、以法威神忿を宥申さるべしとて、法性坊の贈僧正を被召。一兩度までは辭退申されけるが、勅宣及三度ければ、無力下洛し給けるに、鴨川おびたゞしく水增て、船ならでは道有まじかりけるを、僧正唯其車水の中を遣れと下知し給ふ。牛飼隨命漲たる河の中へ、車を押と遣懸たれば、洪水左右へ分、却て車は陸地を通りけり。僧正參內し給ふより、雨止風靜て、神忿も忽に宥り給ぬと見えければ、僧正預叡感登山し給ふ。山門の效驗

梵天帝釋四王—帝釋は天帝、四王は金輪王銀輪王銅輪王鐵輪王

摠持—陀羅尼、眞言

へば、夢幻の間難レ辨こそ覺て候へと被レ申ければ、菅丞相御顔にはら〳〵とこぼれ懸りける御泪を押拭はせ給て、我成二朝廷臣一、爲レ令レ安二天下一、暫下二生人間一處に、君時平公が讒を御許容有て、終に無實の罪に被レ沈ぬる事、嗔恚の焔從二劫火一盛也。依レ之五蘊の形は雖レ壞、一靈の神は明にして在レ天。今得二大小神祇梵天帝釋四王許一、爲レ報二其恨一、九重の帝闕に近づき、我につらかりし佞臣讒者を一々に蹴殺さんと存ずる也。其時定めて仰二山門一、可レ被レ致二摠持法驗一。縱雖レ有二勅定一、相構不レ可レ有二參內一と被レ仰ければ、僧正曰、貴方與二愚僧一師資之義雖レ不レ淺、君與レ臣上下之禮尚深。勅請の旨一往雖二辭申一、及二度々一爭か參內仕らで候べきと被レ申けるに、菅丞相御氣色俄に損じて、御前に有ける柘榴を取てかみ摧き、持佛堂の妻戸に、颯と吹懸させ給ければ、柘榴の核猛火と成て、妻戸に燃附けるを、僧正少も不レ騷、向二燃火一灑水の印を結ばれければ、猛火忽に消て、妻戸は半焦たる計也。此妻戸今に傳て在二山門一とぞ承る。其後菅丞相座席を立て、天に昇らせ給ふと見えければ、軈雷內裏の上に鳴落鳴騰、高天も落レ地、大地も如レ裂。一人百官縮レ身消レ魂給ふ。七日七夜が間、雨暴風烈して、世界如レ闇、洪水家々を漂はしければ、京白河の貴賤男女、喚き叫ぶ

とことはに—永久に

西府—太宰府

きに奉送置、都の官人も歸りぬ。都府樓の瓦の色、觀音寺の鐘の聲、聞に隨ひ、見に附ての御悲、此秋は獨我身の秋となれり。起臥露のとことはに、古鄕を忍ぶ御泪、毎言葉繁ければ、さらでも重き濡衣の袖乾く間も無りけり。さても、無實の讒によりて被遷配所恨入骨髓、難忍思召ければ、七日間御身を淸め、一卷の告文を遊して、高山に登り、竿の前に著て差上、七日御足を翹させ給たるに、梵天帝釋も其無實をや憐給けん、黑雲一群天より下さがりて、此告文を把て、遙の天にぞ上りける。其後延喜三年二月二十五日、遂に沈左遷恨薨逝し給ぬ。今の安樂寺を御墓所と定て、奉送置。惜哉北闕春花、隨流不歸水。奈何西府夜月、入不晴虛名雲。されば貴賤滴泪、慕世誇淳素化、遠近呑聲悲道蹈澆漓俗。同年夏の末に、延曆寺第十三の座主法性坊尊意贈僧正、四明山の上、十乘の床前に照觀月、淸心水御座しけるに、持佛堂の妻戸を、ほと〳〵と敲音しければ、押開て見給ふに、過ぬる春筑紫にて正しく薨逝し給ぬと聞えし菅丞相にてぞ御座しける。僧正奇く思して、先此方へ御入候へと奉誘引、さても御事は、過にし二月二十五日に、筑紫にて御隱候ぬと、慥に承しかば、悲歎の泪を袖にかけて、後生菩提の御追善をのみ申居候に、少も不替元の御形にて入御候

折人つらし—北野天神神託の歌、なさけなく折人つらし我宿のあるじ忘れぬ梅の立枝を

生の松—筑前の名所

東風吹ば匂おこせよ梅の花、主なしとて春な忘れそ。

と打詠給て、今夜淀の渡までと、追立の官人共に道を被レ急、御車にぞ被レ召ける。心なき草木までも、馴し別を悲けるにや、東風吹風の使を得て、此梅飛去て、配所の庭にぞ生たりける。されば夢の告有て、折人つらしと惜まれし、宰府の飛梅是也。去仁和の比讃州の任に下給しには、解二甘寧錦纜一、蘭橈桂檝、敲二舷於南海月一、昌泰の今配所の道へ赴せ給ふには、恩賜の御衣の袖を片敷て、浪の上、篷の底、傷二思於西府雲一。都に留置進せし北御方姫君の御事も、今は昨日を限の別と悲く、知ぬ國々へ被二流遣一十八人の君達も、さこそ思はぬ旅に赴て、苦レ身悩レ心らめと、一方ならず思召遣に、御泪更に乾間も無れば、旅泊の思を述させ給ける詩にも、

自二従勅使駈将去一、父子一時五處離。

口不レ能レ言眼中血。俯仰天神與二地祇一。

北御方より被レ副ける御使の道より歸けるに、御文あり。

君が住宿の梢を行々も、隱るゝまでにかへり見しかな。

心筑紫に生の松、待とはなしに明暮て、配所の西府に著せ給へば、埴生の小屋のいぶせ

參商―二つの名の星、遠く離るゝに譬ふ

亭子院―宇多法皇

心づくし―心盡しにて、筑紫國の意を兼ぬ

爲理由被申ければ帝さしは亂世害民逆臣、諫非禁邪忠臣に非ずと、被思召けるこそ淺猿けれ。誰知僞言巧似篤。勸君掩鼻君莫掩。使君夫婦爲參商。請君掇蜂君莫掇。使君母子成豺狼。さしも可睨夫婦父子の中をだに遠くるは、讒者の僞也。況於君臣間乎。遂に昌泰四年正月二十日、菅丞相被遷太宰權帥、筑紫へ被流給べきに定りにければ、不堪左遷御悲、一首の歌に千般の恨を述て、亭子院へ奉り給ふ。

流行我はみくづとなりぬとも、君しがらみと成てとゞめよ。

法皇此歌を御覽じて、御泪御衣を濕しければ、左遷の罪を申宥させ給はんとて、御參内有けれ共、帝遂に出御無りければ、法皇御憤を含で、空く還御成にけり。其後流刑定て、菅丞相忽に太宰府へ被流させ給ふ。御子二十三人の中に、四人は男子にておはせしかば、皆引分て四方の國々へ奉流。第一の姫君一人をば、都に留め進せ、殘君達十八人は、泣々都を立離れ、心づくしに赴せ給ふ御有樣こそ悲しけれ。年久く住馴給し紅梅殿を立出させ給へば、明方の月幽なるに、をり忘たる梅が香の、御袖に餘りたるも、今は是や古郷の春の形見と思召に、御泪さへ留らねば、

主皮、能中質、四曰和頌、合雅頌、五曰興武、與舞同

攝籙―攝政關白

淸花の家―大臣家

才。一時に作十首詩、可備天覽と被仰下ければ、則十題を賜て、半時計に十首の詩をぞ作せ給ける。

送春不用動舟車。唯別殘鶯與落花。
若使韶光知我意。今宵旅宿在詩家。

と云暮春の詩も、其十首の絕句の內なるべし。才賢の譽、仁義の道、一として無所缺、君歸三皇五帝德、世均周公孔子治、唯在此人と、君無限賞し思召ければ、寬平九年六月に、中納言より大納言に上、軈て大將に成給ふ。同年十月に、延喜帝御位に卽給し後は、萬機の政幷自幕府上相出しかば、攝籙の臣も、淸花の家も、無可比肩人。昌泰二年の二月に、大臣大將に成せ給ふ。此時本院大臣と申は、大織冠九代の孫、昭宣公第一の男、皇后御兄、村上天皇の御伯父也。攝家と云、高貴と云、旁我に等き人非じと思ひ給けるに、官位祿賞共に菅丞相に被越給ければ、御憤更無休時。光卿、定國卿、菅根朝臣などに、內々相計て、召陰陽頭、王城の八方に埋人形、祭冥衆、菅丞相を呪咀し給けれども、天道私なければ、御身に災難不來。さらば構讒沈罪科と思て、本院大臣帝々、菅丞相天下の世務に有私、不知民愁、以非

折桂―第一等に及第する榮譽を得ること

五善―馬融曰、射有五善焉、一曰和、志體和、二曰容、有容儀、三曰

じたる御氣色も無て、

月耀如晴雪、　梅花似照星、
可憐金鏡轉、　庭上玉芳馨。

と、寒夜の卽事を、詞明に五言の絕句にぞ作せ給ける。其より後、詩は捲盛唐波瀾、先七步才、文は激漢魏芳潤、諳萬卷書給しかば、貞觀十二年三月二十三日、對策及第して、自詞場に折桂給ふ。其年の春、都良香の家に人集て弓を射ける所へ、菅少將おはしたり。都良香、此公は無何學窗に聚螢、稽古に無隙人なれば、弓の本末をも知給はじ。的を射させ奉り、笑ばやと思て、的矢に弓を取副て、閣菅少將御前、春の始にて候に、一度遊ばし候へとぞ被請ける。菅少將さしも辭退し給はず、番の逢手に立合て、如雪膚を押袒、打上て引下すより、暫しをりて堅めたる體、切て放たる矢色、弦音、弓倒、五善何れも逞く勢有て、矢所一寸ものかず、五度の十をし給ければ、都良香感に堪兼て、自下て御手を引、酒宴及數刻、樣々の引出物をぞ被進ける。同年の二月二十六日に、延喜帝未春宮にて御座ありけるが、菅少將を被召て、漢朝の李嶠は、一夜に百首の詩を作けると見たり。汝盍如其

如栗散と見ゆ、栗散王の國を栗散國といふ

鹽梅の臣—輔弼の臣

宰相—我參議の別名、相公といふも亦同じ

野大師鑒レ之、門々の額を書せ給けるに、大極殿の大の字の、中を引切て火と云字に成し、朱雀門の朱の字を米と云字にぞ遊しける。小野道風見レ之、大極殿は火極殿、朱雀門は米雀門とぞ難じたりける。大權の聖者鑒二未來一書給へる事を、凡俗として難じ申たりける罰にや、其後より、道風執レ筆、手戰て文字正しからざれども、草書に得レ妙人なれば、戰て書けるも、軈て筆勢にぞ成にける。遂に大極殿より火出て、諸司八省悉燒にけり。無レ程又造營有しを、北野天神の御眷屬火雷氣毒神、清涼殿の坤の柱に落掛給し時、燒けるとぞ承る。抑彼天滿天神と申は、風月の本主、文道の大祖たり。天に御座ては日月に顯レ光、照二國土一、地に降下ては、鹽梅の臣と成て、群生を利し給ふ。其始を申せば、菅原宰相公是善卿の南庭に、五六歲計なる小兒の容顏美麗なるが、詠二前栽花一、唯一人立給へり。菅相公怪しと見給て、君は何の處の人、誰が家の男にて御座ぞと問給に、我は無レ父無レ母。願は相公を親とせんと思侍る也と被レ仰ければ、相公嬉く思召て、手づから奉二昇懷一、鴛鴦の衾の下に、恩愛の養育を爲レ事生育奉り、御名をば菅少將とぞ申ける。未レ習悟レ道、御才學世に又類も非じと見給しかば、十一歲に成せ給し時、父菅相公御髮を搔撫て、若詩や作り給ふべきと問進せ給ければ、少しも案

官の廳―太政官の役所
江相公―大江朝綱
直廬―關白參朝の節更衣する所
回祿―火神の名、火災をいふ
粟散國―仁王經疏に小王衆多、猶

弓胡籙を身に添て、雷鳴騷ぐ終夜、あばらなる屋に居たりしは、官の廳の八神殿、光源氏大將の、如物もなしと詠じつゝ、朧月夜に憧しは、弘徽殿の細殿、江相公の古、越路の國へ下しに、旅の別を悲て、後會期遙也。濡二纓於鴻臚之曉淚一と、長篇の序に書たりしは、羅城門の南なる鴻臚館の名殘なり。鬼の間直廬鈴の繩、荒海の障子をば、清涼殿に被レ立、賢聖の障子をば、紫宸殿にぞ被レ立ける。東の一の間には、馬周、房玄齡、杜如晦、魏徵、二の間には、諸葛亮、蘧伯玉、張子房、第伍倫、三の間には、管仲、鄧禹、子產、蕭何、四の間には、伊尹、傅說、大公望、仲山甫、西の一の間には、李勣、虞世南、杜預、張華、二の間には、羊祜、楊雄、陳寔、班固、三の間には、桓榮、鄭玄、蘇武、倪寬、四の間には、董仲舒、文翁、賈誼、叔孫通也。畫圖は金岡が筆、賛詞は小野道風が書たりけるとぞ承る。鳳の甍翔レ天、虹の梁聳レ雲、さしもいみじく被二造竝一たりし大內裏、天災を消に無レ便、回祿度々に及で、今は昔の礎のみ殘れり。尋二回祿由一、彼唐堯虞舜の君は、支那四百州の主として、其德天地に應ぜしか共、茅茨不レ剪、柴椽不レ削とこそ申傳たれ。况や粟散國の主として、此大內を被レ造たる事、其德不レ可二相應一。後王若無德にして、欲レ令二居安一給はゞ、國の財力も依レ之可レ盡と、高

五節の淵醉—五節の舞の翌日即ち十一月寅の日に群臣に宴を賜ふ儀

古の皇居に及ばねばとて、大内裏可レ被レ造とて、安藝周防を料國に被レ寄、日本國の地頭御家人の所領の得分、二十分一を被二懸召一。抑大内裏と申は、秦始皇帝の都、咸陽宮の一殿を模して被レ作たれば、南北三十六町、東西二十町の外、龍尾の置石を居て、四方に十二門を被レ立たり。東には陽明、待賢、郁芳門、南には美福、朱雀、皇嘉門、西には談天、藻壁、殷富門、北には安嘉、偉鑒、達智門。此外上東上西二門に至迄、守二交戟衞伍一長時に戒二非常一たり。三十六の後宮には、三千の淑女餝レ粧、七十二の前殿には、文武の百司待レ詔。紫宸殿の東西に、清涼殿、溫明殿、當レ北常寧殿、貞觀殿。貞觀殿と申は后町の北の御匣殿也。校書殿と號せしは、清涼殿の南の弓場殿也。昭陽舍は梨壺、淑景舍は桐壺、飛香舍は藤壺、凝花舍は梅坪、襲芳舍と申は雷鳴坪の事也。萩戸、陣座、瀧口戸、鳥曹司、縫殿、兵衞陣、左は宣陽門、右は陰明門、日花月花の兩門は對二陣座左右一。大極殿、小安殿、蒼龍樓、白虎樓、豐樂院、清暑堂、五節の淵醉、大嘗會は此所にて被レ行。中和院は中院、内教坊は雅樂所也。御修法は眞言院、神今食は神嘉殿、眞弓競馬をば、武德殿にして被二御覽一。朝堂院と申は八省の諸寮是也。右近の陣の橘は、昔を忍ぶ香を留め、御階に繁る竹の臺、幾世の霜を重ぬらん。在原中將の

紀傳明法―紀傳は歴史學に詩文を兼ねたるもの、明法は法制に明なるもの

四箇大寺―東大寺、興福寺、延暦寺、園城寺

汰せんと欲し給けれ共、叶はで年月をぞ被レ送ける。又雜訴の沙汰の爲にとて、郁芳門の左右の脇に、決斷所を被レ造。其議定の人數には、才學優長の卿相雲客、紀傳明法外記官人を三番に分つて、一月に六箇度の沙汰の日をぞ被レ定ける。凡事の體嚴重に見えて堂々たり。去ども、是尚理世安國の政に非りけり。或は自二内奏一訴人蒙二勅許一、決斷所にて論人に理を被レ附、又決斷所にて本主賜二安堵一、内奏より其地を別人の恩賞に被レ行。如レ此互に錯亂せし間、所領一所に四五人の給主附て、國々の動亂更に無二休時一。去七月の初より、中宮御心煩はせ給けるが、八月二日隱させ給ふ。是のみならず、十一月三日、春宮崩御成にけり。是非二直事一、亡卒怨靈共の所爲なるべしとて、止二其怨害一、爲レ令レ赴二善所一、仰二四箇大寺一、大藏經五千三百巻を、一日中に被二書寫一、法勝寺にて則供養を遂られけり。

○大内裏造營事 附聖廟御事

翌年正月十二日諸卿議奏して曰、帝王の業萬機事繁して、百司誤レ位。今の鳳闕僅方四町の内なれば、分内狹して、調二禮儀一無レ所。四方へ一町宛被レ廣、建レ殿造レ宮。是猶

上卿—禁中に公事ある時之を奉行する役人

媚奧求竈—尊にも卑にも媚ぶること、論語八佾篇より出づ

郢曲—俗曲

闕所—所有人なき官有地

かりけり。同八月三日より、可レ有二軍勢恩賞沙汰一とて、洞院左衛門督實世卿を被レ定二上卿一。依レ之諸國の軍勢、立二軍忠支證一、捧二申狀一望二恩賞一輩、何千萬人と云數を不レ知。實に有レ忠者は憑レ功不レ諛、無レ忠者媚レ奧求レ竈、掠二上聞一間、數月の内に、僅に二十餘人の恩賞を被二沙汰一たりけれ共、事非二正路一、軈被二召返一けり。さらば改二上卿一とて、萬里小路中納言藤房卿を被レ成二上卿一、申狀を被二附渡一。藤房請二取之一、糺二忠否一分二淺深一、各申與んとし給ひける處に、依二内奏祕計一、唯今までは朝敵なりつる者も安堵を賜り、更に無レ忠輩も、五箇所十箇所の所領を賜ける間、藤房諫言を納かねて、稱レ病被レ辭二奉行一。角て非レ可二默止一とて、九條民部卿を上卿に定て、御沙汰有ける間、光經卿、諸大將に其手の忠否を委細尋究て、申與んとし給ける處に、相摸入道の一跡をば、内裏の供御料所に被レ置。舍弟四郎左近大夫入道の跡をば、兵部卿親王へ被レ進。大佛陸奧守の跡をば、准后の御領になさる。此外相州の一族、關東家風の輩が所領をば、無二指事一郢曲妓女の輩、蹴鞠伎藝の者共、乃至衞府諸司官女官僧まで、一跡二跡を合て内奏より申賜りければ、今は六十六箇國の内には、立レ錐の地も、軍勢に可レ行闕所は無りけり。斯ければ光經卿も、心計は無偏の恩化を申沙

混物具―甲冑にて總身を堅めたるをいふ

本所―領家

混物具にて三千餘騎、閑に小路を被レ打。其の後陣には、湯淺權大夫、山本四郎次郎忠行、伊東三郎行高、加藤太郎光直、畿内近國の勢打込に、二十萬七千餘騎、三日支てぞ打たりける。時移り事去て、萬昔に替る世なれども、天台座主忽に蒙ニ將軍宣旨一、帶ニ甲冑一召ニ具隨兵一、御入洛有し分野は、珍かりし壯觀也。其後妙法院宮は、四國の勢を被ニ召具一、讃岐國より御上洛あり。萬里小路中納言藤房卿は、預人小田民部大輔相具して、常陸國より被ニ上洛一。春宮大進季房は、配所にて逝にければ、父宣房卿悅の中の悲、老後の泪、滿レ袖。法勝寺圓觀上人をば、預人結城上野入道奉ニ具足一上洛したりければ、君法體の無レ恙事を悅び思召て、軈て結城に本領安堵の被レ成ニ下綸旨一。文觀上人は硫黃島より上洛し、忠圓僧正は越後國より被ニ歸洛一。總じて此君笠置へ落させ給し刻、解官停任せられし人々、死罪流刑に逢し其子孫、此彼より被ニ召出一、一時に蟄懷を開けり。されば日來誇ニ武威一、無ニ本所一權門高家の武士共、いつしか成ニ諸庭奉公人一、或は走ニ輕軒香車後一、或は跪ニ青侍格勤前一。世の盛衰、時の轉變、歎に叶はぬ習と知ながら、今の如にて公家一統の天下ならば、諸國の地頭御家人は、皆奴婢雜人の如にて有べし。哀如何なる不思議も出來て、武家執ニ四海權一世中に又成かしと、思ふ人のみ多

帶刀―將軍出行の時太刀を帶いて供奉する役

沃懸地の鞍―一面に金粉を沃ぎかけて塗りたる鞍

芝打―鞦の裾

事、彼不忠何事乎。太平の後、天下の士卒猶抱二恐懼心一。若無レ罪行レ罰、諸卒豈成二安堵思一哉。然ば於二大樹一任、不レ可レ有二仔細一。至二高氏誅罰事一、堅く可レ留二其企一と有二聖斷一被レ成二征夷將軍宣旨一。依レ之宮の御憤も散じけるにや、六月十七日志貴を御立有て、八幡に七日御逗留有て、同二十三日御入洛あり。其行列行粧盡二天下壯觀一。先一番には赤松入道圓心千餘騎にて前陣を仕る。二番に殿法印良忠七百餘騎にて打つ。三番には四條少將隆資五百餘騎、四番には中院中將定平八百餘騎にて打る。其次に、花やかに鎧うたる兵五百人勝て、帶刀にて二行に被レ歩。其次に、宮は赤地の錦の鎧直垂に、緋威の鎧の裾金物に、牡丹の陰に獅子の戲て前後左右に追合たるを、草摺長に被レ召、兵庫鎖の丸鞘の太刀に、虎の皮の尻鞘かけたるを、太刀懸の半に結てさげ、白篦に節陰計少塗て、鵠の羽を以て矧だる征矢の、三十六指たるを筈高に負成、二所籐の弓の銀のつく打たるを十文字に挙て、白瓦毛なる馬の、尾髪飽まで足て太く逞きに、沃懸地の鞍置て、厚總の鞦の唯今染出たる如くなるを、芝打長に懸成し、侍十二人に雙口をさせ、千鳥足を蹈せて、小路を狹しと被レ歩。後乘には、千種頭中將忠顯朝臣、千餘騎にて被二供奉一。猶も御用心の最中なれば、御心安き兵を以て、非常を可レ被レ戒とて、國々の兵をば、

九功—金木水火土穀德利用厚生
虎賁—壯勇の人也
退體の主—讓位の天子
台嶺—比叡山
大樹—將軍

給べしとぞ被レ仰ける。宮、清忠を御前近く被レ召、勅答申させ給けるは、今四海一時に定て、萬民誇二無事化一、依二陛下休明德一、由二微臣籌策功一矣。而に足利治部大輔高氏、僅に以二一戰功一、欲レ立二其志於萬人之上一。今若乘二其勢微一不レ討レ之、取二高時法師逆惡一、加二高氏威勢上一者なるべし。是の故に擧レ兵備レ武、全非二臣罪一。次剃髮事、兆前に不レ鑒レ機者、定て舌を飜さん歟。今逆徒不レ測滅びて、天下雖レ屬二無事一、與黨猶隱レ身伺レ隙、不レ可レ有レ不レ待レ時。此時上無二威嚴一、下必可レ有二暴慢心一。されば文武の二道同く立て可レ治は今の世也。我若歸二剃髮染衣體一、捨二虎賁猛將威一、於レ武全二朝家一人誰哉。夫諸佛菩薩垂二利生方便一日、有二攝受折伏二門一。其攝受者作二柔和忍辱之貌一、慈悲を爲レ先、折伏者現二大勢忿怒形一、刑罰爲レ宗。況聖明君求二賢佐武備才一時、或は出塵の輩を歸二俗體一、或は退體の主を奉レ卽二帝位一、和漢其例多し。所謂賈島浪仙は、釋門より出て成二朝廷臣一。我朝天武孝謙は、替二法體一登二重祚位一。抑我栖二台嶺幽溪一、纔守二一門跡一、居二幕府上將一、遠靜二一天下一、國家の用何れをか爲レ吉。此兩篇速に被レ下二勅許一樣に可レ經二奏聞一と被レ仰、則清忠をぞ被レ返ける。清忠卿歸參して、此由を奏聞しければ、主上具に被二聞召一、居二大樹位一、全二武備守一、げにも爲二朝家一似レ忘二人嘲一。高氏誅罰の

太平記　巻第十二

○公家一統政道事

廢帝―光嚴天皇

入洛―入京

七德―禁暴、戢兵、保天、定功、安民、和衆、豐財

先帝重祚之後、正慶の年號は廢帝の改元なればとて、被レ棄レ之、本の元弘に歸さる。其二年の夏比、天下一時に評定して、賞罰法令悉く公家一統の政に出しかば、群俗歸レ風若レ披レ霞而照二春日一、中華懼レ軌若レ履レ刃而戴二雷霆一。同年の六月三日、大塔宮志貴の毘沙門堂に御座在と聞えしかば、畿内近國の勢は不レ及レ申、京中遠國の兵までも、人より先にと馳參ける間、其勢頗盡二天下大半一ぬらんと夥し。同十三日に可レ有二御入洛一と被レ定たりしが、無二其事一延引有て、被レ召二諸國兵一、作レ楯砥レ鏃、合戰の御用意ありと聞えしかば、誰が身の上とは知ね共、京中の武士の心中更に不レ穩。依レ之主上右大辨宰相清忠を勅使にて被レ仰けるは、天下已に鎭て、偃二七德之餘威一、成二九功之大化一處に、猶動二干戈一被レ集二士卒一之條、其要何事乎。次四海騷亂の程は、爲レ遁二敵難一、一旦其容を雖レ被レ替二俗體一、世已に靜謐の上は、急歸二剃髮染衣姿一、門跡相承の業を事とし

口養—生計

挺楚—挺は杖、楚はしもと

に身を投、或は口養の資無して、子に後れたる老母は、僅に一日の餐を求兼て、自溝壑に倒伏す。承久より以來、平氏世を執て九代、暦數已に百六十餘年に及ぬれば、一類天下にはびこりて、威を振ひ勢を專にせる所々の探題、國々の守護、其名を揚て天下に在者已に八百人に餘りぬ。況其家々の郎從たる者、幾萬億と云數を不知。去ば縱六波羅こそ輒被攻落共、筑紫と鎌倉をば、十年二十年にも被退治事難とこそ覺えしに、六十餘州悉符を合たる如く、同時に軍起て、僅に四十三日の中に皆亡びぬる業報の程こそ不思議なれ。愚哉、關東の勇士、久く天下を保ち、威を遍く海内に覆しかども、國を治る心無りしかば、堅甲利兵、徒に挺楚の爲に被摧て、滅亡を瞬目の中に得たる事。驕れる者は失し、儉なる者は存ず、古より今に至まで是あり。此裏に向て頭を囘す人、天道は盈てるを缺事を不知して、猶人の欲心の厭ことなきに溺る。豈不迷乎。

領狀―又領掌に作ろ、引受くろこと

肝を消ける處に、關東奉公の者共は、一旦命を助からん爲に、降人に雖レ出、遂には如何にも野心有ぬべければ、悉可レ被レ誅とて、貞俊又被二召捕一てけり。迚も心の留る浮世ならねば、命を惜とは思はねども、故郷に捨置し妻子共の行末、何ともきかで死なんずる事の、餘に心に懸りければ、最期の十念勸ける聖に附て、年來身を放たざりける腰の刀を、預人の許より乞出して、故鄕の妻子の許へぞ送ける。聖是を請取て、其行末を可二尋申一と領狀しければ、貞俊無レ限喜て、敷皮の上に居直て、一首の歌を詠じ、十念高らかに唱て、閑に首をぞ打せける。

　皆人の世に有時は數ならで、憂にはもれぬ我身也けり。

聖形見の刀と、貞俊が最期の時著たりける小袖とを持て、急ぎ鎌倉へ下、彼女房を尋出し、是を與へければ、妻室聞もあへず、唯淚の床に伏沈て、悲に堪兼たる氣色に見えけるが、側なる硯を引寄て、形見の小袖の褄に、

　誰見よと信を人の留めけん、堪てあるべき命ならぬに。

と書附、記念の小袖を引かづき、其刀を胸につき立て、忽にはかなく成にけり。此外、或は偕老の契空して、夫に別たる妻室は、苟も二夫に嫁せん事を悲て、深き淵瀨

心にあらまされ―心に豫定せられ

二階堂出羽入道道蘊は、朝敵の最一、武家の輔佐たりしか共、賢才の譽、兼てより叡聞に達せしかば、召仕るべしとて、死罪一等を許され、懸命の地に安堵して居たりけるが、又隱謀の企有とて、同年の秋の季に、終に死刑に被レ行てげり。佐介左京亮貞俊は、平氏の門葉たる上、武略才能共に兼たりしかば、定て一方の大將をもと、身を高く思ける處に、相摸入道さまでの賞翫も無りければ、恨を含み憤を抱きながら、金剛山の寄手の中にぞ有ける。斯る處に、千種頭中將綸旨を申與へて、御方に可レ參由を被レ仰ければ、去五月の初に千劒破より降參して、京都にぞ經廻ける。去程に、平氏の一族皆出家して、囚人に成し後は、武家被官の者共、悉所領を被二召上一、宿所を被二追出一て、僅なる身一をだに措かねて、貞俊も阿波の國へ被レ流て有しかば、今は召仕ふ若黨中間も身に不レ傍、昨日の樂今日の悲と成て、ますます身を責る體に成行ければ、盛者必衰の理の中に在ながら、今更世中無レ情覺て、如何なる山の奥にも身を隱さばやと、心にあらまされてぞ居たりける。さても關東の樣何とか成ぬらんと尋聞に、相摸入道殿を始として、一族以下一人も不レ殘、皆被レ討給て、妻子從類も共に行方を不レ知成ぬと聞えければ、今は誰を憑み、何を可レ待世とも不レ覺、見に附、聞に隨て、いとゞ心を摧き、

黑衣の身―僧侶、黑衣は墨染の衣をいふ

黃頭郞が夢―黃頭郞は前漢鄧通のこと、一旦富裕となるも遂に貧餓することをいふ

百餘年の後に令辱。況乎是は敵に被謀たるにも非ず、又自害に隙なきにも非ず、勢未盡先に、自黑衣の身と成て、遁ぬ命を捨かねて、縲紲面縛の有樣、前代未聞の恥辱也。囚人京都に著ければ、皆黑衣を脫せ、法名を元の名に改て、一人づゝ大名に預らる。其秋刑を待程に、禁錮の裏に起伏て、思ひ連ぬる浮世の中、淚の落ぬ隙もなし。さだかならぬ便に附て、鎌倉の事共を聞ば、偕老の枕の上に契を成す貞女も、むくつけげなる田舍人どもに被奪て、王昭君が恨を貽し、富貴の臺の中に冊立し賢息も、傍へだにも寄ざりし凡下共の奴と成て、黃頭郞が夢をなせり。是等はせめて乍憂、未だ生たりときけば、猶も思の數ならず。昨日は岐を過ぎ、今日は門にやすらふ行客の、穴哀や、道路に袖をひろげ食を乞し女房の、倒て死しは誰が母也、短褐に貌を窶て緣を尋し旅人の、被捕て死しは誰が親也と、仄に語るを聞時は、今迄生ける我身の命を、憂しとぞ更に喞たれける。七月九日、阿曾彈正少弼、大佛右馬助、江馬遠江守、佐介安藝守、竝長崎四郞左衞門、彼此十五人、阿彌陀峯にて被誅けり。此君重祚の後、諸事の政、未被行前に、刑罰を專にせられん事は、非仁政とて、潛に是を被切しかば、首を被渡までの事に及ばず、面々の死骸便宜の寺々に被送、後世菩提をぞ被弔ける。

三衣—僧の著る三種の衣服、大衣、七條、五條をいふ

平氏の軍兵、已に十方に雖二退散一、殘留る兵尙五萬騎に餘たれば、今一度手痛き合戰あらんと覺るに、日來の擬勢盡はてゝ、いつしか小水の魚の沫に呴く體に成て、徒に日を送ける間、先一番に、南都の一の木戶口般若寺を堅て居たりける宇都宮紀淸兩黨七百餘騎、綸旨を賜て上洛す。是を始として、百騎二百騎五騎十騎、我先にと降參しける間、今平氏の一族の輩、譜代重恩の族の外は、一人も殘留る者も無りけり。是に附ても、今は何に憑を懸てか命を可レ惜なれば、各討死して名を後代にこそ殘すべかりけるに、責ての業の程の淺猿さは、阿曾彈正少弼時治、大佛右馬助貞直、江馬遠江守、佐介安藝守を始として、宗徒の平氏十三人、竝長崎四郞左衞門尉、二階堂出羽入道道蘊已下、關東權勢の侍五十餘人、般若寺にして各入道出家して、律僧の形に成り、三衣を肩に懸、一鉢を手に提て、降人に成てぞ出たりける。定平朝臣是を請取て、高手小手に縛め、傳馬の鞍坪に縛屈めて、數萬の官軍の前々を追立させ、白晝に京へぞ被レ歸ける。平治には、惡源太義平平家に被二生捕一て、首を被レ刎、元曆には、內大臣宗盛公源氏に被レ囚て、大路を被レ渡。是は皆戰に臨む日、或は敵に被レ誅、或は自害に無レ隙して、心ならず敵の手に懸りしをだに、今に至まで人口の嘲と成て、兩家の末流是を聞時、面を一

術婆伽—術はもと迷に作る、事大智度論第十四卷に出でたり

かたしく袖—さむしろに衣かたしき今夜もや我を待つらん宇治の橋姫

六七二十計なる女房の、色々の衣に、赤き袴踏くゝみたるが、三人浪底より浮び出て、其事となく泣しをれたる樣也。男よに睦じげなる氣色にて、相互に寄近附んとする處へ、猛火俄に燃出て、炎男女の中を隔ければ、三人の女房は、いもせの山の中々に、思焦れたる體にて、波の底に沈ぬ。男は又泣々浪の上を游歸て、一塚の方へぞ歩み行ける。餘の不思議さに、船人此男の袖を引へて、去にても誰人にて御渡候やらんと問たりければ、男答云、我等は名越遠江守、同修理亮、並兵庫助と各名乘て、かき消樣に失にけり。天竺の術婆伽は、后を戀して、思の炎に身を焦し、我朝の宇治の橋姫は、夫を慕ひて、かたしく袖を波に浸す。是皆上古の不思議、舊記の載る所也。親り斯る事のうつゝに見えたりける亡念の程こそ罪深けれ。

○金剛山寄手等被レ誅事附佐介貞俊事

京洛已に靜まりぬといへ共、金剛山より引返したる平氏共、猶南都に留て、帝都を攻んとする由聞え有ければ、中院中將定平を大將として、五萬餘騎、大和路へ被二差向一楠兵衛正成に、畿内勢二萬餘騎を副て、河内國より搦手にぞ被レ向ける。南都に引籠る

本の露末の雫―遍照の歌、本の露末の雫や世の中のおくれ先だつためしなるらん

ひれふりて―ひれは昔婦人が首にかけて飾とせしもの

取乗て、遙の澳に漕出す。うらめしの追風や、しばしもやまで、行人を波路遙に吹送る。情なの引鹽や、立も歸らで、漕船を浦より外に誘らん。彼松浦佐用嬪が、玉島山にひれふりて、澳行船を招しも、今の哀に被レ知たり。水手櫓をかいて、船を浪間に差留めたれば、一人の女房は、二人の子を左右の脇に抱き、二人の女房は、手に手を取組で、同く身をぞ投たりける。紅の衣絳き袴の暫浪に漂しは、吉野龍田の河水に、落花紅葉の散亂たる如くに見えたるが、寄來る浪に紛れて、次第に沈むを見はてゝ後、城に殘留たる人々、上下七十九人、同時に腹を搔切て、兵火の底にぞ燒死ける。其亡魂幽靈尚も此地に留て、夫婦執著の妄念を遺しけるにや、近比越後より上る船人、此浦を過けるに、俄に風向ひ波荒かりける間、碇を下して澳に船を留たるに、夜更浪靜て、松濤の風、蘆花の月、旅泊の體、萬心すごき折節、遙の澳に、女の聲して泣悲む音しけり。是を怪しと聞居たる處に、又汀の方に男の聲して、其船こゝへ寄せてたべと、聲々にぞ呼りける。船人止む事を不レ得して、船を渚に寄たれば、最清げなる男三人、あの澳まで便船申さんとて、屋形にぞ乗たりける。船人是を乘せて、澳津潮合に船を差留めたれば、此三人の男船より下て、漫々たる浪の上にぞ立たりける。暫あれば、年十

縲紲の恥ー
四人となる
恥

逢に替んー
業平の歌・
思ふには忍
ぶることぞ
まけにける
逢ふにし替
へばさもあ
ればあれ

えしかば、我等此小勢にて合戰をすとも、何程の事をかし出すべき。慭なる軍して、無云甲斐敵の手に懸り、縲紲の恥に及ばん事、後代迄の嘲たるべしとて、敵の近附ぬ前に、女性少き人々をば、舟に乘て澳に沈め、我身は城の内にて自害をせんとぞ出立ける。遠江守の女房は、偕老の契を結て、今年二十一年になれば、恩愛の懐の内に、二人の男子をそだてたり。兄は九、弟は七にぞ成ける。修理亮有公が女房は、相馴て已に三年に餘けるが、唯ならぬ身に成て、早月比過にけり。兵庫助貞持が女房は、此四五日前に、京より迎へたりける上臈女房にてぞ有ける。其昔紅顏翠黛の世に無類有樣、ほのかに見初し珠簾の隙もあらばと心に懸て、三年餘戀慕しが、兎角方便を運して、偸出してぞ迎へたりける。語ひ得て纔に昨日今日の程なれば、逢に替んと歎來し命も今は被惜ける。戀悲みし月日は、天の羽衣撫盡すらん程よりも長く、相見て後のたゞちは、春の夜の夢よりも尙短し。忽に此悲に逢ける契の程こそ哀なれ。末の露、本の雫、後れ先立道をこそ、悲き物と聞つるに、浪の上、煙の底に、沈み焦れん別の憂さ、こはそもいかゞすべきと、互に名殘を惜つゝ、伏まろびてぞ被泣ける。去程に、敵の早寄來るやらん、馬煙の東西に揚て見え候と騷げば、女房少き人々は、泣々皆船に

隔生則忘ー生を隔つれば生前の事を忘るゝをいふ

奈利ー地獄

も續て身を投て、同じ淵にぞ被沈ける。其後時治も自害して、一堆の灰と成にけり。隔生則忘とは申ながら、又一念五百生、繫念無量劫の業なれば、奈利八萬の底までも、同じ思の炎と成て焦れ給ふらんと、哀也ける事共也。

○越中守護自害事附怨靈事

越中の守護名越遠江守時有、舍弟修理亮有公、甥の兵庫助貞持三人は、出羽越後の宮方、北陸道を經て京都へ攻上べしと聞えしかば、道にて是を支んとて、越中の二塚と云所に、陣を取て、近國の勢共をぞ相催しける。斯る處に、六波羅已に被攻落て後、東國にも軍起て、已に鎌倉へ寄けるなんど、樣々に聞えければ、催促に隨て、唯今まで馳集つる能登越中の兵共、放生津に引退て、却て守護の陣へ押寄んとぞ企ける。是を見て、今まで身に代り、命に代らんと、義を存じ、忠を致しつる郎從も、時の間に落失て、剩敵軍に加り、朝に來り、暮に往て、交を結び、情を深せし朋友も、忽に心變じて、却て害心を挾む。今は殘留たる者とては、三族に不遁一家輩、重恩を蒙し譜代の侍、僅に七十九人也。五月十七日の午刻に、敵既に一萬餘騎にて寄ると聞

秋の霜ー刃をいふ

聞えければ、女房最恨て、水に住鴛、梁に巣くふ燕も、翼をかはす契を不レ忘。況や相馴進て、不レ覺過ぬる十年餘の袖の下に、二人の子供をそだてゝ、千代もと祈し無二甲斐一御身は今秋の霜の下に伏し、少き者共は朝の露に先立て消はてなん後の悲を堪へ忍ては、時の間もながらふべき我身かや。とても思に堪かねば、生て可レ有命ならず。同は思ふ人と共にはかなく成て、埋れん苔の下までも、同穴の契を忘じと、泪の床に伏沈む。去程に、防矢射つる郎等共、已に皆被レ討て、衆徒箱の渡を打越、後の山へ廻る聞えければ、五と六とに成ける幼き人を、鎧唐櫃に入て、乳母二人に前後を舁せ、鎌倉河の淵に沈めよとて、遙に見送て立たれば、母儀の女房も、同く其淵に身を沈めんと唐櫃の緒に取附て歩行、心の中こそ悲しけれ。唐櫃を岸の上に舁居て、蓋を開たれば、二人の少き人顔を差擧て、是はなう母御、何へ行給ふぞ。母御の徒歩にて歩ませ給ふが、御痛敷候。是に乘らせ給へと、何心もなげに戯ければ、母上流るゝ泪を押へて、此河は是極樂淨土の八功德池とて、少き者の生れて、遊び戲るゝ所也。我が如く念佛申て、此河の中へ被レ沈よと敎へければ、二人の少き人々、母と共に手を合せ、念佛高らかに唱へて、西に向て坐したるを、二人の乳母一人づゝ搔抱て、碧潭の底へ飛入ければ、母上

○越前牛原地頭自害事

淡河右京亮時治は、京都の合戰の最中、北國の蜂起を鎭めん爲に、越前國に下て、大野郡牛原と云所にぞおはしける。幾程無して、六波羅沒落の由聞えしかば、相從たる國の勢共、片時の程に落失て、妻子從類の外は、事問人も無りけり。去程に、平泉寺の衆徒、折を得て、彼跡を恩賞に申賜らん爲に、自國他國の軍勢を相語ひ七千餘騎を率して、五月十二日の白晝に、牛原へ押寄る。時治敵の勢の雲霞の如くなるを見て、戰共幾程か可ㇾ怺と思ければ、二十餘人有ける郎等に、向ふ敵を防がせて、あたり近き所に僧の御座けるを請じて、女房少き人までも、皆髮に剃刀をあて、戒を受させて、偏に後生菩提の經營を、泪の中にぞ被ㇾ致ける。戒の師歸て後、時治女房に向て宣ひけるは、御二人の子供は男子なれば、稚しとも敵よも命を助じと覺る間、冥途の旅に可ㇾ伴。事は女性にておはすれば、縱敵角と知とも、命を失ひ奉るまでの事は非じ。さても此世に存在へ給はゞ、如何なる人にも相馴て、憂を慰む便に附可ㇾ給。無跡までも心安くておはせんをこそ、草の陰、苔の下までもうれしくは思ふべけれと、泪の中に掻口說て

懸命の地—領地のこと

に、今の有樣、聞も哀にや思けん、急ぎ迎に來て、己が宿所に入奉る。其比峯僧正俊雅と申せしは、君の御外戚にておはせしを、笠置の合戰の刻に、筑前國へ被レ流ておはしけるが、今一時に運を開て、國人皆其左右に愼み隨ふ。九州の成敗、勅許以前は、暫此僧正の計に在しかば、小貳島津、彼時直を同道して、降參の由をぞ申入ける。僧正仔細あらじと被レ仰て、則御前へ被レ召けり。時直膝行頓首して、敢て不二平視一、遙の末座に畏て、誠に平伏したる體を見給て、僧正泪を流して被レ仰けるは、去元弘の始、無レ罪して此所に被二遠流一時、遠州我を以て寇とせしかば、或は過分の言の下に、面を低て泪を推拭ひ、或は無禮の驕の前に、手を束て恥を忍き。然に今天道謙に祐して、不レ測世の變化を見に、吉凶相亂れ、榮枯地を易たり。夢現昨日は身の上の哀、今日は人の上の悲也。怨を報ずるに恩を以てすと云事あれば、如何にもして命計を可二申助一と被レ仰ければ、時直頭を地に附て、兩眼に泪を浮めたり。不日に飛脚を以て、此由を奏聞ありければ、則勅免有て、懸命の地をぞ安堵せられける。時直無二甲斐一命を扶て、嘲を萬人の指頭に受といへども、時を一家の再興に被レ待けるが、幾程もあらざるに、病の霧に被レ侵て、夕の露と消にけり。

柳浦―鈔には極浦の浪にと出でたり、從ふべきが如し

○長門探題降參事

長門の探題遠江守時直、京都の合戰難儀の由を聞て、六波羅に力を勠せんと、大船百餘艘に取乘て、海上を上けるが、阿波の鳴門にて、京も鎌倉も早皆源氏の爲に被レ滅て、天下悉王化に順ぬと聞えければ、鳴門より舟を漕もどして、九州の探題と一所に成んと、心つくしへぞ赴きける。赤間關に著て、九州の樣を伺ひ聞給へば、筑紫の探題英時も、昨日早小貳大伴が爲に被レ亡て、九國二島悉公家のたすけと成ぬと云ければ、一旦催促に依て、此まで屬從たる兵共も、いつしか頓て心替して、己が樣々に落行ける間、時直僅に五十餘人に成て、柳浦の浪に漂泊す。彼の浦に帆を下さんとすれば、敵鏃を支て待懸たり。此の島に纜を結ばんとすれば、官軍楯を竝べて討んとす。殘留る人々にさへ、今は心を沖津波、可二立歸一方もなく、可レ寄所もなければ、世を浮舟の梶を絶、思はぬ風に漂へり。跡に留めし妻子共も、如何成ぬらんと、責て其行末を聞て後、心安く討死をもせばやと被レ思ければ、且く命を延ん爲に、郎等を一人舟よりあげて、小貳島津が許へ、降人に可レ成由をぞ傳へける。小貳も島津も年來の好淺からざりける

まさなき―たゞしからぬ

刺違へんずる者をと思ける處に、新小貳、何心もなげにて出合たり。長岡、座席に著と均しく、まさなき人々の謀反の企哉と云儘に、腰の刀を拔て、新小貳に飛で懸ける。新小貳飽まで心早き者なりければ、側なる將碁の盤をおつ取て、突刀を受留め、長岡にむずと引組で、上を下へぞ返しける。頓て小貳が郎從共あまた走寄て、上なる敵を三刀刺て、下なる主を助けければ、長岡六郎、本意を不レ達して、忽に命を失てけり。小貳筑後入道、さては我謀反の企、早探題に被レ知てけり。今は已事を得ぬ所也とて、大伴入道相共に、七千餘騎の軍兵を率して、同五月二十五日の午刻に、探題英時の館へ押寄ける。世の末の風俗、義を重んずる者は少く、利に趨る人は多ければ、唯今まで附從つる筑紫九箇國の兵共も、恩を忘て落失せ、名をも惜まで翻りける間、一朝の間の戰に、英時遂に討負て、忽に自害しければ、一族郎從三百四十人、續て腹をぞ切たりける。哀哉、昨日は小貳大伴英時に從て菊池を討、今日又小貳大伴官軍に屬して英時を討。行路難不レ在レ山兮不レ在レ水、唯在二人情反覆之間一と、白居易が書たりし筆の跡、今こそ被二思知一たれ。

蟬本—旗竿の頭の方一尺計をいふ

其後菊池入道は、二男肥後三郎と相共に、百餘騎を前後に立て、後攻の勢には目を不懸して、探題の屋形へ攻入、終に一足も引ず、敵に刺違刺違、一人も不殘討死す。專諸荆卿が心は、恩の爲に仕はれ、侯生豫子が命は、義に依て輕しとも、是等をや可申。さても小貳大伴が今度の振舞人に非ずと、天下の人に被譏ながら、暗知ずして世間の樣を聞居たりける處に、五月七日兩六波羅已に被攻落て、千劒破の寄手も、悉く南都へ引退ぬと聞えければ、小貳入道、こは可如何と仰天す。去ば我探題を奉討、身の咎を遁ばやと思ければ、先菊池肥後守と、大伴入道とが許へ、内々使者を遣して相語ふに、菊池は先に懲て耳にも不聞入、大伴は我も咎ある身なれば、角てや助かると、堅く領掌してけり。今日や明日やと吉日を選ける處に、英時、小貳が隱謀の企を聞て、事の實否を伺見よとて、長岡六郎を小貳が許へぞ遣しける。長岡則行向て、小貳に可見參由を云ければ、時節相勞事有とて、對面に不及。長岡無力小貳入道が子息筑後新小貳が許に行向云入て、さりげなき樣にて、彼方此方を見るに、唯今打立んずる形勢にて、楯を矯せ、鏃を礪最中也、又遠侍を見るに、蟬本白くしたる青竹の旗竿あり。さればこそ、船上より錦の御旗を賜たりと聞えしが、實也けりと思て、對面せば、頓て

しむるに、菊池小勢なりといへども、皆命を塵芥に比し、義を金石に類して攻戰ければ、防ぐ兵若干被レ打て、詰の城へ引籠る。菊池勝に乘て塀を越、關を切破て、透間もなく攻入ける間、英時こらへかねて、既に自害をせんとしける處に、小貳大伴六千餘騎にて、後攻をぞしたりける。菊池入道是を見て、嫡子肥後守武重を喚て云けるは、我今小貳大伴に被二出抜一て、戰場の死に赴くといへ共、義の當る所を思ふ故に、命を隕ん事を不レ悔。然れば寂阿に於ては、英時が城を枕にして可二討死一。汝は急ぎ我館へ歸て、城を堅し兵を起して、我が生前の恨を死後に報ぜよと云含め、若黨五十餘騎を引分て武重に相副、肥後の國へぞ返しける。故鄕に留置し妻子共は、出しを終の別れとも知らで、歸るを今やとこそ待らめと、哀に覺ければ、一首の歌を袖の笠符に書て、故鄕へぞ送ける。

　故鄕に今夜計の命とも、知でや人の我を待らん。

肥後守武重は、四十有餘の一人の親の、唯今討死せんとて大敵に向ふ戰なれば、一所にてこそ兎も角も成候はめと、再三申けれども、汝をば天下の爲に留るぞと、父が庭訓堅ければ、武重無レ力是を最後の別と見捨て、泣々肥後へ歸ける、心の中こそ哀なれ。

かと思へど、諸本肝附とあれば詳ならず
覿面に—まのあたり

に先をせられては叶ふまじ。此方より遮て博多へ寄て、覿面に勝負を決せんと思ければ、兼ての約諾に任て、小貳大伴が方へ觸遣しける處に、大伴、天下の落居未如何なるべしとも見定めざりければ、分明の返事に不ㇾ及。小貳は、又其比京都の合戰に、六波羅毎度勝に乘由聞えければ、己が咎を補はんとや思けん、日來の約を變じて、菊池が使八幡彌四郎宗安を討て、其首を探題の方へぞ出したりける。菊池入道大に怒て、日本一の不當人共を憑で、此一大事を思立けるこそ越度なれ。よし〳〵其人々の與せぬ軍はせられぬかとて、元弘三年三月十三日の卯刻に、僅に百五十騎にて探題の館へぞ押寄ける。菊池入道櫛田宮の前を打過ける時、軍の凶をや被ㇾ示けん、又乘打に仕たりけるをや御尤有けん。菊池が乘たる馬、俄にすくみて一足も前へ不㆓進得㆒。入道大に腹を立て、如何なる神にてもおはせよ、寂阿が戰場へ向はんずる道にて、乘打を尤め可ㇾ給樣やある。其儀ならば矢一つ進せん。受て御覽ぜよとて、上差の鏑を拔き出し、神殿の扉を二矢までぞ射たりける。矢を放つと均く、馬のすくみ直りにければ、さぞとよとあざ笑て、則打通りける。其後社壇を見ければ、二丈計なる大蛇、菊池が鏑に當て死たりけるこそ不思議なれ。探題は、兼てより用意したる事なれば、大勢を城の木戸より外へ出して戰は

鸞輅—天子の車

肝附て—肝衝きてにて吃驚する意

下諸國の大名は、五百騎三百騎、其旗の次に一勢一勢引分て、鸞輅を中にして、閑に小路を打たり。凡路次の行粧、行列の儀式、前々の臨幸に事替て、百司の守衛嚴重也。見物の貴賤岐に滿て、唯帝德を頌し奉る聲、洋々として耳に盈り。

○筑紫合戰事

京都鎌倉は、巳に高氏義貞の武功に依て靜謐しぬ。今は筑紫へ討手を被ㇾ下て、九國の探題英時を可ㇾ被ㇾ攻とて、二條大納言師基卿を太宰帥に被ㇾ成て、既に下し奉らんとせられける處に、六月七日、菊池、小貳、大伴が許より、早馬同時に京著して、九州の朝敵無ㇾ所ㇾ殘退治候ぬと奏聞す。其合戰の次第を、後に委く尋れぬば、主上未船上に御座有し時、小貳入道妙慧、大伴入道具簡、菊池入道寂阿三人同心して、御方に可ㇾ參由を申入ける間、則綸旨に錦の御旗を副てぞ被ㇾ下ける。其企彼等三人が心中に祕して、未色に雖ㇾ不ㇾ出、さすがに隱無りければ、此事頓て探題英時が方へ聞えければ、英時、彼等が野心の實否を能々伺見ん爲に、先菊池入道寂阿を博多へぞ呼ける。菊池此使に肝附て、是は如何樣彼隱謀露顯して、我等を討ん爲にぞ呼給ふ覽。さらんに於は、人

干戈戚揚—楯戟斧鉞
五雲—車駕
八座—參議八人
七辨—左右に大中少の三づゝ及び權の辨官
青紫—衣冠の色

向す。其勢殊に勇々敷ぞ見えたりける。主上御簾を高く捲せて、正成を近く被レ召、大義早速の功、偏に汝が忠戰にありと感じ被レ仰ければ、正成畏て、是君の聖文神武の徳に不レ依ば、微臣爭か尺寸の謀を以て、强敵の圍を可レ出候乎と、功を辭して謙下す。兵庫を御立有ける日より、正成前陣を奉て、畿内の勢を相隨へ、七千餘騎にて前驅す。其道十八里が間干戈戚揚相挾、左輔右弼列を引、六軍次を守り、五雲閑に幸すれば、六月五日の暮程に、東寺まで臨幸成ければ、武士たる者は不レ及レ申、攝政關白太政大臣左右の大將、大中納言八座七辨五位六位、内外の諸司、醫陰兩道に至るまで、我劣じと參集りしかば、車馬門前に群集して、地府に布レ雲、靑紫堂上に陰映して、天極に列レ星。翌日六月六日、東寺より二條の内裏へ還幸成て、其日先臨時の宣下有て、足利治部大輔高氏治部卿に任ず。舍弟兵部大輔直義左馬頭に任ず。去程に、千種頭中將忠顯朝臣、帶劔の役にて、鳳輦の前に被二供奉一けるが、尚非常を愼む最中なればとて、帶刀の兵五百人二行に被レ歩。高氏直義二人は、後乘に從て、百官の後に被レ打。衞府の官なればとて、騎馬の兵五千餘騎、甲冑を帶して被レ打。其次に宇都宮五百餘騎、佐々木判官七百餘騎、土居得能二千餘騎、此外正成、長年、圓心、結城、長沼、鹽冶已

如來唄—聲明のこと
禁門—御所の門
羽書—檄文

レ有かりし事共也。二十八日に法華山へ行幸成て、御巡禮あり。是より龍駕を被レ早て、晦日は兵庫の福巖寺と云寺に、儲餉の在所を點じて、且く御座有ける處に、其日赤松入道父子四人、五百餘騎を率して參向す。龍顏殊に麗くして、天下草創の功偏に汝等贔屓の忠戰によれり。恩賞は各望に可レ任と叡感有て、禁門の警固に奉侍せられけり。此寺に一日御逗留有て、供奉の行列還幸の儀式を被レ調ける處に、其日の午刻に、羽書を頸に懸たる早馬三騎、門前まで乘打にして、庭上に羽書を捧たり。諸卿驚て、急ぎ披て是を見給へば、新田小太郎義貞の許より、相摸入道以下の一族從類等不日に追討して、東國已に靜謐の由を註進せり。西國洛中の戰に、官軍勝に乘て兩六波羅を雖レ攻落、關東を被レ攻事はゆゝしき大事成べしと、叡慮を被レ運ける處に、此註進到來しければ、主上を始進せて、諸卿一同に猶豫の宸襟を休め、欣悅稱嘆を被レ盡、則恩賞は宜レ依レ請と被二宣下一て、先使者三人に、各勳功の賞をぞ被レ行ける。

○正成參二兵庫一事　附還幸事

兵庫に一日御逗留有て、六月二日被レ廻二瑤輿一處に、楠多門兵衛正成、七千餘騎にて參

乙護法—性空に給仕せろ神童二人あり、一を乙、二を若といふ、護法は佛法を守護するものの義

五大尊—不動、降三世、軍荼利、大威德、金剛夜叉

片時の程に書たりし御經也。又齒禿て僅に殘れる杉の屐あり。是は上人當山より每日比叡山へ御入堂の時、海道三十五里の間を、一時が内に歩ませ給し屐也。又布にて縫たる香の袈裟あり。是は上人御身を不レ放、長時に懸させ給けるが、香の煙にすゝけたるを御覽じて、哀洗ばやと被レ仰ける時、常隨給仕の乙護法是を洗て參候はんと申て、遙に西天を指して飛去ぬ。且く在て此袈裟をば虛空に懸乾、恰も一片の雲の夕日に映ずるが如し。上人護法を呼て、此袈裟をば如何なる水にて洗ひたりけるぞと問はせ給へば、護法、日本の内には可レ然淸冷水候はで、天竺の無熱池の水にて濯で候也と、被ニ答申一たりし御袈裟也。生木化佛の觀世音、稽首生木如意輪、能滿有情福壽願、亦滿往生極樂願、百千俱胝悉所念と、天人降下供養し奉る像なり。毗首羯磨が作りし五大尊、是のみならず、法華讀誦の砌には、不動毘沙門の二童子に、形を現じて仕給也。又延曆寺の中堂供養の日は、上人當山に坐しながら、仄に如來唄を引給しかば、梵音遠く叡山の雲に響て、一會の奇特を顯せし事共、委細に演說仕りたれば、主上不レ斜信心を傾させ給て、則當國の安室鄕を御寄附有て、不斷如法經の料所にぞ被レ擬ける。今に至まで其妙行片時も懈る事無して、如法如說の勤行たり。誠に滅罪生善の御願、難

雨師風伯—雨の神、風の神

紫微北辰の拱陣—紫微北辰共に北斗の事衆星の拱ふ狀を拱陣といふ

妙典—法華經

す。六軍甲胄を著し、弓箭を帶して、前後三十餘里に支へたり。鹽冶判官高貞は、千餘騎にて一日先立て、前陣を仕る。又朝山太郎は、一日路引殿て、五百餘騎にて後陣に打けり。金持大和守、錦の御旗を差て左に候し、伯耆守長年は、帶劍の役にて右に副ふ。雨師道を淸め、風伯塵を拂ふ。紫微北辰の拱陣も、斯やと覺て嚴重也。されば、去年の春隱岐國へ被レ移させ給ひし時、そゞろに宸襟を被レ惱て、御泪の故と成し山雲海月の色、今は龍顏を令レ悦端と成て、松吹風も自ら萬歲を呼ぶかと被レ奇、鹽燒浦の煙まで、にぎはふ民の竈と成る。

○書寫山行幸事 附新田註進事

五月二十七日には播磨國書寫山へ行幸成て、先年の御宿願を被レ果、諸堂御巡禮の次に、開山性空上人の御影堂を被レ開に、年來祕しける物と覺て、重寶ども多かりけり。當時の宿老を一人召て、是は如何なる由緒の物共ぞと御尋有ければ、宿老畏て一々に是を演說す。先杉原一枚を折て、法華經一部八卷並開結の二經を細字に書たるあり。是は上人寂寞の扉に御座て、妙典を讀誦し給ける時、第八の冥官一人の化人と成て、

君子不近刑人—春秋公羊傳襄公二十九年の條に出づ

可レ成否の意見を被レ獻。時に勘解由次官光守、諫言を以て被レ申けるは、兩六波羅已に雖二没落一千劒破發向の朝敵等、猶畿内に滿て、勢京洛を呑めり。又賤き諺に、東八箇國の勢を以て、日本國の勢に對し、鎌倉中の勢を以て、東八箇國の勢に對すといへり。されば承久の合戰に、伊賀判官光季を被二追落一し事は輒かりしか共、坂東勢重て上洛せし時、官軍戰負て、天下久く武家の權威に落ぬ。今一戰の雌雄を測るに、御方は纔に十にして其一二を得たり。君子不レ近二刑人一と申事候へば、暫く唯皇居を被レ移候はで、諸國へ綸旨を被二成下一、東國の變違を可レ被二御覽一や候らんと被レ申ければ、當座の諸卿悉く此議にぞ被レ同ける。然ども、主上猶時宜定め難く被二思召一ければ、自周易を披かせ給て、還幸の吉凶を蓍筮に就てぞ被二御覽一ける。御占師の卦に出て云、師貞、丈人吉無レ咎。上六大君有レ命、開レ國承レ家。小人勿レ用。王弼注云、處二師之極一師之終也。大君之命不レ失レ功也。開レ國承レ家、以寧レ邦也。小人勿レ用、非二其道一也と注せり。御占已に如レ此。此上は何をか可レ疑とて、同二十三日伯耆の船上を御立有て、瑤輿を山陰の東にぞ被レ催ける。路次の行粧例に替りて、頭大夫行房、勘解由次官光守、二人計こそ衣冠にて被二供奉一けれ。其外の月卿雲客、衞府諸司の助は、皆戎衣にて前騎後乘

程嬰ー事は史記趙の世家に詳也

三界ー欲界、色界、無色界

間もなく生捕奉る。俄の事にて張輿なんどもなければ、馬にのせ、舟の縄にてしたゝかに是を縛め、中間二人に馬の口を引せて、白晝に鎌倉へ入れ奉る。是を見聞人毎に、袖をしぼらぬは無りけり。此人未だ幼稚の身なれば何程の事か有べけれ共、朝敵の長男にておはすれば、非レ可レ閣とて、則翌日の曉、潜に首を刎奉る。昔程嬰が我子を殺して、幼稚の主の命にかへ、豫讓が貌を變じて、舊君の恩を報ぜし、其までこそなからめ、年來の主を敵に打せて、欲心に義を忘れたる五大院右衛門が心の程、希有也、不道也と、見る人毎に、爪彈をして惡みしかば、義貞げにもと聞給て、是をも可レ誅と、内内其議定まりければ、宗繁是を傳聞て、此彼に隱れ行きけるが、梟惡の罪身を謫めけるにや、三界雖レ廣一身を措に處なく、故舊雖レ多一飯を與る無人して、遂に乞食の如くに成果て、道路の街にして、飢死けるとぞ聞えし。

○諸將被レ進二早馬於船上一事

都には五月十二日千種頭中將忠顯朝臣、足利治部大輔高氏、赤松入道圓心等、追々早馬を立て、六波羅已に令二沒落一之由、船上へ奏聞す。依レ之諸卿僉議あつて、即還幸

細馬―良馬

一所懸命の地―命をつなぐ大切の領地

七日の夜半計に、忍て鎌倉を落給ふ。昨日までは天下の主たりし相摸入道の嫡子にて有しかば、假初の物詣、方違と云しにも、御内外樣の大名共、細馬に轡を嚙せて、五百騎三百騎前後に打圍でこそ往復せしに、時移事替ぬる世の有樣の淺猿さよ。怪しげなる中間一人に太刀持せて、傳馬にだにも乘らで、破たる草鞋に編笠著て、そこ共不レ知、泣々伊豆の御山を尋て、足に任て行給ひける、心の中こそ哀なれ。五大院右衞門は、斯樣にして此人をばすかし出しぬ。我と打て出さば、年來奉公の好を忘たる者よと、人に指を被レ指つべし。便宜好らんずる源氏の侍に討せて、勳功を分て知行せばやと思ければ、急ぎ船田入道が許に行て、相摸太郎殿の在所をこそ、委く聞出て候へ。他の勢を不レ交して、打て被レ出候はゞ、定て勳功異レ他候はんか。告申候忠には、一所懸命の地を安堵仕る樣に、御吹擧に預り候はんと云ければ、船田入道、心中には惡き者の云樣哉と乍レ思、先仔細非じと約束して、五大院右衞門尉諸共に、相摸太郎の落行ける道を遮てぞ待せける。相摸太郎道に相待敵有とも不二思寄一、五月二十八日の明ぼのに、淺猿げなる窶姿にて、相摸河を渡らんと、渡守を待て、岸の上に立たりけるを、五大院右衞門餘所に立て、あれこそすは件の人よと敎ければ、船田が郎等三騎、馬より飛で下り、透

出來たる子なれば、甥也、主也、何に附ても貳心は非じと、深く被レ憑けるにや、此邦時をば汝に預置ぞ。如何なる方便をも廻し、是を隱置き、時到りぬと見えば、取立て亡魂の恨を可レ謝と、相摸入道宣ければ、宗繁仔細候はじと領掌して、鎌倉の合戰の最中に、降人にぞ成たりける。角て二三日を經て後、平氏悉滅びしかば、關東皆源氏の顧命に隨て、此彼に隱居たる平氏の一族共、數多搜し出されて、捕手は所領を預り、隱せる者は忽に被レ誅事多し。五大院右衛門是を見て、いや〳〵果報盡はてたる人を扶持せんとて、適遁得たる命を失はんよりは、此人の在所を知たる由、源氏の兵に告て、貳心なき所を顯し、所領の一所をも安堵せばやと思ければ、或夜彼相摸太郎に向て申けるは、是に御座の事は如何なる人も、知候はじとこそ存じて候に、如何して漏聞え候けん、船田入道明日是へ押寄候て、搜し奉らんと用意候由、唯今或方より告知せて候。何樣御座の在所を、今夜替候はでは叶まじく候。夜に紛れて、急ぎ伊豆の御山の方へ落させ給候へ。宗繁も御供申度は存候へ共、一家を盡して落候なば、船田入道、さればこそと心附て、何までも尋求る事も候はんと存じ候間、態と御供をば申まじく候と、誠し顏に成て云ければ、相摸太郎げにもと身の置所なくて、五月廿

太平記　巻第十一

○五大院右衛門宗繁賺二相摸太郎一事

義貞已に鎌倉を定て、其威遠近に振ひしかば、東八箇國の大名高家、手を束ね膝を不レ屈と云者なし。多日屬隨て忠を憑む人だにも如レ此。況や唯今まで平氏の恩顧に順て、敵陣に在つる者共、生甲斐なき命を續ん爲に、所緣に屬し降人に成て、肥馬の前に塵を望み、高門の外に地を掃ても、己が咎を補はんと思へる心根なれば、今は浮世の望を捨て、僧法師に成たる平氏の一族達をも、寺々より引出して、法衣の上に血を淋ぎ、二度は人に契らじと、髪をおろし貌を替んとする亡夫の後室共をも、所々より捜出して、貞女の心を令レ失。悲哉、義を專にせんとして、忽に死せる人は、永く修羅の奴と成て、苦を多劫の間に受けん事を。痛哉、恥を忍で苟も生る者は、立所に衰窮の身と成て、笑を萬人の前に得たる事を。中にも五大院右衛門尉宗繁は、故相摸入道殿の重恩を與たる侍なる上、相摸入道の嫡子相摸太郎邦時は、此五大院右衛門が妹の腹に

多劫―長き年月

蟄懷—蟄伏したる素懷

左近將監時英、櫻田治部大輔貞國、江馬遠江守公篤、阿曾彈正少弼治時、苅田式部大輔篤時、遠江兵庫助顯勝、備前左近大夫將監政雄、坂上遠江守貞朝、陸奧式部大輔高朝、城介高量、同式部大輔顯高、同美濃守高茂、秋田城介入道延明、明石長門介入道忍阿、長崎三郎左衞門入道思元、隅田次郎左衞門、攝津宮内大輔高親、同左近大夫將監親貞、名越一族三十四人、鹽田、赤橋、常葉、佐介の人々四十六人、惣じて其門葉たる人二百八十三人、我先にと腹切て、屋形に火を懸たれば、猛炎昌に燃上り、黑煙天を掠たり。庭上門前に竝居たりける兵、共是を見て、或は自腹掻切て、炎の中へ飛入もあり、或は父子兄弟刺違へ重伏もあり。血は流て大地に溢れ、漫々として洪河の如くなれば、尸は行路に横て、累々たる郊原の如し。死骸は燒て見えね共、後に名字を尋ぬれば、此一所にて死する者、惣て八百七十餘人也。此外門葉恩顧の者、僧俗男女を不レ云、聞傳聞傳、泉下に恩を報ずる人、世上に催レ悲者、遠國の事はいさ不レ知、鎌倉中を考るに、惣て六千餘人也。嗚呼此日如何なる日ぞや。元弘三年五月廿二日と申に、平家九代の繁昌一時に滅亡して、源氏多年の蟄懷、一朝に開る事を得たり。

三寶―佛法僧

肱のかゝり―肱の關節

性、其盃を以て心閑に三度傾て、相摸入道殿の前に差置て、若者共隨分藝を盡して被振舞候に、年老なればとて徒は爭か候べき。今より後は皆是を送肴に仕べしとて、腹十文字に搔切て、其刀を拔て入道殿の前に指置たり。長崎入道圓喜は、是までも猶、相摸入道の御事を如何と思たる氣色にて、腹をも未切けるが、長崎新右衛門今年十五に成けるが、祖父の前に畏て、父祖の名を顯すを以て子孫の孝行とする事にて候なれば、佛神三寶も、定て御許こそ候はんずらんとて、年老殘りたる祖父の圓喜が肱のかゝりを二刀刺て、其刀にて己れが腹をかき切て、祖父をとつてひき伏せて、其上に重てぞ伏たりける。此小冠者に義を勸められて、相摸入道も腹切給へば、城入道續て腹をぞ切たりける。是を見て、堂上に座を列たる一門他家の人々、雪の如くなる膚を推膚脫推膚脫、腹を切人もあり、自頸を搔落す人もあり、思々の最期の體、殊に由々敷ぞ見えたりし。其外の人々には、金澤大夫入道崇顯、佐介近江前司宗直、甘名宇駿河守宗顯、子息駿河左近大夫將監時顯、小町中務大輔朝實、常葉駿河守範貞、名越土佐前司時元、攝津刑部大輔入道、伊具越前前司宗有、城加賀前司師顯、秋田城介師時、城越前守有時、南部右馬頭茂時、陸奥右馬助家時、相摸右馬助高基、武藏左近大夫將監時名、陸奥

思差―その人に心ありて杯をさすこと

何とて今まで遲かりつるぞ。今は是までかと問れければ、高重畏り、若大將義貞に寄せ合せば、組で勝負をせばやと存候て、二十餘度まで懸入候へ共、遂に不近附得。其人と覺しき敵にも見合候はで、そゞろなる黨の奴原四五百人、切落てぞ捨候つらん。哀罪の事だに思ひ候はずば、猶も奴原を濱面へ追出して、弓手馬手に相附、車切、胴切、立破に仕棄度存候つれ共、上の御事何かと御心元なくて歸參て候と、聞も涼く語るにぞ、最期に近き人々も、少し心を慰めける。

○高時并一門以下於東勝寺自害事

去程に、高重走廻て、早々御自害候へ。高重先を仕て、手本に見せ進せ候はんと云儘に、胴計殘たる鎧脱で抛すてゝ、御前に有ける盃を以て、舍弟の新右衞門に酌を取せ、三度傾て、攝津刑部大夫入道道準が前に置き、思差申ぞ。是を肴にし給へとて、左の小脇に刀を突立て、右の傍腹まで、切目長く搔破て、中なる腸手繰出して、道準が前にぞ伏たりける。道準盃を取て、あはれ肴や、如何なる下戸なり共、此をのまぬ者非じと戯て、其盃を半分計呑殘て、諏方入道が前に指置、同く腹切て死にけり。諏方入道直

大童—亂髪

こと〴〵しの奴原や—仰山なる者どもかな

けり。高重、今はとても敵に被見知ぬる上はと思ければ、馬を懸居、大音揚て名乗けるは、桓武第五の皇子葛原親王に三代の孫、平將軍貞盛より十三代、前相摸守高時の管領に、長崎入道圓喜が嫡孫、次郎高重武恩を報ぜんため討死するぞ。高名せんと思はん者は、よれや組んと云儘に、鎧の袖引ちぎり、草摺あまた切落し、太刀をも鞘に納つゝ、左右の大手をひろげては、此に馳合、彼に馳替、大童に成て驅散しける。斯る處に、郎等共馬の前に馳塞て、如何なる事にて候ぞ。御一所こそ斯樣に馳廻坐せ。敵は大勢にて早谷谷に亂入、火を懸、物を亂妨し候。急ぎ御歸候て、守殿の御自害をも勸申させ給へと云ければ、高重郎等に向て宣けるは、餘に人の迯るが面白さに、大殿に約束しつる事をも忘ぬるぞ。いざさらば歸參んとて、主從八騎の者共、山內より引歸しければ、迯て行とや思ひけん、兒玉黨五百餘騎、きたなし返せと詈て、馬を爭て追懸たり。高重こと〴〵しの奴原や、何程の事をか仕出すべきとて、聞ぬ由にて打けるを、手茂く追て懸りしかば、主從八騎屹と見返て、馬の轡を引廻すとぞみえし。山內より葛西谷口まで、十七度まで返合せて、五百餘騎を追退け、又閑々とぞ打て行ける。高重が鎧に立處の矢二十三筋、蓑毛の如く折かけて、葛西谷へ參りければ、祖父の入道待請て、

漢の三將—灌嬰、赤泉侯、都尉某

魯陽—淮南子に魯陽公與韓構難、戰酣日暮、援戈麾之、日爲之反三舍と見ゆ、一舍は二十八宿の一宿をいふ也

定ず、多くは同士打をぞしたりける。長濱六郎是を見て、無云甲斐人々の同士打哉。敵は皆笠符を不附と見えつるぞ。中に紛れば、其を符にして組で討と下知しければ、甲斐、信濃、武藏、相摸の兵共、押並てはむずと組、組で落ては首を取もあり、被取もあり。芥塵掠天、汗血地を糢糊す。其有樣項王が漢の三將を靡し、魯陽が日を三舍に反し戰しも、是には不過とぞ見えたりける。され共、長崎次郎は未被討、主從唯八騎に成て戰けるが、猶も義貞に組んと伺て、近附敵を打拂、動すれば刺違て、義貞兄弟を目に懸て廻りけるを、武藏國の住人横山太郎重眞、押隔て是に組んと、馬を進めて相近づく。長崎もよき敵ならば組んと、懸台て是を見るに、横山太郎重眞也。さてはあはぬ敵ぞと思ければ、重眞を弓手に相受、冑の鉢を菱縫の板まで破著たりければ、重眞二つに成て失にけり。馬もしりゐに被打居て、小膝を折てどうと伏す。同國の住人庄三郎爲久是を見て、よき敵也と思ければ、續て是に組んとす。大手をはだけて馳懸る。長崎遙に見て、から〳〵と打笑て、黨の者共に可組は横山をも何かは可嫌。あはぬ敵を失ふ樣、いでいで己に知せんとて、爲久が鎧の上卷を掴で宙に提げ、弓杖五杖計、安々と投渡す。其人飛礫に當りける武者二人、馬より倒に被打落て、血を吐て空く成に

支度相違―心がまへの手ちがひになること

合給へり。方々の軍急にして、甲冑を帶したりければ、高重は庭に立ながら、左右に揖して問曰、如何是勇士恁麼事。和尚答曰、吹毛急用不レ如レ前。高重此一句を聞て、問訊して、門前より馬引寄打乘て、百五十騎の兵を前後に相隨へ、笠符かなぐり棄、閑に馬を歩せて、敵陣に紛入。其志偏に義貞に相近附ば、組で勝負を決せん爲也。高重旗をも不レ差、打物の鞘をはづしたる者無れば、源氏の兵、敵とも不レ知けるにや、をめをめと中を開て通しければ、高重、義貞に近く事、僅に半町計也。すはやと見ける處に、源氏の運や强かりけん、義貞の眞前に控たりける由良新左衞門是を見知て、唯今旗をも不レ差相近勢は、長崎次郎と見ゆるぞ。さる勇士なれば、定て思處有てぞ是までは來らん。あますな漏すなと、大音擧て呼りければ、先陣に控たる武藏の七黨三千餘騎、東西より引裹で、眞中に是を取込、我も我もと討んとす。高重は支度相違しぬと思ければ、百五十騎の兵を、ひし〳〵と一所へ寄て、同音に時をどつと揚、三千餘騎の者共を、懸拔懸入交合、彼に露れ此に隱れ、火を散してぞ戰ける。聚散離合の有樣は、須臾に變化して、前に有る歟とすれば、忽焉として後にあり。御方かと思へば、屹として敵也。十方に分身して、萬卒に同く相當りければ、義貞の兵、高重が在所を見

筋の帷―筋を染めたる帷

將大略皆討れ給ぬと聞えければ、誰が堅めたる陣とも不レ云、唯敵の近づく處へ、馳合馳合、八方の敵を拂て、四隊の堅を破ける間、馬疲れぬれば乘替、太刀打折れば帶替て、自敵を切て落す事三十一人、陣を破る事八箇度なり。角て相摸入道の御座す葛西谷へ歸參て、中門に畏り、泪を流し申けるは、高重數代奉公の義を忝して、朝夕恩顏を拜し奉りたる御名殘、今生に於ては今日を限とこそ覺え候へ。高重一人數箇所の敵を打散て、數度の戰に每度打勝候といへ共、方々の口々皆攻破られて、敵の兵鎌倉中に充滿して候ぬる上は今は矢長に思共不レ可レ叶候。唯一筋に敵の手に懸らせ給はぬ樣に、思召定させ給候へ。但高重歸參て勸申さん程は、無二左右御自害候な。上の御存命の間に、今一度快く敵の中へ懸入、思程の合戰して、冥途の御供申さん時の物語に仕候はんとて、又東勝寺を打出づ。其後影を、相摸入道遙に見送給て、是や限なる覽と、名殘惜げなる體にて、泪ぐみてぞ被レ立たる。長崎次郎甲をば脱捨、筋の帷の月日推たるに、精好の大口の上に、赤絲の腹卷著て、小手をば不レ差、兎雞と云ける坂東一の名馬に、金貝の鞍に、小總の鞦懸てぞ乘たりける。是を最後と思定ければ、先崇壽寺の長老南山和尚に參じて、案內申ければ、長老威儀を具して出

舁板を組みて架とし竹にて釣りて舁くもの

可見と宣ければ、廿餘人の侍共、一議にも不及、皆御諚に可隨とぞ申ける。伊達南部二人は、貌をやつし夫になり、中間二人に物具きせて馬にのせ、中黑の笠符を附させ、四郎入道を舁に乘て、血の附たる帷を上に引覆ひ、源氏の兵の、手負て本國へ歸る眞似をして、武藏までぞ落たりける。其後殘置たる侍共、中門に走出、殿は早御自害有ぞ。志の人は皆御供申せと呼て、屋形に火を懸、忽に煙の中に並居て、二十餘人の者共は、一度に腹をぞ切たりける。是を見て、庭上門外に袖を連ねたる兵共三百餘人、面々に劣じ劣じと腹切て、猛火の中へ飛で入、尸を不殘燒死けり。さてこそ、四郎左近大夫入道の落給ぬる事をば不知して、自害し給ぬとは思けれ。其後西園寺の家に仕へて、建武の比京都の大將にて時興と被云しは、此入道の事也けり。

○長崎次郎高重最後合戰事

去程に、長崎次郎高重は、始武藏野の合戰より、今日に至るまで、夜晝八十餘箇度の戰に、毎度先を懸、圍を破て、自相當る事、其數を不知しかば、手者若黨共、次第に討亡されて、今は僅に百五十騎に成にけり。五月廿二日に、源氏早谷々へ亂入て、當家の諸大

聲いらゝげ ― 聲を怒らし

中前代 ― 北條時行兵を起して二旬にして破る、當時之を中前代とも二十日前代ともいへり

も計へとて、少人の前後に取附て、聲も不レ惜泣悲給へば、盛高も目くれ心消々と成しか共、思切らでは叶まじと思て、聲をいらゝげ、色を損て、御局を奉レ睨、武士の家に生れん人、襁褓の中より、斯る事可レ有と思召れぬこそうたてけれ。大殿のさこそ待思召候覽。早御渡候て、守殿の御供申させ給へと云儘に、走懸り龜壽殿を抱取て、鎧の上に昇負て、門より外へ走出れば、同音にわつと泣つれ給し御聲々、遙の外所まで聞えつゝ、耳の底に止れば、盛高も泪に行兼て、立返て見送ば、御乳母の御妻と申す者は、歩跣にて、人目をも不レ憚走出させ給て、四五町が程は、泣ては倒れ、倒ては起、跡に附て被レ追けるを、盛高心強く行方を知れじと、馬を進めて打程に、後影も見えず成にければ、御妻今は誰をそだて、誰を憑で可レ惜命ぞやとて、あたりなる古井に身を投て、終に空く成給ふ。其後盛高此若公を具足して、信濃へ落下り、諏方の祝を憑で有しが、建武元年の春の比、暫關東を切略して、天下の大軍を起し、中前代の大將に、相摸二郎と云は是なり。角して四郎左近大夫入道は、二心なき侍共を呼寄て、我は思樣有て、奥州の方へ落て、再び天下を覆す計を可レ運。南部太郎伊達六郎二人は、案内者なれば可二召具一。其外の人々は、自害して屋形に火をかけ、我は腹を切て燒死たる體を敵に

萬壽御料―御料は貴人の尊稱

女性ははかなき者なれば、後にも若人に泄し給ふ事もやと思返して、泪の中に申けるは、此世中今はさてとこそ覺候へ。御一門大略御自害候なり。大殿計こそ、未葛西谷に御座候へ。公達を一目御覽じ候て、御腹を可レ被レ召と仰候間、御迎の爲に參て候と申ければ、御局うれし氣に御座つる御氣色、しほ〳〵と成せ給て、萬壽をば宗繁に預けつれば心安し、構て此子をも能々隱してくれよと仰せも敢ず、御泪に咽ばせ給しかば、盛高も岩木ならねば、心計は悲しけれ共、心を強く持て申けるは、萬壽御料をも五大院右衞門宗繁が具足し進せ候つるを、敵見附て追懸進せ候しかば、小町口の在家に走入て、若子をば刺殺し進せ、我身も腹切て燒死候つる也。あの若子も今日此世の御名殘、是を限と思召候へ。とても隱あるまじき物故に、狩場の雉の草隱たる有樣にて、敵にさがし出されて、幼き御尸に、一家の御名を失れん事口惜候。其よりは大殿の御手に懸られ給て、冥途までも御供申させ給たらんこそ、生々世々の忠孝にて御座候はん。疾々入進せ給へと勸めければ、御局を始進せて、御乳母の女房達に至るまで、うたての事を申者哉。せめて敵の手に懸らば如何せん。二人の公達を懷存進つる人人の手に懸て、失ひ奉らんを見聞ては、如何計とか思遣る。唯我を先殺して後、何と

取立て、齊國へ推寄、公孫無知を討事を得て、遂に再び齊國を保たせける。齊の桓公は是也。されば於レ我深く存ずる仔細あれば、無二左右一自害する事不レ可レ有候。可レ遁ば再會稽の恥を雪ばやと思ふ也。御邊も能々遠慮を運して、如何なる方にも隱忍び、不レ然ば降人に成て命を繼で、甥にてある龜壽を隱置て、時至ぬと見ん時、再び大軍を起して、素懷を可レ被レ遂。兄の萬壽をば、五大院右衛門に申附たれば、心安く覺る也と宣へば、盛高泪を押へて申けるは、今までは、一身の安否を御一門の存亡に任候つれば、命をば可レ惜候はず。御前にて自害仕て、二心なき程を見え進せ候はんずる爲にこそ、是まで參て候へ共、死を一時に定るは易く、謀を萬代に殘すは難しと申事候へば、兎も角も仰に可レ隨候とて、盛高は御前を罷立て、相摸殿の妾二位殿の御局の、扇谷に御座ける處へ參たりければ、御局を始進せて、女房達まで、誠に嬉し氣にて、さても此世の中は、何と成行べきぞや。我等は女なれば、立隱るゝ方も有ぬべし。此龜壽をば如何すべき。兄の萬壽をば五大院右衛門可レ隱方有とて、今朝何方へやらん具足しつれば、心安く思也。唯此龜壽が事思煩て、露の如くなる我身さへ、消佗ぬるぞと、泣口説給ふ。盛高此事有の儘に申て、御心をも慰め奉らばやとは思ひけれども、

盈を缺ー易の謙の卦の彖傳に天道虧レ盈而益レ謙と見ゆ

の志を計らん爲に宣ふ共、北方は我方樣の名を失はじと思はれば、固可レ被レ許。唯似るを友とするうたてさ。子孫の爲に不レ被レ憑と、一度は恨、一度は怒て、彼使の見る前にて、其文を刀に拳り加へて、腹掻切てぞ失給ける。

○龜壽殿令レ落二信濃一事 附 左近大夫僞落二奥州一事

爰に相摸入道殿の舍弟四郎左近大夫入道の方に候ける諏方左馬助入道が子息、諏方三郎盛高は、數度の戰に郎等皆討れぬ。唯主從二騎に成て、左近大夫入道の宿所に來て申けるは、鎌倉中の合戰、今は是までと覺て候間、最後の御供仕候はん爲に參て候。早思召切せ給へと進め申ければ、入道傍の人をのけさせて、潛に盛高が耳に宣ひけるは、此亂不レ量出來て、當家已に滅亡しぬる事更に他なし。唯相摸入道殿の御振舞、人望にも背き、神慮にも違たりし故也。但天縱驕を惡み、盈を缺とも、數代積善の餘慶家に盡ずば、此子孫の中に、絕たるを繼ぎ、廢たるを興す者無らんや。昔齊の襄公無道なりしかば、齊國可レ亡を見て、其臣に鮑叔牙と云ける者、襄公の子小白を取て他國へ落てげり。其間に、襄公果して公孫無知に被レ亡、齊國を失へり。其時に、鮑叔牙小白を

此程の式―此程の事

に、安東泪を押へて悄然たる處に、新田殿の北臺の御使とて、薄樣に書たる文を捧たり。何事ぞとて披見れば、鎌倉の有樣今はさてとこそ承候へ。如何にもして此方へ御出候へ。此程の式をば身に替ても可二申宥一候なんど、樣々に書れたり。是を見て、安東大に色を損じて申けるは、栴檀の林に入者は不レ染衣自ら香しといへり。武士の女房たる者は、けなげなる心を一つ持てこそ、其家をも繼、子孫の名をも露す事なれ。されば、昔漢の高祖と楚の項羽と戰ける時、王陵と云者城を構て籠たりしを、楚是を攻るに更に不レ落。此時楚の兵相謀て云、王陵は母の爲に忠孝を存ずる事不レ淺。所詮王陵が母を捕へて、楯の面に當て、城を攻る程ならば、王陵矢を射る事を不レ得して、降人に出る事可レ有とて、潛に彼母を捕てけり。彼母心の中に思けるは、王陵我に仕る事大舜曾參が孝行にも過たり。我若楯の面に被レ縛、城に向ふ程ならば、王陵悲に不レ堪して、城を被レ落事可レ有。不レ如、無二幾程一命を爲二子孫一捨んにはと思定て、自劍の上に死てこそ、遂に王陵が名をば揚たりしか。我唯今まで武恩に浴して、人に被レ知身となれり。今事の急なるに臨で、降人に出たらば、人豈恥を知たる者と思はんや。されば、女性心にて縱斯樣の事を被レ云共、義貞勇士の義を知給はゞ、さる事やあるべきと可レ被レ制。又義貞縱敵

北臺—北の方、夫人

被欺事—嘲笑せられん事

安東左衛門入道聖秀と申せしは、新田義貞の北臺の伯父成しかば、彼女房、義貞の狀に我文を書副て、偸に聖秀が方へぞ被ㇾ遣ける。安東、始は三千餘騎にて稻瀨河へ向たりけるが、世良田太郎が稻村崎より後へ廻りける勢に陣を被ㇾ破て引けるが、由良長濱が勢に被二取籠一て、百餘騎に被二討成一、我身も薄手あまた所負て、己が館へ歸たりけるが、今朝巳刻に宿所は早燒て其跡もなし。妻子眷屬は何へか落行けん、行末も不ㇾ知成て、可二尋問一人もなし。是のみならず、鎌倉殿の御屋形も燒て、入道殿、東勝寺へ落させ給ぬと申者有ければ、さて御屋形の燒跡には、傍輩何樣腹切討死して見ゆるかと尋ねければ、一人も不ㇾ見候とぞ答ける。是を聞て、安東、口惜事哉。日本國の主、鎌倉殿程の年來住給し處を、敵の馬の蹄に懸させながら、そこにて千人も二千人も討死する人の無りし事よと、後の人々に被ㇾ欺事こそ恥辱なれ。いざや人々、とても死せんずる命を、御屋形の燒跡にて、心閑に自害して、鎌倉殿の御恥を洗がんとて、被二討殘一たる郎等百餘騎を相從へて、小町口へ打莅む。先々出仕の如く、塔辻にて馬より下り、空き跡を見廻せば、今朝までは綺麗なる大廈高牆の構、忽に灰燼と成て、須臾轉變の煙を殘し、昨日まで遊戲せし親類朋友も、多く戰場に死して、盛者必衰の尸を餘せり。悲の中の悲

出塵の身―出家の身

結跏趺坐―圓滿安坐の義にて兩脚を交叉して堅く坐す

吹毛―劍のこと

出塵の身と成て、天下の人に指を指れん事、是に過たる恥辱や候べき。御腹被召候はば、冥途の御道しるべ仕候はんと云も終ず、袖の下より刀を拔て、偸に腹に突立て、畏たる體にて死ける。其弟鹽飽四郎是を見て、續て腹を切らんとしけるを、父の入道大に諫て、暫く吾を先立て、順次の孝を專にし、其後自害せよと申ければ、鹽飽四郎拔たる刀を收て、父の入道が前に畏てぞ候ける。入道是を見て、快げに打笑、閑々と中門に曲彔をかざらせて、其上に結跏趺坐し、硯取寄て自ら筆を染め、辭世の頌をぞ書たりける。

提持吹毛。截斷虛空。大火聚裏。一道淸風。

と書て、叉手して頸を伸て、子息四郎に其討と下知しければ、大膚脱に成て、父の首をうち落て、其太刀を取直て、鐔本まで己が腹に突貫て、うつぶしざまにぞ伏たりける。郎等三人是を見て走寄り、同太刀に被貫て、串に刺たる魚肉の如く、頭を連て伏たりける。

○安東入道自害事　附漢王陵事

一期—一生涯

眷養—愛育

覺寺の藏主寮にぞ隱居たりける。此重寶共にては、一期不足非じと覺しに、天罰にや懸りけん。舟田入道是を聞附て推寄せ、是非なく召捕て、遂に首を刎て、由井濱にぞ懸られける。尤斯こそ有たけれとて、惡ぬ者も無りけり。

○鹽飽入道自害事

鹽飽新左近入道聖遠は、嫡子三郎左衞門忠頼を呼、諸方の攻口悉く破、御一門達大略腹切せ給と聞ければ、入道も守殿に先立進て、其忠義を知られ奉らんと思也。されば、御邊は未私の眷養にて、公方の御恩をも蒙らねば、縱一所にて今命を不棄共、人强ち義を知ぬ者とはよも思はじ。然者何にも暫く身を隱し、出家遁世の身ともなり、我後生をも弔ひ、心安く一身の生涯をも暮せかしと、泪の中に宣ひければ、三郎左衞門忠頼も、兩眼に泪を浮め、しばしは物も不被申けるが、良有て、是こそ仰共覺候はね。忠頼直に公方の御恩を蒙りたる事は候はね共、一家の續命悉く是武恩に非と云事なし。其上忠頼自幼少釋門に居たる身ならば、恩を棄て無爲に入る道も然るべし。苟も弓矢の家に生れ、名を此門葉に懸ながら、武運の傾を見て、時の難を遁れんが爲に、

逆修―逆め死後の冥福を修する義

○鹽田父子自害事

爰に不思議なりしは、鹽田陸奥入道道祐が子息民部大輔俊時、親の自害を勸んと、腹搔切て、目前に伏たりけるを見給て、幾程ならぬ今生の別に、目くれ心迷て、落る泪も不留、先立ぬる子息の菩提をも祈り、我逆修にも備へんとや被思けん、子息の死骸に向て、年來誦給ける持經の紐を解、要文處々打上、心閑に讀誦し給けり。被討漏たる郎等共、主と共に自害せんとて、二百餘人並居たりけるを三方へ差遣し、此御經誦終る程防矢射よと下知せられけり。其中に狩野五郎重光計は、年來の者なる上、近く召仕れければ、吾腹切て後、屋形に火懸て、敵に頸とらすなと云含め、一人被留置けるが、法華經已に五の巻の提婆品はてんとしける時、狩野五郎門前に走出で、四方を見る眞似をして、防矢仕つる者共早皆討れて、敵攻近附候。早々御自害候へと勸ければ、入道さらばとて、經をば左の手に握り、右の手に刀を拔て、腹十文字に搔切て、父子同枕にぞ伏給ける。重光は年來と云、重恩と云、當時遺言旁難遁ければ、軈て腹をも切らんずらんと思たれば、さは無て、主二人の鎧太刀刀劍、家中の財寳中間下部に取持せて、圓

―ほまれとする

思出にもなれかしと、彼御教書を請取て、又戰場へ打出給けるが、其御教書の裏に、棄我百年命報公一日恩と大文字に書て、是を鎧の引合に入て、大勢の中へ懸入、終に討死し給ければ、當家も他家も推並て、感ぜぬ者も無りけり。

○信忍自害事

去程に、普恩寺前相摸入道信忍も、假粧坂へ被向たりしが、夜晝五日の合戰に、郎從悉く討死して、纔に二十餘騎ぞ殘ける。諸方の攻口皆破て、敵谷々に入亂ぬと申ければ、入道普恩寺、討殘されたる若黨諸共に自害せられけるが、子息越後守仲時六波羅を落て、江州番馬にて腹切給ぬと告たりければ、其最後の有樣思出して、哀に不堪や被思けん、一首の歌を、御堂の柱に血を以て書附給けるとかや。

　まてしばし死出の山邊の旅の道、同く越て浮世語らん。

年來嗜弄給し事とて、最後の時も不忘、心中の愁緒を述て、天下の稱嘆に殘されける、數奇の程にそ優けれと、皆感涙をぞ流しける。

規模とする

去程に、大佛陸奥守貞直は、昨日まで二萬餘騎にて極樂寺の切通を支て防戰ひ給けるが、今朝の濱の合戰に、三百餘騎に討成れ、剩敵に後を被遮て、前後に度を失て御座しける處に、鎌倉殿の御屋形にも火懸りぬと見えしかば、世間今はさてとや思けん、又主の自害をや勸めけん、宗徒の郎從三十餘人、白洲の上に物具脫棄て一面に竝居て、腹をぞ切にける。貞直是を見給て、日本一の不覺の者共の行跡哉。千騎が一騎に成までも、敵を亡て名を後代に殘すこそ、勇士の本意とする所なれ。いでさらば最後の一合戰快して、兵の義を勸めんとて、二百餘騎の兵を相隨へ、先大島、里見、額田、桃井六千餘騎にて控たる眞中へ破て入、思程戰て、敵數多討取て、ばつと駈出見給へば、其勢僅に六十餘騎に成にけり。貞直其兵を指招で、今は末々の敵と懸合ても無益也とて、脇屋義助雲霞のごとくに控たる眞中へ懸入、一人も不殘討死して、尸を戰場の土にぞ殘しける。金澤武藏守貞將も、山內の合戰に、相從ふ兵八百餘人被打散、我身も七箇所まで創を蒙て、相摸入道の御座す東勝寺へ打歸り給たりければ、入道不斜感謝して、軈て兩探題職に可被居御敎書を被成、相摸守にぞ被移ける。貞將は一家の滅亡日の中を不過と被思けれ共、多年の所望、氏族の規模とする職なれば、今は冥途の

衾を張りたる如く見ゆる故にかくいふ

⿰車立子引兩—⿰車立子の中に二線を畫したる紋、⿰車立子は輪鼓とも書き鼓の胴の形をしたるもの

事叶はじと思ければ、由井濱の大鳥居の前にて、馬よりゆらりと飛で下、唯一人太刀を倒に杖て、二王立にぞ立たりける。義貞の兵是を見て、猶も唯十方より遠矢に射計にて、寄合んとする者ぞ無りける。敵を爲レ謀手負たる眞似をして、小膝を折てぞ伏たりける。爰に誰とは不レ知、⿰車立子引兩の笠符附たる武者、五十餘騎ひし〳〵と打寄て、勘解由左衞門が首を取んと爭ひ近附ける處に、爲基かばと起て、太刀を取直し、何者ぞ、人の軍にしくたびれて、晝寢したるを驚すは。いで己等がほしがる首取せんと云儘に、鐔本まで血に成たる太刀を打振て、鳴雷の落懸る樣に、大手をはだけて追ける間、五十餘騎の者共、逸足を出し迯ける間、勘解由左衞門大音揚て、何まで迯るぞ。蓬し返せと罵る聲の、唯耳本に聞えて、日來さしも早しと思し馬共、皆一所に躍る心地して、恐しなんど云計なし。爲基唯一人懸入て裏へぬけ、取て返しては懸亂し、今日を限と戰しが、二十一日の合戰に、由井濱の大勢を東西南北に懸散し、敵御方の目を驚し、其後は生死を不レ知成にけり。

○大佛貞直 幷 金澤貞將討死事

にて、六韜中の一也

矢衾—幾百千の矢の連り飛ぶ狀。

七八度が程ぞ揉だりける。義貞の兵共、蜘手十文字に被ニ懸散一て、若宮小路へ颯と引て、人馬に息をぞ繼せける。斯る處に、天狗堂と扇谷に軍有と覺て、馬煙夥敷見えければ、長崎父子左右へ別て、馳向はんとしけるが、子息勘解由左衞門是を限と思ければ、名殘惜げに立止て、遙に父の方を見遣て、兩眼より泪を浮べて、行も過ざりけるを、父屹と是を見て、高らかに恥しめて、馬を扣て云けるは、何か名殘の可レ惜。獨死て獨生殘らんにこそ、再會其期も久しからんずれ。我も人も今日の日の中に討死して、明日は又冥途にて寄合んずる者が、一夜の程の別、何かさまでは悲かるべきとて、高聲に申ければ、爲基泪を推拭ひ、さ候はゞ疾して冥途の旅を御急候へ。死出の山路にては待進せ候はんと云捨て、大勢の中へ懸入ける、心の中こそ哀なれ。相從兵、僅に二十餘騎に成しかば、敵三千餘騎の眞中に取籠て、短兵急に拉がんとす。爲基が佩たる太刀は、面影と名附て、來太郎國行が、百日精進して、百貫にて三尺三寸に打たる太刀なれば、此鋒に廻る者、或は冑の鉢を立破に被レ破、或は胸板を袈裟懸に切て被レ落ける程に、敵皆是に被ニ追立一て、敢て近附者も無りけり。唯陣を隔て矢衾を作て、遠矢に射殺さんとしける間、爲基乘たる馬に矢の立事七筋也。斯ては可レ然敵に近て組んとする

阿鼻大城—阿鼻地獄とて八大地獄の一つ也

虎韜—軍法

去程に、濱面の在家並稲瀬河の東西に火を懸たれば、折節濱風烈く吹布て、車輪の如くなる炎、黑煙の中に飛散て、十町二十町が外に燃附事、同時に二十餘箇所也。猛火の下より源氏の兵亂入て、度方を失へる敵共を、此彼に射伏切伏、或は引組で刺違、或は生捕分捕樣々也。煙に迷る女童部共被追立て、火の中、堀の底共不云迯倒れたる有樣は、是や此帝釋宮の戰に、修羅の眷屬共、天帝の爲に被罸て、劍戟の上に倒伏、阿鼻大城の罪人が、獄卒の槍に被驅て、鐵湯の底に落入覽も、角やと被思知て、語るに言も更になく、聞に哀を催して、皆泪にぞ咽ける。去程に、餘煙四方より吹懸て、相摸入道殿の屋形近く火懸りければ、相摸入道殿、千餘騎にて、葛西谷に引籠り給ければ、諸大將の兵共は、東勝寺に充滿たり。是は父祖代々の墳墓の地なれば、爰にて兵共に防矢射させて、心閑に自害せん爲也。中にも長崎三郎左衛門入道思元、子息勘解由左衛門爲基二人は、極樂寺の切通へ向て、攻入敵を支て防けるが、敵の時の聲已に小町口に聞えて、鎌倉殿の御屋形に火懸りぬと見えしかば、相隨ふ兵七千餘騎をば、猶本の攻口に殘置き、父子二人が手勢六百餘騎を勝て、小町口へぞ向ける。義貞の兵是を見て、中に取籠て討んとす。長崎父子一所に打寄て、魚鱗に連ては懸破り、虎韜に別ては追靡け、

三つ物四つ物―鉈、鎌、熊手、槌、鋸、鐵撮棒、鉞を七つ物といへば、この中をいふか

のゝめき―罵り合ひ

由井濱の浦風に、濃紅の大笠符を吹そらさせ、三つ物四つ物取著て、あたりを拂て馳向ければ、數多の軍勢是を見て、誠に一騎當千の兵也。此間執事の重恩を與へて、傍若無人の振舞せられたるも理哉と、思はぬ人はなかりけり。義貞の兵是を見て、あはれ敵やと罵りければ、栗生、篠塚、畑、矢部、堀口、由良、長濱を始として、大力の覺え取たる荒者共、我先に彼武者と組で勝負を決せんと、馬を進めて相近づく。兩方名譽の大力共が、人交もせず軍する、あれ見よとのゝめきて、敵御方諸共に、固唾を呑で汗を流し、是を見物してぞ控へたる。斯る處に、島津馬より飛で下り、冑を脱で閑々と身繕をする程に、何とするぞと見居たれば、おめ／＼と降參して、義貞の勢にぞ加りける。貴賤上下是を見て、譽つる言を翻して、惡まぬ者は無りけり。是を降人の始として、或は年來重恩の郎從、或は累代奉公の家人共、主を棄て降人になり、親を棄て敵に附、目も不レ被レ當有樣なり。凡源平威を振ひ、互に天下を爭はん事も、今日を限とぞ見えたりける。

○鎌倉兵火事 附長崎父子武勇事

烏帽子子―元服の時烏帽子を冠らせ名をつけし子

に水盡、渴に被レ攻ける時、刀を拔て岩石を刺しかば、飛泉俄に湧出き。我朝の神功皇后は、新羅を攻給し時、自ら干珠を取、海上に擲給しかば、潮水遠く退て、終に戰に勝事を令レ得給ふと。是皆和漢の佳例にして、古今の奇瑞に相似たり。進めや兵共と被二下知一ければ、江田、大館、里見、鳥山、田中、羽川、山名、桃井の人々を始として、越後、上野、武藏、相摸の軍勢共、六萬餘騎を一手に成て、稻村崎の遠干潟を、眞一文字に懸通て、鎌倉中へ亂入る。數多の兵是を見て、後なる敵に懸らんとすれば、前なる寄手跡に附て攻入んとす。前なる敵を欲レ防、後の大勢道を塞で欲レ討。進退失レ度、東西に心迷て、墓々敷敵に向て軍を致す事は無りけり。爰に島津四郎と申しは、大力の聞え有て、誠に器量骨がら人に勝れたりければ、御大事に逢ぬべき者也とて、執事長崎入道烏帽子子にして、一人當千と被レ憑たりければ、先途の合戰に向んとて、未口々の防場へは不レ被レ向、態相摸入道の屋形の邊にぞ被レ置ける。斯る處に、濱の手破て、源氏已に若宮小路まで攻入たりと騷ぎければ、相摸入道、島津を呼寄て、自ら酌を取て酒を進め、三度傾ける時、三間の馬屋に被レ立たりける關東無雙の名馬白浪と云けるに、白鞍置てぞ被レ引ける。見る人是を不二羨一と云事なし。島津、門前より此馬にひたと打乘て、

斧鉞―まさかり、武器の意

貳師將軍―李廣のこと

引退ぬと聞えければ、新田義貞逞兵二萬餘騎を率して、二十一日の夜半計に、片瀬、腰越を打廻り、極樂寺坂へ打莅給ふ。明行月に敵の陣を見給へば、北は切通まで、山高く路嶮きに、木戸を構へ、垣楯を掻て、數萬の兵陣を並べて並居たり。南は稲村崎にて、沙頭路狹きに、浪打涯まで逆茂木を繁く引懸て、澳四五町が程に大船共を並べて、矢倉をかきて、横矢に射させんと構たり。實も此陣の寄手、叶はで引ぬらんも理也と見給ければ、義貞馬より下給て、冑を脱で海上を遥々と伏拜み、龍神に向て祈誓し給けるは、傳承る、日本開闢の主伊勢天照太神は、本地を大日の尊像に隱し、垂跡を滄海の龍神に顯し給へりと。吾君其苗裔として、逆臣の爲に西海の浪に漂給ふ。義貞今臣たる道を盡ん爲に、斧鉞を把て敵陣に臨む。其志偏に王化を資け奉て、蒼生を令安となり。仰願は、内海外海の龍神八部、臣が忠義を鑒て、潮を萬里の外に退け、道を三軍の陣に令開給へと、至信に祈念し、自ら佩給へる金作の太刀を拔て、海中へ投給けり。眞に龍神納受やし給けん、其夜の月の入方に、前々更に干る事も無りける稲村崎、俄に二十餘町干上て、平沙渺々たり。横矢射んと構ぬる數千の兵船も、落行潮に被誘て、遥の澳に漂へり。不思議と云も無類。義貞是を見給て、傳聞後漢の貳師將軍は、城中

三軍をば可奪帥—論語に出づ
以徳報怨—同上

館二郎宗氏が三萬餘騎にて控たる眞中へ懸入て、勇誇たる大勢を八方へ追散し、大將宗氏に組んと、透間もなくぞ懸りける。三萬餘騎の兵共、須臾の程に分れ靡き、腰越までぞ引たりける。餘に手繁く進で懸りしかば、大將宗氏は取て返し、思ふ程戰て、本間が郎等と引組で、刺違へてぞ伏給ひける。本間大に悅て、馬より飛で下り、其首を取て鋒に貫、貞直の陣に馳參じ、幕の前に畏て、多年の奉公、多日の御恩、此一戰を以て奉レ報候。又御不審の身にて空罷成候はゞ、後世までの妄念共成ぬべう候へば、今は御免を蒙て、心安く冥途の御先仕候はんと申もはてず、流るゝ泪を押へつゝ、腹搔切てぞ失にける。三軍をば可レ奪レ帥とは、彼をぞ云べき。以レ徳報レ怨とは、是をぞ申べき。はづかしの本間が心中やとて、落る泪を袖にかけながら、いざや本間が志を感ぜんとて、自打出られしかば、相從兵も、泪を流さぬは無りけり。

○稻村崎成二干潟一事

去程に、極樂寺の切通へ被レ向たる大館二郎宗氏、本間に被レ討て、兵共片瀨、腰越まで

田光先生―史記刺客傳に委し

燕丹―燕の孝王の子丹のこと

勘氣―咎を受ける

合戰の習也。今此戰に敵聊勝に乘るに似たりといへ共、さればとて當家の運今日に窮りぬとは不ㇾ覺。雖ㇾ然、盛時に於ては、一門の安否を見果る迄もなく、此陣頭にて腹を切んと思ふ也。其故は、盛時足利殿に女性方の緣に成ぬる間、相摸殿を奉ㇾ始、一家の人々、さこそ心をも置給らめ。是勇士の所ㇾ恥也。彼田光先生は、燕丹に被ㇾ語し時、此事漏すなと云れて、爲ㇾ散ニ其疑ㇾ、命を失て燕丹が前に死たりしぞかし。此陣鬪急にして、兵皆疲たり。我何の面目か有て、堅めたる陣を引て、而も嫌疑の中に且く命を可ㇾ惜とて、戰未ㇾ半最中に、帷幕の中に物具脫捨て、腹十文字に切給て、北枕にぞ伏給ふ。南條是を見て、大將已に御自害ある上は、士卒誰が爲に命を可ㇾ惜。いでさらば御供申さんとて、續て腹を切ければ、同志の侍九十餘人、上が上に重伏て、腹をぞ切たりける。さてこそ十八日の晩程に、洲崎一番に破れて、義貞の官軍は、山内まで入にけり。斯處に、本間山城左衞門は、多年大佛奧州貞直の恩顧の者にて、殊更近習しけるが、聊勘氣せられたる事有て、不ㇾ被ㇾ許ニ出仕ㇾ、未己が宿所にぞ候ける。已五月十九日の早旦に、極樂寺の切通の軍破れて、敵攻入なんど聞えしかば、本間山城左衞門、若黨中間百餘人、是を最後と出立て、極樂寺坂へぞ向ひける。敵の大將大

切所―要害の場處

重耳―晉の文公の名

れば、鎌倉方には防場切所なりければ、打出打出相支て戰ける。されば三方に作る時の聲、兩陣に叫ぶ箭叫は、天を響し地を動す。魚鱗に懸り鶴翼に開て、前後に當り左右を支へ、義を重じ命を輕じて、安否を一時に定め、剛臆を累代に可レ殘合戰なれば、子被レ討共不レ扶、親は乘越て前なる敵に懸り、主被ニ射落一共不ニ引起一、郎等は其馬に乘て懸出、或は引組で勝負をするもあり、或は打違て共に死するもありけり。其猛卒の機を見に、萬人死して一人殘り、百陣破て一陣に成共、いつ可レ終軍とは見えざりけり。

○赤橋相摸守自害事 附本間自害事

斯りける處に、赤橋相摸守今朝は洲崎へ被レ向たりけるが、此陣の軍剛して、一日一夜の其間に、六十五度まで切合たり。されば數萬騎有つる郎從も討れ落失る程に、僅に殘る其勢は、三百餘騎にぞ成にける。侍大將にて同陣に候ける南條左衛門高直に向て宣ひけるは、漢楚八箇年の戰に、高祖度ごとに打負給しか共、一度烏江の軍に利を得て、却て項羽を被レ亡き。齊晉七十度の戰に、重耳更に勝事無りしか共、遂に齊境の戰に打勝て、文公國を保てり。されば萬死を出て一生を得、百度負て一戰に利あるは、

漁陽の鼙鼓　―漁陽は地名、鼙鼓は兵を進むる時にうつ、ふりつゞみの如きもの

の大將にて、下河邊へ被ㇾ向たりし金澤武藏守貞將は、小山判官千葉介に打負て、下道より鎌倉へ引返し給ければ、思の外なる珍事哉と、人皆周章しける處に、結句五月十八日の卯刻に、村岡、藤澤、片瀨、腰越、十間坂、五十餘箇所に火を懸て、三方より寄懸たりしかば、武士東西に馳替、貴賤山野に迯迷ふ。是ぞ此霓裳一曲の聲の中に、漁陽の鼙鼓動ㇾ地來り、烽火萬里の詐の後に、戎翟の旌旗天を掠て到けん、周の幽王の滅亡せし有樣、唐の玄宗の傾廢せし爲ㇾ體も、角こそは有つらんと被二思知一計にて、淚も更に不ㇾ止、浅猿かりし事共也。去程に、義貞の兵、三方より寄ると聞えければ、鎌倉にも相摸左馬助高成、城式部大輔景氏、丹波左近大夫將監時守を大將として、三手に分てぞ防ける。其一方には金澤越後左近大夫將監を差副て、安房、上總、下野の勢三萬餘騎にて、假粧坂を堅めたり。一方には大佛陸奥守貞直を大將として、甲斐、信濃、伊豆、駿河の勢を相隨へて、五萬餘騎極樂寺の切通を堅めたり。一方には赤橋前相摸守盛時を大將として、武藏、相摸、出羽、奥州の勢六萬餘騎にて、洲崎の敵に被ㇾ向。此外末々の平氏八十餘人、國々の兵十萬餘騎をば、弱からん方へ可ㇾ向とて、鎌倉中に被ㇾ殘たり。去程に、同日の巳刻より合戰始て、終日終夜攻戰ふ。寄手は大勢にて、新手を入替入替攻入け

潤色―光彩を添へること

裨將軍―副將軍

色やと、悦び勇まぬ者はなし。

○鎌倉合戰事

去程に、義貞數箇度の戰に打勝給ぬと聞えしかば、東八箇國の武士共、隨附事如ニ雲霞一。關戸に一日逗留有て、軍勢の著到を著られけるに、六十萬七千餘騎とぞ註せる。こゝにて此勢を三手に分て、各二人の大將を差副へ、三軍の帥を令レ司。其一方には大館二郎宗氏を左將軍として、江田三郎行義を右將軍とす。其勢總て十萬餘騎、極樂寺の切通へぞ向はれける。一方には堀口三郎貞滿を上將軍とし、大島讃岐守守之を裨將軍として、其勢都合十萬餘騎、巨福呂坂へ指向らる。其一方には新田義貞義助諸將の命を司て、堀口、山名、岩松、大井田、桃井、里見、鳥山、額田、一井、羽川以下の一族達を、前後左右に圍せて、其勢五十萬七千餘騎、假粧坂よりぞ被レ寄ける。鎌倉中の人人は、昨日一昨日までも、分陪、關戸に合戰有て、御方打負ぬと聞えけれ共、猶物の數共不レ思、敵の分際さこそ有めと侮て、強に周章たる氣色も無りけるに、大手の大將にて向れたる四郎左近大夫入道僅に被ニ討成一て、昨日の晩景に山内へ引返されぬ。搦手

一言芳恩―一言の恩に感じて仕ふるもの

大火を打消して―せんすべなきことの譬

で被レ引ける。長崎二郎高重、久米河の合戰に、組で討たりし敵の首二、切て落したりし敵の首十三、中間下部に取持せて、鎧に立處の箭をも未レ拔、創の口より流るゝ血に、白絲の鎧忽に緋威に染成して、閑々と鎌倉殿の御屋形へ參り、中門に畏りたりければ、祖父の入道世にも嬉げに打見て出迎、自創を吸血を含で、泪を流て申けるは、古き諺に見レ子不レ如レ父といへども、我先汝を以て上の御用に難レ立者也と思て、常に不孝を加し事大なる誤也。汝今萬死を出て一生に遇、堅を摧きける振舞、陳平張良が爲レ難處を究め得たり。相構て、今より後も、我が一大事と合戰して、父祖の名をも呈し、守殿の御恩をも報じ申候へと、日來の庭訓を飜して、唯今の武勇を感じければ、高重頭を地に附て、兩眼に泪をぞ浮べける。かゝる處に、六波羅沒落して、近江の番馬にて、悉く自害のよし告來ければ、唯今大敵と戰中に、此事をきいて、大火を打消て、あきれ果たる事限なし。其所從眷屬共是を聞て、泣歎き憂悲むこと、喩をとるに物なし。如何にたけく勇める人々も、足手もなゆる心地して、東西をもさらに辨へず。然といへども、此大敵を退てこそ、京都へも討手を上さんずれとて、先鎌倉の軍評定をぞせられける。此事敵にしらせじとせしかども、隱おるべき事ならねば、聽聞えて、哀憐

一業所感—善惡の因如何に從ひて善惡の果を得るをいふ

坂東の八平氏—千葉、小山、長沼、結城、佐竹、小田、宇都宮、那須

武藏の七黨—横山、村山、西、兒玉、丹、猪俣、私市

被レ催て、前後を不レ知寝たる者もあり。唯一業所感の者共が、招二自滅一に不レ異。爰に寄手相近づくを見て、河原面に陣を取たる者、唯今面より旗を巻て、大勢の閑に馬を打て來れば、若敵にてや有らん、御要心候へと告たりければ、大將を始て、さる事あり、三浦大多和が、相摸國勢を催て、御方へ馳參ずると聞えしかば、一定參たりと覺るぞ。斯る目出度事こそなけれとて、驚者一人もなし。唯兎にも角にも、運命の盡ぬる程こそ淺猿けれ。去程に、義貞、三浦が先懸に追すがうて、十萬餘騎を三手に分け、三方より押寄て、同く時を作りける。慧性時の聲に驚て、馬よ物具よと周章騷處へ、義貞、義助の兵縱横無盡に懸立る。三浦平六是に力を得て、江戸、豐島、葛西、河越、坂東の八平氏、武藏の七黨を七手になし、蜘手輪違十文字に、不レ餘とぞ攻たりける。四郎左近大夫入道大勢也といへ共、三浦が一時の計に被レ破て、落行勢は散々に鎌倉を指て引退く。討るる者は數を不レ知。大將左近大夫入道も、關戸の邊にて已に討れぬべく見えけるを、横溝八郎蹈止て、近附敵二十三騎、時の間に射落し、主從三騎討死す。安保入道、道勘父子三人、相隨ふ兵百餘人、同枕に討死す。其外譜代奉公の郎從、一言芳恩の軍勢共、三百餘人引返し、討死しける間に、大將四郎左近大夫入道は、其身に無レ恙してぞ山内ま

にあらず
治定―必定

る兵を以て、大敵の勇誇たるに懸らん事は、如何と宣ひけるを、義勝重て申けるは、今日の軍には治定可レ勝謂候。其故は、昔秦と楚と國を爭ひける時、楚の將軍武信君、纔に八萬餘騎の勢を以て、秦の將軍李由が八十萬騎の勢に打勝、首を切事四十餘萬也。是より武信君心驕り軍懈て、秦の兵を恐るゝに不レ足と思へり。楚の副將軍に宋義と云ける兵是を見て、戰に勝て將驕り卒惰る時は必破と云へり。武信君今如レ此。不レ亡何をか待んと申けるが、果して後の軍に、武信君秦の左將軍章邯が爲に被レ討て、忽に一戰に亡にけり。義勝昨日潛に人を遣して、敵の陣を見するに、其將驕れる事武信君に不レ異。是則宋義が謂し所に不レ違。所詮明日の御合戰には、義勝新手にて候へば、一方の前を承て、敵を一當當て見候はんと申ければ、義貞誠に心に服し、宜に隨ひ、則今度の軍の成敗をば、三浦平六左衛門にぞ被レ許ける。明れば五月十六日の寅刻に、三浦四萬餘騎が眞前に進んで、分陪河原に押寄る。敵の陣近く成まで、態と旗の手をも不レ下、時の聲をも不レ揚けり。是は敵を出抜て、手攻の勝負を爲レ決也。如レ案敵は前日數箇度の戰に、人馬皆疲たり、其上今敵可レ寄共不二思懸一ければ、馬に鞍をも不レ置、物具をも不二取調一、或は遊君に枕を並て、帶紐を解て臥たる者もあり、或は酒宴に醉を

追てばし—ばしは意を強めることば

落居—落著

いさとよ—いや〳〵さ

義を専にして闘ける間、義貞遂に打負て、堀金を指て引退く。其勢若干被レ討て、痛手を負者數を不レ知。其日軈て追てばし寄たらば、義貞爰にて被レ討給ふべかりしを、今は敵何程の事か可レ有。新田をば定て武藏上野の者共が討て出さんずらんと、大樣に憑で時を移す。是が平家の運命の盡ぬる處のしるし也。

○三浦大多和合戰意見事

斯し程に、義貞も無二爲方一思召ける處へ、三浦大多和平六左衛門義勝は、兼てより義貞に志有しかば、相摸國の勢松田、河村、土肥、土屋、本間、澁谷を具足して、以上其勢六千餘騎、十五日の晩景に、義貞の陣へ馳參る。義貞大に悦て、急ぎ對面有て、禮を厚くし、席を近附て、合戰の意見をぞ被レ問ける。平六左衛門畏て申けるは、今天下二つに分れて、互の安否を合戰の勝負に懸たる事にて候へば、其雌雄十度も二十度も、などか無ては候べき。但始終の落居は、天命の歸する處にて候へば、遂に太平を被レ致事、何の疑か候べき。御勢に義勝が勢を幷て戰はんに、十萬餘騎、是も猶敵の勢に不レ及候と云ども、今度の合戰に一勝負せでは候べきと申ければ、義貞も、いさとよ當手の疲た

分陪―武藏國北多摩郡西府村に在り

に死をぞ爭ひける。されば千騎が一騎に成までも、互に引じと戰けれ共、時の運にやよりけん、源氏は僅に討れて、平家は多く亡にければ、加治長崎二度の合戰に打負たる心地して、分陪を指して引退く。源氏猶續て寄んとしけるが、連日數度の戰に、人馬あまた疲たりしかば、一夜馬の足を休めて、久米河に陣を取寄て、明る日をこそ待たりけれ。去程に、櫻田治部大輔貞國、加治、長崎等、十二日の軍に打負て引退由鎌倉へ聞えければ、相摸入道、舍弟の四郎左近大夫入道慧性を大將軍として、鹽田陸奥入道、安保左衞門入道、城越後守、長崎駿河守時光、佐藤左衞門入道、安東左衞門尉高貞、橫溝五郎入道、南部孫二郎、新開左衞門入道、三浦若狹五郎氏明を差副て、重て十萬餘騎を被下。其勢十五日の夜半計に、分陪に著ければ、當陣の敗軍又力を得て、勇進まんとす。義貞は敵に新手の大勢加りたりとは不思寄。十五日の夜未明に、分陪へ押寄て時を作る。鎌倉勢先究竟の射手三千人を勝て面に進め、雨の降如散々に射させける間、源氏射たてられて懸えず。平家是に利を得て、義貞の勢を取籠、不餘とこそ攻たりけれ。新田義貞逞兵を引勝て、敵の大勢を懸破ては裏へ通り、取て返ては喚て懸入、電光の如激、蜘手輪違に七八度が程こそ當りける。されども大敵而も新手にて、先度の恥を雪めんと、

矢合の鏑—矢軍をせんとして先づ手始に射出す鏑矢のこと

義貞忽に入間河を打渡て、先時の聲を揚、陣を進め、早矢合の鏑をぞ射させける。平家も鯨波を合せて、旗を進て懸りけり。初は射手を汰て散々に矢軍をしけるが、前は究竟の馬の足立也。何れも東國そだちの武士共なれば、爭でか少しもたまるべき。太刀長刀の鋒をそろへ、馬の轡を竝て切て入。二百騎三百騎千騎二千騎兵を添て、相戰事三十餘度に成しかば、義貞の兵三百餘騎被レ討、鎌倉勢五百餘騎討死して、日已に暮ければ、人馬共に疲たり、軍は明日と約諾して、義貞三里引退て、入間河に陣をとる。鎌倉勢も三里引退て、久米河に陣をぞ取たりける。兩陣相去る其間を見渡せば、三十餘町に足ざりけり。何れも今日の合戰の物語して、人馬の息を繼せ、兩陣互に篝を焼て、明るを遲と待居たり。夜既に明ぬれば、源氏は平家に先をせられじと、馬の足を進て、久米河の陣へ押寄る。平家も夜明ば源氏定て寄んずらん、待て戰はゞ利あるべしとて、馬の腹帶を固め、冑の緒を縮、相待とぞみえし。兩陣互に寄合せて、六萬餘騎の兵を一手に幷て、陽に開て中にとり籠んと勇けり。義貞の兵是を見て、陰に閉て中を破れじとす。是ぞ此黄石公が虎を縛する手、張子房が鬼を拉ぐ術、何れも皆存知の道なれば、兩陣共に入亂て、不レ被レ破不レ被レ圍して、唯百戰の命を限にし、一擧

精衞―山海經に發鳩之山有鳥、狀如烏、而文首白喙赤足、名曰精衞

瘡痏―瘢痕なり、この事晉にあらず齊なり

越は腹心の病―他日に患あらんとの譬

ことぐヽし、何程の事か可ㇾ有。唐土天竺より寄來といはゞ、げにも眞しかるべし。我朝秋津島の内より出て、鎌倉殿を亡さんとせん事、蟷螂遮ㇾ車精衞塡ㇾ海とするに不ㇾ異と欺合へり。物の心をも辨たる人は、すはや大事出來ぬるは。西國畿內の合戰未ㇾ靜、大敵又藩籬の中より起れり。是伍子胥が吳王夫差を諫しに、晉は瘡痏にして、越は腹心の病也と云しに不ㇾ異と恐合へり。去程に、京都へ討手を可ㇾ被ㇾ上事をば閣て、新田殿退治の沙汰計也。同九日軍の評定有て、翌日の巳刻に、金澤武藏守貞將に、五萬餘騎を差副て、下河邊へ被ㇾ下。是は先上總下總の勢を附て、敵の後攻をせよと也。一方へは櫻田治部大輔貞國を大將にて、長崎二郎高重、同孫四郎左衞門、加治二郎左衞門入道に武藏上野兩國の勢六萬餘騎を相副て、上路より入間河へ被ㇾ向。是は水澤を前に當て、敵の渡さん處を討と也。承久より以來、東風閑にして、人皆弓箭をも忘たるが如なるに、今始て干戈を動す珍しさに、兵共ことぐヽ敷此を晴と出立たりしかば、馬物具太刀刀皆照耀計なれば、由々敷見物にてぞ有ける。路次に兩日逗留有て、同十一日の辰刻に、武藏國小手差原に打臨給ふ。爰にて遙に源氏の陣を見渡せば、其勢雲霞の如にて、幾千萬騎共可ㇾ云數を不ㇾ知。櫻田長崎是を見て、案に相違やしたりけん、馬を控て不㆓進得㆒。

鞍壺—鞍橋の上

問給ひければ、大井田遠江守鞍壺に畏て被申けるは、依勅定大義を思召立るゝ由、承候はずば、何として斯樣に可馳參候。去五日、御使とて天狗山伏一人、越後國中を一日の間に觸廻て通候し間、夜を日に繼で馳參て候。境を隔たる者は、皆明日の程にぞ參著候はんずらん。他國へ御出候はゞ、且く彼勢を御待候へかしと被申て、馬より下て各對面色代して、人馬の息を繼せ給ける處に、後陣の越後勢竝甲斐信濃の源氏共、家々の旗を指連て、其勢五千餘騎、夥敷く見えて馳來。義貞、義助不斜悦て、是偏に八幡大菩薩の擁護による者也。且も不可逗留とて、同九日武藏國へ打越給ふに、紀五左衞門、足利殿の御子息千壽王殿を奉具足二百餘騎にて馳著たり。是より上野、下野、上總、常陸、武藏の兵共、不期に集り、不催に馳來て、其日の暮程に、二十萬七千餘騎冑を竝べ控たり。去ば四方八百里に餘れる武藏野に、人馬共に充滿て、身を峙るに處なく、打圍だる勢なれば、天に飛鳥も翔る事を不得、地を走る獸も隱んとするに處なし。草の原より出る月は、馬鞍の上にほのめきて、甲の袖に傾けり。尾花が末を分る風は、旗の影をひらめかし、縨の手靜る事ぞなき。斯しかば國々の早馬鎌倉へ打重て、急を告る事櫛の齒を引が如し。是を聞て、時の變化をも計らぬ者は、穴

に捨たらんは、無らん跡までも、勇は子孫の面を令レ悅、名は路徑の尸を可レ淸。先立て、綸旨を被レ下ぬるは、何の用にか可レ當。各宣旨を額に當て、運命を天に任て、唯一騎也共國中へ打出て、義兵を擧たらんに、勢附ば軈て鎌倉を可レ攻落。勢不レ附ば唯鎌倉を枕にして、討死するより外の事やあるべきと、義を先とし、勇を宗として宣しかば、當座の一族三十餘人、皆此議にぞ同じける。さらば軈て事の漏れ聞えぬ前に打立とて、同五月八日の卯刻に、生品明神の御前にて旗を擧、綸旨を披て三度是を拜し、笠懸野へ打出らる。相隨ふ人々、氏族には、大館次郎宗氏、子息孫次郎幸氏、二男彌次郎氏明、三男彥二郎氏兼、堀口三郎貞滿、舍弟四郎行義、岩松三郎經家、里見五郎義胤、脇屋次郎義助、江田三郎光義、桃井次郎尙義、是等を宗徒の兵として、百五十騎には過ざりけり。此勢にては如何と思ふ處に、其日の晚景に、利根河の方より、馬物具爽に見えたりける兵二千騎計、馬煙を立て馳來る。すはや敵よと目に懸て見れば、敵には非ずして、越後國の一族に、里見、鳥山、田中、大井田、羽川の人々にてぞおはしける。義貞大に悅て、馬を扣て宣けるは、此事兼てより其企はありながら、昨日今日とは存ぜざりつるに、俄に思立事の候ひつる間、告申までなかりしに、何として存ぜられけると

利根河をさかうて―利根河を界にして

る。相摸入道此事を聞て、大に忿て宣けるは、當家執ㇾ世已に九代、海内悉く其命に不ㇾ隨と云事更になし。然に近年遠境動すれば武命に不ㇾ隨、近國常に下知を輕ずる事奇怪也。剰藩屏の中にして、使節を誅戮する條、罪科非ㇾ輕。此時若緩々の沙汰を致さば、大逆の基と成ぬべしとて、則武藏上野兩國の勢に仰て、新田太郎義貞、舍弟脇屋次郎義助を討て可ㇾ進とぞ被二下知一ける。義貞是を聞て、宗徒の一族達を集て、此事可ㇾ有二如何一と評定有けるに、異議區々にして不二一定一。或は沼田庄を要害にして、利根河を前に當て、敵を待んと云議もあり、又越後國には、大略當家の一族充滿たれば、津張郡へ打越て、上田山を切塞ぎ、勢を附てや可ㇾ防と、意見不ㇾ定けるを、舍弟脇屋次郎義助、暫思案して、進出て被ㇾ申けるは、弓矢の道、死を輕じて、名を重ずるを以て義とせり。就ㇾ中相摸守天下を執て百六十餘年、于ㇾ今至まで武威盛に振て、其命を重ぜずと云處なし。されば縱利根河をさかうて防共、運盡なば叶まじ。又越後國の一族を憑たり共、人の意不和ならば、久き謀に非ず。指たる事も仕出さぬ物故に、此彼へ落行て、新田の某こそ、相摸守の使を切たりし咎に依て、他國へ迯て被ㇾ討たりしなんど、天下の人口に入らん事こそ口惜けれ。とても討死をせんずる命を、謀叛人と謂れて、朝家の爲

便宜の一族—たよりよき一族
天役—天朝の課役といふ意なるべきを高時僭上にかくいひしものか尚或は夫役の誤か。
有德—有福

外に遁るゝ辭無しとて、竹若殿を潛に刺殺し奉り、同宿十三人をば頸を刎て、浮島原に懸てぞ通ける。

○新田義貞謀叛事　附天狗催二越後勢一事

斯ける處に、新田太郎義貞、去三月十一日、先朝より綸旨を賜たりしかば、千劍破より虚病して本國へ歸り、便宜の一族達を潛に集て、謀叛の計略をぞ被レ廻ける。斯る企有とは不二思寄一、相摸入道、舍弟の四郎左近太夫入道に十萬餘騎を差副て、京都へ上せ、畿内西國の亂を可レ靜とて、武藏、上野、安房、上總、常陸、下野、六箇國の勢をぞ被レ催ける。其兵粮の爲にとて、近國の庄園に、臨時の天役を被レ懸ける。中にも新田庄世良田には、有德の者多しとて、出雲介親連、黑沼彥四郎入道を使にて、六萬貫を五日が中に可二沙汰一と、堅く下知せられければ、使先彼所に莅で、大勢を庄家に放入て、譴責する事法に過たり。新田義貞是を聞給て、我館の邊を、雜人の馬蹄に懸させつる事こそ、返々も無念なれ、爭か乍レ見可レ怺とて、數多の人勢を差向られて、兩使を忽に生捕て、出雲介をば縛置き、黑沼入道をば頸を切て、同日の暮程に、世良田の里中にぞ被レ懸け

太平記　巻第十

○千壽王殿被レ落二大藏谷一事

足利治部大輔高氏敵に成給ぬる事、道遠ければ飛脚未二到來一、鎌倉には曾て其沙汰も無りけり。斯し處に、元弘三年五月二日の夜半に、足利殿の二男千壽王殿、大藏谷を落て、行方不レ知成給けり。依レ之鎌倉中の貴賤、すはや大事出來ぬるはとて騷動不レ斜。京都の事は道遠に依て、未分明の説も無ければ、毎事無二心元一とて、長崎勘解由左衞門入道と諏方木工左衞門入道と、兩使にて被レ上ける處に、六波羅の早馬、駿河の高橋にてぞ行合ける。名越殿は被レ討給、足利殿は敵に成給ぬと申ければ、さては鎌倉の事も不審とて、兩使は取て返し、關東へぞ下ける。爰に高氏の長男竹若殿は、伊豆の御山に御座けるが、伯父の宰相法印良遍、兒同宿十三人、山伏の姿に成て、潛に上洛し給けるが、浮島原にて彼兩使にぞ行合給ける。諏方長崎牛取奉んと思處に、宰相法印無二是非一馬上にて腹切て、道の傍にぞ伏給ける。長崎、去ばこそ内に野心のある人は、

は道もなき岩石の際に行つまつて腹を切、或は數千丈深き谷の底へ落入て、骨を微塵に打摧く者、幾千萬と云數を不知。始御方の勢を歸さじとて、寄手の方より警固を居たる谷合の關逆茂木も、引除て通る人無ければ、被踏落ては馬に蹴れ、倒れては人に被踏殺、二三里が間の山路を、數萬の敵に被追立て、一軍もせで引しかば、今朝までは十萬餘騎と見えつる寄手の勢、殘少なに被討成、僅に生たる軍勢も、馬物具を捨ぬは無りけり。されば今に至るまで、金剛山の麓、東條谷の路の邊には、矢の孔刀の創ある白骨、收る人もなければ、苔に纏れて累々たり。されども宗徒の大將達は、一人も道にては不被討して、生たる甲斐はなけれ共、其日の夜半計に、南都にこそ被落著ける、

去々年―諸本去年とあり、異本に依て改む

狎ぬ敵軍に前後を被打圍て、怪げなる網代輿に被召、都へ歸上らせ給へば、見物の貴賤岐に立て、あら不思議や、去々年先帝を笠置にて生捕進らせて、隱岐國へ流し奉りし其報、三年の中に來りぬる事の淺猿さよ。昨日は他州の憂と聞しかど、今日は我上の責に當れりとは、斯樣の事をや申すべき。此君も又如何なる配所へか被遷させ給て、宸襟を被惱らんと、心あるも心なきも、見人毎に因果歷然の理を感思して、袖をぬらさぬは無りけり。

○千劔破城寄手敗北事

去程に、昨日の夜、六波羅已に被攻落て、主上上皇皆關東へ落させ給ぬと、翌日の午刻に、千劔破へ聞えたりければ、城中には悅勇で、唯籠の中の鳥の、出て林に遊ぶ悅をなし、寄手は牲に赴く羊の、被驅て廟に近づく思をなす。何樣一日も遲くひかば、野伏彌勢重りて、山中の路可難儀とて、十日の早旦に、千劔破の寄手十萬餘騎、南都の方へと引て行く。前には兼て野伏充滿たり。跡よりは又敵急に追懸る。都て大勢の引立たる時の癖なれば、弓矢を取捨て、親子兄弟を離て、我先にと逃ふためきける程に、或

玄象、下濃
―共に琵琶の名器の名

○主上上皇爲二五宮一被レ囚給事附資名卿出家事

去程に、五宮の官軍ども、主上上皇を取進らせて、其日先長光寺へ入奉り、三種神器竝玄象、下濃、二間の御本尊に至まで、自五宮の御方へぞ被レ渡ける。秦の子嬰漢祖の爲に被レ亡て、天子の璽符を頸に懸、白馬素車に乘て、軹道の傍に降り給ひし亡秦の時に不レ異。日野大納言資名卿は、殊更當今奉公の寵臣也しかば、如何なる憂目をか見んずらんとて、身を危んで被レ思ければ、其邊の辻堂に、遊行の聖の有ける處へおはして、可二出家一由を宣ひければ、聖軈て戒師と成て、無二是非一髮を剃落さんとしけるを、資名卿聖に向て、出家の時は、何とやらん四句の偈を唱る事の有げに候者をと被レ仰ければ、此聖其文をや知ざりけん、汝是畜生發菩提心とぞ唱たりける。三河守友俊も、同く此にて出家せんとて、既に髮を洗けるが、是を聞て、命の惜さに出家すればとて、汝は是畜生也と唱給ふ事の悲しさよと、ゑつぼに入て笑ける。如レ此今まで附纏ひ進らせたる卿相雲客も、此彼に落留て、出家遁世して退散しける間、今は主上春宮兩上皇の御方樣とては、經顯有光卿二人より外は、供奉仕る人もなし。其外は皆見

貂錦―貂冠をかぶり錦衣をつけたる朝臣

四郎、海老名四郎、同與一、弘田八郎、覺井三郎、石川九郎、子息又次郎、進藤六郎、同彦四郎、備後民部大夫、同三郎入道、加賀彦太郎、同彌太郎、三島新三郎、同新太郎、武田與三、滿王野藤左衞門、池守藤内兵衞、同左衞門五郎、同左衞門七郎、同左衞門太郎、同新左衞門、齋藤宮内丞、子息竹丸、同宮内左衞門、子息七郎、同三郎、筑前民部大夫、同七郎左衞門、田村中務入道、同彦五郎、同兵衞次郎、信濃少外記、眞上彦三郎子息三郎、陶山次郎、同小五郎、小見山孫太郎、同五郎、同六郎次郎、高境孫三郎、鹽谷彌次郎、庄左衞門四郎、藤田六郎、同七郎、金子十郎左衞門、眞壁三郎、江馬彦次郎、近部七郎、能登彦次郎、新野四郎、佐海八郎三郎、藤里八郎、愛多義中務丞、子息彌次郎、是等を宗徒の者として、都合四百三十二人、同時に腹をぞ切たりける。血は其身を浸して、恰黄河の流の如也。死骸は庭に充滿して、屠所の肉に不異。彼己亥の年、五千の貂錦胡塵に亡び、潼關の戰に、百萬の士卒河水に溺れけんも、是にはよも過じと哀なりし事共、目もあてられず、言に詞も無りけり。主上上皇は此死人どもの有樣を御覽ずるに、肝心も御身に不傍、唯あきれてぞ御座ける。

隅田源七左衞門尉、同孫五郎、同藤内左衞門尉、同與一、同四郎、同五郎、同孫八、同新左衞門尉、同又五郎、同藤六、同三郎、安藤太郎左衞門入道、同孫三郎入道、同左衞門太郎、同左衞門三郎、同十郎、同三郎、同又次郎、同新左衞門、同七郎三郎、同藤次郎、中布利五郎左衞門、石見彥三郎、武田下條十郎、關屋八郎、同十郎、黑田新左衞門同次郎左衞門、竹井太郎、同掃部左衞門尉、寄藤十郎兵衞、皆吉左京亮、同勘解由七郎兵衞、小屋木七郎、鹽屋右馬允、同八郎、岩切三郎左衞門、子息新左衞門、同四郎、浦上八郎、岡田平六兵衞、木工助入道、子息助三郎、吉井彥三郎、同四郎、壹岐孫四郎、窪二郎、糟谷彌次郎入道、同孫三郎入道、同六郎、同次郎、同伊賀三郎、同彥三郎入道、同大炊次郎入道、同六郎、櫛橋次郎左衞門尉、南和五郎、同又五郎、原宗左近將監入道、子息彥七、同七郎、同七郎次郎、同平右馬三郎、御器所七郎、怒借屋彥三郎、西郡十郎、秋月二郎兵衞、半田彥三郎、平塚孫四郎、毎田三郎、花房六郎入道、宮崎三郎、同太郎次郎、山本八郎入道、同七郎入道、子息彥三郎、同小五郎、子息彥五郎、同孫四郎、足立源五、三河孫六、廣田五郎左衞門、伊佐治部丞、同孫八、同三郎、息男孫四郎、片山十郎入道、木村四郎、佐々木隱岐判官、二階堂伊豫入道、石井中務丞、子息彌三郎、同

千戸侯一家千戸を領する大名

ければ、時信も早敵に成にけり。今は何へか引返し、何までか可落なれば、爽に腹を切んずる物をと、中々一途に心を取定て、氣色涼くぞ見えける。其時軍勢共に向て宣けるは、武運漸傾て、當家の滅亡近きに可在と見給ひながら、弓矢の名を重じ、日來の好を不忘して、是まで著纒ひ給へる志、中々申に言可無。其報謝の思雖深、一家の運已に盡ぬれば、何を以てか是を可報。今は我旁の爲に自害をして、生前の芳恩を死後に報ぜんと存ずる也。仲時雖不肖也、平民一類の名を揚る身なれば、敵共定て我首を以て、千戸侯にも募りぬらん。早く仲時が首を取て源氏の手に渡し、咎を補て忠に備へ給へと、云はてざる言の下に、鎧脱で押膚脱、腹掻切て伏給ふ。糟谷三郎宗秋是を見て、泪の鎧の袖に懸りけるを押へて、宗秋こそ先自害して、冥途の御先をも仕らんと存候つるに、先立せ給ぬる事こそ口惜けれ。今生にては命を際の御先途を見終進せつ。冥途なればとて見放可奉に非ず。暫御待候へ。死出の山の御供申候はんとて、越後守の、鞆口まで腹に突立て被置たる刀を取て、己が腹に突立、仲時の膝に抱附、覆にこそ伏たりける。是を始として、佐々木隱岐前司、子息次郎右衛門、同三郎兵衛、同永壽丸、高橋九郎左衛門、同孫四郎、同又四郎、同彌四郎左衛門、同五郎、

一所計にて候はゞ、身命を捨て、打拂ても可レ通候か、推量仕るに、先土岐が一族、最初より謀叛の張本にて候しかば、折を得て、美濃國をば通さじとぞ仕候はんずらん。吉良の一族も、度々の召に不レ應して、遠江國に城郭を構て候と、風聞候しかば、出合ぬ事は候はじ。此等を敵に受ては、退治せん事、恐くは萬騎の勢にても難レ叶。況我等落人の身と成て、人馬共に疲れ、矢の一筋をも、はか〴〵しく射候べき力もなく成て候へば、何迄か落延候べき。唯後陣の佐々木を御待候て、近江國へ引返し、暫さりぬべからんずる城に楯籠て、關東勢の上洛し候はんずるを御待候へかしと申ければ、越後守仲時も、此儀を存ずれ共、佐々木とても今は如何なる野心か存ずらん。憑少く覺れば、進退谷て、面々の意見を問申さんと存ずる也。さらば何様此堂に暫イて、時信を待てこそ評定あらめとて、五百餘騎の兵共、皆辻堂の庭にぞ下居たる。佐々木判官時信は、一里計引さがりて、三百餘騎にて打けるが、如何なる天魔破旬の所爲にてか有けん、六波羅殿は、番馬の峠にて、野伏共に被レ取籠て、一人も不レ殘被レ討給たりとぞ告たりける。時信今は可レ爲様無りけりと、愛智河より引返し、降人に成て京都へ上にけり。越後守仲時、暫は時信を遲しと待給けるが、待期過て時移

鸞輿―天子の乗輿

鸞輿跡に連て、番馬峠を越んとする處に、數千の敵、道を中に夾み、楯を一面に竝、矢前をそろへて待懸たり。糟谷遙に是を見て、思ふに當國他國の惡黨共が落人の物具剝んとてぞ集りたるらん。手痛く當て捨る程ならば、命を惜まで戰ふ程の事はよも非じ。唯一懸に驅散して捨よと云儘に、三十六騎の兵共、馬の鼻を竝てぞ驅たりける。一陣を堅たる野伏五百餘人、遙の峯へまくり上られて、一陣の勢に逃加る。糟谷は一陣の軍には討勝つ、今はよも手に礙る者非じと心安く思て、朝霧の晴行儘に、可レ越末の山路を遙に見渡しければ、錦の旗一旒、峯の嵐に翻して、兵五六千人が程、要害を前に當て待懸たり。糟谷二陣の敵大勢を見て、退屈してぞ控たる。重て懸破んとすれば、人馬共に疲れて、敵嶮岨に支へたり。相近附て矢軍をせんとすれば、矢種皆射盡して、敵若干の大勢也。兎にも角にも可レ叶とも覺えざりければ、麓に辻堂の有けるに、皆下居て、後陣の勢をぞ相待ける。越後守は、前陣に軍有と聞て、馬を早めて馳來給ふ。糟谷三郎、越後守に向て申けるは、弓矢取の可レ死處にて死ざれば恥を見と申し習はしたるは、理にて候けり。我等都にて可二討死一候し者が、一日の命を惜て、是まで落もて來て、今云甲斐なき田夫野人の手に懸て、尸を路徑の露に曝さん事こそ口惜候へ。敵此

神宮とあれど参考本に神官とあるが可なるべし

山立—山賊

仙蹕—天皇の出御行幸

に、神宮心有て、身の難に可レ遇をも不レ顧、兎角隱置進せければ、是に三十餘日御忍有て、京都少し靜りしかば還御成て、三四年が間は、白毫院と云處に、御遁世の體にてぞ御座有ける。

○越後守仲時已下自害事

去程に、兩六波羅京都の合戰に討負て、關東へ被レ落由披露有ければ、安宅、篠原、日夏、老曾、愛智河、小野、四十九院、摺針、番馬、醒井、柏原、其外伊吹山の麓、鈴鹿河の邊の山立強盜溢者共二三千人、一夜の程に馳集て、先帝第五の宮、御遁世の體にて伊吹の麓に忍で御座有けるを、大將に取奉て、錦の御旗を差あげ、東山道第一の難所、番馬宿の東なる小山の峯に取上り、岸の下なる細道を中に夾みて待懸たり。夜明ければ、越後守仲時、篠原宿を立て、仙蹕を重山の深に促し奉る。都を出し昨日までは、供奉の兵二千騎に餘しかども、次第に落散けるにや、今は僅に七百騎にも足ざりけり。若跡より追懸奉る事もあらば、防矢仕れとて、佐々木判官時信をば後陣に打せられ、賊徒道を塞ぐ事あらば、打散して道を開よとて、糟谷三郎に先陣を被レ打、

耳のびくが薄く―耳朶が薄くて運の悪きをいふ

出世坊官―身分ある僧

長絹―絹の名

神宮―諸本

物を、早人が掘て取たりけるぞや。德つけ奉んと思たれば、耳のびくが薄く座しけると欺て、空笑してこそ返しけれ。中吉が謀に道開けて、主上其日は篠原宿に著せ給ふ。此にて怪しげなる網代輿を尋出て、歩立なる武者共、俄に駕輿丁の如くに成て、御輿の前後をぞ仕りける。天台座主梶井二品親王は、是まで御供申させ給たりけるが、行末とても、道の程心安く可レ過共覺させ給はねば、何にも暫し立忍ばゞやと思召て、御門徒に誰か候と御尋有けれ共、去ぬる夜の路次の合戰に、或は創を蒙て留り、或は心替して落けるにや、中納言僧都經超、二位寺主淨勝二人より外は、供奉仕りたる出世坊官一人も候はずと申ければ、さては殊更長途の逆旅叶ふまじと、是より引別て、伊勢の方へぞ赴かせ給ける。さらでだに山立多き鈴鹿山を、飼たる馬に白鞍置て被レ召たらんは、中々道の可レ爲レ讐とて、御馬を皆宿の主に賜て、門主は長々と蹴垂たる長絹の御衣に、檳榔の裏無を被レ召、經超僧都は、袙重たる黑衣に、水精の念珠手に持て、歩兼たる有樣、如何なる人も是を見て、すはや是こそ落人よと、思はぬ者は不レ可レ有。され共、山王大師の御加護にや依けん、道に行逢奉る山路の樵、野徑の蘇、御手を引、御腰を推て、鈴鹿山を越奉る。さて伊勢の神宮なる人を、平に御憑有て御座しける

刀加へに―
刀諸共に

數十町也。彌八餘に長追したりける程に、野伏二十餘人返合て、是を中に取籠る。然共彌八少もひるまず、其中の棟梁と見えたる敵に、馳並てむずと組、馬二匹が間へどうと落て、四五丈計高き片岸の上より、上に成下に成ころびけるが、共に組も放れずして、深田の中へころび落にけり。中吉下に成り、舁樣に一刀さゝんとて、腰刀を搜りけるに、ころぶ時拔てや失たりけん、鞘計有て刀はなし。上なる敵中吉が胸板の上に乘懸て、鬢の髪を摑で、頸を掻んとしける處に、中吉刀加に、敵の小腕を丁と搦りすくめて、暫く聞給へ可申事あり。御邊今は我をな恐給ひそ。刀があらばこそ、跳返して勝負をもせめ。又續く御方なければ、落重て我を助る人もあらじ。されば御邊の手に懸て、頸を取て被出たりとも、曾て實檢にも及まじ。高名にも成まじ。我は六波羅殿の御雜色に、六郎太郎と云者にて候へば、見知ぬ人も候まじ。無用の下部の首取て、罪を作り給はんより、我命を助てたび候へ。其悦には、六波羅殿の錢を隠して、六千貫被埋たる所を知て候へば、手引申て御邊に所得せさせ奉んと云ければ、誠とや思けん、拔たる刀を鞘にさし、下なる中吉を引起して、命を助るのみならず、樣々の引出物をし、酒なんどを勸て、京へ連て上りたれば、彌八六波羅の燒跡へ行、正しく此に被埋たりし

められて蜀に奔り劔閣を過ぎし昔のこと

暫やすらはせ給ふ處に、何より射る共知らぬ流矢、主上の左の御肱に立にけり。陶山備中守急ぎ馬より飛下て、矢を拔て御創を吸に、流るゝ血雪の御膚を染て、見進するに目もあてられず。忝も萬乘の主、卑き匹夫の矢先に被レ傷て、神龍忽に釣者の網にかゝれる事、淺猿かりし世中也。去程に、篠目漸明初て、朝霧僅殘れるに、北なる山を見渡せば、野伏共と覺て、五六百人が程、楯をつき、鏃を支て待懸たり。是を見て、面々度を失てあきれたり。爰に備前國の住人中吉彌八、行幸の御前に候けるが、敵近く馬を懸寄て、忝も一天の君、關東へ臨幸成處に、何者なれば斯樣の狼藉をば仕るぞ。心ある者ならば、弓をふせ冑を脫で、可レ奉レ通。禮義を知ぬ奴原ならば、一々に召捕て、頸切懸て可レ通と云ければ、野伏共から〱と笑て、如何なる一天の君にても渡せ給へ。御運已に盡て、落させ給はんずるを、通し進らせんとは申まじ。輒く通り度思召さば、御供の武士の馬物具を皆捨させて、御心安く落させ給べしと云もはてず、同音に時をどつと作る。中吉彌八是を聞て、惡い奴原が振舞哉。いでほしがる物具とらせんと云儘に、若黨六騎馬の鼻を竝べて懸たりけるに、慾心熾盛の野伏共、六騎の兵に被二懸立一て、蛛の子を散す如く、四角八方へぞ逃散ける。六騎の兵共、六方へ分て、逃るを追事各

苦集滅道—京都東山清水寺の南、清閑寺の側

野伏—主將なき兵の山野にひそむもの

劍閣の遠き昔—唐の玄宗皇帝天寶十五年安祿山の爲に攻

知ぬぞ哀なる。十四五町打延て、跡を顧れば、早兩六波羅の館に火懸て、一片の煙と燒上たり。五月闇の比なれば、前後も不ㇾ見暗きに、苦集滅道の邊に、野伏充滿て、十方より射ける矢に、左近將監時益は、頸の骨を被ㇾ射て、馬より倒に落ぬ。糟谷七郎馬より下て其矢を拔ば、忽に息止にけり。敵何に有とも知ねば、馳合て敵を可ㇾ討樣もなし。又忍て落る道なれば、傍輩に知せて可ㇾ返合にてもなし。唯同枕に自害して、後世までも主從の義を重ずるより外の事はあらじと思ければ、糟谷泣々主の首を取て、錦の直垂の袖に裹み、道の傍の田の中に深く隱して、則腹掻切て主の死骸の上に重て、抱著てぞ伏たりける。龍駕遙に四宮河原を過させ給ふ處に、落人の通るぞ、打留て物具剝と呼聲前後に聞えて、矢を射事雨の降が如し。角ては行末とても如何有べきとて、東宮を始進せて、供奉の卿相雲客、方々へ落散給ける程に、今は僅に日野大納言資名、勸修寺中納言經顯、綾小路中納言重資、禪林寺宰相有光計ぞ、龍駕の前後には被ㇾ供奉ける。都を一片の曉の雲に阻て、思を萬里の東の道に傾させ給へば、劍閣の遠き昔も被ㇾ思召合、壽永の亂たりし世も、角こそと叡襟を惱し給ふ。主上上皇も御泪更にせきあへず。五月の短夜明やらで、關の此方も闇ければ、杉の木陰に駒を駐て、

南方―南六波羅方
北方―北六波羅方

ふ事七十餘度也しに、項羽遂に高祖に被レ圍て、夜明ば討死せんとせし時に、漢の兵四面にして皆楚歌するを聞て、項羽則帳中に入り、其婦人虞氏に向て、別を慕ふ悲を含んで、自歌を作て云、

力拔レ山兮氣蓋レ世。時不レ利兮騅不レ逝。騅不レ逝兮可二奈何一。虞氏兮虞氏兮奈二若何一。

と悲歌慷慨して、項羽泪を流し給しかば、虞氏悲に堪兼て、則自劔の上に伏し、項羽に先立て死にけり。項羽明日の戰に、二十八騎を伴て、漢の軍四十萬騎を懸破り、自漢の將軍三人が首を取て、被二討殘一たる兵に向て、我遂に漢の高祖が爲に被レ亡ぬる事、戰の罪に非ず、天我を亡せりと、自運を計て、遂に烏江の邊にして自害したりしも、角やと被二思知一て、泪を落さぬ武士はなし。南方左近將監時益は、行幸の御前を仕て打けるが、馬に乍レ乘北方越後守の中門の際まで打寄せて、主上早寮の御馬に被レ召て候に、などや長々敷打立せ給はぬぞと云捨て、打出ければ、仲時無レ力、鎧の袖に取著たる北方少き人を引放して、緣より馬に打乘り、北の門を東へ打出給へば、被二捨置一人々、泣々左右へ別て、東の門より迷出給ふ。行々泣悲む聲遙に耳に留て、離れもやらぬ悲さに、落行前の路暮て、馬に任て歩せ行。是を限の別とは、互に

異。越後守仲時、北方に向て宣ひけるは、日來の間は、縦思の外に都を去事有共、何までも伴ひ申さんとこそ思ひつれ共、敵東西に滿て、道を塞ぬと聞ゆれば、心安く關東まで落延ぬ共不ㇾ覺。御事は女性の身なれば、苦しかるまじ。松壽は未幼稚なれば、敵設見附たりとも、誰が子ともよも知らじ。唯今の程に、夜に紛れて何方へも忍出給て、片邊土の方にも身を隱し、暫く世の靜まらん程を待給ふべし。道の程事故なく關東に著なば、頓て御迎に人を可ㇾ進。若又我等道にて被ㇾ討ぬと聞給はゞ、如何なる人にも相馴て、松壽を人と成し、心附なば僧に成して、我後世を弔せ給へと、心細げに云置て、泪を流て立給ふ。北方、越後守の鎧の袖を控て、などや角うたてしき言葉に聞え侍るぞや。此折節、少き者なんど引具して、しらぬ傍にやすらはゞ、誰か落人の其方樣と思はざらん。又日比より知たる人の傍に立宿らば、敵に捜し被ㇾ出て、我身の恥を見るのみにあらず、少き者の命をさへ失はん事こそ悲しけれ。道にて思の外の事あらば、そこにてこそ共に兎も角も成はてめ。憑む陰なき木の下に、世を秋風の露の間も、被ㇾ棄置ㇾ進せては、ながらふべき心地もせずと、泣悲み給ければ、越後守も、心は猛しといへ共、流石に岩木の身ならねば、慕ふ別を捨兼て、遙に時をぞ移されける。昔漢の高祖と楚の項羽と戰

にあり佳樹芳草の多き處なりとぞ

心附―ものごゝろづく

あさまなる—淺間なるにて、要害の淺きをいふ

金谷園—河陽縣金谷澗

爰に糟谷三郎宗秋、六波羅殿の御前に參て申けるは、御方の御勢次第に落て、今は千騎にたらぬ程に成て候。此御勢にて大敵を防がん事は、叶はじとこそ覺え候へ。東一方をば敵未取まはし候はねば、主上上皇を奉レ取て、關東へ御下候て後、重て大勢を以て京都を被レ攻候へかし。佐々木判官時信、勢多の橋を警固して候を被二召具一ば、御勢も不足候まじ。時信御供仕る程ならば、近江國に於ては、手指者は候まじ。美濃、尾張、三河、遠江には、御敵有とも承らねば、路次は定て無爲にぞ候はんずらん。鎌倉に御著候なば、逆徒の退治踵を不レ可レ旋。先思召立候へかし。是程にあさまなる平城に、主上上皇を籠進らせて、名將匹夫の鋒に名を失はせ給はん事、口惜かるべき事に候はずやと、再三强て申ければ、兩六波羅げにもとや被レ思けん、さらば先女院、皇后、北政所を始進せて、面々の女性少き人々を忍やかに落して後、心閑に一方を打破て落べしと評定有て、小串五郎兵衛尉を以て、此由院内へ被レ申たりければ、國母、皇后、女院、北政所、内侍、上童、上臈、女房達に至まで、城中に籠りたるが恐さに、思はぬ別の悲さも、後如何に成行んずる樣をも不レ知、步跣にて我先にと迷出給ふ。唯金谷園裏の春の花、一朝の嵐に被レ誘て、四方の霞に散行し、昔の夢に不

擬勢―うはべの勢
北政所―攝關の夫人
月卿雲客―公卿殿上人

さすがに小勢なれば、長追しては惡かりなんとて、又城の中へ引籠る。六波羅に楯籠る所の軍勢雖レ少、其數五萬騎に餘れり。此時若志を一にして、同時に懸出たらましかば、引立たる寄手共、足をためじと見えしか共、武家可レ亡運の極にや有けん、日來名を顯せし剛の者といへ共不レ勇、無雙強弓精兵と被レ云者も弓不レ引して、唯あきれたる計にて、此彼に叢立て、落支度の外は擬勢もなし。名を惜み家を重ずる武士共だにも如レ此。如何況主上上皇を始進らせて、女院、皇后、北政所、月卿、雲客、兒、女童、女房達に至るまで、軍と云事は未目にも見給はぬ事なれば、時の聲、矢叫の音に懼をのゝかせ給ひて、こは如何すべきと、消入計の御氣色なれば、げにも理也と御痛敷樣を見進らするに就ても、兩六波羅彌氣を失て、惘然の體也。今まで無貳心者と見えつる兵なれども、斯樣に城中の色めきたる樣を見て、叶はじとや思ひけん、夜に入ければ、木戸を開、逆茂木を越て、我先にと落行けり。義を知、命を輕じて殘留る兵、僅に千騎にも不レ足見えにけり。

○主上上皇御沈落事

ぬと見えければ、佐用兵庫助、得平源太、別所六郎左衛門、五郎左衛門、相懸に懸て、面も不レ振戰うたり。あれ討すな殿原とて、赤松入道圓心、嫡子信濃守範資、次男筑前守貞範、三男律師則祐、眞島、上月、菅家、衣笠の兵三千餘騎、拔連てぞ懸ける。六波羅の勢一萬餘騎、七縱八横に被レ破て、七條河原へ被二追出一。一陣破て殘黨全からざれば、六波羅の勢竹田の合戰にも討負、木幡伏見の軍にも負て、落行勢散々に六波羅の城へ逃籠る。勝に乘て逃を追ふ四方の寄手五萬餘騎、皆一所に寄て、五條の橋爪より七條河原まで、六波羅を圍ぬる事幾千萬と云數を不レ知。されども東一方をば態被レ開たり。是は敵の心を一になさで、輒く攻落さん爲の謀也。千種頭中將忠顯朝臣、士卒に向て被二下知一けるは、此城尋常の思を成て、延々に攻ば、千劒破の寄手彼を捨て、此の後攻を仕つと覺るぞ。諸卒心を一にして、一時が間に可二攻落一と被二下知一ければ、出雲伯耆の兵共、雜車二三百輛取集て、轅と轅とを結合せ、其上に家を壞て、山の如くに積上て、櫓の下へ指寄、一方の木戸を燒破けり。爰に梶井宮の御門徒、上林房勝行房の同宿共、混冑にて三百餘人、地藏堂の北の門より五條の橋爪へ打て出たりける間、坊門少將殿法印の兵共三千餘騎、僅の勢にまくり立られて、河原三町を追越さる。されども山徒

貫―足に穿く一種の武具、皮にて作る

菱縫―菱縫の板とて鎧の板の菱形に緘を縫ひたる處

鹿孫三郎長宗、馬より飛で下、弓を差おろして、水の深さを探るに、末弭僅に殘りたり。さては我長は立んずる物をと思ひければ、五尺三寸の太刀を拔て肩に掛、貫脫で拋すて、かつぱと飛漬りたれば、水は胸板の上へも不レ上。跡に續いたる武部七郎是を見て、堀は淺かりけるぞとて、長五尺計なる小男が、無二是非一飛入たれば、水は冑をぞ越たりける。長宗きつと見返て、我總角に取著てあがれと云ければ、武部七郎、妻鹿が鎧の上帶を蹈で、肩に乘揚り、一跳跳て向の岸にぞ著にける。妻鹿から〳〵と笑て、御邊は我を橋にして渡たるや。いで其塀引破て捨んと云儘に、岸より上へつと跳上り、塀柱の四五寸に餘て見えたるに手を懸、えいや〳〵と引に、一二丈ほり上て、山の如くなる揚土、壁と共に崩て、堀は平地に成にけり。是を見て、築垣の上に三百餘箇所搔並べたる櫓より、指詰引詰射ける矢、雨の降よりも猶滋し。長宗が鎧の菱縫、冑の吹返に立所の矢少々折懸て、高櫓の下へつと走入り、兩金剛の前に太刀を倒につき、齒咀して立たるは、何れを二王、何れを孫三郎とも分兼たり。東寺、西八條、針、唐橋に控たる六波羅の兵一萬餘騎、木戸口の合戰強しと騷で、皆一手に成、東寺の東門の脇より、濕雲の雨を帶て、暮山を出たるが如く、ましぐらに打出たり。妻鹿も武部も、すはや被レ討

弓だけ—弓の長七尺五寸

内野—西の京の東にあり

鰍にてぞ有らんと打見て、片手打の下切に、諸膝不ㇾ懸切て落し、弓だけ三杖計投たりける。對馬守最愛の猶子を目の前に討せて　なじかは命を可ㇾ惜。大高に組んと諸鐙を合て馳懸る處に、河野が郎等共是を見て、主を討せじと三百餘騎にてをめいて懸る。源氏又大高を討せじと、一千餘騎にて喚て懸る。源平互に入亂て、黑煙を立て攻戰ふ。官軍多く討れて內野へばつと引。源氏新手を入替て戰ふに、六波羅勢若干討れて、河原へさつと引ば、平氏新手を入替て、此を先途と戰ふ。一條二條を東西へ、追つ返つ七八度が程ぞ揉合ひたる。源平兩陣諸共に、互に命を惜まねば、剛臆何れとは見えざりけれ共、源氏は大勢なれば、平氏遂に討負て、六波羅を指て引退く。東寺へは、赤松入道圓心、三千餘騎にて寄懸たり。樓門近く成ければ、信濃守範資、鐙踏張左右を顧て、誰かある、あの木戶逆茂木引破て捨よと下知しければ、宇野、柏原、佐用、眞島の早雄の若者共三百餘騎、馬を乘捨て走寄り、城の構を見渡せば、西は羅城門の礎より、東は八條河原邊迄、五六八九寸の琵琶の甲、安郡なんどを鏁貫て、したゝかに塀を塗、前には亂杙逆茂木を引懸て、廣さ三丈餘に堀をほり、流水をせき入たり。飛漬らんとすれば、水の深さの程を不ㇾ知、渡らんとすれば橋を引たり。如何せんと案煩ひたる處に、播磨國の住人妻

なじかは—なにしに

なれば、上に成て齋藤が頸を掻く。齋藤は心早者なりければ、鼻様に設樂を二刀刺す。何れも剛の者なりければ、死して後までも、互に引組たる手を不放、共に刀を突立て、同枕にこそ伏たりける。又源氏の陣より、紺の唐綾威の鎧に、鍬形打たる冑の緒を縮め、五尺餘の太刀を拔て肩に懸、敵の前半町許に馬を馳寄て、高聲に名乘けるは、八幡殿より以來、源氏代々の侍として、流石に名は隱なけれ共、時に取て名を被知ねば、然べき敵に逢難し。是は足利殿の御內に、大高二郎重成と云者也。先日度々の合戰に高名したりと聞ゆる陶山備中守河野對馬守はおはせぬか、出合給へ。打物して人に見物せさせんと云儘に、手綱かいくり、馬に白沫かませて控たり。陶山は東寺の軍強しとて、俄に八條へ向ひたりければ、此陣にはなし。河野對馬守計一陣に進で有けるが、大高に詞を被懸て、元來たまらぬ懸武者なれば、なじかは少もためらふべき。通治是に有と云儘に、大高に組んと相近附く。是を見て、河野對馬守が猶子に、七郎通遠とて、今年十六に成ける若武者、父を討せじとや思けん、眞前に馳塞て、大高に押竝てむずと組。大高、河野七郎が總角を爴で中に提げ、己れ程の小者と組で勝負はすまじきぞとて、差のけて鎧の笠符をみるに、其紋傍折敷に三文字を書て著たりけり。さては是も河野が子か甥

櫨匂の鎧—袖草摺の上方は黄赤の色絲にて下方漸次に黄、薄黄色の絲にて威したる鎧

筆とり—文筆に從事するもの

利仁將軍—藤原利仁とて醍醐天皇時代の人

靡き、時の聲天地を響かす。内野へは、陶山と河野とに宗徒の勇士二萬餘騎を副て被ㇾ向たれば、官軍も無二左右一不ㇾ懸入、敵も輒不ㇾ懸出、兩陣互に支て、唯矢軍に時をぞ移ける。爰に官軍の中より、櫨匂の鎧に、薄紫の母衣懸たる武者唯一騎、敵の前に馬を懸居て、高聲に名乘けるは、其身人數ならねば、名を知人よもあらじ。是は足利殿の御内に、設樂五郎左衞門尉と申者也。六波羅殿の御内に、我と思はん人あらば、懸合て手柄の程をも御覽ぜよと云儘に、三尺五寸の太刀を拔、冑の眞向に差かざし、誠に矢坪少く馬を立て控たり。其勢一騎當千と見えたれば、敵御方互に軍を止めて見物す。爰に六波羅の勢の中より、年の程五十計なる老武者の、黒絲の鎧に、五枚甲の緒を縮て、白栗毛の馬に靑總懸て乘たるが、馬をしづ〳〵と歩ませて、高聲に名乘けるは、其身雖ㇾ愚蒙、多年奉行の數に加はつて、末席を汚す家なれば、人は定て筆とりなんど侮て、あはぬ敵とぞ思ひ給ふ覽。雖ㇾ然、我等が先祖をいへば、利仁將軍の氏族として、武略累葉の家業也。今某十七代の末孫に、齋藤伊豫房玄基と云者也。今日の合戰敵御方の安否なれば、命を何の爲に可ㇾ惜。死殘る人あらば、我忠戰を語て子孫に留むべしと云捨て、互に馬を懸合せ、鎧の袖と袖とを引違へて、むずと組でどうと落つ。設樂は力勝り

の鏑一筋副て、寶殿に被レ納ければ、舎弟直義朝臣を始として、吉良、石塔、仁木、細川、今川、荒川、高、上杉、以下相順ふ人々、我も我もと上矢一づゝ獻りける間、其箭社壇に充滿て、塚の如くに積上たり。夜既に明ければ、前陣進で後陣を待。大將大江山の峠を打越給ける時、山鳩一番飛來つて、白旗の上に翩翻す。是八幡大菩薩の立翔て護らせ給ふ驗也。此鳩の飛行んずるに任て可レ向と被二下知一ければ、旗差馬を早めて、鳩の跡に附て行程に、此鳩閑に飛で、大内の舊跡神祇官の前なる樗木にぞ留りける。官軍此奇瑞に勇で、内野を指て馳向ける道すがら、敵五騎十騎旗をまき冑を脱で降參す。足利殿篠村を出給し時は、僅に二萬餘騎有しが、右近馬場を過給へば、其勢五萬餘騎に及べり。

○六波羅攻事

去程に、六波羅には、六萬餘騎を三手に分て、一手をば神祇官の前に控へさせて、足利殿を防がせらる。一手をば東寺へ差向て、赤松を防がせらる。一手をば伏見の上へ向て、千種殿の被レ寄竹田伏見を被レ支。巳刻の始より、大手搦手同時に軍始まつて、馬煙南北に

て前後を合する也

貫頂—一山の長、護良親王をさす

鳩嶺—男山

金鼠之咀—大宋高僧傳に營壘中有レ鼠金色咋二弓弩弦一皆絶と見ゆ、不空三藏の唐に於る奇瑞也

夫以八幡大菩薩者、聖代前烈之宗廟、源家中興之靈神也。本地内證之月、高懸二于十萬億土之天一、垂跡外融之光、明冠二於七千餘座之上一。觸レ縁雖レ分レ化、聿未レ享二非禮之奠一。垂レ慈雖レ利レ生、偏期レ宿二正直之頭一。偉哉爲二其德一矣。擧レ世所三以盡二誠也。爰承久以來、當棘累祖之家臣、平氏末裔之邊鄙、恣執二四海之權柄一、横振二九代猛威一。剰今遷二聖主於西海之浪一、困二貫頂於南山之雲一。惡逆之甚、前代未聞也。是爲二朝敵之最一。爲レ臣之道不レ致レ命乎。又爲二神敵之先一。爲レ天之理不レ下レ誅乎。高氏苟見二彼積惡一、未レ遑レ顧二匪躬一。將以二魚肉菲一、偏當二刀俎之利一。義卒勠レ力、張二旅於西南一之日、上將軍二鳩嶺一、下臣軍二篠村一、共在二于瑞籬之影一、同出二乎擁護之懐一。函蓋相應。誅戮何疑。所レ仰百王鎭護之神約也。懸二勇於石馬之汗一。所レ憑累代歸依之家運也。寄二奇於金鼠之咀一。神將與二義戰一耀二靈威一。德風加レ草而靡二敵於千里之外一、神光代レ劒而得二勝於一戰之中一。丹精有レ誠、玄鑒莫レ誤矣。敬白。

元弘三年五月七日　　源朝臣高氏敬白

とぞ讀上たりける。文章玉を綴て、詞明に理濃なれば、神も定て納受し御座す覽と、聞人皆信を凝し、士卒悉憑を懸奉けり。足利殿自筆を執て判を居給ひ、上差

引合ーあはせめ也、鎧は右の脇に

れ。

○高氏被レ籠二願書於篠村八幡宮一事

去程に、明れば五月七日の寅刻に、足利治部大輔高氏朝臣、二萬五千餘騎を率して、篠村宿を立給ふ。夜未深かりければ、閑に馬を打て、東西を見給ふ處に、篠村宿の南に當て、陰森たる故柳疎槐の下に、社壇有と覺て、燒荒たる燎の影のほのかなるに、禰宜が袖振鈴の音、幽に聞えて神さびたり。如何なる社とは知ねども、戰場に赴く首途なればとて、馬より下て、冑を脫て、叢祠の前に跪き、今日の合戰無事故、朝敵を退治する擁護の力を加へ給へと、祈誓を凝してぞ御座ける。時に賽しける巫に、此社如何なる神を崇奉りたるぞと問ひ給ければ、是は中比八幡を遷し進らせてより以來、篠村の新八幡と申候也とぞ答申ける。足利殿、さては當家尊崇の靈神にて御座しけり。機感最も相應せり。宜きに隨て一紙の願書を獻ばやと宣ひければ、疋壇妙玄、鎧の引合より矢立の硯を取出し、筆を控へて是を書。其詞曰、

敬白　祈願事

有三丁抽一丁―三人の壯丁あれば一人を抽き取りて兵とす

長安―京都のこと

昆明池―漢武帝が長安城の西に穿ちたる池の名

劒閣―蜀の境にある峯

洞庭―呉の境にある江水の淀みたる處

上には勇める氣色なれ共、心は下に仰天せり。彼雲南萬里の軍、戸に有二三丁一抽二一丁一といへり。況や又千劒破程の小城一を攻んとて、諸國の勢を盡して被レ向たれ共、其城未レ落先に、禍既に蕭墻の中より出て、義旗忽に長安の西に近附ぬ。防がんとするに勢少なく、救はんとするに道塞れり。あはれ兼てよりかゝるべしとだに知たらば、京中の勢をばさのみすかすまじかりし物をと、兩六波羅を始として、後悔すれ共甲斐ぞなき。兼兼六波羅に議しけるは、今度諸方の敵牒合て、大勢にて寄るなれば、平場の合戰計にては叶まじ。要害を構て、時々馬の足を休め、兵の機を扶て、敵近附ば懸出懸出可レ戰とて、六波羅の館を中に籠て、河原面七八町に堀を深く掘て、鴨川を懸入たれば、昆明池の春の水、西日を沈て瀹淪たるに不レ異。殘三方には芝築地を高く築て、櫓をかき竝べ、逆茂木を重く引たれば、鹽州受降城も角やと覺えておびたゞし。誠に城の構は、謀あるに似たれ共、智は長ぜるに非ず。劒閣雖レ嶮憑レ之者蹶、非レ所二以深レ根固一レ蔕也。洞庭雖レ浚負レ之者北、非レ所二以愛レ人治一レ國也とかや。今已に天下二つに分れて、安危此一擧に懸たる合戰なれば、粮を捨て舟を沈る謀をこそ致さるべきに、今日より軈て後足を蹈で、纔の小城に楯籠らんと、兼て心をつかはれける、武略の程こそ悲しけ

東洛渭川―洛東鴨川

御生所―明神の祭のこと

銀面、雲珠―日月、星辰

き所なれば、東洛渭川の行宮、さまで御心を可レ被レ令レ傷には非されども、此君御治天の後、天下遂に不レ穩、剩百寮忽に外都の塵に交りぬれば、是偏に帝徳の天に背きぬる故也と、罪一人に歸して、主上殊に歎被二思召一ければ、常に五更の天に至まで、夜のおとゞにも入せ給はず、元老智化の賢臣共を被レ召て、唯堯舜湯武の舊跡をのみ御尋有て、曾て怪力亂神の徒なる事をば不レ被二聞召一。卯月十六日は、中の申なりしか共、日吉の祭禮もなければ、國津御神もうらさびて、御贄の錦鱗徒に湖水の浪に潑剌たり。十七日は、中の酉なれども、賀茂の御生所もなければ、一條の大路人すみて、車を爭ふ所もなし。銀面空しく塵積て、雲珠光を失へり。祭は豐年にも不レ增、凶年にも不レ減とこそいへるに、開闢以來無二闕如一兩社の祭禮も、此時に始て絕ぬれば、神慮も如何と測難く、恐有べき事共也。さて官軍は五月七日京中に寄て、合戰可レ有と被レ定ければ、篠村、八幡、山崎の先陣の勢、宵より陣を取寄て、西は梅津桂里、南は竹田伏見に篝を燒、山陽山陰の兩道は、已に如レ此。又若狹路を經て、高山寺の勢共、鞍馬路高雄より寄るとも聞ゆ也。今は僅に東山道計こそ開たれども、山門猶野心を含める最中なれば、勢多をも指塞ぎぬらん。籠の中の鳥、網代の魚の如にて、可レ漏方もなければ、六波羅の兵共、

三台―三公

槐棘―公卿

三家―閑院、花山、中院

立、荻野、小島、和田、位田、本庄、平庄の者共計こそ、今更人の下風に可レ立に非ずとて、丹波より若狹へ打越て、北陸道より攻上らんとは企けれ。其外久下、長澤、志宇知、山内、葦田、余田、酒井、波賀野、小山、波々伯部、其外近國の者共、一人も不レ殘馳參りける間、篠村の勢無レ程集て、其數既に二萬三千餘騎に成にけり。六波羅には是を聞て、さては今度の合戰、天下の安否たるべし。若自然に討負る事あらば、主上上皇を取奉て、關東へ下向し、鎌倉に都を立て、重て大軍を擧、凶徒を可二追討一と、評定有て、去る三月より、北方の館を御所にしつらひ、院内を行幸成奉る。梶井二品親王は、天台座主にて座ば、縱轉變すとも、御身に於ては何の御怖畏か可レ有なれ共、當今の御連枝にて座ば、且は玉體に近附進せて、寶祚の長久をも祈申さんとにや、是も同く六波羅へ入せ給ふ。如之國母、皇后、女院、北政所、三台、九卿、槐棘、三家の臣、文武百司の官竝竹園門徒の大衆、北面以下諸家の侍、兒、女房達に至まで、我も我もと參集ける間、京中は忽にさびかへり、嵐の後の木葉の如く、己が樣々散行ば、白河はいつしか榮て、花一時の盛を成せり。是も幾程の夢ならん。移り變る世の有樣、今更被レ驚も理也。夫天子は四海を以て爲レ家といへり。其上六波羅とても、都近

骨肉の如く—親子兄弟の如く

名越尾張守は被レ討ぬ。是ぞ骨肉の如くなれば、さりとも貳心はおはせじと、水魚の思を被レ成つる足利殿さへ敵に成給ぬれば、憑む木の下に雨のたまらぬ心地して、心細さに就ても、今まで附纏ひたる兵共も、又さこそはあらめと、心の被レ置ぬ人もなし。

○足利殿著二御篠村一則國人馳參事

去程に、足利殿篠村に陣を取て、近國の勢を被レ催けるに、當國の住人に久下彌三郎時重と云者、二百五十騎にて最前に馳參る。其旗の紋笠符に、皆一番と云文字を書たりける。足利殿是を御覽じて、怪く覺しければ、高右衛門尉師直を被レ召て、久下の者共が、笠符に一番と云字を書たるは、元來の家の紋歟、又是へ一番に參りたりと云符かと尋給ければ、師直畏て、由緒ある紋にて候。彼が先祖、武藏國の住人久下二郎重光、賴朝大將殿、土肥の杉山にて御旗を被レ擧て候ける時、一番に馳參じて候けるを、大將殿御感候て、若我天下を保たば、一番に恩賞を可レ行と被レ仰て、自一番と云文字を書て、たび候けるを、頓て其家の紋と成て候と答申ければ、さては是が最初に參りたるこそ、當家の吉例なれとて、御賞翫殊に甚しかりけり。元來高山寺に楯籠りたる、足

芝居の長酒盛—芝生の上の長酒盛

配立—てくばり

かさへ打て廻さん—敵の行手へ馬を駈け廻さんとする意

可四郎とは、兩陣の手分に依て、搦手の勢の中に在けるが、中吉十郎、大江山の麓にて、道より上手に馬を打上て、奴可四郎を呼のけて云けるは、心得ぬ樣哉、大手の合戰は、火を散て今朝の辰刻より始りたれば、搦手は芝居の長酒盛にてさて休ぬ。結句名越殿被討給ぬと聞えぬれば、丹波路を指して馬を早め給ふは、此人如何樣野心を挾給歟と覺るぞ。さらんに於ては、我等何迄か可相從。いざや是より引返て、六波羅殿に此由を申んと云ければ、奴可四郎、いしくも宣ひたり。我も事の體怪しくは存ながら、是も又如何なる配立かある覽と、兎角案じける間に、早今日の合戰には迦れぬる事こそ安からね。但此人敵に成給ぬと見ながら、唯引返したらんは、餘に云甲斐なく覺ゆれば、いざ一矢射て歸らんと云儘に、中差取て打番、轟懸てかさへ打て廻さんとしけるを、中吉、如何なる事ぞ。御邊は物に狂ふか。我等僅に二三十騎にて、あの大勢に懸合て、犬死したらんは本意歟。嗚呼の高名はせぬに不如、唯無事故引返て、後の合戰の爲に命を全したらんこそ、忠義を存たる者也けりと、後までの名も留まらんずれと、再往制止しければ、げにもとや思けん、奴可四郎も中吉も、大江山より馬を引返して、六波羅へこそ打歸りけれ。彼等二人馳參て、事の由を申ければ、兩六波羅は、楯鋒とも被憑たりける

馳こうで―馳込みての音便

のはづれ、眉間の眞中に當て、腦を碎骨を破て、頸の骨のはづれへ、矢さき白く射出したりける間、さしもの猛將なれ共、此矢一筋に弱て、馬より眞倒にどうと落。範家胡籙を叩て、矢呼を成し、寄手の大將名越尾張守をば、範家が唯一矢に射殺したるぞ。續けや人々と呼りければ、引色に成つる官軍共、是に機を直し、三方より勝時を作て攻合す。尾張守の郞從七千餘騎、しどろに成て引けるが、或は大將を討せて何へか可レ歸とて、引返て討死するもあり、或は深田に馬を馳こうで、叶はで自害するもあり。されば狐河の端より、鳥羽の今在家まで、其道五十餘町が間には、死人、尺地もなく伏にけり。

○足利殿打ニ越大江山一事

追手の合戰は、今朝辰刻より始まつて、馬煙東西に靡き、時の聲天地を響かして、攻合けれ共、搦手の大將足利殿は、桂河の西の端に下り居て、酒盛してぞおはしける。角て數刻を經て後、大手の合戰に寄手打負て、大將已に被レ討ぬと告たりければ、足利殿、さらばいざや山を越んとて、各馬に打乘て、山崎の方を遙の餘所に見捨て、丹波路を西へ、篠村を指て馬を早められけり。爰に備前國の住人、中吉十郎と、攝津國の住人に奴

黄瓦毛―黄の勝つたる瓦毛、瓦毛は白く黄ばみたる色

ぬはれ伏―かくれ伏す

もなく著下して、白星の五枚冑の吹返に、日光月光の二天子を、金と銀とにて彫透して打たるを、猪頸に著成し、當家累代の重寶に、鬼丸と云ける金作の圓鞘の太刀に、三尺六寸の太刀を帶添、たかうすべ尾の矢三十六指たるを、筈高に負成し、黄瓦毛の馬の太く逞に、三本傘を金貝に磨たる鞍を置、厚總の鞦の燃立計なるを懸、朝日の影に耀して、光渡て見えたるが、動ば軍勢より先に進出て、傍を拂て被レ懸ければ、馬物具の體、軍立の樣、今日の大手の大將は是なんめりと、知ぬ敵は無りけり。されば敵も、自餘の葉武者共には目を不レ懸、此に開き合せ彼に攻合て、是一人を討んとしけれども、鎧よければ裏かゝする矢もなし。打物達者なれば、近附敵を切て落す。其勢參然たるに辟易して、官軍數萬の士卒、已に開き靡ぬとぞ見えたりける。爰に赤松の一族に、佐用左衛門三郎範家とて、强弓の矢繼早、野伏戰に心きゝて、卓宣公が祕せし所を、我物に得たる兵あり。態物具を解で、歩立の射手に成、畔を傳ひ、藪を潜て、とある畔の陰にぬはれ伏、大將に近附て、一矢ねらはんとぞ待たりける。尾張守は三方の敵追まくり、鬼丸に著たる血を笠符にて推拭ひ、扇開使うて、思ふ事もなげに控へたる處を、範家近々とねらひ寄て、引つめて丁と射る。其矢思ふ矢坪を不レ違、尾張守が冑の眞額

花曇子―花形紋を織りたる緞子

崎の合戰と、兼てより被レ定ければ、名越尾張守大手の大將として、七千六百餘騎鳥羽の作道より被レ向。足利治部大輔高氏は、搦手の大將として、五千餘騎西岡よりぞ被レ向ける。八幡山崎の官軍是を聞て、さらば難所に出合て、不慮に戰を決せしめよとて、千種頭中將忠顯朝臣、五百餘騎にて大渡の橋を打渡り、赤井河原に被レ控。結城九郎左衞門尉親光は、三百餘騎にて狐河の邊に向ふ。赤松入道圓心は、三千餘騎にて、淀、古河、久我畷の南北三箇所に陣を張る。是皆強敵を拉ぎ、天を廻し地を傾とする機を磨ぎ、勢を含と云ども、今上の東國勢一萬餘騎に對して可レ戰とは見えざりけり。足利殿は兼て内通の仔細有けれ共、若欺罔やし給ふ覽とて、坊門少將雅忠朝臣は、寺戸と西岡の野伏共五六百人駈催して、岩藏邊に被レ向。去程に、搦手の大將足利殿は、未明に京都を立給ぬと披露有ければ、大手の大將名越尾張守、さては早人に先を被レ懸ぬと不レ安思ひて、さしも深き久我畷の、馬の足もたゝぬ泥土の中へ、馬を打入、我先にとぞ進みける。尾張守は元より氣早の若武者なれば、今度の合戰人の耳目を驚す樣にして、名を揚んずる者をと、兼て有增の事なれば、其日の馬物具笠符に至まで、邊を耀かして被レ出立たり。花曇子の濃紅に染たる鎧直垂に、紫絲の鎧金物重く打たるを、透間

大行之路云云―白氏文集第三卷に出づ

兩六波羅は、度々の合戰に打勝ければ、西國の敵恐るゝに不レ足と欺きながら、宗徒の勇士と被レ憑たりける結城九郎左衞門尉は、敵に成て、山崎の勢に加りぬ、其外國々の勢共五騎十騎、或は轉漕に疲て、國々に歸り、或は時の運を謀て、敵に屬しける間、宮方は負れ共勢彌重り、武家は勝共兵日々に減ぜり。角ては如何可レ有と、世を危む人多かりける處に、足利名越の兩勢、又雲霞の如く上洛したりければ、いつしか人の心替て、今は何事か可レ有と、色を直して勇合へり。かゝる處に、足利殿は京著の翌日より、伯耆の船上へ潛に使を進せて、御方に可レ參由被レ申たりければ、君殊に叡感有て、諸國の官軍を相催し、朝敵を可二追罰一由の綸旨をば被二成下一ける。兩六波羅も名越尾張守も、足利殿にかゝる企有とは思も可レ寄事ならねば、日々に參會して、八幡山崎を可レ被レ攻内談評定、一々に心底を不レ殘被レ盡けるこそはかなけれ。大行之路能摧レ車、若比二人心一夷途。巫峽之水能覆レ舟、若比二人心一是安流也。人心好惡苦不レ常とは云ながら、足利殿は代々相州の恩を戴き徳を荷て、一家の繁昌恐くは天下の人肩を可レ竝も無りけり。其上赤橋前相摸守の縁に成て、公達數多出來給ぬれば、此人よも貳心はおはせじと、相摸入道混に被レ憑けるも理也。四月二十七日には、八幡山

を行はんとするものは少しの謹などは顧みずとの意、史記項羽本紀に出づ

被引―引出物とせらる

候て後、大義の御計略を可レ被レ運とこそ存候へと被レ申ければ、足利殿此道理に服して、御子息千壽王殿と、御臺赤橋相州の御妹とをば、鎌倉に留置奉て、一紙の起請文を書て、相摸入道の方へ被レ遣。相摸入道是に不審を散じて、喜悦の思を成し、高氏を招請有て、樣々賞翫共有しに、御先祖累代の白旌あり。是は八幡殿より、代々の家督に傳て被レ執重寶にて候けるを、故賴朝卿の後室二位の禪尼相傳して、當家に今まで所レ持也。希代の重寶と申ながら、於二他家一無二其詮一候歟。是を今度の餞に進じ候也。此旗をさゝせて、凶徒を急ぎ御退治候へとて、錦の袋に入ながら、自是をまゐらせらる。其外乘替の御馬にとて、飼たる馬に白鞍置て十匹、白幅輪の鎧十領、金作の太刀一副て被レ引たりけり。足利殿御兄弟、吉良、上杉、仁木、細川、今川、荒川、以下の御一族三十二人、高家の一類四十三人、都合其勢三千餘騎、元弘三年三月二十七日に、鎌倉を立、大手の大將と被レ定、名越尾張守高家に三日先立て、四月十六日に京都に著給ふ。

○山崎攻事附久我畷合戰事

水魚の思ー交情の極めて深きこと

大行は不顧細謹ー大事

にて、御心安かるべきにて候。幼稚の御子息をば、皆鎌倉に留置進せられ候べし。次に兩家の體を一にして、水魚の思を被ㇾ成候上、赤橋相州御緣に成候。彼此何の不審か候べきなれ共、諸人の疑を散ぜん爲にて候へば、乍ㇾ恐一紙の誓言を被二留置一候はん事、公私に附て可ㇾ然こそ存候へと被ㇾ仰たりければ、足利殿鬱賀彌深かりけれ共、憤を押へて氣色にも不ㇾ被ㇾ出、是より御返事を可ㇾ申とて、使者をば被ㇾ返てげり。其後舎弟兵部大輔殿を被二呼進一て、此事可ㇾ有二如何一と意見を被ㇾ問に、且く思案して被ㇾ申けるは、今此一大事を思召立事、全く御身の爲に非ず、唯天に代て無道を誅し、君の御爲に不義を退んと也。其上誓言は神も不ㇾ受とこそ申習はして候へ。設偽て起請の詞被ㇾ載候共、佛神などか忠烈の志を守らせ給はで候べき。就中御子息と御臺とは、鎌倉に留置進せられん事、大義の前の小事にて候へば、強に御心を可ㇾ被ㇾ煩に非ず。公達未御幼稚に候へば、自然の事もあらん時は、其爲に少々被二殘置一郎從共、何方へも抱拘へて、隱し奉り候なん。御臺の御事は、又赤橋殿とても御座候はん程は、何の御痛敷事か候べき。大行は不ㇾ顧二細謹一とこそ申候へ。此等程の小事に可ㇾ有二猶豫一あらず。兎も角も相摸入道の申ん儘に隨て、其不審を令ㇾ散、御上洛

牲を殺し云々—左傳の襄公十一年の傳に詳也

の御方に參て、六波羅を攻落して、家の安否を可定者をと、心中に被思立けるをば、人更に知事無りけり。相摸入道は可斯事とは不思寄、工藤左衛門尉を使にて、御上洛延引不被心得と、一日の中に兩度までこそ被攻けれ。足利殿は反逆の企已に心中に被思定てげれば、中々異議に不及、不日に上洛可仕とぞ被返答ける。則夜を日に繼で被打立けるに、御一族郎從は不及申、女性幼稚の君達迄も、不殘皆可有上洛と聞えければ、長崎入道圓喜怪み思て、急ぎ相摸入道の方に參て申けるは、誠にて候哉覽、足利殿こそ、御臺君達迄皆引具し進せて、御上洛候なれ。事の體怪く存候。斯樣の時は、御一門の疎ならぬ人にだに、御心被置候べし。況乎源家の貴族として、天下の權柄を捨給へる事年久ければ、思召立事もや候覽。異國より吾朝に至るまで、世の亂たる時は、覇王諸侯を集て、牲を殺し血を啜て、貳心無らん事を盟ふ。今の世の起請文是也。或は又其子を質に出して、野心の疑を散ず。木曾殿の御子清水冠者を大將殿の方へ被出き。斯樣の例を存候にも、如何樣足利殿の御子息と御臺とをば、鎌倉に被留申て、一紙の起請文を書せ可被進とこそ存候へと申ければ、相摸入道げにもとや被思けん、頓て使者を以て被申遣けるは、東國は未世閑

負薪の憂―病んで薪を負ふに堪へざる憂にて己の病を稱する謙辭

○足利殿御上洛事

先朝船上に御座有て、討手を被ニ差上一、京都を被レ攻由、六波羅の早馬頻に打て、事既に難儀に及由、關東に聞えければ、相摸入道大に驚て、さらば重て大勢を指上せて、半は京都を警固し、宗徒は船上を可レ攻と評定有て、名越尾張守を大將として、外樣の大名二十人を被レ催。其中に、足利治部大輔高氏は、所勞の事有て、起居未レ快けるを、又上洛の其數に入て、催促度々に及べり。足利殿此事に依て心中に被ニ憤思一けるは、我父の喪に居て三月を過ざれば、悲歎の涙未レ乾、又病氣身を侵して、負薪の憂未レ休處に、征罰の役に隨て、被ニ相催一事こそ遺恨なれ。時移り事變じて、貴賤雖レ易位、彼は北條四郎時政が末孫也、人臣に下て年久し。我は源家累葉の族也、王氏を出て不レ遠。此理を知らば、一度は君臣の義をも可レ存に、是までの沙汰に及事、偏に身の不肖による故也。所詮重て尚上洛の催促を加る程ならば、一家を盡して上洛し、先帝

悪の家には、必有㆓餘殃㆒とは、斯様の事をぞ可㆑申と、思はぬ人も無りけり。

口耳鼻舌身意の穢なきこと

總角の護法—佛法を護る總角の童子

輪藏—一切經を藏する庫

都率—都率天

四衆—比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷

給ひしかば、法華讀誦の窻の前には、松尾の明神座列して耳を傾け、眞言祕密の扉の中には、總角の護法手を束て奉仕し給ふ。かゝる有智高行の上人草創せられし砌なれば、五百餘歳の星霜を經て、末世澆漓の今に至るまで、智水流淸く、法燈光明也。三間四面の輪藏には、轉法輪の相を表して、七千餘卷の經論を納め奉られけり。奇樹怪石の池上には、都率の內院を移して、四十九院の樓閣を竝ぶ。十二の欄干珠玉天に擎け、五重の塔婆金銀月を引く。恰も極樂淨土の七寶莊嚴の有樣も、角やと覺る計也。又淨住寺と申は、戒法流布の地、律宗作業の砌也。釋尊御入滅の刻、金棺未ㇾ閉時、捷疾鬼と云鬼神、潛に雙林の下に近附て、御牙を一つ引缺て是をとる。四衆の佛弟子驚見て、是を留めんとし給ひけるに、片時が間に四萬由旬を飛越て、須彌の半四王天へ逃上る。韋駄天追攻奪取、是を得て、其後漢土の道宣律師に被ㇾ與。自ㇾ爾以來相承して、我朝に渡せしを、嵯峨天皇の御宇に、始て此寺に被ㇾ奉二安置一。偉哉、大聖世尊滅後二千三百餘年の已後、佛肉猶留て、廣く天下に流布する事普し。かゝる異瑞奇特の大伽藍を、無ㇾ咎して被ㇾ滅ければ、偏に武運の可ㇾ盡前表哉と、人皆唇を翻けるが、果して幾程も非ざるに、六波羅皆番馬にて亡び、一類悉く鎌倉にてうせける事こそ不思議なれ。積

六根清淨―

今はさてこそ手の者共も待かねたるらめと思ひければ、錦の御旗計を卷て、下人に持せ、急ぎ淨住寺の前へ走り下り、手の者打連て、馬を早めければ、追分宿の邊にて、荻野彦六にぞ追附ける。荻野は、丹波、丹後、出雲、伯耆へ落ける勢の、篠村稗田邊に打集まつて、三千餘騎有けるを相伴、路次の野伏を追拂て、丹波國高山寺城にぞ楯籠りける。

○谷堂炎上事

千種頭中將は西山の陣を落給ひぬと聞えしかば、翌日四月九日、京中の軍勢、谷堂、峯堂已下淨住寺、松尾、萬石大路、葉室、衣笠に亂入て、佛閣神殿を打破り、僧坊民屋を追捕し、財寶を悉く運取て後、在家に火を懸たれば、時節魔風烈く吹て、淨住寺、最福寺、葉室、衣笠、二尊院、總て堂舍三百餘箇所、在家五千餘宇、一時に灰燼と成て、佛像、神體、經論、聖教、忽に寂滅の煙と立上る。彼谷堂と申は、八幡殿の嫡男對馬守義親が嫡孫、延朗上人造立の靈地也。此上人、幼稚の昔より、武略累代の家を離れ、偏に寂寞無人の室を卜め給し後、戒定慧の三學を兼備して、六根清淨の功德を得

夕子刻―昨夜十二時

申置て、則兒島三郎高德は、三百餘騎にて、七條の橋より西にぞ陣を堅めたる。千種殿は、兒島に云恥しめられて、暫は峯堂におはしけるが、敵若夜討にや寄んずらんと云つる言に被驚て、彌臆病心や附給ひけん、夜半過る程に、宮を御馬に乘せ奉て、葉室の前を直違に、八幡を指てぞ被落ける。備後三郎かゝる事とは思もよらず、夜深方に峯堂を見遣ば、星の如に耀き見えつる篝火次第に數消て、所々に燒すさめり。是はあはれ大將の落給ひぬるやらんと怪て、事の樣を見ん爲に、葉室大路より峯堂へ上る處に、荻野彥六朝忠、淨住寺の前に行合て、大將已に夕子刻に、落させ給て候間、無力我等も丹波の方へと志て、罷下候也。いざさせ給へ、打連れ申さんと云ければ、備後三郎大に怒て、かゝる臆病の人を大將と憑みけるこそ越度なれ。さりながらも、直に事の樣を見ざらんは、後難も有ぬべし。早御通り候へ。高德は何樣峯堂へ上て、宮の御跡を奉見て、追附可申と云て、手の者共をば麓に留て、唯一人、落行勢の中を押分押分、峯堂へぞ上りける。大將のおはしつる本堂へ入て見れば、能遽て被落けりと覺えて、錦の御旗鎧直垂まで被捨たり。備後三郎腹を立て、あはれ此大將、如何なる堀がけへも落入て死給へかしと獨言して、しばらくは倚堂の緣に齒嚙をして立たりけるが、

色代して―挨拶をして

山と河野とに向て、今日已に日暮候ぬ。後日にこそ又見參に入らめと色代して、兩陣ともに引分て、各東西に去にけり。夕陽に及で軍散じければ、千種殿は本陣峯堂に歸て、御方の手負打死を被ㇾ註に、七千人に餘れり。其内に、宗と憑たる太田金持の一族以下數百人被ㇾ討畢。仍一方の侍大將とも可ㇾ成者とや被ㇾ思けん、兒島備後三郎高德を呼寄て、敗軍の士力疲て、再び難ㇾ戰。都近き陣は惡かりぬと覺れば、少し境を阻て陣を取、重て近國の勢を集て、又京都を攻ばやと思ふは、如何に計ふぞと宣へば、兒島三郎不ㇾ聞敢、軍の勝負は時の運による事にて候へば、負るも必しも不ㇾ恥、唯引まじき處を引かせ、可ㇾ懸所を不ㇾ懸を、大將の不覺とは申也。如何なれば、赤松入道は、僅に千餘騎の勢を以て、三箇度まで京都へ攻入、叶はねば引退て、遂に八幡山崎の陣をば去らで候ぞ。御勢縱過半被ㇾ討て候共、殘所の兵尙六波羅の勢よりは多かるべし。此御陣、後は深山にて、前は大河也。敵若寄來らば、好む所の取手なるべし。穴賢、此御陣を引んと思召す事、不ㇾ可ㇾ然候。但御方の疲れたる弊に乘て、敵夜討に寄る事もや候はんずらんと存候へば、高德は七條の橋爪に陣を取て、相待候べし。御心安からんずる兵共を、四五百騎か程梅津法輪の渡へ差向て、警固をさせられ候へと

副て、一條二條の口へ被レ向。此新手に懸合て、但馬の守護太田三郎左衞門被レ打にけり。丹波國の住人荻野彥六と足立三郎は、五百餘騎にて四條油小路まで攻入たりけるを、備前國の住人藥師寺八郎、中吉十郎、丹兒玉が勢共、七百餘騎相支て戰けるが、二條の手被レ破ぬと見えければ、荻野、足立も諸共に、御方の負して引返す。金持三郎は七百餘騎にて、七條東洞院まで攻入たりけるが、深手を負て引かねけるを、播磨國の住人肥塚が一族、三百餘騎が中に取籠て、出抜て虜てけり。丹波國神池の衆徒は、八十餘騎にて、五條西洞院まで攻入、御方の引をも知らで戰けるを、備中國の住人、庄三郎、眞壁四郎、三百餘騎にて取籠、一人も不レ餘討てけり。方々の寄手或は被レ討或被レ破て、皆桂河の邊まで引たれども、名和小次郎と兒島備後三郎とが向ひたりける一條の寄手は未レ引、懸つ返つ時移るまで戰たり。防は陶山と河野にて、攻るは名和と兒島也。兒島と河野とは一族にて、名和と陶山とは知人也。日比の詞をや恥たりけん、後日の難をや思けん、死ては尸を曝すとも、逃て名をば失じと、互に命を不レ惜、をめき叫で戰ひける。大將頭中將は、內野まで被レ引たりけるが、一條の手尙相支て、戰半也と聞えしかば、又神祇官の前へ引返して、使を立て、兒島と名和とを被二喚返一けり。彼等二人、陶

心にくから
ず—心おき
せられず
江南の橘云
云—周禮
に、橘踰淮
而化爲枳、
此地氣然と
あるによる

六の若宮、副將軍は千種頭中將忠顯朝臣と聞えければ、さては軍の成敗心にくからず。源は同流也といへども、江南の橘、江北に被移て枳と成習也。弓馬の道を守る武家の輩と、風月の才を事とする朝廷の臣と、戰を決せんに、武家不勝と云事不可有と、各勇み進で、七千餘騎大宮面に打寄て、寄手遲しとぞ待懸たる。去程に、忠顯朝臣、神祇官の前に控て、勢を分て、上は大舍人より、下は七條まで、小路ごとに千餘騎づゝ指向て、攻させらる。武士は要害を拵て、射手を面に立て、馬武者を後に置たれば、敵の疼む所を見て、懸出懸出追立けり。官軍は一重二重に新手を立たれば、一陣引けば二陣入替り、二陣打負れば三陣入替て、人馬に息を繼せ、煙塵天を捲て攻戰ふ。官軍も武士も諸共に、義に依て命を輕じ、名を惜て死を爭しかば、御方を助て進むは有れども、敵に過て退くは無りけり。斯てはいつ可有勝負とも見えざりける處に、但馬丹波の勢共の中より、兼て京中に忍て人を入置たりける間、此彼に火を懸たり。時節辻風烈く吹て、猛煙後に立覆ひければ、一陣に支へたる武士共、大宮面を引退て、尚京中に控へたり。六波羅是を聞て、弱からん方へ向けんとて、用意に殘し留たる佐々木判官時信、隅田、高橋、南部、下山、河野、陶山、富樫、小早河等に、五千餘騎を差

佛生日―釋迦の誕生日

舌を飜せり―驚き恐れたり

笠符―冑につけたる目じるしなれいへど轉じて單に目じるしの惣名となれり

仰ぎ奉て、軍勢催促の令旨を被二成下一けり。四月二日、宮、篠村を御立有て、西山の峯堂を御陣に被ㇾ召、相從ふ軍勢二十萬騎、谷堂、葉室、衣笠、萬石大路、松尾、桂里に居餘て、半は野宿に充滿たり。殿法印良忠は、八幡に陣をとる。赤松入道圓心は、山崎に屯を張れり。彼陣と千種殿の陣と、相去事僅に五十餘町が程なれば、方々牒じ合せてこそ京都へは可ㇾ被ㇾ寄かりしを、千種頭中將、我勢の多をや被ㇾ憑けん、又獨高名にせんとや被ㇾ思けん、潛に日を定て、四月八日の卯刻に、六波羅へぞ被ㇾ寄ける。あら不思議、今日は佛生日とて、心あるも心なきも、灌佛の水に心を澄し、供花燒香に經を飜して、捨惡修善を事とする習なるに、時日こそ多かるに、齋日にして合戰を始て、天魔波旬の道を學ばる條難二心得一と、人々舌を飜せり。さて敵御方の士卒源平互に交れり、無笠符ては、同士打も有ぬべしとて、白絹を一尺づゝ切て、風と云文字を書て、鎧の袖にぞ附させられける。是は孔子の言に、君子の徳は風也。小人の徳は草也。草に風を加ふる時は、不ㇾ偃と云事なしと云心なるべし。六波羅には、敵を西に待ける故に、三條より九條まで、大宮面に塀を塗り、櫓を搔て、小路々々に、兵を千騎二千騎控させて、魚鱗に進み、鶴翼に圍まん樣をぞ謀りける。寄手の大將は誰ぞと問に、前帝第

頭中將―藏人頭兼近衞中將

第六の宮―神明鏡に第四の宮とあるに從ふべき也

出してぞ逃たりける。赤松入道は、殊更今日の軍に、憑切たる一族の兵共も、所々にて八百餘騎被レ討ければ、氣疲力落はてゝ、八幡山崎へ又引返しけり。

○主上自令レ修ニ金輪法一給事　附千種殿京合戰事

京都數箇度の合戰に、官軍毎度打負て、八幡山崎の陣も既に小勢に成りぬと聞えければ、主上天下の安危如何有らんと、宸襟を被レ惱、船上の皇居に壇を被レ立、天子自金輪法を行はせ給ふ。其七箇日に當りける夜、三光天子光を竝て壇上に現じ給ければ、御願忽に成就しぬと、憑敷被ニ思召一ける。さらばやがて大將を差上せて、赤松入道に力を合せ、六波羅を可レ攻とて、六條少將忠顯朝臣を頭中將に成し、山陽山陰兩道の兵の大將として、京都へ被ニ指向一。其勢伯耆國を立しまで、僅に千餘騎と聞えしが、因幡、伯耆、出雲、美作、但馬、丹後、丹波、若狹の勢共馳加はりて、程なく二十萬七千餘騎に成にけり。又第六の若宮は、元弘の亂の始、武家に被レ囚させ給て、但馬國へ被レ流させ給ひたりしを、其國の守護太田三郎左衛門尉取立奉て、近國の勢を相催し、則丹波の篠村へ參會す。大將頭中將不レ斜悅て、即錦の御旗を立て、此宮を上將軍と

逸足を出して—いそぎ足をして

れ器量世に超たり。生年十二の春の比より、好で相撲を取けるに、日本六十餘州の中には、遂に片手にも懸る者無りけり。人は類を以て聚る習なれば、相伴ふ一族十七人、皆是尋常の人には越たり。されば、他人の手を不交して一陣に進み、六條坊門大宮まで、攻入たりけるが、東寺竹田より勝軍して歸りける六波羅勢三千餘騎に被取卷、十七人は被討て、孫三郎一人ぞ殘たりける。生て無甲斐命なれども、君の御大事是に限るまじ。一人なりとも生殘て、後の御用にこそ立めと獨ごとして、唯一騎西朱雀を指て引けるを、印具駿河守の勢、五十餘騎にて追懸たり。其中に、年の程二十計なる若武者、唯一騎馳寄せて、引て歸りける妻鹿孫三郎に組んと近附て、鎧の袖に取著ける處を、孫三郎是を物ともせず、長肘を指延て、鎧の總角を掴で中に提げ、馬の上三町計ぞ行たりける。此武者可然ものにてや有けん、あれ討すなとて、五十餘騎の兵、跡に附て追けるを、孫三郎尻目にはつたと睨で、敵も敵によるぞ。一騎なればとて、我に近附てあやまちすな。ほしからば、すは是取らせん。請取れと云て、左の手に提げたる鎧武者を、右の手に取渡して、えいと抛たりければ、跡なる馬武者六騎が上を投越して、深田の泥の中へ、見えぬ程こそ打こうだれ。是を見て、五十餘騎の者共、同時に馬を引返し、逸足を

とや思けん、朱雀の地藏堂より北に控へたる小早川二百騎にて、をめいて懸りけるに、田中が後なる勢ばつと引退ければ、田中兄弟頓宮父子、彼此四人の鎧の透間内冑に、各各矢二三十筋被射立て、太刀を逆につきて、皆立すくみにぞ死たりける。見人聞人、後までも惜まぬ者は無りけり。美作國の住人菅家の一族は、三百餘騎にて、四條猪熊まで攻入、武田兵庫助糟谷高橋が一千餘騎の勢と懸合て、時移るまで戰けるが、跡なる御方の引退きぬる體を見て、元來引かじとや思けん、又向ふ敵に後を見せじとや恥たりけん、有元菅四郎佐弘、同五郎佐光、同又三郎佐吉兄弟三騎、近附く敵に馳竝べ、引組て伏したり。佐弘は今朝の軍に膝口を被切て、力弱たりけるにや、武田七郎に押へられて、首を被搔、佐光は武田二郎が首を取る。佐吉は武田が郎等と刺違て、共に死にけり。敵二人も共に兄弟、御方二人も兄弟なれば、死殘ては何かせん、いざや共に勝負せんとて、佐光と武田七郎と、持たる首を兩方へ投捨て、又引組で刺違ふ。是を見て、福光彦二郎佐長、殖月彦五郎重佐、原田彦三郎佐秀、鷹取彦二郎種佐、同時に馬を引返し、むずと組ではどうと落、引組では刺違へ、二十七人の者共、一所にて皆討れければ、其陣軍は破にけり。播磨國の住人、妻鹿孫三郎長宗と申すは、薩摩氏長が末にて、力人に勝

犬笠懸—犬追物と笠懸

あいの鞭—間の鞭にて、弓射る間に打つ鞭の義なるべしと思へど、諸本あいとあれば詳ならず

を討たざらん。縦力こそ強くとも、身に矢の立ぬ事不可有。縦走る事早くとも、馬にはよも追つかじ。多年稽古の犬笠懸、今の用に不立ば、いつをか可期。いで〳〵不思議の一軍して人に見せんと云儘に、唯三騎打ぬけて四人の敵に相近く。田中藤九郎是を見て、其名はいまだ知らねども、猛くも思へる志かな、同ば御邊を生虜て、御方に成て、軍せさせんとあざ笑て、件の鐵棒を打振て、閑に歩み近附く。島津も馬を靜々と歩ませ寄て、矢比に成ければ、先安藝前司三人張に十二束三伏、且し堅めて丁と放つ。其矢あやまたず田中が右の頰前を、冑の菱縫の板へ懸て、箆中計射通たりける間、急所の痛手に弱りて、さしもの大力なれども目くれて、更に進み不得。舍弟彌九郎走寄り、其矢を拔て打捨、君の御敵は六波羅也。兄の敵は御邊也。餘すまじと云儘に、兄が鐵棒をおつ取振て懸れば、頓宮父子各五尺二寸の太刀を引側めて、小躍して續いたり。島津元より物馴たる馬上の達者、矢繼早の手きゝなれば、少も不騒、田中進で懸れば、あいの鞭を打て押もぢりに、はたと射。田中馬手へ廻ば、弓手を越て丁と射る。西國名譽の打物の上手と、北國無雙の馬上の達者と、追つ返つ懸違へ、人交もせず戰ひける。前代未聞の見物也。去程に、島津が矢種も盡て、打物に成らんとしけるを見て、斯ては叶はじ

大立擧の臑當—膝鎧鐵製の臑當
かなさい棒—鐵撮棒にて鐵の太き棒

非打て懸りけり。其勢決然として、恰樊噲項羽が忿れる形にも過たり。近附に隨て是を見れば、長七尺計なる男の、髭兩方へ生ひ分て、眦逆に裂たるが、鎖の上に鎧を重て著、大立擧の臑當に膝鎧懸て、龍頭の冑猪頸に著成し、五尺餘の太刀を帶き、八尺餘のかなさい棒の八角なるを、手本二尺計圓めて、誠に輕げに提げたり。數千騎控へたる六波羅勢、彼等四人が有樣を見て、未戰先に、三方へ分れて引退く。敵を招て、彼等四人、大音聲を揚て名乘けるは、備中國の住人頓宮又次郎入道、子息孫三郎、田中藤九郎盛兼、同舍弟彌九郎盛泰と云者也。我等父子兄弟、少年の昔より勅勘武敵の身と成りし間、山賊を業として一生を樂めり。然に、今幸に此亂出來して、忝くも萬乘の君の御方に參ず。然を、先度の合戰指たる軍もせで、御方の負したりし事、我等が恥と存ずる間、今日に於ては、縱御方負て引とも引まじ。敵強くとも其にもよるまじ。敵の中を破て通り、六波羅殿に直に對面申さんと存ずるなりと、廣言吐て、二王立にぞ立たりける。島津安藝前司是を聞て、子息二人手の者共に向て云けるは、日比聞及し西國一の大力とは是なり。彼等を討たん事、大勢にては叶まじ。御邊達は且く外に控へて、自餘の敵に可戰。我等父子三人相近附て、進づ退つ、且く惱したらんに、などか是

千變の謀—千變萬化の謀

八陣の法—方陣圓陣牝陣牡陣衡方陣車輪陣罘罝陣雁行陣の法なり

手多ければ、小路々々を塞ぎ、鏃を調て散々に射る。六波羅勢は歩立は少して、騎馬の兵多ければ、懸違懸違、敵を中に取籠めんとす。孫氏が千變の謀、呉氏が八陣の法、互に知たる道なれば、共に不レ被レ破不レ被レ圍、唯命を際の戰にて、更に勝負も無りけり。終日戰て、已に夕陽に及びける時、河野と陶山と一手に成て、三百餘騎轡を竝べて懸たりけるに、木幡の寄手足をもためず被二懸立一て、宇治路を指て引退く。陶山河野逃る敵をば打捨て、竹田河原を直違に、鳥羽殿の北の門を打廻り、作道へ懸出て、東寺の前なる寄手を取籠んとす。作道十八町に充滿したる寄手是を見て、叶はじとや思けん、羅城門の西を横切に、寺戸を指て引返す。小早川と島津安藝前司とは、東寺の敵に向て、追つ返つ戰けるが、己が陣の敵を、河野陶山に被レ拂て、御方の負をしつる事よと、無念に思ひければ、西の七條へ寄せつる敵に逢て、花やかなる一軍せんと云て、西八條を上りに、西朱雀へぞ出たりける。此に赤松入道究竟の兵を勝て、三千餘騎にて控へたりければ、無二左右一可レ破様も無りけり。されども島津小早川が横合に懸るを見て、戰ひ疲れたる六波羅勢力を得て、三方より攻合せける間、赤松が勢忽に開靡て、三所に控へたり。爰に赤松が勢の中より、兵四人進み出で、數千騎控へたる敵の中へ、無二是

溢れ者―ならずもの

其一方には殿法印良忠、中院定平を兩大將として、伊東、松田、頓宮、富田判官が一黨、竝眞木葛葉の溢れ者共を加へて、其勢都合三千餘騎、伏見木幡に火を懸て、鳥羽竹田より押寄する。又一方には赤松入道圓心を始として、宇野、柏原、佐用、眞島、得平、衣笠、菅家の一黨、都合其勢三千五百餘騎、河島桂の里に火を懸て、西の七條よりぞ寄たりける。兩六波羅は、度々の合戰に打勝て、兵皆氣を擧ける上、其勢を算ふるに、三萬騎に餘りける間、敵已に近附ぬと告けれ共、仰天の氣色もなし。六條河原に勢汰して、閑に手分をぞせられける。山門今は武家に志を通ずといへども、又如何なる野心をか存ずらん、非可油斷とて、佐々木判官時信、常陸前司時朝、長井縫殿秀正に、三千餘騎を差副て、糺河原へ被向。去月十二日の合戰も、其方より勝たりしかば吉例也とて、河野と陶山とに五千騎を相副て、法性寺大路へ被差向。富樫、林が一族、島津、小早川が兩勢に、國々の兵六千餘騎を相副て、八條東寺邊へ被指向。厚東加賀守、加治源太左衛門尉、隅田、高橋、糟谷、土屋、小笠原に、七千餘騎を相副て、西七條口へ被向。自餘の兵千餘騎をば、新手の爲に殘して、未六波羅に竝居たり。其日の巳刻より、三方ながら同時に軍始て、入替入替攻戰ふ。寄手は騎馬の兵少して、歩立の射

押裸脱、腹十文字に掻切て、同じ枕にこそ伏たりけれ。是を見る武士共、あはれ日本一の剛の者共哉と、惜まぬ人も無りけり。前陣の軍破れて引返しければ、後陣の大勢は、軍場をだに不レ見して、道より山門へ引返す。唯豪鑒豪仙二人が振舞にこそ、山門の名をば揚たりけれ。

○四月三日合戰事 附妻鹿孫三郎勇力事

去月十二日赤松合戰無レ利して引退し後は、武家常に勝に乘て、敵を討事數千人也といへども、四海未レ靜、剩山門又武家に敵して、大嶽に篝火を燒き、坂本に勢を集めて、尚も六波羅へ可レ寄と聞えければ、衆徒の心を取ん爲に、武家より、大庄十三箇所山門へ寄進す。其外宗徒の衆徒に、便宜の地を一二箇所充、祈禱の爲とて恩賞を被レ行ける。さてこそ山門の衆議心々に成て、武家に心を寄する衆徒も多く出來にければ、八幡山崎の官軍は、先度京都の合戰に、或被レ討、或創を蒙る者多かりければ、其勢大半減じて、今は僅に一萬騎に足らざりけり。去ども武家の軍立、京都の形勢、恐るゝに不レ足と見透してげれば、七千餘騎を二手に分て、四月三日の卯刻に、又京へ押寄せたり。

三塔―比叡の三塔、東塔、西塔、横川

けん。法勝寺へは不入得、西門の前を北へ向て、眞如堂の前、神樂岡の後を、二に分れて、唯山上へとのみ引返しける。爰に東塔の南谷善智房の同宿に、豪鑒豪仙とて、三塔名譽の悪僧あり。御方の大勢に被引立て、不レ心北白河を指て引けるが、豪鑒豪仙を呼留て、軍の習として、勝時もあり負時もあり、時の運による事なれば、恥にて不レ恥。雖レ然、今日の合戰の體、山門の恥辱、天下の嘲哢たるべし。いざや御邊、相共に返し合て討死し、二人が命を捨て、三塔の恥を雪めんと云ければ、豪仙云にや及ぶ、最庶幾する所也と云て、二人蹈留て、法勝寺の北の門に立並び、大音聲を揚て名乘けるは、是程に引立たる大勢の中より、唯二人返し合するを以て、三塔一の剛者とは可レ知。其名をば定て聞及ぬらん、東塔の南谷善智房の同宿に豪鑒豪仙とて、一山に名を知られたる者共也。我と思はん武士共、よれや、打物して、自餘の輩に見物せさせんと云儘に、四尺餘の大長刀水車に廻して、跳懸々々、火を散してぞ切たりける。是を打取んと相近附ける武士共、多く馬の足を被レ薙、冑の鉢を被レ破て被レ討にけり。彼等二人此に半時計支へて戰けれ共、續く大衆一人もなし。敵雨の降る如くに射ける矢に、二人ながら十餘箇所創を蒙りければ、今は所存是までぞ。いざや冥途まで同道せんと契て、鎧脱捨

大様ながらも—おほまかなるものろ

已に法勝寺眞如堂に著ば、後陣は未山上坂本に充満たり。甲冑に映ぜる朝日は、電光の激するに不異、旌旗を靡かす山風は、龍蛇の動くに相似たり。山上と洛中との勢の多少を見合するに、武家の勢は、十にして其一にも不及。げにも此勢にては輒くこそと、六波羅を直下ける山法師の心の程を思へば、大様ながらも理也。去程に前陣の大衆且く法勝寺に著て、後陣の勢を待ける處へ、六波羅勢七千餘騎、三方より押寄て、鬨をどうと作る。大衆鬨の聲に驚て、物具太刀よ長刀よとひしめいて、取物も不取敢、僅に千人計にて、法勝寺の西門の前に出合、近附く敵に拔て懸る。武士は兼てより巧みたる事なれば、敵の懸る時は馬を引返て、ばつと引き、敵留れば開合せて、後へ懸廻る。如此、六七度が程懸惱ましける間、山徒は皆歩立の上、重鎧に肩を被推て、次第に疲たる體にぞ見えける。武士は是に利を得て、射手を撰て散々に射る。大衆是に射立られて、平場の合戰叶はじとや思けん、又法勝寺の中へ引籠らんとしける處を、丹波國の住人佐治孫五郎と云ける兵、西門の前に馬を横たへ、其比會て無りし五尺三寸の太刀を以て、敵三人不懸胴切て、太刀の少仰たるを、門の扉に當て推直し、猶も敵を相待て、西頭に馬をぞ控たる。山徒是を見て、其勢にや辟易しけん、又法勝寺にも敵有とや思

三千—三千衆徒

聞落—聞きたるばかりにて北ぐる義

矣と、僉議しければ、三千一同に尤々と同じて、院々谷々へ歸り、則武家追討の企の外無他事。山門、已に來二十八日六波羅へ可寄と定ければ、末寺末社の輩は不及申、所縁に隨て、近國の兵馳集る事雲霞の如く也。二十七日大宮の前にて、著到を附けるに、十萬六千餘騎と註せり。大衆の習、大早無極所存なれば、此勢京へ寄たらんに、六波羅よも一たまりもたまらじ。聞落にぞせんずらんと思侮て、八幡山崎の御方にも不牒合して、二十八日の卯刻に、法勝寺にて勢汰可有と觸たりければ、物具をもせず、兵糧をも未つかはで、或今路より向、或は西坂よりぞおり下る。兩六波羅是を聞て、思に、山徒縱雖大勢、騎馬の兵一人も不可有。此方には馬上の射手を汰へて、三條河原に待受させて、懸開懸合、弓手妻手に著て、追物射に射たらんずるに、山徒心は雖武、歩立に力疲れ、重鎧に肩を被引、片時が間に疲るべし。是以小碎大、以弱拉剛行也とて、七千餘騎を七手に分て、三條河原の東西に、陣を取てぞ待懸たる。大衆斯るべしとは思もよらず、我前に京へ入て、よからんずる宿をも取、財寶をも管領せんと志て、宿札共を、面々に二三十づつ持せて、先法勝寺へぞ集りける。其勢を見渡せば、今路、西坂、古塔下、八瀬、藪里、下松、赤山口に支て、前陣

七社—吉日の七社
忍辱衣—袈裟
秋霜—劍
非三非一之深理—山王の一字、三諦卽是の理あるをいふ

落入て、馬物具皆取所もなく膩たれば、白晝に京中を打通るに、見物しける人每に、哀さりとも陶山河野を被レ向たらば、是程にきたなき負はせじ物をと、笑はぬ人もなかりけり。去ば京勢此度打負て、向で京に被レ殘たる河野と陶山が手柄の程、いとゞ名高く成にけり。

○山徒寄二京都一事

京都に合戰始りて、官軍動すれば利を失ふ由、其聞え有しかば、大塔宮より牒使を被レ立て、山門の衆徒をぞ被レ語ける。是に依二三月二十六日一、一山の衆徒大講堂の庭に會合して、夫吾山者爲二七社應化之靈地一、作二百王鎭護之藩籬一。高祖大師占二開基之始一、止觀窗前雖レ弄二天眞獨朗之夜月一。慈慧僧正爲二貫頂一之後、忍辱衣上、忽帶二魔障降伏之秋霜一。爾來妖孼見レ天、則振二法威一而攘レ之。逆暴亂レ國、則借二神力一而退レ之。肆神號二山王一。須有二非三非一之深理一矣。山言二比叡一。所二以佛法王法之相比一焉。而今四海方亂一人不レ安。武臣積惡之餘、果天將レ下レ誅。其先兆非レ無二賢愚一。共所二世知一也。王事毋レ盬。釋門假使雖レ爲二出塵之徒一。此時奈何無レ盡二報國之忠一。早翻二武家合體之前非一。宜レ專二朝廷扶危之忠膽一

縄手—畷也田の間の路をいふ

野の前よりぞ寄たりける。赤松是を聞て、三千餘騎を三手に分つ。一手には足輕の射手を勝て、五百餘人小鹽山へ廻す。一手をば野伏に騎馬の兵を少々交て、千餘人狐河の邊に控へさす。一手をば混すら打物の衆八百餘騎を汰て、向日明神の後なる松原の陰に隱置く。六波羅勢、敵此まで可出合とは不思寄、そゞろに深入して、寺戸の在家に火を懸て、先懸既に向日明神の前を打過ける處に、善峯岩藏の上より、足輕の射手一枚楯手々に提て、麓におり下て散々に射る。寄手の兵共是を見て、馬の鼻を並て懸散さんとすれば、山嶮して不上得。廣みにおびき出して討んとすれども、敵是を心得て不懸。よしや人々、はかぐ〵しからぬ野伏共に目を懸て、骨を折ては何かせん。此をば打捨て、山崎へ打通れと議して、西岡を南へ打過る處に、坊城左衛門尉五十餘騎にて、思もよらぬ向日明神の小松原より懸出て、大勢の中へ切て入。敵を小勢と侮て、眞中に取籠て、餘さじと戰ふ處に、田中、小寺、八木、神澤、此彼より百騎二百騎、思思に懸出て、魚鱗に進み、鶴翼に圍んとす。是を見て、狐河に控へたる勢五百餘騎、六波羅勢の跡を切らんと、縄手を傳ひ、道を要て打廻るを見て、京勢叶じとや思けん、捨鞭を打て引返す。片時の戰也ければ、京勢多く被打たる事は無けれ共、堀溝深田に

神寶を獻て、祈禱を被レ致しか共、公家の政道不レ正、武家の積惡禍を招きしかば、祈共神不レ享二非禮一、語へども人不レ耽二利欲一にや、唯日を逐て、國々より急を告る事、隙無りけり。去三月十二日の合戰に、赤松打負て、山崎を指して落行しを、軈て追懸て討手をだに下したらば、敵足をたむまじかりしを、今は何事か可レ有とて、被二油斷一しに依て、敗軍の兵此彼より馳集て、無レ程大勢に成ければ、赤松、中院中將貞能を取立て、聖護院の宮と號し、山崎八幡に陣を取、河尻を差塞ぎ、西國往反の道を打止む。依レ之洛中の商賣止て、士卒皆轉漕の助に苦めり。兩六波羅聞レ之、赤松一人に洛中を被レ惱て、今士卒を苦る事こそ安からね。去十二日の合戰の體を見るに、敵さまで大勢にても無りける物を、無二云甲斐一聞懼して、敵を邊境の間に閣こそ、武家後代の耻辱なれ。所詮於二今度一は、官軍遮て敵陣に押寄せ、八幡山崎の兩陣を攻落し、賊徒を河に追ばめ、其首を取て、六條河原に可レ曝と被二下知一ければ、四十八箇所の篝、竝在京人、其勢五千餘騎、五條河原に勢汰して、三月十五日の卯刻に、山崎へとぞ向ひける。此の勢始は二手に分たりけるを、久我繩手は、路細く深田なれば、馬の懸引も自在なるまじとて、八條より一手に成、桂河を渡り、河島の南を經て、物集女大原

弓矢の面目―弓矢取るものゝ名譽

扆―天子の正服

れ弓矢の面目やと、或は羨み、或は猜で、其の名天下に被レ知たり。軍散じて翌日に、隅田高橋京中を馳廻て、此彼の堀溝に倒れ居たる手負死人の首共を取集て、六條河原に懸並たるに、其數八百七十三あり。敵是まで多く被レ討されども、軍もせぬ六波羅勢ども、我高名したりと云んとて、洛中邊土の在家人なんどの首を假首にして、樣々名を書附て出たる首共也。其の中に、赤松入道圓心と札を附たる首五あり。何も見知たる人無ればば、同じやうにぞ懸たりける。京童部是を見て、首を借たる人、利子を附て可レ返。赤松入道分身して、敵の盡ぬ相なるべしと、口々にこそ笑ひけれ。

○禁裏仙洞御修法事　附山崎合戰事

此比四海大に亂て、兵火天を掠めり。聖主扆を負て、春秋無二安時一、武臣矛を建て、旌旗無二閑日一。是以二法威一逆臣を不レ鎭は、靜謐其期不レ可レ有とて、諸寺諸社に課て、大法祕法をぞ被レ修ける。梶井宮は、聖主の連枝、山門の座主にて御座しければ、禁裏に壇を立て、佛眼の法を行せ給ふ。裏辻慈什僧正は、仙洞にて藥師の法を行はる。武家又山門南都園城寺の衆徒の心を取、靈鑑の加護を仰がん爲に、所々の庄園を寄進し、種々の

寮の御馬—馬寮に飼ひたる馬

へたり。則祐是を見附て、諸鐙を合て馳入ければ、追懸つる八騎の敵共、善き敵と見つる物を、遂に打漏しぬる事の不レ安さよと云聲聞て、馬の鼻を引返しける。暫く有れば、七條河原西朱雀にて被二懸散一たる兵共、此彼より馳集て、又千餘騎に成にけり。赤松其兵を東西の小路より進ませ、七條邊にて、又時の聲を揚たりければ、六波羅勢七千餘騎、六條院を後に當て、追つ返つ二時計ぞ攻合たる。斯ては軍の勝負いつ有べしとも覺えざりける處に、河野と陶山とが勢五百餘騎、大宮を下りに打て出、後を裹んと廻ける勢に、後陣を被レ破て、寄手若干討れにければ、赤松わづかの勢に成て、山崎を指て引返けり。河野陶山勝に乘て、作道の邊まで追懸けるが、赤松動すれば取て返さんとする勢を見て、軍は是までぞ、さのみ長追なせそとて、鳥羽殿の前より引返し、虜二十餘人、首七十三取て、鋒に貫て、朱に成て六波羅へ馳參る。主上は御簾を捲せて叡覽あり。兩六波羅は敷皮に坐して是を檢知す。兩人の振舞いつもの事なれ共、殊更今夜の合戰に、旁手を下し命を捨給はずば、叶まじとこそ見えて候つれと、再三感じて被レ賞翫。其夜軈て臨時の宣下有て、河野九郎をば對馬守に被レ成て、御劍を被レ下、陶山二郎をば備中守に被レ成て、寮の御馬を被レ下ければ、是を見聞武士、あは

瀉―瀬の淺き處

羅の館へ懸入んとぞ待たりける。東寺より寄つる御方、早打負て引返しけりと覺て、東西南北に敵より外はなし。さらば且く敵に紛てや御方をまつと、六騎の人々皆笠符をかなぐり捨て、一所に控へたる處に、隅田高橋打廻て、何樣赤松が勢共、尙御方に紛て、此中に在と覺るぞ。河を渡しつる敵なれば、馬物具のぬれぬは不レ可レ有。其を驗にして、組討に打てと呼りける間、貞範も則祐も、中々敵に紛れんとせば惡かりぬべしとて、兄弟郎等僅六騎、轡を竝べ、わつと呼て、敵二千騎が中へ懸入り、此に名乘彼に紛て相戰けり。敵是程に小勢なるべしとは可二思寄一事ならねば、東西南北に入亂て、同士討をする事數刻也。大敵を謀るに勢久からざれば、郎等四騎皆所々にて被レ討ぬ。筑前守は被二押隔一ぬ。則祐唯一騎に成て、七條を西へ、大宮を下りに、落行ける所に、印具尾張守が郎等八騎追懸て、敵ながらも優く覺え候者哉。誰人にておはするぞ。御名乘候へと云ければ、則祐馬を閑に打て、自不肖に候へば、名乘申とも不レ可レ有二御存知一候。唯首を取て人に被レ見候へと云儘に、敵近附ば返合、敵引ば馬を歩せ、廿餘町が間、敵八騎と打連て、心閑にぞ落行ける。西八條の寺の前を南へ打出ければ、信濃守貞範三百餘騎、羅城門の前なる水の瀉に、馬の足を冷して、敗軍の兵を集んと、旗打立て控

四武の衝陣―四方の武者同時に疾く敵陣に衝きかゝる兵法

には目をも不レ懸、西七條邊の合戰何と有らん無二心元一とて、又七條河原を直違に、西へ打て七條大宮に控へ、朱雀の方を見遣ければ、隅田高橋が三千餘騎、高倉左衞門佐、小寺衣笠が二千餘騎に被二懸立一て、馬の足をぞ立兼たる。河野是を見て、斯ては御方被レ討ぬと覺るぞ。いざや打て懸らんと云けるを、陶山暫と制しけり。其故は、此陣の軍未雌雄決ざる前に、力を合て御方を助たりとも、隅田高橋が口の惡さは、我高名にぞ云はんずらん。暫く置て事の樣を御覽ぜよ。敵縱勝に乘とも、何程の事か可レ有とて、見物してぞ居たりける。去程に、隅田高橋が大勢、小寺衣笠が小勢に被二追立一、返さんとすれ共不レ叶、朱雀を上に、内野を指て引もあり、七條を東へ向て逃るもあり、馬に離たる者は心ならず返合て死るもあり。陶山是を見て、餘にながめ居て、御方の弱爲出したらんも由なし。いざや今は懸合せんといへば、河野仔細にや及ぶと云儘に、兩勢を一手に成て、大勢の中へ懸入り、時移るまでぞ戰ひたる。四武の衝陣堅を碎て、百戰の勇力變に應ぜしかば、寄手又此陣の軍にも打負て、寺戸を西に引返しけり。筑前守貞範、律師則祐兄弟は、最初に桂河を渡しつる時の合戰に、逃る敵を追立て、跡に續く御方の無をも不レ知、唯主從六騎にて竹田を上に、法性寺大路へ懸通、六條河原へ打出て、六波

追物射に—犬追物を射る體に

此彼に走散て、火を懸、鬨の聲を作る計にて、同じ陣に控へたり。兩六波羅是を見て、如何樣敵は小勢也と覺るぞ。向て追散せとて、隅田高橋に三千餘騎を相副て、八條口へ被差向。河野九郎左衞門尉、陶山次郎に二千餘騎をさし副て、蓮華王院へ被向けり。陶山河野に向て云けるは、何ともなき取集め勢に交て軍をせば、憖に足纏に成て、懸引も自在なるまじ。いざや六波羅殿より被差副たる勢をば、八條河原に控へさせて、鬨の聲を擧けさせ、我等は手勢を引勝て、蓮華王院の東より敵の中へ懸入り、蜘手十文字に懸破り、弓手妻手に相附て、追物射に射てくれ候はんと云ければ、河野尤可然と同じて、外樣の勢二千餘騎をば、鹽小路の道場の前へ差遣し、河野が勢三百餘騎、陶山が勢百五十餘騎は引分て、蓮華王院の東へぞ廻りける。合圖の程にも成ければ、八條河原の勢、鬨聲を揚たるに、敵是に立合せんと、馬を西頭に立て相待處に、陶山河野四百餘騎、思も寄らぬ後より、鬨を咄と作て、大勢の中へ懸入、東西南北に懸破て、敵を一所に不打寄、追立々々攻戰。河野と陶山と、一所に合ては兩所に分れ、兩所に分ては又一所に合、七八度が程ぞ揉だりける。長途に疲たる歩立の武者、駿馬の兵に被懸悩て、討るゝ者其數を不知。手負を捨て、道を要て、散々に成て引返す。陶山河野逃る敵

南殿—紫宸殿
上童—殿上に奉仕する元服前の童子

○持明院殿行二幸六波羅一事

日野中納言資名、同左大辨宰相資明二人同車して、內裏へ參り給たれば、四門徒に開、警固の武士は一人もなし。主上南殿に出御成て、誰か候と御尋あれども、衞府諸司の官、蘭臺金馬の司も、何地へか行たりけん、勾當の內侍、上童二人より外は、御前に候する者無りけり。資名資明二人御前に參じて、官軍戰弱くして、逆徒不レ期洛中に襲來候。斯樣にて御座候はゞ、賊徒差違て、御所中へも亂入仕候ぬと覺え候。急ぎ三種の神器を先立て、六波羅へ行幸成候へと被レ申ければ、主上軈て瑤輿に被レ召、二條河原より六波羅へ臨幸成る。其後堀河大納言、三條源大納言、鷲尾中納言、坊城宰相以下、月卿雲客二十餘人、路次に參著して供奉し奉けり。是を聞召及で、院法皇、東宮、皇后、梶井の二品親王まで、皆六波羅へと御幸成間、供奉の卿相雲客、軍勢の中に交て、警蹕聲頻也ければ、是さへ六波羅の仰天一方ならず、俄に六波羅の北方をあけて、仙院皇居となす。事の體騷かりし有樣也。軈て兩六波羅は、七條河原に打立て、近附敵を相まつ。此大勢を見て、敵もさすがにあぐんでや思ひけん、唯

大三災—火水風の三災
劫火—世界壞劫の時に起る猛火

の端、しどろに成て、色めき渡る所を見て、前懸の御方打すな續けやとて、信濃守範資、筑前守貞範眞前に進めば、佐用上月の兵三千餘騎、一度に颯と打入て、馬筏に流をせきあけたれば、逆水岸に餘り、流れ十方に分て、元の淵瀨は、中々に陸地を行が如く也。三千餘騎の兵共、向の岸に打上り、死を一擧の中に輕せんと進み勇める勢を見て、六波羅勢叶はじとや思けん、未戰前に、楯を捨て旗を引て、作道を北へ東寺を指て引も有、竹田河原を上りに、法性寺大路へ落るもあり。其道二三十町が間には、捨たる物具地に滿て、馬蹄の塵に埋沒す。去程に、西七條の手、高倉少將の子息左衞門佐、小寺衣笠の兵共、早京中へ攻入たりと見えて、大宮、猪熊、堀川、油小路の邊、五十餘箇所に火をかけたり。又七條八條九條の間にも、戰有と覺えて、汗馬東西に馳違、時の聲天地を響せり。唯大三災一時に起て、世界悉劫火の爲に燒失るかと疑はる。京中の合戰は、夜半計の事なれば、目さすとも知らぬ暗き夜に、鬨聲此彼に聞えて、勢の多少も、軍立の樣も見分ざれば、何へ何と向て軍を可爲とも不覺。京中の勢は、先唯六條河原に馳集て、あきれたる體にて控へたり。

水脈水深を知る爲に立つるしるし

瀬枕―河瀬の浪高くなりたる處

案内も知ずして渡さば、可レ被レ渡歟。縦馬強くして渡る事を得たりとも、あの大勢の中へ、唯一騎懸入たらんは、不レ被レ討と云事不レ可レ有。天下の安危、必しも此一戰に不レ可レ限。暫く命を全して、君の御代を待んと思ふ心のなきかと、再三强て止ければ、則祐馬を立直し、拔たる太刀を收て申けるは、御方と敵と可二對揚一程の勢にてだに候はば、我と手を不レ碎とも、運を合戰の勝負に任て見候べきを、御方は僅に三千餘騎、敵は是に百倍せり。急に戰を不レ決して、敵に無勢の程を被二見透一なば、雖レ戰不レ可レ有レ利。されば大公が兵道の詞に、兵勝之術、密察二敵人之機一而速乘二其利一疾撃二其不意一と云へり。是以二吾困兵一敗二敵强陣一謀にて候はずやと云捨て、駿馬に鞭を進め、漲て流るゝ瀬枕に、逆波を立てぞ游がせける。見レ之飽間九郎左衞門尉、伊東大輔、河原林二郎、木寺相摸、宇野能登守國頼、五騎續いて颯と打入たり。宇野と伊東は、馬强して一文字に流を截て渡る。木寺相摸は、逆卷水に馬を被レ放て、冑の天邊計僅に浮で見えけるが、波の上をや游ぎけん、水底をや潛りけん、人より前に渡著て、河の向の流洲に、鎧の水灑てぞ立たりける。彼等五人が振舞を見て、尋常の者ならずとや思けん、六波羅の二萬餘騎、人馬東西に辟易して、敢て懸合せんとする者なし。剰楯

城南の離宮—鳥羽離宮

みをじるし—みをつくしともいひ

て、兩檢斷隅田高橋に、在京の武士二萬餘騎を相副て、今在家、作道、西朱雀、西八條邊へ被差向。是は此比南風に雪とけて、河水岸に餘る時なれば、桂川を阻て戰を致せとの謀也。去程に、赤松入道圓心、三千餘騎を二に分て、久我繩手西七條より押寄たり。大手の勢桂川の西の岸に打臨で、川向なる六波羅勢を見渡せば、鳥羽の秋山風に、家々の旗翩翻として、城南の離宮の西門より、作道、四塚、羅城門の東西、西七條口まで支へて、雲霞の如に充滿したり。されども此勢は、桂川を前にして防げと被下知つる其趣を守て、川をば誰も越ざりけり。寄手は又、思の外敵大勢なるよと思惟して、無左右打て懸らんともせず。唯兩陣互に川を隔て、矢軍に時をぞ移しける。中にも帥律師則祐、馬を蹈放て歩立になり、矢たばね解て押くつろげ、一枚楯の陰より、引詰引詰散々に射けるが、矢軍計にては勝負を決すまじかりと獨言して、脫置たる鎧を肩にかけ、冑の緒を縮、馬の腹帶を堅めて、唯一騎岸より下に打下し、手繩かいくり渡さんとす。父の入道遙に見て、馬を打寄せ、面に塞て制しけるは、昔佐々木三郎が藤戸を渡し、足利又太郎が宇治河を渡たるは、兼てみをじるしを立て、案内を見置き、敵の無勢を目に懸て、先をば懸し者也。河上の雪消、水增りて、淵瀨も見えぬ大河を、曾て

太公—太公望とて周の西伯の師事したる人

子房—張子房とて漢の高祖に事へたる張良のこと

奉行頭人—奉行人引附頭

に攻落さでは候べき。是太公が兵書に出て、子房が心底に祕せし所にて候はずやと云ければ、諸人皆此議に同じて、其夜軈て宿河原を立て、路次の在家に火をかけ、其光を松明にして、逃る敵に追すがうて攻上りけり。

○三月十二日合戰事

六波羅には、斯る事とは夢にも知ず、摩耶城へは大勢下しつれば、敵を攻落さん事日を過さじと、心安く思ける。其左右を今や〳〵と待ける所に、寄手打負て逃上る由、披露有て、實說は未ㇾ聞。何とある事やらん、不審端多き所に、三月十二日申刻計に、淀、赤井、山崎、西岡邊、三十餘箇所に火を懸たり。こは何事ぞと問に、西國の勢已に三方より寄たりとて、京中上を下へ返して騷動す。兩六波羅驚いて、地藏堂の鐘を鳴し、洛中の勢を被ㇾ集けれども、宗徒の勢は摩耶城より被ㇾ追立、右往左往に逃隱れぬ。其外は奉行頭人なんど被ㇾ云て、肥脹れたる者共が、馬に舁乘て、四五百騎馳集りたれ共、皆唯あきるゝ計にて、差たる擬勢も無りけり。六波羅の北方、越後守仲時事の體を見るに、何樣坐ながら敵を京都にて相待ん事は、武略の足ざるに似たり。洛外に馳向て可ㇾ防と

矢面―矢の飛び來る正面

山五郎左衛門尉光能、飽間九郎左衛門尉光泰、郎等共に七騎にて、竹の陰より南の山へ打襄て進み出たり。敵是を見て、楯の端少し動て、かゝるかと見れば、さもあらず、色めきたる氣色に見えける間、七騎の人々馬より飛下り、竹の一叢茂たるを木楯に取て、差詰引詰散々にぞ射たりける。瀬河宿の南北三十餘町に、沓の子を打たる樣に控へたる敵なれば、何かははづるべき。矢比近き敵二十五騎、眞逆に被射落ければ、矢面なる人を楯にして、馬を射させじと立てかねたり。平野伊勢前司、佐用、上月、田中、小寺、八木、衣笠の若者共、すはや敵は色めきたるはと、胡籙を叩き、勝時を作て、七百餘騎轡を並べてぞ懸たりける。大軍の靡く癖なれば、六波羅勢、前陣返せども後陣不續、行前は狹し、閑に引けといへども、耳にも不聞入、子は親を捨て、郎等は主を知らで、我先にと落行ける程に、其勢大半討れて、纔に京へぞ歸りける。赤松は手負生捕の首三百餘、宿河原に切懸させて、又摩耶城へ引返さんとしけるを、圓心が子息帥律師則祐進み出て申けるは、軍の利は、勝に乘て北るを追に不如。今度寄手の名字を聞に、京都の勢數を盡して向て候なる。此勢共、今四五日は、長途の負軍にくたびれて、人馬ともに物の用に不可立。臆病神の覺ぬ前に、續いて攻る物ならば、などか六波羅を一戰の中

欺き難し—侮り難し
丁壯—軍卒

著ぬと聞えければ、合戰は明日にてぞ有んずらんとて、赤松すこし油斷して、一村雨の過けるほど、物具の露をほさんと、僅なる在家にこみ入て、雨の晴間を待ける所に、尼崎より船を留めてあがりける阿波の小笠原、三千餘騎にて押寄たり。赤松纔に五十餘騎にて、大勢の中へかけ入り、面も不レ振戰ひけるが、大敵凌ぐに叶はねば、四十七騎は被レ討て、父子六騎にこそ成にけれ。六騎の兵皆笠符をかなぐり捨て、大勢の中へ颯と交りて、懸まはりける間、敵是を知らでや有けん、又天運の助にや係りけん、何れも無レ恙して、御方の勢の、昆陽野宿の西に、三千餘騎にて控へたる其中へ馳入て、虎口に死を遁れけり。六波羅勢は、昨日の軍に、敵の勇鋭を見るに、小勢也といへども、欺き難しと思ければ、瀬河宿に控へて進み得ず。赤松は又敗軍の士卒を集め、殿れたる勢を待調ん爲に不レ懸。互に陣を阻て、未雌雄を決せず。丁壯そゞろに軍旅につかれなば、敵に氣を被レ奪べしとて、同十一日赤松三千餘騎にて、敵の陣へ押寄て、先づ事の體を伺ひ見に、瀬河宿の東西に、家々の旗二三百旒梢の風に飜して、其勢二三萬騎も有んと見えたり。御方を是に合せば、百にして其一二をも可レ校とは見えねども、戰はで可レ勝道なければ、偏に唯討死と志て、筑前守貞範、佐用兵庫助範家、宇野能登守國頼、中

射しらまかされ―射挫かれ
色めき―負けいろづく
二の尾―山腹

尉光泰二人南の尾崎へ下降て、矢種を不レ惜、散々に射ける間、寄手少し射しらまかされて、互に人を楯に成て、其陰にかくれんと色めきける氣色を見て、赤松入道子息信濃守範資、筑前守貞範、佐用、上月、小寺、頓宮の一黨五百餘人、鋒を竝て、大山の崩が如く、二の尾より討て出たりける間、寄手跡より引立て、返せと云けれ共耳にも不レ聞入、我先にと引けり。其道或は深田にして、馬の蹄膝を過ぎ、或は荊棘生繁て、行前彌狹ければ、返さんとするも不レ叶、防がんとするも便なし。されば城の麓より武庫河の西の縁迄、道三里が間、人馬彌が上に重り死で、行人路を去敢ず。向ふ時七千餘騎と聞えし六波羅の勢、僅に千騎にだにも足らで引返しければ、京中六波羅の周章不レ斜。雖レ然、敵近國より起て、屬從ひたる勢さまで多しとも聞えねば、縦一度二度勝に乘る事有とも、何程の事か有レ可と、敵の分限を推量て、引とも機をば不レ失。斯る所に、備前國の地頭御家人も、大略敵に成ぬと聞えければ、摩耶城へ勢重ならぬ前に討手を下せとて、同廿八日、又一萬餘騎の勢を被二差下一。赤松入道是を聞て、勝軍の利は、謀不意に出、大敵の氣を凌で、須臾に變化して先ずるには不レ如とて、三千餘騎を率し、摩耶城を出て、久々知酒部に陣を取て待かけたり。三月十日六波羅勢既に瀬河に

○摩耶合戰事 附酒部瀬河合戰事

先帝已に船上に著御成て、隱岐判官淸高合戰に打負し後、近國の武士共皆馳參る由、出雲伯耆の早馬頻並に打て、六波羅へ告たりければ、事已に珍事に及びぬと、聞人色を失へり。是に就ても、京近き所に、敵の足をためさせては叶まじ。先攝津國摩耶城へ押寄て、赤松を可二退治一とて、佐々木判官時信、常陸前司時知に、四十八箇所の篝火、在京人並三井寺法師三百餘人を相副て、以上五千餘騎を摩耶城へぞ被レ向ける。其勢閏二月五日京都を立て、同十一日の卯刻に、摩耶城の南の麓、求塚、八幡林よりぞ寄たりける。赤松入道是を見て、態敵を難所におびき寄ん爲に、足輕の射手一二百人を麓へ下して、遠矢少々射させて、城へ引上りけるを、寄手勝に乘て、五千餘騎、さしも嶮き南の坂を、人馬に息も繼せず、揉に揉でぞ上たりける。此山へ上るに、七曲とて岨く細き路あり。此所に至て、寄手少し上りかねて、支へたりける所を、赤松律師則祐、飽間九郎左衛門

足輕―徒歩の兵

經、藤井、射越五郎左衛門尉範貞、兒島、中吉、美濃權介、和氣彌次郎季經、石生彦三郎、此外四國九州の兵までも、聞傳聞傳、我前にと馳參りける間、其勢船上山に居餘りて、四方の麓二三里は、木の下草の陰までも、人ならずと云ぬ所は無りけり。

ぬきつれて　―刀を抜き連れて

手を左右に進めて、散々に射させ、敵の楯の端のゆるぐ所を、得たりや賢しと、ぬきつれて打てかゝる。大手の寄手千餘騎、谷底へ皆まくり落されて、己が太刀長刀に貫れて命を墜す者、其數を不知。隱岐判官計辛き命を助りて、小舟一艘に取乘、本國へ迯歸りけるを、國人いつしか心變して、津々浦々を固め拒ぎける間、波に任せ風に隨て、越前の敦賀へ漂ひ寄たりけるが、幾程も無して、六波羅没落の時、江州番馬の辻堂にて、腹搔切て失にけり。世澆季に成ぬといへ共、天理未有けるにや、餘に君を惱し奉りける隱岐判官が、三十餘日が間に滅びはてゝ、首を軍門の幢に懸られけるこそ不思議なれ。主上隱岐國より還幸成て、船上に御座有と聞えしかば、國々の兵共の馳參る事引も不切。先一番に出雲の守護鹽冶判官高貞、富士名判官と打連、千餘騎にて馳參る。其後淺山二郎八百餘騎、金持の一黨三百餘騎、大山の衆徒七百餘騎、都て出雲、伯耆、因幡三箇國の間に、弓矢に携る程の武士共の、參らぬ者は無りけり。是のみならず、石見國には、澤三角の一族、安藝國には熊谷、小早河、美作國には菅家の一族、江見、芳賀、澁谷、南三郷、備後國には江田、廣澤、宮、三吉、備中には新見、成合、那須、三村、小坂、河村、庄、眞壁、備前には今木、大富太郎幸範、和田備後二郎範長、知間二郎親

ぬはれ伏―こゝかしこに隱れて伏す

俄に拵へたる城なれば、未堀の一所をも不掘、塀の一重をも不塗、唯所々に大木少々切倒して、逆茂木にひき、房舍の甍を破て、かい楯にかける計也。寄手三千餘騎、坂中まで攻上て、城中をきつと向上たれば、松柏生茂て、いと深き木陰に、勢の多少は知ね共、家々の旗四五百旒、雲に翻り日に映じて見えたり。さては早近國の勢共の悉馳參たりけり、此勢計にては攻難しとや思けん、寄手皆心に危て不進得。城中の勢共は、敵に勢の分際を見えじと、木陰にぬはれ伏て、時々射手を出し、遠矢を射させて日を暮す。斯る所に、一方の寄手なりける佐々木彈正左衛門尉、遙の麓にひかへて居たりけるが、何方より射る共知らぬ流矢に、右の眼を射ぬかれて、矢庭に伏て死にけり。依之其手の兵五百餘騎、色を失て軍をもせず。佐渡前司は、八百餘騎にて、搦手へ向たりけるが、俄に旗を卷、甲を脱で降參す。隱岐判官は、猶斯樣の事をも不知、搦手の勢は、定て今は攻近きぬらんと心得て、一の木戸口に支て、新手を入替入替、時移るまでぞ攻たりける。日已に西山に隱れなんとしける時、俄に天かき曇り、風吹き雨降事、車軸の如く、雷の鳴事、山を崩すが如し。寄手是におぢわなゝいて、此彼の木陰に立寄て、むらがり居たる所に、名和又太郎長年舍弟、太郎左衛門尉長重、小次郎長生が、射

を著し一ゆすりゆすつてよく腐につくやうにする

り出ければ、一族五人腹巻取て投懸投懸、皆高紐しめて、共に御迎にぞ參じける。俄の事にて御輿なんども無りければ、長重著たる鎧の上に荒薦を卷て、主上を負進せ、鳥の飛が如くして、船上へ入奉る。長年近邊の在家に人を廻し、思立事有て、船上に兵粮を上る事あり。我倉の内にある所の米穀を、一荷持て運びたらん者には、錢を五百づゝ取らすべしと觸たりける間、十方より人夫五六千人出來りて、我劣らじと持送る。一日が中に、兵粮五千餘石運けり。其後家中の財寶悉人民百姓に與て、己が館に火をかけ、其勢百五十騎にて、船上に馳參り、皇居を警固仕る。長年が一族、名和七郎と云ける者、武勇の謀有ければ、白布五百反有けるを旗にこしらへ、松の葉を燒て煙にふすべ、近國の武士共の家々の紋を書て、此の木の本彼の峯にぞ立置ける。此旗共峯の嵐に吹れて、陣々に翻りける樣、山中に大勢充滿したりと見えておびたゞし。

○船上合戰事

去程に、同二十九日、隱岐判官、佐々木彈正左衛門尉、其勢三千餘騎にて、南北より押寄たり。此船上と申は、北は大山に續峙ち、三方は地僻に、峯に懸れる白雲腰を繞れり。

心がさある ―心のはたらきある

鎧一縮―鎧

遁有て、御船は時の間に、伯耆國名和湊に著にけり。六條少將忠顯朝臣一人先船よりおり給て、此邊には如何なる者か、弓矢取て人に被ㇾ知たると問れければ、道行人立やすらひて、此邊には名和又太郎長年と申者こそ、其身指て名有武士にては候はね共、家富一族廣して、心がさある者にて候へとぞ語りける。忠顯朝臣能々其仔細を尋聞て、軈て勅使を立て被ㇾ仰けるは、主上隱岐判官が館を御迯有て、今此湊に御座あり。長年が武勇兼て上聞に達せし間、御憑あるべき由を被ㇾ仰出ㇾ也。憑まれ進せ候べしや否、速に勅答可ㇾ申とぞ被ㇾ仰たりける。名和又太郎は、折節一族共呼集て、酒飲で居たりけるが、此由を聞て、案じ煩たる氣色にて、兎も角も申得ざりけるを、舍弟小太郎左衛門尉長重進出て申けるは、古より今に至迄、人の望所は名と利との二也。我等忝も十善の君に被ㇾ憑進て、尸を軍門に曝す共、名を後代に殘ん事、生前の思出、死後の名譽たるべし。唯一筋に思定させ給ふより外の議有べしとも存候はずと申ければ、又太郎を始として、當座に候ける一族共二十餘人、皆此議に同じけり。さらば頓て合戰の用意候べし。定て追手も跡より懸り候らん。長重は主上の御迎に參て、直に船上山へ入進せん。旁は頓て打立て、船上へ御參候べしと云捨て、鎧一縮して走

の取りやうを取梶といひ、右へ向けんとする時のを面梶といふ

京上臈―京の公家衆

佛舍利―佛の靈骨

奉る船にてぞ有ける。船頭是を見て、角ては叶候まじ。是に御隱れ候へと申て、主上と忠顯朝臣とを、船底にやどし進せて、其上に、あひ物とて乾たる魚の入たる俵を取積で、水手梶取其上に立並で、櫓をぞ押たりける。去程に、追手の船一艘、御座船に追附て、屋形の中に乘移り、こゝかしこ搜しけれ共、見出し奉らず。さては此船には召ざりけり。若あやしき船や通りつると問ければ、船頭今夜の子刻計に、千波湊を出候つる船にこそ、京上臈かと覺しくて、冠とやらん著たる人と、立烏帽子著たる人と、二人乘せ給て候つる、其舟今は五六里も先立候ぬらんと申ければ、さては疑もなき事也。早、船をおせとて、帆を引梶を直せば、此船は軈て隔ぬ。今はかうと心安く覺て、跡の浪路を顧れば、又一里計さがり、追手の船百餘艘、御座船を目に懸て、鳥の飛が如くに追懸たり。船頭是を見、帆の下に櫓を立て、萬里を一時に渡らんと、聲を帆に擧て推けれ共、時節風たゆみ、潮に向て、御舟更に不進。水手梶取如何せんと、あわて騷ぎける間、主上船底より御出有て、膚の御護より、佛舍利を一粒取出させ給て、御疊紙に乘せて、波の上にぞ浮られける。龍神是に納受やしたりけん、海上俄に風變りて、御座船をば東へ吹送り、追手の船をば西へ吹もどす。さてこそ主上は虎口の難を御

取梶面梶―船の舳を左へ向けんとする時の梶

進せ、其後暇申てぞ止りける。此男誠に直人に非ざりけるにや、君御一統の御時に、尤忠賞有べしとて、國中を被尋けるに、我こそ其にて候へと申者遂に無りけり。夜も已に明ければ、船人纜を解て、順風に帆を揚、湊の外に漕出す。船頭主上の御有樣を見奉て、直人にては渡らせ給はじとや思ひけん、屋形の前に畏て申けるは、斯樣の時御船を仕て候こそ、我等が生涯の面目にて候へ。何の浦へ寄よと御諚に隨て、御船の梶をば仕候べしと申て、實に他事もなげなる氣色也。忠顯朝臣是を聞き給て、隱しては中々惡かりぬと思はれければ、此船頭を近く呼寄て、是程に推し當られぬる上は、何をか隱すべき。屋形の中に御座あるこそ、日本國の主、忝も十善の君にていらせ給へ。汝等も定て聞及ぬらん。去年より隱岐判官が館に被押籠て御座ありつるを、忠顯盜出し進せたる也。出雲伯耆の間に、何にてもさりぬべからんずる泊へ、急ぎ御船を著ておろし進せよ。御運開なば、必汝を侍に申成て、所領一所の主に成べしと被仰ければ、船頭實に嬉しげなる氣色にて、取梶面梶取合せて、片帆にかけてぞ馳たりける。今は海上二三十里も過ぬらんと思ふ處に、同じ追風に帆懸たる船十艘計、出雲伯耆を指て馳來れり。筑紫船か商人船かと見れば、さもあらで、隱岐判官淸高、主上を追

十善―不殺生、不偸盗、不邪婬、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見をいひ、十善得生天、五戒服人身とあるより十善の天子といふ

五更―寅の刻にて、午前四時、子の刻を初更とす

十善の天子、自ら玉趾を草鞋の塵に汚して、自ら泥土の地を蹈せ給けるこそ淺猿けれ。比は三月廿三日の事なれば、月待程の暗き夜に、そこ共不知遠き野の道を、したどりて歩せ給へば、今は遙に來ぬ覽と被思召たれば、跡なる山は未瀧の響のほのかに聞ゆる程なり。若追懸進する事もやある覽と、恐しく思召ければ、一足も前へと御心計は進めども、いつ習はせ給べき道ならねば、夢路をたどる心地して、唯一所にのみやすらはせ給へば、こは如何せんと思煩ひて、忠顯朝臣御手を引、御腰を推て、今夜いかにもして、湊の邊までと心を遣給へども、心身共に疲れ終て、野徑の露に徘徊す。夜いたく深にければ、里遠からぬ鐘の聲の、月に和して聞えけるを、道しるべに尋寄て、忠顯朝臣或家の門を扣き、千波湊へは何方へ行ぞと問ければ、内より怪げなる男一人出向て、主上の御有樣を見進せけるが、心なき田夫野人なれ共、何となく痛敷や思進せけん、千波湊へは、是より纔五十町計候へ共、道南北へ分れて、如何樣御迷候ぬと存候へば、御道しるべ仕候はんと申て、主上を輕々と負進せ、程なく千波湊へぞ著にける。爰にて時打鼓の聲を聞けば、夜は未五更の初也。此道の案内者仕たる男、甲斐甲斐敷、湊の中を走廻、伯耆國へ漕もどる商人船の有けるを、兎角語ひて、主上を屋形の内に乘せ

打負て、行方を不レ知落行候し後、四國の勢悉土居得能に屬し候間、既に大船をそろへて、是へ御迎に參るべし共聞候。又先京都を攻べし共披露す。御聖運開べき時已に至ぬとこそ覺て候へ。義綱が當番の間に、忍やかに御出候て、千波湊より御舟に被レ召、出雲伯耆の間、何れの浦へも風に任て御船を被レ寄、さりぬべからんずる武士を御憑候て、暫く御待候へ。義綱乍レ恐攻進せん爲に、罷向體にて、軈て御方に參候べしとぞ奏し申ける。官女此由申入ければ、主上猶も彼僞てや申覽と思召れける間、義綱が志の程を能々伺御覽ぜられん爲に、彼官女を義綱にぞ被レ下ける。判官は面目身に餘て覺ける上、最愛又甚しかりければ、彌忠烈の志を顯ける。さらば汝先出雲國へ越て、同心すべき一族を語て、御迎に參れと被レ仰下ける程に、義綱則出雲へ渡て、鹽冶判官を語ふに、鹽冶如何思けん、義綱をおひこめ置て、隱岐國へ不レ歸。主上且くは義綱を御待有けるが、餘に事滯ければ、唯運に任て御出有んと思召て、或夜の宵の紛に、三位殿の御局の御産の事近附たりとて、御所を御出ある由にて、主上其御輿にめされ、六條少將忠顯朝臣計を召具して、潛に御所をぞ御出有ける。此體にては人の怪め申べき上、駕輿丁も無りければ、御輿をば被レ停て忝も

薄氷を履み—詩大雅に戰々兢々如臨深淵、如履薄氷とあり

上樣—至尊を呼び奉る語

畿内の軍未靜ならざるに、又四國西國日を追て亂ければ、人の心皆薄氷を履で、國の危き事深淵に臨が如し。抑今如ㇾ斯天下の亂るゝ事は、偏に先帝の宸襟より事興れり。若逆徒剌ちがうて、奪取奉んとする事もこそあれ。相構て能々警固仕べしと、隱岐判官が方へ被二下知一ければ、判官近國の地頭御家人を催して、日番夜廻隙もなく、宮門を閉て警固し奉る。閏二月下旬は、佐々木富士名判官が番にて、中門の警固にて候けるが、如何思けん、哀此君を取奉て、謀叛を起さばやと思心ぞ附にける。され共可二申入一便も無て、案じ煩ひける處に、或夜御前より官女を以て、御盃を被ㇾ下たり。判官是を賜て、よき便也と思ければ、潛に彼官女を以て申入けるは、上樣には未知し召れ候はずや。楠兵衛正成金剛山に城を構て、楯籠候し處に、東國勢百萬餘騎にて上洛し、去二月の初より攻戰候といへ共、城は剛して、寄手已に引色に成て候。又備前には伊東大和二郎、三石と申所に城を構て、山陽道を差塞ぎ候。播磨には赤松入道圓心、宮の令旨を賜て、攝津國まで攻上り、兵庫の北摩耶と申處に陣を取て候。其勢已に三千餘騎、京を縮め地を略して、勢近國に振ひ候也。四國には河野の一族に、土居二郎、得能彌三郎、御方に參て旗を擧候處に、長門の探題上野介時直彼に

今張—今は今治と書す

利を失事あらば、引退て暫く人馬をも休ん爲に、兵庫の北に當て、摩耶と云山寺の有けるに、先城郭を構て、敵を二十里が間に縮めたり。

○河野謀叛事

六波羅には、一方の打手にはと被憑ける宇都宮は千劒破城へ向ひつ、西國の勢は伊東に被支て不上得、今は四國勢を摩耶城へは向べしと被評定ける處に、後二月四日伊豫國より早馬を立て、土居二郎、得能彌三郎、宮方に成て旗をあげ、當國の勢を相附て、土佐國へ打越處に、去月十二日長門の探題上野介時直、兵船三百餘艘にて、當國へ推渡り、星岡にして合戰を致す處に、長門周防の勢一戰に打負て、手負死人其數を不知。剩時直父子行方を不知云云。其より後四國の勢悉土居得能に屬する間、其勢已に六千餘騎、宇多津今張湊に船をそろへ、唯今攻上んと企候也。御用心有べしとぞ告たりける。

○先帝船上臨幸事

大にして力量ありし人

驀て一程なく

れ共、廻一里に餘れる大山なれば、左右なく掘倒さるべしとは見えざりけり。

○赤松蜂起事

去程に、楠が城強くして、京都は無勢也と聞えしかば、赤松二郎入道圓心、播磨國苔縄城より打て出、山陽山陰の兩道を差塞ぎ、山里梨原の間に陣をとる。爰に備前、備中、備後、安藝、周防の勢共、六波羅の催促に依て、上洛しけるが、三石宿に打集て、山里の勢を追拂て通んとしけるを、赤松筑前守舟坂山に支て、宗徒の敵二十餘人を生捕てけり。然共赤松是を討せずして、情深く相交ける間、伊東大和二郎其恩を感じて、忽に武家與力の志を變じて、官軍合體の思をなしければ、先己が館の上なる三石山に城郭を構、驀て熊山へ取上りて、義兵を擧たるに、備前の守護加地源二郎左衛門一戰に利を失て、兒島を指て落て行。是より西國の路彌塞て、中國の動亂不レ斜。西國より上洛する勢をば、伊東に支へさせて、後は思も無りければ、赤松驀て高田兵庫助が城を攻落して、片時も足を不レ休、山陽道を指して攻上る。路次の軍勢馳加て、無レ程七千餘騎に成にけり。此勢にて六波羅を攻落さん事は、案の内なれ共、若戰

眉目―面目

斑足王―身に翼あり脚は鹿足の如くにて飛行自在の人

龍伯公―長

一擧之義兵。叡感尤深、抽賞何淺。早運關東征罰策、可致天下靜謐之功。者、綸旨如此。仍執達如件。

元弘三年二月十一日　　左少將

新田小太郎殿

綸旨の文章、家の眉目に備つべき綸言なれば、義貞不斜悅で、其翌日より虛病して、急ぎ本國へぞ被下ける。宗徒の軍をもしつべき勢共は、兎に角に事を寄て、國々へ歸ぬ。兵糧運送の道絕て、千劍破の寄手、以外に氣を失へる由聞えければ、又六波羅より宇都宮をぞ下されける。紀淸兩黨千餘騎寄手に加はりて、未屈氣新手なれば、軈て城の堀の際まで攻上て、夜晝少しも不引退、十餘日までぞ攻たりける。此時にぞ、塀の際なる鹿垣逆茂木皆被引破て、城も少し防兼たる體にぞ見えたりける。され共紀淸兩黨の者とても、斑足王の身をもからざれば、天をも翔り難し、龍伯公が力を不得ば、山をも擘き難し。餘に爲方や無りけん、面なる兵には軍をさせて、後なる者は手々に鋤鍬を以て、山を掘倒さんとぞ企ける。げにも大手の櫓をば、夜晝三日が間に、念なく掘崩してけり。諸人是を見て、唯始より軍を止て掘べかりけるものをと後悔して、我も／＼と掘け

令旨―春宮三宮中宮親王などのおほせごと
綸旨―天子のみことのりの旨

候なれば、義昌方便を廻して、急で令旨を申出し候べしと、事安げに領掌申て、己が役所へぞ歸ける。其翌日、船田己が若黨を三十餘人、野伏の姿に出立せて、夜中に葛城峯へ上せ、我身は落行勢の眞似をして、朝まだきの霧隱に、追つ返つ半時計、同士軍をぞしたりける。宇多内郡の野伏共是を見て、御方の野伏ぞと心得、力を合せん爲に、餘所の峯よりおり合て、近附たりける處を、船田が勢の中に取籠て、十一人まで生捕けり。船田此生捕どもを解脫して、潛に申けるは、今汝等をたばかり搦取たる事、全誅せん爲に非ず。新田殿本國へ歸て、御旗を擧んとし給ふが、令旨なくては叶まじければ、汝等に大塔宮の御座所を尋問ん爲に召取つる也。命惜くば案内者して、此方の使をつれて宮の御座あんなる所へ參れと申ければ、野伏共大に悅て、其御意にて候はゞ、最安かるべき事にて候。此中に一人暫の暇を給候へ。令旨を申出て、進せ候はんと申て、殘十人をば留置、一人宮の御方へとてぞ參ける。今やくと相待處に、一日有て令旨を捧て來れり。開て是を見に、令旨にはあらで、綸旨の文章に書れたり。其詞云、被綸言稱、敷化理萬國者、明君德也。撥亂鎭四海者、武臣節也。頃年之際、高時法師一類、蔑如朝憲、恣振逆威。積惡之至、天誅已顯焉。爰爲休累年之宸襟、將起

門楣―重立ちたるもの
先朝―後醍醐帝

されば、日本國の武士共の重代したる物具太刀刀は、皆此時に至て失にけり。「名越遠江入道、同兵庫助二人、無詮口論して共に死給ぬ。」其外の軍勢共、親は討るれば、子は髻を切てうせ、主創を被ば、郎從助て引歸す間、始は八十萬騎と聞えしか共、今は纔に十萬餘騎に成にけり。

○新田義貞賜綸旨事

上野國住人新田小太郎義貞と申は、八幡太郎義家十七代の後胤、源家嫡流の名家也。然共、平氏世を執て四海皆威に服する時節なれば、無力關東の催促に隨て、金剛山の搦手にぞ被向ける。爰に如何なる所存歟出來にけん、或時執事船田入道義昌を近づけて宣ひけるは、古より源平兩家朝家に仕へて、平氏世を亂る時は、源家是を鎭め、源氏上を侵す日は、平家是を治む。義貞不肖也と云へ共、當家の門楣として、譜代弓箭の名を汚せり。而に今相摸入道の行跡を見に、滅亡遠に非ず。我本國に歸て義兵を擧、先朝の宸襟を休め奉らんと存ずるが、勅命を蒙らでは叶まじ。如何して大塔宮の令旨を給て、此素懐を可達と問給ければ、船田入道畏て、大塔宮は此邊の山中に忍て御座

―魯般は工匠の名、事は淮南子に出づ

八大地獄―等活、黑繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、無間

轉漕―水陸の運送

上を渡り、我先にと前たり。あはや此城唯今打落されぬと見えたる處に、楠兼て用意やしたりけん、投松明のさきに火を附て、橋の上に薪を積るが如くに投集て、水彈を以て油を瀧の流るゝ様に懸たる間、火橋桁に燃附て、溪風炎を吹布たり。憖に渡り懸りたる兵共、前へ進んとすれば、猛火盛に燃て身を焦す、歸んとすれば、後陣の大勢前の難儀をも不レ云支たり。そばへ飛おりんとすれば、谷深く巖そびえて肝を冷し、如何せんと身を揉で押あふ程に、橋桁中より燃折て谷底へどうと落ければ、數千の兵、同時に猛火の中へ落重て、一人も不レ殘燒死にけり。其有様、偏に八大地獄の罪人の、刀山劍樹につらぬかれ、猛火鐵湯に身を焦す覽も、角やと被レ思知たり。去程に、吉野十津河、宇多内郡の野伏共、大塔宮の命を含で相集事七千餘人、此の峯彼の谷に立隱て、千劍破の寄手共の往來の路を差塞ぐ。依レ之諸國の兵の兵糧忽に盡て、人馬共に疲れければ、轉漕に怺兼て、百騎二百騎引て歸る處を、案内者の野伏共、所々のつまりづまりに待受て、討留ける間、日々夜々に討るゝ者數を知ず。希有にして命計を助かる者は、馬物具を捨、衣裳を剝取れて裸なれば、或は破たる簑を身に纏て、膚計を隱し、或は草の葉を腰に卷て、耻をあらはせる落人共、毎日に引もきらず、十方へ迯散る。前代未聞の耻辱也。

傾城—今の藝妓の如きもの

游君—傾城

天魔波旬—悪魔

魯般が雲梯

　餘所にのみ見てややみなん、葛城のたかまの山の峯の楠。

軍も無て、そゞろに向ひ居たるつれ〴〵に、諸大將の陣々へ、江口神崎の傾城共を呼寄て、様々の遊をさせられける。名越遠江入道と、同兵庫助とは、伯叔甥にて御座けるが、共に一方の大將にて、攻口近く陣を取り、役所を雙てぞ御座ける。或時遊君の前にて、雙六を打れけるが、賽の目を論じて、聊詞の違ひけるにや、伯叔甥二人突違てぞ死れける。兩人の郎從共、何の意趣もなきに、刺違刺違片時が間に死る者二百餘人に及べり。城の中より是を見て、十善の君に敵をなし奉天罰に依て、自滅する人々の有様見よとぞ咲ひける。誠に是直事に非ず、天魔波旬の所行歟と覺て、淺猿かりし珍事也。同三月四日關東より飛脚到來して、軍を止て徒に日を送る事不可然と、被下知ければ、宗徒の大將達評定有て、御方の向陣と、敵の城との際に、高く切立たる堀に橋を渡して、城へ打入らんとぞ巧まれける。爲之京都より番匠を五百餘人召下し、五六八九寸の材木を集て、廣さ一丈五尺、長さ二十丈餘に、梯をぞ作らせける。梯既に作り出しければ、大繩を二三千筋附て、車を以て巻立て、城の切岸の上へぞ倒し懸たりける。魯般が雲梯も、角やと覺て巧也。軈て早りをの兵共五六千人、橋の

疊楯——蝶番をして疊むやうに作りたる楯

眠さまさんとて、芥を以て人長に人形を二三十作て、甲冑をきせ、兵仗を持せて、夜中に城の麓に立置き、前に疊楯をつき雙べ、其後にすぐりたる兵五百人を交へて、夜のほの〴〵と明ける霧の下より、同時に時をどつと作る。四方の寄手時の聲を聞て、すはや城の中より打出たるは。是こそ敵の運の盡る處の死狂よとて、我先にとぞ攻合せける。城の兵兼て巧たる事なれば、矢軍ちとする様にして、大勢相近づけて、人形計を木がくれに殘し置て、兵は皆次第次第に城の上へ引上る。寄手人形を實の兵ぞと心得て、是を打んと相集る。正成所存の如く、敵をたばかり寄せて、大石を四五十、一度にばつと發す。一所に集りたる敵三百餘人、矢庭に被打殺、半死半生の者五百餘人に及べり。軍はてゝ是を見れば、哀大剛の者哉と覺て、一足も引ざりつる兵、皆人にはあらで、藁にて作れる人形也。是を討んと相集て、石に打れ矢に當て死せるも高名ならず、又是を危て進得ざりつるも、臆病の程顯れて云甲斐なし。唯兎にも角にも、萬人の物笑とぞ成にける。是より後は彌合戰を止ける間、諸國の軍勢、唯徒に城を守り上て居たる計にて、するわざ一も無りけり。爰に如何なる者か詠たりけん、一首の古歌を翻案して、大將の陣の前にぞ立たりける。

表爾—表白、あらはし

したる事もなくて、若干討れにければ、あはれ恥の上の損哉と、諸人口遊は猶不止。尋常ならぬ合戰の體を見て、寄手も侮りにくゝや思けん、今は始の樣に勇進で攻んとする者も無りけり。長崎四郞左衞門尉、此有樣を見て、此城を力攻にする事は、人の討るゝ計にて、其功成難し。唯取卷て食攻にせよと下知して、軍を被止ければ、徒然に皆堪兼て、花下の連歌師共を呼下し、一萬句の連歌をぞ始たりける。其初日の發句をば、長崎九郞左衞門尉師宗、

さき懸てかつ色みせよ山櫻

としたりけるを、脇の句、工藤二郞右衞門尉、

嵐や花のかたきなるらん

とぞ附たりける。誠に兩句ともに、詞の緣巧にして、句の體は優なれども、御方をば花になし、敵を嵐に喩へければ、禁忌也ける表爾哉と、後にぞ思知れける。大將の下知に隨て、軍勢皆軍を止ければ、慰む方や無りけん、或は碁雙六を打て日を過し、或は百服茶褒貶の歌合なんどを翫で夜を明す。是にこそ、城中の兵は、中々被惱たる心地して、心を遣方も無りける。少し程經て後、正成、いでさらば又寄手をたばかりて、居

矢長に—いや猛に、いやましに勇み猛りて

越越前守こらへ兼て、本の陣へぞ引れける。寄手數萬の軍勢是を見て、渡り合せんとひしめけ共、谷を隔て尾を隔たる道なれば、輙く馳合する兵もなし。兎角しける其間に、捨置たる旗大幕なんど取持せて、楠が勢閑に城中へぞ引入ける。其翌日城の大手に、三本傘の紋書たる旗と、同き紋の幕とを引て、是こそ皆名越殿より給て候つる御旗にて候へば、御紋附て候間、他人の爲には無用に候。御内の人々是へ御入候て、被召候へかしと云て、同音にどつと笑ければ、天下の武士共是を見て、あはれ名越殿の不覺やと、口々に云ぬ者こそ無りけれ。名越一家の人々此事を聞て、安からぬ事に被思ければ、當手の軍勢共、一人も不殘、城の木戸を枕にして討死をせよとぞ被下知ける。依之彼手の兵五千餘人、思切て、討共射共用ず、乘越乘越城の逆茂木一重引破て、切岸の下迄ぞ攻たりける。され共岸高して切立たれば、矢長に思へ共のぼり得ず、唯徒に城を睨、忿を押て息つき居たり。此時城の中より、切岸の上に横へて置たる大木、十計切て落し懸たりける間、將棋倒をする如く、寄手四五百人、壓に被討て死にけり。是にちがはんと、しどろに成て騒ぐ處を、十方の櫓より指落し、思様に射ける間、五千餘人の兵共、殘ずくなに討れて、其日の軍は果にけり。誠に志の程は猛けれ共、唯仕出

如形——きまりどほり

騎を指分て、水の邊に陣を取せ、城より人おり下りぬべき道々に、逆茂木を引てぞ待懸ける。楠は元來勇氣智謀相兼たる者なりければ、此城を拵へける始、用水の便をみるに、五所の祕水とて、峯通る山伏の祕して汲水此峯に有て、滴る事一夜に五斛計也。此水いかなる旱にもひる事なければ、如形人の口中を濡さん事、相違あるまじけれ共、合戰の最中は、或は火矢を消さん爲、又喉の乾く事繁ければ、此水計にては不足なるべしとて、大なる木を以て水舟を二三百打せて、水を湛置たり。又數百箇所作り雙たる役所の軒に斷樋を懸て、雨ふれば、霤を少しも餘さず、舟にうけ入れ、舟の底に赤土を沈めて、水の性を損ぜぬ樣にぞ拵ける。此水を以て縱五六十日雨不降ともこらへつべし。其中に又などかは雨降事無らんと了簡しける智慮の程こそ淺からね。されば城よりは、強に此谷水を汲んともせざりけるを、水ふせぎける兵共、夜毎に機をつめて、今や〳〵と待懸けるが、始の程こそ有れ、後には次第次第に心懈り、機緩て、此水をば汲ざりけるぞとて、用心の體少し無沙汰にぞ成にける。楠是を見すまして、究竟の射手をそろへて、二三百人夜に紛て城よりおろし、まだ篠目の明けはてぬ霞隱より押寄せ、水邊に詰て居たる者共、二十餘人切伏て、透間もなく切て懸りける間、名

向陣―敵に向つて構へたる陣

きと、寄手是を見侮て、初一兩日の程は、向陣をも取ず、攻支度をも用意せず、我先にと城の木戸口の邊までかづきつれてぞ上たりける。城中の者共少しもさわがず、靜まり返て、高櫓の上より、大石を投懸投懸、楯の板を微塵に打碎て、漂ふ處を差つめ差つめ射ける間、四方の坂よりころび落、落重て手を負、死をいたす者、一日が中に五六千人に及べり。長崎四郎左衛門尉、軍奉行にて有ければ、手負死人の實檢をしけるに、執筆十二人、夜晝三日が間、筆をも置ず註せり。さてこそ、今より後は、大將の御許なくして、合戰したらんずる輩をば、却て罪科に行るべしと觸られければ、軍勢暫く軍を止て、先己が陣々をぞ構へける。爰に赤坂の大將、金澤右馬助、大佛奥州に向て宣ひけるは、前日赤坂を攻落しつる事、全く士卒の高名に非ず。城中の構を推し出して、水を留て候しに依て、敵程なく降參仕候き。是を以此城を見候に、是程纔なる山の巓に、用水有べし共覺候はず。又あげ水なんどを、よその山より懸べき便も候はぬに、城中に水卓散に有げに見ゆるは、如何樣東の山の麓に流たる溪水を、夜々に汲與と覺て候、あはれ宗徒の人々一兩人に仰附られて、此水を汲せぬ樣に御計候へかしと被申ければ、兩大將此議可然覺候とて、名越越前守を大將として、其勢三千餘

九原―九原は墓地の名なるを單に墓の意となしたる也

けるの間、獄門にかくるまでもなくて、九原の苔に埋にけり。道蘊は吉野城を攻落したるは、專一の忠戰なれ共、大塔宮を打漏し奉りぬれば、猶安からず思て、軈て高野山へ押寄、大塔に陣を取て、宮の御在所を尋求けれ共、一山の衆徒皆心を合て、宮を隱し奉りければ、數日の粉骨甲斐もなくて、千劔破城へぞ向ひける。

○千劔破城軍事

千劔破城の寄手は、前の勢八十萬騎に、又赤坂の勢吉野の勢馳加て、百萬騎に餘りければ、城の四方二三里が間は、見物相撲の場の如く打圍で、尺寸の地をも餘さず充滿たり。旌旗の風に飜て靡く氣色は、秋の野の尾花が末よりも繁く、劔戟の日に映じて耀ける有樣は、曉の霜の枯草に布るが如く也。大軍の近づく處には、山勢是が爲に動き、時の聲の震ふ中には、坤軸須臾に摧けたり。此勢にも恐ずして、纔に千人に足ぬ小勢にて、誰を憑み何をか待共なきに、城中にこらへて、防ぎ戰ける楠が心の程こそ不敵なれ。此城東西は谷深く切て、人の上るべき樣もなし。南北は金剛山につゞきて、而も峯峙たり。されども高さ二町計にて、廻一里に足ぬ小城なれば、何程の事か有べ

袖

天河—吉野の奥の地名

庭訓—父母の子に訓ふる言

是を見て、すはや大塔宮の御自害あるは。我先に御首を給らんとて、四方の圍を解て、一所に集る。其間に宮は引違へて、天河へぞ落させ給ける。南より廻りける吉野の執行が勢五百餘騎、多年の案内者なれば、道を要りかさに廻りて、打留め奉んと取籠る。村上彦四郎義光が子息兵衛藏人義隆は、父が自害しつる時、共に腹を切んと、二の木戸の櫓の下まで馳來りたりけるを、父大に諫て、父子の義はさる事なれ共、且く生て宮の御先途を見はて進せよと、庭訓を殘しければ、力なく且くの命を延て、宮の御供にぞ候ける。落行道の軍、事既に急にして、討死せずば、宮落得させ給はじと覺えければ、義隆唯一人蹈留りて、追てかゝる敵の馬の諸膝薙では切すゑ、平頸切ては刎落させ、九折なる細道に、五百餘騎の敵を相受て、半時計ぞ支たる。義隆、節石の如く也といへ共、其身金鐵ならざれば、敵の取巻て射ける矢に、義隆既に十餘箇所の創を被てけり。死ぬるまでも猶敵の手にかゝらじとや思けん、小竹の一叢有ける中へ走入て、腹掻切て死にけり。村上父子が敵を防ぎ、討死しける其間に、宮は虎口に死を御遁有て、高野山へぞ落させ給ける。出羽入道道蘊は、村上が宮の御眞似をして腹を切たりつるを、眞實と心得て、其首を取て京都へ上せ、六波羅の實檢にさらすに、ありもあらぬ者の首也と申

尊仁｜諸本かくあれど今川本の如く護良とあるべき也

練貫の二小袖｜生絲を經とし練絲を緯にして織りたる絹布の二重小

義光言を荒らかにして、かゝる淺猿き御事や候。漢の高祖滎陽に圍れし時、紀信高祖の眞似をして、楚を欺かんと乞しをば、高祖是を許し給ひ候はずや。是程に云甲斐なき御所存にて、天下の大事を思召立ける事こそうたてけれ。はや其御物具を脫せ給ひ候へと申て、御鎧の上帶をとき奉れば、宮げにもとや思召けん、御物具鎧直垂まで、脫替させ給ひて、我若生たらば、汝が後生を弔べし。共に敵の手にかゝらば、冥途までも同じ岐に伴ふべしと被仰て、御淚を流させ給ひながら、勝手明神の御前を南へ向て落させ給へば、義光は二の木戸の高櫓に上り、遙に見送り奉て、宮の御後影の幽に隔らせ給ぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓のさまの板を切落して、身をあらはにして、大音聲を揚て名乘けるは、天照大神御子孫、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇第二皇子、一品兵部卿親王尊仁、逆臣の爲に亡され、恨を泉下に報ぜん爲に、唯今自害する有樣見置て、汝等が武運忽に盡て、腹をきらんずる時の手本にせよと云儘に、鎧を脫で櫓より下へ投落し、錦の鎧直垂の袴計に、練貫の二小袖を押膚脫で、白く淸げなる膚に刀をつき立て、左の脇より右のそば腹まで、一文字に搔切て、腸摑で櫓の板になげつけ、太刀を口にくはへて、うつ伏に成てぞ伏たりける。大手搦手の寄手

戈鋋劍戟―戈鋋戟何れも國訓ほこなれど戈は雙刃劍身にて柄は長く鋋は同じく柄鐵にて短く又戟は刄に上に向へる兩枝あり

かさに取上て―勢に乘じて

宮の御前に畏り、戈鋋劍戟を降事電光の如く也。磐石岩を飛す事春の雨に相同じ。然りとは云へ共、天帝の身には近づかで、修羅かれが爲に破らると、はやしを揚て舞たる有様は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが、劍を拔て舞しに、樊噲庭に立ながら、帷幕をかゝげて項王を睨し勢も角やと覺る計也。大手の合戰急也と覺て、敵御方の時の聲相交りて聞えけるが、げにも其戰に自ら相當る事多かりけりと見えて、村上彦四郎義光、鎧に立處の矢十六筋、枯野に殘る冬草の、風に偃たる如くに折懸て、宮の御前に參て申けるは、大手の一の木戸、云甲斐なく攻破られつる間、二の木戸に支へて數刻相戰ひ候つる處に、御所中の御酒宴の聲、冷く聞え候つるに就て參て候。敵既にかさに取上て、御方の氣の疲れ候ぬれば、此城にて功を立ん事、今は叶はじと覺え候。未敵の勢を餘所に廻し候はぬ前に、一方より打破て、一先落て可有御覽と存候。但跡に殘り留て戰ふ兵なくば、御所の落させ給ふ者也と心得て、敵何迄もつゞきて追懸進せんと覺候へば、恐ある事にて候へ共、めされて候錦の御鎧直垂と、御物具とを下給て、御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代り進せ候はんと申ければ、宮、爭かさる事あるべき。死なば一所にてこそ兎も角もならめと仰られけるを、

巳の刻―午前十時をいひ、其れより推して品物のまだ新しきをいふ

戰ふ。寄手も城の内も、互に命を不レ惜、追上せ追下し、火を散してぞ戰たる。斯る處に金峯山より廻りたる搦手の兵百五十人、愛染寶塔よりおり下て、在々所々に火を懸て、時の聲をぞ揚たりける。吉野の大衆前後の敵を防ぎ兼て、或は自腹を搔切て、猛火の中へ走入て死るも有、或は向ふ敵に引組で、刺違へて共に死るもあり。思々に討死をしける程に、大手の堀一重は、死人に埋りて平地になる。去程に、搦手の兵、思も寄ず勝手の明神の前より押寄て、宮の御座有ける藏王堂へ打て懸りける間、大塔宮今は遁れぬ處也と思召切て、赤地の錦の鎧直垂に、緋威の鎧のまだ巳刻なるを透間もなくめされ、龍頭の冑の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挾み、劣らぬ兵二十餘人前後左右に立、敵の簇て控へたる中へ走り懸り、東西を拂ひ、南北へ追廻し、黑煙を立て切て廻らせ給ふに、寄手大勢也と云へ共、纔の小勢に被二切立一、木の葉の風に散が如く、四方の谷へ颯とひく。敵引ば、宮は藏王堂の大庭に並居させ給て、大幕打揚て、最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立所の矢七筋、御頰さき二の御うで二箇所つかれさせ給て、血の流るる事瀧の如し。然れ共立たる矢をも不レ拔給、流るゝ血をも不レ拭給。敷皮の上に立ながら、大盃を三度傾させ給へば、木寺相摸四尺三寸の太刀の鋒に、敵の首をさし貫て、

金澤右馬助―第六卷には阿曾彈正少弼とありて齟齬せり

の體少しもよわらねば、寄手の兵多くは退屈してぞ見えたりける。爰に此山の案内者とて、一方へ被向たりける吉野の執行岩菊丸、己が手の者を呼寄て申けるは、東條の大將金澤右馬助殿は、既に赤坂城を攻落して、金剛山へ被向たりと聞ゆ。當山の事我等案内者たるに依て、一方を承て向ひたる甲斐もなく、攻落さで數日を送る事こそ遺恨なれ。倩事の樣を案ずるに、此城を大手より攻ば、人のみ被討て落す事有難し。推量するに、城の後の山金峯山には、嶮を憑で、敵さまで勢を置たる事あらじと覺るぞ。物馴たらんずる足輕の兵百五十人すぐつて、歩立になし、夜に紛れて、金峯山より忍入、愛染寶塔の上にて夜のほの〴〵と明はてん時、時の聲を揚よ。城の兵閧音に驚て、度を失はん時、大手搦手三方より攻上て城を追落し、宮を生捕奉るべしとぞ下知しける。さらばとて、案内知たる兵百五十人をすぐつて、其日の暮程より、金峯山へ廻て、岩を傳ひ谷を上るに、案の如く山の嶮を憑けるにや、唯こゝかしこの梢に旗計を結附置て、可防兵一人もなし。百餘人の兵共、思の儘に忍入て、木の下岩の陰に、弓矢を伏て冑を枕にして、夜の明るをぞ待たりける。あひ圖の比にも成にければ、大手五萬餘騎、三方より押寄て攻上る。吉野の大衆五百餘人、攻口におり合て防

太平記　巻第七

○吉野城軍事

元弘三年正月十六日、二階堂出羽入道道蘊、六萬餘騎の勢にて大塔宮の籠らせ給へる吉野城へ押寄る。菜摘河の川淀より、城の方を見上たれば、嶺には白旗赤旗錦旗、深山下風に吹なびかされて、雲歟花歟と怪まる。麓には數千の官軍、冑の星を耀かし、鎧の袖を連ねて、錦繡しける地の如し。嶺高して道細く、山嶮して苔滑なり。されば幾十萬騎の勢にて攻る共、輒く落すべしとは見えざりけり。同十八日の卯刻より、兩陣互に矢合して、入替入替攻戰。官軍は物馴たる案内者共なれば、此のつまり彼の難所に走散て、攻合せ開合せ散々に射る。寄手は死生不知の坂東武士なれば、親子討るれ共不顧、主從滅れども不屑、乘越乘越攻近づく。晝夜七日が間、息をも不續相戰に、城中の勢三百餘人討れければ、寄手も八百餘人討れにけり。況矢に當り石に被打、生死の際を不知者は、幾千萬と云數を不知。血は草芥を染、尸は路徑に横はれり。され共城

本領安堵の御教書−相傳の領分は取上ぐる事なく安心なるぞといふ大將の書附

雅意−我意雅我音通故に軍記類に此充字多し

罪科をだに、可レ有ニ御免一にて候はゞ、頸を伸て降人に可レ參候。若叶ふまじきとの御定にて候はゞ、無レ力一矢仕て、尸を陣中に曝すべきにて候。此樣を具に被レ申候へと云ければ、大將大に喜て、本領安堵の御教書を成し、殊に功あらん者には、則恩賞を可ニ申沙汰一由返答して、合戰をぞ止めける。城中に籠る所の兵二百八十二人、明日死なんずる命をも不レ知、水に渇せる難レ堪さに、皆降人に成てぞ出たりける。長崎九郎左衞門尉是を請取て、先降人の法なればとて、物具太刀刀を奪取り、高手小手に禁て、六波羅へぞ渡しける。降人の輩、如レ此ならば、唯打死すべかりける者をと、後悔すれ共無ニ甲斐一。日を經て京都に著しかば、六波羅に縛置て、合戰の事始なれば、軍神に祭て、人に見ごりさせよとて、六條河原に引出し、一人も不レ殘首を刎て被レ懸けり。是を聞てぞ、吉野金剛山に籠りたる兵共も、彌獅子の齒嚙をして、降人に出んと思ふ者は無りけり。罪を緩うするは將の謀也と云事を知らざりける六波羅の成敗を、皆人ごとに押なべて惡かりけりと申しが、幾程も無して悉亡びけるこそ不思議なれ。情は人の爲ならず。餘に奢を極めつゝ、雅意に任て振舞へば、武運も早く盡にけり。因果の道理を知るならば、可レ有レ心事共也。

楚忽の事な仕給ひそ—輕卒なる事を爲し給ふな

中の兵、水を飮まで十二日に成ければ、今は精力盡はてゝ、可防方便も無りけり。死たる者は再び歸る事なし。去來や、とても死なんずる命を、各力の未墜ぬ先に打出て敵と刺違へ、思樣討死せんと、城の木戸を開て、同時に打出んとしけるを、城の本人平野將監入道高櫓より走下り、袖をひかへて云けるは、暫く楚忽の事な仕給ひそ。今は是程に力盡、喉乾て疲れぬれば、思ふ敵に相逢ん事有難し。名もなき人の中間下部共に被虜て、恥を曝ん事可心憂。倩事の樣を案ずるに、吉野金剛山城、未相支て勝負を不決、西國の亂未靜まらざるに、今降人に成て出たらん者をば、人に見こらせじとて、討事不可有と存ずる也。とても叶はぬ我等なれば、暫く事を謀て降人に成、命を全して時至らん事を可待といへば、諸卒皆此議に同じて、其日の討死をば止めてけり。去程に次日軍の最中に、平野入道高櫓に上て、大將の御方へ可申仔細候。暫く合戰を止て、聞召候へと云ければ、大將澁谷十郎を以て、事の樣を尋るに、平野木戸口に出合て、楠和泉河内の兩國を平げて威を振ひ候し刻に、一旦の難を遁れん爲に、不心御敵に屬して候き、此仔細京都に參じ候て、申入候はんと仕候處に、已に大勢を以て、被押懸申候間、弓矢取身の習にて候へば、一矢仕りたるにて候。其

無左右―無造作に

山の尾―山の裾の延びたる處

射手共、鏃を支て思樣に射ける間、軍の度毎に、手負死人五百人、六百人、不レ被二射出一時はなかりけり。是をも不レ痛、新手を入替入替、十三日までぞ攻たりける。去共城中少も不レ弱見えけり。爰に播磨國の住人吉河八郎と云者、大將の前に來て申けるは、此城の爲體、力攻にし候はゞ、無左右不レ可レ落候。楠此一兩年が間、和泉河内を管領して、若干の兵粮を取入て候なれば、兵粮も無二左右一盡候まじ。倩思案を廻し候に、此城三方は谷深して地に不レ續、一方は平地にて而も山遠く隔れり。されば何に水可レ有とも見えぬに、火矢を射れば、水彈にて打消候。近來は雨の降る事も候はぬに、是程まで水の卓散に候は、如何樣南の山の奧より地の底に樋を伏、城中へ水を懸入るゝ歟と覺候。哀人夫を集めて、山の腰を掘らせて、御覧候へかしと申ければ、大將げにもとて、人夫を集め、城へ續きたる山の尾を一文字に掘切て見れば、案の如く、土の底二丈餘の下に樋を伏せて、側に石を疊み、上に眞木の瓦を覆て、水を十町餘の外よりぞ懸たりける。此揚水を被レ止て後、城中の水乏して、軍勢口中の渇難レ忍ければ、四五日が程は、草葉に置ける朝の露を嘗め、夜氣に潤へる地に身を當て、雨を待けれ共雨不レ降。寄手是に利を得、隙なく火矢を射ける間、大手の櫓二つをば燒落しぬ。城

六の街—六道、地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六界に行き別るゝ道

黄壤一堆—土の堆き處

蒼涯—大空のはて

花さかぬ老木の櫻朽ぬとも、その名は苔の下にかくれじ。

と一首の歌を書て、其次に、武藏國の住人人見四郎恩阿生年七十三、正慶二年二月二日赤坂城へ向て、武恩を報ぜん爲に討死仕畢とぞ書たりける。又右の柱を見れば、

まてしばし、子を思ふ闇に迷らん、六の街の道しるべせん。

と書て、相摸國の住人本間九郎資貞嫡子源内兵衛資忠生年十八歳、正慶二年仲春二日、父が死骸を枕にして、同戰場に命を止め畢とぞ書たりける。父子の恩義、君臣の忠貞、此二首の歌に顯れて、骨は化して黄壤一堆の下に朽ぬれど、名は留て靑雲九天の上に高し。されば今に至るまで、石碑の上に消殘れる三十一字を見る人、感涙を流さぬは無りけり。去程に、阿曾彈正少弼、八萬餘騎の勢を率して、赤坂へ押寄せ、城の四方二十四町、雲霞の如くに取卷て、先時の聲をぞ揚たりける。其音山を動し地を震ふに、蒼涯も忽に可裂。此城三方は岸高して、屛風を立たるが如し。南の方計こそ平地に繼て、堀を廣く深く掘切て、岸の額に塀を塗り、其上に櫓を搔雙たれば、如何なる大力早技なりとも、輙く可攻樣ぞなき。され共寄手大勢なれば、思侮て、楯にはづれ、矢面に進で、堀の中へ走り下て、切岸を襄らんとしける處を、塀の中より究竟の

中有の途ー身死して未だ未來の生を享けざる間

時と共に消息すー時と共に相應すといふことにて、時に随つて命を惜まざる義

心の闇に迷ふ習にて候間、共に討死せん事を悲て、我に不知して、唯一人討死しけるにて候。相伴ふ者無て、中有の途に迷ふ覽。さこそと被思遣候へば、同く討死仕て、無跡まで父に孝道を盡し候ばやと存じて、唯一騎相向て候也。城の大將に此由を被申候て、木戸を被開候へ。父が討死の所にて、同く命を止めて、其望を達し候はんと、慇懃に事を請ひ、泪に咽でぞ立たりける。一の木戸を堅めたる兵五十餘人、其志孝行にして、相向ふ處やさしく哀なるを感じて、則木戸を開き、逆茂木を引のけしかば、資忠馬に打乘り、城中へ懸入て、五十餘人の敵と、火を散てぞ切合ける。遂に父が被討し跡にて、太刀を口に呀て覆に倒て、貫れてこそ失にけれ。惜哉、父の資貞は、無雙の弓矢取にて、國の爲に要須たり、又子息資忠は、ためしなき忠孝の勇士にて、家の爲に榮名あり。人見は年老齡傾きぬれ共、義を知て命を思ふ事、時と共に消息す。此三人同時に討死しぬと聞えければ、知も知ぬもおしなべて、歎かぬ人は無りけり。既に先懸の兵共、ぬけ〳〵に赤坂城へ向ひ討死する由披露有ければ、大將則天王寺を打立て馳向ひけるが、上宮太子の御前にて馬より下り、石の鳥居を見給へば、左の柱に、

大悲の弘誓—觀世音の衆生を濟度せんといふ廣大なる誓

九品安養—極樂淨土

給へる所もなく、又敵陣に懸入て、父子共に討死し給ひなば、誰か其跡を繼、誰か其恩賞を可ㇾ蒙。子孫無窮に榮るを以て、父祖の孝行を呈す道とは申也。御悲歎の餘に、無二是非一死を共にせんと思召は理なれ共、暫止らせ給へと堅く制しければ、資忠泪を押へて、無ㇾ力著たる鎧を脫置たり。聖、さては制止に拘りぬと嬉しく思て、本間が首を小袖に裹み、葬禮の爲に、側なる野邊へ越ける其間に、資忠今は可ㇾ止人なければ、則打出て、先上宮太子の御前に參り、今生の榮耀は、今日を限の命なれば、祈る所に非ず。唯大悲の弘誓の誠あらば、父にて候者の討死仕候し戰場の、同じ苔の下に埋れて、九品安養の同臺に生るゝ身と成させ給へと、泣々祈念を凝して、泪と共に立出けり。石の鳥居を過ると見れば、我父と共に討死しける人見四郎入道が書附たる歌あり。是ぞ誠に後世までの物語に可ㇾ留事よと思ければ、右の小指を食切て、其血を以て、一首を側に書添て、赤坂城へぞ向ひける。城近く成ぬる所にて、馬より下り、弓を脇に挾で、木戶を叩き、城中の人々に可ㇾ申事ありと呼りけり。良暫く在て、兵二人櫓の小間より顏を指出して、誰人にて御渡候哉と問ければ、是は今朝此城に向て討死して候つる本間九郎資貞が嫡子源內兵衞資忠と申者にて候也。人の親の子を憶ふ哀み

土小間—城壁の小間也

相摸殿—北條高時

也。跡を見るに續く武者もなし。又さまで大名とも見えず。溢れ者の不敵武者に跳り合て、命失て何かせん。唯置て事の樣を見よとて、東西鳴を靜めて、返事もせず。人見腹を立て、早旦より向て名乘れ共、城より矢の一をも射出さぬは、臆病の至歟、敵を侮る歟。いで其儀ならば、手柄の程を見せんとて、馬より飛下て、堀の上なる細橋さら〱と走渡り、二人の者共、出し塀の脇に引傍て、木戸を切落さんとしける間、城中是に騷で、土小間櫓の上より、雨の降が如くに射ける矢、二人の者共が鎧に、蓑毛の如にぞ立たりける。本間も、人見も、元より討死せんと思立たる事なれば、何かは一足も可レ引。命を限に戰て、二人共に一所にて被レ討けり。是まで附從て、最後の十念勸めつる聖、二人が首を乞得て、天王寺に持て歸り本間が子息源内兵衞資忠に、始よりの有樣を語る。資忠父が首を一目見て、一言をも不レ出、唯泪に咽で居たりけるが、如何思けん、鎧を肩に投懸、馬に鞍置て、唯一人打出んとす。聖怪み思て、鎧の袖を引留め、是はそも如何なる事にて候ぞ。御親父も此合戰に先懸して、唯名を天下の人に被レ知と計思召さば、父子共に打連てこそ向はせ給ふべけれ共、命をば相摸殿に獻り、恩賞をば子孫の榮花に貽さんと思召ける故にこそ、人より先に討死をばし給らめ。而るに思ひ籠

一定—屹度

鹿毛—茶色にて鹿の毛に似たる色

せければ、矢立を取出して、石の鳥居に、何事とは不知一筆書附て、己が宿へぞ歸りける。本間九郎、さればこそ此者に一定明日先懸せられぬと、心ゆるし無りければ、まだ宵より打立て、唯一騎東條を指て向けり。石川河原にて夜を明すに、朝霧の晴間より南の方を見ければ、紺の唐綾威の鎧に、白母衣懸て、鹿毛なる馬に乘たる武者一騎、赤坂城へぞ向ひける。何者やらんと、馬打寄せて是を見れば、人見四郎入道なりけり。人見、本間を見附て云けるは、昨夜宣し事を實と思ならば、孫程の人に被出拔ましと打笑てぞ、頻に馬を早めける。本間跡に附て、今は互に先を爭ひ申に及ず。一所にて尸を曝し、冥途までも同道申さんずるぞよと云ければ、人見申にや及ぶと返事して、後になり先になり物語して打けるが、赤坂城近く成ければ、二人の者共、馬の鼻を雙て懸襄り、堀の際まで打寄て、鐙蹈張弓杖突て、大音聲を揚て名乘けるは、武藏國の住人に、人見四郎入道恩阿、年積て七十三、相摸國の住人本間九郎資貞、生年三十七、鎌倉を出しより、軍の先陣を懸て、尸を戰場に曝ん事を存じて相向へり。我と思はん人々は出合て、手なみの程を御覽ぜよと、聲々に呼て、城を睨で控へたり。城中の者共是を見て、是ぞとよ坂東武者の風情とは。唯是熊谷平山が一谷の先懸を傳聞て、羨敷思へる者共

天道缺盈―易の謙の卦に見えたる語

○赤坂合戰事 附人見本間拔懸事

去程に赤坂城へ向ける大將、阿曾彈正少弼、後陣の勢を待調んが爲に、天王寺に兩日逗留有て、同二月二日午刻に、可ㇾ有㆓矢合㆒、於㆓拔懸之輩㆒者、可ㇾ爲㆓罪科㆒之由をぞ被ㇾ觸ける。爰に武藏國の住人に、人見四郎入道恩阿と云者あり。此恩阿、本間九郎資貞に向て語りけるは、御方の軍勢雲霞の如くなれば、敵陣を攻落ん事疑なし。但事の樣を案ずるに、關東天下を治て權を執る事已に七代に餘れり。天道缺ㇾ盈理免るゝ處なし。其上臣として君を流し奉る積惡、豈果して其身を滅さゞらんや。某不肖の身なりと云へ共、武恩を蒙て、齡已に七旬に餘れり。今日より後差たる思出もなき身の、そゞろに長生して、武運の傾んを見んも、老後の恨、臨終の障共成ぬべければ、明日の合戰に先懸して、一番に討死して、其名を末代に遺さんと存ずる也と語りければ、本間九郎、心中にはげにもと思ながら、枝葉の事を宣者哉。是程なる打込の軍に、そゞろなる先懸して討死したりとも、差て高名とも云れまじ。されば唯某は人なみに可㆓振舞㆒也と云ければ、人見よにも無興氣にて、本堂の方へ行けるを、本間怪み思て、人を附て見

纐纈―しぼり染

五枚甲―しころの五枚あるもの

本滋籐―にぎり下を滋籐に、にぎり上を二所籐にしたるもの

騎、奈良路よりこそ被ㇾ向けれ。中にも長崎悪四郎左衛門尉は、別して侍大將を承て、大手へ向ひけるが、態と己が勢の程を人に被ㇾ知とや思けん、一日引さがりてぞ向ひける。其行粧見物の目をぞ驚しける。先旗差、其次に逞しき馬に厚總懸て、一様の鎧著たる兵八百餘騎、二町計先立てゝ、馬を靜て打せたり。我身は其次に纐纈の鎧直垂に、精好の大口を張せ、紫下濃の鎧に、白星の五枚甲に、八龍を金にて打て著たるを、猪頸に著成し、銀の磨著の臑當に、金作の太刀二振帶て、一部黒とて、五尺三寸有ける坂東一の名馬に、鹽干潟の捨小舟を金貝に磨たる鞍を置て、款冬色の厚總懸て、三十六差たる白磨の銀筈の大中黒の矢に、本滋籐の弓の眞中握て、小路を狹しと歩ませたり。片小手に腹當して、諸具足したる中間五百餘人、二行に列を引き、馬の前後に隨て、閑に路次をぞ歩みける。其後四五町引さがりて、思々に鎧たる兵十萬餘騎、甲の星を輝かし、鎧の袖を重て、沓の子を打たるが如くに、道五六里が程支たり。其勢決然として、天地を響し山川を動す計也。此外外様の大名五千騎、三千騎、引分引分晝夜十三日迄、引も切でぞ向ひける。我朝は不ㇾ及ㇾ申、唐土、天竺、大元、南蠻も、未是程の大軍を發す事難ㇾ有かりし事也と、思はぬ人こそ無りけれ。

同常陸介、安保左衛門入道、南部次郎、山城四郎左衛門尉、此等を始として、宗徒の大名百三十二人、都合其勢三十萬七千五百餘騎、九月廿日鎌倉を立て、十月八日先陣既に京都に著けば、後陣は未足柄箱根に支へたり。是のみならず河野九郎四國の勢を率して、大船三百餘艘にて、尼崎より襄て下京に著。厚東入道、大内介、安藝熊谷、周防長門の勢を引具して、兵船二百餘艘にて、兵庫より襄て西の京に著。甲斐信濃の源氏七千餘騎中山道を經て東山に著。江間越前守、淡河右京亮、北陸道七箇國の勢を率して、三萬餘騎にて、東坂本を經て上京に著。惣じて諸國七道の軍勢、我も〳〵と馳上りける間、京白河の家々に居餘り、醍醐、小栗栖、日野、勸修寺、嵯峨、仁和寺、太秦の邊、西山、北山、賀茂、北野、革堂、河崎、淸水、六角堂の門の下、鐘樓の中迄も軍勢の宿らぬ所は無りけり。日本雖小國、是程に人の多かりけりと、始て驚く計也。去程に元弘三年正月晦日、諸國の軍勢八十萬騎を三手に分て、吉野、赤坂、金剛山三の城へぞ被向ける。先吉野へは二階堂出羽入道道蘊を大將として、態と他の勢を交へず、二萬七千餘騎にて、上道下道中道より、三手に成て相向ふ。赤坂へは、阿曾彈正少弼を大將として、其勢八萬餘騎先天王寺住吉に陣を張る。金剛山へは、陸奥右馬助、搦手の大將として、其勢二十萬

一千餘騎に成にけり。唯秦の世已に傾んとせし弊に乘て、楚の陳勝が蒼頭にして大澤に起りしに異ならず。頓て杉坂山里二箇所に關を居、山陽山陰の兩道を差塞ぐ。是より西國の道止て、國々の勢上洛する事を得ざりけり。

○關東大勢上洛事

去程に、畿内西國の凶徒、日を逐て蜂起する由、六波羅より早馬を立て、關東へ被註進。相摸入道大に驚て、さらば討手を指遣せとて、相摸守の一族、其外東八箇國の中に、可然大名共を催し立て被差上。先一族には、阿曾彈正少弼、名越遠江入道、大佛前陸奥守貞直、同武藏左近將監、伊具右近大夫將監、陸奥右馬助、外樣の人々には、千葉大介、宇都宮三河守、小山判官、武田伊豆三郎、小笠原彥五郎、土岐伯耆入道、葦名判官、三浦若狹五郎、千田太郎、城太宰大貳入道、佐々木隱岐前司、同備中守、結城七郎左衞門尉、小田常陸前司、長崎四郎左衞門尉、同九郎左衞門尉、長江彌六左衞門尉、長沼駿河守、澁谷遠江守、河越三河入道、工藤次郎左衞門高景、狩野七郎左衞門尉、伊東常陸前司、同大和入道、安藤藤內左衞門尉、佐宇美攝津前司、二階堂出羽入道、同下野判官、

大權聖者―佛神の人と成つて現はれたる者
文質三統―論語の註に見ゆ
讖文―未來記

に、天下の反覆久しからずと、憑敷覺ければ、金作太刀一振此老僧に與へて、此書をば本の祕府に納させけり。後に思合するに、正成が勘へたる所、更に一事も不レ違。是誠に大權聖者の末代を鑒て記し置給し事なれ共、文質三統の禮變、少しも違はざりけるは、不思議なりし讖文也。

○赤松入道圓心賜二大塔宮令旨一事

其比播磨國の住人、村上天皇第七御子具平親王六代の苗裔、從三位季房が末孫に、赤松次郎入道圓心とて、弓矢取て無雙の勇士有り。元來其心濶如として、人の下風に立ん事を思はざりければ、此時絶たるを繼、廢たるを興して、名を顯し忠を抽ばやと思けるに、此二三年大塔宮に屬纏奉て、吉野十津河の艱難を經ける圓心が子息律師則祐、令旨を捧て來れり。披覽するに、不日に擧二義兵一率二軍勢一可レ令レ誅二罰朝敵一。於レ有二其功一者、恩賞宜レ依レ請之由被レ載。委細事書十七箇條の恩裁を被レ添たり。條々何れも家の面目、世の所望する事なれば、圓心不レ斜悅で、先當國佐用庄苦繩山に城を構て、與力の輩を相招く。其威漸近國に振ければ、國中の兵共馳集て、無程其勢

有職の家―故實を職とする家

宿老の寺僧答て云、太子守屋の逆臣を討て、始て此寺を建て、佛法を被弘候し後、神代より始て、持統天皇の御宇に至までを被記たる書三十巻をば、前代舊事本記とて、卜部宿禰是を相傳して、有職の家を立候。其外に又一巻の祕書を被留て候。是は持統天皇以來、末世代々の王業、天下の治亂を被記て候。是をば輒く人の披見する事は候はね共、以別儀密に見參に入候べしとて、即祕府の銀鑰を開て、金軸の書一巻を取出せり。正成悦て、即是を披覽するに、不思議の記文一段あり。其文に云、

當人王九十五代天下一亂而主不安。此時東魚來呑四海。日沒西天三百七十餘箇日。西鳥來食東魚。其後海内歸一三年。如獼猴者掠天下三十餘年。大凶變歸一元。云々。

正成不思議に覺て、能々思案して、此文を考るに、先帝既に人王の始より九十五代に當り給へり。天下一度亂て主不安とあるは、是此時なるべし。東魚來て呑四海とは、逆臣相摸入道の一類なるべし。西鳥食東魚とあるは、關東を滅す人可有。日沒西天とは、先帝隱岐國へ被遷させ給ふ事なるべし。三百七十餘箇日とは、明年の春の比、此君隱岐國より還幸成て、再び帝位に即せ可給事なるべしと、文の心を明に勘

遐壤遠境―遐に遠き處

人牧―地方の役人

涯分―身の分際

は、天王寺に打出て、威猛を雖逞、民屋に煩をも不爲して、士卒に禮を厚くしける間、近國は不及申、遐壤遠境の人牧までも、是を聞傳へて、我も我もと馳加りける程に、其勢漸强大にして、今は京都よりも討手を無左右被下事は難叶とぞ見えたりける。

○正成天王寺未來記披見事

元弘二年八月三日、楠兵衛正成住吉に參詣し、神馬三匹獻之。翌日天王寺に詣て、白鞍置たる馬、白幅輪の太刀、鎧一領副て引進す。是は大般若經轉讀の御布施なり。啓白事終て、宿老の寺僧巻數を捧て來れり。楠則對面して申けるは、正成不肖の身として、此一大事を思立て候事、涯分を不計に似たりといへ共、勅命の不輕禮儀を存ずるに依て、身命の危を忘たり。然に、兩度の合戰聊勝に乘て、諸國の兵不招馳加れり。是天の時を與へ、佛神擁護の眸を被回歟と覺候。誠やらん、傳承れば、上宮太子の當初、百王治天の安危を勘て、日本一州の未來記を書置せ給て候なる。拝見若不苦候はゞ、今の時に當り候はん巻計、一見仕候はばやと云ければ、

生駒の嶽―西行の歌、秋篠や外山の里や時雨らむ生駒の嶽に雲のかかれる

四維―四隅

出たれと騷動して、更行儘に是を見れば、秋篠や外山の里、生駒の嶽に見ゆる火は、晴たる夜の星よりも繁く、藻鹽草志城津浦、住吉難波の里に燒篝は、漁舟に燃す漁火の波を燒かと怪しまる。總て大和河内紀伊國にありとある所の山々浦々に、篝を燒ぬ所は無りけり。其勢何萬騎あらんと推量れておびたゞし。如此する事兩三夜に及び、次第に相近附けば、彌東西南北四維上下に充滿して、闇夜に晝を易たり。宇都宮是を見て、敵寄來らば、一軍して雌雄を一時に決せんと志して、馬の鞍をも不息、鎧の上帶をも不解、待懸たれ共、軍は無して、敵の取廻す勢に、勇氣疲れ武力怠て、哀引退かばやと思ふ心著にけり。斯る處に紀清兩黨の輩も、我等が僅の小勢にて、此大敵に當らん事は、始終如何と覺候。先日當所の敵を無事故追落して候つるを、一面目にして、御上洛候へかしと申せば、諸人皆此議に同じ、七月二十七日夜半計に、宇都宮天王寺を引て上洛すれば、翌日早旦に、楠頓て入替りたり。誠に宇都宮と楠と相戰うて、勝負を決せば、兩虎二龍の戰と成て、何れも死を共にすべし。されば互に是を思ひけるにや、一度は楠引て謀を千里の外に運、一度は宇都宮退て名を一戰の後に不失。是皆智謀深く慮遠き良將なりし故也と、譽ぬ人も無りけり。去程に楠兵衞正成

去來させ給へ―いざ倶に立たせ給へ、いざは人を誘ふ時に發する語、させは前文の關係より然るべき動詞をおきて見るべき語

に及べり。敵定て今は近附らん。去來させ給へとて、楠天王寺を立ければ、和田湯淺も諸共に打連てぞ引たりける。夜明ければ、宇都宮七百餘騎の勢にて、天王寺へ押寄せ、古宇都の在家に火を懸け、時の聲を揚たれ共、敵なければ不二出合一。たばかりぞすらん。此邊は馬の足立惡して、道狹き間、懸入敵に中を被レ破な。後を被レ裏なンど下知して、紀淸兩黨馬の足をそろへて、天王寺の東西の口より懸入て、二三度まで懸入々々しけれ共、敵一人も無して、燒捨たる篝に煙殘て、夜はほの〴〵と明にけり。宇都宮不レ戰先に一勝したる心地して、本堂の前にて馬より下り、上宮太子を伏拜み奉り、是偏に武力の非レ所レ致、唯併神明佛陀の擁護に懸れりと、信心を傾け、歡喜の思を成せり。頓て京都へ早馬を立て、天王寺の敵をば、即時に追落し候ぬと申たりければ、兩六波羅を始として、御內外樣の諸軍勢に至まで、宇都宮が今度の振舞拔群也と、譽ぬ人も無りけり。宇都宮、天王寺の敵を輙く追散したる心地にて、一面目は有體なれ共、軈て續て敵の陣へ攻入ん事も無勢なれば不レ叶、又誠の軍一度も不レ爲して引返ん事もさすがなれば、進退谷たる處に、四五日を經て後、和田、楠、和泉河內の野伏共を四五千人驅集て、可レ然兵二三百騎差副、天王寺邊に遠篝火をぞ燒せける。すはや敵こそ打

紀清兩黨—紀氏清原氏

先に隅田高橋が五千餘騎にて向て候しをだに、我等僅の小勢にて追散して候しぞかし。其上今度は御方勝に乘て大勢也。敵は機を失て小勢也。宇都宮縱武勇の達人なりとも、何程の事か候べき。今夜逆寄にして打散して捨候はばやと云けるを、楠暫思案して云けるは、合戰の勝負必しも大勢小勢に不ㇾ依、唯士卒の志を一にするとせざるとに也。されば大敵を見ては欺き、小勢を見ては畏れよと申す事是なり。先思案するに、先度の戰に大勢打負て引退く跡へ、宇都宮一人小勢にて相向ふ志、一人も生て歸らんと思者よも候はじ。其上宇都宮は坂東一の弓矢取也。紀清兩黨の兵、元來戰場に臨て命を棄る事、塵芥よりも尙輕くす。其兵七百餘騎志を一にして戰を決せば、當手の兵、縱退く心なく共、大半は必可ㇾ被ㇾ討。天下の事全今般の戰に不ㇾ可ㇾ依。行末遙の合戰に、多からぬ御方初度の軍に被ㇾ討なば、後日の戰に誰か力を可ㇾ合。良將は不ㇾ戰して勝と申事候へば、正成に於ては、明日態と此陣を去て引退き、敵に一面目在る樣に思はせ、四五日を經て後、方々の峯に篝を燒て、一蒸蒸程ならば、坂東武者の習、無ㇾ程機疲て、いやいや長居しては惡かりなん。一面目有時去來や引返さんと云ぬ者は候はじ。されば懸るも引も折によるとは、斯樣の事を申也。夜已に曉天

かけ立て―強ひて促し立て

候とも、はかぐヽしき合戰しつ共不レ覺候。且は天下の一大事、此時にて候へば、御向候て、御退治候へかしと宣ひければ、宇都宮辭退の氣色無して被レ申けるは、大軍已に利を失て後、小勢にて罷向候はん事、如何と存候へども、關東を罷出し始より、斯樣の御大事に逢て、命を輕くせん事を存候き。今の時分、必しも合戰の勝負を見所にては候はねば、一人にて候共、先罷向て一合戰仕り、及難儀候はば、重て御勢をこそ申候はめと、誠に思定たる體に見えてぞ歸りける。宇都宮一人、武命を含で大敵に向はん事、命を可レ惜に非りければ、態と宿所へも不レ歸、六波羅より直に、七月十九日午刻に都を出で、天王寺へぞ下りける。東寺邊までは、主従僅に十四五騎が程とみえしが、洛中にあらゆる所の手の者共、馳加りける間、四塚作道にては、五百餘騎にぞ成にける。路次に行逢者をば、權門勢家を不レ云、乘馬を奪ひ、人夫をかけ立て通りける間、行旅の往反路を曲げ、閭里の民屋扉を閉づ。其夜は柱松に陣を取て明るを待つ。其志一人も生て歸らんと思者は無りけり。去程に、河内國の住人、和田孫三郎此由を聞て、楠が前に來て云けるは、先日の合戰に負腹を立て、京より宇都宮を向候なる、今夜既に柱松に著て候が、其勢僅に六七百騎には過じと聞え候。

落書―嘲弄又は諷刺の意を書きて要所に立ておく書きもの

大勢の引立たる事なれば、一返も不レ返、唯我先にと橋の危をも不レ云、馳集りける間、人馬共に被二推落一て、水に溺るゝ者不レ知レ數。或は淵瀬をも不レ知、渡懸て、死ぬる者も有り。或は岸より馬を馳倒て、其儘被レ討者も有り。唯馬物具を脱捨て、逃延んとする者は有れ共、返合せて戰はんとする者は無りけり。然れば五千餘騎の兵共、殘少なに被二討成一て、這々京へぞ上りける。其翌日に何者か仕たりけん、六條河原に高札を立て、一首の歌をぞ書たりける。

渡邊の水いか計早ければ、高橋落て隅田流るらん。

京童の癖なれば、此落書を歌に作て歌ひ、或は語傳て笑ひける間、隅田高橋面目を失ひ、且は出仕を遏め、虚病してぞ居たりける。兩六波羅是を聞て、安からぬ事に被レ思ければ、重て寄せんと被レ議けり。其比京都餘に無勢なりとて、關東より被レ上たる宇都宮治部大輔を呼寄評定有けるは、合戰の習、運に依て雌雄替る事、古より無に非ず。然共今度南方の軍に負ぬる事、偏に將の計の拙に由れり。又士卒の臆病なるが故也。天下の嘲哢口を塞ぐに所なし。就レ中仲時罷上し後、重て御上洛の事は、凶徒若蜂起せば、御向ひ有て靜謐候との爲なり。今の如んば、敗軍の兵を驅集て、何度むけて

鶴翼―左右に翼を張りたる陣法

一に召捕て、六條河原に切懸て、六波羅殿の御感に預らんと云儘に、隅田高橋人交もせず、橋より下を一文字にぞ渡ける。五千餘騎の兵共是を見て、我先にと馬を進めて、或は橋の上を歩ませ、或は河瀬を渡て、向の岸に懸騰る。楠が勢是を見て、遠矢少々射捨て、一戰もせず、天王寺の方へ引退く。六波羅の勢是を見て、勝に乘り、人馬の息をも不ㇾ継、天王寺の北の在家まで、揉に揉でぞ追たりける。楠思程敵の人馬を疲らかして、二千騎を三手に分て、一手は天王寺の東より、敵を弓手に請て懸出づ。一手は西門の石の鳥居より、魚鱗懸に懸出づ。一手は住吉の松陰より懸出で、鶴翼に立て開合す。六波羅の勢を見合すれば、對揚すべき迄もなき大勢なりけれ共、陣の張様しどろにて、却て小勢に圍れぬべくぞ見えたりける。隅田高橋是を見て、敵後に大勢を隠してたばかりけるぞ。此邊は馬の足立惡して叶はじ。廣みへ敵をおびき出し、勢の分際を見計うて、懸合懸合、勝負を決せよと下知しければ、五千餘騎の兵共、敵に後を被ㇾ切ぬ先にと、渡邊の橋を指て引退く。楠が勢是に利を得て、三方より勝時を作て追懸る。橋近く成ければ、隅田高橋是を見て、敵は大勢にては無りけるぞ。此にて不ㇾ返合、大河後に在て惡かりぬべし。返せや兵共と、馬の足を立直々々下知しけれども、

敷並―波の類に寄する如くそれからそれへとつゞくこと

軍奉行―軍士監督の職

河内の兩國を靡けて、大勢に成ければ、五月十七日に、先住吉天王寺邊へ打て出で、渡部の橋より南に陣を取る。然間和泉河内の早馬敷並を打て、楠已に京都へ攻上る由告ければ、洛中の騷動不斜。武士東西に馳散りて、貴賤上下周章事窮なし。斯りければ、兩六波羅には、畿内近國の勢如雲霞馳集て、楠今や攻上ると待けれ共、敢て其儀もなければ、聞にも不似、楠小勢にてぞ有覽。此方より押寄て打散せとて、隅田高橋を兩六波羅の軍奉行として、四十八箇所の篝、並に在京人、畿内近國の勢を合せて、天王寺へ被指向。其勢都合五千餘騎、同二十日京都を立て、尼崎、神崎、柱松の邊に陣を取て、遠篝を燒て、其夜を遲しと待明す。楠是を聞て、二千餘騎を三手に分け、宗徒の勢をば、住吉天王寺に隱て、僅に三百騎計を渡部の橋の南に控させ、大篝二三箇所に燒せて相向へり。是は態と敵に橋を渡させて、水の深みに追はめ、雌雄を一時に決せんが爲也。去程に、明れば五月二十一日に、六波羅の勢五千餘騎、所々の陣を一に合せ、渡部の橋まで打莅で、河向に控へたる敵の勢を見渡せば、僅に二三百騎には不過。剩やせたる馬に、縄手綱懸たる體の武者共也。隅田高橋是を見て、さればこそ和泉河内の勢の分際さこそ有らめと思ふに合せて、はかぐ\しき敵は一人も無りけり。此奴原を一

切所―要害の地

此三四年は常葉駿河守範貞一人として、兩六波羅の成敗を司て在しが、堅く辭し申けるに依てとぞ聞えし。楠兵衞正成は、去年赤坂城にて、自害して燒死たる眞似をして落たりしを、實と心得て、武家より、其跡に湯淺孫六入道定佛を地頭に居置たりければ、今は河内國に於ては、殊なる事あらじと、心安く思ける處に、同四月三日、楠五百餘騎を率して、俄に湯淺が城へ押寄て、息をも不繼攻戰ふ。城中に兵粮の用意乏しかりけるにや、湯淺が所領紀伊國の阿瀨川より、人夫五六百人に兵粮を持せて、夜中に城へ入んとする由、楠風聞て、兵を道の切所へ差遣し、悉是を奪取て、其俵に物具を入替て、馬に負せ、人夫に持せて、兵を二三百人、兵士の樣に出立せて、城中へ入んとす。楠が勢是を追散さんとする眞似をして、追つ返つ、同士軍をぞしたりける。湯淺入道是を見て、我兵粮入るゝ兵共が、楠が勢と戰ふぞと心得て、城中より打て出で、そゞろなる敵の兵共を、城中へぞ引入ける。楠が勢共、思の儘に城中に入すまして、俵の中より物具共取出し、ひしひしと堅めて、則時の聲をぞ揚たりける。城の外の勢、同時に木戸を破り、塀を越て攻入ける間、湯淺入道内外の敵に取籠られて、可戰樣も無りければ、忽に首を伸て降人に出づ。楠其勢を幷せて、七百餘騎にて、和泉

二世の悉地を成就―現在未來の一切極地を成就す

臥給たる枕の邊に立給へり。御夢心地に思召けるは、篠の小篠の一節も、可㆑問人も覺ぬ都の外の蓬生に、怪しや誰人の道蹈迷へるやすらひぞやと、御尋有ければ、此老翁世に哀なる氣色にて、云ひ出せる詞は無て、持たる梅の花を御前に指置て立歸けり。不思議やと思召て御覽ずれば、一首の歌を短册にかけり。

廻りきて遂にすむべき月影の、しばし陰るを何嘆くらむ。

御夢覺て、歌の心を案じ給に、君遂に還幸成て、雲の上に住ませ可㆑給瑞夢也と、憑敷思召けり。誠に彼聖廟と申奉るは、大慈大悲の本地、天滿天神の垂跡にて渡らせ給へば、一度步を運ぶ人、二世の悉地を成就し、僅に御名を唱る輩、萬事の所願を滿足す。況乎千行萬行の紅淚を滴盡て、七日七夜の丹誠を致させ給へば、懇誠暗に通じて、感應忽に告あり。世旣に澆季に雖㆑及、信心誠ある時は、靈鑑新なりと、彌憑敷ぞ思召ける。

○楠出㆓張天王寺㆒事 附隅田高橋幷宇都宮事

元弘二年三月五日、左近將監時益、越後守仲時、兩六波羅に被㆑補て、關東より上洛す。

御撫物―祈禱の時身を撫でゝ禍を祓ひすつる人形

昌泰―醍醐天皇の時の年號、此邊菅原道眞の事をいふ

雁。云彼云此一方ならぬ御歎に、青絲の髪疎にして、いつの間に老は來ぬらんと被怪、紅玉の膚消て、今日を限の命共がなと思召ける御悲の遣方なさに、年來の御祈の師とて、御誦經御撫物なんど奉りける北野の社僧の坊に御座て、一七日參籠の御志ある由を被仰ければ、此折節、武家の聞も無憚には非ねども、日來の御恩も重く、今程の御有様も御痛しければ、無情は如何と思て、拜殿の傍に、僅なる一間を拵て、尋常の青女房なんどの參籠したる由にて、置奉りけり。哀古ならば錦帳に妝を籠、紗窓に艶を閉て、左右の侍女其數を不知、當を耀、假册奉べきに、いつしか引替たる御忍の物籠なれば、都近けれ共、事問かはす人もなし。唯一夜松の嵐に御夢を被覺、主忘れぬ梅が香に、昔の春を思召出すにも、昌泰の年の末に、荒人神と成せ給ひし、心づくしの御旅宿までも、今は君の御思に擬へ、又は御身の歎に被思召知たる、哀の色の數々に、御念誦を暫被止て、御泪の内にかくばかり、

忘ずばかみもあはれと思しれ、心づくしのいにしへの旅。

と遊て、少し御目睡有ける其夜の御夢に、衣冠正しくしたる老翁の、年八十有餘なるが、左の手に梅の花を一枝持、右の手に鳩の杖をつき、最苦しげなる體にて、御局の

太平記　巻第六

○民部卿三位局御夢想事

夫年光不レ停、如二奔箭下流水一。哀樂互替似二紅榮黄落樹一。爾れば此世中の有様、唯夢とやいはん、幻とやいはん。憂喜共に感ずれば、袂の露を催す事、雖レ不レ始レ今、去年九月に笠置城破れて、先帝隱岐國へ被レ遷させ給し後は、百司の舊臣悲を抱て、所々に籠居し、三千の宮女泪を流して、面々に伏沈給ふ有様、誠に憂世の中の習と云ながら、殊更哀に聞えしは、民部卿三位御局にて留たり。其を如何にと申に、先朝の御寵愛不レ淺上、大塔宮の御母堂にて渡せ給ひしかば、傍の女御后は、花の側の深山木の、色香も無が如く也。而るを世間靜ならざりし後は、萬引替たる九重の内の御住居も不レ定、荒のみ増る浪の上に、船流したる海士の心地して、寄る方もなき御思の上に打添て、君西海の歸らぬ波に浮沈み、泪無レ隙御袖の氣色と承りしかば、空傾二思於萬里之曉月一、宮は又南山の道なき雲蹈迷はせ給て、狂浮たる御住居と聞ゆれど、難レ託二書於三春之暮

三春―春の三ケ月をいふ。

迎に參れと、觸廻り候つる間、御使ぞと心得て、參て候とぞ申ける。宮此事を御思案あるに、直事に非ずと思召合せて、年來御身を放されざりし膚の御守を御覽ずるに、其口少し開たりける間、彌怪しく思召て、則開被ㇾ御覽ㇾけれぱ、北野天神の御神體を金銅にて被ㇾ鑄進ㇾたる其御眷屬、老松の明神の御神體、遍身より汗かいて、御足に土の著たるぞ不思議なる。さては佳運神慮に叶へり。逆徒の退治、何の疑か可ㇾ有とて、其より宮は槇野上野房聖賢が拵たる槇野城へ御入ありけるが、此も尙分内狹くて可ㇾ惡と御思案ありて、吉野の大衆を語はせ給て、愛善寶塔を城郭に構へ、岩切通す吉野河を前に當て、三千餘騎を隨へて、楯籠らせ給けるとぞ聞えし。

かづき—被る
打物—太刀長刀の類

六七百騎が程懸出たり。其勢次第に近附儘に、三手に分て時の聲を揚て、玉置庄司に相向ふ。眞前に進だる武者、大音聲を揚て、紀伊國の住人、野長瀬六郎、同七郎、其勢三千餘騎にて、大塔宮の御迎に參る所に、忝も此君に對ひ進せて、弓を引楯を列ぬる人は誰ぞや。玉置庄司殿と見るは僻目か。唯今可レ滅武家の逆命に隨て、即時に運を開かせ可レ給親王に敵對申ては、一天下の間、何の處にか、身を置んと思ふ。天罰不レ遠、是を鎭ん事、我等が一戰の内にあり。餘すな漏すなと、をめき叫でぞ懸りける。是を見て玉置が勢五百餘騎、叶はじとや思けん、楯を捨、旗を卷て、忽に四角八方へ逃散ぬ。其後野長瀬兄弟、甲を脱ぎ弓を脇に挾て、遙に畏る。宮の御前近く被レ召て、山中の爲レ體、大義の計略難レ叶かるべき間、大和河内の方へ打出て勢を附ん爲、令進發之處に、玉置庄司唯今の擧動、當手の兵萬死の内に一生をも得難しと覺つるに、不慮の扶に逢事、天運尚憑あるに似たり。抑此事何として存じたりければ、此戰場に馳合て、逆徒の大軍をば靡ぬるぞと、御尋有ければ、野長瀬畏て申けるは、昨日の晝程に、年十四五計に候し童の、名をば老松といへりと名乘て、大塔宮明日十津河を御出有て、小原へ御通あらんずるが、一定道にて難に逢はせ給ぬと覺るぞ。志を存ぜん人は、急ぎ御

混冑—一人も殘らず甲冑に身を固めたること

楯を雌羽に—楯を重ねてつき竝ぶること

ける。さればとて此に可レ留に非ず。行れんずる所まで行やとて、上下三十餘人の兵共、宮を前に立進せて、間々山路をぞ越行ける。既に中津河の峠を越んとし給ける所に、向の山の峯に、玉置が勢と覺て、五六百人が程、混冑に鎧て、楯を前に進め、射手を左右へ分て、時の聲をぞ揚たりける。宮是を御覽じて、玉顏殊に儼に打笑ませ給て、御手の者共に向て、矢種の在んずる程は防矢を射よ。心静に自害して、名を萬代に可レ貽。但各相構て、吾より先に腹切事不レ可レ有。吾已に自害せば、面の皮を剝耳鼻を切て、誰が首とも見えぬ樣にし成て捨べし。其故は、我首を若獄門に懸て被レ曝なば、天下に御方の志を存ぜん者は力を失ひ、武家は彌所レ恐なかるべし。死せる孔明、生ける仲達を走らしむと云事あり。されば死して後までも、威を天下に殘すを以て良將とせり。今はとても遁れぬ所ぞ。相構て、人々きたなびれて敵に笑はるなと、被レ仰ければ、御供の兵共、何故かきたなびれ候べきと申て、御前に立て、敵の大勢にて攻上りける坂中の邊まで下向ふ。其勢僅三十二人。是皆一騎當千の兵とはいへ共、敵五百餘騎に打合て、可レ戰樣は無りけり。寄手は楯を雌羽につきしとうてかづき襲り、防ぐ兵は打物の鞘をはづして、相懸に近附所に、北の峯より赤旗三旒松の嵐に翻して、其勢

仰たる—そり曲りたる

有べし。道の警固に、木戸を開き、逆茂木を引のけさせよとぞ被レ仰ける。玉置庄司御使に出合て、事の由を聞て、無返事にて内へ入けるが、軈て若黨中間共に物具させ、馬に鞍置、事の體躁しげに見えければ、二人の御使、いや〱此事叶ふまじかりけり。さらば急ぎ走歸て此由申んとて、足早に歸れは、玉置が若黨共五六十人、取太刀計にて追懸たり。二人の者立留り、小松の二三本ありける陰より跳出で、眞前に進だる武者の馬の諸膝薙で刎落させ、返す太刀にて首打落して、仰たる太刀を押直してぞ立たりける。跡に續て追ける者共も、是を見て敢て近附者一人もなし。唯遠矢に射すくめければ、片岡八郎矢二筋被二射附一て、今は助り難と思ければ、や殿、矢田殿、我はとても手負たれば、此にて打死せんずるぞ。御邊は急ぎ宮の御方へ走參て、此由を申て、一まども落し進せよと、再往強て云ければ、矢田も一所にて打死せんと思けれども、げにも宮に告申さざらんは、却て不忠なるべければ、無レ力唯今打死する傍輩を見捨て歸りける心の中、被二推量一て哀也。矢田遙に行延て跡を顧れば、片岡八郎はや被レ討ぬと見えて、首を太刀の鋒に貫て持たる人あり。矢田急ぎ走歸て、此由を宮に申ければ、さては遁れぬ道に行迫りぬ。運の窮達歎くに無レ詞とて、御供の人々に至まで、中々騒ぐ氣色ぞ無り

孟施舍、北宮黝—共に孟子公孫丑上篇に出づ

陳丞相—漢の高祖の臣陳平、丞相は大臣のこと

芻蕘の詞—草を刈り薪を採るものの詞、詩經の大雅に出づ

にて御座す天子の御子の、朝敵御追罰の爲に、御門出ある路次に參り合て、汝等程の大凡下の奴原が、左樣の事可レ仕樣やあると云て、則御旗を引奪て取、剰旗持たる芋瀨が下人の大の男を摑で、四五丈計ぞ抛たりける。其怪力無二比類一にや怖たりけん、芋瀨庄司、一言の返事もせざりければ、村上自御旗を肩に懸て、無程宮に奉二追著一。義光御前に跪て、此樣を申ければ、宮誠に嬉しげに打笑はせ給て、則祐が忠は孟施舍が義を守り、平賀が智は陳丞相が謀を得、義光が勇は北宮黝が勢を凌げり。此三傑を以て、我盍レ治二天下一哉と被レ仰けるぞ忝き。其夜は椎柴垣の隙あらはなる山がつの庵に、御枕を傾けさせ給て、明れば小原へと志て、薪負たる山人の行逢たるに、道の樣を御尋有けるに、心なき樵夫迄も、さすが見知進せてや有けん、薪を下し地に跪て、是より小原へ御通り候はん道には、玉置庄司殿とて、無貳の武家方の人おはしまし候。此人を御語ひ候はでは、いくらの大勢にても、其前をば御通り候ぬと不覺候。恐ある申事にて候へ共、先づ人を一二人御使に被二遣候一て、彼人の所存をも被二聞召一候へかしとぞ申ける。宮つく〲と聞召て、芻蕘の詞迄も不レ捨と云は是也。げにも樵夫が申處、さもと覺るぞとて、片岡八郎矢田彥七二人を、玉置庄司が許へ被レ遣て、此道を御通り

記信、魏豹—共に漢の高祖の臣

無端—問がわろく

御意にて候はゞ、無力一矢仕らんずるにて候と、誠に又餘儀もなげにぞ申入たりける。宮は此事何れも難儀也と思召て、敢御返事も無りけるを、赤松律師則祐進出て申けるは、危きを見て命を致すは、士卒の守る所に候。されば紀信は詐て敵に降り、魏豹は留て城を守る。是皆主の命に代りて、名を留めし者にて候はずや。兎ても角ても彼が所存解て、御所を迦し可進にてだに候はゞ、則祐御大事に代て、罷出候はん事は、仔細有まじきにて候と申せば、平賀三郎是を聞て、末座の意見卒爾の議にて候へ共、此艱苦の中に附纏奉りたる人は、雖一人、上の御爲には、股肱耳目よりも難捨被思召候べし。就中芋瀬庄司が申所、げに難被默止候へば、其安きに就て、御旗計を被下候には、何の煩か候べき。戰場に馬物具を捨、太刀刀を落して敵に被取事、さまでの恥ならず。唯彼が申請る旨に任て、御旗を被下候へかしと申ければ、宮げにもと思召て、日月を金銀にて打て著たる錦の御旗を、芋瀬庄司にぞ被下ける。斯て宮は遙に行過させ給ぬ。暫有て村上彦四郎義光、遙の路にさがり、宮に追著進せんと急けるに、芋瀬庄司無端道にて行合ぬ。芋瀬が下人に持せたる旗を見れば、宮の御旗也。村上怪て事の樣を問に、爾々の由を語る。村上、こはそも何事ぞや。忝も四海の主

移木の信—史記六十八巻に出づ、商君の故事
獻芹の賂—文選四十三に出づ

必沙汰し與べしと定て、奥に起請文の詞を載て、嚴密の法をぞ出しける。夫移木の信は爲ㇾ堅ㇾ約、獻芹の賂は爲ㇾ奪ㇾ心なれば、欲心強盛の八庄司共、此札を見てければ、いつしか心變じ色替て、奇しき振舞共にぞ聞えける。宮、斯ては此所の御止住、始終悪かりなん。吉野の方へも御出あらばやと被ㇾ仰けるを、竹原入道、如何なる事や候べきと、強て留申ければ、彼が心を破られん事も、さすがに叶はせ給はで、恐懼の中に月日を送らせ給ひける。結句竹原入道が子供さへ、父が命を背て、宮を討奉らんとする企有と聞しかば、宮潛に十津河を出させ給て、高野の方へぞ赴かせ給ひける。其路小原、芋瀬、中津河と云敵陣の難所を經て通る路なれば、中々敵を打憑て見ばやと被ㇾ思召、先芋瀬庄司が許へ入せ給ひけり。芋瀬、宮をば我館へ入進らせずして、側なる御堂に置奉り、使者を以て申けるは、三山別當定遍武命を含て、隱謀與黨の輩をば、關東へ註進仕る事にて候へば、此道より無二左右一通し進せん事、後の罪科陳謝するに、不ㇾ可ㇾ有ㇾ據候。乍ㇾ去宮を留進せん事は、其恐候へば、御供の人々の中に、名字さりぬべからんずる人を、一兩人賜て、武家へ召渡候歟、不ㇾ然ば御紋の旗を給て、合戰仕て候つる支證是にて候と、武家へ可ㇾ申にて候。此二つの間、何れも叶まじきとの

尾籠―たこの充字を音讀したるにて、緩怠の意

褊す―侮る

非職凡下―官職なきもの、身分賤しきもの

ば、さかやきの跡隱なし。兵衛是を見て、げにも山伏にて御座ざりけり。賢ぞ此事申出たりける。あな淺猿、此程の振舞、さこそ尾籠に思召候つらんと、以外に驚て、首を地に著、手を束ね、疊より下て蹲踞せり。俄に黒木の御所を作て、宮を守護し奉り、四方の山々に關を居、路を切塞て、用心密しくぞ見えたりける。是も猶大義の計略難叶とて、叔父竹原八郎入道に此由を語ければ、入道頓て戸野が語ひに隨て、我館へ宮を入進らせ、無二の氣色に見えければ、御心安く思召て、此に半年計御座有ける程に、人に被見知じと被思召ける御支度に、御還俗の體に成せ給ければ、竹原八郎入道が息女を夜のおとゞへ被召て、御覺異他なり。さてこそ、家主の入道も彌志を傾け、近邊の郷民共も、次第に歸伏申たる由にて、却て武家をば褊しけり。去程に、熊野の別當定遍、此事を聞て、十津河へ寄せんずる事は、縦十萬騎の勢ありとも不可叶。其邊の郷民共の欲心を勸て、宮を他所へおびき出し奉らんと相計て、道路の辻に札を書て立けるは、大塔宮を奉討たらん者には、非職凡下を不云、伊勢の車間庄を恩賞に可被充行由、關東の御教書有之。其上に、定遍先三日が中に六千貫を可與。御内伺候の人、御手の人を討たらん者には五百貫、降人に出たらん輩には三百貫、何れも其日の中に

分内—ほど、限界

限。斯て十餘日を過させ給けるに、或夜家主の兵衛尉、客殿に出、燒火などせさせ、四方山の物語共しける次に申けるは、旁は定て聞及ばせ給たる事も候覽。誠やらん、大塔宮、京都を落させ給て、熊野の方へ赴せ給候けんなる。三山の別當定遍僧都は無二の武家方にて候へば、熊野邊に御忍あらん事は、難成覺候。哀此里へ御入候へかし。所こそ分内は狹く候へ共、四方皆嶮岨にて、十里廿里が中へは、鳥も翔り難き所にて候。其上人の心不僞、弓矢を取事世に超たり。されば平家の嫡孫惟盛と申ける人も、我等が先祖を憑て、此處に隱れ、遂に源氏の世に無恙候けるとこそ承候へと語ければ、宮誠に嬉しげに思召たる御氣色顯れて、若大塔宮なんどの、此所へ御憑あつて、入せ給ひたらば、被憑させ給はんずるかと問せ給へば、戸野兵衛、申にや及び候。身不肖に候共、某一人だに斯る事ぞと申さば、鹿瀨、蕪坂、湯淺、阿瀨川、小原、芋瀨、中津河、吉野十八鄕の者迄も、手指者候まじきにて候とぞ申ける。其時、宮、木寺相摸にきと御目合有ければ、相摸此兵衛が側に居寄て、今は何をか隱し可申。あの先達の御房こそ、大塔宮にて御座あれと云ければ、此兵衛尙も不審氣にて、彼此の顏をつく〴〵と守りけるに、片岡八郎、矢田彦七、あら熱やとて、頭巾を脫で側に指置く。實の山伏ならね

夫山伏―平山伏

千手陀羅尼―經文の名、小き一巻あり

籠て、三十三所の巡禮の爲に、罷出たる山伏共、路踏迷て此里に出て候。一夜の宿を借、一日の飢をも休め給へと云たりければ、内より怪しげなる下女一人出合ひ、是こそ可ﾚ然佛神の御計と覺て候へ。是の主の女房、物怪を病せ給ひ候。祈てたばせ給らんやと申せば、玄尊、我等は夫山伏にて候間、叶ひ候まじ。あれに見え候辻堂に、足を休て被ﾚ居て候先達こそ、效驗第一の人にて候へ。此樣を申さんに、仔細候はじと云ければ、女房大に悦で、さらば其先達の御房、是へ入進せさせ給へと云て、喜あへる事無ﾚ限。玄尊走歸て、此由を申ければ、宮を始奉て、御供の人々皆彼が館へ入せ給ふ。宮病者の臥たる所へ御入在て、御加持あり。千手陀羅尼を二三遍、高らかに被ﾚ遊て、御念珠を押揉せ給ければ、病者自口走て、樣々の事を云けるが、誠に明王の縛に被ﾚ懸たる體にて、足手を縮て戰き、五體に汗を流して、物怪即立去ぬれば、病者忽に平癒す。主の夫不ﾚ斜喜て、我蓄たる物候はねば、別の御引出物迄は叶候まじ。枉て十餘日是に御逗留候て、御足を休めさせ給へ。例の山伏、楚忽に忍て御逃候ぬと存候へば、恐ながら是を御質に給らんとて、面々の笈共を取合て、皆内にぞ置たりける。御供の人々、上には其氣色を不ﾚ顯といへ共、下には皆悦思へる事無

空翠—山間樹木の鬱茂せるより起る空氣の濕

三重の瀧—那智の瀧のこと

高峰の雲に枕を欹て、苔の筵に袖を敷、或は岩漏水に渴を忍びて、朽たる橋に肝を消す。山路本より雨無して、空翠常に衣を濕す。向上れば萬仭の青壁刀に削り、直下ば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間斯る嶮難を經させ給へば、御身も草臥はてゝ、流るゝ汗如レ水。御足は缺損じて、草鞋皆血に染れり。御供の人々も、其身鐵石に非れば、皆飢疲れて、はか〴〵しく歩も得ざりけれ共、御腰を押御手を引て、路の程十三日に、十津河へぞ著せ給ひける。宮をばとある辻堂の内に奉レ置て、御供の人々は在家に行て、熊野參詣の山伏共、道に迷て來れる由を云ければ、在家の者共、哀を垂て、粟の飯橡の粥など取出して、其飢を相助く。宮にも是等を進せて、二三日は過けり。斯ては始終如何可レ在とも覺えざりければ、光林房玄尊とある在家の、是ぞさもある人の家なるらんと覺しき所に行て、童部の出たるに、家主の名を問へば、是は竹原八郎入道殿の甥に、戶野兵衞殿と申人の許にて候と云ければ、さては是こそ弓矢取てさる者と聞及ぶ者なれ。如何にもして是を憑まばやと思ければ、門の内へ入て、事の樣を見聞處に、內に病者有と覺て、哀貴からん山伏の出來れかし、祈らせ進らせんと云聲しけり。玄尊すはや究竟の事こそあれと思ければ、聲を高らかに揚て、是は三重の瀧に七日うたれ、那智に千日

三所權現—熊野の本宮、新宮、那智

分段同居の闇—衆生界の闇

應作—應化、機に應じての作業

磯の浪、和歌吹上を外に見て、月に瑩ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、哀を催す時しもあれ、切目の王子に著給ふ。其夜は叢祠の露に、御袖を片敷て、通夜祈申させ給けるは、南無歸命頂禮三所權現、滿山護法十萬の眷屬、八萬の金剛童子、垂跡和光の月明かに、分段同居の闇を照し、逆臣忽に亡びて、朝廷再輝く事を令レ得給へ。傳承る、兩所權現は、是伊弉諾伊弉册の應作也。我君其苗裔として、今朝日忽に浮雲の爲に被レ隱て冥闇たり。豈不レ傷哉。玄鑒似レ空。神若神たらば、君盡レ爲レ君と、五體を地に投て、一心に誠を致てぞ祈申させ給ける。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に被レ計たり。終夜の禮拜に、御窮屈有ければ、御肱を曲て枕として、暫御目睡有ける御夢に、鬢結たる童子一人來て、熊野三山の間は、尚も人の心不和にして、大義成難し。是より十津河の方へ御渡候て、時の至んを御待候へかし。兩所權現より、案内者に被二附進一て候へば、御道指南可レ仕候と申すと被二御覽一、御夢は卽覺にけり。是權現の御告也けりと、憑敷被二思召一ければ、未明に御悅の奉幣を捧げ、頓て十津河を尋てぞ、分入らせ給ける。其道の程三十餘里が間には、絕て人里も無りければ、或は

十六善神―大般若經の守護神

柿の衣―赤色無文の衣

龍樓鳳闕―皇居

華軒香車―立派なる車

濱ゆふ―浦邊に生ずる萬年青の如き植物

て、御經を皆打移して見けるが、から〳〵と打笑て、大般若の櫃の中を、能々捜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄弉三藏こそ御座しけれと戯れければ、兵皆一同に笑て門外へぞ出にける。是偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護に依る命也と、信心肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。斯ては、南都邊の御隱家も難叶ければ、則般若寺を御出有て、熊野の方へぞ落させ給ける。御供の衆には、光林房玄尊、赤松律師則祐、木寺相摸、岡本三河房、武藏房、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼此以上九人也。宮を始奉て、御供の者迄も、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半に責め、其中に年長ぞるを先達に作立、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。此君元より龍樓鳳闕の内に長とならせ給て、華軒香車の外を出させ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は、定めて叶はせ給はじと、御供の人々、兼ては心苦しく思けるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる踏皮脚巾草鞋を召て、少も草臥たる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、懈らせ給はざりければ、路次に行逢ける道者も、勤修を積める先達も、見尤る事無りけり。由良湊を見渡せば、澳漕舟の梶をたえ、浦の濱ゆふ幾重とも、しらぬ浪路に鳴千鳥、紀伊路の遠山渺々と、藤代の松に懸れる

隱形の咒―摩利支天經に見ゆ。

させ可レ給様も無りける上、透間もなく、兵既に寺内に打入たれば、紛れて御出あるべき力もなし。さらばよし自害せんと思召て、既に推膚脱せ給たりけるが、事叶はざらん期に臨で、腹を切らん事は最可レ安。若やと隱れて見ばやと思召返して、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀懸て置たる大般若の唐櫃三あり。二の櫃は未レ開レ蓋、一の櫃は御經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。此蓋を開たる櫃の中へ、御身を縮めて伏させ給ひ、其上に御經を引かづきて、隱形の咒を御心の中に唱てぞ御座しける。若捜し被レ出ば、頓て突立んと思召て、氷の如くなる刀を拔て御腹に指當て、兵、此にこそと云んずる一言を待せ給ける御心の中、推量るも尚可レ淺。去程に、兵佛殿に亂入て、佛壇の下天井の上迄も、無二殘所一捜しけるが、餘に求かねて、是體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃を開て見よとて、蓋したる櫃二を開て、御經を取出し、底を飜して見けれども、おはせず。蓋開たる櫃は見るまでも無とて、兵皆寺中を出去ぬ。宮は不思議の御命を續せ給ひ、夢に道行心地して、猶櫃の中に御座しけるが、若又兵立歸り、委く捜す事もや有んずらんと、御思案有て、頓て前に兵の捜し見たりつる櫃に、入替らせ給てぞ御座しける。案の如く、兵共又佛殿に立歸り、前に蓋の開たるを見ざりつるが無二覺束一と

鶉の床―鶉の臥す床即ち叢

候人―門跡家に使はる人

へ人を遣して、法華經奉納の所を見せけるに、俗名の時政を法師の名に替て、奉納筒の上へ、大法師時政と書たることそ不思議なれ。されば今相摸入道七代を過て、一天下を保けるも、江島の辨才天の御利生、又は過去の善因に感じてける故也。今の高時禪門、已に七代を過、九代に及べり。されば可亡時刻到來して、斯る不思議の振舞をせられける歟とぞ覺ける。

○大塔宮熊野落事

大塔宮二品親王は、笠置城の安否を被聞召爲に、暫南都の般若寺に忍て御座有けるが、笠置城已に落て、主上被囚させ給ぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上に迫て、天地雖廣御身を可被藏所なし、日月雖明長夜に迷へる心地して、晝は野原の草に隱れて、露に臥す鶉の床に御泪を爭ひ、夜は孤村の辻に彳て、人を尤る里の犬に御心を被惱、何とても御心安かるべき所無りければ、斯ても暫はと被思召ける處に、一乘院の候人按察法眼好專、如何して聞たりけん、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄たりける。折節宮に奉附たる人、一人も無りければ、一防防て落

柳裏―裏の青きをいふ

の中に在て、淺猿しかりし擧動也。

○時政參二籠江島一事

時已に澆季に及で、武家天下の權を執事、源平兩家の間に落て、度々に及べり。然ども天道は必盈を虧故に、或は一代にして滅び、或は一世をも不レ待して失ぬ。今相摸入道の一家天下を保事已に九代に及ぶ。此事有レ故。昔鎌倉草創の始、北條四郎時政江島に參籠して、子孫の繁昌を祈けり。三七日に當りける夜、赤き袴に柳裏の衣著たる女房の、端嚴美麗なるが、忽然として時政が前に來て告て曰、汝が前生は箱根法師也。六十六部の法華經を書寫して、六十六箇國の靈地に奉納したりし善根に依て、再び此土に生る事を得たり。去ば子孫永く日本の主と成て、榮花に可レ誇。但其擧動違所あらば、七代を不レ可レ過。吾所レ言不審あらば、國々に納し所の靈地を見よと云捨て歸給ふ。其姿をみれば、さしも嚴しかりつる女房、忽に臥長二十丈許の大蛇と成て、海中に入にけり。其跡を見に、大なる鱗を三つ落せり。時政所願成就しぬと喜て、則彼鱗を取て、旗の紋にぞ押たりける。今の三鱗形の紋是也。其後辨才天の御示現に任て、國々の靈地

正稅―年貢

夫―人夫

外樣―外來の臣

來て、國家敗亡しぬと覺ゆ。哀國主德を治め、武家仁を施して、消レ妖謀を被レ致よかしと云けるが、果して思知るゝ世に成にけり。彼仲範實に未然の凶を鑒ける博覽の程こそ難レ有けれ。相摸入道斯る妖恠にも不レ驚、增々奇物を愛する事止時なし。或時庭前に犬共集て嚙合ひけるを見て、此禪門面白き事に思て、是を愛する事骨髓に入れり。則諸國へ相觸て、或は正稅官物に募りて犬を尋、或は權門高家に仰て是を求ける間、國々の守護國司、所々の一族大名、十匹二十匹飼立て、鎌倉へ引進す。是を飼に魚鳥を以てし、是を繋ぐに金銀を鏤む。其弊甚多し。輿にのせて路次を過る日は、道を急ぐ行人も、馬より下て是に跪き、農を勤る里民も、夫に被レ執て是を舁く。如レ此賞翫不レ輕ければ、肉に飽き錦を著たる奇犬、鎌倉中に充滿して、四五千匹に及べり。月に十二度、犬合の日とて、被レ定しかば、一族大名御內外樣の人々、或は堂上に座を列ね、或は庭前に膝を屈して見物す。于レ時兩陣の犬共を、一二百匹宛放し合せたりければ、入違に追合て、上に成下に成、嚙合聲天を響し地を動す。心なき人は是を見て、あら面白や、唯戰に雌雄を決するに不レ異と思ひ、智ある人は是を聞て、あな忌々しや、偏に郊原に尸を爭ふに似たりと悲めり。見聞の準ふる處、耳目雖レ異、其前相皆鬪諍死亡

えうればし—妖靈星

城入道—時顯のこと

南家の—藤原武智麻呂の子孫をいふ

り來とも知ぬ新座本座の田樂共十餘人、忽然として座席に列てぞ舞歌ひける。其興甚尋常に越たり。暫有て、拍子を替て歌ふ聲を聞けば、天王寺のやえうれぼしを、見ばやとぞ拍子ける。或官女此聲を聞て、餘の面白さに、障子の隙より是を見るに、新座本座の田樂共と見えつる者、一人も人にては無りけり。或は觜勾て鵄の如くなるもあり、或は身に翅有て、其形山伏の如くなるもあり。異類異形の化者共が、姿を人に變じたるにてぞ有ける。官女是を見て、餘に不思議に覺ければ、人を走かして、城入道にぞ告たりける。入道取物も取敢ず、太刀を執て其酒宴の席に臨む。中門を荒かに歩ける跫を聞て、化者は搔消樣に失せ、相摸入道は前後も不知醉臥たり。燈を挑させて、遊宴の座席を見るに、誠に天狗の集りけるよと覺て、踏汚したる疊の上に、禽獸の足跡多し。城入道暫く虛空を睨て立たれ共、敢て眼に遮る者もなし。良久して相摸入道驚覺て起たれ共、惘然として更に所知なし。後日南家の儒者、刑部少輔仲範、此事を傳聞て、天下將亂時、妖靈星と云惡星下て、災を成すといへり。而も天王寺は佛法最初の靈地にて、聖德太子自ら日本一州の未來記を留給へり。されば彼化者が、天王寺の妖靈星と歌ひけるこそ怪しけれ。如何樣天王寺邊より、天下の動亂出

六趣の群類―地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上無數の生物

田樂―鎌倉時代より室町時代へかけて行はれたる遊藝、中古田植の時農人を慰めん爲に笛鼓を鳴らして舞ひ踊りたるに起る

づから百二十筋の燈心を束ね、盞の御油錠に油を入て、自掻立させ給し燈明也。是偏に皇祖の無窮を耀さん爲の御願、兼ては六趣の群類冥闇を照す慧光法燈の明なるに思召準へて、被始置し常燈なれば、未來永刧に至迄、消る事なかるべきに、山鳩飛來て打消けるこそ不思議なれ。其を又鼬の食殺しけるも不思議也。

○相摸入道弄田樂幷闘犬事

又其比洛中に田樂を弄事昌にして、貴賤擧て是に著せり。相摸入道此事を聞及び、新座本座の田樂を呼下して、日夜朝暮に弄事無他事。入興の餘に、宗徒の大名達に田樂法師を一人づゝ預て、裝束を飾らせける間、是は誰がし殿の田樂、彼は何がし殿の田樂なんど云て、金銀珠玉を逞し、綾羅錦繡を飾れり。宴に臨で一曲を奏すれば、相摸入道を始として、一族大名我劣らじと、直垂大口を解で抛出す。是を集て積に、宛山の如し。其幣幾千萬と云數を不知。或夜一獻の有けるに、相摸入道數盃を傾け、醉に和して立て舞事良久し。若輩の興を勸る舞にてもなし、又狂者の言を巧にする戯にも非ず。四十有餘の古入道、醉狂の餘に舞ふ舞なれば、風情可有共覺ざりける處に、何よ

端にある金具にて、かけ合せて帯をしむる用をなすもの

承塵―鴨柄又は敷居の横に長く亙せる木

世皆不レ奈二鬻皮之恥一といへり。就レ中武家如レ此許容の上は、賢息二人の流罪争無二赦免御沙汰一乎。夫伯夷叔齊飢て何の益か有し。許由巣父遁て不レ足レ用。抑隠レ身永斷二末葉之一跡一、與レ仕レ朝遠耀二前祖之無窮一、是非得失何處有乎。與二鳥獸一同レ群、孔子所レ不レ執也と、資明卿理を盡して被レ責ければ、宣房卿顔色誠に屈服して、以レ罪棄レ生、則違二古賢夕改之勸一、忍二垢苟全一、則犯二詩人胡顔之譏一と、魏の曹子建か詩を獻ぜし表に書たりしも、理とこそ存ずれとて、遂に參仕の勅答をぞ被レ申ける。

○中堂新常燈消事

其比都鄙の間に、希代の不思議共多りけり。山門の根本中堂の内陣へ、山鳩一番飛來て、新常燈の油錠の中に飛入て、ふためきける間、燈明忽に消にけり。此山鳩、堂中の闇さに行方に迷うて、佛壇の上に翅を低て居たりける處に、承塵の方より、其色朱を注たる如くなる鼬一つ走り出て、此鳩を二つながら食殺てぞ失にける。抑此常燈と申は、先帝山門へ臨幸成たりし時、古桓武皇帝の自ら挑させ給し常燈に準へて、御手

尸位—職責を盡さずして位にあること
懷寵—榮位に戀々たること
後榮—後日の繁榮
鈎—革帶の

萬里小路大納言宣房卿は、元來前朝舊勞の寵臣にておはせし上、子息藤房季房二人、笠置城にて被生捕て、被處遠流しかば、父の卿も罪科深き人にて有べかりしを、賢才の聞え有とて、關東以別儀其罪を宥め、當今に可被召仕之由奏し申す。依之日野中納言資明卿を勅使にて、此旨を被仰下ければ、宣房卿勅使に對して被申けるは、臣雖不肖之身、以多年奉公之勞、蒙君恩寵、官祿共に進み、剩汚政道輔佐之名、事君之禮、値其有罪、犯嚴顏以道諫諍。三諫不納、奉身以退。有匡正之忠無阿順之從、是良臣之節也。若見可諫而不諫謂之尸位。見可退而不退、謂之懷寵。懷寵尸位國之奸人也と云へり。君今不義の行おはして、爲武臣被辱給へり。是臣か預依不知處、雖不獻諫言、世人豈其無罪許哉。就中長子二人、被處遠流之罪、我已七旬の齡に傾けり。後榮爲誰にか期せん。前非何ぞ又恥ざらんや。二君の朝に仕て、辱を衰老の後に抱かんよりは、伯夷が行を學て、飢を首陽の下に忍ばんには不如と、涙を流て宣ひければ、資明卿感涙を押へ兼て、暫は言をも宣はず。良有て宣ひけるは、忠臣不必擇主、見仕而可治而已也といへり。去ば百里奚は二仕秦穆公、永令致霸業、管夷吾翻佐齊桓公、九令朝諸侯。主無以道射鉤之罪、

別當—撿非違使別當

北極—皇位

太平記　卷第五

○持明院殿御即位事

元弘二年三月二十二日、後伏見院第一御子、御年十九にして、天子の位に即せ給ふ。御母は竹林院左大臣公衡の御娘、後には廣義門院と申し御事也。同年十月二十八日に、河原の御禊有て、十一月十三日に大嘗會を被遂行。關白は鷹司左大臣冬教公、別當は日野中納言資名卿にてぞおはしける。いつしか當今奉公の人々は、皆一時に望を達して、門前市を成し、堂上花の如し。中にも梶井二品法親王尊胤は、天台座主に成せ給て、大塔梨本の兩門跡を幷て、御管領有しかば、御門徒の大衆群集して、御拜堂の儀式嚴重也。加之、御室の二品法親王法守、仁和寺の御門跡に御移有て、東寺一流の法水を湛て、北極萬歳の聖運を祈り給ふ。是皆後伏見院の御子、今上皇帝の御連枝也。

○宣房卿二君奉公事

雞人―時を奏する人
萩戸―清涼殿の室の名

迢として、月出東南天、漁船の歸る程見えて、一燈柳岸に幽也。暮れば蘆岸の煙に繋船、明れば松江の風に揚帆、浪路に日數を重れば、都を御出有て後、廿六日と申に、御船隱岐國に著にけり。佐々木隱岐判官貞淸、國府島と云所に、黑木の御所を作て皇居とす。玉扆に咫尺して、被召仕ける人とては、六條少將忠顯、頭大夫行房、女房には三位殿の御局計也。昔の玉樓金殿に引替て、憂節茂き竹椽、涙隙なき松の墻、一夜を隔る程も、可堪忍御心地ならず。雞人曉を唱る聲、警固の武士の番を催す聲計り、御枕の上に近ければ、夜のおとゞに入せ給ても、露まどろませ給はず。萩戸の明るを待し朝政なけれ共、巫山の雲雨御夢に入時も、誠に曉ごとの御勤、北辰の御拜も不怠。今年如何なる年なれば、百官無罪愁の涙を滴配所月、一人易位宸襟を惱他鄕風給らん。天地開闢より以來、斯る不思議を不聞。されば懸天日月も、爲誰明なる事を不耻。無心草木も悲之、花開事を忘つべし。

面縛―手を背に縛して面を前に向くるをいふ
沈々―ひつそりと靜かなるさま
迢々―遙かなるさま

生捕て、軍門の前に引出す。呉王已に被面縛、呉の東門を過給ふに、忠臣伍子胥が諫に依て、被刎首時、幢の上に懸たりし一雙の眼、三年まで未枯して有けるが、其眸明に開け、相見て笑へる氣色なりければ、呉王是に面を見事、さすが恥かしくや被思けん、袖を顔に押當て、低首過給ふ。數萬の兵見之、涙を流さぬは無りけり。即呉王を典獄の官に下され、會稽山の麓にて、遂に首を刎奉る。古來より俗の諺曰、會稽の恥を雪るとは、此事を云なるべし。自是越王呉を并するのみに非ず、晉楚齊秦を平げ、覇者の盟主と成しかば、其功を賞して、范蠡を萬戸侯に封ぜんとし給ひしか共、范蠡曾て不受其祿。大名の下には、久しく不可居。功成名遂而身退は天の道也とて、遂に姓名を替へ、陶朱公と呼れて、五湖と云所に身を隱し、世を遁てぞ居たりける。釣して蘆花の岸に宿すれば、半蓑に雪を止め、歌て楓葉の陰を過れば、孤舟に秋を載たり。一蓬の月萬頃の天、紅塵の外に遊で、白頭の翁と成にけり。高徳此事を思準て、一句の詩に千般の思を述べ、竊に叡聞にぞ達しける。「去程に先帝は、出雲の三尾湊に十餘日御逗留有て、順風に成にければ、船人纜を解て御艤して、兵船三百餘艘、前後左右に漕並て、萬里の雲に泝。時に滄海沈々として、日沒西北浪、雲山迢

玉趾—御足

伐柯其規不遠—詩經云伐柯其則不遠、其手本手近にあるをいふ

を焼拂ふ。齊楚の兩國も、越王に志を通ぜしかば、三十萬騎を出して、范蠡に勠レ力。呉王聞レ之、先晉國の戰を閣て、呉國へ引返し、越に戰を挑とすれば、前には呉越齊楚の兵、如二雲霞一待懸たり。後には晉國の強敵、乘レ勝追懸たり。呉王大敵に前後を裹れて、可レ遁方も無りければ、輕レ死戰ふ事三日三夜、范蠡新手を入替て、不レ繼レ息攻ける間、呉の兵三萬餘人討れて、僅に百騎に成にけり。呉王自相當る事三十二箇度、夜半に解レ圍、六十七騎を隨へ、姑蘇山に取上り、越王に使者を立て曰、君王昔會稽山に苦し時、臣夫差是を助たり。願は、吾今より後、越の下臣と成て、君王の玉趾を戴ん。君若會稽の恩を不レ忘、臣が今日の死を救ひ給へと、言を卑し厚レ禮、降ぜん事をぞ被レ請ける。越王聞レ之、古の我が思に、今人の悲みさこそと哀に思知給ければ、呉王を殺すに不レ忍、救二其死一と思給へり。范蠡聞レ之、越王の御前に參て、犯レ面申けるは、伐レ柯其規不レ遠。會稽の古は、天越を呉に與へたり、而を呉王取事無して、忽に此害に逢り。今却て天越に呉を與へたり、無二取事一、越又如レ此害に逢べし。君臣共に肺肝を碎て、呉を謀る事二十一年、一朝にして棄ん事豈不レ悲乎。君行レ非時不レ順臣の忠也と云て、呉王の使者未レ歸前に、范蠡自攻鼓を打て兵を進め、遂に呉王を、

砥より出でたる—新に磨ぎたる如く光り輝くをいふ

幢—上部に小き旗をつけたる鉾

かねて、よしや身を殺し、危きを助んとや思けん、伍子胥又或時唯今新に砥より出たる、青蛇の劍を持て參りたり。拔て呉王の御前に拉で申けるは、臣此劍を磨事、退邪拂敵也。倩國の傾んとする其基を尋ぬれば、皆西施より出たり。是に過たる敵不可有。願は刎西施首、社稷の危を助んと云し、牙を嚙て立たりければ、忠言逆耳時、君不犯非云事なければ、呉王大に忿て、伍子胥を誅せんとす。伍子胥敢て是を不悲。諍ひ諫めて死節、是臣下の義也。我正に越の兵の手に死なんよりは、寧君王の手に死事、恨の中の悅也。但君王臣か忠諫を忿て、吾に賜死事、是天已に棄君也。君越王の爲に滅れて、刑戮の罪に伏ん事、三年を不可過。願は臣が穿兩眼、呉の東門に懸られて、其後首を刎給へ。一雙の眼未枯前に、君勾踐に被亡て、死刑に赴き給はんを見、一笑を快せんと申ければ、呉王彌忿て、即伍子胥を被誅、穿其兩眼呉の東門幢上にぞ被懸ける。斬りし後は、君惡を積ども、臣敢て不獻諫、唯群臣口を噤み、萬人目を以てす。范蠡聞之、時已に到りぬと悅て、自二十萬騎の兵を率して、呉國へぞ押寄ける。呉王夫差は、折節晉國呉に叛く間て、晉國へ被向たる隙なりければ、防ぐ兵一人もなし。范蠡先西施を取返して、越王の宮へ歸入奉り、姑蘇臺

麝臍―麝は獸の名、腹部に塊狀のものありて香氣深し、臍を愛するものなりとぞ

瑤階―美しき階段

る。されば一度入宮中、君王の傍に侍しより、呉王の御心浮て、夜は終夜婬樂をのみ嗜で、世の政をも不聞給。晝は盡日遊宴をのみ事として、國の危をも不顧。金殿挿雲、四邊三百里が間、山河を枕の下に直下ても、西施と宴せし夢の中に、興を催ん爲なりき。輦路に無花春の日は、麝臍を埋て履を薫し、行宮に無月夏の夜は、螢火集て燭に易ふ。婬亂重日更無止時しかば、上荒下廢れ共、佞臣は阿て諫せず。呉王萬事醉如忘。伍子胥見之、呉王を諫て申けるは、君不見、殷紂王妲妃に迷ひ、世を亂り、周の幽王褒姒を愛して國を傾事を。君今西施を婬し給へる事過之。國の傾敗非遠。願くは君止之給へと、犯嚴顏諫申けれ共、呉王敢て不聞給。或時又呉王西施に爲宴、召群臣南殿の花に醉を勸め給ける處に、伍子胥威儀を正しくして參たりけるが、さしも敷玉鏤金瑤階を登るとて、其裾を高くかゝげたる事、宛如渉水時。其怪き故を問に、伍子胥答申けるは、此姑蘇臺越王の爲に被亡、草深く露滋き地とならん事非遠。臣若其迄命あらば、住にし昔の跡とて尋見ん時、さこそ袖より餘る荆棘の露も、瀼々として深からんずらめと、行末の秋を思ふ故に、身を習はして裾をば褰る也とぞ申ける。忠臣諫を納れ共、呉王曾て不用給しかば、餘に諫

展轉の思―伏しまろびて物を思ふこと
小鹿の角のつかの間―暫時の間

擒共、西施を送他國事は不可有とぞ宣ひける。范蠡流涙申けるは、誠に君展轉の思を計るに、臣非不悲と云へ共、若今西施を惜給はゞ、呉越の軍再び破て、呉王又可發兵。去程ならば越國を呉に被并のみに非ず、西施をも可奪、社稷をも可被傾。臣倩計るに、呉王好婬迷色事甚し。西施呉の後宮に入給ふ程ならば、呉王是に迷て、失政事非所疑。國弊え民背ん時に及で、起兵被攻呉、勝事を立處に可得。是子孫萬歳に及で、夫人連理の御契可久道となるべしと、一度は泣、一度は諫て、盡理申ければ、越王折理、西施を呉國へぞ被送ける。西施は小鹿の角のつかの間も、別れて可有物かはと、思ふ中をさけられて、未幼き太子王鼫輿にも不云知、思置、ならはぬ旅に出給へば、別を慕泪さへ、暫が程も止らで、袂の乾く隙もなし。越王は又、是や限の別なる覽と、堪ぬ思に伏沈て、其方の空を遙々と詠めやり給へば、遲々たる暮山の雲、いとゞ泪の雨となり、寤しき床に獨ねて、夢にも責て逢見ばやと、欹枕臥給へば、無添甲斐化に、無爲方歎給ふも、げに理なり。彼西施と申は、天下第一の美人也。妝成て一度笑ば、百の媚君が眼を迷して、漸地上に無花賊と疑ふ。蟾閑て僅に見れば、千態人の心を蕩して、忽に雲間に失月賊と奇ま

輕軒―迅き車

紫陌―都の道、東西な陌といふ

丹墀―丹朱を以て地を塗りたるをいふ、宮庭の事

住來故宮を見給へば、いつしか三年に荒はて、梟鳴二松桂之枝一、狐藏二蘭菊之叢一。無二掃人閑庭に落葉滿て蕭々たり。越王免レ死歸給ぬと聞えしかば、范蠡竝に王馳輿を宮中へ入奉りぬ。越王の后に、西施と云美人御座けり。容色勝レ世嬋娟無レ類しかば、越王殊に寵愛甚しくして、暫も側を放れ給はざりき。越王捕レ吳給ひし程は、爲レ遁二其難一、側レ身隱居給たりしが、越王歸り給ふ由を聞給ひて、則後宮に歸り參り給ふ。年の三年を待わびて、堪ぬ思に沈給ける歎の程も呈れて、鬢疎かに膚消たる御形、最わりなくらうたけて、梨花一枝春雨に綻び、喩へん方も無りけり。公卿大夫文武百司、此彼より馳集りける間、輕軒馳二紫陌塵一、冠佩瑲二丹墀月一、堂上堂下如二再開花一。斯りける處に、自二吳國一使者來れり。越王驚て、以二范蠡一事の仔細を問給ふに、使者答曰、我君吳王好レ婬重レ色、尋二美人一給ふ事天下に遍し。而れ共未レ如二西施一不レ見顏色。越王出二會稽山圍一時、有二一言約一。早く彼西施を吳の後宮へ奉二册入一、備二后妃位一との使也。越王聞レ之給し、我吳王夫差が陣に降て、忘レ恥嘗二石淋一助レ命事、全保レ國身を榮やかさんとには非ず、唯西施に爲レ結二偕老契一なりき。生前に一度別て、死して後冥二再會一保二萬乘國一何かせん。されば縱吳越の會盟破れて、二度我爲レ吳成

五味―辛、酸、鹹、苦、甘

れ共無驗、醫師治すれ共不愈、露命已に危く見え給ける處に、他國より名醫來て申けるは、御病實に雖重、醫師の術及まじきに非ず。石淋の味を嘗て、五味の樣を知する人あらば、輒く可奉療治とぞ申ける。さらば誰か此石淋を嘗て、其味をしらすべきと問に、左右の近臣相顧て、是を嘗る人更になし。勾踐是を傳聞て、泪を押へて宣く、我會稽の圍に逢し時、已に被誅べかりしを、今に命助置れて、天下の赦を待事、偏に君王慈惠の厚恩也。我今是を以て不報其恩、何の日をか期せんとて、潜に石淋を取て、是を嘗て、其味を醫師に被知。醫師味を聞て加療治、吳王の病忽に平愈してげり。吳王大に悅で、人有心助我死、我何ぞ是を謝する心無らんやとて、越王を自牢出し奉るのみに非ず。剩越の國を返し與へて、本國へ返り去べしとぞ被宣下ける。爰に吳王の臣、伍子胥と申者、吳王を諫て申けるは、天與不取却て受其咎と云へり。此時越の地を不取、勾踐を返し被遣事、千里の野邊に虎を放つが如し。禍可在近と申けれ共、吳王是を不聞給、遂に勾踐を本國へぞ被返ける。越王已に車の轅を廻して、越の國へ歸り給ふ處に、蛙其數を不知車の前に飛來。勾踐是を見給て、是は勇士を得て、素懷を可達瑞相也とて、車より下て是を拜し給ふ。斯て越の國へ歸て、

巫覡—男女のかんなぎ

杻械を入て、土の牢にぞ入奉りける。夜明日暮れ共、月日の光をも見給はねば、一生瞑暗の中に向て、歳月の遷易をも知給はねば、泪の浮ぶ床の上、さこそは露も深かりけめ。去程に范蠡越の國に在て、此事を聞に、恨骨髄に徹て難忍。哀如何なる事をもして、越王の命を助け、本國に歸り給へかし。諸共に謀を運らして、會稽山の恥を雪めんと、肺肝を碎て思ければ、窶身替形、簣に魚を入て、自ら是を荷ひ、魚を賣商人の眞似をして、吳國へぞ行たりける。姑蘇城の邊にやすらひて、勾踐のおはする處を問ければ、或人委く敎へ知せけり。范蠡嬉しく思て、彼獄の邊に行たりけれ共、禁門警固隙無りければ、一行の書を魚の腹の中に收て、獄の中へぞ擲入ける。勾踐奇く覺えて、魚の腹を開て見給へば、

西伯囚羑里。重耳走翟。皆以爲王霸。莫死許敵。

とぞ書たりける。筆の勢文章の體、まがふべくもなき范蠡が業也と見給ひければ、彼未だ憂世に存へて、爲我肺肝を盡しけりと、其志の程、哀にも又憑しくも覺えけるにこそ、一日片時も生けるを憂しとかこたれし我身ながらの命も、却て惜くは思はれけれ。斯りける處に、吳王夫差俄に石淋と云病を受て、身心鎖に惱亂し、巫覡祈

窮鼠云々―鹽鐵論に出づ

白車素車―罪を請ひ、神に薦り、人を弔する時等に用ふ

鐵騎の勇士也。吳の兵雖レ多、昨日の軍に功有て、自レ今後は身を全して、賞を貪ん事を思ふべし。越の兵は小勢なりといへ共、志を一にして、而も遁れぬ所を知れり。窮鼠却嚙レ猫、闘雀不レ恐レ人といへり。吳越重て戰はゞ、吳は必危に可レ近。不レ如、先越王の命を助け、一畝の地を與て、吳の下臣と成さんには。然らば君王吳越兩國を并するのみに非ず、齊楚秦趙も悉く不レ朝と云事有べからず。是根を深し、蔕を堅する道也と、理を盡て申ければ、吳王即欲に耽る心を逞して、さらば早會稽山の圍を解て、勾踐を可レ助と宣ひける。太宰嚭歸て、大夫種に此由を語りければ、大夫種大に悅で、會稽山に馳歸り、越王に此旨を申せば、士卒皆色を直して、出二萬死一逢二一生一、偏に大夫種が智謀に懸れりと、喜ばぬ人も無りけり。越王已に降旗を被レ建ければ、會稽の圍を解て、吳の兵は吳に歸り、越の兵は越に歸る。勾踐即太子王鼫與をば、大夫種に附て、本國へ歸し遣し、我身は白馬素車に乘て、越の璽綬を頸に懸け、自ら吳の下臣と稱して、吳の軍門に降り給ふ。斯りけれ共、吳王猶心ゆるしや無りけん、君子不レ近二刑人一とて、勾踐に面を不レ見給、剰勾踐を典獄の官に被レ下、日に行事一驛に驅して、吳の姑蘇城へ入給ふ。其有樣を見る人、淚懸らぬ袖はなし。經レ日姑蘇城に著給へば、即

一畝の民と成ん事を請しむ。願は先日の罪を被レ赦、今日の死を助け給へ。將軍若勾踐の死を救ひ給はゞ、越の國を獻二吳王一成二湯沐地一、其重器を將軍に奉り、美人西施を洒掃の妾たらしめ、一日の歡娯に可レ備。若夫請所レ望不レ叶、遂に勾踐を罪せんとならば、越の重器を燒棄、士卒の心を一にして、吳王の堅陣に懸入、軍門に尸を可レ止。臣平生將軍と交を結ぶ事膠漆よりも堅し。生前の芳恩唯此事にあり。將軍早く此事を吳王に奏して、臣が胸中の安否を存命の中に知しめ給へと、一度は怒り、一度は歎き、言を盡して申ければ、太宰嚭顏色誠に解て、事以不レ難、我必越王の罪をば可二申宥一とて、軈吳王の陣へぞ參りける。太宰嚭卽吳王の玉座に近附き、事の仔細を奏しければ、吳王大に怒て、抑吳と越と國を爭ひ、兵を擧る事、今日のみに非ず。然るに勾踐運窮て、吳の擒となれり。是天の予に與へたるに非や。汝是を乍レ知、勾踐が命を助けんと請ふ。敢て非二忠烈之臣一と宣ひければ、太宰嚭重て申けるは、臣雖二不肖一、苟も將軍の號を被レ許、越の兵と戰を致す日、運レ謀大敵を破り、輕レ命勝事を快せり。是偏に臣が丹心の功と云つべし。爲二君王一天下の太平を謀らんに、豈一日も不レ盡レ忠傾レ心や。倩計二事是非一、越王戰に負て、勢盡ぬといへ共、殘處の兵猶三萬餘騎、皆逞兵

尺寸の謀—些細の計略

轅門—軍門

め給へ。臣雖二不敏一欺二呉王一、君王の死を救ひ、本國に歸て、再大軍を起し、此恥を濯んと思ふ。今此山を圍んで一陣を張しむる呉の上將軍太宰嚭は、臣が古の朋友也。久く相馴て、彼が心を察せしに、是誠に血氣の勇者なりと云へ共、飽まで其心に欲有て、後の禍を不レ顧。又彼呉王夫差の行跡を語るを聞しが、智淺して謀短く、色に婬して道に暗し。君臣共に、何も欺くに易き所也。抑今越の戰無レ利、爲レ呉被レ圍ぬる事も、君范蠡が諫を用ひ不レ給故に非ずや。願は君王臣が尺寸の謀を被レ許、敗軍數萬の死を救ひ給へと諫申ければ、越王理に折て、敗軍の將は再び不レ謀と云へり。自レ今後の事は、併大夫種に可レ任と宣て、重器を被レ燒事を止、太子の自害をも被レ止けり。大夫種則君の命を請て、冑を脱ぎ旗を卷て、會稽山より馳下り、越王勢盡て、呉の軍門に降ると呼りければ、呉の兵三十萬騎、勝時を作て、皆萬歲を唱ふ。大夫種は則呉の轅門に入て、君王の陪臣、越勾踐の從者、小臣種慎で呉の上將軍の下執事に屬すと云て、膝行頓首して、太宰嚭が前に平伏す。太宰嚭床の上に坐し、帷幕を揚させて、大夫種に謁す。大夫種敢て平視せず、低レ面流レ涙申けるは、寡君勾踐運極まり勢盡て、呉の兵に圍れぬ。仍今小臣種をして、越王長く呉王の臣と成、

九泉—黄泉路

三途—火途、血途、刀途

大夫種—大夫は官名、種は名

雖二百度戰一、越王遂に打負て、七萬餘騎討れにけり。勾踐こらへ兼て、會稽山に打上り、越の兵を數るに、打殘されたる兵、僅に三萬餘騎也。其も半は手を負て、悉箭盡て鋒折たり。勝負を呉越に伺て、未だ何方へも不レ附つる隣國の諸侯、多く呉王の方に馳加はりければ、呉の兵彌重て、三十萬騎會稽山の四面を圍事、如二稻麻竹葦一也。越王帷幕の内に入り、兵を集めて宣ひけるは、我運命已に盡て、今此圍に逢へり。是全く非二戰咎一、天亡レ我。然れば我明日に、士と共に敵の圍を出て、呉王の陣に懸入り、尸を軍門に曬し、恨を再生に可レ報とて、越の重器を積で、悉燒捨んとし給ふ。又王鼫與とて、今年八歲に成給ふ最愛の太子、越王に隨て、同く此陣に御座けるを呼出し奉て、汝未幼稚なれば、吾死に殿れて敵に捕れ、憂目を見ん事も可二心憂一。若又我爲レ敵虜れて、我汝より先立ば、生前の思難レ忍。不レ如汝を先立て、心安く思切り、明日の軍に討死して、九泉の苔の下、三途の露の底迄も、父子の恩愛を不レ捨と思ふ也とて、左の袖に拭レ涙、右の手に提レ劍、太子の自害を勸め給ふ時に、越王の左將軍に、大夫種と云臣あり。越王の御前に進出で申けるは、生を全くして命を待事、遠くして難く、死を輕くして節に隨ふ事、近くして易し。君暫く越の重器を燒捨太子を殺す事を止

馬筏―水に強き馬を上流に弱き馬を下流に立並べ強弱相助けて河を渡す事

王是を見て、思には不レ似小勢なりけると蔑て、十萬騎の兵を、同時に馬を河水に打入させ、馬筏を組で打渡す。比は二月上旬の事なれば、餘寒猶烈くして、河水氷に連れり。兵手凍て弓を控に不レ叶。馬は雪に泥て、懸引も不二自在一。され共越王攻鼓を打て進まれける間、越の兵我先にと雙レ轡懸入る。呉國の兵は、兼てより、敵を難所におびき入て、取籠て討んと議したる事なれば、態と一軍もせで夫椒縣の陣を引退て、會稽山へ引籠る。越の兵勝に乘て北るを追事三十餘里、四隊の陣を一陣に合せて、左右を不レ顧、馬の息も切るゝ程、思々にぞ追たりける。日已に暮なんとする時に、呉の兵二十萬騎、思ふ圖に敵を難所へおびき入て、四方の山より打出て、越王勾踐を中に取籠、一人も不レ漏と攻戰ふ。越の兵は今朝の軍に遠懸をして、人馬共に疲れたる上、無勢なりければ、呉の大勢に被レ圍、一所に打寄て扣へたり。進で前なる敵に蒐らんとすれば、敵は嶮岨に支へて、鏃を調へて待懸たり。引返て後なる敵を拂はんとすれば、敵は大勢にて、越の兵疲れたり。進退此に谷て、敗亡已に極れり。され共越王勾踐は、破レ堅摧レ利事、項王が勢を呑、樊噲が勇にも過たりければ、大勢の中へ懸入て、十文字に懸破、巴の字に追廻らす。一所に合て三處に別れ、四方を拂て八面に當る。頃刻に變化して、

天時は云々—孟子公孫丑下に出づ

先則制人—史記本紀七に出づ

時軍の勝負を計らば、天下の人皆時を知れり、誰か軍に不レ勝。若春夏は陽の時にて罰を不レ行と云はゞ、殷の湯王の桀を討しも春也。周の武王の紂を討しも春也。されば天時は不レ如二地利一、地利は不レ如二人和一といへり。而るに汝今可レ行二征罰一時に非ずと我を諫むる、是汝が智慮の淺き處の二也。次に、呉國に伍子胥が有らん程は、呉を亡す事不レ可レ叶と云はゞ、我遂に父祖の敵を討て、恨を泉下に報ぜん事有るべからず。唯徒に伍子胥が死せん事を待たば、死生有レ命、又は老少前後す。伍子胥と我と何をか先とする。此理を不レ辨、我征罰を可レ止や。此汝が愚の三也。抑我他日に及で兵を召事、呉國へも定て聞えぬらん。事遲怠して却て呉王に被レ寄なば、悔とも不レ可レ有レ益。先則制レ人、後則被二人制一といへり。事已に決せり。且くも不レ可レ止とて、越王十一年二月上旬に、勾踐自ら十萬餘騎の兵を率して、呉國へぞ被レ寄ける。呉王夫差是を聞て、小敵をば不レ可レ欺とて、自ら二十萬騎の勢を率して、呉と越との境、夫椒縣と云所に馳向に、後に會稽山を當て、前に大河を隔て陣を取る。態と敵を討ん爲に、三萬餘騎を出して、十七萬騎をば、陣の後の山陰に、深く隱してぞ置たりける。去程に越王夫椒縣に打臨で、呉の兵を見給へば、其勢僅に二三萬騎には過じと覺えて、所々に控へたり。越

三冬―三ヶ月の冬

南面孤稱―帝王となる事、孤は王侯の謙稱

るに、今越の力を以て、呉を亡さん事は、頗以可レ難。其故は先兩國の兵を數ふるに、呉は二十萬騎、越は纔に十萬騎也。誠に以レ小大に不レ敵。是呉を難レ亡其一也。次には、以レ時計るに、春夏は陽の時にて忠賞を行ひ、秋冬は陰の時にて刑罰を專にす。時今春の始也。是征伐を可レ致時に非ず。是呉を難レ滅其二也。次に、賢人所レ歸則其國强。臣聞呉王夫差の臣下に、伍子胥と云者あり、智深して人をなつけ、慮遠くして主を諫む。渠儂呉國に有ん程は、呉を亡す事可レ難。是其三也。麒麟は角に肉有て、猛き形を不レ顯、潛龍は三冬に蟄して、一陽來復の天を待。君呉越を幷られ、中國に臨で、南面にして、孤稱せんとならば、且く伏レ兵隱レ武待レ時給べしと申ければ、其時越王大に忿て宣けるは、禮記に、父の讎には共不レ戴天といへり。我已に及二壯年一まで呉を不レ亡、共に戴二日月光一事、人の羞むる所に非や。是を以兵を集る處に、汝三の不可を擧て、我を留る事、其義一も道に不レ協。先兵の多少を數へて、可レ致レ戰ば、越は誠に呉に難レ對。而れ共軍の勝負、必しも不レ依二勢多少一、只依二時運一、又は依二將謀一。されば呉と越と戰ふ事、及二度々一雌雄互に易れり。是汝が皆所レ知也。今更に何ぞ越の小勢を以て、戰二呉大敵一事不レ協と我を可レ諫や。汝が武略の不レ足處の其一也。次に、以

て、時分を伺ひけれ共、可然隙も無りければ、君の御座ある御宿の庭に、大なる櫻木有けるを押削て、大文字に一句の詩をぞ書附たりける。

天莫空勾踐。時非無范蠡。

御警固の武士共、朝に是を見附て、何事を如何なる者が書たるやらんとて、讀かねて、則上聞に達してけり。主上は軈て詩の心を御覺り有て、龍顏殊に御快く笑せ給へども、武士共は敢て其來歴を不知、思咎る事も無りけり。抑此詩の心は、昔異朝に、呉越とてならべる二の國あり。此兩國の諸侯皆王道を不行、霸業を務としける間、呉は越を伐て取んとし、越は呉を亡して幷せんとす。如此相爭事及累年。呉越互に勝負を易しかば、親の敵となり、子の讎と成て、共に天を戴く事を恥。周の季の世に當て、呉國の主をば、呉王夫差と云、越國の主をば、越王勾踐とぞ申ける。或時此越王、范蠡と云大臣を召て宣ひけるは、呉は是父祖の敵也。我是を不討、徒に送年事、嘲を天下の人に取のみに非ず、兼ては父祖の尸を九泉の苔の下に羞しむる恨あり。然れば我今國の兵を召集て、自ら呉國へ打越、呉王夫差を亡して、父祖の恨を散ぜんと思也。汝は暫留此國、可守社稷と宣ければ、范蠡諫め申けるは、臣竊に事の仔細を計

志士仁人云々―論語衞靈公の篇に出でたる語

見義不爲云々―論語爲政の篇に出でたる語

其比備前國に、兒島備後三郎高德と云者あり。主上笠置に御座有し時、御方に參じて、擧二義兵一しが、事未レ成先に、笠置も被レ落、楠も自害したりと聞えしかば、力を失て默止けるが、主上隱岐國へ被レ遷させ給と聞て、無二貳心一一族共を集めて、評定しけるは、志士仁人無レ求レ生以害レ仁、有二殺レ身以爲一レ仁といへり。されば昔衞の懿公が北狄の爲に被レ殺て有しを見て、其臣に弘演と云し者、是を見るに不レ忍、自腹を搔切て、懿公が肝を己が胸の中に收めて、先君の恩を死後に報て失たりき。見レ義不レ爲無レ勇。いざや臨幸の路次に參り會、君を奪取奉て、大軍を起し、縱尸を戰場に曝す共、名を子孫に傳へんと申ければ、心ある一族共、皆其議に同ず。さらば路次の難所に相待て、其隙を可レ伺とて、備前と播磨との境なる、船坂山の嶺に隱れ伏、今や／＼とぞ待たりける。臨幸餘に遲かりければ、人を走らかして、是を見するに、警固の武士、山陽道を不レ經、播磨の今宿より山陰道にかゝり、遷幸を成奉りける間、高德が支度相違してけり。さらば美作の杉坂こそ究竟の深山なれ。此にて待奉んとて、三石山より直違に、道もなき山の雲を凌ぎて、杉坂へ著たりければ、主上早や院庄へ入せ給ぬと申ける間、無レ力此より散々に成けるが、せめても此所存を上聞に達せばやと思ける間、微服潛行し

相國―太政大臣

源氏大將、朧月夜―共に源氏物語に見えたる假設の人物

內證深心―諸佛心中の妙理を深く心に信ずること

廻さる覽と、憑敷こそ思召けれ。湊川を過させ給時、福原の京を被御覽て、平相國淸盛が、四海を掌に握て、平安城を此卑濕の地に遷したりしかば、無幾程亡しも、偏に上を犯さんとせし驕の末、果して天の爲に被罰ぞかしと、思召慰む端となりにけり。印南野を末に御覽じて、須磨の浦を過させ給へば、昔源氏大將の、朧月夜に名を立て、此浦に流され、三年の秋を送りしに、波只此もとに立し心地して、涙落共覺ぬに、枕は浮計に成にけりと、旅寢の秋を悲しも、理なりと被思召。明石の浦の朝霧に、遠く成行淡路潟、寄來る浪も高砂の、尾上の松に吹嵐、跡に幾重の山川を、杉坂越て美作や、久米の佐羅山さら〳〵に、今は有べき時ならぬに、雲間の山に雪見えて、遙に遠き峯あり。御警固の武士を召て、山の名を御尋あるに、是は伯耆の大山と申山にて候と申ければ、暫く御輿を被止、內證深心の法施を奉らせ給ふ。或時は雞唱抹過茅店月、或時は馬蹄踏破板橋霜、行路に日を窮めければ、都を御出有て十三日と申に、出雲の見尾湊に著せ給ふ。爰にて御船を艤して、渡海の順風をぞ待給ひける。

○備後三郎高德事附吳越軍事

頭大夫―藏人頭兼職の長官、行房は大膳職の大夫なりし也

此上の思はあらじ、つれなさの命よさればいつを限りぞ。

と計聞えて、伏沈ませ給ながら、歸車の別路に、廻り逢世の憑なき、御心の中こそ悲しけれ。

○先帝遷幸事

明れば三月七日、千葉介貞胤、小山五郎左衛門、佐々木佐渡判官入道道譽、五百餘騎にて路次を警固仕て、先帝を隱岐國へ遷し奉る。供奉の人とては、一條頭大夫行房、六條少將忠顯、御介錯は、三位殿御局計也。其外は皆甲冑を鎧て、弓箭を帶せる武士共、前後左右に打圍奉て、七條を西へ、東洞院を下へ、御車を輾れば、京中貴賤男女小路に立竝て、正しき一天の主を、下として流し奉る事の淺猿さよ。武家の運命今に盡なんと、所憚なく云聲巷に滿て、只赤子の母を如慕泣悲ければ、聞に哀を催して、警固の武士も諸共に、皆鎧の袖をぞぬらしける。櫻井の宿を過させ給ける時、八幡を伏拜、御輿を舁居させて、二度帝都還幸の事をぞ御祈念有ける。八幡大菩薩と申は、應神天皇の應化、百王鎭護の御誓新なれば、天子行在の外までも、定て擁護の御眸をぞ

亢龍の悔—尊貴の極敗亡の悔あるをいふ

九五の帝位—君位

秋の夜の千夜—伊勢物語に、秋の夜の千夜を一夜になせりとも詞殘りて鷄や鳴きなん

被退出。翌日別當實世卿を勅使にて、禪師號を被下。時に禪師向勅使、此君雖有亢龍悔、二度帝位を踐せ給べき御相有とぞ被申ける。今君爲武臣囚て、亢龍の悔に遭せ給ひけれ共、彼禪師の相し申たりし事なれば、二度九五の帝位を踐せ給はん事、無疑思召に依て、法體の御事は暫く有まじき由を、強て被仰出けり。

○中宮御歎事

三月七日已に先帝隱岐國へ被遷させ給ふと聞えければ、中宮夜に紛れて、六波羅の御所へ行啓成せ給、中門に御車を差寄たれば、主上出御有て、御車の簾を被搴。君は中宮を都に止置奉りて、旅泊の波長汀の月に吟ひ給はんずる、行末の事を思召連ね、中宮は又主上を遙々と遠外に想像奉て、何の憑の有世共なく、明ぬ長夜の心迷の心地し、爲長襟にならんと、共に語り盡させ給はゞ、秋の夜の千夜を一夜に準共、猶詞殘て明ぬべければ、御心の中の憂き程は、其言の葉も及ばねば、中々云出させ給ふ一節もなし。只御泪にのみかきくれて、強顏見えし晨明も、傾く迄に成にけり。夜已に明なんとしければ、中宮御車を廻して、還御成けるが、御泪の中に、

石灰の壇―清涼殿にあり、毎朝主上が太神宮を遙拜する處

金馬―漢の武帝學士をして金馬門に詔を待たしめ顧問に備へしより朝に仕ふる學士をいふ

正當恁麼―正に是れといふ程の義

は、暫有まじき由を被仰て、袞龍の御衣をも脱せ給はず。毎朝の御行水をめして、假の皇居を淨めて、石灰の壇に準へて、太神宮の御拜有ければ、天に二の日無れども、國に二の王御座心地して、武家も持あつかひてぞ覺えける。是も叡慮に憑思召事有ける故也。

○俊明極參內事

去元亨元年の春の比、元朝より俊明極とて、得智の禪師來朝せり。天子直に異朝の僧に、御相看の事は、前々更に無りしか共、此君禪の宗旨に傾かせ給て、諸方參得の御志おはせしかば、御法談の爲に、此禪師を禁中へぞ被召ける。事の儀式餘に微々ならんは、吾朝の可恥とて、三公九卿も出仕の粧を刷ひ、蘭臺金馬も守禦の備を嚴くせり。夜半に蠟燭を傳て、禪師被參內。主上紫宸殿に出御成て、玉座に席を薦め給ふ。禪師三拜禮訖て、香を拈じて、萬歲を祝す。時に勅問有て曰、棧山航海得々來。和尙以何度生。禪師答云、以佛法緊要處度生。重て曰、正當恁麼時如何。答曰、天上有星皆拱北、人間無水不朝東。御法談畢て、禪師拜揖して

護摩―梵語にて、火祭と譯す

瘴海の氣―海は瘴の誤にて毒熱の氣也

配所は共に四國と聞ゆれば、せめては同國にてもあれかし、事問風の便にも、憂を慰む一節とも、念じ思召けるも叶はで、一宮はたゆたふ波に漕れ行、身を浮舟に任せつゝ、土佐の畑へ赴かせ給へば、有井三郎左衛門尉が館の傍に、一室を構て置奉る。彼畑と申は、南は山の傍にて高く、北は海邊にて下れり。松の下露扉に懸りて、いとゞ御袖の泪を添、磯打波の音、御枕の下に聞えて、是のみ通ふ故郷の、夢路も遠く成にけり。前朝御歸洛の御祈の爲にや有けん、又濟度利生の結緣とや思召けん、御著岸の其日より、毎日三時の護摩を、千日が間ぞ修せられける。妙法院は、是より引別れて備前國迄は陸地を經て、兒島の吹上より船に召て、讃岐の詫間に著せ給ふ。是も海邊近き處なれば、毒霧御身を侵して、瘴海の氣冷じく、漁歌牧笛の夕の聲、嶺雲海月の秋の色、總て觸レ耳遮レ眼事の哀を催し、御淚を添る媒とならずと云事なし。先皇をば任ニ承久例一隱岐國へ流し可レ進に定まりけり。臣として君を蔑にし奉る事、關東もさすが恐有とや思けん、此爲に後伏見院の第一の御子を御位に卽奉りて、先帝御遷幸の宣旨を可レ被レ成とぞ計ひ申ける。於ニ天下事一、今は重祚の御望可レ有にも非ざれば、遷幸以前に、先帝をば法皇に可レ奉レ成とて、香染の御衣を武家より調進したりけれ共、御法體の御事

龍門―支那の地名、朗詠云、龍門原上土、埋骨不レ埋レ名

へ流し奉る。今までは縦秋刑の下に死て、龍門原上の苔に埋る共、都のあたりにて、兎も角もせめてならばやと、仰レ天伏レ地、御祈念有けれ共、昨日既に先帝をも流し奉りぬと、警固の武士共申合ひけるを聞召て、御祈念の御憑もなく、最心細く思召ける處に、武士共數多參りて、中門に御輿を差寄せたれば、押へかねたる御泪の中に、

　せき留る柵ぞなき泪河、いかに流るゝ浮身なるらん。

同日妙法院二品親王をも、長井左近大夫將監高廣を御警固にて、讃岐國へ流し奉る。昨日は主上御遷幸の由を承り、今日は一宮被レ流させ給ぬと聞召、御心を傷ましめ給けり。憂名も替らぬ同じ道に、而も別て赴き給ふ、御心の中こそ悲けれ。初の程こそ別々にて御下有けるが、十一日の暮程には、一宮妙法院も、諸共に兵庫に著せ給たりければ、一宮は是より御舟にめして、土佐の畑へ可レ有二御下一由聞えければ、御文を參せ給けるに、

　今までは同じ宿を尋來て、跡なき波ときくぞ悲き。

一宮御返事、

　明日よりは跡なき波に迷共、通ふ心よしるべ共なれ。

洛陽滑水―洛陽は支那の都、滑水は其都を流るゝ川、是を我京都と白河とにたとへたる也

最勝寺の懸―懸は蹴鞠の場

をさ〴〵しさ―おとなびたる事

參らじと思へる故に、斯樣に申者也。白河關と讀たりしは、全く洛陽滑水の白河には非ず。此關奥州の名所也。近來津守國夏が、是を本歌にて詠たりし歌に、

　東路の關迄ゆかぬ白河も、日數經ぬれば秋風ぞふく。

又最勝寺の懸の櫻枯たりしを、植かふるとて、藤原雅經朝臣、

　馴々て見しは名殘の春ぞとも、など白河の花の下陰。

是皆名は同して、所は替れる證歌也。よしや今は心に籠て云出さじと、宣明を被レ恨レ仰、其後よりは掻絶戀しとだに不レ被レ仰、萬物憂御氣色にて、中門に立せ給へる折節、遠寺の晩鐘幽に聞えければ、

　つく〴〵と思暮して、入相の鐘を聞にも君ぞ戀しき。

情動二于中一言呈二於外一、御歌のをさ〴〵しさ、哀に聞えしかば、其比京中の僧俗男女、是を疊紙扇に書附て、是こそ八歳の宮の御歌よとて、翫ばぬ人は無りけり。

○一宮並妙法院二品親王御事

三月八日、一宮中務卿親王をば、佐々木大夫判官時信を、路次の御警固にて、土佐の畑

さが〳〵し　賢明

具足して　引き連れて

○八歳宮御歌事

第九宮は、未御幼稚に御座ばとて、中御門中納言宣明卿に被預、都の内にご御座有ける。此宮、今年は八歳に成せ給けるが、常の人よりも御心様さが〳〵しく御座ければ、常は、主上已に人も通はぬ隱岐國とやらんに、被流させ給ふ上は、我獨都の内に止りても何かせん。哀我をも、君の御座あるなる國のあたりへ流し遣せかし。せめては外所ながらも、御行末を承はらんかと、掻くどき打しほれて、御泪更にせきあへず。さても君の被押籠御座ある白河は、京近き所と聞くに、宣明はなど我を具足して御所へは參らぬぞと仰有ければ、宣明卿泪を押へて、皇居程近き所にてだに候はゞ、御供仕て參ぜん事仔細有まじく候が、白河と申候は、都より數百里を經て下る道にて候。されば能因法師が、

都をば霞とともにいでしかど、秋風ぞふく白河の關。

と讀て候し歌にて、道の遠き程、人を通さぬ關ありとは、思召知せ給へと被申ければ、宮御泪を押へさせ給て、暫は被仰出事もなし。良有て、さては宣明我を具足して

西の對―寢殿の左右にある家を對といふ

あこがれ―さまよひ出づる

り逢ん末の契も難知、一夜の夢の面影も名殘有て、今一度見もし見えばやと被思ければ、彼女房の住給ける、西の對へ行て見給ふに、時しもこそあれ、今朝中宮の召有て、北山殿へ參り給ぬと申ければ、中納言鬢の髮を少し切て、歌を書副てぞ被置ける。

　黑髮の亂ん世まで存へば、これを今はの形見とも見よ。

此女房立歸り、形見の髮と歌とを見て、讀ては泣、泣ては讀、千度百度卷返し、心亂てせん方もなし。懸る涙に文字消て、いとゞ思に堪兼たり。せめて其人の在所をだに知たらば、虎伏野邊、鯨寄浦なり共、あこがれぬべき心地しけれ共、其行末何く共不聞定。又逢ん世の憑も、いさや知らねば、餘の思に堪かねて、

　書置し君が玉章身に副て、後の世までの形見とやせん。

先の歌に一首書副て、形見の髮を袖に入れ、大井河の深き淵に、身を投けるこそ哀なれ。爲君一日恩、誤妾百年身とも、加樣の事をや申べき。按察大納言公敏卿は上總國、東南院僧正聖尋は下總國、峯僧正俊雅は對馬國と聞えしが、俄に其議を改て、長門國へ流され給ふ。第四の宮は但馬國へ流し奉て、其國の守護太田判官に預らる。

強仕—四十歳

圓寂—僧の死するをいふ

立部—伶人、唐代の伶人に立部を坐部とあり、堂上は坐し堂下は立つといふ

露のかごと—淺き契

仔細候はじと被レ許ければ、年未レ滿二強仕一、翠の髮を剃落し、桑門人と成給しが、無二幾程一元弘の亂出來し始、俄に病に被レ冒、圓寂し給ひけるとかや。東宮大進季房をば、常陸國へ流して、長沼駿河守に預らる。中納言藤房をば、同國に流して、小田民部大輔にぞ被レ預ける。左遷遠流の悲は、何れも劣らぬ泪なれども、殊に此卿の心中推量るも猶哀也。近來中宮の御方に、左衞門佐局とて、容色世に勝れたる女房御座しけり。去元亨の秋の比かとよ、主上北山殿に行幸成て、御賀の舞の有ける時、堂下の立部袖を飜し、梨園の弟子曲を奏せしむ。繁絃急管何れも金玉の聲玲瓏たり。此女房琵琶の役に被レ召、青海波を彈ぜしに、間關たる鶯の語は、花下に滑なり。幽咽せる泉の流は、氷の底に難めり。適怨清和、節に隨て移る。四絃一聲如レ裂レ帛。撥ては復挑。一曲の清音、梁上に燕飛、水中に魚跳計也。中納言ほのかに是を見給しより、人不レ知思初ける心の色、日に副て深くのみ成行共、可レ云知便も無ければ、心に籠て、歎明し思暮して、三年を過給けるこそ久しけれ。如何なる人目の紛にや、露のかごとを結ばれけん、一夜の夢の幻、さだかならぬ枕をかはし給にけり。其次の夜の事ぞかし、主上俄に笠置へ落させ給ひければ、藤房衣冠をぬぎ、戎衣に成て、供奉せんとし給ひけるが、此女房に廻

灔澦—水の名、瞿唐峽の口にあり
滄浪—青々とした浪

候。是程の大事をば、關東へ被申てこそと、申ければ、面々の意見一同せしかば、法印をば、五條京極の篝、加賀前司に預られて禁籠し、重て關東へぞ被註進ける。平宰相成輔をば、河越三河入道圓重具足し奉て、是も鎌倉へと聞えしが、鎌倉迄も下し著奉らで、相摸の早河尻にて奉失。侍從中納言公明卿、別當實世卿の二人をば、赦免の由にて有しかども、猶心ゆるしや無りけん、波多野上野介宣通、佐々木三郎左衞門尉に被預て、猶も本の宿所へは不歸給。尹大納言師賢卿をば、下總國へ流して、千葉介に被預。此人志學の年の昔より、和漢の才を事として、榮辱の中に心を止め不給しかば、今遠流の刑に逢へる事、露計も心に懸て思はれず。盛唐詩人杜少陵、天寶の末の亂に逢て、路經灔澦雙蓬鬢、天落滄浪一釣舟と、天涯の恨を吟し盡し、吾朝の歌仙小野篁は、隱岐國へ被流て、海原や八千島かけて漕出ぬと、釣する海士に言傳て、旅泊の思を詠ぜらる。是皆時の難易を知て、可嘆を不嘆、運の窮達を見て、有悲を不悲。況乎主憂る則臣辱る、主辱らるゝ則臣死といへり。縱骨を醢にせられ、身を車ざきにせらる共、可傷道に非ずとて、少も不悲給。唯依時觸興、諷詠等閑に日を渡る。今は憂世の望絕ぬれば、有出家志由、頻に被申けるを、相摸入道

普天下ー天の地上なおほふかぎり
率土濱ー海洋の陸地に接するかぎり
白地ーかりそめ

思召れんずらんと覺えたり。同廿一日殿法印良忠をば、大炊御門油小路の篝、小串五郎兵衛尉秀信召捕て、六波羅へ出したりしかば、越後守仲時、齋藤十郎兵衛を使にて被申けるは、此比一天の君だにも叶はせ給はぬ御謀叛を、御身なんど思立給はん事、且は無止、且は粗忽にこそ覺て候へ。先帝を奪ひ進せん爲に、當所の繪圖なんどまで持廻られ候ける條、武敵の至り、重科無雙、隱謀の企、罪責有餘。計の次第一々にのべられ候へ。具に關東へ可註進とぞ宣ける。法印返事せられけるは、普天下無非王土、率土濱無非王民。誰か先帝の宸襟を歎き奉らざらん。人たる者是を喜べきや。叡慮に代て、玉體を奪奉らんと企事、なじかは可無止。爲誅無道、隱謀を企事、更に非粗忽儀。始より叡慮の趣を存知、笠置の皇居へ參內せし條無仔細。而るを白地に出京の跡に、城郭無固、官軍敗北の間、無力本意を失へり。其間に具行卿相談して、綸旨を申下、諸國の兵に賦し條勿論なり。有程の事は、此等なりとぞ返答せられける。依之、六波羅の評定樣々なりけるを、二階堂信濃入道進て申けるは、彼罪責勿論の上は、無是非可被誅けれども、與黨の人なんど、尚尋沙汰有て、重て關東へ可被申かとこそ存候へと申ければ、長井右馬助、此議尤可然

頌―上にある偈に同じ頌は偈の漢譯也

給候へと申もあへず、袖を顔に押當しかば、中納言殿も不覺の泪すゝみけるを、推拭はせ給ひて、誠に其事に候。此間の儀をば、後世までも難レ忘こそ候へ。命の際の事は、萬乘の君既に外土遠島に御遷幸の由聞え候上は、其以下の事どもは中々不レ及レ力。殊更此程の情の色、誠に存命すとも難レ謝こそ候へと計にて、其後は物をも被レ仰ず、硯と紙とを取寄て、御文細々とあそばして、便に附て、相知れる方へ遣て給はれとぞ被レ仰ける。斯て日已に暮ければ、御輿指寄て乘せ奉る。海道より西なる山際に、松の一村ある下に、御輿を舁居たれば、敷皮の上に居直せ給ひて、又硯を取寄せ、閑々と辭世の頌をぞ被レ書ける。

逍二遙生死一。四十二年。山河一革。天地洞然。

六月十九日某と書て、筆を抛て、手を叉、座をなほし給ふとぞ見えし。田児六郎左衛門尉、後へ廻るかと思へば、御首は前にぞ落にける。哀と云も疎なり。入道泣々其遺骸を煙となし、樣々の作善を致してぞ、菩提を奉レ弔ける。いと惜哉、此卿は、先帝帥宮と申奉りし比より近侍して、朝夕の拜禮不レ怠、晝夜の勤厚異二于他一。されば次第に昇進も不レ滯、君の恩寵も深かりき。今かく失給ぬと叡聞に達せば、いかばかり哀にも

尋桃源跡—浮世を棄て隱遁する意

首陽愁—伯夷叔齊の故事より飢餓の愁をいへる也

探使—檢使の誤か

いらで—いそがす

長かれと何思ひけん、世中の憂を見するは命なりけり。

罪科有も有ざるも、先朝拝趨の月卿雲客、或は被レ停二出仕一、尋二桃源跡一、或は被レ解二官職一、懐二首陽愁一。運の通塞、時の否泰、爲レ夢爲レ幻。時移り事去て、哀樂互に相替る。憂を習の世の中に、樂んでも何かせん、歎ても由無るべし。源中納言具行卿をば、佐々木佐渡判官入道道譽、路次を警固仕て、鎌倉へ下し奉る。道にて可レ被レ失由、兼て告申人や有けん、相坂の關を越給ふとて、

歸るべき時しなければ、これやこの行を限りの相坂の關。

勢多橋を渡るとて、

けふのみと思ふ我身の夢の世を、渡る物かはせたの長橋。

此卿をば道にて可レ奉レ失と、兼て定し事なれば、近江の柏原にて切奉るべき由、探使襲來していらでければ、道譽、中納言殿の御前に參り、如何なる先世の宿習によりてか、多の人の中に、入道預進せて、今更加樣に申候へば、且は情を不レ知に相似て候へ共、斯る身には無レ力次第にて候。今までは隨分天下の赦を待て、日數を過し候つれ共、關東より可二失進一由、堅く被レ仰候へば、何事も先世のなす所と、思召慰ませ

太平記　巻第四

七旬―七十歳

○笠置囚人死罪流刑事　附藤房卿事

笠置城被攻落刻、被召捕給し人々の事、去年は歳末の計會に依て、暫く被閣ぬ。新玉の年立返ぬれば、公家の朝拜武家の沙汰始て後、東使工藤次郎左衛門尉、二階堂信濃入道行珍二人上洛して、可行死罪人々、可處流刑國々、關東評定の趣、六波羅にして被定。山門南都の諸門跡、月卿雲客諸衛の司等に至迄、依罪輕重、禁獄流罪に處ずれ共、足助次郎重範をば、六條河原に引出し、首を可刎と被定。萬里小路大納言宣房卿は、子息藤房季房二人の罪科に依て、武家に被召捕、是も如囚人にてぞ御座しける。齡已に七旬に傾て、萬乘の聖主は、遠島に被遷させ給ふべしと聞ゆ、二人の賢息は、死罪にぞ行はれんずらんと覺えて、我身さへ又楚の囚人と成給へば、唯今まで命存て、かゝる憂事をのみ、見聞事の悲しければと、一方ならぬ思に、一首の歌をぞ被詠ける。

奈落―梵語地獄のこと

垂跡和光の悲願―佛が威德の光を和げて神と現れ衆生を救はんとする慈悲深き誓願

勢は皆落失ぬ。今は身を離ぬ一族、年來の若黨二十餘人ぞ殘ける。此比こそあれ、其昔は、武家權を執て、四海九州の内尺地も不レ殘ければ、親き者も隱し得ず、疎きはまして不レ被レ憑、人手に懸りて尸を曝さんよりはとて、當國の一宮へ參り、八歳に成ける最愛の子と、二十七に成ける年來の女房とを刺殺て、社壇に火をかけ、己が身も腹掻切て、一族若黨二十三人、皆灰燼と成て失にけり。抑所こそ多かるに、態社壇に火を懸け燒死ける、櫻山が所存を如何にと尋るに、此入道當社に首を傾て、年久かりけるが、社頭の餘に破損したる事を歎て、造營し奉らんと云大願を發しけるが、事大營なれば、志のみ有て力なし。今度の謀叛に與力しけるも、專此大願を遂んが爲なりけり。されども神は非禮を受給はざりけるにや、所願空して、討死せんとしけるが、我等此社を燒拂ひたらば、公家武家共に止む事を不レ得して、如何樣造營の沙汰可レ有、其身は縱奈落の底に墮在すとも、此願をだに成就しなば、悲むべきに非ずと、勇猛の心を發て、社頭にては燒死にける也。倩垂跡和光の悲願を思へば、順逆の二緣、何れも濟度利生の方便なれば、今生の逆罪を飜して、當來の値遇とやならんと、是もたのみは不レ淺ぞ覺えける。

臂の懸り—臂の關節

一心稱名—一心に佛菩薩の名を唱ふる事

偈—佛德を頌する詩の一種

の御内の者にて候が、道を踏違へて候ひけると云捨て、足早にぞ通りける。咎めつる者、さればこそ怪き者なれ。如何樣馬盜人と覺るぞ。唯射殺せとて、近々と走寄て、眞直中をぞ射たりける。其矢正成が臂の懸りに答て、したゝかに立ぬと覺えけるが、すはだなる身に少も不立して、筈を返して飛翻る。後に其矢の痕を見れば、正成が年來信じて奉讀、觀音經を入たりける、膚の守に矢中て、一心稱名の二句の偈に、矢さき留りけるこそ不思議なれ。正成必死の鏃に死を遁れ、廿餘町落延て、跡を顧ければ、約束に不違、早城の役所共に火を懸たり。寄手の軍勢火に驚て、すはや城は落けるぞとて、勝時を作て、あますな漏すなと騷動す。燒靜りて後城中をみれば、大なる穴の中に、炭を積で燒死たる死骸多し。皆是を見て、あな哀や、正成はや自害をしてげり。敵ながらも弓矢取て、尋常に死たる者哉と、譽ぬ人こそ無りけれ。

○櫻山自害事

去程に櫻山四郎入道は、備後國半國計打從へて、備中へや越まし、安藝をや退治せましと案じける處に、笠置城も落させ給ひ、楠も自害したりと聞えければ、一旦の附

氈城―陣營

を不知といへども、敵大勢なれば、敢て物の數ともせず。城中既に食盡て、援の兵なし。元來天下の士卒に先立て、草創の功を志とする上は、節に當り義に臨では、命を可惜に非ず。雖然事に臨で恐れ、謀を好で成すは、勇士のする所也。されば暫此城を落て、正成自害したる體を、敵に知せんと思ふ也。其故は、正成自害したりと見及ばゝ、東國勢定て悦を成て可下向。下らば正成打て出、又上らば深山に引入、四五度が程、東國勢を惱したらんに、などか退屈せざらん。是身を全して敵を亡す計略也。面々如何計ひ給と云ければ、諸人皆可然とぞ同じける。さらばとて城中に大なる穴を二丈計堀て、此間堀の中に多く討れて伏たる死人を、二三十人穴の中に取入て、其上に炭薪を積で、雨風の吹灑ぐ夜をぞ待たりける。正成が運や天命に叶けん、吹風俄に沙を揚て、降雨更に篠を衝が如し。夜色窈溟として、氈城皆帷幕を垂る。是ぞ待所の夜なりければ、城中に人を一人殘し留て、我等落延ん事、四五町にも成ぬらんと思はんずる時、城に火を懸よと云置て、皆物具を脱、寄手に紛て、五人三人別別になり、敵の役所の前、軍勢の枕の上を越て、閑々と落けり。正成長崎が厩の前を通りける時、敵是を見つけて、何者なれば御役所の前を、案内も申さず、忍やかに通るぞと咎めければ、正成是は大將

かづきつれ　|被り連れ
矢庭に　|立ちどころに

じつれ。今度は質を替て可レ攻とて、面々に持楯をはがせ、其面にいため皮を當て、輙く被レ打ぬ様に拵て、かづきつれてぞ攻たりける。切岸の高さ堀の深さ、幾程もなければ、走懸て塀に著ん事は、最安く覺けれ共、是も又釣塀にてやあらんと危みて、無二左右一塀には不レ著、皆堀の中におり漬て、熊手を懸て塀を引ける間、既に被二引破一ぬべう見えける處に、城の中より、柄の一二丈長き杓に、熱湯の沸翻りたるを酌で懸たりける間、甲の天邊、綿がみのはづれより、熱湯身にとほつて、燒爛ければ、寄手こらへかねて、楯も熊手も打捨て、ばつと引ける見苦しさ、矢庭に死るまでこそ無れども、或は手足を被レ燒て立も不レ揚、或は五體を損じて病み臥する者、二三百人に及べり。寄手質を替て攻れば、城中工を替て防ぎける間、今は兎も角も可レ爲樣なくして、唯食攻にすべしとぞ被レ議ける。かゝりし後は一向軍をやめて、己が陣々に櫓をかき、逆茂木を引て、遠攻にこそしたりけれ。是にこそ中々城中の兵、慰方もなく、氣も疲れぬる心地してける。楠此城を構へたる事、暫時の事なりければ、はか〴〵しく兵粮なんど用意もせざれば、合戰始て城を被レ圍たる事、僅に廿日餘に、城中兵粮盡て、今四五日の食を殘せり。斯ければ正成諸卒に向て云けるは、此間數箇度の合戰に打勝て、敵を亡す事數

稻麻竹葦の如く—軍兵の群りかゝる譬

そゞろに—みだりに

たり共、何程の事か可レ有と、寄手皆是を侮り、又寄ると均く、堀の中、切岸の下まで攻附て、逆茂木を引のけて打て入んとしけれども、城中には音もせず。是は如何樣昨日の如く、手負を多く射出て漂ふ處へ、後攻の勢を出して、揉合せんずるよと心得て、寄手十萬餘騎を分て、後の山へ指向て、殘る二十萬騎稻麻竹葦の如く、城を取卷てぞ攻たりける。斯けれども、城の中よりは矢の一筋をも不二射出一、更人有とも見えざりければ、寄手彌氣に乘て、四方の塀に手を懸、同時に上り越んとしける處を、本より塀を二重に塗て、外の塀をば、切て落す樣に拵たりければ、城の中より、四方の塀の釣繩を一度に切て落したりける間、塀に取附たる寄手千餘人、壓に被レ打たる樣にて、目計はたらく處を、大木大石をなげ懸なげ懸打ける間、寄手又今日の軍にも、七百餘人被レ討けり。東國の勢共、兩日の合戰に手ごりをして、今は城を攻んとする者一人もなし。唯其近邊に陣々を取て、遠攻にこそしたりけれ。四五日が程は、加樣にて有けるが、餘に暗然として守り居たるも、云甲斐なし。方四町にだに足ぬ平城に、敵四五百人籠たるを、東八箇國の勢共が攻かねて、遠攻したる事の淺猿さよなんど、後までも人に被レ笑事こそ口惜けれ。前々は早りのまゝ、楯をも不レ衝、攻具足をも支度せで攻ればこそ、そゞろに人は損

矢をはげて—弓に矢を番ふ事

我がよ人の—よ—我物よ人の物よ

に懸入、東西南北へ破て通り、四方八面を切て廻るに、寄手の大勢あきれて、陣を成兼たり。城中より三の木戸を同時に颯と排て、二百餘騎鋒を雙て打て出、手さきをまはして散々に射る。寄手さしもの大勢なれども、僅の敵に驚騒で、或は維げる馬に乘て、あふれども進まず。或は弛せる弓に矢をはげて、射んとすれども不被射。物具一領に二三人取附、我がよ人のよと引合ける其間に、主被打ども從者は不知、親被打共子は不助、蜘の子を散すが如く、石川河原へ引退く。其道五十町が間、馬物具を捨たる事、足の踏所もなかりければ、東條一郡の者共は、俄に德附てぞ見たりける。さしもの東國勢、思の外に爲損じて、初度の合戰に負ければ、楠が武略侮りにくしとや思けん、吐田楢原邊に、各打寄たれども、軈て又推寄んとは不擬、此に暫控へて、畿内の案内者を先に立て、後攻のなき樣に、山を苅廻、家を燒拂て、心安く城を攻べしなんど、評定ありけるを、本間澁谷の者共の中に、親被打子被討たる者多かりければ、命生ては何かせん、よしや我等が勢計なりとも、馳向て討死せんと憤ける間、諸人皆是に被勵て、我も我もと馳向けり。彼赤坂城と申は、東一方こそ山田の畔、重々に高く、少し難所の樣なれ、三方は皆平地に續きたるを、堀一重に塀一重塗たれば、如何なる鬼神が籠り

魚鱗懸—魚の鱗の如く先細く後太に備立をする陣法

楠が一日こゝへよかし、分捕高名して、恩賞に預らんと、思はぬ者こそ無りけれ。されば寄手二十萬騎の勢共、打寄ると均く、馬を蹈放蹈放、堀の中に飛入、櫓の下に立竝で、我前に打入んとぞ爭ひける。正成は元來籌を帷幄の中に運し、勝事を千里の外に決んと、陳平張良が肺肝の間より流出せるが如の者なりければ、究竟の射手を二百餘人城中に籠て、舍弟の七郎と、和田五郎正遠とに、三百餘騎を差副て、よその山にぞ置たりける。寄手は是を思もよらず、心を一片に取て、唯一揉に揉落さんと、同時に皆四方の切岸の下に著たりける處を、櫓の上、さまの陰より、指つめ引つめ、鏃を揃て射ける間、時の程に手負死人千餘人に及べり。東國の勢共案に相違して、いやいや此城の爲體、一日二日には落まじかりけるぞ。暫陣々を取て、役所を構へ、手分をして合戰を致せとて、攻口を少し引退き、馬の鞍を下し、物具を脱で、皆帷幕の中にぞ休居たりける。楠七郎、和田五郎、遙の山より直下して、時刻よしと思ければ、三百餘騎を二手に分け、東西の山の木陰より、菊水の旗二旒、松の嵐に吹靡かせ、閑に馬を歩ませ、煙嵐を捲て押寄たり。東國の勢是を見て、敵か味方かとためらひ怪む處に、三百餘騎の勢共、兩方より時を咄と作て、雲霞の如くに靉いたる三十萬騎が中へ、魚鱗懸

被レ置ける。同十三日に、新帝登極の由にて、長講堂より内裏へ入せ給ふ。供奉の諸卿、花を折て行粧を引刷ひ、隨兵の武士、甲冑を帶して非常を警む。いつしか前帝奉公の方様には、咎有も咎無も、如何なる憂目をか見んずらんと、事に觸て身を危み、心を碎けば、當今拜趨の人々は、有レ忠も無レ忠も、今に榮花を開きぬと、目を悦ばしめ、耳をこやす。子結で陰を成し、花落て枝を辭す。窮達時を替、榮辱道を分つ。今に始めぬ憂世なれども、殊更夢と幻とを分兼たりしは此時也。

○赤坂城軍事

遙々と東國より上りたる大勢共、未近江國へも入ざる前に、笠置城已に落ければ、無念の事に思て、一人も京都へは不レ入、或は伊賀伊勢の山を經、或は宇治醍醐の道を要て、楠兵衞正成が楯籠たる赤坂城へぞ向ひける。石河河原を打過、城の有樣を見遣れば、俄に拵へたりと覺て、はか〴〵しく堀をもほらず、僅に塀一重塗て、方一二町には過じと覺たる其内に、櫓二三十が程搔竝べたり。是を見る人毎に、あな哀の敵の有樣や。此城我等が片手に載て、投るとも投つべし。あはれせめて如何なる不思議にも、

欲レ終時五死相現、一華冠萎、二腋下汗出、三蠅來著レ身、四見ヨ更有レ天坐ニ己座處一、五自不レ樂ニ本座一

唯夢かとのみぞ覺たる。遠からぬ雲の上の御住居、いつしか思召出す御事多き折節、時雨の音一通、軒端の月に過けるを聞召て、

住なれぬ板屋の軒の村時雨、音をきくにも袖はぬれけり、

四五日有て、中宮の御方より、御琵琶を被レ進けるに、御文あり。御覽ずれば、

思やれ塵のみつもる四の絃に、拂ひもあへずかゝる泪を。

引返して、御返事有けるに、

涙ゆゑ半の月は陰るとも、ともに見し夜の影はわすれじ。

同八日両檢斷、高橋刑部左衛門、糟谷三郎宗秋、六波羅に參て、今度被ニ生虜一給し人々を、一人づゝ大名に被レ預。一宮中務卿親王をば、佐々木判官時信、妙法院二品親王をば、長井左近大夫將監高廣、源中納言具行をば、筑後前司貞知、東南院僧正をば、常陸前司時朝、萬里小路中納言藤房、六條少將忠顯二人をば、主上に近侍し奉るべしとて、放囚人の如くにて、六波羅にぞ留め置れける。同九日三種の神器を、持明院の新帝の御方へ被レ渡。堀河大納言具親、日野中納言資名、是を請取て、長講堂へ送奉る。其御警固には、長井彈正藏人、水谷兵衛藏人、但馬民部大夫、佐々木隱岐判官清高をぞ

繼體の君—位を繼ぐ君

内侍所—神鏡を指していふ、今賢所といふ

袞衣—袞龍の衣、天子の禮服

紫宸北極—共に皇居をいふ

白屋—賤人の居所轉じて賤人

天上の五衰—諸天命

被仰出けるは、三種の神器は、自古繼體君、位を天に受させ給ふ時、自ら是を授奉る者也。四海に威を振ふ逆臣有て、暫天下を掌に握者ありといへ共、未此三種の重器を自專して、新帝に渡し奉る例を不聞。其上内侍所をば、笠置の本堂に捨置奉りしかば、定て戰場の灰塵にこそ落させ給ひぬらめ。神璽は、山中に迷し時木の枝に懸置しかば、遂にはよも吾國の守と成せ給はぬ事あらじ。寶劍は、武家の輩若天罰を顧ずして、玉體に近附奉る事あらば、自其刄の上に伏させ給はん爲に、暫も御身を放たる事あるまじき也と被仰ければ、東使兩人も六波羅も、言無して退出す。翌日に龍駕を廻して、六波羅へ成し進らせんとしけるを、前々臨幸の儀式ならでは、還幸成まじき由を、強て被仰出ける間、無力鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日迄平等院に御逗留有てぞ、六波羅へは入せ給ける。日來の行幸に事替て、鳳輦は數萬の武士に被打圍、月卿雲客は怪げなる籠輿傳馬に被扶乘て、七條を東へ河原を上りて、六波羅へと急がせ給へば、見る人涙を流し、聞人心を傷しむ。悲乎昨日は紫宸北極の高に坐して、百司禮儀の粧を刷ひしに、今は白屋東夷の卑きに下らせ給て、萬卒守禦の密しきに、御心を被惱。時移事去、樂盡て悲來る、天上の五衰、人間の一炊、

其方樣歟ー其人々に縁故ある人達か

ける人々には、先一宮中務卿親王、第二宮妙法院尊澄法親王、峯僧正春雅、東南院僧正聖尋、萬里小路大納言宣房、花山院大納言師賢、按察大納言公敏、源中納言具行、侍從中納言公明、別當左衞門督實世、中納言藤房、宰相季房、平宰相成輔、左衞門督爲明、左中將行房、左少將忠顯、源少將能定、四條少將隆兼、妙法院執事澄俊法印、北面諸家侍共には、左衞門大夫氏信、右兵衞大夫有清、對馬兵衞重定、大夫將監兼秋、左近將監宗秋、雅樂兵衞尉則秋、大學助長明、足助次郎重範、宮内丞能行、大河原源七左衞門尉有重、奈良法師に、俊增、教密、行海、志賀良木治部房圓實、近藤三郎左衞門尉宗光、國村三郎入道定法、源左衞門入道慈願、奥入道如圓、六郎兵衞入道淨圓、山徒には、勝行房定快、習禪房淨運、乘實房實尊、都合六十一人、其所從眷屬共に至までは、計るに不遑。或は籠輿に被召、或は傳馬に被乘て、白晝に京都へ入給ひければ、其方樣歟と覺たる男女街に立並て、人目をも不憚泣悲む。淺增かりし分野也。十月二日六波羅の北方、常葉駿河守範貞、三千餘騎にて路次を警固仕て、主上を宇治の平等院へ成し奉る。其日關東の兩大將、京へは不入して、すぐに宇治へ參向て、龍顏に謁し奉り、先三種の神器を渡し給て、持明院新帝へ可進由を奏聞す。主上藤房を以て

網代輿—竹の網代にて張り包みたる輿
張輿—疊表にて張り包み押緣を打ちたる輿

ぬべき心地せざりければ、爲ん方無て、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に、うつゝの夢に伏給ふ。梢を拂ふ松の風を、雨の降かと聞召て、木陰に立寄せ給たれば、下露のはらく／＼と御袖に懸りけるを、主上被御覽て、

さして行笠置の山を出しより、あめが下には隱家もなし。

藤房卿泪を押へて

いかにせん憑む陰とて立よれば、なほ袖ぬらす松の下露。

山城國の住人、深須入道、松井藏人二人は、此邊の案內者なりければ、山々峯々無殘所捜しける間、皇居隱なく被尋出させ給ふ。主上誠に怖しげなる御氣色にて、汝等心ある者ならば、天恩を戴て、私の榮花を期せよと被仰ければ、さしもの深須入道、俄に心變じて、哀此君を隱奉て、義兵を擧ばやと思けれども、跡につゞける松井が所存難知かりける間、事の漏易くして、道の成難からん事を憚て、默止けるこそうたてけれ。俄の事にて網代輿だに無りければ、張輿の怪げなるに、扶乘進せて、先南都の內山へ入奉る。其體唯殷湯夏臺に囚れ、越王會稽に降せし、昔の夢に不異。是を聞、是を見る人ごとに、袖をぬらさずと云事無りけり。此時此彼にて、被生捕給

羅穀—米おりのうすき絹布

にけり。

○主上御没落笠置事

去程に類火東西より被吹て、餘煙皇居に懸りければ、主上を始進せて、宮々卿相雲客、皆歩跣なる體にて、何を指ともなく、足に任て落行給ふ。此人々始一二町が程こそ、主上を扶進せて、前後に御供をも被申たりけれ。風雨烈しく道闇して、敵の時の聲此彼に聞えければ、次第に別々に成て、後には唯藤房季房二人より外は、主上の御手を引進する人もなし。忝も十善の天子、玉體を田夫野人の形に替させ給て、そことも不知迷ひ出させ給ける、御有様こそ淺猿けれ。如何にもして、夜の内に赤坂城へと、御心計を被盡けれども、假にも未習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には休、二足には立止り、晝は道の傍なる青塚の陰に御身を隱させ給て、寒草の疎なるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野原の露分迷はせ給て、羅穀の御袖をほしあへず。兎角して夜晝三日に、山城多賀郡なる有王山の麓まで、落させ給てけり。藤房季房も、三日まで口中の食を斷ければ、足たゆみ身疲れて、今は如何なる目に逢とも、逃

蠟燭數多所に被ㇾ燃て、振鈴の聲幽也。衣冠正くしたる人、三四人大床に伺候して、警固の武士に、誰か候と被ㇾ尋ければ、其國の某々と名乘て、廻廊にしかと竝居たり。陶山皇居の樣まで見澄して、今はかうと思ければ、鎭守の前にて一禮を致し、本堂の上なる峯へ上て、人もなき坊の有けるに火を懸て、同音に時の聲を揚ぐ。四方の寄手是を聞、すはや城中に囘忠の者出來て、火を懸たるは。時の聲を合せよとて、追手搦手七萬餘騎、聲々に時を合て喚き叫ぶ。其聲天地を響かして、如何なる須彌の八萬由旬なりとも、崩ぬべくぞ聞えける。陶山が五十餘人の兵共、城の案内は、唯今委く見置たり。此役所に火を懸ては、彼に時の聲をあげ、彼に時を作ては、此櫓に火を懸、四角八方に走り廻て、其勢城中に充滿たる樣に聞えければ、陣々固たる官軍共、城の中に敵の大勢攻入たりと心得て、物具を脱捨、弓矢をかなぐり棄て、がけ堀とも不ㇾ謂、倒れ轉びてぞ落行ける。錦織判官代是を見て、膩き人々の振舞哉。十善の君に被ㇾ憑進らせて、武家を敵に受る程の者共が、敵大勢なればとて、戰はで逃る樣やある。いつの爲に可ㇾ惜命ぞとて、向ふ敵に走り懸り走り懸り、大はだぬぎに成て戰ひけるが、矢種を射盡し、太刀を打折ければ、父子二人竝に郎等十三人、各腹かき切て、同枕に伏て死

須彌の八萬由旬—須彌は山名、由旬は十六里或は三十里ともいふ

十善の君—天子

案内—樣子

繩を上なる木の枝に打懸て、岩の上よりおろしたるに、跡なる兵共、各是に取附て、第一の難所をば、安々と皆上りてげり。其より上には、さまでの嶮岨無りければ、或は葛の根に取附、或は苔の上を爪立て、二時計に、辛苦して塀の際まで著てげり。此にて一息休て、各塀を上り超、夜廻の通りける跡に附て、先城の中の案内をぞ見たりける。追手の木戸、西の坂口は、伊賀伊勢の兵千餘騎にて固たり。搦手に對する東の出塀の口をば、大和河内の勢五百餘騎にて固たり。南の坂二王堂の前をば、和泉紀伊國の勢七百餘騎にて固たり。北の口一方は、嶮きを被憑けるにや、警固の兵をば一人も不被置、唯云甲斐なげなる下部共二三人、櫓の下に薦を張篝を燒て、眠居たり。陶山小見山城を廻、四方の陣をば早見澄しつ。皇居は何くやらんと伺て、本堂の方へ行處に、或役所の者是を聞附て、夜中に大勢の足音して、潜に通るは怪き物哉。誰人ぞと問ければ、陶山吉次取も敢ず、是は大和勢にて候が、今夜餘に雨風烈しくして、物騒がしく候間、夜討や忍入候はんずらんと存候て、夜廻り仕候也と答ければ、げにと云音して、又問事も無りけり。是より後は、中々忍たる體も無して、面々の御陣に御用心候へと、高らかに呼はつて、閑々と本堂へ上て見れば、是ぞ皇居と覺て、

いけづき―池月又生唼と書く、頼朝が高綱に與へし名馬

曼陀羅―淨土の實相を寫せる圖

懸は、源太を助ん爲也。佐々木三郎が藤戸を渡りしは、案内者のわざ、同四郎高綱が宇治川の先陣は、いけづき故也。此等をだに今の世迄語傳て、名を天下の人口に殘すぞかし。如何に況や、日本國の武士共が集て、數日攻れども落し得ぬ此城を、我等が勢計にて攻落したらんは、名は古今の間に雙なく、忠は萬人の上に可レ立。いざや殿原、今夜の雨風の紛に、城中へ忍入て、一夜討して、天下の人に目を覺させんと云ければ、五十餘人の一族若黨最可レ然とぞ同じける。是皆千に一も生て歸る者あらじと、思切たる事なれば、兼ての死出立に、皆曼陀羅を書てぞ附たりける。差縄の十丈計長きを二筋、一尺計置ては結合結合して、其端に熊手を結著て持せたり。是は岩石などの被レ登ざらん所をば、木の枝岩の角に打懸て、登らん爲の支度也。其夜は九月晦日の事なれば、目指とも不レ知暗き夜に、雨風烈く吹て、面を可レ向樣も無りけるに、五十餘人の者ども太刀を背に負、刀を後に差て、城の北に當たる石壁の數百丈聳て、鳥も翔り難き所よりぞ登りける。二町計は兎角して登りつ。其上に一段高き所あり。屛風を立たる如くなる岩石重て、古松枝を垂、蒼苔露滑なり。此に至て、人皆如何ともすべき樣なくして、遙に向上て立たりける處に、陶山藤三、岩の上をさら〳〵と走り上て、件の差

毛利丹後前司、那波左近大夫將監、一宮善民部大夫、土肥佐渡前司、宇都宮安藝前司、同肥後權守、葛西三郎兵衛尉、寒河彌四郎、上野七郎三郎、大内山城前司、長井治部少輔、同備前太郎、同因幡民部大輔入道、筑後前司、下總入道、山城左衛門大夫、宇都宮美濃入道、岩崎彈正左衛門尉高久、同孫三郎、同彦三郎、伊達入道、田村刑部大輔入道、入江蒲原の一族、横山猪俣の兩黨、此外武藏相摸伊豆駿河上野五箇國の軍勢、都合二十萬七千六百餘騎、九月廿日鎌倉を立て、同晦日、前陣已に美濃尾張兩國に著ば、後陣は猶未高志二村の峠に支へたり。爰に備中國の住人陶山藤三義高、小見山次郎某、六波羅の催促に隨て、笠置城の寄手に加て、河向に陣を取て居たりけるが、東國の大勢既に近江に著ぬと聞えければ、一族若黨共を集て申けるは、御邊達如何か思ぞや。此間數日の合戰に、石に被打、遠矢に當て死ぬる者、幾千萬と云數を不知。是皆差て爲出したる事も無て死ぬれば、骸骨未乾かざるに、名は先立て消去ぬ。同く死ぬる命を、人目に餘る程の軍、一度して死たらば、名譽は千載に留て、恩賞は子孫の家に榮ん。倩平家の亂より以來、大剛の者とて、名を古今に揚たる者共を案ずるに、何れも其程の高名とは不覺。先熊谷平山が一谷の先懸は、後陣の大勢を賴し故也。梶原平三が二度の

一宮—吉備津宮

侍大將—侍にて一軍の大將たるもの、侍は六位の人の諸家に祗候せるもの

國より早馬到來して、櫻山四郎入道、同一族等御所方に參て旗を擧、當國の一宮を城郭として楯籠る間、近國の逆徒等少々馳加て、其勢既七百餘騎、國中を打靡剰他國へ打越んと企て候。夜を日に繼で、討手を不ㇾ被ㇾ下候はゞ、御大事出來ぬと覺候。御油斷不ㇾ可ㇾ有とぞ告たりける。前には笠置城强して、國々の大勢日夜攻れども未ㇾ落、後には又楠櫻山の逆徒大に起て、使者日々に急を告。南蠻西戎は已に亂ぬ。東夷北狄も又如何あらんずらんと、六波羅の北方駿河守、安き心も無りければ、日日に早馬を打せて、東國勢をぞ被ㇾ乞ける。相摸入道大に驚て、さらばやがて討手を差上せよとて、一門他家宗徒の人々六十三人迄ぞ被ㇾ催ける。大將軍には大佛陸奥守貞直、同遠江守、普恩寺相摸守、鹽田越前守、櫻田三河守、赤橋尾張守、江馬越前守、絲田左馬頭、印具兵庫助、佐介上總介、名越右馬助、金澤右馬助、遠江左近大夫將監治時、足利治部大輔高氏、侍大將には、長崎四郎左衛門尉、相從ふ侍には、三浦介入道、武田甲斐次郎左衛門尉、椎名孫八入道、結城上野入道、小山出羽入道、氏家美作守、佐竹上總入道、長沼四郎左衛門入道、土屋安藝權守、那須加賀權守、梶原上野太郎左衛門尉、岩城次郎入道、佐野安房彌太郎、木村次郎左衛門尉、相馬右衛門次郎、南部三郎次郎、

巻數―祈禱ノ札
褊衫の袖―衣の袖

ば、大山も崩て海に入り、坤軸も折て忽地に沈む歟とぞ覺えし。晩景に成ければ、寄手彌重て、持楯をつきよせつきよせ、木戸口の邊まで攻たりける。爰に南都の般若寺より、巻數を持て參りたりける使、本性房と云大力の律僧の有けるが、褊衫の袖を結で引違へ、尋常の人の、百人しても動し難き大盤石を、輕々と脇に挾み、鞠の勢に引懸引懸、二三十つゞけ打にぞ投たりける。數萬の寄手、楯の板を微塵に打碎かるゝのみに非ず、少も此石に當る者、尻居に被打居ければ、東西の坂に人額を築て、人馬彌が上に落重る。さしも深き谷二つ、死人にてこそうめたりけれ。されば軍散じて後までも、木津河の流血に成て、紅葉の陰を行水の紅深きに不異。是より後は、寄手雲霞の如しといへども、城を攻んと云者一人もなし。唯城の四方を圍みて、遠攻にこそしたりけれ。かくて日數を經ける處に、同月十一日、河内國より早馬を立て、楠兵衛正成と云者、御所方に成て旗を擧る間、近邊の者共、志あるは同心し、志なきは東西に逃隱る。則國中の民屋を追捕して、兵粮の爲に運取、己が館の上なる赤坂山に城郭を構へ、其勢五百騎にて楯籠り候。御退治延引せば、事御難義に及候なん。急ぎ御勢を可被向とぞ告申ける。是をこそ珍事なりと騷ぐ處に、又同十三日の晩景に、備後

鏠かづき—矢の根の矢幹に接する邊

物の具の實—鎧の札

弦走—鎧の胴の前の凹字形に染革にて包みたる處

金磁頭—中をくりぬかざる矢の根

くつまき—矢幹の本の巻きたる處

受て御覽じ候へと云儘に、三人張の弓に、十三束三伏篦かづきの上まで引かけ、暫堅めて丁と放つ。其矢遙なる谷を阻て、二町餘が外に控へたる荒尾九郎が鎧の千檀の板を、右の小脇まで篦深にぐさと射込む。一箭なりといへども究竟の矢坪なれば、荒尾馬より倒に落て、起も直らで死けり。舍弟の彌五郎是を敵に見せじと、矢面に立隱して、楯のはづれより進出て云けるは、足助殿の御弓勢、日來承候し程は無りけり。此を遊ばし候へ。御矢一筋受て、物具の實の程試候はんと欺て、弦走を敲てぞ立たりける。足助是を聞て、此者の云樣は、如何樣鎧の下に、腹巻か鏁歟を重て著たればこそ、前の矢を見ながら、此を射よとは敲くらん。若鎧の上を射ば、篦摧け鏃折て、通らぬ事もこそあれ。甲の眞向を射たらんに、などか碎て通らざらんと思案して、胡籙より金磁頭を一つ拔出し、鼻油引て、さらば一矢仕り候はん。受て御覽候へと云儘に、且く鎧の高紐をはづして、十三束三伏前よりも尚引しぼりて、手答高く、はたと射る。思ふ矢坪を不違、荒尾彌五郎が甲の眞向、金物の上二寸計射碎て、眉間の眞中を、くつまき責て、ぐさと射籠だりければ、二言とも不云、兄弟同枕に倒重て死にけり。是を軍の始として、追手搦手城の內、をめき叫で攻戰ふ。箭叫の音時の聲且も休時なけれ

高して一片の白雲峯を埋み、谷深して萬仞の青岩路を遮る。攀折なる道を廻て、上る事十八町、岩を切て堀とし、石を疊で塀とせり。されば縦防ぎ戦ふ者無とも、輙く登る事を得難し。されども城中鳴を靜めて、人ありとも見えざりければ、敵はや落たりと心得て、四方の寄手七萬五千餘騎、堀がけとも不謂、葛のかづらに取附て岩の上を傳て、一の木戸口の邊、二王堂の前までぞ寄たりける。此にて一息休めて、城の中を屹と向上ければ、錦の御旗に日月を金銀にて打て著たるが、白日に耀て光り渡りたる其陰に、透間もなく鎧うたる武者三千餘人、甲の星を耀し、鎧の袖を連て、雲霞の如くに竝居たり。其外櫓の上、さまの陰には、射手と覺しき者共、弓の弦くひしめし、矢束解て押くつろげ、中差に鼻油引て待懸たり。其勢決然として敢て可攻樣ぞなき。寄手一萬餘騎是を見て、前まんとするも不叶、引んとするも不協して、心ならず支たり。良暫有て、木戸の上なる櫓より、矢間の板を排て名乗けるは、三河國住人足助次郎重範、忝も一天の君にたのまれ進らせて、此城の一の木戸を固めたり。前陣に進んだる旗は、美濃尾張の人々の旗と見るは僻目歟。十善の君の御座す城なれば、六波羅殿や御向有らんずらんと心得て、御儲の爲に、大和鍛冶のきたうて打たる鏃を、少々用意仕て候。一筋

さま—城の櫓などにある矢を射出す窓、矢間

僻目—見まちがひ

十善の君—天子

高橋が拔懸を聞て、引ば入替て高名せんと、跡に續きたる小早河も、一度に皆被二追立一一返も不レ返、宇治まで引たりと聞えければ、又札を立副て、

懸も得ぬ高橋おちて行水に、憂名をながす小早河哉。

昨日の合戰に、官軍打勝ぬと聞えなば、國々の勢馳參りて、難儀なる事もこそあれ、時日を不レ可レ移とて、兩檢斷、宇治にて四方の手分を定て、九月二日笠置城へ發向す。南の手には、五畿内五箇國の兵を被レ向。其勢七千六百餘騎、光明山の後を廻て、搦手に向ふ。東の手には、東海道十五箇國の内、伊賀伊勢尾張三河遠江の兵を被レ向。其勢二萬五千餘騎、伊賀路を經て金剛山越に向ふ。北の手には、山陰道八箇國の兵共、一萬二千餘騎、梨間の宿のはづれより、市野邊山の麓を廻て、追手へ向ふ。西の手には、山陽道八箇國の兵を被レ向。其勢三萬二千餘騎、木津河を上りて、岸の上なる岨道を、二手に分て推寄る。追手搦手、都合七萬五千餘騎、笠置の山の四方二三里が間は、尺地も不レ殘充滿したり。明れば九月三日の卯刻に、東西南北の寄手、相近て時を作る。其聲百千の雷の鳴落が如にして、天地も動く計也。時の聲三度揚て、矢合の流鏑を射懸たれども、城の中靜り還て、時の聲をも不レ合、當の矢をも射ざりけり。彼笠置城と申は、山

矢合―合戰の始まる時互に矢を射合する事

拔懸―潛に陣を拔出して先駈する事

捨鞭―逃ぐ時やたらに馬に鞭打つ事

勢を相副て、大津へ被向。是も猶小勢にて、叶ふまじき由を申ければ、重て丹波國の住人、久下長澤の一族等を差副て、八百餘騎大津東西の宿に陣を取る。九月一日六波羅の評定衆、糟谷三郎宗秋、隅田次郎左衞門、五百餘騎にて宇治の平等院へ打出て、軍勢の著到を附るに、催促をも不待、諸國の軍勢、夜晝引も不切馳集て、十萬餘騎に及べり。既に明日二日巳刻に押寄て、矢合可有と定めたりける其前の日、高橋又四郎拔懸して、一人高名に備へんとや思けん、纔に一族の勢三百餘騎を率して、笠置の麓へぞ寄たりける。城に籠る所の官軍は、さまで大勢ならずと云へども、勇氣未怠、天下の機を呑で、回天の力を出さんと思へる者共なれば、僅の小勢を見て、なじかは打て懸らざらん。其勢三千餘騎、木津河の邊におり合て、高橋か勢を取籠て、一人も餘さじと攻戰ふ。高橋始の勢にも似ず、敵の大勢を見て、一返も不返、捨鞭を打て引ける間、木津河の逆卷水に被追浸、被討者其數若干也。纔に命計を助る者も、馬物具を捨て赤裸になり、白晝に京都へ逃上る。見苦しかりし有樣也。是を惡しと思ふ者やしたりけん、平等院の橋爪に、一首の歌を書てぞ立たりける。

木津河の瀨々の岩波早ければ、懸て程なく落る高橋。

利を摧き堅を破る—鋭利なる刃物を摧き堅き甲を破る

るは、東夷征罰の事、正成を被二憑思召一仔細有て　勅使を被レ立處に、時刻を不レ移馳參條、叡感不レ淺處也。抑天下草創の事、如何なる謀を廻してか、勝事を一時に決して、太平を四海に可レ被レ致。所存を不レ殘可レ申と勅定有ければ、正成畏て申けるは、東夷近日の大逆、唯天の譴を招き候上は、衰亂の弊に乘て、天誅を被レ致に、何の仔細か候べき。但天下草創の功は、武略と智謀との二にて候。若勢を合て戰はゞ、六十餘州の兵を集て、武藏相摸の兩國に對すとも、勝事を得がたし。若謀を以て爭はゞ、東夷の武力唯利を摧き、堅を破る内を不レ出。是欺くに易して、怖るゝに足ざる所也。合戰の習にて候へば、一旦の勝負をば、必しも不レ可レ被二御覽一。正成一人未生て在と、被二聞召一候はゞ、聖運遂に可レ被レ開と被二思召一候へと、頼しげに申て、正成は河内へ歸にけり。

○笠置軍事　附陶山小見山夜討事

去程に主上笠置に御座有て、近國の官軍附從奉る由、京都へ聞えければ、山門の大衆又力を得て、六波羅へ寄る事もや有んずらんとて、佐々木判官時信に、近江一國の

玉扆—玉座

南面の德—天子の德

席あり。是御爲に設たる玉扆にて候へば、暫く此に御座候へと申て、童子は遙の天に上り去ぬと御覽じて、御夢はやがて覺にけり。主上是は天の朕に告る所の夢也と思召て、文字に附て御料簡あるに、木に南と書たるは、楠と云字也。其陰に南に向うて坐せよと、二人の童子の敎へつるは、朕再び南面の德を治て、天下の士を朝せしめんずる處を、日光月光の被レ示けるよと、自ら御夢を被レ合て、憑敷こそ被二思召一けれ。夜明ければ當寺の衆徒、成就房律師を被レ召、若此邊に楠と被レ云武士や有と御尋有ければ、近き傍に左樣の名字附たる者ありとも未二承及一候。河内國金剛山の西にこそ、楠多門兵衛正成とて、弓矢取て名を得たる者は候なれ。是は敏達天皇四代の孫、井手左大臣橘諸兄公の後胤たりといへども、民間に下て年久し。其母若かりし時、志貴の毘沙門に百日詣で、夢想を感じて設たる子にて候とて、稚名を多門とは申候也とぞ、答へ申ける。主上さては今夜の夢の告是也と思召て、頓て是を召せと被二仰下一ければ、藤房卿勅を奉て、急ぎ楠正成をぞ被レ召ける。勅使宣旨を帶して、楠が館へ行向て、事の仔細を演られければ、正成弓矢取る身の面目、何事か是に過じと思ければ、是非の思案にも不レ及、先忍て笠置へぞ參ける。主上萬里小路中納言藤房卿を以て被レ仰け

まどろむ—眠る

太平記　巻第三

○主上御夢事附楠事

元弘元年八月廿七日、主上笠置へ臨幸成て、本堂を皇居となさる。始一兩日の程は、武威に恐て、參り仕る人一人も無りけるが、叡山東坂本の合戰に、六波羅勢打負ぬと聞えければ、當寺の衆徒を始て、近國の兵共、此彼より馳參る。されども未名ある武士、手勢百騎とも二百騎とも打せたる大名は一人も不ㇾ參。此勢計にては、皇居の警固如何有べからんと、主上思召煩はせ給て、少し御まどろみ有ける御夢に、所は紫宸殿の庭前と覺えたる地に、大なる常葉木あり。緑の陰茂りて、南へ指たる枝、殊に榮え蔓れり。其下に、三公百官位に依て列坐す。南へ向たる上座に、御座の疊を高く敷、未坐したる人はなし。主上御夢心地に、誰を設けん爲の座席やらんと、怪しく思召て、立せ給ひたる處に、鬟結たる童子二人、忽然として來て、主上の御前に跪き、泪を袖に掛て、一天下の間に、暫も御身を可ㇾ被ㇾ隱所なし。但しあの樹の陰に南へ向へる座

左纛―黒牛の尾にて作りたる天子の旗

士卒又疲たり。若兵を出して戰はゞ、漢必楚の爲に擒とならん。唯敵を欺て、潛に城を逃出んにはしかじ。願くは臣今漢王の諱を犯して、楚の陣に降ぜん。楚此に圍を解て臣を得ば、漢王速に城を出て、重て大軍を起し、却て楚を亡し給へと申ければ、紀信が忽に楚に降て殺れん事悲しけれ共、高祖社稷の爲に身を輕くすべきに非ざれば、力無く涙をおさへ、別を慕ながら、紀信が謀に隨給ふ。紀信大に悅で、自漢王の御衣を著し、黃屋の車に乘り、左纛をつけて、高祖罪を謝して、楚の大王に降ずと呼て、城の東門より出たりける。楚の兵是を聞て、四面の圍を解て、一所に集る。軍勢皆萬歲を唱。此間に高祖三千餘騎を從へて、城の西門より出て、成皐へぞ落給ける。夜明て後楚に降る漢王を見れば、高祖には非ず、其臣に紀信と云者なりけり。項羽大に忿て、遂に紀信を刺殺す。高祖頓て成皐の兵を率して、却て項羽を攻む。項羽が勢盡て後、遂に烏江にして討れしかば、高祖長く漢の王業を起して、天下の主と成にけり。今主上も斯し佳例を思召、師賢も斯樣の忠節を被存けるにや。彼は敵の圍を解せん爲に僞り、是は敵の兵を遮らん爲に謀れり。和漢時異れども、君臣體を合たる、誠に千載一遇の忠貞、頃刻變化の智謀也。

竹園連枝―竹園は親王、連枝は兄弟也

未大勢籠たる由を見せ、戸津の濱より小舟に召れ、落止る所の衆徒三百人計を被レ召具て、先石山へ落させ給ふ。此にて兩門主一所へ落させ給はん事は、計略遠からぬに似たる上、妙法院は御行歩もかひぐしからねば、唯暫此邊に御座有べしとて、石山より二人引別させ給て、妙法院は笠置へ越させ給へば、大塔宮は十津河の奥へと志て、先南都の方へぞ落させ給ける。さしもやごとなき一山の貫首の位を捨て、未習せ給はぬ萬里漂泊の旅に浮れさせ給へば、醫王山王の結縁も、是や限と名殘惜く、竹園連枝の再會も、今は何をか可レ期と、御心細被二思召一ければ、互に隔たる御影の、隱るゝまでに顧て、泣々東西へ別させ給ふ、御心の中こそ悲けれ。抑今度主上、實に山門へ臨幸不レ成に依て、衆徒の意忽に變ずること、一日事ならずと云へ共、倩事の樣を案るに、是叡智の不レ淺處に出たり。昔強秦亡て後、楚の項羽と漢の高祖と、國を爭事八箇年、軍を挑事七十餘箇度也。其戰の度毎に、項羽常に勝に乘て、高祖甚苦める事多し。或時高祖滎陽城に籠る。項羽兵を以て城を圍事、數百重也。日を經て城中に粮盡て、兵疲ければ、高祖戰んとするに力なく、遁んとするに道なし。此に高祖の臣に紀信と云ける兵、高祖に向て申けるは、項羽今城を圍ぬる事數百重、漢已に食盡て

袞衣—袞龍の御衣

一まども—一先も

有しか共、軈て東塔の南谷圓融坊へこそ御移有しか。且は先蹤也、且は吉例也。早く臨幸を本院へ可成奉と、西塔院へ觸送る。西塔の衆徒理にをれて、仙蹕を促ん爲に、皇居に參列す。折節深山おろし烈して、御簾を吹上たるより、龍顏を拜し奉たれば、主上にてはおはしまさず、尹大納言師賢の、天子の袞衣を著し給へるにてぞ有ける。大衆是を見て、こは如何なる天狗の所行ぞやと興をさます。其後よりは、參る大衆一人もなし。斯ては、山門如何なる野心をか存ぜんずらんと覺えければ、其夜の夜半計に、尹大納言師賢、四條中納言隆資、二條中將爲明、忍て山門を落て、笠置の石室へ被參。去程に、上林房阿闍梨豪譽は、元來武家へ心を寄しかば、大塔宮の執事安居院中納言法印澄俊を生捕て、六波羅へ是を出す。護正院僧都猷全は、御門徒の中の大名にて、八王子の一の木戶を堅たりしかば、斯ては叶はじとや思けん、同宿手の者引つれて、六波羅へ降參す。是を始として、一人落二人落、落行ける間、今は光林房律師源存、妙光房小相摸、中坊惡律師、三四人より外は、落止る衆徒も無りける。妙法院と大塔宮とは、其夜迄尚八王子に御座ありけるが、斯ては惡かりぬべし、一まども落延て、君の行末をも承らばやと思召ければ、廿九日の夜半計に、八王子に篝火をあまた所に燒て、

格勤—役目大事に勤むる事なれどこゝは諸司に勤番する勇士

六軍翠華—六軍は天子の軍、翠華は天子の旗

大衆—多くの僧侶達

耳にも觸ざりしに、俄なる不思議出來ぬれば、人皆あわて騒で、天地も唯今打返す樣に、沙汰せぬ處も無りけり。

○持明院殿御㆓幸六波羅㆒事

世上亂たる時節なれば、野心の者共の取進する事もやとて、昨日廿七日の巳刻に、持明院本院春宮兩御所、六條殿より、六波羅の北方へ御幸なる。供奉の人々には、今出川前右大臣兼季公、三條大納言通顯、西園寺大納言公宗、日野前中納言資名、防城宰相經顯、日野宰相資明、皆衣冠にて、御車の前後に相從ふ。其外の北面諸司格勤は、大略狩衣の下に、腹卷を著映したるもあり。洛中須臾に變化して、六軍翠花を警固し奉る。見聞耳目を驚かせり。

○主上臨幸依㆑非㆓實事㆒山門變議事附紀信事

山門の大衆唐崎の合戰に打勝て、事始よしと喜合る事斜ならず。爰に西塔を皇居に被㆑定條、本院面目無に似たり。壽永の古、後白河院山門を御憑有し時も、先横川へ御登山

者定快、金蓮房伯耆直源、四人左右より渡合て、鋒を指合て切て廻る。讃岐と直源と同じ處にて打れにければ、後陣の衆徒五十餘人、續て又討て懸る。唐崎の濱と申は、東は湖にて、其汀崩たり。西は深田にて、馬の足も立ず。平沙渺々として道せばし。後へ取まはさんとするも叶ず、中に取籠んとするも叶ず。されば衆徒も寄手も、互に面に立たる者計戰て、後陣の勢は、いたづらに見物してぞ控たる。已に唐崎に軍始りたりと聞えければ、御門徒の勢三千餘騎、白井の前を今路へ向ふ。本院の衆徒七千餘人、三宮林を下降る。和仁堅田の者共は、小舟三百餘艘に取乗て、敵の後を遮んと、大津をさして漕廻す。六波羅勢是を見て、叶はじとや思けん、志賀の閻魔堂の前を横切に、今路に懸て引歸す。衆徒は案内者なれば、此彼の逼々に落合て、散々に射る。武士は皆無案内なれば、堀峪とも云ず、馬を馳倒して引かねける間、後陣に引ける海東が若黨八騎、波多野が郎等十三騎、眞野入道父子二人、平井九郎主從二騎、谷底にて討れにけり。佐々木判官も馬を射させて、乘かへを待程に、大敵左右より取巻て、既に討れぬとみえけるを、名を惜み命を輕んずる若黨共返合返合、所々にて討死しける其間に、萬死を出て一生に合ひ、白晝に京へ引返す。此比迄は天下久靜にして、軍と云事は、敢て

坂本樣の拜み切―坂本にて比叡を拜むが如く、眞向に打物を振りかざして切ること

身に取ては情無し、打たじとすれば、走懸走懸、手繁く切廻りける間、よし〳〵さらば、長刀の柄にて太刀を打落て、組止めんとしける處を、比叡辻の者共が、田の畔に立渡て射ける横矢に、此兒胄板をつと被射拔て、矢場に伏て死にけり。後に誰ぞと尋れば、海東が嫡子幸若丸と云ける小兒、父が留置けるに依て、軍の供をばせざりけるが、猶も覺束なくや思けん、見物衆に紛て、跡に附て來ける也。幸若稚しと云へ共、武士の家に生たる故にや、父が討れけるを見て、同く戰場に打死して、名を殘けるこそ哀なれ。海東が郎等是を見て、二人の主を目の前に討せ、剩へ首を敵に取せて、生て歸る者や可有とて、三十六騎の者共、轡を雙て懸入、主の死骸を枕にして、討死せんと相爭ふ。快賓是を見て、から〳〵と打咲て、心得ね物哉。御邊達は、敵の首をこそ取らんずるに、御方の首をほしがるは、武家自滅の瑞相顯れたり。ほしからば、すは取らせんと云儘に、持たる海東が首を、敵の中へがばと投懸、坂本樣の拜み切、八方を拂て火を散す。三十六騎の者共、快賓一人に被切立て、馬の足をぞ立かねたる。佐々木三郎判官時信後に控て、御方討すな、つゞけやと下知しければ、伊庭、目賀多、木村、馬淵、三百餘騎喚て懸る。快賓既に討れぬと見えける處に、桂林房悪讃岐、中房小相模、勝行房侍從竪

射向の袖｜左の袖
弓手｜左手
上巻｜鎧の上巻附の板の略
麹塵の筒丸｜黄に青を帯びたる筒丸、筒丸は鎧の一種
大口｜大口袴

是を見て、敵は小勢也けるぞ。後陣の勢の重ならぬ前に、懸散さでは叶まじ。つゞけや者共と云儘に、三尺四寸の太刀を拔て、鎧の射向の袖をさしかざし、敵のうず巻て控へたる眞中へ懸入、敵三人切ふせ、波打際に控へて、續く御方をぞ待たりける。岡本房播磨豎者快實遙に是を見て、前につき雙たる持楯一帖岸破と踏倒し、二尺八寸の小長刀、水車に回して躍り懸る。海東是を弓手にうけ、冑の鉢を眞二に打破んと、隻手打に打けるが、打外して袖の冠板より菱縫の板まで、片筋かひに、懸ず切て落す。二の太刀を餘に強く切んとて、弓手の鐙を踏折、已に馬より落んとしけるが、乘直りける處を、快實長刀の柄を取延、内甲へ鋒上に、二つ三つ、すき間もなく入たりけるに、海東あやまたず喉ぶえを突れて、馬より眞倒に落にけり。快實軈て海東が上巻に乘懸り、鬢の髪を摑で引あげ、首かき切て長刀に貫き、武家の大將一人討取たり、物始よしと悅で、あざ咲てぞ立たりける。爰に何者とは知ず、見物衆の中より、年十五六計なる小兒の、髪唐輪に上たるが、麹塵の筒丸に、大口のそば高く取り、金作の小太刀を拔て、快實に走懸り、甲の鉢をしたゝかに、三打四打ぞ打たりける。快實屹と振回て是を見るに、齡二八計なる小兒の、大眉に鐵漿黑也。是程の小兒を討留たらんは、法師の

局町―官女の部屋の並びたるよりかくいふ

解脱同相の御衣―生死を離れたる表示の袈裟、同相は正しくは幢相と書く

後攻仕て、主上をば取奉るべしとぞ申たりける。兩六波羅大に驚て、先内裏へ參て見奉るに、主上は御座無て、唯局町女房達、此彼にさしつどひて、泣聲のみぞしたりける。さては山門へ落させ給たる事仔細なし。勢つかぬ前に、山門を攻よとて、四十八箇所の篝に、畿内五箇國の勢を差添て、五千餘騎追手の寄手として、赤山の麓下松の邊へ指向らる。搦手へは佐々木三郎判官時信、海東左近將監、長井丹後守宗衡、筑後前司貞知、波多上野前司宣道、常陸前司時朝に、美濃尾張丹波但馬の勢をさしそへて、七千餘騎大津松本を經て、唐崎の松の邊まで寄懸たり。坂本には、兼てより相圖を指たる事なれば、妙法院大塔宮兩門主、宵より八王寺へ御上あつて、御旗を被揚たるに、御門徒護正院僧都祐全、妙光坊阿闍梨玄尊を始として、三百騎五百騎此彼より馳參りける程に、一夜の間に御勢六千餘騎に成にけり。天台座主を始て、解脱同相の御衣を脱給て、堅甲利兵の御貌に替り、垂跡和光の砌、忽に變て勇士守禦の場と成ぬれば、神慮も如何有らんと、計り難ぞ覺たる。去程に、六波羅勢已に戸津宿邊まで寄たりと、坂本の内騒動しければ、南岸圓宗院、中坊勝行房、早雄の同宿共、取物も取あへず、唐崎の濱へ出合ける。其勢皆かち立にて、而も三百人には過ざりけり海東

衮龍の御衣—天子の禮服、色赤く日月星辰山龍雉藻火斧等の象を繡ひたるもの

○師賢登山事 附唐崎濱合戰事

尹大納言師賢卿は、主上の内裏を出御有し夜、三條河原迄被供奉たりしを、大塔宮より樣々被仰つる仔細あれば、臨幸の由にて山門へ登り、衆徒の心をも伺ひ、又勢をも附て合戰を致せと被仰ければ、師賢法勝寺の前より、衮龍の御衣を著て、瑤輿に乘替て、山門の西塔院へ登給ふ。四條中納言隆資、二條中將爲明、中院左中將定平、皆衣冠正して、供奉の體に相從ふ。事の儀式誠敷ぞ見えたりける。西塔の釋迦堂を皇居と被成、主上山門を御憑有て、臨幸成たる由披露有ければ、山上坂本は申に及ばず、大津、松本、戸津、比叡辻、仰木、絹河、和仁、堅田の者迄も、我前にと馳參。其勢東西兩塔に充滿して、雲霞の如にぞ見えたりける。懸りけれども六波羅には、未曾是を知らず。夜明ければ、東使兩人内裏へ參て、先づ行幸を六波羅へ成奉んとて打立ける處に、淨林房阿闍梨豪譽が許より、六波羅へ使者を立て、今夜の寅刻に、主上山門を御憑有て、臨幸成りたる間、三千の衆徒悉く馳參り候。近江越前の御勢を待て、明日は六波羅へ被寄べき由評定あり。事の大に成り候はぬ先に、急ぎ東坂本へ御勢を被向候へ。豪譽

駕輿丁―御輿を舁く人夫

と問申ければ、藤房季房二人、御車に隨て供奉したりけるが、是は中宮の、夜に紛て北山殿へ行啓ならせ給ふぞと宣たりければ、さては仔細候はじとて、御車をぞ通しける。兼て用意やしたりけん、源中納言具行、按察大納言公敏、六條少將忠顯、三條河原にて追附奉る。此より御車をば被止、怪げなる張輿に召替させ進たれども、俄の事にて、駕輿丁も無りければ、大膳大夫重康、樂人豐原兼秋、隨身秦久武なんどぞ、御輿をば舁奉りける。供奉の諸卿皆衣冠を解で、折烏帽子に直垂を著し、七大寺詣する京家の青侍なんどの、女性を具足したる體に見せて、御輿の前後にぞ供奉したりける。古津石地藏を過させ給ひける時、夜は早若々と明にけり。此にて朝餉の供御を進め申て、先づ南都の東南院へ入せ給ふ。彼僧正元より貳心なく、忠義を存ぜしかば、先づ臨幸なりたるをば披露せで、衆徒の心を伺聞に、西室顯實僧正は、關東の一族にて、權勢の門主たる間、皆其威にや恐れたりけん、與力する衆徒も無りけり。かくては南都の皇居叶まじとて、翌日二十六日、和束の鷲峰山へ入せ給ふ。此は又餘に山深く里遠して、何事の計略も叶まじき處なれば、要害に御陣を召るべしとて、同二十七日潜幸の儀式を引つくろひ、南都の衆徒少々召具せられて、笠置の石室へ臨幸なる。

上臥—禁廷に宿直する事
重耳—晉の獻公の子
大王—古公亶父とて、周の文王の祖父也。

雲を死罪に行ん爲にて候なる。今夜急ぎ南都の方へ御忍び候べし。城郭未レ調、官軍馳參ぜざる先に、凶徒若皇居に寄來ば、御方防戰に利を失ひ候はんか。且は京都の敵を遮り止んが爲、又は衆徒の心を見んが爲に、近臣を一人、天子の號を許れて、山門へ被レ上、臨幸の由を披露候はゞ、敵軍定て叡山に向て、合戰を致し候はん歟。去程ならば、衆徒吾山を思故に、防戰に身命を輕じ候べし。凶徒力疲れ、合戰數日に及ばゝ、伊賀伊勢大和河内の官軍を以て、却て京都を被レ攻んに、凶徒の誅戮、踵を旋すべからず。國家の安危、唯此一擧に可レ有候也と、被レ申たりける間、主上唯あきれさせ給へる計にて、何の御沙汰にも及給はず。尹大納言師賢、萬里小路中納言藤房、同舍弟季房三四人、上臥したるを、御前に召れて、此事如何可レ有と被二仰出一ければ、藤房卿進で被レ申けるは、逆臣君を犯し奉らんとする時、暫其難を避て、還て國家を保は、前蹤皆佳例にて候。所謂重耳は翟に奔り、大王豳に行く。共に王業をなして、子孫無窮に光を榮し候き。兎角の御思案に及候はゞ、夜も深候なん。早御忍候へとて、御車を差寄、三種の神器を乘奉り、下簾より出絹出して、女房車の體に見せ、主上を扶乘進て、陽明門より成奉る。御門守護の武士共、御車を押へて、誰にて御渡り候ぞ

六方―興福寺の六方の末寺、六方は乾艮巽坤龍華院、菩提院

嘉暦二年の春の比、南都大乘院禪師房と、六方の大衆と、確執の事有て、合戰に及び、金堂、講堂、南圓堂、西金堂、忽に兵火の餘煙に燒失ぬ。又元弘元年、山門東塔の北谷より、兵火出來て、四王院、延命院、大講堂、法華堂、常行堂、一時に灰燼と成ぬ。是等をこそ、天下の災難を兼て知する處の前相かと、人皆魂を冷しけるに、同年の七月三日、大地震有て、紀伊國千里濱の遠干潟、俄に陸地になる事、二十餘町也。又同七日の酉刻に地震有て、富士の絶頂崩るゝ事、數百丈也。卜部宿禰、大龜を燒て占ひ、陰陽博士、占文を啓て見に、國王位を易、大臣遭レ災とあり。勘文の表不レ穩、尤御愼可レ有と密奏す。寺々の火災所々の地震、徒事に非ず、今や不思議出來と、人々心を驚しける處に、果して其年の八月廿二日、東使兩人三千餘騎にて上洛すと聞えしかば、何事とは知ず、京に又如何なる事や有んずらんと、近國の軍勢、我も我もと馳集る。京中何となく以外に騷動す。兩使已に京著して、未文箱をも開ぬ先に、何とかして聞えけん。今度東使の上洛は、主上を遠國へ遷進せ、大塔宮を死罪に行奉ん爲也と、山門に披露有ければ、八月廿四日の夜に入て、大塔宮より潛に御使を以て主上へ申させ給ひけるは、今度東使上洛の事、内々承候へば、皇居を遠國へ遷奉り、尊

連理の契―連理の枝の如き契、連理は二枝相向ひ木理の連接したるをいふ

り、空き遺骨を頸に懸、形見の御文身に副て、泣々京へぞ上りける。北方は助光を待附て、辨殿の行末を聞ん事の嬉しさに、人目も憚ず、簾より外に出迎ひ、いかにや辨殿は、何比に御上可有との御返事ぞと問給へば、助光はらはらと泪をこぼして、はや斬れさせ給て候。是こそ今はのきはの御返事にて候へとて、鬢の髪と消息とを差あげて、聲も惜まず泣ければ、北方は形見の文と、白骨を見給て、内へも入給ず、縁に倒伏し、消入給ぬと驚く程に見え給ふ。理なる哉一樹の陰に宿り、一河の流を汲程も、知れず知らぬ人にだに、別となれば名殘を惜む習なるに、況や連理の契不淺して、十年餘に成ぬるに、夢より外は又も相見ぬ、此世の外の別と聞て、絶入り悲み給ふぞ理なる。四十九日と申に、形の如の佛事營て、北方樣をかへ、こき墨染に身をやつし、柴の扉の明くれは、亡夫の菩提を吊ひ給ける。助光も髻切て、永く高野山に閉籠て、偏に亡君の後生菩提をぞ吊奉ける。夫婦の契、君臣の義、無跡迄も留て、哀なりし事共也。

○天下怪異事

黒み過る―思の色深くとあるより黒くとうけて、あまりと思はるゝまでなるをいふ

幕の内へ御參候へとぞ許しける。助光幕の内に入て、御前に跪く。俊基は助光を打見て、いかにやと計宣て、軈て泪に咽び給ふ。助光も北方の御文にて候とて、御前に差置たる計にて、是も泪にくれて、顔をも擡げず泣居たり。良暫く有て、俊基泪を押拭ひ、文を見給へば、消懸る露の身の、置所なきに附ても、如何なる暮にか、無世の別と承り候はんずらんと、心を摧く泪の程、御推量も尚淺くなんと、詞に餘て思の色深く、黒み過るまで書れたり。俊基いとゞ涙にくれて、讀かね給へる氣色、見人袖をぬらさぬは無りけり。硯やあると宣へば、矢立を御前に指置ば、硯の中なる小刀にて、鬢の髮を少し押切て、北方の文に卷そへ、引返し一筆書て、助光が手に渡し給へば、助光懐に入て泣沈たる有樣、理にも過て哀也。工藤左衛門幕の内に入て、餘に時の移り候と勸れば、俊基疊紙を取出し、頸の廻り押拭ひ、其紙を推開て、辭世の頌を書給ふ。

古來一句。無死無生。萬里雲盡。長江水淸。

筆を閣て、鬢の髮を摩給ふ程こそあれ、太刀かけ後に光れば、首は前に落けるを、自ら抱て伏給ふ。是を見奉る助光が心の中、譬て云ん方もなし。さて泣々死骸を葬し奉

張輿一疊表にて周圍を張りたる略式の輿

終る程、僅の日數を待暮す、命の程こそ哀なれ。此朝臣の多年召仕ける青侍に、後藤左衛門尉助光と云者あり。主の俊基召捕られ給し後、北方に附進せ、嵯峨の奥に忍て候けるが、俊基關東へ被召下給ふ由を聞給て、北方は堪ぬ思に伏沈て、歎悲給けるを見奉に、不堪悲して、北方の御文を賜て、助光忍て鎌倉へぞ下ける。今日明日の程と聞えしかば、今は早や斬れもやし給ひつらんと、行逢人に事の由を問々、程なく鎌倉にこそ著にけれ。右少辨俊基のおはする傍に宿を借て、如何なる便もがな、事の仔細を申入んと伺けれども、不叶して日を過しける處に、今日こそ京都よりの囚人は、斬れ給べきなれ。あな哀れやなんど沙汰しければ、助光こは如何せんと、肝を消し、此彼に立て見聞しければ、俊基已に張輿に乘せられて、粧坂へ出給ふ。爰にて工藤二郎左衛門尉請取て、葛原岡に大幕引て、敷皮の上に坐し給へり。是を見ける助光が心中、譬て云ん方もなし。目くれ足もなへて、絶入る計に有けれども、泣々工藤殿が前に進出で、是は右少辨殿の伺候の者にて候が、最後の樣見奉候はん爲に、遙々と參候。可然は御免を蒙て、御前に參り、北方の御文をも見參に入候はんと申もあへず、泪をはら〳〵と流ければ、工藤も見るに哀を催されて、不覺の泪せきあへず。仔細候まじ。早

揭焉―いちじるし

跳上々々、肝膽を碎てぞ祈りける。行者の祈神に通じて、明王擁護やしたまひけん。澳の方より俄に惡風吹來て、此船忽覆らんとしける間、船人共あわてゝ、山伏の御房、先我等を御助け候へと、手を合膝をかゞめ、手々に船を漕もどす。汀近く成ければ、山伏の御船頭船より飛下て、兒を肩にのせ、山伏の手を引て、屋形の内に入たれば、風は又元の如に直りて、船は湊を出にける。其後追手共、百四五十騎馳來り、遠淺に馬を控へて、あの船止れと招共、舟人是を見ぬ由にて、順風に帆を揚たれば、船は其日の暮程に、越後の府にぞ著にける。阿新山伏に助られて、鰐口の死を遁しも、明王加護の御誓揭焉なりける驗也。

○俊基被誅事並助光事

俊基朝臣は殊更謀叛の張本なれば、遠國に流すまでも有べからず、近日に鎌倉中にて斬奉るべしとぞ被定ける。此人多年の所願有て、法華經を六百部自讀誦し奉るが、今二百部殘りけるを、六百部に滿る程の命を被相待候て、其後兎も角も被成候へと、頻に所望有ければ、げにも其程の大願を果させ奉らざらんも罪也とて、今二百部の

柹の衣の露—柹の衣は先達の著衣にて、赤色無文、露は袖括の緒の垂れたる端
いらたか誦珠—つぶの平たき念珠
薄伽梵—如來の尊號
明王—不動明王

五十騎馳散て、若十二三計なる兒や通りつると、道に行合人毎に、問音してぞ過行ける。阿新其日は麻の中にて日を暮し、夜になれば湊へと心ざして、そことも知ず行程に、孝行の志を感じて、佛神擁護の眸をや廻らされけん。年老たる山伏一人行合たり。此兒の有様を見て、痛しくや思けん、是は何より何をさして、御渡り候ぞと問ければ、阿新事の様をありの儘にぞ語りける。山伏是を聞て、我此人を助けずば、唯今の程に、かはゆき目を見るべしと思ければ、御心安く思召れ候へ。湊に商人船共多く候へば、乘せ奉て、越後越中の方まで、送附まゐらすべしと云て、足たゆめば、此兒を肩に乘せ、背に負て、程なく湊にぞ行著ける。夜明て便船やあると尋けるに、折節湊の内に、船一艘も無りけり。如何せんと求る處に、遙の澳に乘うかべたる大船、順風に成ぬと悦て、檣を立、篷をまく。山伏手を上て、其船是へ寄てたび給へ。便船申さんと呼りけれども、曾て耳にも聞入ず、船人聲を帆に上て、湊の外に漕出す。山伏大に腹を立て、柹の衣の露を結で肩にかけ、澳行船に立向て、いらたか誦珠をさら〳〵と押揉で、一持祕密咒、生々而加護、奉仕修行者、猶如薄伽梵と云へり。況多年の勤行に於てをや。明王の本誓あやまらずは、權現金剛童子、天龍夜叉、八大龍王、其船此方へ漕返てたばせ給へと、

にて枕をはたとぞ蹴たりける。けられて驚く處を、一の太刀に臍の上を疊までつとつきとほし、返す太刀に、喉ぶえ指切て、心閑に後の竹原の中へぞかくれける。本間三郎が、一の太刀に胸を通されて、あつと云聲に、番衆ども驚騒で、火を燃して是を見るに、血の附たるちひさき足跡あり。さては阿新殿のしわざ也。堀の水深ければ、木戸より外へはよも出じ。さがし出て打殺せとて、手々松明をとぼし、木の下草の陰まで、殘處無ぞさがしける。阿新は竹原の中に隱れながら、今は何へか遁るべき。人手に懸らんよりは、自害をせばやと思はれけるが、惡しと思ふ親の敵をば討つ。今は如何もして、命を全して、君の御用にも立、父の素意をも達したらんこそ、忠臣孝子の義にてもあらんずれ。若やと一まづ落て見ばやと思返して、堀を飛越んとしけるが、口二丈深さ一丈に餘りたる堀なれば、越べき樣も無りけり。さらば是を橋にして渡んよと思て、堀の上に末なびきたる呉竹の梢へ、さら〳〵と登たれば、竹の末堀の向へなびき伏て、やす〳〵と堀をば越てけり。夜は未深し、湊の方へ行て、舟に乘てこそ陸へは著めと思て、たどる〳〵浦の方へ行程に、夜もはや次第に明離て、忍べき道もなければ、身を隱さんとて日を暮し、麻や蓬の生茂たる中に隱れ居たれば、追手共と覺しき者共、百四

遠侍―中門の廊の傍なる宿直の武士の詰所

かにぬけ出て、本間が寢處なんど、細々に伺て、隙あらば彼入道父子が間に、一人さし殺して、腹切らんずる物をと、思定てぞねらひける。或夜雨風烈しく吹て、番する郎等共も、皆遠侍に臥たりければ、今こそ待處の幸よと思て、本間が寢處の方を忍て伺に、本間が運やつよかりけん、今夜は常の寢處を替て、何に有とも見えず。又二間なる處に、燈の影の見えけるを、是は若本間入道が子息にてや有らん。其なりとも討て恨を散ぜんと、ぬけ入て是を見るに、其さへ爰には無して、中納言殿を斬奉し、本間三郎と云者ぞ、唯一人臥たりける。よしや是も時に取ては、親の敵也、山城入道に劣るまじと思て、走りかゝらんとするに、我は元來太刀も刀も持ず、唯人の太刀を我物と憑たるに、燈殊に明なれば、立寄ば驚合ふ事もや有んずらんと危て、左右なく寄えず。如何せんと案じ煩て立たるに、折節夏なれば、燈の影を見て、蛾と云蟲のあまた明障子に取附たるを、すはや究竟の事こそ有れと思て、障子を少引あけたれば、此蟲あまた内へ入て、軈て燈を打けしぬ。今は右とうれしくて、本間三郎が枕に立寄て探るに、太刀も刀も枕に有て、主はいたく寢入たり。先刀を取て腰にさし、太刀を拔て心もとに指當て、寢たる者を殺すは、死人に同じければ、驚さんと思て、先足

頭燃―天台三大部補注曰、譬如下男女有二火燒一レ頭救令中速滅上

五蘊―色受想行識にて心身也

四大―地水火風

色しほれて、常には泪を押拭ひ給けるが、人間の事に於ては、頭燃を拂ふ如に成ぬと覺て、唯綿密の工夫の外は、餘念有りとも見え給はず。夜に入れば、輿さし寄て乘奉り、爰より十町計ある河原へ出し奉り、輿舁居たれば、少も臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直て、辭世の頌を書給ふ。

五蘊假成レ形。四大今歸レ空。

將レ首當ニ白刃一。截斷一陣風。

年號月日の下に、名字を書附て、筆を閣き給へば、切手後に廻るとぞ見えし。御首は敷皮の上に落て、質は尚坐せるが如し。此の程常に法談なんどし給ひける僧來て、葬禮如レ形取營み、空き骨を拾て、阿新に奉りければ、阿新是を一目見て、取手も撓倒伏、今生の對面遂に叶ずして、替れる白骨を見る事よと、泣悲も理也。阿新末幼稚なれ共、けなげなる所存有ければ、父の遺骨をば、唯一人召仕ける中間に持せて、先我よりさきに高野山に參て、奥の院とかやに納よとて、都へ歸し上せ、我身は勞る由にて、尚本間が館にぞ留りける。是は本間が情なく、父を今生にて我に見せざりつる鬱憤を散ぜんと思ふ故也。斯て四五日經ける程に、阿新晝は病の由にて終日に臥し、夜は忍や

踏皮—革にて仕立てたる足袋

生を隔つ—世を隔てゝ生る

入て、踏皮行纏解せ、足洗て、疎ならぬ體にてぞ置たりける。阿新殿是をうれしと思に附ても、同は父の卿を、疾見奉ばやと云けれ共、今日明日斬らるべき人に、是を見せては、中々よみ路の障とも成ぬべし、又關東の聞えもいかゞ有らんずらんとて、父子の對面を許さず、四五町隔たる處に置たれば、父の卿は是を聞て、行末も知ぬ都に、いかゞ有らんと、思やるよりも尚悲し。子は其方を見遣て、浪路遙に隔たりし、鄙のすまひを想像て、心苦く思つる、泪は更に數ならずと、袂の乾くひまもなし。是こそ中納言のおはします牢の中よとて見やれば、竹の一村茂りたる處に、堀ほり廻し塀塗て、行通ふ人も稀也。情なの本間が心や。父は禁籠せられ、子は未稚なし、縱ひ一所に置たりとも、何程の怖畏か有べきに、對面をだに許さで、まだ同世の中ながら、生を隔たる如にて、ながらん後の苔の下、思寢に見ん夢ならでは、相見ん事も有がたしと、互に悲む恩愛の、父子の道こそ哀なれ。五月二十九日の暮程に、資朝卿を牢より出し奉て、遙に御湯も召れ候はぬに、御行水候へと申せば、早斬らるべき時に成けりと思給て、嗚呼うたてしき事かな。我最後の樣を見ん爲に、遙々と尋下たる少き者を一目も見ずして、終ぬる事よと計り宣て、其後は、曾て諸事に附て、言をも出給はず。今朝迄は氣

越路…北陸道の事

共に斬れて、冥途の旅の供をもし、又最後の御有様をも見奉るべしとて、母に御暇をぞ乞れける。母御頻に諫て、佐渡とやらんは、人も通はぬ怖しき島とこそ聞れ。日數を經る道なれば、いかんとしてか下べき。其上汝にさへ離ては、一日片時も命存べしとも覺えずと、泣悲て止ければ、よしや伴ひ行人なくば、如何なる淵瀨にも、身を投て死なんと申ける間、母痛く止ば、又目の前に、憂別も有ぬべしと思佗て、力なく今まで唯一人附副たる中間を相そへられて、遙々と佐渡國へぞ下ける。路遠けれども、乘べき馬もなければ、はきも習ぬ草鞋に、菅の小笠を傾て、露分わくる越路の旅、思やるこそ哀なれ。都を出て十日餘と申に、越前の敦賀の津に著にけり。是より商人船に乘て、程なく佐渡國へぞ著にける。人して右と云べき便もなければ、自本間が館に到て、中門の前にぞ立たりける。折節僧の有けるが立出て、此内への御用にて御立候か、又如何なる用にて候ぞと問ければ、阿新殿、是は日野中納言の一子にて候が、近來切られさせ給べしと承て、其最後の樣をも見候はんために、都より遙々と尋下候と、云もあへず、泪をはら〱と流しければ、此僧心有ける人也ければ、急ぎ此由を本間に語るに、本間も岩木ならねば、さすが哀にや思けん、軈て此僧を以て、持佛堂へいざなひ

は、文を以て彌治め、亂たる時には、武を以急に靜む。故に戰國の時には孔孟不レ足レ用。太平の世には干戈似レ無レ用。事已に急に當りたり。武を以て治むべき也。異朝には文王武王、臣として無道の君を討し例あり。吾朝には義時泰時、下として不善の主を流す例あり。世みな是を以て當れりとす。されば古典にも、「君視レ臣如二土芥一則臣視君如二寇讐一」と云へり。事停滯して、武家追罰の宣旨を下されなば、後悔すとも益有べからず。唯速に君を遠國に遷し進せ、大塔宮を硫黃島へ流奉り、隱謀の逆臣、資朝俊基を、誅せらるゝより外の事有べからず。武家の安泰萬世に及べしとこそ存候へと、居長高に成て申ける間、當座の頭人評定衆、權勢にや阿けん、又愚案にや落けん、皆此議に同じければ、道蘊再往の忠言に及ばず、眉を顰て退出す。さる程に、君の御謀叛を申勸けるは、源中納言具行、右少辨俊基、日野中納言資朝也。各死罪に行るべしと、評定一途に定て、先去年より佐渡國へ流されておはする、資朝卿を斬奉べしと、其國の守護本間山城入道に被二下知一。此事京都に聞えければ、此資朝の子息國光の中納言、其比は阿新殿とて、歲十三にておはしけるが、父の卿囚人に成給しより、仁和寺邊に隱て居られけるが、父誅せられ給べき由を聞て、今は何事にか命を惜むべき。父と

累葉―累代

上一人―天子

りしを、朝憲に憚て、御沙汰緩かりしに依て、此事猶未休。亂を撥て治を致は、武の一德也。速に當今を遠國に遷し進せ、大塔宮を不返の遠流に處し奉り、俊基資朝以下の亂臣を、一々に誅せらるゝより外は、別議あるべしとは存候はずと、憚る處なく申けるを、二階堂出羽入道道蘊、暫思案して申けるは、此議尤然るべく聞え候へ共、退て、愚案を運すに、武家權を執て已に百六十餘年、威四海に及、運累葉を耀すこと、更に他事なし。唯上一人を仰奉て、忠貞に私なく、下百姓を撫て、仁政に施ある故也。然に今君の寵臣一兩人召置れ、御歸依の高僧兩三人、流罪に處せらるゝ事も、武臣惡行の專一と云つべし。此上に又主上を遠所へ遷し進せ、天台座主を流罪に行れん事、天道奢を惡むのみならず、山門爭か憤を含まざるべき。神怒人背かば、武運の危に近るべし。君雖不君、不可臣以不臣と云へり。御謀叛の事君縱思召立とも、武威隆ならん程は、與し申者有べからず。是に附ても、武家彌愼で、勅命に應ぜば、君もなどか思召直す事無らん。かくてこそ國家の泰平、武運の長久にて候はんと存るは、面々如何思召候と申けるを、長崎新左衛門尉、又自餘の意見をも不待、以の外に氣色を損じて、重て申けるは、文武揆一也と云へ共、用捨時異るべし。靜なる世に

請取奉て、諏訪左衛門に預らる。一間なる處に、蜘手きびしく結て、押籠奉る有様、唯地獄の罪人の、十王の廳に渡されて、頸枷手枷を入られ、罪の輕重を糺すらんも、かくやと思知れたり。

○長崎新左衛門尉意見事 附 阿新殿事

當今御謀叛の事露顯の後、御位は軈て持明院殿へぞ進らんずらんと、近習の人々青女房に至るまで、悦あへる處に、土岐が討れし後も、曾て其沙汰もなし。今又俊基召下されぬれ共、御位の事に附ては、如何なる沙汰あり共聞ざりければ、持明院殿方の人々、案に相違して、五噫を謳者のみ多かりけり。さればとかく申勸る人のありけるにや、持明院殿より、内々關東へ御使を下され、當今御謀叛の企、近日事已に急なり。武家速に糺明の沙汰なくば、天下の亂近に有べしと仰られたりければ、相摸入道げにもと驚て、宗徒の一門竝頭人評定衆を集て、此事如何有べきと、各所存を問る。然ども或は他に讓て口を閉、或は己を顧て、言を出さゞる處に、執事長崎入道が子息、新左衛門尉高資進出て申けるは、先年土岐十郎が討れし時、當今の御位を改申さるべか

五噫を謳者—後漢の梁鴻の歌に本づき、悲むことをいふ

龍頭鷁首の舟—樂人の乘る舟、鷁は水鳥の名

こゆるぎの急ぐ—小餘綾の磯の意を兼ぬ

今東海道菊河。宿ニ西岸ニ而終レ命。

と書たりし、遠き昔の筆の跡、今は我身の上になり、哀やいとゞ増りけん、一首の歌を詠て、宿の柱にぞ書れける。

古もかゝるためしを菊川の、同じ流に身をや沈めん。

大井河を過給へば、都にありし名を聞て、亀山殿の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭鷁首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍し事も、今は二度見ぬ夜の夢と成ぬと思つゞけ給ふ。島田藤枝に懸りて、岡邊の眞葛裏枯て、物がなしき夕暮に、宇都の山邊を越行ば、蔦楓いと茂りて道もなし。昔業平の中將の住所を求とて、東の方に下とて、夢にも人に逢ぬなりけりと讀たりしも、かくやと思知れたり。清見潟を過給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、向はいづこ三穗が崎、奥津神原打過て、富士の高峯を見給へば、雪の中より立煙、上なき思に比べつゝ、明る霞に松見えて、浮島が原を過行ば、鹽干や淺き船浮て、おり立田子の自も、浮世を遶る車返し、竹の下道行なやむ。足柄山の嶺より、大磯小磯眞下て、袖にも波はこゆるぎの、急としもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著給けれ。其日軈て、南條左衛門高直

隙行駒の足はやみ―日脚の早さに

ば夜間にも、老蘇森の下草に、駒を止て顧る、古郷を雲や隔つらん。番馬醒井柏原、不破の關屋は荒果て、猶もる物は秋の雨の、いつか我身の尾張なる、熱田の八劒伏拜み、鹽干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明ぬ暮ぬと行道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕鹽に、引人も無き捨小船、沈みはてぬる身にしあれば、誰か哀と夕暮の、晩鐘鳴ば今はとて、池田の宿に著給ふ。元暦元年の比かとよ。重衡中將の、東夷の爲に囚れて、此宿に著給しに、東路の丹生の小屋のいぶせきに、古郷いかに戀しかるらんと、長者の女が讀たりし、其古の哀までも、思殘さぬ泪也。旅館の燈幽にして、雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍河を打渡り、小夜の中山越行ば、白雲路を埋來て、そこことも知ぬ夕暮に、家鄉の天を望ても、昔西行法師が、命也けりと詠つゝ、二度越し跡までも、浦山敷ぞ思はれける。隙行駒の足はやみ、日已に亭午に昇れば、餉進る程とて、輿を庭前に舁止む。轅を叩て警固の武士を近附け、宿の名を問給ふに、菊川と申也と答へければ、承久の合戰の時院宣書たりし咎に依て、光親卿關東へ召下されしが、此宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水。汲下流而延齡。

○俊基朝臣再關東下向事

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討れし後召捕れて、鎌倉まで下給しかども、樣々に陳じ申されし趣、げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀共に、專隱謀の企彼朝臣にありと載たりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕れて、關東へ送られ給ふ。再犯不レ赦法令の定る所なれば、何と陳る共許されじ、路次にて失るゝか、鎌倉にて斬るゝか、二の間をば離れじと、思儲てぞ出られける。落花の雪に蹈迷ふ、片野の春の櫻がり、紅葉の錦を衣て歸、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅宿となれば懶に、恩愛の契淺からぬ、我故鄕の妻子をば、行末も知ず思置、年久も住馴し、九重の帝都をば、今を限と顧て、思はぬ旅に出給ふ、心の中ぞ哀なる。憂をば留ぬ相阪の、關の淸水に袖濡て、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行、身を浮舟の浮沈、駒も轟と蹈鳴す、勢多の長橋打渡り、行交人に近江路や、世のうねの野に鳴鶴も、子を思かと哀也。時雨もいたく森山の、木下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分る道を過行ば、鏡の山は有とても、泪に曇て見え分ず。物を思へ

三族の罪—父母兄弟妻子を罪する事
阿羅漢—佛の稱號

ふべき事有て、說戒の導師に此沙門をぞ請ぜられける。沙門則勅命に隨て、鳳闕に參ぜらる。帝折節碁を被遊ける砌へ、傳奏參て、沙門參內の由を奏し申けるを、遊しける碁に御心を入られて、是を聞召れず、碁の手に附て、截れと仰られけるを、傳奏聞誤りて、此沙門を截れとの勅定ぞと心得て、禁門の外に出し、則沙門の首を刎てけり。帝碁をあそばしはてゝ沙門を御前へ召ければ、典獄の官勅定に隨て、首を刎たりと申す。帝大に逆鱗ありて、行死定て後、三奏すと云へり。而を一言の下に誤を行て、朕が不德をかさぬ。罪大逆に同じとて、則傳奏を召出して、三族の罪に行れけり。さて此沙門罪なくして死刑に逢ひ給ぬる事、徒事にあらず、前生の宿業にておはすらんと思召ければ、帝其故を阿羅漢に問給ふ。阿羅漢七日が間定に入て、宿命通を得て、過現を見給ふに、沙門の前生は、耕作を業とする田夫也。帝の前生は、水にすむ蛙にてぞ有ける。此田夫鋤を取て、春の山田をかへしける時、誤て鋤のさきにて、蛙の頸をぞ切たりける。此因果に依て、田夫は沙門と生れ、蛙は波羅奈國の大王と生れ、誤て又死罪を行れけるこそ哀なれ。されば此上人も、如何なる修因感果の理に依か、斯る不慮の罪に沈み給ぬらんと、不思議也し事共也。

戒定慧―戒學、定學、慧學とて禁戒禪定智慧の三つ

上人嗷問の事、暫く閣べしと被下知處に、預人遮て相摸入道の方に來て申けるは、上人嗷問の事、此曉既に其沙汰を致候はん爲に、上人の御方へ參て候へば、燭を挑て觀法定座せられて候。其御影後の障子に移て、不動明王の貌に見えさせ給候つる間、驚き存て、先事の仔細を申入ん爲に、參て候也とぞ申ける。夢想と云、示現と云、直人にあらずとて、嗷問の沙汰を止られけり。同七月十三日に、三人の僧達遠流の在所定て、文觀僧正をば硫黃島、忠圓僧正をば越後國へ流され、圓觀上人計をば、遠流一等を宥て、結城上野入道に預られければ、奧州へ具足し奉、長途の旅にさすらひ給。左遷遠流と云ぬ計也。遠蠻の外に遷されさせ給へば、是も唯同じ旅程の思にて、肇法師が刑戮の中に苦み、一行阿闍梨の火羅國に流されし、水宿山行の悲も、かくやと思知れたり。名取川を過させ給とて、上人一首の歌を讀給ふ。

陸奧のうき名取川流來て、沈やはてん瀨々の埋木。

時の天災をば、大權の聖者も遁れ給はざるにや。昔天竺の波羅奈國に、戒定慧の三學を兼備し給へる、一人の沙門おはしけり。一朝の國師として、四海の倚賴たりしかば、天下の人歸依渴仰せる事、恰大聖世尊の出世成道の如也。或時其國の大王、法會を行

昨日も過今日も暮ぬと山に休めば是や限りと、露の命のある程も、心は先に消つべし。

行程に、我とは急がぬ道なれど、日數積れば、六月二十四日に、鎌倉にこそ著にけれ。圓觀上人をば佐介越前守、文觀僧正をば佐介遠江守、忠圓僧正をば足利讃岐守にぞ預らる。兩使歸參して、彼僧達の本尊の形、爐壇の樣、畫圖に寫て註進す。俗人の見知るべき事ならねば、佐々目の賴禪僧正を請じ奉て、是を被見るに、仔細なき調伏の法也と申されければ、去ば此僧達を嗷問せよとて、侍所に渡して、水火の責をぞ致しける。文觀房暫が程は、いかに問れけれ共、落給はざりけるが、水問重りければ、身も疲心も弱なりけるにや、勅定に依て、調伏の法行たりし條仔細なしと、白狀せられけり。其後忠圓房を嗷問せんとす。此僧正天性臆病の人にて、未責先に、主上山門を御語ひありし事、大塔の宮の御振舞、俊基の隱謀なんど、有もあらぬ事までも、殘所なく白狀一卷に載られたり。此上は何の疑か有べきなれ共、同罪の人なれば、閣べきに非ず。圓觀上人をも明日問奉るべしと、評定ありける其夜、相摸入道の夢に、比叡山の東坂本より、猿共二三千群來て、此上人を守護し奉る體にて、並居たりと見給ふ。夢の告徒事ならずと思はれければ、未明に預人の許へ使者を遣し、

四種三密—四種は四種の曼荼羅、摩訶、三昧耶、達磨、羯摩、三密は身、口、意

三衣—大衣、五條、七條、の僧衣

三聚淨戒—佛弟子が受持する戒法、一に攝律儀戒二に攝善法戒三に攝衆生戒

傳馬—驛馬

元は播磨國法華寺の住侶たりしが、壯年の比より醍醐寺に移住して、眞言の大阿闍梨たりしかば、東寺の長者、醍醐の座主に補せられて、四種三密の棟梁たり。圓觀上人と申は、元は山徒にて御座けるが、顯密兩宗の才、一山に光有かと疑はれ、智行兼備の譽、諸寺に人無が如し。然ども久山門澆漓の風に隨はゞ、上慢の幢高して、遂に天魔の掌握の中に落ぬべし。不レ如、公請論場の聲譽を捨て、高祖大師の舊規に歸んにはと、一度名利の轡を返して、永く寂寞の苔の扉を閉給ふ。初の程は西塔の黑谷と云所に居を卜て、三衣を荷葉の秋の霜に重ね、一鉢を松華の朝の風に任給ひけるが、徳不レ孤必有レ隣、大明光を藏ざりければ、遂に五代聖主の國師として、三聚淨戒の太祖たり。かかる有智高行の尊宿たりと云へども、時の横災をば遁給はぬにや、又前世の宿業にや依けん、遠竄の囚と成て、逆旅の月にさすらひ給、不思議なりし事ども也。圓觀上人計こそ、宗印圓照道勝とて、如影隨形の御弟子三人、隨逐して輿の前後に供奉しけれ。其外文觀僧正、忠圓僧正には相隨者一人も無て、怪なる傳馬に乘せられて、見馴ぬ武士に打圍れ、まだ夜深きに鳥が鳴東の旅に出給ふ、心の中こそ哀なれ。鎌倉までも下し著けず、道にて失ひ奉るべしなんど聞えしかば、彼の宿に著ても今や限り、此の

雜色—小使
燋熱大燋熱—八大地獄の第六と第七
牛頭馬頭—地獄の鬼

肝は消ぬべし。爲明卿是を見給て硯や有と尋られければ、白狀の爲かとて、硯に料紙を取添て奉りければ、白狀にはあらで、一首の歌をぞ書れける。

思きや我敷島の道ならで、浮世の事を問るべしとは。

常葉駿河守、此歌を見て、感歎肝に銘じければ、泪を流して理に伏す。東使兩人も是を讀で、諸共に袖を浸しければ、爲明は水火の責を遁れて、咎なき人に成にけり。詩歌は朝廷の翫處、弓馬は武家の嗜む道なれば、其慣未必しも、六義數寄の道に携らねども、物類相感ずる事、皆自然なれば、此歌一首の感に依て、嗷問の責を止めける、東夷の心中こそやさしけれ。力をも入ずして、天地を動し、目に見えぬ鬼神をも哀と思はせ、男女の中をも和げ、猛き武士の心をも慰るは歌也と、紀貫之が古今の序に書たりしも、理也と覺たり。

○三人僧徒關東下向事

同年六月八日、東使三人の僧達を具足し奉て、關東に下向す。彼忠圓僧正と申は、淨土寺慈勝僧正の門弟として、十題判斷の登科、一山無雙の碩學也。文觀僧正と申は、

鑊湯爐壇—地獄の事、壇は炭とあるべし
朝夕—参行人の奴僕

の曉、雜賀隼人佐を使にて、法勝寺の圓觀上人、小野の文觀僧正、淨土寺の忠圓僧正、三人を六波羅へ召捕奉る。此中に忠圓僧正は、顯宗の碩德也しかば、調伏の法行たりと云、其人數には入らざりしかども、是も此君に近附奉て、山門の講堂供養以下の事、萬づ直に申沙汰せられしかば、衆徒與力の事、此僧正よも存ぜられぬ事は非じとて、一同召捕れ給にけり。是のみならず、知教、教圓二人も、南都より召出されて、同六波羅へ出給ふ。又二條中將爲明卿は、歌道の達者にて、月の夜雪の朝、褒貶の歌合の御會に召れて、宴に侍る事隙無りしかば、指たる嫌疑の人にては無りしかども、叡慮の趣を尋聞ん爲に召捕れて、齋藤某に是を預らる。五人の僧達の事は、元來關東へ召下して、沙汰有べき事なれば、六波羅にて尋窮に及ばず。爲明卿の事に於ては、先京都にて尋沙汰有て、白狀有らば、關東へ註進すべしとて、檢斷に仰て、已に嗷問の沙汰に及んとす。六波羅の北の坪に炭をおこす事、鑊湯爐壇の如にして、其上に青竹を破て敷雙べ、少隙をあけゝれば、猛火炎を吐て、烈々たり。朝夕雜色左右に立雙で、兩方の手を引張て、其上を歩せ奉んと、支度したる有樣は、唯四重五逆の罪人の、燋熱大燋熱の炎に身を焦し、牛頭馬頭の呵責に逢らんも、角社有らめと覺えて、見にも

江都一朗詠云、江都之好ニ勁捷ー也、七尺屏風其徒高

武勇の御嗜の外は他事なし。御好有故にや依けん。早業は江都が勁捷にも超たれば、七尺の屏風未必しも高しとせず。打物は子房が兵法を得給へば、一卷祕書盡されずと云事なし。天台座主始つて、義眞和尚より以來一百餘代、未斯る不思議の門主は御座さず。後に思合するにこそ、東夷征罰の爲に、御身を習されける武藝の道とは知られたれ。

○僧徒六波羅召捕事 附爲明詠歌事

事の漏易きは、禍を招く媒なれば、大塔宮の御行事、禁裏に調伏の法被行事共、一々に關東へ聞えてけり。相摸入道大に怒て、いや〳〵此君御在位の程は、天下靜まるまじ。所詮君をば承久の例に任て、遠國へ移し奉り、大塔宮を死罪に處し奉るべき也。先近日殊に龍顏に咫尺し奉て、當家を調伏し給ふなる、法勝寺の圓觀上人、小野の文觀僧正、南都の知敎、敎圓、淨土寺の忠圓僧正を召捕て、仔細を相尋べしと、已に武命を含で、二階堂下野判官、長井遠江守二人、關東より上洛す。兩使已に京著せしかば、又如何なる荒き沙汰をか致さんずらんと、主上宸襟を惱されける處に、五月十一日

阿耨多羅三藐三菩提―無上正等覺
我立杣に―阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我立杣に冥加あらせ給へ

照の尊像也。中比造營の後、未供養を遂ずして、星霜已に積りければ、甍破ては霧不斷の香を燒、扉落ては月常住の燈を挑ぐ。されば滿山歎て年を經る處に、忽に修造の大功を遂られ、速に供養の儀式を調へ給しかば、一山眉を開き、九院首を傾けり。御導師は妙法院尊澄法親王、咒願は時の座主大塔尊雲法親王にてぞ御座しける。稱揚讃佛の砌には、鷲峯の花薫を讓、歌唄頌德の所には、魚山の嵐響を添。伶倫過雲の曲を奏し、舞童廻雪の袖を飜せば、百獸も率舞し、鳳鳥も來儀する計也。住吉の神主、津守國夏太鼓の役にて登山したりけるが、宿坊の柱に一首の歌をぞ書附たる。

契あれば此山もみつ、阿耨多羅三藐三菩提の種を植けん。

是は傳教大師、當山草創の古、我立杣に冥加あらせ給へと、三藐三菩提の佛達に祈給し故事を思て、讀る歌なるべし。抑元亨以後、主愁臣辱られて、天下更に安時なし。折節こそ多かるに、今南都北嶺の行幸、叡願何事やらんと尋れば、近年相模入道が振舞、日來の不義に超過せり。蠻夷の輩は、武命に從ふ者なれば、召とも勅に應ずべからず。唯山門南都の大衆を語て、東夷を征罰せられん爲の御謀叛とぞ聞えし。依之大塔の二品親王は、時の貫首にて御座せしか共、今は行學共に捨はてさせ給て、朝暮唯

行事―行幸の奉行

延尉―撿非違使の判官

閻浮―須彌山の南にある州名

北の藤波―藤原氏の北家

○南都北嶺行幸事

元德二年二月四日、行事の辨別當、萬里小路中納言藤房卿を召れて、來月八日東大寺興福寺行幸有べし、早供奉の輩に觸仰すべしと仰出されければ、藤房古を尋、例を考て、供奉の行粧、路次の行列を定らる。佐々木備中守廷尉に成て橋を渡し、四十八箇所篝、甲冑を帶し、辻々を固む。三公九卿相從ひ、百司千官列を引、言語道斷の嚴儀也。東大寺と申は、聖武天皇の御願、閻浮第一の盧舍那佛、興福寺と申は淡海公の御願、藤氏尊崇の大伽藍なれば、代々の聖主も、皆結緣の御志は御座せども、一人出給事容易からざれば、多年臨幸の儀もなし。此御代に至て、絕たるを繼、廢たるを興して、鳳輦を廻し給しかば、衆徒歡喜の掌を合せ、靈佛威德の光を添。されば春日山の嵐の音も、今日よりは萬歲を呼ふかと奇まれ、北の藤波千代かけて、花咲春の陰深し。又同月二十七日に、比叡山に行幸成て、大講堂供養あり。彼堂と申は、深草天皇の御願、大日遍

房卿則歸洛して、此由奏し申れけるにこそ、宸襟始て解て、群臣色をば直されけれ。去程に俊基朝臣は、罪の疑しきを輕じて赦免せられ、資朝卿は死罪一等を宥められて、佐渡國へぞ流されける。

冥見―神佛の照覽

澆季―澆薄の末世

皆悲啼を含まぬは無りけり。頓て萬里小路大納言宣房卿を勅使として、此告文を關東へ下さる。相摸入道、秋田城介を以て告文を請取て、則披見せんとしけるを、二階堂出羽入道道蘊、堅く諫めて申けるは、天子武臣に對して直に告文を被下たる事、異國にも我朝にも未其例を承ず。然を等閑に披見せられん事、冥見に附て其恐あり。唯文箱を啓ずして、勅使に返進せらるべきかと、再往申けるを、相摸入道、何か苦しかるべきとて、齋藤太郎左衛門利行に讀進せさせられけるに、叡心不僞處、任天照覽被遊たる處を讀ける時に、利行俄に眩衂たりければ、讀はてずして退出す。其日より喉下に惡瘡出て、七日の中に血を吐て死にけり。時澆季に及で、道塗炭に落ぬと云ども、君臣上下の禮違時は、さすが佛神の罰も有けりと、是を聞ける人每に、懼恐ぬは無りけり。何樣資朝俊基の隱謀、叡慮より出し事なれば、縱告文を下されたりと云とも、其に依るべからず、主上をば遠國へ遷し奉べしと、初は評定一決してけれども、勅使宣房卿の被申趣げにもと覺る上、告文讀たりし利行、俄に血を吐て死たりけるに、諸人皆舌を卷き、口を閉づ。相摸入道も、さすが天慮其憚有りけるにや、御治世の御事は朝議に任せ奉る上は、武家綺ひ申べきに非ずと、勅答を申て、告文を返進せらる。宣

乞巧奠—七夕祭
騷人—詩歌を作る人
伶倫—樂人
中夏—帝都

君の御憤を憚て、拷問の沙汰にも不レ及、唯尋常の放囚人の如にて、侍所にぞ預置れける。七月七日、今夜は牽牛織女の二星、烏鵲橋を渡して、一年の懷抱を解夜なれば、宮人の風俗、竹竿に願絲を懸け、庭前に嘉菓を列て、乞巧奠を修する夜なれ共、世上騷しき時節なれば、詩歌を奉る騷人も無く、絃管を調る伶倫もなし。適上臥したる月卿雲客も、何と無く世中の亂、又誰身の上にか來んずらんと、魂を消し肝を冷す時分なれば、皆眉を顰め面を低てぞ候ける。夜痛深て、誰か候と召れければ、吉田中納言冬房候とて御前に候す。主上席を近て仰有りけるは、資朝俊基が囚れし後、東風猶未レ靜、中夏常に危を蹈む。此上に又如何なる沙汰をか致んずらんと、叡慮更に不レ穩。如何して先づ東夷を靜べき謀有んと、勅問有ければ、冬房謹で申けるは、資朝俊基が白狀有りとも承候はねば、武臣此上の沙汰には及ばじと存候へども、近日東夷の行事、楚忽の儀多く候へば、御油斷有まじきにて候。先告文一紙を下されて、相摸入道が忿を靜め候ばやと申されければ、主上げにもとや思召れけん、さらば軈て冬房書と仰有ければ、則御前にして草案をして、是を奏覽す。君且叡覽有て、御泪の告文にはら〳〵とかゝりけるを、御袖にて押拭はせ給へば、御前に候ける老臣、

大理―撿非違使の唐名

魯論―論語

○資朝俊基關東下向事 附御告文事

土岐多治見討れて後、君の御謀叛次第に隱無りければ、東使長崎四郎左衛門泰光、南條次郎左衛門宗直二人上洛して、五月十日資朝俊基兩人を召捕奉る。土岐が討れし時、生虜の者一人も無りしかば、白狀はよも有らじ、さりとも我等が事は顯れじと、無墓憑に油斷して、曾て其用意も無りければ、妻子東西に逃迷ひて、身を隱さんずるに處なく、財寶は大路に引散されて、馬蹄の塵と成にけり。彼資朝卿は日野の一門にて、職大理を經、官中納言に至りしかば、君の御覺も他に異して、家の繁昌時を得たりき。俊基朝臣は身儒雅の下より出て、望勳業の上に達せしかば、同官も肥馬の塵を望み、長者も殘盃の冷に隨ふ。宜哉不義而富且貴、於我如浮雲と云へる事。是孔子の善言魯論に記する處なれば、なじかは違べき。夢の中に樂盡て、眼前の悲云に來れり。彼を見是を聞ける人每に、盛者必衰の理を知らでも、袖をしぼりえず。同二十七日東使兩人、資朝俊基を具足し奉て、鎌倉へ下著す。此人々は殊更謀叛の張本なれば、軈て誅せられぬと覺しかども、倶に朝廷の近臣として、才學優長の人たりしかば、世の譏

大手―追手とも書く城の表門
搦手―城の裏門

る處に、伊藤彦次郎父子兄弟四人、門の扉の少し破たる處より、這て內へぞ入たりける。志の程は猛けれども、待請たる敵の中へ、這て入たる事なれば、敵に打違るまでも無て、皆門の脇にて討れにけり。寄手是を見て、彌近づく者も無りける間、內より門の扉を推開て、討手を承るほどの人達の、きたなうも見えられ候者哉。早是へ御入候へ。我等が頸共引出物に進せんと、恥しめてこそ立たりけれ。寄手共敵にあくまで欺れて、先陣五百餘人馬を乘放して、歩立に成、喚て庭へこみ入。楯籠る所の兵ども、とても遁れじと思切たる事なれば、何へか一足も引べき。二十餘人の者ども、大勢の中へ亂入て、面もふらず切て廻る。先駈の寄手五百餘人、散々に切立られて、門より外へ颯と引く。されども寄手は大勢なれば、先陣引けば二陣喚て懸入。懸入ば追出し、追出せば懸入り、辰刻の始より午刻の終まで、火出る程こそ戰けれ。加樣に大手の軍强ければ、佐々木判官が手者千餘人、後へ廻て、錦小路より、在家を打破て亂入る。多治見今は是までとや思けん、中門に並居て、廿二人の者ども、互に差違〳〵、算を散せる如く伏たりけり。追手の寄手共が、門を破りける其間に、搦手の勢共亂入り、首を取て六波羅へ馳歸る。二時計の合戰に、手負死人を數るに、二百七十三人也。

中差―胡籙の中差の矢とて尖矢也
狭間の板―城の櫓の窓
十二束三伏―一束は片手一握一伏は指一本の幅
鉢附の板―冑の鉢に附きたる第一の錏の板

上より見えたり。孫六内へ入て、六波羅より討手の向て候ける。此間の御謀叛早顯たりと覺候。早面々太刀の目貫の堪へん程は切合て、腹を切れと、呼て、腹巻取て肩になげかけ、二十四差たる胡籙と、繁籐の弓とを提て、門の上なる櫓へ走上り、中差取て打番ひ、狭間の板八文字に排て、あらことゞしの大勢や。我等が手柄のほどこそ顯たれ。抑討手の大將は誰と申人の向れて候やらん。近附て箭一請て御覽候へと云儘に、十二束三伏、忘るゝ計引しぼりて、切て放つ。眞前に進だる狩野下野前司が若黨に、衣摺助房が冑のまつかう、鉢附の板まで、矢先白く射通して、馬より倒に射落す。是を始として、鎧の袖草摺冑の鉢とも不言、指詰て思樣に射けるに、面に立たる兵二十四人、矢の下に射て落す。今一筋胡籙に殘たる矢を拔て、胡籙をば櫓の下へからりと投落し、此矢一をば冥途の旅の用心に持べしと云て腰にさし、日本一の剛の者、謀叛に與し自害する有樣見置て、人に語れと高聲に呼て、太刀の鋒を口に呀て、櫓より倒に飛落て、貫てこそ死にけれ。此間に多治見を始として、一族若黨二十餘人物具ひし〳〵と堅め、大庭に跳出で、門の關の木差て待懸たり。寄手雲霞の如しと云へ共、思切たる者どもが、死狂をせんと引籠たるがこはさに、内へ切て入んとする者も無りけ

築地—土塀
中々—却て
遊君—遊女

後を廻て、何にか匿地の有と見れば、後は皆築地にて、門より外は路も無し。さては心安しと思て、客殿の奥なる二間を颯と引あけたれば、土岐十郎唯今起あがりたりと覺て、鬢髮を撫上て結けるが、山本九郎を屹と見て、心得たりと云儘に、立たる太刀を取、傍なる障子を一間蹈破り、六間の客殿へ跳出、天井に太刀を打附じと、拂切にぞ切たりける。時綱は態敵を廣庭へ帶出し、透間も有らば生虜んと志て、打拂ては退、打涼しては飛のき、人交もせず戰て、後を屹と見たれば、後陣の大勢二千餘騎、二の關よりこみ入て、同音に時を作る。土岐十郎久く戰ては、中々生捕れんとや思けん、本の寢所へ走歸て、腹十文字にかき切て、北枕にこそ伏たりけれ。中の間に寢たりける若黨どもゝ、思々に討死して、遁るゝ者一人も無りけり。首を取て鋒に貫て、山本九郎は是より六波羅へ馳參る。多治見が宿所へは、小串三郎左衞門範行を先として、三千餘騎にて推寄たり。多治見は終夜の酒に飲醉て、前後も不レ知臥たりけるが、時の聲に驚て、是は何事ぞと周章騷ぐ。傍に臥たる遊君、物馴たる女也ければ、枕なる鎧取て打著せ、上帶強く縮させて、猶寢入たる者どもをぞ起しける。小笠原孫六、傾城に驚されて、太刀計を取て、中門に走出で、目を磨々四方を屹と見ければ、車の輪の旗一流、築地の

本所の雜掌—莊園の支配人
庄家—莊園の事務所
四十八箇の篝—東都に置きたる四十八箇所の警固の武士

天せざるべき。此事は同名賴貞、多治見四郎二郎が勸に依て、同意仕て候。唯兎も角も、身の咎を助る樣に御計候へとぞ申ける。夜未レ明に、齋藤急ぎ六波羅へ參て、事の仔細を委く告げ申ければ、卽時をかへず鎌倉へ早馬を立て、京中洛外の武士どもを六波羅へ召集て、先づ著到をぞ附られける。其比攝津國葛葉と云處に、地下人代官を背て合戰に及事あり。彼本所の雜掌を、六波羅の沙汰として、庄家にしすゑん爲に、四十八箇所の篝、幷に在京人を催さるゝ由を被二披露一。是は謀叛の輩を落さじが爲の謀也。土岐も多治見も、吾身の上とは思も寄らず、明日は葛葉へ向ふべき用意して、皆己が宿所にぞ居たりける。去程に、明れば元德元年九月十九日の卯刻に、軍勢雲霞の如く六波羅へ馳參る。小串三郎左衞門尉範行、山本九郎時綱、御紋の旗を賜り、討手の大將を承て、六條河原へ打出、三千餘騎を二手に分て、多治見が宿所、錦小路高倉、土岐十郎が宿所、三條堀河へ寄けるが、時綱、かくては如何樣大事の敵を打漏ぬと思けるにや、大勢をば態と三條河原に留て、時綱唯一騎、中間二人に長刀持せて、忍やかに土岐が宿所へ馳て行き、門前に馬をば乘捨て、小門より內へつと入て、中門の方を見れば、宿直しける者よと覺て、物具太刀刀枕に取散し、高鼾かきて寢入たり。厩の

荒増―豫定

穴賢―愼みて

座を分て侍べしと、其事と無くかきくどき、泪を流てぞ申ける。女つく〴〵と聞て、怪や何事の侍ぞや。明日までの契の程も知らぬ世に、後世までの荒増は、忘んとての情にてこそ侍らめ。さらでは、かゝるべしとも覺ずと、泣恨て問ければ、男は心淺して、さればよ、我不慮の勅命を蒙て、君に憑れ奉る間、辭するに道無して、御謀叛に與しぬる間、千に一も命の生んずる事難し。無端存る程に、近づく別の悲さに、兼て加樣に申也。此事穴賢人に知させ給ふなと、能々口をぞ堅めける。彼女性心の賢き者也ければ、夙におきて、つく〴〵と此事を思ふに、君の御謀叛事ならずば、憑たる男忽に誅せらるべし。若又武家亡なば、我親類誰かは一人も殘るべき。さらば是を父利行に語て、左近藏人を囘忠の者に成し、是をも助け、親類をも扶けばやと思て、急ぎ父が許に行、忍やかに此事を有の儘にぞ語りける。齋藤大に驚き、軈て左近藏人を呼寄せ、斯る不思議を承る。誠にて候やらん。今の世に加樣の事、思企給はんは、偏に石を抱て淵に入る者にて候べし。若他人の口より漏なば、我等に至まで、皆誅せらるべきにて候へば、利行急ぎ御邊の告知せたる由を、六波羅殿に申て、共に其咎を遁んと思ふは、如何か計給ふぞと問ければ、是程の一大事を、女性に知らする程の心にて、なじかは仰

多生—他生にて、こゝには前生の意

欲下爲二聖明一除中弊事上。豈將二衰朽一惜二殘年一。
雲横二秦嶺一家何在。雪擁二藍關一馬不レ前。
知汝遠來須レ有レ意。好收二吾骨瘴江邊一。

韓湘此詩を袖に入て、泣々東西に別にけり。誠哉、癡人面前に不レ說レ夢云事。此談義を聞ける人々の忌思けるこそ愚なれ。

○賴員囘忠事

謀叛人の與黨、土岐左近藏人賴員は、六波羅の奉行齋藤太郎左衞門尉利行が女と嫁して、最愛したりけるが、世中已に亂て、合戰出來りなば、千に一も討死せずと云事有るまじと思ける間、兼て餘波や惜かりけん、或夜の寢覺の物語に、一樹の陰に宿り、同流を汲も、皆是多生の緣不レ淺、況や相馴奉て已に三年に餘れり。等閑ならぬ志の程をば、氣色に附け、折に觸ても、思知り給ふらん。去ても定なきは人間の習、相逢中の契なれば、今若我身はかなく成ぬと聞給ふ事有ば、無らん跡までも貞女の心を失はで、我後世を弔給へ。人間に歸らば、再び夫婦の契を結び、淨土に生れば、同蓮の臺に半

の盆を打覆て、軈て又引仰向けたるを見れば、忽に碧玉の牡丹の花の嬋娟たる一枝あり。昌黎驚て、是を見に、花の中に金字に書る一聯の句有り。雲横二秦嶺一家何在、雪擁二藍關一馬不レ前。云云。昌黎不思議の思を成して、是を讀で一唱三嘆するに、句の優美遠長なる體、製のみ有て其趣向落著の所を難レ知。手に取て是を見んとすれば、忽然として消失ぬ。是よりしてこそ、韓湘仙術の道を得たりとは、天下の人に知られけれ。其後昌黎佛法を破て、儒教を貴べき由、奏狀を奉ける咎に依て、潮州へ流さる。日暮馬泥で前途程遠し。遙に故郷の方を顧ば、秦嶺に雲横て、來つらん方も不レ覺、悼て萬仞の嶮に登らんとすれば、藍關に雪滿て行べき末の路も無し。進退歩を失て、頭を回す處に、何より來れるともなく、韓湘勃然として傍にあり。昌黎悅て馬より下、韓湘か袖を引て、泪の中に申けるは、先年碧玉の花の中に見えたりし一聯の句は、汝我に預左遷の愁を告知せるなり。今又汝爰に來れり。料り知ぬ、我遂に謫居に愁死して、歸事を得じと。再會期無して、遠別今にあり。豈悲に堪んやとて、前の一聯に句を續で、八句一首と成して、韓湘に與ふ。

一封朝奏九重天。　夕貶二潮陽一路八千。

猶子―兄弟の子、我國にては他人の子を我子とせるにいふ

眞宰の臂―眞宰は道士の所謂神、無形の理をいふ

て、事を文談に寄んが爲に、其比才學無雙の聞えありける玄慧法印と云文者を請じて、昌黎文集の談義をぞ行せける。彼法印謀叛の企とは夢にも不レ知、會合の日每に、席に臨で、玄を談じ理を析く。彼文集の中に、昌黎赴二潮洲一と云長篇有り。此處に至て、談義を聞人々、是皆不吉の書なりけり。吳子孫子六韜三略なんど社、可レ然當用の文なれとて、昌黎文集の談義を止てけり。此韓昌黎と申は、晚唐の季に出て、文才優長の人なりけり。詩は杜子美、李太白に肩を雙べ、文章は漢魏晉宋の間に傑出せり。昌黎が猶子韓湘と云者あり。是は文字をも嗜ず、詩篇にも携らず、唯道士の術を學で、無爲を業とし、無事を事とす。或時昌黎韓湘に向て申けるは、汝天地の中に化生して、仁義の外に逍遙す。是君子の恥處、小人の專とする處也。我常に汝が爲に是を悲むこと切也と敎訓しければ、韓湘大にあざ笑て、仁義は大道の廢たる處に出、學敎は大僞の起時に盛也。吾無爲の境に優遊して、是非の外に自得す。されば眞宰の臂を掣て、壺中に天地を藏し、造化の工を奪て、橘裏に山川を峙つ。却て悲らくは、公の唯古人の糟粕を甘て、空く一生を區々の中に誤る事をと答ければ、昌黎重て曰、汝が所レ言我未レ信、今則造化の工を奪事を得てんやと問に、韓湘答事無して、前に置たる瑠璃

大液の芙蓉—大液は池の名、芙蓉は蓮

見置、東國西國に下て、國の風俗、人の分限をぞ窺見られける。

○無禮講事 附玄慧文談事

爰に美濃國住人、土岐伯耆十郎頼貞、多治見四郎次郎國長と云者あり。共に清和源氏の後胤として、武勇の聞えありければ、資朝卿様々の縁を尋て、昵び近かれ、朋友の交已に淺からざりけれども、是程の一大事を、無二左右一知せん事、如何か有べからんと思はれければ、猶も能々其心を窺見ん爲に、無禮講と云事をぞ始られける。其人數には、尹大納言師賢、四條中納言隆資、洞院左衛門督實世、藏人右少辨俊基、伊達三位房游雅、聖護院廳の法眼玄基、足助次郎重成、多治見四郎次郎國長等也。其交會遊宴の體、見聞耳目を驚せり。獻盃の次第、上下を云はず、男は烏帽子を脱で髻を放ち、法師は衣を不レ著して白衣になり、年十七八なる女の、眉形優に、膚殊に淸らかなるを二十餘人、褊の單衣計を著せて、酌を取せければ、雪の膚すき通て、大液の芙蓉新に水を出たるに異ならず。山海の珍物を盡し、旨酒泉の如くに湛て、遊戲舞歌ふ。其間には唯東夷を可レ滅企の外は他事なし。其事と無く、常に會交せば、人の思咎むる事もや有んと

闌臺—辨官の唐名
職事—藏人の別名
款狀—願書

を盡されけれども、三年まで曾て御產の御事は無りけり。後に仔細を尋ぬれば、關東調伏の爲に、事を中宮の御產に寄て、加樣に祕法を修せられけると也。是程の重事を思召立事なれば、諸臣の異見をも窺ひ度思召けれども、事多聞に及ば丶、武家に漏れ聞る事や有んと、憚り思召れける間、深慮智化の老臣、近侍の人々にも仰合らる丶事もなし。唯日野中納言資朝、藏人右少辨俊基、四條中納言隆資、尹大納言師賢、平宰相成輔計に、潛に仰合られて、さりぬべき兵を召れけるに、錦織の判官代、足助次郎重成、南都北嶺の衆徒、少々勅定に應じてけり。彼俊基は累葉の儒業を繼で、才學優長成しかば、顯職に召仕れて、官蘭臺に至り、職事を司れり。然る間出仕事繁して、籌策に隙無りければ、如何にもして暫籠居して、謀叛の計略を運さんと思ける處に、山門橫川の衆徒、款狀を捧て、禁庭に訴る事あり。俊基彼奏狀を披て讀申されけるが、讀誤りたる體にて、楞嚴院を慢嚴院とぞ讀たりける。座中の諸卿是を聞て、目を合て、相の字をば、篇に附ても、作に附ても、もくとこそ讀べかりけると、掌を拍てぞ笑はれける。俊基大に恥たる氣色にて、面を赤て退出す。夫より恥辱に逢ひ、籠居すと披露して、半年計出仕を止、山伏の形に身を易て、大和河內に行て、城郭に成ぬべき處々を

一實圓頓—天台宗の教
三諦即是—天台の教旨
記別—佛と成ること
慈尊—彌勒佛

悟る御器量、世に又類も無りしかば、一實圓頓の花の匂を、荊溪の風に薫じ、三諦即是の月の光を、玉泉の流に浸せり。されば消なんとする法燈を挑げ、絶なんとする慧命を繼んこと、唯此門主の御時なるべしと、一山掌を合せて悦、九院首を傾て仰奉る。第四宮も同御腹にてぞおはしける。是は聖護院二品親王の御附弟にておはせしかば、法水を三井の流に汲、記別を慈尊の曉に期し給ふ。此外儲君儲王の選、竹苑椒庭の備、誠に王業再興の運、福祚長久の基、時を得たりとぞ見えたりける。

○中宮御產御祈之事 附俊基僞籠居事

元亨二年の春比より、中宮御懷姙の御祈とて、諸寺諸山の貴僧高僧に仰て、樣々の大法祕法を行はせらる。中にも法勝寺の圓觀上人、小野文觀僧正二人は、別勅を承て、禁闕に壇を構、玉體に近き奉て、肝膽を碎てぞ祈られける。佛眼金輪五壇法、一字五反孔雀經、七佛藥師熾盛光、烏芻沙摩變成男子の法、五大虛空藏、六觀音、六字訶臨訶利帝母、八字文珠普賢延命金剛童子の法、護摩煙は內苑に滿、振鈴の聲は掖殿に響て、如何なる惡魔怨靈なりとも、障礙を難成とぞ見えたりける。加樣に功を積、日を累て、御祈の精誠

志學の歳―十五歳
六義の道―和歌
瑜伽三密―加持

○儲王御事

螽斯の化行れて、皇后元妃の外、君恩に誇る宮女、甚多かりければ、宮々次第に御誕生有て、十六人までぞ御座しける。中にも、第一宮尊良親王は、御子左大納言爲世卿女、贈従三位爲子の御腹にて御座しを、吉田内大臣定房公、養君にし奉しかば、志學の歳の始より、六義の道に長じさせ給へり。されば富緒河の淸き流を汲、淺香山の故き跡を踏で、嘯風弄月に御心を傷め給ふ。第二宮も同御腹にてぞ御座しける。總角の御時より、妙法院の門跡に御入室有て、釋氏の教を受させ給ふ。是も瑜伽三密の間には、歌道數寄の御翫有しかば、高祖大師の舊業にも不レ恥、慈鎭和尚の風雅にも越たり。第三宮は民部卿三位殿の御腹也。御幼稚の時より、利根聰明に御座せしかば、君御位をば此宮に社と思召したりしかども、御治世は大覺寺殿と持明院殿と、代々持せ給ふべしと、後嵯峨院の御時より被レ定しかば、今度の春宮をば、持明院殿御方に立進らせらる。天下の事小大となく、關東の計として、叡慮にも任られざりしかば、御元服の儀を改られ、梨本の門跡に御入室有て、承鎭親王の御門弟と成せ給ひて、一を聞て十を

上陽白髮人に耿々殘燈背壁影、蕭々暗雨打窓聲とあり

准后―太皇太后、皇太后、皇后に准じたる待遇をせらるるものゝ稱

に香消て、蕭々たる暗雨の窓を打聲、物毎に皆御涙を添る媒と成れり。人生勿レ作ニ婦人身ニ百年苦樂因ニ他人ニと白樂天が書たりしも、理也と覺たり。其比安野中將公廉の女に、三位殿の局と申ける女房、中宮の御方に候はれけるを、君一度御覽ぜられて、他に異なる御覺あり。三千の寵愛一身に在しかば、六宮の粉黛は、顔色無が如也。都て三夫人九嬪二十七世婦、八十一女御、曁後宮の美人、樂府の妓女と云へども、天子顧眄の御心を附られず。啻に殊艶尤態の獨能是を致のみに非ず、蓋し善巧便佞叡旨に先て、奇を爭しかば、花の下の春の遊、月の前の秋の宴、駕すれば輦を共にし、幸すれば席を專にし給ふ。是より君王朝政をし給はず。忽に准后の宣旨を下されしかば、人皆皇后元妃の思をなせり。驚見る、光彩の始て門戸に生ることを。此時天下の人、男を生む事を輕じて、女を生む事を重ぜり。されば御前の評定、雜訴の御沙汰までも、准后の御口入とだに云てければ、上卿も忠なきに賞を與、奉行も理有を非とせり。關雎は樂而不レ淫、哀而不レ傷。詩人採て后妃の德とす。奈何かせん、傾城傾國の亂今に有ぬと覺て、淺增かりし事共也。

蕃ー曰ニ不足ー

毛嬙、西施、絳樹、青琴ー支那の美人の名

耿々たる殘燈ー白氏の

聞召明め、理非を決斷せられしかば、虞芮の訴忽に停て、刑鞭も朽はて、諫鼓も撃人無りけり。誠に理世安民の政、若機巧に附て是を見ば、命世亞聖の才とも稱しつべし。惟恨らくは、齊桓覇を行、楚人弓を遺しに、叡慮少き似たる事を。是則所以草創雖レ并ニ一天一守文不レ越ニ三載一也。

○立后事 附三位殿御局事

文保二年八月三日、後西園寺太政大臣實兼公の御女、后妃の位に備て、弘徽殿に入せ給ふ。此家に女御を立られたる事已に五代、是も承久以後、相摸守代々西園寺の家を尊崇せしかば、一家の繁昌恰天下の耳目を驚せり。君も關東の聞え可レ然と思召て、取分立后の御沙汰も有けるにや。御齡已に二八にして、金鷄障の下に册れて、玉樓殿の内に入給へば、夭桃の春を傷る粧、垂柳の風を含る御形、毛嬙西施も面を恥、絳樹青琴も鏡を掩ふ程なれば、君の御覺も定て類あらじと覺えしに、君恩葉よりも薄かりしかば、一生空く玉顏に近かせ給はず。深宮の中に向て、春の日の暮難き事を歎き、秋の夜の長恨に沈ませ給ふ。金屋に人無して、耿々たる殘燈の壁に背ける影、薫籠

禮智信

顯密—顯は天台宗、密は眞言宗

大津葛葉—大津は近江、葛葉は攝津

甸服—畿內といふが如し

朝餉の供御—朝の御食膳

九年の蓄—禮記云國無二九年之

儒道の碩才も、皆望を達せり。誠に天に受たる聖主、地に奉ぜる明君也と、其德を稱し、其化に誇らぬ者は無りけり。

○關所停止の事

夫四境七道の關所は、國の大禁を知しめ、時の非常を誡めんが爲也。然に今壟斷の利に依て、商賈往來の弊、年貢運送の煩ありとて、大津葛葉の外は、悉く所々の新關を止らる。又元亨元年の夏、大旱地を枯て、甸服の外百里の間、空く赤土のみ有て、青苗無し。餓莩野に滿て、飢人地に倒る。此年錢三百を以て、粟一斗を買。君遙に天下の飢饉を聞召て、朕不德あらば、天予一人を罪すべし。黎民何の咎有てか、此災に遭ると、自帝德の天に背ける事を嘆き思召て、朝餉の供御を止られて、飢人窮民の施行に引れけるこそ難レ有けれ。是も猶萬民の飢を助くべきに非ずとて、撿非違使の別當に仰て、當時富裕の輩が、利倍の爲に蓄積る米穀を點檢して、二條町に假屋を建られ、撿使自斷て、直を定て賣せらる。されば商買共に利を得て、人皆九年の蓄有が如し。訴訟の人出來の時、若下情上に達せざる事もやあらんとて、記錄所へ出御成て、直に訴を

領家―庄園を預り司れる役人

三綱―君臣父子夫婦の道

五常―仁義

りけり。朝陽不レ犯ども、殘星光を奪るゝ習なれば、必しも、武家より公家を蔑し奉るとしもは無れども、所には地頭強して、領家は弱、國には守護重して、國司は輕し。此故に朝廷は年々に衰へ、武家は日々に盛也。因レ茲代々の聖主、遠くは承久の宸襟を休めんが爲、近くは朝儀の陵廢を歎き思召て、東夷を亡さばやと、常に叡慮を運されしかども、或は勢微にして不レ叶、或は時未レ到して、默止給ひける處に、時政九代の後胤、前相摸守平高時入道崇鑒が代に至て、天地命を革むべき危機此に顯れたり。倩古を引て今を視に、行跡甚輕して人の嘲を不レ顧、政道不レ正して民の弊を不レ思、唯日夜に逸遊を事として、前烈を地下に羞しめ、朝暮に奇物を翫で、傾廢を生前に致さんとす。衞の懿公が鶴を乘せし樂早盡き、秦の李斯が犬を牽し恨今に來なんとす。見る人眉を顰め、聽く人脣を翻す。此時の帝後醍醐天皇と申せしは、後宇多院の第二の皇子、談天門院の御腹にて御座せしを、相摸守が計として、御年三十一の時、御位に卽奉る。御在位之間、内には三綱五常の儀を正して、周公孔子の道に從、外には萬機百司の政不ニ怠給一、延喜天暦の跡を追れしかば、四海風を望で悅び、萬民德に歸して樂む。凡諸道の廢たるを興し、一事の善をも被レ賞しかば、寺社禪律の繁昌、爰に時を得、顯密

八荒―八方、天下といふが如し
四品―四位に同じ

討れ、實朝は賴家の子僞二惡禪師公曉一討れて、父子三代僅に四十二年而盡ぬ。其後賴朝卿の舅、遠江守平時政子息、前陸奥守義時、自然に執二天下權柄一、勢漸欲レ覆二四海一。此時の太上天皇は、後鳥羽院也。武威振レ下、朝憲廢レ上事を歎思召て、義時を亡さんとし給しに、承久の亂出來て、天下暫も靜ならず。遂に旌旗日を掠て、宇治勢多にして相戰ふ。其戰未レ終二一日一、官軍忽に敗北せしかば、後鳥羽院は、隱岐國へ遷されさせ給て、義時彌八荒を掌に握る。其より後武藏守泰時、修理亮時氏、武藏守經時、相摸守時頼、左馬權頭時宗、相摸守貞時、相續て七代、政武家より出て、德窮民を撫するに足り、威萬人の上に被るといへ共、位四品の際を不レ越、謙に居て仁恩を施し、己を責て禮義を正す。是を以て高しと云とも危からず、盈りと云とも溢れず。承久より以來、儲王攝家の間に、理世安民の器に相當り給へる貴族を一人鎌倉へ申下奉て、征夷將軍と仰で、武臣皆拜趨の禮を事とす。同三年に、始て洛中に兩人の一族を居て、兩六波羅と號して、西國の沙汰をとり行せ、京都の警衛に備らる。又永仁元年より、鎭西に一人の探題を下し、九州の成敗を司しめ、異賊襲來の守を堅す。されば一天下、普彼下知に不レ隨と云處もなく、四海の外も、均其權勢に服せずと云者は無

太平記上巻

巻第一

○後醍醐天皇御治世事 附武家繁昌事

爰に本朝人皇の始、神武天皇より九十五代の帝、後醍醐天皇の御宇に當て、武臣相摸守平高時と云者あり。此時上乖君之德、下失臣之禮。從此四海大に亂て、一日も未安。狼煙翳天、鯢波動地、至今四十餘年。一人而不得富春秋。萬民無所措手足。倩尋其濫觴者、匪啻禍一朝一夕之故。元曆年中に鎌倉の右大將賴朝卿、追討平家而有其功之時、後白河院叡感之餘に、被補六十六箇國之總追捕使。從是武家始て諸國に守護を立、庄園に地頭を置。彼賴朝の長男左衛門督賴家、次男右大臣實朝公、相續て皆征夷將軍の武將に備る。是を號三代將軍。然るを賴家卿は爲實朝

先帝潛ニ幸吉野一事……六一七
高野與ニ根來一不和事……六二〇
瓜生擧レ旗事……六二二
越前府軍附金崎後攻事……六二六
瓜生判官老母事　附程嬰杵臼事……六二九
金崎城落事……六三三
春宮還御事　附一宮御息所事……六三八
比叡山開闔事……六五八

卷第十九

光嚴院殿重祚御事……六六七
本朝將軍補任兄弟無ニ其例一事……六六七
新田義貞落ニ越前府城一事……六六九
金崎東宮幷將軍宮御隱事……六七四
諸國宮方蜂起事……六七六
相摸次郎時行勅免事……六七七
奧州國司顯家卿上洛幷新田德壽丸上洛事……六七九
追ニ奧勢跡一道々合戰事……六八二
靑野原軍事　附嚢沙背水事……六八五

卷第二十

黒丸城初度軍事　附足羽度々軍事……六九七
越後勢越ニ越前一事……六九八
宸筆勅書被レ下ニ於義貞一事……六九九
義貞牒ニ山門一同返牒事……七〇一
八幡炎上事……七〇五
義貞重黒丸合戰事　附平泉寺調伏法事……七〇八
義貞夢想事　附諸葛孔明事……七〇九
義貞馬屬强事……七一四
義貞自害事……七一五
義助重集ニ敗軍一事……七一九
義貞首懸ニ獄門一事　附勾當内侍事……七二〇
奧州下向勢逢ニ難風一事……七二五
結城入道墮ニ地獄一事……七二八

卷第十六

將軍筑紫御開事……五〇五
小貳與二菊池一合戰事　附宗應藏主事……五〇六
多多良濱合戰事　附高駿河守引レ例事……五〇八
西國蜂起官軍進發事……五一三
新田左中將被レ攻二赤松一事……五一五
兒島三郡熊山擧レ旗事　附船坂合戰事　五一七
將軍自二筑紫一御上洛事　附瑞夢事……五二二
備中福山合戰事……五二五
新田殿被レ引二兵庫一事……五三一
正成下二向兵庫一事……五三二
兵庫海陸寄手事……五三六
本間孫四郎遠矢事……五三七
經島合戰事……五四〇
正成兄弟討死事……五四一
新田殿湊川合戰事……五四四
小山田太郎高家刈二青麥一事……五四七
聖主又臨二幸山門一事……五四八
持明院本院潛二幸東寺一事……五五〇
日本朝敵事……五五一
正成首送二故郷一事……五五五

卷第十七

山門攻事　附日吉神託事……五五七
京都兩度軍事……五七三
山門牒送二南都一事……五七六
隆資卿自二八幡一被レ寄事……五八三
義貞軍事　附長年討死事……五八六
江州軍事……五九〇
自二山門一還幸事……五九三
立二儲君一被レ著二于義貞一事　附鬼切被レ進二日吉一事……五九六
義貞北國落事……五九八
還幸供奉人々被二禁殺一事……六〇〇
北國下向勢凍死事……六〇二
瓜生判官心替事　附義鑑房藏二義治一事六〇三
十六騎勢入二金崎一事……六〇八
金崎船遊事　附白魚入レ船事……六一一
金崎城攻事　附野中八郎事……六一二

卷第十八

公家一統政道事……三四三
大內裏造營事　附聖廟御事……三四八
安鎭國家法事　附諸大將恩賞事……三六一
千種殿并文觀僧正奢侈事　附解脫上人事……三六三
廣有射㆓怪鳥㆒事……三六八
神泉苑事……三七〇
兵部卿親王流刑事　附驪姬事……三七五

卷　第十三

龍馬進奏事……三八三
藤房卿遁世事……三八九
北山殿謀叛事……三九三
中前代蜂起事……四〇三
兵部卿宮薨御事　附干將莫耶事……四〇五
足利殿東國下向事　附時行滅亡事……四一〇

卷　第十四

新田足利確執奏狀事……四一七
節度使下向事……四二三
矢矧鷺坂手越河原鬪事……四二八
箱根竹下合戰事……四三四
官軍引㆓退箱根㆒事……四四一
諸國朝敵蜂起事……四四六
將軍御進發大渡山崎等合戰事……四五〇
主上都落事　附勅使河原自害事……四六〇
長年歸洛事　附內裏炎上事……四六一
將軍入洛事　附親光討死事……四六三
坂本御皇居并御願書事……四六四

卷　第十五

園城寺戒壇事……四六七
奧州勢著㆓坂本㆒事……四七二
三井寺合戰并當寺撞鐘事　附俵藤太事……四七三
建武二年正月十六日合戰事……四八一
正月二十七日合戰事……四八八
將軍都落事　附藥師丸歸京事……四九三
大樹攝津國豐島河原合戰事……四九六
主上自㆓山門㆒還幸事……四九九
賀茂神主改補事……五〇〇

山崎攻事　附久我畷合戰事……二三八
足利殿打㆓越大江山㆒事……二四二
足利殿著㆓御篠村㆒則國人馳參事……二四四
高氏被㆑籠㆓願書於篠村八幡宮㆒事……二四八
六波羅攻事……二五〇
主上上皇御沈落事……二五六
越後守仲時已下自害事……二六四
主上上皇爲㆓五宮㆒被㆑囚給事附資名
　卿出家事……二七〇
千劔破城寄手敗北事……二七一

卷第十

千壽王殿被㆑落㆓大藏谷㆒事……二七三
新田義貞謀叛事　附天狗催㆓越後勢㆒事二七四
三浦大多和合戰意見事……二八一
鎌倉合戰事……二八五
赤橋相摸守自害事　附本間自害事……二八七
稻村崎成㆓干潟㆒事……二八九
鎌倉兵火事　附長崎父子武勇事……二九二
大佛貞直并金澤貞將討死事……二九五
信忍自害事……二九七
鹽田父子自害事……二九八
鹽飽入道自害事……二九九
安東入道自害事　附漢王陵事……三〇〇
龜壽殿令㆑落㆓信濃㆒事　附左近大夫
　偽落㆓奥州㆒事……三〇三
長崎次郎高重最期合戰事……三〇七
高時并一門以下於㆓東勝寺㆒自害事……三一二

卷第十一

五大院右衞門宗繁賺㆓相摸太郎㆒事……三一五
諸將被㆑進㆓早馬於船上㆒事……三一八
書寫山行幸事　附新田註進事……三二〇
正成參㆓兵庫㆒事　附還幸事……三二二
筑紫合戰事……三二四
長門探題降參事……三二九
越前牛原地頭自害事……三三一
越中守護自害事　附怨靈事……三三三
金剛山寄手等被㆑誅事　附佐介貞俊事　三三六

卷第十二

先帝遷幸事……一〇〇
備後三郎高徳事　附呉越軍事……一〇一

卷第五

持明院殿御卽位事……一一一
宣房卿二君奉公事……一一一
中堂新常燈消事……一一三
相摸入道弄二田樂一幷鬪犬事……一一四
時政參二籠江島一事……一一七
大塔宮熊野落事……一一八

卷第六

民部卿三位局御夢想事……一四三
楠出二張天王寺一事　附隅田高橋幷
宇都宮事……一四五
正成天王寺未來記披見事……一五四
赤松入道圓心賜二大塔宮令旨一事……一五六
關東大勢上洛事……一五七
赤坂合戰事　附人見本間拔懸事……一六〇

卷第七

吉野城軍事……一六九
千劔破城軍事……一七五
新田義貞賜二綸旨一事……一八三
赤松蜂起事……一八六
河野謀叛事……一八七
先帝船上臨幸事……一八七
船上合戰事……一九四

卷第八

摩耶合戰事　附酒部瀨河合戰事……一九九
三月十二日合戰事……二〇三
持明院殿行二幸六波羅一事……二〇七
禁裏仙洞御修法事　附山崎合戰事……二一二
山徒寄二京都一事……二一五
四月三日合戰事　附妻鹿孫三郎勇力事……二一九
主上自令レ修二金輪法一給事
附千種殿京合戰事……二二六
谷堂炎上事……二三二

卷第九

足利殿御上洛事……二三五

太平記上巻目録

卷第一

後醍醐天皇御治世事　附武家繁昌事……一
關所停止事……四
立后事　附三位殿御局事……五
儲王御事……七
中宮御産御祈事　附俊基僞籠居事……八
無禮講事　附玄慧文談事……一〇
賴員回忠事……一三
資朝俊基關東下向事　附御告文事……一九

卷第二

南都北嶺行幸事……二三
僧徒六波羅召捕事　附爲明詠歌事……二五
三人僧徒關東下向事……二七
俊基朝臣再關東下向事……三二
長崎新左衞門尉意見事　附阿新殿事……三五
俊基被レ誅事幷助光事……四四
天下怪異事……四七
師賢登山事　附唐崎濱合戰事……五一
持明院殿御二幸六波羅一事……五六
主上臨幸依レ非二實事一山門變議事
　附紀信事……五六

卷第三

主上御夢事　附楠事……六一
笠置軍事　附陶山小見山夜討事……六三
主上御二沒落笠置一事……七四
赤坂城軍事……七九
櫻山自害事……八五

卷第四

笠置囚人死罪流刑事　附藤房卿事……八七
八歳宮御歌事……九四
一宮幷妙法院二品親王御事……九五
俊明極參內事……九八
中宮御歎事……九九

太平記序

蒙竊採古今之變化。察安危之來由。覆而無外天之德也。明君體之保國家。載而無棄地之道也。良臣則之守社稷。若夫其德缺則雖有位不持。所謂夏桀走南巢。殷紂敗牧野。其道違則雖有威不久。曾聽趙高刑咸陽。祿山亡鳳翔。是以前聖愼而得垂法於將來也。後昆顧而不取誡於既往乎。

和の片假名本を原とせり。されどもなほ、語句の疑はしき、文字の妥當を缺きたりと思はるゝ所なきにあらねば、異本數種を參照して之を校訂し、且平假名に改め、振假名を補ひ、假名遣を正し、句讀點を一定して讀者の便を圖れり。文字の顚倒、送假名、充字、借字等は、何れかの異本に據れるもの外、私意を以て改竄したるはあらず。

明治四十三年九月

校訂者　永井一孝

緒言

太平記四十卷は、花園天皇文保二年より、後村上天皇正平二十二年まで、凡そ五十年間に於ける戰亂の狀を記したるものなり。作者は詳かならず、或は云ふ小島法師とて兒島高德が遁世後のすさびなるべしと。なほ考ふべきなり。

本書の世人に愛讀せられしことは平家物語、源平盛衰記にもまさり、戰國時代には陣中にすら手にせられ、江戸時代にありては太平記讀と稱して公衆の前にて誦讀するを業とするものさへありき。されば異本の多き、十數種に餘れり。註釋書の類亦少からず。

今こゝに本書を出版するに當りては、古版中比較的善本とも見るべき元

PL
770
T3
1912
v. 1

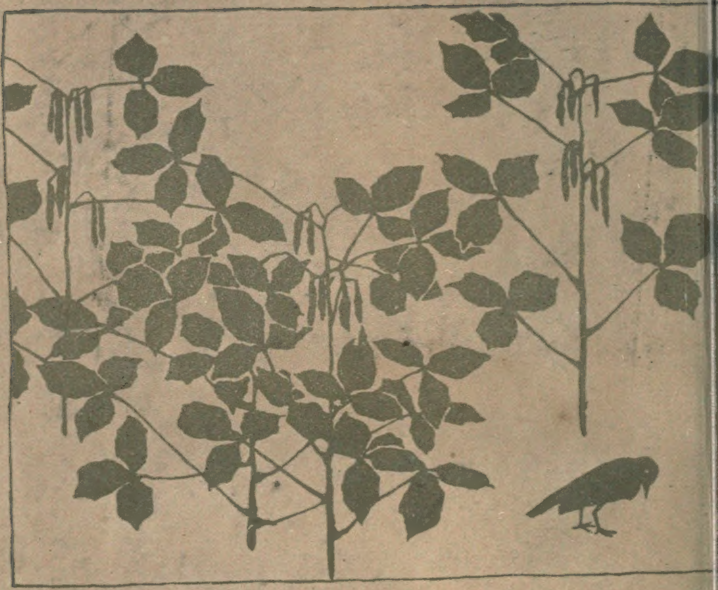
爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

LIBRARY
JUL 1 1 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

太平記

上卷



PL 790 T3 1912 v.1

Taiheiki
Taiheiki

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

有朋堂文庫